昭和四年二月十五日印刷
昭和四年二月廿五日發行

嬉遊笑覽

日本隨筆大成第二期別卷下

編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表者 早川純三郎

東京市本鄕區森川町一番地
發行兼印刷者 櫻井庄吉

發行所 東京市本鄕區森川町一番地
日本隨筆大成刊行會
振替貯金東京七九九四四番
電話小石川三〇二二番

發賣所
名古屋市西區下長者町四丁目 合資會社川瀨書店
大阪市東區北久太郎町四丁目 合資會社柳原書店
東京市京橋區鈴木町 日川書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町 國際美術社

十の翁物語といへるは新たに命じたるなりそは昔々といふことをもしらぬ故なりこれも「河に」これてのことゝぞ

嬉遊笑覧 終

おあん物語

良列は預る所の黄幌をかへし奉りて自害し左近も御馬印を返し置て切腹しよし諸書に載たり何れかまさしきやしらずわれはたゞ菊女が話の實ならんことをはつるなり

○おあん物語子供あつまりおあん様むかし物がたりなされませといへばおれが親父は山田志摩といふて石田治部少輔殿に奉行し近江の佐和山に居られたる其後治部殿御謀叛の時美濃國大垣に籠りて我等も一所に居ておしやつたが不思議な事がおしやつたよ夜々九ツ時分に誰ともなく男女三十人程の聲して田中兵部殿ナウ〳〵とおめきて其跡にてわつといふて泣聲がしておしやつたおとましや〳〵怖ろしらおしやつた其後家康様より攻衆大勢城へ向はれて云々（大垣ノ城ニアルベカラズ佐和山ナランカ）既云右志摩は土州の親類方へ下り浪人し土佐にて山田彥助といふ人（後蝎也といふ）養育と成おあんは森儀左衛門へ嫁す儀左衛門死して山田喜助が養育なり喜助爲には叔母也寛文年中齢八十餘にて卒す予共頃八九歳にて右の物語を折々聞覺たり光陰うつりて正德の頃に孫共を集めて此物語して昔の事世中の費をしめせばこまかしき孫共は昔のおあんは彥根ばゝ今のぢさまは彥根ぢいよ何をおじやるぞ世は時々じやものとて鼻であしらふ故腹も立ども後世恐るべし叉後の世如何ならん孫ども叉おのが孫どもにさみせられんと是をせめての勝手にいふてのちは只なまいだ〳〵より外にいふ事はなく候かしく（これをみても今安樂を思しれ金がなくても米がなくても）

此菊物語はもと下谷中徒士町に白井亨と云撃劍家あり此人備前の藩中一統へ指南し其國へ度々通りしとぞ其國の醫師田中氏に傳來せし菊物語を白井氏望みて寫し來り山崎久卿に借したり其うつし是なり世に出したる原本也今は白井亨の子御徒士になりたり

近年おあん物語に菊物がたりを合せて刻したりこれは淺河善庵が本を吉田愼之助に托して校正して刻せる也愼之助此本の出處もしらずして怱卒に刻したりこれのみならず昔々物語などは少略の本にてよからぬを其儘ほりたり殊に飛鳥川と云は他の本の名なるをこの草子の一名とおもへり標題は八

貧にありて朝のものもたべざる事ありしに茂介妻殊外不便がりて茶づけなど度々ふるまひける夫故後迄も茂介妻の恩をば忘れぬと高虎御申候よし是故茂左衛門をも呼出ししかも客分にして何れも家中にて殿あしらひにしたりけると也此茂介も後には千二百石迄淺井家にて取けると也此茂左衛門悴菊が弟を甚左衛門と云て安藝國にあり後に醫者になりて意朴と云ける今に其末ありやしらず菊落城の時二十歳後備前にて死ける時八十三歳なりかやうの咄を聞たりとて後意德物語なり此意德といふは菊が孫なりと記すこれら希有の事なるべし

これによて考ふるに浪華城の廣大なる鎌倉の微々たるに比すれば人智をもて量りがたきことなりといひ傳ふれとこれを今に比しなばまた量りがたき事なるべしそも〳〵かの菊女は淺井家よりこのかたつきそひ參らせけるに軍評定なども聞天樹院殿の御ひんそきをも見奉りし程ならむにはいと近く召遣はれ格式もありしなるべしさるを長局より一婢に命じて蕎麥粉を燒に御臺所へやりしにても其手輕く程近きをみるべし又月心に預けたりしも要用の調度衣服なるべきが僅に挾箱一つといへるは外へ持ち出さむことたやすからぬ時なるべけれと今にては似けなきやうに思はれ千疊敷の御緣側へ出れば何方もよく見ゆるよししりて出たるもあさまなる事なるべしことには城內を逃けるとて道さへ案內しりけんいぶかしき事也既に東都御城內出火の時大奥の女中途方にくれて出る處をしらず狼狽たりしを伊豆守殿御差圖にて御臺所口迄一通り疊を裏がへして道の目標とせられしがあやうく難をまぬかれたり今は御用きゝの疊やとも此役蒙るなともいふ也もとより大坂一城となりては太閤の御代とはよろつ手挾くなりたるべけれとこれ等は太平の日いまだ久しからざる故ともいふべしそれよりも不審は秀賴卿の御馬印は冬夏兩陣共に津川左近親行が司る所なりこの際に婦女の手をかりて纏にその辱をかくせしにやかゝるさまにて兎角に御和睦の事ゆかさりし時運とはいひながらうたてかりし事也此時御奉行郡主馬

れ候由其玉三十匁ばかりと申候手の内へ入て見申候になる程其ほどの玉と存じられ候夫より其玉の來る方に幕をはられ申候

一軍評定此度御同所にて有し故聞ける事ども有しと也

一毎日々々やはり餅つかれける也其餅を苻々長局の局ことに配られける其仕形其餅を御はやく局ことの前へ一ツ宛置て通る後々はめづらしからぬ物故其儘明日迄置もあり然る時は其餅を脇へ立かけ置て又今日の餅を置けるとぞ

一天樹院樣御ひんそきをも見けるが碁盤の上に御立被成候を秀頼公たからなかたなにて御髮をすこし御切そき被成ける也

一御膳をばお末より出すを御手長のもの請取其時お末のものどく味いたし又御側衆へ渡す時に御手長の者毒味をして渡し候事也

一其落城の前京都より月心和尚といふ東福寺の出家兼て參り居被申候其人に菊申候は我々も頓て御いとま願申候て京都へ上り可申候間夫迄是を御預り可被下若其中落城も候はゞなきあとも弔ひ給ひ被下候へと狹箱一つに着物又は器共少々取入て月心に賴み遣しけるなり其道具今も少々田中氏に殘り有

一この菊澄殿に御奉公申事は菊親を山口茂左衛門といふ其親をば山口茂介といひて淺井長氏に仕ふこの淀殿は長政の娘故幼少より御奉公申上茂左衛門後に藤堂和泉守高虎へ浪人客にて三百石被下居申候然る時に大阪御陣の沙汰を聞て大坂城中へ來たり御奉公を願候處則御具足被下候此時討死しけるなり其落着不知也其御具足拜領の時指物無之故娘の菊を頼て致しもらふ割白赤の繩を縫合せさし物にして遣しける其時茂左衛門親ご娘にも大きにかゝりけりと申たも大かた殿乙にこ有しと也此茂左衛門養守家へ出ける子細は前與右衛門と云て淺井家の足輕にて在し其小姪は茂介にてありしが殊外其殿高虎

若狹守殿より來りしなるべし要光院殿城中に御座候て其御和狹睦の御使に御出候て御逗留にて御座候其中に落城なり）其供の女中の中に秀賴公御召使の女中（山城宮内娘）是は唯帷子一ツぬき下帶も一ツして居られる故夫にては難儀なるべしとて我帷子を一ツぬき下帶も一ツとさて其女中に參らせける扨要光院殿には家康公御召に付御出候御迎ひ御乘物など參候其時女中へ被仰候は若し將軍樣仰ありて何れも女の事なれども城中に居申たる者いかに仰付らるべきもしれず候へば隨分宜敷可申上候得共兎角御下知は背かれず覺悟し給へと要光院殿仰られければ其時みな泣悲しむ事おびたゞし追付御歸被成候て御こしより御出もなきうちに事濟候て何れも皆望次第何方へも送り遣すべきよし上意とあればみな悅事かぎりなし其時は菊は松丸殿へ參り候半と存し京都へとてぞ參りけるさて其宮内娘も何方へ行へき處もなく一所にと賴まれ候故一所に京へ參候て大坂にて知たる町人へ便りて參候處に御城にては輕く存候町人に候へども殊の外大きなる町人にて候然れ共大坂の落人故一夜も得留不申兩人へ晒布一疋ヅヽ引出物にぞしける扨兩人は織田左門殿の屋敷へ參り候へば中々門內へも入不申宮内娘は左門殿姪故菊申候は是は御姪子にて候がそれにても御入なきやと申に付早々內へ申入られ殊の外饗應にて左門殿姪を一人ひろひたりとて殊の外禮にてありし扨四五日左門殿に滯留のうちあやしげなる二階へあがりて二人かくれ居申候そこにてその儘食など給へ申候扨いとま申て松丸殿へ參り候はんと申時左門殿殊の外禮にて帷子に銀子五枚賜はりけるさて松丸殿（秀吉の妾）へ御奉公致し居申候て後に意德祖父方へ緣付申候後備前へ參候て死申され候右そば燒いたしに遣し候女はいかになりけるやらん其人の語に秀賴公淀殿其外大藏卿おも立候局中はみな山里へ被參候て御本丸には無御座候其儀ははや落城二三日前より然る故御生死のほど如何と申候由

一其落城前かと鐵炮いつ方やら參り女中打ぬかれ其玉御だいすの脇に留りける玉の通りける疊の緣き

となるべし

○浪華城菊物語

田中意徳（池田家の醫師なり）祖母は大坂にて淀君に仕へし人にて名を菊とぞいひける落城の日（元和元年五月七日）長局に居申候なか〳〵いまだ落城などゝはおもひもよらず候時蕎麥の粉の有けるを取出して其下女に申付是をそば燒にしてくれと申ける故其者は御臺所へ參り候跡にて玉造口の方はやけ申候と申候その外所々やけ申と殊外さわぎ立候故千疊敷の御緣側へ出申候へば能何方も見え候故出見候へばなる程處々燒立候故局へ歸り帷子を取出し三ツ重着て帶も三つして秀賴公より拜領の鏡を懷中して御臺所へ出申候得ば武田榮翁黑き具足を着て居申候其ほか見しらざる士と二人居申候女中にある知らざる士御臺所外にて局口の挺をみて給はれ上帶をもしめて給はり候へと申聲をも聞ながら其女中は如何しめされ候やかまひ不申差急き出申候女中方出不申樣に榮翁申候へとも夫にもかまはず出申候其邊に金の鳳簞の御馬印如何して落し置けんこれ有を御手長の者（今の中居なとゝいふやうの者也）おあちやと申者と今一人して見て捨置ては御耻辱を顯すなりとて蔦て打めきて捨けるそれをも見捨てやう〳〵城外へ出申候處に竹束有て候得共武者も居不申久城中城外等にも見えかゝりには手負等も見え不申然る時竹束の陰より單物一ツ着たる者さび刀を拔もちて來り金にてもあらば出せよといふより懷中の竹流し二本持て有しを出し遣す（一本七兩弐分有りと云）扨其者に申は若黨殿御陣は何方ぞと問へば松原口と答へける故その處へ連行給へば又々金とらせる間連行くれとたのむいざ此方へと同道いたし候參るうちに要光院殿（京極若狹守殿奥方淀殿の御兄弟也）士におはれ玉ひ後より御足をおさへて御のき候其外女中士も付居申候を見付則そこへおけより夫より御供申森口の或在家へ御立寄候間　むしろを敷疊二ちやう古きを取出し要光院をば其上に置申候何れもそのなしみに居申候その時何方より來りしやらん行器にこわ飯もり候をみた〳〵紙にのせて給へ申候（見は

キヨ後の世のためと又上總介といへば其國の器によそへても忠淸はニゲノ馬にや乘つらん懸ぬに落る
カヅサシリガヒ○義經軍陣に來る事齡廿餘り色白く勢小き男の顏魂眼居指過て見えけるに郎黨廿餘騎
を相具し陣前に出來て○【廿四】(兩院主上還御條太政入道鼻うそあきてぞ思はれける(今鼻があくと云
に同じ)雜色中間小舍人まで○坂東落書條平氏持世旣に廿一年也是則改一昔之代而相當源氏可持世之
時乎○以三水之字作年號品○南都燒亡の處奈良の都の八重櫻東金堂に榮えたり(興福寺)胡德樂とは酒
を飮樂なり河南浦とは鯉を切る舞なり河南浦の庖丁を舞澄したり云々○誰か佛法を無代にし逆罪を相
招く

ウケムケの事

○【山崎久卿が筆記】に世俗生れ年の五性によりてウケに入年ムケに入年ありてウケに入時は七フの祝ひ
とてフの字つきたる物七種をもて賀ふこと往昔よりの習俗なりけらし文字には有卦無卦と書ども正字
にあらず曆にも記さゞることにて其義を釋るものを見ず然し小泉松卓が【循環曆】にはくりやうを載
たると覺えつ按るに閑田蒿溪が隨筆に大般若經の中に貧窮有暇入無暇と云文ありこれより出たること
のよしをいへることと有と覺ゆいと信じ難き說なりその由曾て釋了阿に右の文あらば前後の文ともに鈔
錄し何品に出と云ことを書てたまはれといひて程へて逢たる頃いへるは般若にその文なしと答へたり
き後に【大藏經中】に【入無暇有暇經】一巻あり經を把て一讀するに世俗のいふ處とは聊異也されど有暇無
暇と云ことは是より出たり思ふに諺に貧乏無暇と云ことあれば吉年を有暇とし凶年無暇とするならん
さて其年の吉凶は何をもて定めたるなれば十二運の次第によれり十二運とは胎養長官帝沐臨この七運
は吉なりこの年にあたるを有暇といひ衰病死墓絕この五運は凶なり此五年にあたるを無暇と云なり○

七福神

七フの祝ひと云ことを思ふに仁【王經】に七禮即生七難即滅と云文あり七福神もそれより出たらんと云こ
と予が【七福神考】に已にいへり此七フも七福の語に原き且七の數は有暇七年によりて唱へそめしこ

盛衰記に
川たる事
とも

れらをとりて名づけたる也山三郎仁兵衛などは木やりの音頭取なるべし
○【源平盛衰記】(廿一)兵衛佐殿臥木條も日既に晩ければ遠近の入逢の野寺の鐘打ひゞけ共○同卷小坪合戰武藏國の住人綴黨の大將に太郎五郎とて兄弟二人あり共に大力也けるが太郎は八十人が力あり東國無双の相撲の上手早人の鳥手に暗からず ○【昔同】三衣笠合戰(三浦大介)義明主已來弓矢を取て今年七十九今此軍に合事老後の面目也○【同卷】土肥燒亡鐘條烏帽子商人大太郎云々宿所に請じ入奉て白糫子には褒みさま〴〵の肴にてもてなし奉る云々不取敢折節なれば急ぎアハテヽ打程に七頭は右に一頭は左折り云々(頼朝大太郎にえぼしの禮する處)土肥の次郎に當座とらせて着給ければ(大太郎)妻に私語けるは今日此比身一ツ安堵し給はずして尫弱の商人に烏帽子乞程の人の荒量にも給つる直町かなとつぶやきければ○同卷千葉足利催促事上總介弘經は此事を聞還參に恐れて當國に井ノ北井の南廳ノ北廳ノ南マウ西マウ東より始て國中の兵背くをば打隨ふをば相具して一萬餘騎にて○【同】入道中宮行事げにも幼稚なれはよもしらじなんと青道心をなして候へば今は哀は胸フヤクと申論に合て侍り云々(入道の詞)源氏を思召て平家をにくませ給ふと覺候とくねり申す○【卷廿三】平家水鳥の羽音に驚て逃上る條小兒共ノ讀ム百詠ト云ふ文に鴨集て動ずれば成雷と云ことあり○同卷新院自嚴島還御後薨中將通親御前に參て云々人の持る物を心の外にすかし取人をおとして思樣の文をかゝせんと仕るをば乞索厭狀と申て政道にも不用神も佛も捨させ給ふ事にて候ぞ○【同條】平家と書てはヒラヤとよむ家のまろび倒れんずるには助と云て柱の代に大なる木を以てさゝへ直す事あり平家の大將軍に下し給へる權亮少將の維盛)落ければ右大將宗盛の騷ぎ歎きたまふらんと云にそへて(入道殿の門に落書)ひらやなる宗盛いかに騒ぐらんとたのむ助を落して云々富士川のはたに物具多く捨たる中に忠清と銘書せし鎧唐櫃一合あり武者の具をば河に捨ぬ今は道心して墨染の衣をきよとも書たり富士川に鎧は捨つ墨染の衣ダヽ

代目文三郎おやまつかひの名人○並木文助北の新地の茶屋なり○竹本三郎兵衛竹本筑後椽が悴なり○近松半二穗積伊助といふ醫師の悴なり○爲永太郎兵衛始は竹田庄藏○安田蛙文有馬家に仕へし人也○近松東南東南伊助といひ老後法體となりて綾子播磨と改三絃の上手なり○春草堂高田瑞庵といふ醫師なり俳名笛十○菅專助醫師の悴豐竹光太夫○長谷川千四和州長谷寺の僧還俗して作者となる○淺田一鳥森長三郎と云謠の師なり○中村阿契始閏助○八民平七坂町大坂屋太郎兵衛の悴なり○若竹笛躬若竹藤九郎といふ人形つかひ也二代笛躬鹽屋治兵衛復松鱗といふ紀の上太郎三井某嘉栗八貫又仙果堂と云○豐竹應律若太夫芝居主甚六と云○松田ばく俳諧師岡本菊古後表隣と云○男德齋竹本咲太夫といふ上るり語なり○榮善平道頓堀いろは茶屋○七才子岡本原一といひ醫師也○川四郎長町七町目分銅河内屋四郎兵衛といふ宿屋なり豪家にして活達の人なり○中村魚眼難波新地中村屋といふ茶屋なり○近松やなぎ始並木柳といふ後改て柳太郎作とも云○司馬芝叟獨笑庵の悴なり○梅の下風千葉軒○湖水軒佐藤太

盲者の記憶

○【聲曲類纂】にことし弘化丙午の春日尾荊山先生奥羽より越後の邊へ遊歷せられしに越後蒲原郡水原の町に瞽者あり和泉太夫が金平節の淨るりを凡三十段も記臆し語る一席五段六段のものを續けて語る其が師某座頭は凡そ七十段も覺えたりしが故人となり今の弟子其座頭に傳ふ其弟子あれど多く覺えたるものもなく又盲人のこと故院本も所持することなく只記憶のみなりと語られき

道念節

○道念節【世事談】に京に道念山三郎といふ輿樗の音頭あり貞享の頃盆踊口說といふ唄をうたひ出したり此節踊の拍子によく合たる間なれば今以これをよしとすと云へり【松の落葉】に道念咄といふ小歌あり作者道念仁兵衛とあり其歌「道念咄をいたそうぞよ此道念つね〳〵なまぐさうに思ふたればあんの如くめんざうに大こくこそは還れたれ此大黑を繪像かと思ふたりやおまんといへる大こくじやとありこれ道念は不律の僧の名にしたるなり壬生狂言の道念を思べし源內が【神靈矢口】の渡の道念もこ

狂歌師社中に鏡あるは一歌を高點とす

外にその甲の剝たる古きも新しきも取まぜてこちたく縄もて繋ぎたり烏山樓の絹のわくは彼のすつぽんの甲とひとしき看板なりといへり狂歌師眞顔は月次の詠草を點をかくるにも執筆草本をしたゝむる時其讀人の名を別にしるさしめてこれを詠草に照して當時社中にて鏡あるる者の歌を高點とす又年の暮終り毎に社中より鏡餅を贈るものありてこれを排らへ置くこと也その中に俳偕の當時名高き者の名をしるしたる餅あるは其が許より贈りたるやうに人に見するにて誠はおのれが家にて作りかざれる也すべてこの趣のことのみして愚人を欺き行はれたり又一とせ京師より加茂季鷹江戶に下りてしばし有し程それが寓居に白木の臺に絹の卷物包める三ツ四ツ座右にかさね置て諸侯よりの贈ものゝ如く見せんとてのわざなり文晁なども盛りに行はれたるに猶其風ありしはいかなる事にか

人の別號

○【枝山前聞】に人の別號をいふ處伯倫則仲叔必竹梅云々

趣迎して腰を折るに備し

○【中洲野錄】に弘治間樂平有趙井考滿還任邑中士夫皆趨牙之時黍州守彭公獨以詩拾云消陽繼驛使君揮本欲趨迎慚折腰莫怪野人疎禮節好看揭書讀陽橋云々

○【東海道名所記】そのかみ芝居町にて座をはりかたり其後中橋へ移り又此界町へ移り諸る（芝居町今の榮井町なるべし

知名の人々

○【南水漫遊】（擧芥藏）紀海音榎並氏貞蛾といふ俗稱喜右衛門後喜八と改む僧となりて高節と云歸俗して醫を業とし又契沖師の門に入て歌道を學び契閒といひ鳥觀齋とも號し淨瑠璃の作名海音といふ元文元年辰の夏法橋に叙し寬保二年戌の十月四日（一說延享とも）行年八十歲にて歿す墓は八丁目寺町實樹寺にあり

○文耕堂（始松田和吉千前軒門人なり）○錦文流西鶴門人俳諧をよくす宇家町邊に住す○摂家門吟摂州池田人西鶴門人俳諧をよくす○三好松洛（醫師なり）吉田冠子人形つかひ吉田文三郎といふこれが作二一

如水雜色　木雜色の事先生返書に如木と申候は則雜色のことにて如木雜色とつゞけて讀申候立て木の如くと云より斯如く申す雜色は金吾の捧を持立て警固する故に如木雜色と申候由とあり先生は木下順庵なり立て木の如きには非ず服のこはき也されど白丁も雜色も衣服の色をもて云にはあらず共に無位無官にて奉

仕丁　仕する賤しきものなり色字は品字の如し白字は素字の意にて位官なきなり仕丁と云も此事にて丁は若き男强壯なるなり雜色は雜役勤るといふ今シヨホクナシといふ俗言は如木なるべしシホタレたる貌なれば如木ならぬ意と聞ゆ

當世名聞を貪る人々　○平太と云油うり遊女を思ふこと○當世名聞を貪ること世に聞えたる人名を賣んことを思ひてをこなるたばかり事して愚人を欺く笑ふべし畢竟見解なく耻を知らぬはかたはら痛き事になむそれらの行ひ世人にあまたあるべけれどおのれ世中に交らされば知るよしなし只一ツ二ツ聞ることあり寫山樓主人は當時名畫にて世にもてはやさるゝは誰かは企て及べきさるを猶名を貪りて諸大家よりの召ありていとまなしなど常に人にいふことながら或人とふらひしに主人畫をかきて居かたはらに客人三人四人ありしが或人にいふはけふはすこしの暇ある故こゝらの誂らへもの少しばかりにてもかゝんとすあすは某の君の召あり明後日はくれがしの御もとの招かるゝなどかぞへいふに日次打つゞきて勞かはしそこなどは常に暇ありていと美しなど語るを聞て歸りしがあす又問ふべき事ありて行たるにあるじ宿に居て畫をかき居しかば先生けふは某の君召れしにはあらずやと云に主笑てそこも事を解えぬ人にこそきのふのは傍の客人に聞かする爲にさはいひしぞかしと云り大むね是等にて知るべし曾日人來るに朝より晩に至るまで應對し酒を飲ながら畫をかく是は自ら飲は茶にて酒にはあらずすべてかやうの事どもある故樓の窓のかたへ絹素はりしわくの古りたるがおびたゞしくかさねてあるが外よりあらはに見ゆるなどはかまへて人に示さんとにはあらね共見る人これを嘲りて山下町の邊やらむ泥畫をうる家の

り檢，勾當といふ名も官位にあらず高野の撿校も平僧なり勾當といふは何にても事を取捌く事なり勾當內侍といふも內侍にて事を取捌く故の稱號なり天明五年御觸書盲僧は武家に限り靑蓮院の宮支配たるべく候盲人は百姓町人に限り惣錄の支配に限り候事

盲人の支配

相撲を武藝とせしこと

○【夏山雜談】に昔の武士は組打を好みたる故に相撲を武藝とせしなり近世戰法そなはりて組打を好まぬ故に武藝とせさる也是故に今は下賤の業となりぬ此說只一わたり然るべきやうなれ共誠にはさも非ず鎌倉將軍家の時歷々の武士相撲を取しも大力剛勇の人多かりしのみに非ず其頃はやりたることなり必戰場組打の爲に嗜めるものには有べからず其頃の戰ひ組打といふこと多く聞えたれ共甲冑を着て各利器を持ての事なれば素肌の手練とはいたく異なるべし組伏られても利を得るものあり相撲の手をもてよくせん事覺束なし又武士組打を好まずとて相撲を武藝に屬せずして何とかせん【遠考物語】永祿以來出き初たる物の內にも相撲取はやる事と見えたり武士にも取しもの有しなりおのづから時の流行によれることとなり治世久しくなればよき人の力わさすることなく強き人すくなかるべし相撲など取らぬもあらぬ理なりたま〳〵有ても世につれてさることは賤しげに思ふなるべし

錢を撰む制札

○錢を撰むならひやゝ後迄も有と見えて常盤橋御制札の寫に寬永の新錢金子壹兩に四貫文勿論壹分には壹貫文の賣買たるべし若違背いたし高下の賣買仕に於ては双方より其賣買の一倍爲過料これを出すべし云々大かけわれ錢かたなし船錢新鑄錢此外えらむべからず若えらむ者五郎迄押てつかふ者有之は或は其處に三日さらし十日籠舍たるべし其町々過料同前たるべし「明曆三年二月日」

如木水干白張

○玄惠法師【遊學往來】に中童狩衣大童如木水干安齋云如木水干とは絹を張て水干にしたるなり強く張て木の如しと云意なり今世にも仕丁などの着る白張を如木と云も麻布をこわく張て木の如くなるを云ふ知らぬ人は如木と云役名也と云は誤なり又云白張と云は白張の布狩衣なり」新井氏【退私錄】云如

楊花次は夏安林又次は秋園とありといふ事みゆおもふに楊花はヤクワ安林アリ(諸本みなかくあれ共)園生は是のみ二字なるべからず秋園生とありしが一字落たりと見ゆ園生はおふなるべし故人の說もなければ知べきならねども古へ鞠を蹴るかけ聲ヤア、リオフと云へるなるべし

鞠をける聲

下駄と燒みそ

○加藤平蔭ある人の許へ消息して青海苔と馬糞をこひけるに二物のいと殊なるを下駄と燒みそと云ふ俗諺を引て云ひける手簡ありこの諺は世人たれもさる意と謂へりと見ゆ非なり似たる物のいたく異なるたとへごとにて月とスツポンと云へるが如しそも亦知らぬ人多しスツポンを丸と異名をつけて呼ぶ漢名にも團魚といふとひとし月は丸き物なれど丸と呼スツポンとはいたく異なるなり件の諺もこの意にて燒みそは板に付てやくを江戶にて今はさもせざる故に此ことに心付ずこれ下駄のやうにはあれど下駄とはかけはなれたるをいふなり云ひ習ひたる俗のことくさに心得たがひいと多し

月とスツポン

仲間の勤め方

○徂徠が【政談】【四巻】父が若き時はなしにて承りたり祖父普請をしたるに細川玄蕃頭有馬左衛門佐仲間を借したる嘲祖母の物語にて承りたり近頃は仲間の類米をさへ搗せず米つきと云もの御城下にできたるは此二三年以來の事なり其前はなきことなり又松平伊豆守よりもり切といふこと出來て武家はみなこれになりたるより奉公引米といふ事をして供先にて口をぬらす云々

奉公引米

撿挍の番入は謂れなし

○【又同書】(八)撿挍の跡目御番に入らるゝ事謂れなき事なり其始め東照宮御小姓盲目に成たるを撿挍に仰付られたるより事起るといふ夫は元來侍なれば最のことなり其已後御扶持を下されたる撿挍の跡までは濫吹なり座頭は其弟子より金を取て夫にて渡世する者なれば畢竟乞食に似たる者なり御扶持方下され御側近く召仕はるれども只坊主などの格なるべし紫衣を着する故五位なりと思ひて不學なる御老中などの兩番へ入らるゝ事にしたる成べし出家の紫衣をも官位とおもふは文盲なることとなるべし紫衣いづれも平僧にて衣の色を御免ありといふ迄の事なり撿挍の紫衣はまして夫とは間のあることな

動かぬにてみな無禮講のふるまひなるべし酒飲む禮式と心得るは非なり）

櫛に結ぶと云ふこと

○櫛に結ぶと云こと右京大夫（建禮門院女房なり）【家集】にやしきのおとゞにや此ころ人はきこゆめりその人の中納言と聞えしところ五節にくしをこひきこえたりしをたふとてくれなゐのうすやうにあしわけをふねをむすびたるくしさしたるがなのめならぬにかきておしつけられたりし「あしわけのさはるをふねに紅のふかき心をよするとをしれ」云々【枕雙紙】うれしき物の條さしくし結はせてをかしげたるもてうれし抄にさし櫛作らすることにやといへりおのれ思ふに結ふとは物の形を糸はなにて造れるなるべし櫛のむねに付ることと見ゆ女のわざにいふゑがき花むすびは即これらの用すべて衛縫衣服のもやうに綸何くれと成かるべし五節の櫛は疊紙に包み御前に奉ることとなりそのかた古圖に見えたり

普請と云ふこと

○【下學集】普請普請人作事故云普請これ佛家の語なり【勅修清規】云普請之法蓋上下均力也と【和爾雅】に按普請二字見三國志呂蒙傳然非營作之義といへり俗家に造營をしかいふはいと後の事と聞ゆ

陰毛を毛虫になずらふ

○【堤中納言物語】堤中納言は兼輔卿なり承平三年三月薨す虫めづるひめ君の條ある人々は心つきたるあるべしさすがにいとをしとて人に似ぬ心のうちはかはむしの名をとひてこそいみまほしけれむまの作かは虫にまきるゝまへのけのするにあたるばかりの人はなきかたといひてわらひて返りぬめり按るに【和名抄】兼名苑云螺虫一名烏毛虫（和名加波無之）と見えて今いふ毛むしなり彼姫君の陰毛を毛むしにたすらへて右馬佐が嘲りたるなり

かはつるみ

○かはつるみの事を漢土には放手銃といふ【笑林廣記】にその詩を載たりもと姦侫なる人を嘲りたる詩となむをかしく作りたり

鞠の名

○【茶岡集】に侍從大納言成通卿の事をいふ處、鞠あらはれてその名三人が額に金の文字して一人は春

杉原にて禮式の品にのこれりと云へり一束一本といふを今略きて本束と其紙をいふ

百丐圖

○陸次雲【北野絡言】唐六如居士佯狂玩世云々又繪爲百丐圖人止五十題其首曰而今半是夫而今半是之詩爲贈綠林豪客作也移之於丐將謂半在彼半在此耶半丐於白日其半在昏夜莫盡見之耶云々明鼎移時金陵

乞兒詩

百川橋下有乞兒題詩柱云三百年來養士朝如何文武盡皆逃綱常留與田院乞丐羞存命一條赴河以死

奇南香

○こゝにて奇南香に六國の名をもて分つ其中にラコクは【八紘譯史】に羅羅本羅與羅斛二國逿乃赤眉遺種土瘠難耕羅斛土陝暹人仰給元時暹降於羅合爲一國とある國なるべしスモタラも同書に蘇門答剌一名須文達那漢條支唐波斯大食地也とあり

鏡背の紋

○鏡背にかたばみの紋あるは其草の酸をもて鏡を磨く故なりといへるは附會なるべし其草を用ることはあれども紋は人々の家紋を付たるなりもし此說の如くならんには石榴をも付べきなりカタバミを鏡に用たる事は【夫木集】爲家かたばみのそばに生たる鏡ぐさ露さへ月にかけみがきつゝ【和名抄】にかゞみと云草四種あり徐長卿白前白芨たゞかゞみと云るは蘿藦にて夢摩子のことなり是なるべし然るに【藻鹽草】にはかたばみに似たる草なりまろき葉の石にはふ草なりといへれば螺靨草などにやあらむ非なるべし

龜泉

○【南海古蹟記】東坡泉在西城內天慶觀蘇文忠公初鑿得一石狀如龜泉涌出號龜泉淸冽亞達磨泉淳祐間經略使方大琮浚泉護以定林廢寺鐵井欄欄大琮有鐵井琮銘かめ井おのづから似たる名あり

犬居目禮古佛座

○【水鳥記】といふ冊子は酒戰の戲文なり其中に犬虎目禮不佛の座などといへる酒宴の道たがひに知たる事なれば云々有わきまへがたし近年千住宿にて酒戰を催せる者ありて江戶の閒人に詩歌など乞ひける大田南畝この文をとりて犬虎目禮木佛座禮失求之於千住野と書たりこの事を何と心得たりし歟此草子もとより誤字多し思ふに犬居目禮古佛座なるべし犬居は犬の如く居るなり目禮字の如し古佛座は

取て作れる物語にや

閻羅

○【歴代君臣図像】に包極が本傳を引て云々爲京尹令行禁止閭里童稚亦知其名諺曰關節不到有閻羅包老天下呼爲包待制云々閻羅といへるは其容貌を云にはあらねど其圖稍の如き冠帽をかうぶり無尾一文字に長く横はれり今見る塑像の閻羅の左右に十王とて有ものゝ形したり俗語の龍圖公案は此人の物語なり

萩藥師　野老藥師

○【草木軍談】と云草子に美濃國横藏の藥師如來は萩にて作る同國石越の圓興寺に安置せらるゝ觀音菩薩も萩なり越後國久米山の藥師は野老にて作れり歌に久米山の藥師のみくじところにて若々しくもたふとかりけり萩は大木ありとぞトコロは粉にして煉りて器物に作るといへりこの藥も然せしにや

香木の白菊柴舟

○【熟蒐抄】（洛北山人逸竹）寛永三年二條城へ行幸の時初音といふ香を細川三齋より獻上なり禁裡にては名を白菊と付たまふ同木の末を松平陸奥守家にては柴舟といふ名引歌は白菊にまさる匂ひぞなかりける花はちくさの色しかはれど「世の中のうきを身につむ柴舟やたかぬ先よりこがれこそすれ」「きく度にめつらしければ郭公いつも初音のこゝちこそすれ

○【鶴林玉露】茶餅湯候余同年李南金云茶經以魚目湧泉連珠爲煮水之節然近世瀹茶鮮以鼎鑊用瓶煮水難以候視則當以聲辨一沸二沸三沸之節又陸氏之法以末就茶鑊故以第二沸爲合量而下若以今湯就茶甌瀹之則當用（【宗禅[illegible]鈔】に今作沸者作背よろし）二涉三之際爲合量乃爲聲辨之詩云砌蟲唧々萬蟬催忽有千車捆載來聽得松風并澗水急呼縹色綠瓷盃其論固已精矣然瀹茶之法湯欲嫩而不欲老蓋湯嫩則茶味甘老則過苦矣若聲如松風澗水而遽瀹之豈不過於老而苦哉惟移瓶去火少待其沸止而瀹之然後湯適中而茶味甘此南金之所未講者也因補以詩云松風檜雨到來初急引銅瓶離竹爐待得聲聞俱寂後一甌春雪勝醍醐

東杉原

○觀義雜記（水島流諸禮家と見ゆ）杉原播州より出る今世東杉原と云もの一束一本に用る紙なり其昔の

ば引通しの理なり然共一概のことにあらずよく巻たるは巻かけにても首の動くことなしと云り近時は大菱流行すれば小菱はみにくきやうなり用道利害に拘らず人心は移り易きものぞかし

金漆

○【景清草子】南都のサイセウ坊がことをいふ處こつがひ人のまなびをしゝんのうるしをかひとつてつぎめ五體にしつかとさす云々其頃の物にキンノウルシと云ことゝ見えたるは【延喜主計式】中男作物紙金漆云々ありてコンアブラと訓付たりこの金漆のことゝ聞ゆ然らば件の草子なるもキンノウルシ歟但しこれは眞のうるしと云にて雑へものなき生うるしを云にや又重忠前驅の處わらはにとつてはたれ〲ぞかた田の熊王ほうらい丸ふくだの蔦ざいを先としてわつぱ廿人に赤地のにしきのひたゝれをきせまるまきの太刀をかつがせて弓手の脇をぞ通しけるこの童には勇力ある者多し

童の勇力

宿殿

○【堀江物語】此山におはします宿殿御なかもちのはつほを申うけてしんめうをつがんとて此ほどまちまふけて候御はつほまいらせ玉へと大音あげて申ければ安藤五進出て申すやういかにや殿原山寺にちご里にはねうほうしゆくには宿殿とこそ申なれ汝がやうの者を山たちがうだうと云なり長もちのはつほゝしくばちから参れとてめもかけずとほり玉ふ云々あり宿には宿殿とは宿の者といふものある是にや

ホツホ

○【恨之助草子】(慶長九年)雪の前文みる處文をホヽに入玉ひホヽとは懐中なり今はホツホといふ【同草子】このひとまきと申はそも我なす所のひがことなりひとまきとは一件といふことゝ也古き詞にはあらねどやさしく聞ゆ

一件をひとまきと云ふ

○【太平御覽】(四百七十九)柤仲之述異記曰陳留周氏婢名興進入山取樵夢見一女語之曰近在汝目前目中有刺煩爲拔之當有厚報有見一朽棺頭穿壞髑髏墜地草生目中便爲拔草内著棺中以甓塞穿即於髑髏處一雙金指環是【古事談】其外【袋草紙】長明【無名抄】等に見えたる小野の髑髏穴目々々の歌の事は此を

穴目々々

取たる也

武夫の殘暴

○【同物語】に平貞盛人に射られたる疵をかくして瘡と披露しひそかに醫師にみするに兒の肝を求めて治すべしと云り貞盛我子の左衛門尉か妻の懐姙せるを請て殺さんとす醫師云我子の胤は藥にならずといへば外に求めて病癒ぬさて醫師は京に上らんとする途中にて射殺さんとする時左衛門尉妻がまぬかれたるを喜び構へて醫師が命を濟へり抑貞盛矢疵を隱せしは公にも我を憑もしき者と思召て夷亂れたりとて陸奥へも遣さんとあるを其人こそ射られにけれと聞えんは極しき事にあらずやとての事となむ武夫の殘暴なるより醫師の不仁なること甚しからずや元より其藥のことなどうけられぬ物語なるは論に及ばね共此ことと貞盛が一の郎等舘諸忠が娘の語りけるを傳ふるよしなど記せるも昔の武士は荒夷の如き者にて有しにや

醫師の不仁

大小の札物折紙のこと

○【續一歩集】(觀山松居彼仍舊貫甫編輯享保辛亥序)凡大小の價金一枚より三枚五兩迄の極めあるを札物と云ふ四枚より已上を折紙物といふ也又金五枚の極を百貫といふ千貫と云は金五十枚なり

太刀の目貫

○同書に目貫上代の太刀皆目貫表裏一所に打たるものなり然るに表裏一所に打てば其所高くなりて手の内あしき故後世の人引わけて二所に用たり目釘の固めにはならね共糸のこけてよらぬため振り留の手心もよければ也柄卷やうしきりを專一とすべし當流は小菱片捻を用ふ兩捻は菱の上すれて切れ易し又捻りなしは菱流れて振心あしゝ故に下を捻て上をよせに卷を片捻といひ世にかひ物なしを好む人あり不案内なりかひ物にて菱こけざるなり又胡麻から卷ひら卷等の異あり大菱は近日世上にはやれ共しまり不宜とて昔は嫌ひしなり入江友甫といふ御柄卷師に執政秋元侯必御指料を大菱に卷ことなかれと仰られしよしは友甫物がたり有しを聞り卷かけ引通しの分ちは糸の切ぬ爲にも柄首の動かぬ爲にもよければ引通しを用るを可とす太刀の變じて今の刀となりたるものなれば太刀は懸手を用る其替りなれ

柄の卷やう

矣命子孫不借非吝則痴といへり手澤の存といへ共積置て蠹魚に食しめむより同好の人の重寶とならむにしかじされば借すのみならず賣らむも又よかんめり好まぬ人のもたらしたらんはいとやくなし

ケサイ

○古く金ほるものをケサイといへり【庭訓】に藝才とかけるは假字なるべし思ふに【埃嚢抄】に螻蛄才といふことを載て虫の得たるさえの事に注せり是も假名書にて虫の事にはあらじけらのもじは郎字か助字かこれ又下才なるべし【東海道名所記】に八瀬の人の詞をいふに我(ガラ)も出てニヤア今から京へ來(ケヘ)たらニヤアとあり【東牖子】に矢背大原の土民おのれをゲラと云は下郎なるべしと云り今もしかいふにこそ然らざれば藝才聞え難し

藝が身を助くる不仕合

○【東牖子】又いふ藝が身をたすくる程のふしあはせと云句は錦花翁隆志といへる俳人の【獨吟十百韻】の中の句なり海内に行滿て高名なる句なり隆志は信徳の門人信安が弟子にして京醒井高辻の人なり寶暦のはじめ物故す好事の者句の面白さに前句付の集に再び出せしより流布せり

肖像の寫し難き事

○肖像を寫さするに似ぬもの也と云こと高嶋千春林家の像をたのまれ行て寫せしかど稿ならず依て林家その說を錄してあたふ葉盛が【水東日記】に云予自癸未歲廣州病後切欲圖寫陋容以貽子家甲申八月東朝房每舉以告友如姚大章尙書岳季方翰林諸公乃各舉所知宛陵陳啓陽州政輩凡五人稿亦十餘易無一肖肖者已之矣是年九月抵宣府得雲中季芳始能彷彿一二諸公嘗云貌有不易寫者聞之久矣中書舍人東陽吳正希純嘗寫東里揚公坐立像及其諸子隨行像一々皆逼眞建安公一日見之大驚異且曰吾平生傳神不啻數十人無一得眞希純乃能若是卽躬造希純請焉希純亦爲之屢易稿卒無二似此亦事之不可曉者

箭庭

○【舊本今昔物語】に平貞盛朝臣於法師家射取盜人語に四人は箭庭に射殺したり云々思ふに此語は弓射る處を箭庭といふそこにて弓射る如くつゞけさまに射たるなるべし今もすみやかなるをやにはといふ【同物語】幼兒盜瓜蒙父不敎語に在地判取たる文を取出して云々在地判とは其所の長(オトナ)しき者共の判

字多少百名以下不假連編之策一板書盡故言方板也此祝詞百二十八字故書于册也鄭以策文周公自作而傳云史爲册書祝辭非也

步搖

○【瑯環記】採蘭雜志を引て云人謂步搖爲女髻非也蓋以銀絲宛轉屈曲作花枝揷髻隨步輒搖以增嫵媚故曰步搖とあればあゆむにつれて動くもの也今こゝにていはゞひら／＼のかんざしと云もの卽是なり銀琺瑯何にてもいふべし

文房四神

○同書【致虛閣雜俎】を引て云筆神曰佩阿硏神曰淬妃墨神曰回氏紙神曰尙卿筆神又曰昌化とあり文房四寶と尊むべきものながら各其神名を設たるは奇なり唯是のみならず又【採蘭雜志】を引て脣神曰臙

神粧

嬛黛神曰天軼粉神曰子占脂神曰與賓首飾神曰妙好衣服神曰殿多昔揚太眞粧束每件呼之人謂之神粧などあり

拾赤子　賣赤子　織婦

○【蘭州瑣語】云聞京師六七十年前有呼拾赤子者貧民子衆卽付小貲予之乃出門又呼賣赤子欲子者復以財易之後官禁之蓋以有不傳而殺之者又有婦人呼曰織一男子擁機杼之具隨後續呼曰上工亦官禁之蓋有賣淫者也こゝに六七十年已前といへるは元祿中にあたる子を拾ふにはあらずこれは乳子買と呼るものにて

乳子買

【職人繪本】に圖も出て注して云ふ子を生して思案あるをば里につかはすは昔よりの習ひなるべし然れ共いづくに里子をあづかるとさだめがたきは此事なり然るを乳を持たる女里子とりたいのぞみなればさすともなく町々にてちごかはふとわめきめぐる也かやうの女幾人もあり／＼事なれ共それ／＼の機緣

人置かゝ

・共者の肝煎にたのむその肝いりを乳子買と云なり折節入口の當なければ則彼乳ある女を引連て何所をありて子を養ふ殊に貴きは都のうちぞかしと云へり又其ころ人置かゝと云へる者あり今いふ女衒なりこれは年よれる女二人してありけるよし也これをもひとしく禁ぜられにき

杜預書を　吝む一人　に借さず

○【瑣語】又曰杜預戒子曰書勿借人杜暹多藏書每卷書曰鬻及借人爲不孝爲人子者●手澤存不忍敢借人宜

たる笄は拾たかゝろたか美しや市右衛門どんの一むすこ女房が泣て悋氣する女房は錺屋のお鶴どのおつるが處から文がきた文の上書よんでみる一に香箱二に葛籠三にさらしの帷子を誰に着しよとて買てきたおまんにきしよとてかふてきたおまん死なれてけふ七日あすは待夜のぼた餅よとあり今唄ふ處と異同を知べし又此注解の中に島原一揆に滅亡したる寺澤兵庫頭が家來塚本織部が子息某本多中務大輔藩中櫻井庄右衛門が僕となりて常平といへり同家中なる彥坂善八と云ものを討て死罪に極りしを其前

幡随院長兵衛の異說

幡随院上人は本多家信仰有ける故常平が命を乞て助けたり此常平則俠客幡随院長兵衛なりといへり【關東俠客傳】の說と同じからず

シンマクと云ふ事

○安齋云俗語に物こと猥ならぬやう取治るをシンマクすると云此字詳ならず思ひしに寛保癸亥年南溟といふ僧の著述して梓行せる【續沙石集】といふ書六卷に有其第五教戒を記したる詞に人は常に愼莫二字を忘るべからず愼莫夜行愼莫不忠愼莫不孝等也といへり愼莫二字はつゝしみて此ことをすることなかれと云ことと也是にて俗說のシンマク二字を始て心付たり近年の人の著したる書なりとても書をば見べきもの也不慮に知見を開くことありと云へり書は見るべきものと云は誠にさることなから愼莫の二字を取られたるは非なるべしシンマクは尻卷なりもと尻舞といふ語より轉れる詞にて物事の終りを仕舞と云も其もとは尻舞なるべし尻まひは古くいへる語なり尻をシンとはぬるは【榮花物語】（峯の花）御藥の後取と云ことあり屠蘇白散のおろしを給はり飲なり又殿をシンガリとよむ

○【尚書後案】卷十三に尚書金縢に史乃冊祝曰（案曰冊史記作策古字同用）鄭曰策周公所作謂簡書也祝者讀此簡書以告三王（案曰鄭以冊爲策謂簡書者冊策同【儀禮聘禮記】云百名以上書于策不及百名書于方注云名書文今謂之字策簡也方板也疏云簡者未編之稱策是衆簡相連之名鄭論語序云易詩書禮樂春秋策皆尺二寸孝經謙半之論語四寸三分居一又謙焉是策長短鄭注尚書二十字一簡服虔注左氏云古文一簡八字疏簡容

違無御座候右御定め渡邊大隅守様島田出雲守様へ御願申上寛文十戌年十二月廿八日頂戴仕候

古へ遊女白拍子招かざるに来る

○【東京夢華錄】東角樓街巷云々飲下に又有下等妓女不呼自來筵前歌唱臨時以些小錢物贈之而去謂之剳客亦謂之打酒座とあり【板橋雜記】などにはかゝる事見えずこゝにて古へ遊女白拍子の類是を呼ばざるに押て參れる事多く見ゆ【同書】食店條に大凡食店大者謂分茶云々都人侈縱百端呼索或熱或冷或溫或整或絕冷精澆膔澆之類人々索喚不同行菜得之近局次立從頭唱念報與局内當局者謂之鐺頭又日着案託

食店

行菜

鐺頭

素分茶

須臾行菜者左手杈三椀右臂自手至肩馱疊約二十椀散下盡合各人呼索不容差錯一有差錯坐客白之主人必加叱罵或罰工價甚者逐之云々及有素分茶如寺院齋食也こゝに食店を茶屋と云ことよしあり行菜は食物のかよひする者鐺頭は料理人賓方など云者とみゆさま〳〵人のあつらへたるを〳〵調理して行菜なる者これを一度に多くもてくるに一つもたがふことなくよくならひ得たるものなからいとおろそかになめけならずやこゝにて今食物の器物を多くつみかさねて持ありくは蕎麥屋または壽屋といへるもの共なり素分茶は江戸などにいはゞ茶づけ屋は大かた素菜なれども是は料理の本膳ならずされど仕出屋あれば何をも辨することと易し

日蓮救母の劇

○【同書】中元節枸肆樂人自過七夕便般日連經救母雜劇直至十五日止觀者增倍これこゝにて十月日蓮記の狂言する心なり

今とかはれる手まり歌

○【故實今物語】といふ草子あり年號は削りて例の入木と云ことしたれど其間の繪をみるに寛延寶暦ころの物と見ゆ事は女童の手まり歌の解なれ共おもらぬ事のみ附會して作れゝは一ツも取べきものなし唯手まり歌の今とかはれるのみぞ其時の儘には有ける一向ふ通るは長兵さやないか鐵砲かついで小脇にはをさして何處へ通ると問たれば息子のお山へ雉打にきじはけん〳〵ほろゝうつよてお茶まいれ新茶をまいれお茶も新茶も飲ともないがこゝな小娘にチョとほれた一おせんが〳〵おせん女郎そなたのさし

れ

正保頃の町名 ○正保三年季貞が【町名俳諧】徳元判この内今聞えぬ町名往々あり寄合町トキ町長門町御成町海賊町(橋の誤か)五輪町喰物町番匠町宮鍋町矢守町御壽町またよし町あり古く此名ありけるか但し六間町は別に出たり

○【菟玖波集】(十四雜部)みそぎする日にめくり逢ぬる年をへしいとのみたれのくるしさに(安部貞任)

かたくるしき者を延喜式又は古文眞寶と云ふ ○昔はかたくろしき事をいふ者をば延喜式と云へり後に古文眞寶といへるが如し【本朝文鑑】序に何かは唐人の古文眞寶ならんや云々【同書】に字訓歌「寒ければ山より下を飛雁に物うちになふ人そ戀しき此歌は炭字を讀なり

淺草三十三間堂創起 ○江戸淺草に三十三間堂創起せし事享保十年町奉行大岡越前守殿へ久右衛門より差出したる書付 一淺草三十三間堂は元來新兩替町弓師思ひ立にて屋敷の儀は松平伊賀守様へ申上御公儀様へ被仰上堂屋敷拜領仕り取立可申私受取カラ木立はかり千五百兩の契約にて寛永十九年造立霜月廿三日に相渡申候同十未年より備後御弓の射手衆相集候て箭代ばかり取申事に御座候然共右カラ木立千五百兩の金子一兩も私方へ濟不申候依之申年御訴訟申上候處御公儀様より急度金子濟候様被申付候へ共如何仕候哉相濟候儀成不申候に付申年十月二日御評定所へ松平伊賀守様松平出雲守様安藤右京亮様朝倉石見守様神尾備後守様御詮議之上にて堂屋敷共に永代境屋久左衛門へ被下候間雖有奉存支配可致候由急度被仰渡候則備後儀は御拂になされ堂地立退申候同日拜領仕當年迄八十三年代々支配仕候儀共紛無御座候事　覺白銀五枚堂銀　一同六枚矢驗見　一鳥目壹貫文灯明錢　一鳥目壹貫文染錢　右之通被致矢數候方より可差出候由鳥目壹貫文板錢同壹貫文矢驗見同壹貫文札錢右之通堂前稽古の方より可差出勿論堂守へ斷可有之緣の上より芝矢一切射手より射べからさる者也右之通御奉行所より御下知相

人肉を食ふ

○崇禎壬午癸未間斗米升錢天下皆凶而河南山東尤甚往々以人肉撲賤雖至親好友不敢輕造人室守分之家老幼婦女相讓而食强梁者搏人而食奸巧者誘人而食甚有母殺其子而食者云々食人肉者一至麥黃相繼病疫死無孑遺云々或以爲想肉或以爲糟豚或以爲軍糧或以爲饒把火不美羹和骨爛兩脚羊是皆豺虎之尤也又何忍言老瘦男子謂之饒把火少艾婦人謂之不美羹小兒謂和骨爛總名曰兩脚羊

淨心の法號は淨土宗葬所は天台宗

○三浦五郎左衛門茂正法名淨心正保元甲申三月十二日卒法號稱陽院定譽淨心居士葬東叡山普門院これ法號は淨土宗にて葬處は天台宗なるは故ある事なるべし

歌誹百人撰の作者梟首せらる

○【歌誹百人撰】は馬文耕が撰なり憚りもなく當時上樣の御詠もあり又俳優市川海老藏等まで入たり横町にて召捕へられ梟首になりしと軍談師燕信もの語れり

延命院と仙石騷動の作者

○近時手酌酒盛といふ狂歌師延命院が事を寫本に貸本としたる咎にて江戸御構となる又戯作者一九が弟子なる者名を變て一九となれり仙石家騷動の事を寫本にしたりしが是により亡命したりしとなむ

○皆虛が【世話盡】(明曆二年)溫な時分や猿の出つらん門もかすみて實ぞ七色○こぼす淚は髪のかすかすいかに但かく玉章の字しむらん

筆師に小法師と云ふとこと

○【續山井】やり梅も風には道具おとし哉、春遊道具落しの事【昔々物語】に見ゆ【同賓集】ならば文字の法師かつく〳〵し、筆師に小法師某兵衛など名乘るはもと小法師といふ筆師ありしなり出齒が庖丁の如し

おも黑き

○おも白ろしと云を打かへしておも黑きなど今人もされて云ことゝなり闇に梅おもくろ方の匂ひ哉(吟雪)雪の歌や見て面黑き筆の跡(林元)

烏金

○一夜曉がたまでと契りて金借るを烏金と云こともやゝ古きことゝ聞ゆ【正直集】(七)寛文二年板、守武が獨吟追加とて載たる百韻の內「かへりてはくろかりがねをはらふ世にさため有しそからすなりけ

長押

○【盛衰記】（六）入道殿大納言に向て一長押上たる所に尻打係て（清盛成親に尋問する處）これは長押と讀べし今本の點いかゞ

沓新きも冠とならず

○沓新きも冠とならずと云諺も昔はさは云ざりし【盛衰記】（六）西光父子斬る條に雖冠古猶居頭雖履新尙蹈地塡れる挙不當笑顏とあり又岩木にあらねばと云ことも成親流罪の處に武士共にさすが岩木をむすばねば各袖をぞぬらしけると云り

岩木にあらねば

二ツ瓦三ツ棟に造たる船　**舁居屋形の船**

○成親流罪條　に二ツ瓦の三棟に造たる船二三十艘漕列けてこそ下りしに今はけしかる舁居屋形の船の淺猿かりけるに云々思ふに二ツ瓦とは重ね深く葺て二枚重ねとなるにや舁居屋形はつひ舁もて來れる如き庵屋を云なり

見みえの意義

○【盛衰記】成親大納言の配所へ北方よりの文の內に心に任ずる旅の御住居ならば共に下て見みえ奉たきことと云々見えは見らるゝ也これ又見る人にも見らるゝ人にも云ふべきは蓮如と云もの讚岐院を訪ひ奉る處に淺增き御貌を見えん事も憚あれば中々無由とて御泪のみ流させ玉ふとあるは院御自ら見らるゝを耻玉ふなり今漢籍を讀にまみゆと云ふ同言なり見もし見られもする故見みえとは云今云目見と云も御目に見え奉るばかりには非ずとも見みえの訛言と知らる。鬼界島の條そこはかともなく浪に流るゝもくつの中に卒都婆一本見え來れそこばくは此そこはかなり又（卷八）智者ハ秋鹿鳴テ山ニ入愚人ハ夏虫飛テ火ニ燒是は止觀行者四種三昧の大意を釋しける絕句とかや

そこはか

止觀行者四種三昧の大意

許魁の力

○【見聞集】（卷三徐岳著）許魁と云もの膂力あり轅門の石獅子左右を易たる事說鈴本に此條なし同（三）語云密網漏於呑舟張火飛蛾進集信然○同（四）輕烟輕雲娼家女云々性多俠雅不喜娟客大腹賈獨多金賂之輒不顧也云々大腹賈はこゝの俗に腹脹れと云が如し（同卷）近來私錢薄小不堪且銅貨多僞以致官錢壅滯雖新例極嚴而盜鑄日衆余甞謂錢視銅質之美惡輕重爲價不禁自止

大腹賈

私錢盜鑄

突上窓の事

○突上窓とて今人はよの常の窓の戸を内より突出すやうに作るをいへ共元來さにあらず【遺老物語】に永祿已來出來初し物の内にツキ上窓出來初りしは天正の初泉州堺の津に北向道珍といひしわびすき屋敷せまくして窓を取べき處なき故にすき屋の屋根を切破り明りを取しなり

破甕を以て牖又は門となす

○こゝにはせさる事ながら漫士には甕の破れたるをもて牖とし又門にもするよし也故に甕牖甕許と云書などもあり尤も寒家の作事と見ゆ乞丐などは破甕に住するもみえたり茶室などの幽雅なるには甕を牖とし又門とせばいまだ人のせさる處にて珍らかに趣あるべし

傀儡　撮弄之戲

○【聯珠詩格】(六八)梁鍠傀儡詩曰刻木牽絲作老翁雞皮鶴髮與眞同須臾弄罷寂無事還似人生一夢中これを咏物詩選に唐の玄宗の作とす又(十六八)藏撥今撮弄之戲是也(夏竦)舞袖跳珠復吐丸遮藏巧便百千端主人端座無由見曾被旁人冷眼看

撮搏之術

○【龍圖后案】青陸記穀條撮搏之術をもて穀物を盗める事みゆ此術いと奇しき邪法なり

冬學

○陸遊が秋日郊居詩、兒童冬學鬧比隣據案愚儒却自珍授罷村書閉門睡終年不著面看人、自注農家十月乃遣子入學謂冬學時讀雜字百家姓之類謂之村書

ベソ

○ベソ【源平盛衰記】に澄憲をあまくだりと捕せる條に小松内大臣當座に候はれけり始よりべし口してえも咲ず又(六八)入道殿打聽てべし口してまばこそとて能々心得ぬ事に思云々又(十)陰陽頭安部時晴が笑はるゝ條に雁口べシ口と書たり【今昔物語】に女醫師の家に治療の處貌をなほしかねて貝をつくりて泣ける云々安齋云泣ものゝ口の形への字形に似たりへシ口とはへ字口也今按るにへシとはへシ付るなど俗語に云ふにておさへ付るなり即おすことにて口の形をなぞろふる也雁口と書たるは當れるたるべし猿樂の假面にへし面といへるものも此口付したる面なり今是を小兒の泣とゝにべそ作るべそかくなど是あり其口つきに據ゆるなり

といふもの丶内に有子といへる女に物いふ處に有子唯一人御前に候けるを我身は此國の者かと御尋ありけれ共云々あり

江戸に猪がりの事

○江戸に猪狩の事享保七年壬寅五月十五日麻布領の内芝金杉町本芝町芝田町三田町右の町々より今度上目黑猪御狩人足五十人餘出申候組頭一兩人宛名主附添相詰申候右之段伊奈半左衛門殿より被申渡候云々思ふに是は頓て小金御狩の調練なるべし同十年乙巳下總國小金にて御狩あり又十一年丙午小金御狩去年の如し

はたご

○昔料理茶屋と云ものなし食事は旅店にすることとなり故に店屋にて物食ふをははたごと云り山崎宗鑑尼崎に閑居し常に油筒を鬻ぎて世をわたる業とし室にはやくわん一つより外に著るものなく朝げ夕げには鳥目十錢つゝはたごに持行しとなり

堺の眞言僧てぐる坊

○【新著聞集】泉州堺の眞言僧常に酒を嗜み只戯言のみいひて世をおくられしかども泊然として潔く祈禱しるし有ければ人々崇へける此僧身まかりて後遺囑の書に寺と書籍は甥の僧におくる金三百兩は草履取に得さする家の財寶は禍の基なり衣服はそれ〳〵に與へよ辭世はしやの〳〵衣つゝてん〳〵てぐる坊主に殘る松風とありてぐる坊は傀儡なりしやの〳〵衣は今しやな〳〵といふことにや

放出

○家作りに放出といふは離れ座敷なり【新著聞集】に津國東成郡放出村出田寺云ゝあり是またはなれたる孤村なるべし

紙裏より見れば數字に見る假名

○今落書など大小等發句狂歌を假字を紙のうらより見れば一二三等の數字みゆるもの徃々ありこれは小野篁歌字盡など云もの丶附錄に出づ其體ちのたや正川りし是一より九に至るなほ十 十一 十二 刈 等をも作るべし

三十三間堂の起立

○【官鑰秘鑑】に享保中三十三間堂起立の書付あり詳なり

り卵は陽物なりこれは呵卵呼と云ていばりふくろを吹といふ俗語にて幇間等が屈從するを然いへり

獄舍を禁中と云ふ ○世間の稱呼なども俗に隨て妄りに云べからずいともかしこき事必あるべきなりみかどを禁裡禁中なども常にいへりされば畏こきことなるべし獄舍を禁中といふ也朝廷を禁中といふことはなし

馬頭 ○【龍圖後案】(三)殺假僧條に東京城馬站頭店守招接四處往來客商とありこれ馬頭なり站字書に盡に作る獨立不動貌などあり馬のたてばなり

笑餂 ○人を欺くことを餂を甜らすと云俗語は【龍圖後案】(三)孫完といふもの大罪ありながら肯て招認せざるを人をして欺きすかさしむる處に笑餂せしむとあり

魚閣 ○同書(三)死酒實死色と云條に往魚閣去と云下文に魚池中云々あれば魚閣は池に臨める閣にてこれこゝに云ふ釣殿なり又この下に張英と云ものゝ妻の莫氏を殺す處に莫氏以杭子襯脚向楻中取酒卽從後提起

杭子 雙脚推入酒楻中去とあり按るに杭子は踏だい也楻は字書に載されども樁字の俗字省文なるべし酒樁にてさかだると聞ゆ○同條に俑自幹事人豈能知但天知地知俑鬼云々

許願 ○許願とは許下良願などもいへり神佛に願がけするなり願ほどきを還願とも賽還ともいふ○應有家財

還願 各分一半と云は俗にいふ有たけの財寶なり

幇傘 ○【龍圖後案】(六)幇傘云ふことあり相合かさなり求幇傘といへば傘下に入てもらふなり○脚力とは飛

脚力　妾來有室 脚などのことにはあらず特脚力などいふ時は威勢をかりたのみとすとなり妾來有室といへばいまだ不許嫁といふことなり

繭生帳布 ○【龍圖後案】(一)咬舌扣喉條主母家雖富足又出自宦門平生只愛淡薄繭生帳布被褥舖云々

御身 ○人をさして御身と云ひ自らおのれを身とも云ふ漢人俗語も亦然り身女身家など【龍圖後案】などに

我身 多し下輩の女などをさして我身と呼ことも古きことゝなり【源平盛衰記】(三)後德大寺實定殿島の內侍

ふわが古里に牛あり大さ山の如し傍人これを笑ふ語るもの云もしこの如き牛なくばいかでか彼太鼓を慢得べきといへり此物語はこゝにて作れるにはあらぬにや【笑林廣記】にも出たり

好酒不食

○【四節記】といふ曲本嫗院齣自家喚做賈志誠云々一生好酒不貪貧泥堂裡是我安身之處云々只得挑水營生前日挑一擔水到人家去賣云々

薇花　**百日紅**

○【汝南圃史】薇花五月中花開直至六七月爛漫可愛又百日紅【癸辛雜識】云百日紅頳桐也云々自初夏至秋藎草也紫薇乃木本不應冒頳桐之名

椿

○寛永の頃つばきの花をもて遊ぶこと行はれて種類も多くなれり其名後世には喚かへて傳はらず傳はる名もあれどいと少し【花壇地錦抄】は元祿七年江戸染井の花戸が著したる書なり椿の名も多く擧て二百餘種あれどト養狂歌などによめる名は大かた見えず

盆景

○今この方の俗人盆景と云は盆石とて盆に石を排置き白砂を盛たるをいへるは非なり盆景こゝにいふ鉢うゑのことにてもとは草木を植たるなり其風情幽趣あらしむるを植盆取景などいへり石など立添たるは後のことなるべし偖こゝにて石をもつはらにして木にてつくれる箱は花のみを植てもこれを石臺

箱庭

と呼ぶいまは人物鳥獸までもつくりて立るものを箱庭といふ【風俗文選】番椒序(野坡)「石臺を終に根こぎやたうからし

花を括ること

○【花鏡】に花を括ることを云て毎採一枝須擇枝柯奇古若二枝須高下合宜亦上可一二種過多便如酒肆招牌矣

蚓笛

○蚯蚓の鳴を蚓笛といへり【花鏡】(一二)自來晉と云條下に見ゆ又小兒の陰腫ることとあるは【鎭江府志】に

帮間の起從

今小兒陰腫多以爲此物所吹以鹽湯浸洗則愈とあり又【笑林】に帮間を曲蟮にたとへて云る内に會唱曲又會呵噂また燕子泥を啣で窠を作るに泥中に蚯蚓ありて憤りければ燕子云我專怪儞呵人家卵噂といへ

足痲　茶
芒なにに
付る

處この訛れる方に同じければ臀の麻を呪ふにやいとをかし

燈籠は白
きを尚ぶ

○蔡寧訥嘗青灯籠原欲取明故須尚白反大書某宅以掩其光云々○陳子有好畜書眉作籠爲官船樣船上列牌梶錫漏榜其船曰鴻臚寺人問之答曰鴻臚故是鳥官といふさかしらを咲へり

治第の燕
に賓客を
下し諸工
を上とす

○郭進有才略治第方成聚族人賓客落之下至土木之工皆與燕設諸工之席于東廡或曰諸子安可與工徒齒進指諸工曰此造宅者指諸子曰此賣宅者固宜坐造宅者下、評云採得百花成蜜後不知辛苦爲誰甜これもをかしき部類にやかうやうのこと第宅のみならず

乞兒の詩
歌

○【西陽雜俎】に長安乞兒襆臂文云昔日已前家未貧若將錢帛結交親如今失路無知己行盡天涯不見人觀其此乞自是聰明男子然而悔之晩矣（元祿の頃みやこの非人の詠けるとなむまことと元の非人にやいぶかし「ぬるまのみ人にかはらぬ身なれども浮世にかへす曉のかね「さむしろにおく露の身はきえやらてよはの嵐の吹かひもなし）

大蘿蔔

○衢州蘿蔔最大味甘冬月最美其魁如六斗斛所生之家不敢遽食親戚競以鼓樂導迎設酒相慶謂之榮王以占年豐之兆（江州日野近邑山中例年八月十日野神の祭あり東西の村より芋を出して長短をくらぶ是を芋くらべといふ毎年かくあればよく作たてゝ長さ一丈に近き芋ありとぞ

芋くらべ

歪をなす
者の誡め

○一醫生好作歪詩人有嘲之者曰蜘蛛壁蟢相結爲社蟢見蛛吐絲成網遂棄壁衣而強効之旋繞推敲終日不成一旦蛛乃謂曰壁哥儞也做什麼絲不如仍守這不攏

痴婿

○【笑林廣記】痴婿の條に妻曰云々我家土庫前爲此崗不許撒尿六字可笑記○卷七（世諱部）兩宦以後庭

對食

相易俗云兌車是也云々按るに【漢書】趙皇后傳に對食とあるは女どしかたらふを云世相好忌するよし

兌車

也兌車は今男童のことにいへど訛言なるべし

大言

○ふるき落し咄に大言をなすもの相逢て語る一人云ふ我在所の寺に太鼓あり周り十圍といふ又一人い

笑話 ○笑話は明萬曆中楊茂謙と云もの多く古今の事林を輯錄して毎條に評語を加へ【笑林評】と名く又續篇ありそれより遐かに後乾隆のころ【笑林廣記】出づこれは古書に出たることを載せず後世の笑話のみをしるしたるが【笑林評】に出たる話も多く見えたり又【四書】中の語をとりたる笑話を集めて【四書笑】などいへるものもあり【笑林評】に吳中一老初以弄蛇爲生其三子相隨行乞【笑林廣記】にも出たり

以髮易糖 ○有以髮易餹者云々また別條に此身是件々有用的髮可換餹皮可冒鼓云々

落咄 ○【醒睡笑】などにおとしのはなしといへる今はこれを落し咄と云ふ又唐山人俗語に落得一番嘲弄などいへる落字似つかはし

鬼に疣をとらる ○【著聞集】に鬼に疣をとられたる物語あり【笑林評】に一人頂有懸疣因取凉夜宿廟中神問此何人左右答云蹴氣毬者神命取其毬來其人失疣不勝踴躍而出次晩復有疣者來宿于廟神如前問之左右仍以蹴毬者對神曰可昨將毬還他其人至旦竟負兩疣而去、評云患失之患得之是求無益于得也これと全く同し

險蚌 ○兩人相遇問所生子女幾人一曰五女一曰一子生女者曰一子是險子生子者怒曰我是險子猶勝爾家許多蚌これ險は危なり一子なれば然いふ又險蜆音通ず彼故に女子を罵て蚌といへり

蔡京毎に香を焚く ○蔡京毎に香を焚戶牖を閉て數十の香爐にこれを燒その烟室に滿て卽一簾を捲香の烟氣如霧庭を繞る京客に語て云ふ香須如此燒方有氣勢

妓館の婦を壻と云 ○漢土にて妓館のあるじ皆女なり是を鴇と云ふ妓女も多くは養はずあるじこれを假女とす故に親生は殊に賞せらるゝことゝ見えたり【笑林】に妓者携客諷言我乃媽所親生云々など云へり

七尺の夫に二尺の婦 ○長安有侏儒女長僅二尺正若冬瓜中揷手足坐繩床內披胸乳兒其夫長七尺餘形狀甚偉

書を讀て睡る ○有士人讀書把卷卽睡梁人因呼爲黃儞言怡神養性也、評云好個睡方士人將書作枕亦是此意○【笑林評續集】俗言足痲將柴芒貼于鼻端卽止一人偏貼額上人問爲何曰我膝都是痲的今この方にても俗間になす

粤とり染脣物を糸針入とせんとす

搴得蒸頭一丈紅○【紅梅記】曹悅調婢條賞備這本書霞（朝霞は丫頭の名）也好做針線帖とあるは脣物を糸針入る物にせんと也○同記に鳳仙花已搗在金盆內了請姐々染指

指甲紅

【癸辛雜識】（續集 鳳仙花紅者用葉擣碎入明礬少許在內先洗淨指甲然後以此付指甲用片帛纏定過夜初染色淡連染三五次其色若胭脂洗滌不去可經旬直至退甲方漸去之云々今老婦七八旬者亦染甲○

四景題情

【塡詞】に四景題情とあるは春夏秋冬を四季といへり四時の景物に感ずる閨風の詞なりこゝにて今人これを四季とか四時とかいふべし又顧頂父（明人）小西湖十二景を咏ずる詞あり小西湖は幽燕城北にあり○

圓社牧童畫軸の詩

【琵琶記】衛閨女誡の□院子云白打從來遏鬱官場目小馳名如今年老脚跛蹭圓社無心馳騁云々槃薖傾人標注に兩人對踢爲白打三人角踢爲官場毬會謂之圓社○【同記】舘內悲逢と云處（蔡生）牧童畫軸の題詩をよむ石上敲針閑作釣水邊牢犢學行船風淸吹笠花前立日暖鋪簑草上眠

古き筆きり〳〵す

○【隣女晤言】に草庵集連歌にふるき筆きり〳〵すとや成ぬらん（頓阿付句）壁の中にそふみはをさめし【草庵諺解雜注】に晉干寶が【搜神記】を引て曰朽蒿爲蛩也云々前句の作者蒿字筆字に似たるを誤り見てせしと見え侍る云々いへり今按るにさにあらず往古より旣に古筆のきり〳〵すとなることといひ來れりと見ゆ【秘藏抄】に筆津虫秋も今はと淺ちふにかたおろしなる聲よわるなり筆津虫は蛩をいふ也古筆のなる也とあり此說もいかゞあらん【秘藏抄】の說も古筆のなりしなるべしそはともあれ禿たる筆の形をいふきり〳〵すと云へば自らきれたるさまにも聞ゆれば也こは蛩の聲すゝきになりたるといへると同じほどの言なるべし

折櫃

○【同書】に折櫃はもろこしの書に折乾といふことのあるより折字器の名となし來れるにやと云へり折乾の說は【榊巷談苑】にも出てこのくに俗にいふ神代肴代の事たり折ひつの折をこれによれりと云へるは笑ふべし折ひつとは片木を折曲て作れるもの故しか呼にて深き義あるにあらず

思はれしにさにはあらず日本一流の祭文と自稱せし也また今江戸にも山伏やうの者來りて語る歌祭文は上州祭文と呼ぶ皆上州より來る故なりこれ又他處には少し又今チヨボクレと云もの已前の曲節とはかなりて文句を唄ふことは少く詞のみ多し芝居咄しをするが如しこれを難波ぶしと稱するは彼地より始めたるにや

チヨボクレ

常陸祭文の一種

○常陸祭文これ又一種のものにて歌祭文より起る說經をも語れども彼米千が類にもあらず又古き說經の流にもあらず三絃も本調子にて只何となく鳴し時々文句に合する迄なり

貧家の竈

○雜劇の【爛柯山抄】化の條靑蛙鑽竈冷氷々と云るは貧にして烟を絶せるかまどを云り○【水滸傳】石秀楊雄が家にある處に自古道人無千日好花無百日紅と云る詞あり紫薇花を百日紅と稱し又【癸辛雜識】には頳桐を百日紅とすいづれも花のさかり久しきものなればなり又千日紅は【花鏡】に見えたり思ふに是らの花の名は後にて諺は古かるべし○曲本に【釵釧記】講書の段今朝可畏因循易明日無聞悔後遲○躧

百日紅

番字り意義

鞋看穀條に看守不免番晒童兒竿を持て穀をさらす處に居鳥を追ふ番の字こゝにいふ番をする意に叶へり替る人あるにあらず俗語に一番といふ番の字の意○教子茶肆の條に茶坊器皿精奇舖排洒落云々我茶博士是也○【玉環記】謁見齣に老爺貴誕夫人與小姐綉成松竹梅與老爺上壽云々これは其意松は松柏同庚竹は靑節堅剛梅は爲國調羹に取るまた【還帶記】入貢院齣舉子交卷の處第二場分松竹梅三號云々是は松竹梅を詠ずる也本邦にて畫家此三つを圖し又衣服調度の紋となすもと唐様によれる也○【還帶記】別頭巾の齣房下說等我拿個釘々在壁上放燈草發卒也好的不想個件物事亦有用處これはふりたる頭巾を脫てすてたるを妻の才覺にて壁に打つけてとうすみつけ木の入物にせしと也○【題塔記】舊題の條倆本是泥鰍侶强要做燒尾魚笑倆老而不死還躑躅○【金鎖記】賣過貍猫老鼠藥大的吃了跳三跳小的吃了就死哩有錢不買耗鼠藥敲々打々睡不着賣過貍猫老鼠藥ねづみとり倆賣ありく處○【蕉帕記】鬧韓の條不知誰向錦標中

茶博士

松竹梅

頭巾を燈心入れとなす

庖丁の事

り又庖丁部を庖丁と云是が魚類を切る刀を庖丁刀と云て俗には庖丁とのみ云へり又魚鳥料理することをも古より庖丁といふ古き物語の書に見えたり

すばる星

○昴星をスハル星と云は統る星なり一所に統あつまりたる故にかくいふ也統字をスハルと訓すスマルと云も同韻にて通ずる也【神代卷】に八坂瓊之五百箇御統(イホツミスマル)とあるなり

垣下座

○垣下座(ヱンガ)とは舞樂等の時舞人樂人など着座する所なり此外公事の時もあることなり地下の座にて麁などにつく所なり此處にて舞などある時は堂上へはみえず此故に俗に晴たゝぬことを垣下舞といひけるにや後世の俗談に椽の下の舞と云ふは垣下の舞をあやまりたるなるべしと或人いへり

椽の下の舞

美婦を凸と云ふ

○婦人のかほなり善きを凸といふ此故に昔より白粉の看板に箱を凸の形に造れり漢土にも【元曲西樓記】に淨扮醜妓上云々眼大眉粗面又凹とあり

常陸祭文

○常陸祭文とて淨るり一種あり其始結城重太夫と云もの天明の頃その唄ふ處の正本を江戸本芝三丁目なる淸水屋治兵衞といへる草子屋にて刻し初めて多くこれを板行す說經上るり其外は八百屋おしちが事の如き歌祭文大かた刻せざるはなし此重太夫と云へる者江戸に出て弘めたることはなく其正本なとは田舍へ賣れしなりそれが正本を見るに元祖結城右見椽とあるはこれよりさきにそれが師は有しこと知べし思ふに是は下總結城出生の者にても有しかされど廣く行はれたるは重太夫より始る結城は操狂言座元の稱號にあれば重太郎が後は是等よりさゝはる事など有しと見えて其次は天滿基太夫と名乘り只近時俗說の夜泣石また鬼女おまつなど其他種々の敵討等を專ら語りて說經の上るり共は語らず其曲節は歌祭文チヨボクレ上ルりさま〴〵混雜野卑極りて聞に堪えざるもの也此類常陸にのみ有る故常陸祭文とは名くれどそれも水戶などにはなく筑波山下邊鄙の地處にのみありて今に存す又をかしきは是を

日本祭文

日本祭文とも稱するは預島庄兵衞などが事を語りて其綽號日本左衞門と云はやらせたることにもやと

の泪のそこにうつれたゝむかしをしたふおもかげの雲

○【金葉集】(雜上)をとこのなかりける夜ことと人をつぼねにいれたりけるにもとの男まうできあひたりければさわぎてかたはらの局の壁の崩れよりくゞりてにがしやりて又の日そのにかしたるつぼねのぬしのかりよへのかへこそうれしかりしかなといひにつかはしたりければよめる讀人不知「ねぬる夜のかへさはかしく見えしかど我ちかふれば事なかりけり是によて思ふに彼夢ちがひといふ獏の繪のしき寢も惡夢を我がちかふるなり

獏の繪の事

ヘタと云ふ語の事

○ヘタははたなり海邊をうみべたなどいふは雅語なり又上手に對してへたと云も淺き意にて同義なれども是は後世の俗言なり宗祇【新菟玖波集】を撰みしに櫻井基輔が連歌入らさりしかば落書を立つ遊見筑波錢便人不論上手與下手云々いへり又賤き者を下衆と云は上スに對して云り【源氏】(桐壺)におぼえいとやんことなく上ずめかしけれど【取かへばや】人を人ともせずもの遠く上ずめき玉へるなと云へり盲人の階級に上衆引といへる事もこれにや

鑷子を南方と名くる事

○鑷子を南方と名づけたるは不毛と云こゝろにて出師表よりいふとぞ昔關東へ下りける勅使のかのけぬき求めてさる名をば付けるとぞ又一說に尾張國名古屋に南方といへる鍛冶あり彼を南方といへるは源敬卿かれが作りし毛拔にて御髭をぬき給へばよくぬけて少しも殘らず南方不毛之地といふことのあれば常にかれを南方と仰られしより名となるなり二說いづれか是なるを知らず

三方荒神の事

○【夏山雜談】往古內膳司平野庭火忌火とて三の釜あり、各神靈を祀らる三所の皇神と云是なり民家も竈神を祭るは此餘風なり俗に荒神と云ふは皇神なるにや【文德實錄】云天安元年四月有勅內膳司忌火庭火皇神授從五位下云々

よほろの事

○丁はヨホロと訓す下部の者の事也使丁仕丁の類也火丁と云は一隊の飯をかしくもの也俗に云食燒(メシタキ)な

烏丸光廣卿十二支和歌

○烏丸光廣卿十二支和歌　穴田律師鼠雲よもすがら秋のみそらを詠れば月の鼠と身はなりにけり、大角黒丸村しくれ晴間の月はみる雲の空のはたれをうしとこそみれ　野邊興風よもすがら虎ふすのべに秋風の月にうそふくかげぞほのめく　萩本月澄あけがたの月の詠の白うさぎ耳にそ高き松風の音　主水正龍能わが方にうきたつ雲はあつまれど月にかけしとみゆる秋かな　巳濃内侍つきみればうきも忘るゝ秋の夜をながきものとは誰かいひけん　右馬權佐長連あふ坂の山立いでゝさやかなる月をへだてのきりはらの駒　庚國羝羊とゞまらぬひつしの歩み廻りきて幾秋月のかけになれけん　猿丸入道つき更にみ山おろしのみにしみて秋の思ひをましらなきつゝ　鷄戸時經つれなくもゆふつけ鳥のなくなへにかけそほのめく有明の月　犬太郎守家はなにほへ月にはほへぬ詠をもほしまもるとや人のみるらん　猪手冠者鼻堅しなかども伏猪の床の秋風に雲もさはらぬ月をみるかな

蛇の怖る歌

○【萩原隨筆】に蛇の怖るゝ歌とて「あくまたち我たつみちによこたへばやまなしひめにありとつたへんと云を載たりこは北澤村の北見伊右衛門が傳への歌なるべし其歌は「此路に錦まだらの蟲あらば山立姫に告てとらせん【四神地名錄】多摩郡喜多見村條下に此村に蛇除伊右衛門とて毒蛇に喰れし時に呪ひをする百姓あり此邊土人のいへるには虵多き草中に入るには伊右衛門〳〵と唱へて入ば毒虵に喰れずと云ふ守りも出す虵多き所は三里も五里も守りを受に來るとのこととなり奇といふべしと云りさて彼歌は其守りなるべしあくまだちは赤まだらなるべく山なし姫は山立ひめなるべし野猪をいふとなん野猪は蛇を好で食ふ殊にまむしを好むよしなり

江口君畫贊

○江口君畫贊　京遊女佐渡「河竹のよゝにふりにしも今おもひ出のあだまくら寐亂れかみもえにしにひかれてはまことのみちをわすれ引舟もろ共身ぬけして西の方へゆき玉ひしそのむかし戀佗ぬ一我袖

草木禽獸みな通稱すること多し其上此歌たしかに木を草と云たり共聞えず木を草と云ことは【荀子】に南方有木曰射干と見え又覇王樹はサボテン莽草はシキミ也本邦には甘草をアマキと云類なり猶あるべけれ共今記臆せず又竹樹と申ときは竹をも木に屬し申候

畫法を用ひて假山を作る

明末に松陵の計無否といへるもの闞同荊浩が筆意を好みて畫を善くせり、後に畫法を用ゐて假山を作りそれより園亭を作る巧ならずと云ことなし是に依ていと名高く求むる人多くして名苑ともあまた作れりとなむ遂に其式をしるして一書となし【園冶】と名く崇禎辛未の歲の自叙あり表題【名園巧式奪天工】とあるは後人の書賈などの所爲なるべし扨この計無否といへるは恐らくは故ありて名を隱せるもの歟この伎をもて名を著はさんことを惜めるにや又は故ありて名を隱せるもの歟しか思はるゝは【蒼曝雜記】(五)古來構園林者多疊石爲嵌空險峭之勢自崇禎時有張南垣創意爲假山以營邸北苑大痴黃鶴畫法爲之峯壑湍瀨曲折平遠巧奪化工南垣死其子然號陶庵者繼之今京師瀛臺玉泉暢春苑皆其所布置也楊惠之變畫爲塑此更變爲平遠山水尤奇矣といへり計無否とは此張南苑なるべし

庭

○庭【和名抄】考聲切韻云庭屋前也和名爾波とあり又【玉篇】に庭堂階前也といへる是なり門に入て堂に至るまでの間を庭といへるは本義ながらこゝにはと云は家の四周いづこまでもにはと云ふ場の字をばとよむはにはの略なり是にはと云ことの廣きを思ふべし【萬葉】に爾波奈加能阿須波乃可美などよめるは人家の庭なり【古事記】に大年神の御子に庭津日神次に阿須波神云々あり古へ人家の庭に此神をりし事みゆ是によりて思ふに今神事舞太夫頭田村八太夫が江戸町中へ配る所の竈神青襖の札と云もの字の如くアヲブスマと讀はひがことにて是阿須波の神にて青襖はアスハと訓べきにや

鞠歌のオケンショサマと云こと

○小兒立まりとて立て地上にまりつくにオケンショサマォヨヨネシヤトウヨといひつゝまりをつくは田家の兒女が戲をまなべる也そのとなへことと意得がたし是は御免除さまの御朱印じやとよと云る程に

すべし二說に勝るべし○みつゆひのこと【昨日は今日の物語】(下)に今も老人のみつ指つき合とあり大指より中指までの三指をいかめしく手をつくことにや山崎久卿二書を抄出しておこせたり【京童跡追】元日發句に「つく指も三ッの初めの禮儀かな」【草堂雜錄】(沙門元謙作享保十四印行)東都を詠ずる詩に江城繁華能移人朱赤墨黑誰守志與學賓主相見初卷舌三指大張臂之にて明らかなり○みさき踊りシエンタルほどに俳諧の季寄其外にも何踊といふ名目多けれ共みさき踊は覺え申さず候何れ是は山崎邊在鄕のをどりなるべしシュンダルと云シュンは「句字なるべし【字彙】に十日曰旬といへり」おもふに物のチヤウどよき盛りの處を云なり又按るに一段色濃きを一入と云如く染ことの深きに喩へ云歟染をシムとも云りシュンダルはしみたるの僞言にや(今阿州の俗七月の踊の合拍子にシュンテキタ〳〵と云シュンテキタは染て來るなり)

高野六十奈智八十

○高野六十奈智八十　紙などの燃にキナ臭イ　內儀をカミサマと申事

諺高野の何ことより言初たるにか覺束なく候或說に高野の紙屋谷と云處より漉出る紙は一帖六十枚なり今浪華に專ら傘を張る紙なり又熊野本宮郡小塚村より漉出せる紙は一帖八十枚なり依てかくいへりとあり(思ふに此諺四十しまだの類にて男色のことにはあらざる歟)

きな臭い

○キナ臭イ此語いまだ思ひ得ずもし衣焦る臭氣と云へるを其焦ると云ことを略きて云たるもの歟キヌ【竹取物語】にはケヌと見えたり

內儀なカミサマ

○內儀をかみさま　カミサマはもと天子の稱なるを源氏其外物語類の文に攝關の內子をうへといへり今も箔だみの內裡羽子板と云もの丶緣を殿樣カミサマサンショサマと云を思ふべし(殿樣は男カミサマは女にて幷べりサンショサヨは子供を細小に書たれば也)士人の妻をしか稱するも亂世よりの僭上なり

春雨歌

○【堀川百首】春雨歌　冬くさとみえし青野の櫻花彌生の雨にふかみどりなり仲實木をも草と申候哉

嬉遊笑覧或問附録

喜多村信節撰

和歌三神

○世にいふ和歌三神人丸ほの〲と（古今） 住吉（夜や寒き（新古今） 玉津島（立歸り又も此世に）此立歸りの【歌二十一代集】には見あたらず何の集に出候哉

玉津島の神は衣通姫にて允恭天皇の妃いまだ佛法渡來らざる時のことなるに此世に跡垂むなど本地垂跡の義いふべくもあらず此歌後人の妄作なるよし安齋先生の説なり又三神と云ことも阿彌陀の三尊に倣ひたるものなるべしと云り

和歌三神の事異説あり【橘窓自語】に和歌三神住吉社天滿宮玉津島姫社の三社たること【後奈良院宸記】にありと云り

あと垂るといふこと【源氏】（明石巻）にもありと覺ゆ中古より云たること也

しづをかけたる雪の笠　武家のみつゆび　みさき踊

○【本朝二十四孝淨瑠璃三段目】じつをかけたる雪の笠【妹脊山淨るり】武家の行義のみつゆびなどまた忠臣藏にみさき躍がしゆんたるほどにと申事

俗に麻苧のことをシヅといへり是は倭文手纒と萬葉集に讀たるがもとにて倭文を賤に借たるなり倭文は冠字考に論じたりシヅノヲダマキと云より麻苧を今シヅと云なり今世に云ところに隨てわけもなくシヅを苧の事と見て麻苧の紐つけたる笠をいふにや又思ふにシツは沈の義にて機の鎚をシツと云類にて雪の重たき笠にや 又思ふにシツ の雪と云は軒端などより 積雪の落るを 云といへば此義と

細ならされば益なきことなり

いたづらにしみのすみかやまうくらんちりうちはろふ人しなければ

嬉笑笑覧巻之十二終

一人その樹に代りてならうと申ますといふなり【實倉】に或時婿にはかりて云君みづや柿木などいへるものゝ年きりせるには節分の夕に一人斧をとりて此木をきらんといらなめば今一人其木に代りて明年より年きりせまじゆるし給へなど口かためする時は必明年より年きりする事なし云々【汝南圃史】に正月元旦辰刻將斧班駁蔵樹則結子不落名曰嫁樹と是なり又【文昌雜錄】云楊州李冠卿所居堂前杏一株極大多花而不實一老嫗曰來春爲嫁此杏冬深忽携尊酒云是婚嫁撞門酒索處子裙繫樹上已尊酒辭祝再三家人哂之明年結子無數とありこれ嫁樹の義なり

嫁樹

江戸の本草學の始

○江戸にて本草學問する者出來しは松岡恕庵召れてよりなり其頃日記享保六年辛丑二月松岡玄達を京師より呼下され旅宿小傳馬町三丁目糠屋七兵衛七月三日御暇にて罷登路金十兩相渡ル七月九日京都儒醫松岡玄達大坂儒醫古林見宜大坂藥種屋伏見屋市左衛門平野屋九兵衛堺藥種屋小西彌左衛門是は二月以來御當地逗留中旅籠代並普請入用本國へ罷歸候路金野呂玄丈夏井松玄本賀徳運是は御當地逗留の内普請代并藥草見分に被遣候雜用金都合金高百七拾七兩二分拾一匁七分五厘同九月二十二日當六月十二日の記有之勢州松坂駝堂と申仁紀州豆州へ藥草見分に罷越候樣仰付られ無恙相勤此度在所松坂へ歸度奉願昨二十一日林良喜老へ被召呼勝手に罷歸候樣被仰候白銀三枚頂戴旅宿本石町四丁目仁兵衛店六郎次郎届來ル同七年壬寅四月二十五日桐山太右衛門下總國千葉郡小金の内瀧臺野にて爲御藥園十五萬坪拜借被仰付桐山は藥店なり同年八月二十八日今度芝新網町に罷在候浪人安部友之進相州大山より八王子邊藥草御用に被遣候爲路金五兩町欠所金の内より下置れ出雲守樣より年番此方へ仰付らる

御藥園

採使藥

○【採藥使記】は享保五年庚子駒場御藥園御用屋敷の預り植村左平治政勝採藥の台命を承り其時より實暦三年癸酉に至るまで間斷なく三十餘年採藥の爲に諸國巡行し人の行さる處も巡見し藥物はさらなり奇事に至まで書記し九卷の書として寶暦五年丙子に獻上しぬされども藥物搜察は其學問廣く鑒定精

生花の書

○紀逸【江戸枝折】五篇（寶暦十一年）池の坊の投入の花を見侍りて一江戸へ出て都の花をいけの坊みる人舌をふるふ獅子口（紀逸）投入もはえた如くにいけの坊しらぬ目からも花のうえ人（臺麿）

○漢土にいけ花の事を記したるもの袁中郎か【瓶史】張謙德か【瓶花譜】などあれどもこれは鉢植をもいへり【秘傳花鏡】いけ花の方委しくいへり花によりて莖を燒又は泥をつめ鹽を入又花いけの水もさま〳〵しかたあることゝもいへり今こゝにも大方いけ花師等が秘傳とすることどもと見えたり其大略凡花は雨露に滋生するものなれば瓶養も天水を用ひし毎日添換てよし若三四日換さればかならず零落す毎夜風なく露ある處に置べし梅花水仙は鹽水に養ふ梅は殊さら豬肉汁を用ゆべし

後世生花師

○江戸に近ごろ專ら行はるゝは遠州流石州流宏道流などゝて何くれといへども大かた遠州流といふものと異ならず遠州とは小堀宗甫の名を假たるにてもとよりあらぬことなり（石州も同じ）又宏道は袁中郎か【瓶史】に思ひよれる名なるべします〳〵ひがことをきはめたりされどもこれら行はれてこゝろべき人の好もあれど多くは下輩の態となり神祭りの宵みやに假閣の飾物に立るをはれとす枝を撓め奇狀を作り出すは見るめもいとはしけれども其わざはむかしより巧みになりしにや【徒然艸】に爲兼大納言東寺の門前にてかたは者共をみて曲折あるをめでゝ植られたる鉢の木どもみなほり捨られしと有り

鉢植木

その鉢木どもゝ自然の形狀にはあらぬなるべし然らば盆種など作れる事むかしよりありしなり袁宏道【瓶史】云石公之養花聊以破閑居孤寂之苦非眞能好之也夫使其眞好之已爲桃花洞口人矣尚復爲人間塵土之官哉

○【香祖筆記】曰上元數日從中挿雜花如桃梅桂花佛桑之屬とあり又【同書】に云所謂蒙門集一輸其奇蓋上有自題云花出揚州種、瓶是汝州窰、注以東呉水春風鎖一盃これ瓶中の竹葉なり

ならうかなるまいか

○世俗除夜に果樹の實のならぬに一人斧を持て木のもとに行ならうかなるまいかと打むとするを又

うけ筒 竹筒

口作一小孔以管束花枝不令斜倒云々冬天貯氷挿花則不凍損瓶質これうけ筒の法なり竹筒も花を入ることは墓處などに用【北窓瑣談】二重切の花生今世には何方にも用ゐれども無風流なる物にていと見苦し利休の頃は勝手ものにて花のいけために用ゐし物のよし床へ出し人に見すべき物とはみえず世に傳へいふ小田原陣の時利休が伊豆の韮山の竹をきりて用ゐたるを後に園城寺と名付てことごとしき名物となれりとぞ【指月集】に宗易園城寺の筒に花を入て床にかけたるをある人筒のわれめより水のしたゝりて疊のぬれけるを見ていかゞと申されたれば易この水のもり候が命なりと云此筒韮山竹小田原歸陣の時少庵へ土産なり筒の裏に園城寺少庵と書付あり判なし又此同竹にて先ツ尺八を剪て太閤へ献ず其次音曲已上三本なり音曲には利休狂歌あり云々【同書】

薄板

又云古織籠の花入を薄板なしに置れたるを利休稱美して古人薄板にのせ來れ共おもはしからず是は御弟子にまかり成とてそれより直に置れたりといへり古式古實といふもの大かた物忌ひするを宗とす其內床に本尊脇繪をかくる時三具足に花をさすこと右長く左短なとさまざまありて殊に大事とするよしながら人のむかひてみる處を形よく飾りうしろの方を佛に向るはいかにぞや但し此事はいけ花のみにあらずされば【玉勝間】にも此筋のことをいへり【寶倉】に立花とかやは見處すくなからぬにもあらざめれどこゝをためかしこを作れる事のいとむづかしきわざなどいへる人もありけむかしたゞさゝやかなる一枝二枝なげ入たるこそたれこめても猶春の行へしる心地すなれ【錦繡緞】世間の景になりし我山針かねに花を殺すは花ならず（【風流徒然草】花の手つたひする人は細きさわら木はりがね拵たしなむこと故實なり）

水仙の早咲

○【好色盛衰記】（貞享五年）河州倉橋といへる里に水仙の早咲毎年後の名月には花始て白し都の高家がたへあげての跡民家の口切に出しぬ花一りんを金子一歩に定つて是を求め茶の湯に合せて花屋より方々へ一日つゝ賃銀取て借ぬいかにしても數寄者の心入にはさもしといへば云々

て鼻紙の中より蔦紅葉を取出し面白く引まとひて立退ければ一座の人々目を驚し暫く堪ざりけり池坊いひけるは三十年ばかり心がけたしなみしに此時に當りて本意を達しけりと悦びしとぞ

廻り花

○廻りはな【童蒙先習】（第二）おもしろき物すきたる道まはり花云々【鷹筑波集】廻りばなにさすや名に負ふづさくら（定主）【貞德獨吟百韻】ものつけてならぬ座敷の床疊まはり花をば小勢にてさせ

投入

○今俗に投入といふは茶席の花といふとのみおもふは非なり【仙傳抄】になげ入といふは船などにいけたる花のことなりとあり船の花いけは釣ものなれば壁にかけたるもなずらへて投入といふなるべし又今人投入花をみてよく入たりとほむる是も【同書】に花をいるゝといふはさいらうのやうなるもの

茶籠

に花をいけたるをいふ野山にある體にいるゝなりと有りさいろうは茶籠なるべし籠花生なり淡にても古は銅器のみ花いけに用ゐたりとみえて張謙德【缾花譜】云古無瓷瓶皆以銅爲之至唐始尚窯器又云貯花先須擇缾春冬用銅夏秋用瓷因乎時也こゝにこれらのわいためなしむかしは多くうすはたを用る是かの立花なり【鷹筑波集】付合句うすはたにもる春の谷水、一雲【獨吟百韻】（寛文元年）さりとては舟

薄はた

かきらひておか□□花いけはたゞ筒ようすはた【續山井、後撰夷曲集】目にはみてくはれぬものはうすばたにつきたてゝある餅つゝじかた昔のうすばたは今もある佛具の花瓶なり花の大小多少は居所によるへきなり【花鏡】に大抵書齋清供宜矮小爲佳宜銅瓶必花觚銅觶云々愛窯器必紙槌鵞頸云々之類方不而家堂香火前五事件内瓶同至若廳堂大廈所用大瓶不在此例也云々いへるが如し又これをみれば漢土には佛具のうすばたなどを用ゐぬこと知るべしさもあるべきなり又云呼寒士處此名花猶可假乞古器從何面致若有宣德成化龍泉窯二便可脱俗矣といへるは恐らくは僞欵のもの多ければそれをいふにや宣德成化の陶器はかしこにてもいと貴重のものなり【考槃餘事】に堂供須高瓶大枝方快人意若山齋充玩瓶宜短小花宜瘦巧最忌繁雜如縛又忌花瘦于瓶云々又云冬間插瓶須用瓶若牡丹則用沸湯插瓶方稱瓶内須打錫管敉

ひさしの杜のもとにおしやらせ給ひつ其外家つとに花の枝を手折ことなど多く有花は必水に活しなるべし【明月記】元仁二年乙酉三月十二日夕暮下被參安嘉門院云々花瓶立色々花【菟玖波集】(二十)平貞時朝臣前の瓶子に花一枝を立たりけるを發句すべきよし申侍ければ六條内大臣 手折ては水こそ花のいのちなれ

立花の法式

〇古は花を立るに法式はなかりしなり大かた東山殿の頃前後より種々のことをば云出けむ【京羽二重織留】に珠光は南都稱名寺の僧なりしが茶道俊逸にして嘗て義政公にまみえ奉り還俗して京師六條に茶亭を構へ住居す義政公時々入御し給ふ珠光後に瓶花の事を相阿彌に學べりといへり洛陽六角堂の池坊專順は此伎をよくし連歌を好みて【新撰筑波集】にも入たり打つゞきて其法を傳へ今に立花を業とす【山州名勝志】に六角堂昔は寺僧あり僧正などにも任ぜられけるにや今は其義絶て執行池坊守之云々【二水記】云大永五年三月六日參青蓮院門跡今日花御會也池坊(六角堂執行花之上手也)祗候了十瓶有之とみゆ此池坊は專順が後にて專慈なるべし花會といふことその頃より專行はれたり【日次紀事】洛六角堂頂法寺云々近世僧專光得數品花枝於一瓶中而擬山水之景象倭俗謂之立花至今代々玩之僧俗爲此徒弟者多例年七月七日有立花數瓶砂物等入寺見之謂之池坊立花是亦供二星之意也また云昨六日晩東西本願寺末派幷家禮以花數種作船狀又造樽形中建草花數品獻門主並置於堂上今日諸人竊見之そのかみより此を專業とするは池坊の外に聞えたるもなし【仙傳抄】は立花の古法をしるしゝ物にて□□に谷川流といふが有然らば古くも異流ありとみゆそれらも池坊につたへて集成したるにや

池坊

〇【備前老人物語】ある人の云しは常にいらざる物も久しくたしなみ持ぬれば不思議に用に立て名譽となること侍りいかなる時にかありけん池の坊に花を所望する人折節花なかりければ薪の中より若生たる木を見出し花瓶に取そへて出したりけり池の坊みて珍しき作分やと云て其木を有の儘に花瓶に立

これは無心の松葉ながら人の息してはたらかすれば有心有情のものとみるに折ふし庭の松風吹落て松の葉の兵（ツハモノ）さん〳〵に打たふれて忽風前の塵となるを浦風なりけり高松の朝嵐とそうたひ侍るといへり松の葉の人形今は疊のゐをもて作るやうとおなじとみゆ松毬（マツカサ）々□□といふ是をむかしは手遊の鳥また人形などに作れり松葉のくさりは瓶物の處にいへり

藤原吉野

〇【續日本後紀】承和十三年八月庚午朔辛巳散位正三位藤原朝臣吉野薨云々寄住之處好常種樹昔王徽之寄居空宅便令種竹人問其故徽之指竹曰何可一日無君邪可謂千古猶有隣矣傳文約にして委しくはしられず唯樹木を好れしは諸木なるべし竹を愛しゝを似たりともいひがたし

花を瓶にさす事

〇花を瓶にさす事佛事のみにもあらず【古今集】に染殿の后の御前に花がめに櫻の花をさゝせ給へるをみて云々【枕双紙】おもしろくさきたるさくらをながく折ておほきなる花がめさしたるこそおかしけれ又家はといふ條かうらんのもとにあをきかめの大なるすゑてさくらのいみしくおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば云々【後撰集】貫之久しかれあたにちるなと櫻花かめにさせれようつろひにけり佛に供するはもとよりなり【同集】折つればたぶさにけがるたてながら三世のほとけに花たてまつる（【和訓栞】にされば花立ともいへり【新千載】にひえの山の念佛の立花と見えたり今立花と書に呼は誤たるべし）

活花

削り花

〇又削り花とて作り花をさす事有【古今集物名】めとにけづりばな云々（六卷にいへり）【榮華物語】（石陰御まへのなでしこを人のきりてもて參りたるを宮の御まへの御すゝりかめにさゝせ給へるを【大貳三位集】すりかめにさふの根をきりていれたりしにおひ出たりしまいらすとて一誰かみん世にすゑのえのもろ人のすゞりのかめにさすあやめをば返し門の君一住のえのすゞりのかめのあやめぐさ千代のためしにしてこそは見め【源氏】（梅卷）源氏より藤つぼの方へ紅葉を附りたる瓶かめにさゝせて

問自答の郭公(秀億)なんじやもんじやと云ものに二種あり此にいふは樟木なり又同國に太一餘粮ある處ありこれをもなんじやもんじやと云ふとなり

松揃の歌

○松【紫一本】斑女塚の條不忍池の端榊原式部大輔下やしきの內斑女が衣掛松と云しは近頃まで此所に有しなりと聞一とせ江戸にて踊はやりし折松揃の小歌に目黑不動の腰掛松三田に渡邊源五松さては斑女が衣かけ松道灌殿の頭巾松一本松や六本松白銀町に八町つゞく松原越などゝ謳しなり源五が松は保科筑前守三田のやしきに有し一とせ大火事にて燒しときく

正月の松かざり

○正月の松かざりむかしは久しく立置たり寛文二年寅正月六日町觸に松かざり明七日朝取可申事其後もなほやまざりしと見えて寛文十年戌正月又おなじ法度の觸ありて來年よりは相觸申間敷候間每年左樣相心得可申候と見えたり昔日の人情今より見れば雅なきやうなれど久習一旦にはうせがたきこと多し武家には久しく立おくもあれど大かたは門飾を取て其跡に松の木梢を折て挿おくこの故なり明曆元年乙未十二月廿二日正月の松かざり十五日前は此方より一左右次第取可申事と見ゆ上總姉がさきの俗正月門戸に榊椎などを立て松を用ひず又三日松をたき木とせず姉がさき明神雄神遠遊して歸らずまつはつらきと怨み給ひしより松を神の忌せ給ふとてなむ

松竹梅

○ことぶきいはふめでたき器物などに松竹梅をもやうとす漢土にはかゝる事大かた奇數を用ることなければ是は本邦の俗と見えたり朝鮮の役に彼地より取來れる書とて【日本考略】と云ものあり明人薛俊が撰なるを朝鮮にても刊行せしなり其內日本人の文詞略に四友亭の詩あり四友亭名萬古香淸風曾遞到遐方我來不見亭中主松竹靑々梅自黃此詩おのづから松竹梅をいへり

松葉の兵

○【類柑子】に童の時の遊戲を思ひ出られて松の葉して人を作り松の葉の弓同し鎗長刀それぞとみゆるをとりもたせて左右にわけ息を吹かけて爭はするに人間の動靜起臥おのづからにして勝負決然たり

見えたる桃木などはむかしより此やうの處に植たるにやされば日陰の桃木といふ諺などもあり

八重躑躅

○古へは草木などは殊に珍花もすくなかりしなるべし奈良の八重櫻の世にめづらかなりし類多かり【沙石集】に尾州に山田次郎といひし人所領内の山寺に八重つゝぢ有けるをほしく思ひてありしに彼僧大なるとがありてまどふべきこと有けるに藤兵衛尉といふ撿斷に仰付て此科料に七匹四丈の絹をや參らする八重つゝぢをや進ると下知しけるその僧七匹四丈をこそ參らせめ此つゝぢをもて心を慰め候へばと申けるを主の心を知る故それにては猶御不審殘るべし唯つゝぢをまいらせ給へといひければちからなくてほりて參らす撿斷の職は半分の得分也その處におろし枝一ツとるべしといふに絹を參らすべしとをしみけれ共おして取てけり共にやさしくこそ（此山田の某は承久の亂に打死せしとかや）と有【大和本艸】躑躅の條にむかしは品類少なかりしが近ごろあまた出來れりといへり八重躑躅は浣川つゝぢなるべし【花林抄】と云双子染井の花戸が書たる物五冊ありつゝぢの類を多く寫生したる中八重なるものあまた見えたり今めづらかならぬ物このたぐひ多かるべし正三道人が【因果物語】（六ノ）無住和尚の住し尾州長母寺には八重つゝぢありしを或人一もとぬすみたる物語りあり此ころもいまだめづらしかりしにや

ひよんの木

○蚊子樹この木に虫の巣あり【大和本艸】に俗に猿瓢といふとあり童これを採て穴をあけて吹ば笛のごとくひやう〳〵と鳴る此木をひよんと呼もこれ故なりひよんは瓢なり【續山井】夕貌に見とるゝや身もうかりひよん（宗房）これ芭蕉桃青か若き時の句なりうかりひよんとは今も云ふことゝなからひよんの字ふとしてはおもひよらず此句夕がほは瓢なれば其花を詠る身は瓠のことしとなり瓠は輕きものにてよく水に浮ゆゑにうかりひよんは浮瓠なり浮れものを瓠輕といふも同じ

なんじやもんじや

○ナンジヤモンジヤ【俳諧葛藤】下總から崎の岸に舟をよせなんじやもんじやの木を尋ねて何若葉自

太郎月二郎もよれる實引はせちぶるまひに事始(これは正月にいへり)【誹諧海】江戸の月次をいふ處二月八日事始師走八日事納といふ此日棹の先に笊(イカキ)をつけて出す京の卯月八日のごとし十二月十三日は【惣鹿子】にすゝ拂古札納む【日次紀事】には此日を事始と有煤はらひは事始とも事納ともいはゞいはなむされぱいづれにもよかるべし八日をいふは誤なり籠を出す事京師は四月江戸は二月なるも疑はしよりて按るに四月八日十二月八日ともに此日は浴佛の日にして十二月は臘八とて禪家に法事あり

花の塔の事始

籠を出す事は灌佛會によりてなり【鹽尻】云四月八日熱田社灌佛會をなす花の塔と稱す京師の俗四月八日つゝじ及び新花を竿の先に結付て九輪のごとくし家々に立て花の塔といふ熱田の花の塔剪綵花を多く造る昔は生花を以て塔なんど作りしよりの名とみえたりといへりこの九輪のごとく造るには籠などを用ひそれに花をさしゝなるべし、いつの程にか其かたばかりに籠のみ出すことゝなれりしがされば二月八日は誤なること知べしこれは二月十五日涅槃會あるによりてまかひたる事とみゆ又四月は花あれども十二月は花少き時なれば籠のみ出しゝ歟されど十二月八日の事は京師にはなかりしにや知らず【油加須】秘藏の花の枝をこそ折れ我一と卯月八日の手向して西河祐信が繪に四月八日竿に花を結付て出したる圖あり今誕生の佛像に左右に躑躅花を九輪のごとくに立るは花の塔の遺風なり

薺を行燈に吊す

○又此日なづなの穗を取て行燈に吊は燈火に虫の入らぬ爲とかや【物類相感志】薺花置燈檠上飛蛾不投と然れども是は三月三日にして月日異なり又【物理小識】(卷六)高齋籟品正月有窩蝶薺即地英菜花薺菜花莖作挑燈杖可辟虫蛾謂之護生草清明日々未出時取之薺有小大其莖有毛者[illegible]蓂皆以冬至生苗とも見えたれば四月八日に取るは誤なり

日蔭の桃木

○【枕双紙】ゑせものゝ家のうしろあらばたけなどいふものゝ土もうるはしうなほからぬにもゝの木わかだちていとしもとかちにさしいでかたつかたは靑くいまかた枝はこくつやゝかにすはうのやうに

蒲はたがらへたと足拍子踏し云々（かくあれば足拍子してこれをいふことのやうなれど春信がかける繪に童ども草履を脱てかゞみ居一人これをかぞふる體なるは今もする兒戯なるべし）さて件の童謡よいとながく／＼とあれども橋の下のといふことなし誤ありとみゆ（今童のいふはさうりけんじよけんじおてんまてんま橋の下の菖蒲はさいたかさかぬかまださきそろはぬめうが／＼ぐるまを手にとてみたればしどろくまどろくじうさぶろくよといへりし是によりておもへば一りけんおやう二けんじやうおてそまてんま橋の下の菖蒲は咲たか咲ぬかまだ咲揃はぬあめうしめくらが杖ついてとをるしどろにもどろそれそこへつんのけといへるなるべけれども其事辨へがたし

稗まき　殻板

○稗まき【東京夢華録】以小板上傳土旋種粟令苗置小茅屋花木作田舍家小人物皆村落之態謂之殻板今瓦の鉢に稗を生し小家を造り人形を置く全く是殻板なり又以菉豆小豆小麥於磁器内以水浸之生芽數寸以紅藍綵縷束之謂之種生とありこれは唯もてあそぶものにや又はこれを買て鉢などに植て見るものにやいづれにもこの芽生苗として作る爲のものにはあらず玩具なり

林檎に模様

○こゝにてせぬことなれど林檎に模様をつくる戯あり【汝南圃史】云蘇州志云好事者以枝頭向陽未熟時剪紙爲花鳥貼其上待紅熟乃去紙則花紋雅緻入繁飣可愛と見えたり

花の塔

○花の塔【江戸總鹿子】に（貞享四年）二月八日事始江府中にて飾つるなり（十二月八日餘事納と有）【惣鹿子新増大全】（寛延四年）江戸中町々の家毎に籠を竿にかけて高く屋上に建置いかなる故とも知がたし或書に九字の形を表して魔除なりといふ附會の説なるべし殊更今日を事始といふは猶心得がたし十二月八日を始として今日を納といはゞ可ならんか暦にも十二月に正月事始よしと記せし日多し然ればこの日を事納とせむ事勿論なるべきにや【日次紀事】に（十二月）十三日正月爲事之初始他之俗是謂事始日正月所用之物亦多買之とありて事納といふ事なし【誹身のうへ】四季部歌（上略）綱引わこは

易萎多難開完と有り【本草啓蒙】曰江州野洲郡川中の蓮池に千葉なる者あり俗に觀音蓮と呼他所に移して育しがたし花は常の花より小く莖の上に二三四五葉簇り開く皆千瓣にして內に房なし云々即【集解】に千葉者不結實者是なり

並頭蓮

○享和元年深川猿江の泉養寺の池に並頭蓮開て見物群集したり予も見たりしに紅花と覺ゆ【我衣】に寛保二年戌七月難波の瑞龍寺池中に一莖二花の蓮さく後に信州大水出つ深川猿江の蓮開きし翌夜大水あり異なることなりといへり諺に蓮は商と云は盂蘭盆の草市より云歟又は蓮葉ものゝ事よりか

○【尊卿贅筆】予東野有小池中植藕每歲將作花往々爲雨所敗偶閱【六硯齋筆記】曰蓮初透水爲驟雨所淋轍中夭因出新意荷葉剪線縫之作兜鍪狀名蓮笠雨則編覆之并戲詠曰欲展凌波步先爲行雨裝擘綫深覆額擁髻暗藏香莫倚傾球盞應同裏玉囊白憐嬌小甚脉々待恩光此事甚韻而製亦佳當效而行之以當護花鈴耳

橋の下の菖蒲

○【中山集】に橋の下のさうふは勢田の大蛇かな此童謠は今も童が草履を脫でさうりけんちやうといふことすなり或者に此童謠を云るは一りけんぢやう二けんぢやう三りけんぢやう四けんぢやうしこのゑもはもをとり十方鴨豆なかゑたよ黑虫は源太よあめうしはこの上にはめくらが杖ついてとをる所そはそこれへつんのけ(其譯もあれとおほつかなし)許六が【鎌倉賦】に金洗澤星月夜の井橋の下の小歌はあめ牛めくらが威勢をそしり小栗の說經は横山が强盜をかたるとあるも鎌倉に威ある盲人ありしとみゆ橋の下の小歌といへる橋の下さうふの童謠なりこの言古きことゝ見えて【猿樂狂言】つとう山伏などに山伏が祈りの詞にはしのしたの菖蒲はたがうへたしやうぶぞといへりこはもとより山伏の唱ふべきことにはあらず唯童謠をとりて祈の詞めかしたるなりされば同く祈り詞にいろはにほへとゝいへることもあり口語に熟したることをいふにて興あるなり今小兒が僧の經よむまねしてだぶ〳〵といふもおなじほどのことなり【伽羅女草子】に幇間が物がたりする處七年已前に越後町扇風方にて橋の下の菖

わけて菊そろへの席をみるに一本々々枝たをやかにもせず能一ツ切生にしたるは美女の獄門みる心地し侍るとあれば近時の朝貌會などのごとし【東京夢華錄】九月重陽都下賞菊有數種云々酒家皆以菊花縛成洞戸云々とありこれは大菊にて作るなるべし江戸巣鴨の花戸年毎に菊を作る花壇七八間ばかりにして家ごとに作る中菊にてありしが文化の初大作りとて一本の菊にて鳥獸山水種々の物を作り後には百姓商人までも作りて文化十年の頃は處々に是を學びて作れり遊觀の人群集したりしが其後漸く衰へて止たり（今はもとの花壇作りのみなり彼種々の作り物は費かゝる程利分なしとなり）

作り菊

梅やしき

○梅やしき【草廬雜談】（下）【梅譜】云去都城二十里有臥梅偃蹇十餘丈相傳唐物也謂之梅龍好事者載酒遊之いまの梅やしきとすこしもちがはずたま／＼異方とひとしきはあやしきことなり【稗史彙編】故蜀別苑在成都西南十五六里梅至多有兩大樹夭矯若龍相傳謂之梅龍陸放翁在蜀時歲嘗訪之賦詩云兩龍臥穩不飛去　爪脫落生莓苔蓋狀其偃蹇如此

萩寺

○萩花【携海一得】（明和八年撰なり）近ごろ押上村の龍源寺龍泉寺町の正燈寺などに萩を多く種花さかりには士女群遊すといへりこれによりて龍源寺はその名をいはず萩寺と呼で今に至れり是も見物は多けれども花を作れる費用の助けにもならねば衰へて人にみすることを止しが此頃はまた人を入て見せしむ

○春花落瓣秋花落朶蓋氣候使然也と【鶚鄜偶筆】などにいへれどもさもあらず春も落朶の花はつばきなとあり秋も落花するものははぎの花などあり

千葉蓮

○千葉蓮【怡軒小錄】江州益須郡田中村の北豪田中氏園中に池ありめづらしき蓮をうゑ傳ふ大内蓮にてわたり四五寸もあり一莖の上に九の花房あり小きものは七ッ或は三ッありて花落ることなくして來年まで枯殘ると云り【群芳譜】に千葉蓮と標して分注に華山有池産千葉蓮花服之羽化今人家亦有之然頭

莫斯之費などあるによる事にて重九を長久の義にとりこれらのわざもあるべけれど【散木集】のごとく菊花を用ひばよかるべきを綿にうつむは迂遠なるべしこれによりてきせ綿はもと香をもてはやせしより起れりとぞ思はるゝ後世染わたを用るは唯華飾のみなり又年の氣候によりて菊の花いまださかざる時などに綿を置て花にかへ此日の節物をとゝのふは後世の義なり秋菊落英の説【菊譜後序】又あまた論じて以落訓始をよしとす南陽菊潭の事は古人の論なけれども菊落水とあるこの落字いかにぞや【楚辭】は疑はしけれども猶據あり此故事は何をもて證とせむ妄誕の事の永世に傳へ行はるゝ是のみにあらず

大菊

○白石が洞巖に答る書大菊はやり候由當所亦同事に候去々年歟加賀の小瀬復庵の二十韻古風を兩度和し候詩候べく候北地も同風と見え候水戸安積よりも此程菊は作り覺え候など自讃めされ候て御申越候などありかゝれば當時國中ゆすりて此菊を翫びしなり

金目貫

○金目貫(コガネ)といふ菊を今省きてきんめといふ【續山井】こがねきくは霜の釦の目貫かな(倫加)【後撰夷曲集】淨華院にて(八宮御方)葉までよく咲みだれたる作りやう金目貫の菊一文字とあれば前の發句も金目貫の字をわけて作れる句とみゆこがねとばかりは黄菊をすべていふやうなり

菊合

○享保のころ菊合の會はやりたり【雅筵醉狂集】に近世この花はやりて新花を作り出し菊合の會をしける其會おほくは丸山にて催すなり我やどの東の籬菊とりてはるかにみやる露の丸山【艶道通鑑】に八重九重のきく合もよりにまかせ好類につれて東山北野に集ひて輪をきそひ花をあらそふ鼻きて席に尻のつかぬは今日の花車の魁け人と見え頭をかたふけて緣にたはこのむは跡扁の一の筆と推せらるかの舞姫が管咲に針咲つけて叢まで忍び通ひ路あけほのや(これら菊の名なり)云々さくら牡丹つばき菊色々の手入して枝をため根をゆがめて狂ひ咲をたのしむは古人のかたわものをとのそしりに落入べし

のきせ綿けさみればまだき盛の花咲にけり時過てたれかは今もきせわたのそれかと匂ふ露のしらぎく（これは殘菊といふ題の歌なり【花鳥餘情】に本朝には猶忌月をさゝる事になれり九月九日の宴も延喜の御忌月にあたるによりて十月に是を行はれて殘菊宴と名付られたり後江州公其文を書たり文粹にみゆ）【世諺問答】に綿を着する事はいつの頃よりとも見え侍らずたゞ菊をもてあそぶの餘りに寒霜を防がむとの志と覺え侍る【異本四季物語】菊綿つくる事はくら司ゆうそくしれる事なれどさやうの事今はしれる人もなければばかた計有べし【御湯殿記】云九日夜に入て御殿の南階に菊花が多く植そのきくに赤白黄の染綿を丸菊花に作りて枝々に付るなり今日是を菊にとり替ふるゝともいへり【日次紀事】曰菊綿俗言今日唱門師齎大黑參禁裏稱菊花於常御殿之前庭明朝官女等取綿使當階下菊花是謂菊綿又稱衣綿也俗言菊綿拭小兒衣領之內無疾病云故節後領賜之、綿きせ給ふ時うちはらふにも千世はへぬべしの歌を唱へ給ふといへり）【隣女晤言】に深實問答に通茂公の歌を出して咲きくはまたむら〳〵の籬をも花につくろふけふのきせ綿とあそばせるは花とみせむとてのことにやといへりこれは【新撰六帖】に信實（頃ねなるきくのきせ綿云々）とあるより花の咲さる程綿を花とみせむとてのことのやうに思ひ給ふなるべし通茂公は定基卿の猶父にて有職の人におはしませば猶古書などに見したゝめ給ふことあるべし今按るに信實の歌も花と見せむとて綿を着るにあらず香を移す爲なれば半開の花にもきするたるべし通茂公の歌もかしかなり何の不審かあらむ【世諺問答】に霜をさくる爲ならむとあるはいかゞもし霜をよけんとならば花のうへのみにてはかなふまじ又古人老をわかゆる撫ものとしてあつかひしも戯れごとなりこれ【風俗通】に南陽酈縣に有甘谷水甘美云其山上有大菊落水從山下流得其滋液谷中有三十餘家不復穿井飮此水上壽百二三十其中年亦七八十而名長壽を得といへり又魏文帝與鍾繇書に九月九日九爲陽數而日月並應俗宜其名以爲宜於長久故以燕享高會云々屈平悲冉々之將老思飡秋菊之落英輔體延年

植木鉢

○文政に至りては石菖(びろうど正宗何くれ種々多し)萬年青(オモト)(葉背紫色なるをむらさきおもとゝ云)松葉らん又すべて小き盆植に高價なるものあり殊に近ごろは植木鉢美を盡し尾張焼もさま〲手をこめたるあり(松葉らんにも種々形狀の變りたるあり高價なるは一鉢百金に至れり)

菊

○菊の歌【萬葉集】には一首も見えずそれより後桓武天皇御製を【類聚國史】(七十五巻)に載られて云延暦十六年十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰已乃已呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈知利曾之奴倍岐阿多良蘇乃香乎賜五位已上衣被是其始なるべし菊のきせ綿も香をめづるより起れり【源氏】(幻の巻)九月になりて九日わたおほひたるきくを御覽じて【後撰集】に九月八日伊勢が家の菊にわたをきせに遣したりければ又のあしたとりてかへすとて伊勢數しらぬ君がよはひをのはひつゝ名たゝるやとの露とならなむ返し藤原雅正露だにも名たゝる宿の菊ならば花のあるじや幾よなるらむ(伊勢の家集にもみえたり)【新勅撰集】に九月九日從一位倫子菊のわたをたまひて老のこひ捨よと侍ければ紫式部きくの露わかゆはかりに袖ふれて花のあるじにちよはゆづらん(紫式部日記九日きくのわたを兵衛のおもとのもてきてこれ殿のうへのとりわきていとようおいのこひすて給へとの給はせつるとあれば菊の露云々)これは寛弘五年の事なり【枕雙紙】に九月九日のあかつきより雨すこしふりて菊の露もこちたくそぼちおほひたる綿などもいたくぬれうつしの香ももてはやされたるつとめてはやみたれど猶くもりてやゝもすればふりおちぬべく云々【忠見集】九月九日きくに綿をかつけたる所萬代も人のわかゆる菊のうへにまゆをひろげて露をまつかな【散木集】九月九日菊してかほなでよと人の申ければちるごとくしほめるかほは花なればなづとも菊のしるしあらめや(按るに此歌菊をかほり花とよめり【藻鹽草】に藏玉を引て杜若を只吉花とも云といへり、とはうるはしきをいふにや何にもいふなるべし)【堀川後度百首】忠房いくへともいざしらきくをえこそみね綿をきながらたてる朝霜【新撰六帖】信實垣根なる菊

菊のきせ綿

白つばき

【七草子】に大切なる物白茶ふどう酒早咲の椿云々【大倭本草】に日本紀天武天皇三年三月吉野人宇閉直弓貢白海石榴むかしは本邦に紅の草花のみありて白つばきも稀なり寛永の初より漸つばきの數多く出來しにや烏丸光廣卿の【百椿の圖序】に此ころ世にもてはやし品多くいできたる事を書りと有り白つばき今は多くあれ共漢土にも稀なりしものと見えて【汝南圃史】に曾南豐以白茶寄與仲涂詩云々瓊花散漫情終蕩玉蘂簫條跡更塵注云初唯此花與揚州后土廟瓊花天下一枝近年瓊花可接遂散漫而此花亦獨出也今人家園圃所植多單葉深紅花中有黃心樹高丈餘結子可復出即寶珠茶已白雖得所云白色者未見也といへり貴重知べしすべて物は人の好むによりて種々珍らしき品出來るものなり寛政の末のころまんりやう山たちばな一時にもてはやしたるに實に赤きものなるに白も黃もでき葉は縞子鳥頭斑入などさま〴〵高價にてありき其頃何によらず草木いさ樣なるものはやり其後文化中江戸にて楽手花はやりて

草木はやり物

京難波に及べり（安永七八年さくら草形のめづらしきがはやり檀家の贈りものとす數百種に及ぶこれは下谷和泉橋通りに谷七左衛門といふ大番與力あり其人の老母花を植作る事を好み櫻草を多く植作れり其花を入たるものをみしに小介を集め入る箱のやうにこまかにしきりたる箱を多く重て内外とも黑く漆をぬり其内にかんてんをときて流し入たる格子の間ごとに櫻草の花一ツ、かんてんにさし各名を書たる札あり是を見物に行ものもありつてをもとめて其箱をかりて見るものありもしださまで行はれずこは享和のころなり其後朝がほを多く作りさま〴〵の花出來しかばこの度は六枚折の小屛風を寶

朝がほ

貴にて作り細き青竹處々節ある處にて竹の花生のやうに口を切て節毎に水を貯へ朝がほの蔓の先葉一寸ちぎりたると花一りんとを花生の口ことに挿みこれを件の屛風にかけならべて屛風はたゝまるゝやうに綠を厚く作るなり是も人に貸して見せたりこの屛風はあまた有き文化五六年の事なり一とせ谷氏大坂に在番したる時は彼地へ多く牽牛子を送りたり

集】やせたうてつばなも食はぬ花盛と付句あり「又草結は同集(十二)妹門去過不得而草結風吹解勿又將顧 こは逢ふまでのしるしに結び置なりしをりのことゝし今も山野を過るにすることとなり」
○松崎堯臣が【窓のすさみ】篠山侯(松平紀伊守)京の司たりし時仙洞のことにめでさせ給ふ桐壺といふ牡丹を年々切て賜しに或時守護の人來て申さるゝは今年は桐壺を根こして下し賜はるべきよし御内意なり近日傳奏の公卿來て院宣をつたへらるべし先内意を申よし有ければ侯の云いともかしこきみことのりに候さりながらあらはれて仰下されて申かたし幸に各の内意の間申すべし桐壺は只一本御園に咲ゆゑに天下の名物なりそれを分ち賜りては種類あつて名を減し侍り且某かつて牡丹を好み侍らず苑に少々植おきたるも皆なみ〳〵の花にて名花は持侍らず候かたく此由申入あれかし下し賜らさるやうに深く賴入よし有しかば官使も感じて歸られしとぞ

山茶花くらべ

○元和寛永のころ山茶の花を翫ぶこと大にはやり花をくらべて奇を爭へり【安布良加須】に秘藏の花の抜をこそをれくらべんとあらそふ友のたま椿また【發句帳】に年號をかうけん元和つばきかな意林庵か【清水物語】(寛永十五年)此ころつばきの花のはやるやうに付ても聞も及ばぬ見事なる花あまたこなたより出たり人好むもの有てはやり候はばおもしろきものもありなんかし【犨草】つばき畠「見るにさへ其名はいひも盡されず【卜養狂歌集】もる人椿の花を垣に作りいろ〳〵あつめうゑ其中の椿の名を題にして歌よめと有ければ十種の名を入て「せんよまんと待よしもくになりひらかすげなさくらんにくの開山【色音論】に當時の派行ものをいふ處種々はやる其中に當代人のすかれしは鶉を集めかけならべつばきをあまたうゑならべとりのなく聲はなの色こゑと色との爭ひに心をよせぬ人もなし(此草子を色音論といふことは椿と鶉によりてなり)【花壇地錦抄】は元祿七年江戸染井の花戸か著はせる書なり椿の種類も多く擧て二百餘種あれどこの狂歌によめる名は見えず、古今名も多くかはれるにや

松葉きり に引かけて切たるを負とするを松葉きりといふ此等のわざは異なれども闘草の類なり又松葉の兵あり後に出

○【萬葉集】（十一）振別之髪乎短彌青草髪爾多久濫妹乎師侍於母布【略解】に十歳計にも成て漸髪を長からしむる頃にても猶ふりわけかみといふべしさてわか草の髪のごときを其髪にたぐりそへつかぬるなり

かつら草 ゐなかの女兒のかつら草と名つけてなよゝかに細く長き草の叢に生るを採てさるわざするなり云々といへり

ひな草 今女兒のもてあそぶはひなくさとてあるを人のかしらのやうに括りて其末を髪のやうに結ぶ事はすれど已が髪にそへてかつらとすることはなし【萬葉】の歌もわか草をもてあそびて髪たがぬる學びするはおのが髪はいまだ短かくてつかかねぬる故ならんとの意なるべし今ひな草といふは龍常草なりタツノヒゲ又ノスゝキともいふ路傍に多く生ぞ葉の長さ四五寸一根數百葉叢生す他の草中に雜り生するは葉長くして尺許に至る鷺觀草をカモジ草といへばもと是を用ひしなるべし【伊呂芝居】今の世はさかしく友達としか遊びにもかつら草つみ揃へ當世の島田はかうゆうものじや姿風はそうしたものこちや茶や風もいやらしい云々【六玉川】（二編）雛かたに最う手のきれる枯野原まだ小兒商陸また若蕗の葉を取莖を心とし葉を衣として幾枚も重ね著すれば莖の出たる處人の頭のごとし細き竹串を腰のあたりにさしてとしむれば葉ほぐれず雛人形となるその竹串を長くすれば大刀帶る形に似たり又欵冬

欵冬皮のかもじ などの葉もよし欵冬莖の皮をかもじに擧ぶことひな草の如し【類柑子】麻ねはならぬかお袋の側（其角）かもじぞと揃へあげたる蕗の皮（專吟）と是なり

茅花をくへば肥ると云ふこと ○茅花をゐなかの童部はつみて食ふ古へは是をくへば肥とて大人もくひたり【萬葉】（八）紀の女郎が家持と贈答にわけがためわかてもすまに春ののにぬけるつばなそめして肥ませ「我君にわけはこふらし賜ひたるつばなをくへといやゝせにやす【本草】にも益小兒といへり（餘は兒戲條に出たり）【五元

に蘆もてかへる難波つのなみみだれ藻はすまひ草にぞにたりける（源頼義朝臣）【守武千句】にちからをいだすほしあひのかげすまふをば草の露より猶とりてまづ一ばんに秋風ぞふくこれら菫をいふなるべし又【續山井相】撲草も野みのすくねのたぐひかな（不老子）すまひ草ほりとる手もやしば返し（友靜）吹風に芝居かへしやすまひ草（直昌）【雅筵醉狂集】すまひ草野みとむかしに聞名をもおぢてわらはや庭の内とり（注に菫を俗にすまひ草と云）【物類稱呼】に菫は畿内及び近江加賀能登又東海道筋すべてすまふ取草と云ふ江戸にてすみれといふ西國にてとのゝ馬と云莖のかたはらに鈎の形あり兩花交へひきて小兒の戯とす又東武にてすまふとり草と云別種あり江戸の鄙(ヰナカ)にてははぐさと呼草の穂に出たるをいふ尾州にてやつまたと云是なり貞砂が足を空なるすまふ取草といひし附句もむかし語となりぬといへり【本草啓蒙】スミレはカキヒキグサ（仙臺アゴカキバナ（越後）カギバナ（伊豫さぬき）【本草】溫類なる紫花地丁なり花は春早く開く紫も白もあり葉も處によりて形異る長きも圓きも有菫菜(ホスミレ)の類なりといへり江戸にて相撲とり草と呼ものは【詩經名物辨解】に荼（小雅鹿鳴章）朱詩荼草名葉如釵股葉如竹蔓生」鄕名ヒシハ云々此物野外閒(マヽ)ありヲヒジハメヒジハの二種ありといへり此說誤れり朱傳は陸璣が【草水疏】の文に隨ふこれは地しばりといふものなりその根節ありて葉も竹に似て蔓延するものなりさて其ヒシハといふもの雄雌あり叢生するものにて苅れ共〳〵生する故肥後にて小さうころしといふ

馬唐穂相撲

漢名は馬唐なりその穂四ツ五ツ又(トタ)になるをつみとりて倒(サカシマ)に席上に置二ツよせて席を敲けば自(オノヅカ)ら跳りてすまふ取さまあり組合せて席をうてば一ツは倒るゝなりヒジハの名義おほつかなけれど旱(ヒ)芝ふや（旱地に生て枯れさるなり）又【和漢三才圖會】に角觝草秋起莖頂作穂云々小兒取莖縮穂如綴而用二箇一揷

ゐから相撲

其檜(エリ)兩人持莖相引而切方爲輸以戯名力草もとはかやうにしたるなり又稻　或は燈草(タヽミノヰ)など束ね括り三寸ばかりに截(キリ)て立れば下廣がりて立なり是も前の如く二ツよせて相撲とらすとおなじ又松の葉の股を五

らべ　白つばき　草木のはやりもの　菊　きせ綿　菊合　コガネ日貫　秋寺　並頭蓮　橋下の菖蒲　稗(ヒエ)まき　花の塔事始　瘤を灼棗に懸　桃木　八重つゝじ　ひよんの木　なんじやもんじや
正月松かざり　松葉の兵　藤原吉野　桃栗三年
花を瓶にさす　活花(イケバナ)　廻り花　投入　茶籠　薄ばた　ちけ筒　竹筒　ウス板　立花　後世生花
師

草合

宗懍【荊楚歳時記】曰競採百藥謂百草以蠲除毒氣故世有鬪草之戯といへり【和名抄】雜藝部また此記を引て五月五日有鬪百草之戯（鬪草此間云久佐阿波世）と出たり【七修類稿】に風俗鬪百草之戯獨盛於呉故荊楚記有端午四民鬪百草之言未知其始也昨讀劉禹錫詩曰若共呉王鬪百草不如應是欠西施則知起于呉王與西施也おもふに禹錫が詩は唯その國の風俗をもて作れるまでにて必しも呉王西施が故事あるにはあらじ【世諺問答】に五月五日をば薬日といひて一切の藥をば此日取たり云々鬪草の戯も藥獵より起るにやとあるは【荊楚歳時記】の意なり【帝京景物略】水盡頭條雜花水藻山僧園叟不能名之草至不可族客乃鬪以花采々百歩耳互出半不同者云々かやうに草合多き處にはまたおのづからこの戯あり【天祿識餘】唐人孩兒詩鬪草當春徑爭球出晩田兒童の草花するさま【やすらひ花の繪巻】に見えたり【醒睡笑】兒の遊びに草合あり一方より蘩蔞とて出さるゝ侍從わきからせうしなる顔にていや是ははこ草となほしたり兒のは聞にくからず侍從どのゝはめづらし過たとありかく一種ツゝ名をいひて出すことゝ見ゆ【琵琶記】牛府の仕女院子等が園中に遊ぶ條老旦云鬪草到好院子云不好香徑裡擘殘鄉眼離闌畔折損花容又無巧藝動王公枉費工夫何用鬪田嬌鶯燕燕打鬧浪蝶狂蜂云々

すまひ草

○又すまふ取草にて童ども勝負を爭ふ戯あり【金葉集】（連歌）にすまひ草のおほかりけるをひきすてさせけるをみて（よみ人不知）ひくにはよわきすまひ草哉とる手にははかなくうつる花なれと【菟玖波集】

類なり【本草啓蒙】杜父魚京にていしもち彦根にてどぼ仙臺にてかじか勢州にてたんぎぼう【物類稱呼】に諸方の方名を多く載たれどもたんぎぼうは他物を云り）などあり江戸にて土鯆（クホハゼ）魚といふ物なり小野蘭山晩年の說にこの石もちといふ魚は尾圓し杜父魚は【本草】に其尾岐とあるにかなはず【寧波府志】に出たる泥魚これなりといへり今按るに處によりて異同あり其名も杜父魚土鯆みな一名の轉じたると聞ゆこの名もまた然なりトウマン（江州）チンコ（石部）トチンコ（同）ドボ（彦根）ドウボウ（備前）トンホ（筑前）トホウズ（作州）など一名の轉じたるなりされはダボハゼダンギボウもおなじ名と聞ゆカシイ（駿州）カコブツ（越前）ドングウ（筑後）トンコツ（勢州龜山）などいふも又おなじ但しカクブツは（仙だい）カハラコゼ（伏見）ゴツボ（防州）といふ名を略しそれに物といふことをそへしにもあるべしダンギホウもタボトボといふをやがて談義坊主としたるは諢名なり【啓蒙】に此名を勢州方言他國の名にいひたるは今は京師には石もちとのみいひてたんき坊ぎ名はいはさるにや按に京にてだんぎ坊と云は凡僧經論もみずに咄すを水に放すと云秀句にて談義坊と云ふどぞ

○【七部集】拙候かくふつや腹をならへて降霰杜夫魚は河豚の大さにて水上にぶ浮越の川にのみある魚也

捕魚打鳥日の歌

○【雜字通考】捕魚打鳥吉日歌、雨水以還收執危、日々網罟有贏餘、戊庚二辰魚會聚、已丁兩巳宜西潴、已亥壬子禽斂翼、戊子庚辛鴻羅垂、日逢轆殺船載滿、九空荒蕪徒渓吁」また開池塘養魚吉日歌、春東夏馬良、秋雞冬鼠藏、有入會得此、獺耗不來塘、

水瓶に魚を入れ置くこと

○水瓶の内に魚を入置は水脚（ミヅノオリ）出來ずといへり【物類相感志】に水缸內養魚三兩個則活不生脚と見えたり

草木　草合　すまひ草　馬唐穗　ゐがら　松葉　かづら草　欵冬皮　草葉の雛　茅花（ツバナ）　山茶花（ツバキ）く

き金魚銀魚を賣ものあり生舟（イケス）七八十も並へて溜水清く云々中にも尺にあまりて鱗のてりたるを金子五兩七兩に買求めてゆく田夫なる男ちいさき手玉のすくひ網に小桶を持こへ來るを何ぞとみれば柝ふりむし金魚の餌ばみに一日仕事取あつめてやう／＼錢二十五文に賣【五元集】藻の花や金魚にかゝるいよすだれ不角が撰にたよろけれど覗きの地ごくまのわたり硝子の中金魚肺肝今金魚や處々にあれども本所にはわけて多し冬月は池沼に養ひ四月の頃よりたゝき土の池舟にうつして子を產した松藻の長きを少しつゝ池舟の內處々置猥を小石などにてとめおく卵をうみつくれば其藻を他の器にうつし一日あたりに出しあたゝむ然らされば魚ども卵を食ふ魚苗はその毛の如し雛卵をゆで黄みをときて與ふやゝ育ちたるにはみじん子とてぼうふりの子類の如細なる虫溝中にあるを來て飼その後常の紅虫を與ふ魚は諸品ともに始はみな黑しやう／＼色變りて黄になり赤くなる金色は黑き時よりあり

鬪魚

○鬪魚漢土に鬪魚の戯あり【五雜俎】（九）昔閩の苗中には好みて魚を鬪しむ其色斑爛にしてよく鬪ふ謂繞綵日尾鬣齧み斷にどもやます俗に鏡片魚と名く盆中に入るに他の諸魚これに觸まれざるはなし故にみな人これを惡む而るに蕭人は珍重して戯とすといへりと云もの是なり白は元より形長扁なり處々青黑色にて腹に赤縁の間道あり水上に浮きてかたみに尾を迫て鬪ふ【大倭本草】にもみえたれともこのことをいはず

辨慶がに

○又小兒小蟹の色赤きを辨慶がにと呼で弄ぶ【閩小紀】に虎蟳殷紅斑駁北人異之俗呼爲關公蟹

談義坊

○たんぎぼう【安布良加須】水の中にも智者は有けりよの魚に教化をするや談義坊【洛陽集】談義房氷の天井張られけり（春澄）【人倫訓蒙圖彙】に談義坊賣あり注云こまかなるざこを樋に入になひあるきたんぎぼうと云なり是を都の幼少なる子供もとめ水鉢又は泉水にはなちなぐさみとするなり【大

杜父魚

倭本草】杜父魚の條に京師の方言にたんぎ坊主といふ魚あり杜父魚に似て其形背高く是亦杜父母魚の

魚有鯉鯽鰍鱉數種鰍鱉尤難得獨金鯽耐久鯉たちは金鯉なり【花鏡】にみゆ黄赤色なるひごひには非ず鱉は群芳譜に鯊に作れり金鯊はらんちう又丸子など呼ものなり【花鏡】に魚三尾五尾脊無鱗而有金管銀管者爲貴と是なり【帝京景略物】に管者鼈下而尾上周其身者也雜者不及鼈周其尾者也おなじものなから聊か異なり又【廣東新語】に錦鱗魚大可二指長寸許身有横理十二道鱗錯錦其五色尾長於身如帶金彩縷々以盤盂畜之云々是今りうきんと呼ものなるべし凡金魚は尾の形に好惡あり【同書】云以鼂小三尾五尾者爲貴謂之蝦尾咬子又名趺子當趺子時以大蝦蓋之則多蝦尾々又以撒闌象木芙蓉葉者爲貴謂之芙蓉尾（【花鏡】にも此事をいへり）さることも有なるや金魚の子いでくる時もし鯽をその内に置は金魚鯽尾に類すといへり養ひかた【群芳譜花鏡】などに見えたり【傳家寶】に近來揚城人家喜養金魚遂以文魚蚩魚等名固屬雅事乃日取猛虫幾千萬以供數魚之食云々予得友人妙方只用猪血或鷄鴨血和麪蒸熟晒乾研碎用時浸爛撒喂魚便肥壯屢會試驗以此代虫則當活千萬生命而魚仍可玩（猛虫は【花鏡】に隨取河渠穢水内所生小紅蟲飼といへるものにて赤ぼうふりなり

ぼうふり

漢土の金魚屋

○漢土の金魚やは【帝京景物略】金魚池（金代の魚藻池の舊跡なり）池泓然也居人界而塘之柳垂覆之歳種金魚以爲業云々歳穀雨後魚則市大者歸池也若沼小者歸盆若琉璃瓶（【同書】春場條琉璃瓶盛朱魚轉側其影小大俄忽とあり）可得且夕游活耳歳盛夏游人携罍飲此投餅餌嘍唧有聲其大者銜餌竟去按金魚古來聞鼠璞曰惟杭六和寺池有之故杜工部詩沿橋待金魚竟日爲遲留蘇子瞻曰我識南屏金鯽魚今亦貴鯽不貴鯉

びいどろの壺

びいとろの壺に金魚をいるゝ事もこれを倣へるなりまた金鯉に菓子など投て與する事いつくもおなし

江戸の金魚屋

○江戸にはそのかみ金魚屋もすくなかりしなるべし【江戸鹿子】に上野池の端しんちうやとあるのみなり西鶴が【置土産】（江戸下谷の條）黒門より池の端をあゆむにしんちうや市右衛門とてかくれもな

て賣はやらかす東作偶釣魚不獲戯賦示之、汝家六物頗精良、術學實何學更香、獨奈釣兒猶不食、風寒水冷到斜陽、　また一友人むすめの髪の毛なりとていと長きを十筋ばかり　たなご釣に用よとてくれしかば「たわわねの撫に—かひやありこちみのみるより長き髪のふさやか」末ながくたけにあまれる黒かみは結ばむ人の契もぞしる」又狂歌「大象もつながむほどの黒かみをたなご釣にあたら物なき

續き竿

○昔の續さをはまくり竿などとてすげは厚くふとやかにつよきものなりし今はまくり竿などの名だにしらぬもの多しまくりとは水の瀬頭なるべし河邊にまくりと呼ところ處々に有り扨つぎ竿はいくつ續く數有ても入子にして二本に收まるがもとの造りやうなり彼わらびや利右衛門竿をやわらかにほそく作るに二本には收りがたく始めて三本をさまりに製り出せり

岡釣

○【石元集】岡釣のうしろ姿や秋の暮【艶道通鑑】筏に乗て川狩をられしかり鯉鱠に飽て西瓜すきする僻者といへれど風波の難なく安泰なるは岡釣なり鯽釣は東西葛西その場處多し三月より八月迄なり

堀釣

○また堀釣といふは池中に諸魚を放ち置て價を定めて釣人につらしむ釣に中らぬ鯉また鯽魚などは尾鰭の糸にさはるを見て急に引てひきかくるをひきかけといふ釣にはあらず興もなきわざなれども此堀本所深川處々にありて好みてゆくものあり【帝京景物略】西堤條畜嘉靖十六年上駐陵還幸湖御龍舟先期水衡于下流閘水々平堤內潴蓄巨魚水中處々識之則奏樂網紫鱗銀刀潑潮水面上顏喜いづくにも猶稀なき事あり

金魚

○有魚金は【本草綱目】時珍曰前古罕知惟博物志云出功婆塞江腦中有金盞亦此類【述異記】載晉桓沖遊廬山見湖中有赤鱗魚即此也自宋始有畜者今則處々人家養玩矣こゝに渡りきぬる事は【大倭本草】に昔は日本にこれなし元和年中異域より來る今世に飼もの多しといへり金魚に鯉たち鯽たちあり【綱目】に金

ひて出けるにいよ〳〵釣したるやと問はれし時彌太夫申は御禁制とは存ながら若年より好けることにて先後止がたく公務の間は是に打かゝり樂み暮候と申此禁制の世に針などはいづくより求め出せしと問はれければ某は若年より此事に熟し人の制したるは心に叶はず初よりみづから作て世にも愛久保流と申て手本にいたすことに候と答へけり一人申やう某は釣は好み申さず人の中は虚言にと候としひてあらがひければ然らば證據を見すべしとて人の許へ手づから釣得たる魚を送るとある書狀を見せらるるを冷笑ていかにも某が筆跡にて候各の御方より送り物ある時唯にてはめづらしからぬ故あるひは釣得たる魚と云又到來と云野菜は手作など申ことよの常に候とさはやかに申ければ重て尋ぬべしとて先あがりやに入置れけるさある中に御代かはり其禁制止しかば免されてけり彌太夫はいよ〳〵釣を好みしが一人は一生釣を手にふれず二人共柔弱ならざることにこそ

はやつり

○冬ははや釣あり（江戸にてははやといふはまるたといふ魚の子なり）王子川赤はね河深川干鰯場などにて釣（神田川にては八月ごろなり）又鱮魚(タナゴ)釣あり是は多くつれて興あるものなり寒中材木の河に積たる處本所深川に多し同處にてはや鯽なども釣鱮魚の釣具いかにも輕く少きがよしおのれ一とせ戯に髮毛を糸に代て用ひしかば其時はまねする者もすくなかりしが翌年の冬より大かたみな是を用ひたり（何者か巧みてこれにはしもりとて浮に責具を付て水に沈むやうにしたりしが今は用ゐず）釣鱮魚愚作あり、巨材無數繫河濱、僅有間空卽下綸、緣木求魚何足怪、松杉堆裏引鮮鱗、また、袖中釣具耐相親、鯨骨爲竿人髮綸、餌投米虫何如麪、小釣不敢羨巨鱗、鯨鯢をもて竿に作り米の中の虫を餌とす魚好みて食ふはやなども是にて釣なり鯽を釣も浮を水にしもらせて釣ことは昔しはなかりし是に用る竿はそのかみの鯽竿とは異なり利右衛門と云者其竿の作りやうに妙を得たり今はかしらおろして名を其儘に竿利といひて釣具作るもをかしこれが作かさまにならひて續竿の風一變したり釣道具屋東作是を好み

たなごつり

髮毛を糸に代て用

のかはりたるもあるにや事繁ければ此に略す近ごろ江戸前にて珍らしかりしは文化三年夏より秋かけて鯖のつれたること又同十一年六月より七月中雨ふらず水かれて深川清澄町の前（俗に仙だいがしと云）より高輪前まで小鯵多くつれたりいづれも中ばりにて手釣なり餌はいつれもとも餌を用ひぬ

川釣

○又川釣は利根川中川なとに出て鯉鮒なださいまるたなどを釣中川にては黒鯛せいご秋ははぜをも釣中川は釣のそだち利根より遅きにやすべて少し五月より八九月までなり今田船の如き小舟を多く設

川船釣の始

て釣人に借す處多し其始は鴻臺の麓を根本といふこゝに百姓權次といふ者常にかの小舟に乗りて網を打ふせ魚を取て業とす又其小舟を釣人に借す此者語りけるは市川の宿に市立日ありその市に江戸より行ものに衣類の古手を商ふ佐右衛門と云しもの魚釣ことを好けるが市川の宿に泊り市の初るまで此河端に繋ける船を借て試みにせしかば思の外魚を得て後はその市に行度ことに釣するに舟に物を運ぶにさし合て釣を止ることとの本意なさに此わたりに賃を取て船かさん者やあると問ければさる處もなけれどももし彼こにて賴みなば借すこともあらんとて我らが家を敎へこしたりひたすらたのみし故舟を借やとらせもしつ其これは魚よく釣れてもて歸る途にて人も問尋ね聞傳へてそれより釣人多く來りぬ

釣宿の始

かくて處々河はたに小舟かす家は多く出來たり釣宿といふもの此權次ぞ始なりける今に健なる老父なりその始天明の末より寛政の初ころの事なり其ころの釣のしかけ糸ふとく沈も重く針も大きく今よりみればふつゝかなるやうなるに大魚多く釣れたりといへり今は巧者多けれども釣人多くなりて取盡せば得ものおのづから少し

殺生禁制

○【窓のすさみ】(二)寛永の末にや殺生禁制の頃御歩行の組頭愛久保彌太夫と云ふの同僚の何がしと打つれて釣を好み常に樂しみけるが聞えて推問有けり出る時彌太夫同僚にいふやうそこにはいかゞ答へんとありしかばいづくまでも釣せざるよし申開くべしといふ彌太夫は初より釣したる由申へしとい

いふ處より喰もの小琴か食川口のはぜ釣西鶴が【世の人心】(三)秋のころ三軒屋川口へはぜ釣舟に出し人酒にみだれて後つりたるはぜを丸燒にして數くふ事を手がらに各あばれける云々はぜ釣や木村山廓酒旗の風(嵐雪)江戸には釣客舟の數を定めつるはぜの多少をもて勝負をなす戲あり

根釣

○【五元集拾遺】ほの〲と朝飯匂ふ根釣かな(其角)根釣はあゐなめがら(かさごの類)などを釣其外種々の魚あるなり【事跡合考】に慶長のころ加藤清正献上する石船七艘大風雨に逢て品川より四里ばかりの海上にて破損し其石悉く水底に沈めるもの今に七ケ所存在す是魚釣の人のすくれて得ものありとて舟を浮ぶる所これを根釣といふ其處を根といふは石船の略言なりといふ事我等さへ七十年近く耳にふるれば尤是實唱たるべしといへり其石のしもりしはさもあるべし根は岩石のある處をいへば石根の略なり江戸海の根は年々埋りて沖の根中根燒根西の根新根虎根等なり今は僅に中根沖根虎根のみになりて魚もいと少し加奈川の根は自然の岩ある處多し其處には高藻出し、二ツ根、石の越、かはらそ、御みき根、壺根、おり船、丸根、等なり猶あるべし

漁獵止の札

○漁獵留の札享保二年酉二月廿五日濱御殿石垣より二町程の間海の內向後漁獵とめ同四月廿三日淺草川筋牛の御前の前高札場より上は豐島村高札場まで漁獵留となる

○又江戸の海むかしより次第に淺くなれり只澪のみ深さかはらずと云【見聞集】に江戸河口に洲崎有て鹽みちぬれば船道を見うしなひ舟を洲へのりあげ波風に損ず瀨戸物町に野地豐前と云人ありて他に施す心さし身の爲にあらずやとて天正十九卯年のことなりしに洲崎にみをしるしを立る是を俗にボンギと云今ははや野地も死ぼん木も朽て跡なし然れども名は朽やらで此洲を野地ぼん木と名付云々いへりしはいづくにかあらん今の佃島の處なとにや今海上に伯父樣といふあり野地ぼん木に許のひとき近けれどもこれは中川の沖にあれば異なるべし江戸海上東西釣場の名【江戸砂子】に載たる內今と名

ぼりくる事は三月頃よりなり（此突魚と鰻鱺穴釣は下賤のものならでは出す數珠子とは糸の長さ四五尺ばかりの間ふとき蚯蚓を貫き（糸の先に竹串を付て通す）これを綰て一絲にて結固め五尺計の竹の先に結付同し長さに柄を付たる纒（丸きあみ玉と呼）とを持て日暮より出て夜中釣餌をくへば纒の内へ釣こみて取手もぬれぬわさなれど蚊の刺す故に袷をき手覆もゝ引足袋はきて出暗夜を行夜中八ッ時に至れば魚も食を求めず七ッ時よりは釣るゝとなり穴を尋ねて釣る故夜はならずこれも陸をありきて汐入の小堀をのみ釣たるに近ころは釣人舟に乗り橋臺の石垣の透間又汐のそこりには河底の穴をみて舟の上より釣るなり

○見突また底見などもいふ船中より水底の魚を見とめて突て取なり魚目光るをみるといへり熱せさればあたはずそのやすは常の空づきの櫛の歯に似たるやすと異にて股いたく開かず四方に四またに分れ中に一本ありて都て五本なり此やすはねらひくるはずとなり水の清みたる時ならではなしがたしもし波たちて光ちらめくには油を水上にたらして見るとなり

○又三四月の頃竹蟶を突て取細き竹串の先に針のやうなるものを付て汐干の沙上に穴を尋ね突（突たるは疵付て死に賣物とならず生て取にはその穴に鹽をもり置ば中より出）鼠頭魚釣は立春より八十八夜を過ざればつれず一説にそれにかぎらず時鳥の鳴を聞かば東中川近邉に出てねらひ釣して得もの有といへり五月中の釣を春釣といへるもおかし六月はつれず七月より九月迄釣（春釣は二歳より小きはなし秋釣は當歳多し）古歌に汐ひれば蟶のまてぐしひまもなし我思ふことをしる人もなし【類柑子】本目の春を名のるや尺のきす（雪花）【俳度曲】（享保七年刻）きす釣や一刀流のあはせ突（文里）うなぎ掻もこのごろ專有と見えて舟辨慶を題にて其さまに又や汐かき鰻かき（貫十）九月より後は河水寒ければ蝦虎魚海に出て深き所に集る此ころの釣舟往々風波の難あり貞享五年【桑花啣】女郎に對のものを

鹿子】三月三日芝浦汐干【名所鑑】（菱川繪本）ころはやよひ三日いさや鹽干を見物せんと友とちより合さゝなどをもたせて芝の高繩手へ行海てをみれば人あまた集り居て汐の干かたの蛤など取て遊ぶ云々かちなの家ひかた遊びやけふのるすつうとほすじやかたらしまや汐のけふけふぞ汐干いづのみさきにせきもなしけふぞ汐干くむやせけんのいとのうみ江戸には今は此月此日はかりにあらず魚を突に出るものいつにても出るなり

突魚

○魚を突ことは【山家集】に宇治川をくだける舟のかなつきと申ものをもて鯉のくだるをつきけるをみて宇治河のはやせおちまふれう舟のかつきにちかふこひのむらまけ云々見えたり【和名抄】魚釣具に簒要云簎（漢語抄云比之）以鉄施棹頭因以取魚也とある比之(ヒシ)といふものは（形菱に似たるべし）鯨などを突もりといふ物とみゆ【山家集】にかなつきといへるも是なるか今やすといふものもゝとは二股の器なりやすは東國の名なるべし（蝦夷にてやすと云もの即ヒシなり）【續山井】淵に臨み鮭をつくこそやす大事（南部宜以）もとより漁人の用ひたるものなれと今の如く突魚に多く出ることはおもふに鼠頭魚(キス)釣に立こみとて高き履をはき杖を突て水中に入て魚こととあり其杖に用る竹の先は鉄の二股のやすなり砂に立る爲にしたるものなり是にておもはずも魚を突得たる事有しより廣く行はれて魚突ためにやすの股を多くし三股に作り形も大にして終に六股七股に及べり二股なるをもやすとて共に用るは大魚突たる時やす一本にてはならぬ故なり又かすがひにて作りたるかなわらぢといふものはくは是をにも魚を踏て取ことあり冬月は水に入らす舟のうへより突これを流を突といふ地に伏す魚牛尾魚(コチ)紅䱵(エイ)等を取なり是は見突に非ず見突は魚の有を見付て突なり是は空(ソラ)つきにして突中るなり赤ゑいは尾の針にて足をきらるゝことありさなくとも大なるを踏ときは彼かすがひのわらぢにては魚驚て人をはね返すやすにて突ても手をはなたされば穗先ねぢきるなり紅の類よこさといふものには大なるあり此類の

（頭注：ひし　やす　立こみ　かなわらち　うなぎ穴釣）

もを熊手にかけて引起す天地開闢より關東にて見も聞もせぬ海の大魚砂底の貝を取あぐる去程に四時を待て波の上洲のうへに出る貝魚とも今は時をしらず常に漁しぬれば江戸にて初魚初貝の沙汰なしはや廿四五年このかた此地ごくあみにて取盡しぬれば今は十の物一ツもなし【淮南子】に流を絶てすなど

佃島由緒

る時は明年に魚なしといへるも思ひ出てうたてさよ（かくあれば天正十八年このかた此漁網あり）【佃島由緒の書付】を見るに津の國西成郡佃村の獵師江戸に來たりしなり佃島築立しは寛永年中願出正保元年中二月普請出來たり白魚はむかし江戸にはなかりし物といふは非なり件の書付にも始めより御用にて取しなり行徳領利根川葛西領中川御菜用として白魚を取事定りしは寛永年中なり（按るに佃島出

白魚を取事

來ざる前は此獵師共いつこに居しか【元祿十六年日記】に六月十三日山王御祭禮練物大傳馬町練り物の内御祭島御供持參と書付たる其文字知れかね南茅場町にて吟味致候處件て不存候由依て獵師別當智泉院に承り候處此邊御さい島と申候由承傳候併文字は不存書留の樣なる物も無御座古へ此處より御用の御菜上候樣申候然らば御菜島と書申すへく歟と存候とあり此處に獵師ありて御用の白魚獻備せしことゝ見ゆ

御菜島

大まき

○砂底の貝をとること今はこれを大まきといふ件の網を車にてまく故大卷の意なるべし

汐乾

○【万葉集】（三）鹽干乃（今按に方字の誤なるべし）三津之海女乃久具都持玉藻將苅率行見【同集】（九）難波方鹽干爾出而玉藻苅海未通女等汝名告左禰【和長記】延徳四年二月二日壬午晴今朝藤中入道宰家依誘引詣住吉社爲見物鹽干也云々【日次紀事云】三月三日海潮大乾泉州堺浦特甚故諸人競來拾蛤蜊執小魚洛人亦赴當日住吉汐干祭也【滑稽雜談】に云住吉浦汐干凡三月三日より七日までなり汐干見物の輩泥中の蛤をとるを方言ににじるといふ足にて踏或は棒の先にて突て蛤蜊のある處を知をにじるといふ【洛陽集】前の魚あらはれ出し汐干かな（順也）【類柑子】親にらむひらめを踏むしほひ哉（晉子）【雲

○又云のふをはへると云は百丈餘の麻索に十數莖(スヂ)枝をつけその枝につりばりをつけ諸雜魚を餌とし本索の兩端に筌(ウヘ)をつけ海にはり置く大なるえものあれども走舟の爲にたくられ烏有となることもありと云り是播州漁人の詞をその儘に書るにやノフをはへるとは繩を延るなり是長なはのことなり

江戸近國漁獵の壇場

○江戸近國に漁獵の壇場は安房の長狹郡天津浦なり【房總志料】に下總銚子浦は漁場その右に出る地なしといへども彼土は專ら海鱸を漁するの處厨膳の鮮物は天津浦の儁なるにはしかず

ふしつけ

○柴漬(フシツケ)は【和名抄】罧また涔槮とも見えたり【新撰字鏡】にふしつけの木と訓り【天祿識餘】說文槮以柴壅水也【江賦】槮澱爲涔爽衆羅筌皆取魚之具蜀中有魚槮之名冬の內に柴を水中に束ね入おけば魚寒を避てその中に集り居を春に至りて柴をあげ網をもて魚を捕る俗にふしづけを切込(キリコミ)といふ

鮭を一尺二尺と云ふこと

○契沖が【雜々記】に今昔物語を引てさけを一尺二尺とあり常の事なりこの魚にかぎりて一尺二尺といふはいかなる故かとあり【結毦錄】に古鮭を幾尺といふは隻字の音を借りて書たるなりと

○地獄網は今いふ六人ひきなるべし【北條五代記】見しは今相模安房上總下總武藏此五ヶ國の中に大なる入海あり諸國の海を廻る大魚とも此入海をよき住處として集るといへども關東の海士取事をしらず磯邊の魚を小網鉤を垂て取計なり然る處に今江戸繁昌故西國の海士悉く關東へ來り此魚をみて地獄網といふ大網を作り網の兩端に二人して持ほどの石を二ツくゝり付是を千貫石と名く二筋網をつけ長さ三尺ほとはば二三寸の木をぶりと名付大綱の處々に千も二千も付る此槇といふ木魚の目にひかるといふ早舟一艘に水手六人ツヽ七艘に取乘大海へ出て綱をかけ兩方へ三艘つゝ引分けて大綱を引き一艘はことり舟と名付網本に在て左右の綱のさし引する此網の內にある大魚小魚一ツも外へもるゝことなし悉く引上る物又砂底にある貝をとらんとて網のもとに石を二ツおもり荷につけそれにかな熊手を作り付網を海へおろし大綱を引はへて舟の內にまき車を仕付碇を打て網を引ぬれは砂三尺底にある諸の貝と

網役

にて御役勤來候處仲間人數段々淺少の上困窮仕候に付二十四年以前御役御免の願申上候得共難被仰付御評定所迄も被召出御役相續の勝手に成候儀可奉願旨被仰渡十年以前寅八月十二人の者共屋敷被下候間場所見立奉願候樣久世大和守樣被仰渡旨於御酒部屋被仰渡其後所々見立候へ共故障有之場所故不相濟依之京橋內外二ケ所新廣小路減地に被仰付被下候樣當二月越前守樣御番所へ右十二人の內十人の者共奉願候に付此方へ吟味被仰付減地助勢を以京橋請負の儀幷減建前帶の小屋等是又十二人の內二人願に洩後に和談致し一統に成候迄吟味濟戶田山城守樣へ越前守樣より締關訴狀等を以被仰上同四月晦日右十二人の者共召連罷出越前守樣出雲守樣御列座にて願の通減地御免の旨十二人の者へ被仰付候事

どうけ

○トウをドフヤナともいひしにやドウとヤナと二物にはあるべからず共製ことなり【物類稱呼】にたつべは魚をとる具なり近江にてたつめ河內にてぢんどう四國にてうゑ武州にてどうといふ江戶の北いなかにてどうと少し異なる物をこしうけと云其形籠をふせたるに似たり盆子魚器の飼ちよみて呼なりと云り

やな

○【孔雀樓筆記】に世に梁といひ傳ふるは魚を養ひおくいけすぞ北地にて梁と云は魚を捕るの具にて彼いけすとは形全くかはれり是を作るに多く巨材を用その費用甚多し夏秋これを大河に設け雨の都合よければ只一日に鮎を得ること馬數十駄に至る雨の都合よからず梁をやぶらるれば是をかけたるもの大に財を損ず鮎の外にさけなども取梁のどう木といふにはせかゝればいかなる魚にても梁へ落さるはなし梁へ落ては死たる人もこれまで多し先年馬ながれ落て死せることも有しとかやさほどおそろしき勢なれども鯉魚ばかりは終に梁へ落ず水勢に隨てどう木まではせかゝれども踊かへりて落ずと云ふ化龍の說救なきに非ずさほど神竒なるものなれど水中にて是を捕る人ありその仕方兒戲に同じ又五月頃霖雨の時河より稻田へのぼるに村民の爲に打殺さる才に長短ある人のみに非ずといへり

鯉はやなに落ず

六日の程に宇治へまうで給をあしろをこゝそこのごろは御らんせめと聞ゆる人々有ど抄に網代をはむかしは都よりも見に出しなり

ひゞ竹

○ひゞとはひゞきの略なるべし魚聚れば竹木の枝動くもの故ひゞと云歟今品川鮫洲の邊にて海苔をとるひゞはもと魚を取しものなり【事跡合考】ひゞや町の事をいふ處ひゞといふものはひゞ網など唱ふ正字は無之漁人詞歟その製海中に枝付の竹或はきり竹をならべ置て風雨大浪に破れぬやうにしつらひ口を一所あけおく魚もおのづから入る然れども出る事ならぬやうにこしらへたるものなり凡ドウヤナ抔いふ此類の製その法同じ意なり品川表深川浦等此ひゞ此數幾千に及ぶ上總三浦本牧等の漁獵少くかの浦々の者愁訴年を經たりしに一とせ大水にてひゞ悉く浪にとられ打つゞきしつらひしも悉く浪にとられ再興なり難く斷絶せしとなり今も品川浦磯邊に葉付の生竹を水中にゆりこめて春の苔を取をひゞ竹といふ然してそのむかしひゞかせぎしたる獵師ども居候ひゞやといひしもの此處に（やよすかしなり）在て終に移し出されしが今芝口のひゞや町なり（寶永七年寅九月廿一日今度新御門芝口御門と唱可申候幷橋は芝口橋と可申事日比谷一丁目二丁目三丁目向後芝口町一丁目二丁目三丁目と唱可申事右之通昨日被仰出候間町中不殘可觸知候以上芝口御門享保九年正月廿九日大火にやけて後なし）

○寛文九年己酉十一月芝新網町宗十郎久右衛門差配の獵師共ひゞ網立る事當年より三年の内無用並ひゞ竹の儀當月中に取拂可申候其上五分四方よりこまかなる網堅つかひ間敷候この時芝の御門出來其土を以新網町の邊海手に築立京間六間四方坪數五千七百九十坪なる

あぐり網

大網六人引

○享保十七年子七月あぐり被仰付金六十五兩鯨舟二艘被下置あぐり網舟に相用同十九年寅八月あぐり舟を大六人引あみ二組に相直し候樣仰付らる

御菜白魚

○【享保四年己亥日記】五月十五日御菜白魚網役小網町十二人願蔬地の事右網役慶長年中より二十一人

廣西楓葉初生上多食葉之蟲似蠶而赤黑色四月五月蟲腹明如蠶之熟橫州人取之以釅醋浸而擘取其絲就醋中引之一蟲可得絲長六七尺光明如貲成弓琴之絃以之繫弓刀紈扇固且佳天蠶糸といふ【廣東新語】に大蠶出陽江其食必樟楓葉歳三月熟醋浸之抽絲長七八尺色如金堅韌異常以作蒲葵扇緣名天蠶絲亦有成繭者大於家蠶數倍禹貢厥篚檿絲或即此類然不可繅爲絲入貢者齊魯之山繭也また釣具に用ゐる事も見えたり【潭州府志】樟蟲如指大長數寸綠色用醋洗之去肉其中有絲抽出許長名曰蟲絲用以繫鈎こゝにても今は薩州また信州などにも製すといふ此虫樟楓の木にのみ出來るにあらず松などに多くまた他木にもありと聞り（巣は網の如き袋なり俗にすかしたはらといふ）

○栗または李落樹などに生する毛虫色青く毛は白し大サ二寸或は三寸四五月の頃腹中透とをりて見ゆるとき糸を製すべし其法えの油を火に暖めぬるみたる時明礬を少し入其中へ虫を漬し酢を少し加へて板の上に釘を打たるに虫の首を破り糸を引出して板上の釘にかけて虫を指にてつまみながらそろ〳〵引けば糸長く出つ虫大なるは糸長し糸は板上に着く故糸平みたれど乾くに隨て丸くなるとぞ

笭　○【和名抄】笭捕魚竹笥也和名字倍うけはうへの誤なり

ひび　○ひゞの製こゝにいへる如くなれば漢土に魚箔と云るもの是なり楊万里か過臨平蓮蕩詩に蓮蕩層々鏡樣方春來嫩玉斬新光角頭一々張蘆箔不遣魚蝦過別塘【和名抄】[illegible]とあるものに似たれども是は魚を養ふ處なり

いけす　ヤナズ【倭名抄】に簎をよめり取魚箔なりと注せり梁簀の義なりやなは【和訓栞】に梁をよめり壓魚の叢木をよせて魚を捕るものなりやなうつともくたりやなともよめり年魚の時美濃の藤川のやなくだし觀つへきものなり

網代　あじろには【延喜式】に網代とかけり冬川に氷魚をとらんとて百千の杭を網引形にうちて其木にたてぬきを入て其はてに簀をあてゝ置なりといへり【源氏】（橋姫）十月になりて五

如蠶細如箸長二寸餘青黄色相間中有白漿狀甚可惡産海濱田中禾根長數尺或至丈許縷々如血絲隨海水而出漾至海濱寸々自斷即爲此虫土人網而取之午前擔負而賣午後即敗不可食取虫置器中滴鹽醋一小盃其漿自吐濾以蒸雞子最鮮潘逆時禾虫亦稅至數千金（按に青黒色は赤黄の誤なるべし下文に如血絲とあるにかなはず又長きものゝ斷て二寸餘の虫となるといへるは誤れり浮て出るとき多く集りて水面を覆ふ故長きものと見たるにや）こゝにても河岸の潮水滿干する處の草根に居れども禾田に生ずることはなし夏秋は掘て取又浮て出るも秋にはあらず毎歳大かた十一月の三四日の夜新月に映じ水面へ紅ゐなり浮みて流るそれより後日を經て又浮出都て三度ばかりぬけ出る是をぬけゐさといふその宵を伺ひて漁者船に乘り四ツ手網又は白魚あみにてすくひて是を取り貯へて冬月釣の餌に賣る然せざれば冬月此物なしおもふにみな浮出て翌年はみな新たに生ずるにもあるべからずいと大なるも有ば殘りて有しなるべしこれをすくひ取る處は大橋の下三ツまた濱町の小川の入口とうか堀の邊其出口にてとる其外處々なれ共此邊ことに多し）【廣東新語】に禾蟲狀如蠶長一二寸無種類夏秋間蚤晩稻將熟禾虫自稻根出潮長浸田因乘潮入海日浮夜沈浮則水面皆紫采者以巨口狹尾之網繫於杙逆流迎有尻有囊々重則傾瀉於舟杙之所在江兩岸其名曰阜々有主爭者輙訟與罾門白蜆塘皆土豪所私以爲利者也これに種類なしとあれどもイトメとて一種似たるものあり色赤けれども尾のかた白し冬月も浮み出る事なし是又魚を釣に用按るにミヽズを陸餌と云コガイを川餌と云し共ヲカエをまかへてゴカイとなりたるなり今はヱとのみいはでエサと云餌とは餌のことなり漁夫かつをなとつるにあぢを用ればあぢ餌と云いわしを用ればいわし餌と云ふ【廣東新語】に節斷して浮出と云り又云得醋則白漿自出以白米泔濾過蒸爲膏甘美益人蓋得稻之精華者也其醃爲脯作醢醬則貧者之食也

ぬけゐさ

○又釣糸に用るテグスは弓弦のくすねにたとへて手くすねの意なるべし【嶺外代答】（宋周去非）蟲絲

てぐす

蚊かしら　かしらといふものを用ゐ海にて牛角鷄毛を角に作りたるものにて鰹をつる大小は異れども蚊かしらの
　　　　　類なり）釣魚を入る籠を江戸にてビクといふは近きころの俗名なるべし（【物類稱呼】關西にてメカゴ
餌畚　　　と云を東國にてメカイ或フゴビクと云り）むかしは餌畚といへりもと鷹の具を用ゐしにや【新竹齋物
　　　　　語】申の刻ばかり宇治につくタこそ魚つるによけれ竿に餌ふごゝと取出す云々びくはふごの轉じた
　　　　　るにや【續虛栗】簍に菌の生る水鉢（其角）取りかへる沙魚は餌畚をかたにして（介我）
あま　　　○蜑をアマと訓もと背には樵者もありとみゆ【嶺南雜記】に背有三種魚背蠔蜑木蜑なり木蜑は伐山取木
　　　　　といへり
釣殿　　　○家の指圖に釣殿といふあり【拾芥抄】に釣殿院ともあり池中の亭なれば納涼のためにも設く、つり
　　　　　とは上より下へ物を下すことながら糸をもつりと訓れば横に亘るをもいふされど此釣殿は魚を釣へき
　　　　　に作りたるなり【源氏】（常夏）に釣殿に出てすゝみ給ふ又【宇都保物語】（祭使）大將殿つり殿に出給ひ
　　　　　て君達なと涼み給ひ網おろしなどして鯉ふなとらせ給ふ
はい尻笠　○後世はい尻といふ笠あり今は用ゐされどももと釣の爲に作りたる笠なり釣竿の笠の緣に障らぬやう
　　　　　窪めて作れり【我衣】に元文より流行るといへり竹の皮笠なり
蚯蚓　　　○蚯蚓を餌に用ゐも古きことなり【唐書】（四十四選擧志）寶應二年尚書左丞賈至議曰今取士試之小道
　　　　　而不以遠大是獨以蚯蚓之餌垂海而望吞舟之魚不亦難乎（同書）廿五（五行志）貞元十年四月江西溪澗
　　　　　魚頭戴蚯蚓とあるは魚の口に含みて端の出たるなるべし
ごかい　　○又魚を釣る餌に江戸にてゴカイと呼もの潮の入る川の土中にある虫なり沙土の處にあるは肥すこれ
　　　　　漢名未詳なり【事物紺珠】虫食品類に禾虫秋成時節自涌浮田上白蚕味甘といへり彼處にて專食料とし
　　　　　て魚の餌にすることをしらずこゝにては食ふことをせず又【嶺南雜記】に禾虫形如百脚又似馬蟥身軟

しゝ狩

などのあるは此事によりたるも有べし【西京雜記】に馳駿狗逐狡獸と是なり昔鎌倉將軍のはじめ頃武士の遊興しゝ狩をことゝす伊豆國おくのゝ狩くら其後右大將家あさまのみかりみはらの下つけなすの狩それより富士のゝ狩くらあり狩くらとは諸人きそひて狩りて獲ものを爭ふなれば狩競なるべし

釣

○【八雲御抄】にあまのふねにていさりするをもゆふかりといふとあるは【無名抄】朝かり夕かりの說とおなじいさりすなとりは【冠辭考】に勇魚取を略きていふなるべしと有に從ふべし鈎をチと訓るはツリの反なり【和名抄】に聲類云釣【和名都利】誤鈎取魚也とありて鈎を載せず恐らくは下の鈎字鈎字を誤れるなるべし【續日本後紀】承和八年四月庚申、從四位下百濟王慶仲卒云々、世人謂爲有磨公之術、家人漁者、與慶仲臨川沈緡、魚之喩喁專呑慶仲之釣瞬息間引得百餘云々これ又水に幸を得たる人なり

六物

釣具をすべて六物といふ【漁樵對問】(宋維堯夫)漁者曰六物者、竿也、綸也、浮也、沈也、鈎也、餌也一不具則魚不可得云々然れども浮は海水はさらなり江湖にて流れ急ぎには用ひられず止水緩流の具なれば廣くはいひがたし又其内にびくなきはいかにぞや

ぶり

○【雞肋編】(宋莊綽)鈎絲之半繫以荻梗謂之浮子視其沒則知魚之中鈎韓退之釣魚詩云羽沈知食驛則唐世蓋浮以羽也といへり羽は今もはねうきといふなり(又鵜の羽を浮子とし繩を引網を張る是を鵜繩といへり今鵜繩といふは網に長き繩を付それにぶりといひて飾に作るべき片木の輪を二つに切たるを多くあまた處につけたり漁人云この木日かげにうつりて魚の目に鵜のむれて追くるさまに見ゆる故是をうなはといふ空の陰りたる日はぶり光らねばその時はしゝ繩とてかのぶり付る處に烏の羽を多く付たるを用といへり思ふにこは名のまがひたるにや鵜の羽を用るは鵜の羽にかへたるなりしからば是ぞまことの鵜繩なるべき

荻梗

○荻梗は今も田舍にて蜀黍稈(モロコシカラ)また葭薹など用ゐて鯽などをつるなり(又山川には香魚などを釣るに蚊

抱之須人迭守不相離視其少動卽呵止否則自毀其卵矣【爾雅翼】幷【埤雅】倶云不卵生而吐雛未詳この故にや【東雅】にはウといふこと詳ならず浮むの義なるに似たりといへりいかが有べきやおもふに胎生の說はさし置て其羽にて產屋をふくことと【神代紀】にあるも產の義あるにや【金葉集】連歌（頼算法師）あらうとみれと黑きとりかな（よみ人不知）さもこそはすみの江ならめよとともに（洗ふをあらうといへり）【莵玖波集】にかり人の乘るこれはくろ駒（關白前左大臣）夜川にや水のからすをつかふらんと有り貞德が雛を卵の親と云けんやうなり又【著聞集】に文覺上人高雄興隆のころ猿の鳥を捉へて長きかつらを足にゆひつけ川水に投入一疋はかつらの先をとり今二匹は川上より魚をかりける人の鵜つかひけるを見て魚をとらせむとすれど益なくては鳥は死ければ猿共に打捨て山へ入にけるといふ事を戯たりこれらも鵜つかひし事のおほかりければなるべし（うのまねする烏の諺もこれらより出しか）

猿の鳥をつかふ

漁獵のこと
鹿狩

○漁獵のことは八重言代主神鳥遊取魚し給ふことと有是鳥を狩り魚を取給ひしなり又火闌降命とその弟彦火々出見尊とかたみに海山の幸をかへ給ひしことなどもあり【和訓栞】に獸に獵といふは鹿を主としていふにや魚鳥より草木に至るまでにいふは准へたる詞なるべしねらひ狩はともし火串などする夏山の狩なり【和名抄積搜神記】を引て云々今按俗云照射（止毛之）蹤血（波加利）とあり【河社】に今も血をとめて求るを肥前國人ははかりといへるよし見えたり【遼史】に七月中旬自納涼處起牙帳入山射鹿令獵人吹角効鹿鳴旣集而射之謂之舐鹹鹿又呼鹿四時各有と見えたり獵人の山かせぎといふもむねと鹿を取る事よりいひしにや【日本紀】の訓に鹿をカセキと付たりされと鹿をカセキといふは古への名にあらず又は宍といふは肉をほめていふなりされば しゝ狩といふも專ら鹿をいふなるべし

狗山

○狗山といふは【舊本今昔物語】廿六ノ第七語に人犬山といふ事をして數の犬を飼て山に入て猪鹿を犬に令齧殺て取事を業としける此外狗山の犬大蛇を咋殺して主を濟ひし物語なともあり狗山といふ地名

有て【職員令】大膳職の下に雜供戸と云あるを【義解】に謂鵜飼江人網引等之類とあり【萬葉集】を始めて世々の歌にも鵜河をよめる多く物語書なとにも此役見えて中昔まで何所にも川邊なとには鵜養ありて今世にも稀には遺れりといへり【杜甫詩】に家々養烏鬼頓々食黄魚【事物異名】鸕鷀の下に烏鬼（蜀人云）とあり（時珍鸕鷀といひて似鵜而小色黑亦如鵜云々あるは別物としたるにや）沈括か【補筆談】云近世註杜甫詩引夔州圖經稱峽中人謂鸕鷀爲烏鬼蜀人臨水居者皆養鸕鷀繩繫其頸使之捕魚得魚則倒提出之至今如此（この下に又一說あり夔州人の多く集りて田間に牲酒を設て戰死人の祭をなすこれを養鬼といふ是養烏鬼かといへれと非なるべし）濃州岐阜長良のうつかひ至巧といふべし他國の漁人及ぶこと能はず長良の渡より小瀨の渡まで三里の間を上川といひそれより末を下川といふ舟の數は上も下も七艘づゝなり舟ごとに鵜つかひ一人揖取一人なり舳先に篝を燒鵜つかひ一人にて十二羽の鵜を繩のもつれざるやうに左右の指の股に分ちて鵜鮎を十分に呑たる鵜は舟ばたに上るを右の手に捕へて鮎を吐しめ又鵜を水中へ入る鵜繩長さ一丈二尺鵜の首に環を掛たり月夜はつかはず凡三四月より初めて八月晦日をかぎりとすといへり【百草根】大垣藩士伊藤實臣撰るその國の地誌なり元文三年戊午）其中に長良川は黑股川渡の河上なり岐阜の北なり長良川の鮎江戸獻上あり長良より三里川上を小瀨川といふこの處の鮎尙大にして頭小く背丸し故に小瀨丸と稱す大概よきあゆ七八寸重百錢至極大なるは長一尺一寸重百八九十目池田郡糟川又本巣郡根尾川伊津貫川の鮎も大にしてよし方縣郡鵜飼村は岐阜の北なり元來鵜舟十二艘あり今七艘となる長良川の鮎を漁す鵜十二羽を一人にてつかふ川に入らさる鵜をば船ばたをたゝきて追入又魚を呑たるは吐せ篝火を燒立かた〴〵せはしき業なりと有鸕鷀は古人の說に胎生にて口より吐といふは誤なり口より吐ものは鵜なりと【本草】に辨ず鵜もまたおぼつかなし（【五雜組】に鵜似雁而善高飛昔人謂其吐而生子未必然也といへり）【典籍便覽】云鸕鷀性善捕魚卵生漁家畜而

法に大黒者蒼鷹之名一【源氏夕霧】かくまかふかたなくひとつ處をまもらへてものおちしたる鳥のせうやうのもの〻やうなるはいかに人笑ふらん一【河海】に鷹の事なり小は雄大は雌女は劣り男はまけたるにたとへり)【東雅】云すべて鷹の類を呼し名韓地の方言多しと聞も我師云兄鷹をせうと云は百濟の方言なり云々寐に問聞さりしは我怠りにこそ又今は朝鮮の俗鷹をばマイといふなり彼國にも古へ今の方言同じからぬ事かくの如しといへり鷹を捉て養ふにスダカ、トヤマチ、アガケなといふ事あり鷹は品類多し【西陽雜俎】また【鷹方】等に詳なりこ〻には【新修鷹經】を嵯峨天皇弘仁二年に鷹所へ出され是を天下に弘行せらる又【嵯峨野物語】には後普光園院良基公の撰なり鷹の歌は後京極殿三百首を始め定家卿慈鎭和尚等もそこはく有り狩に用ゆる犬に佳名を付る事西土より然り【西京雜記】に茂陵少年李亨好馳駿狗逐狡獸或以鷹鷂逐雉兎皆爲之佳名狗則有脩毫釐睫白望青曹之名鷹則有青翅黄眸青冥金距之屬鷂則有從風鷂孤飛鷂楊萬年有猛犬名青駮買之百金なと見えたり

鸕鷀つかひ

○鸕鷀をつかふ事【古事記】神武の御歌に志麻都登理宇比加賀登母伊麻須氣爾許泥また【萬葉】(十七)安田波之流奈禰能左加利等之麻都等里鵜養我登母波由久加波乃佐欲吉湍其登爾可賀里左之奈豆左比能保流云々【和名抄】に大なるを鸕鷀としシマツトリといひ小なるを鵜鶘とし俗にウと云といへるは誤なり鸕鷀は島に居れば島の鳥のうとつゝきたるのみ野つ鳥きゞし家つとりかけといふがことし鵜をうのことに假て書るは古事記にしかありされども元來鵜鶘は別物にて形は鷺に似たる鳥の白くて觜長く咽に大なる嚢の如きものある是を鵜といふその内に水をのみ入れて小池をかへほし魚を取り食ふ故に漢土にて洞澤また淘河なと呼といへり(【古事談】寛德二年二月頃有白鳥羽長四尺許身長三尺來作侍從池件鳥鳴詞有饑無菜云々といへるもの是歟【四神地名錄】關村の條に澤の内にて夜中うたりしといふ大鳥もこれらの類なるべし)【古事記傳】に古へ鵜を使て魚を捕ふことといと多かりき故公に供奉る鵜養も

のみかゝる是も卵は二ツ產み伏する事四十四五日五十日にてかへるといふ

漁獵

漁獵　鷹狩　犬　鸕鷀つかひ　鹿狩　狗山　釣　六物　ミヾズ　ゴカイ　テグス　ヒヾ　ドウウ

ケ　ヤナ　地獄網　大六人引　アグリ　佃島起立　御菜島　汐乾　突魚　ヒシ　ヤス　うなぎ

釣　竹蟶　鼠頭魚　はぜ　根釣　川釣　田舟釣の始　岡釣　金魚　ビイドロノ壺　談義坊　杜

父魚　水瓶に入へしと云こと

漁狩

【日本書紀】仁德天皇四十三年九月庚子朔依網屯倉阿弭古浦異鳥獻於天皇曰每張網捕鳥未曾得是鳥之類故奇而獻之天皇召酒君示鳥曰是何鳥矣酒君對言此鳥類多在百濟得馴而能從人亦之飛捷掠諸鳥百濟俗號此鳥曰俱知(是今時鷹也)乃授酒君令養馴未幾時而得馴酒君則以韋緡著其足以小鈴著其尾居腕上獻于天皇是日幸百舌野而遊獵時雌雉多起乃放鷹令捕獲數十雉是月甫定鷹甘部(酒君は百濟王の孫なり)同五十年春三月壬辰朔丙申河內人奏言於茨田堤鷹產之卽日遣使令視曰實也天皇於是歌以問武內宿禰曰云々阿耆豆辭莽揶莽等能區珥々箇利古武(產)等儺(汝)波企箇輸(不聽)揶とあるか始なり茨田堤に子產たる鳥は天皇御製にカリとあれは鷹は雁字を誤れるにや（嵯峨野物語）に仁德天皇の御時に高麗より奉つるとあるは記臆のあやまりなるべし【養鷹記】(柴屋長公が漢字の記) 朝倉敎景か鷹二雛を育する事を記せり其中に仁德の御時百濟國より鷹と犬とを獻すその船越前敦賀に至る鷹を養ふ者を米光とい

犬

ひ犬を養ふ者を袖光といふ政賴奉勅赴敦賀迎使などいふ事を記せり仁德の事は【嵯峨野物語】の誤をうけしならむその他の事はそのかみの俗說なるべし

○凡そ鷹は雌のかた形雄より大にして性貪る故に能鳥を捉るこれを大といふ(【養鷹記】云國俗訓兄鷹爲小訓弟鷹爲大といへり) 雄を兄といふに習ひて弟とも書るにや大とは【和名抄】不論靑白大者皆名於保太加小者皆名勢字とあり大鷹は三とや(三歲をいふ)已上をいふ(【萬葉】十七矢形尾乃安我大黑爾自

わらふものみゝづくに小鳥【吾吟我集】みゝづくでおほくとりぬる小鳥こそわらふ處へ福來るなれ【溫故集】に雀子もわらへ旅出の投頭巾（蓮谷）二【續山井】四十からまどはされたるをとり哉（女婦）

囮の事

囮の事古くも見えたり【萬葉集】（十三上略）末枝爾毛知（謠）引懸仲枝爾伊加流我懸下枝爾比米乎懸しか母をとてをしらずしが父をとてをしらにいそばひをゐよいかるかとしめと此は囮か母父をとらるゝをしらて遊ひをいへり（潘岳射雉賦序）云余徙家于琅耶其俗實善射聊以講肄餘暇而習媒翳之事遂樂而賦之媒者少養雉子長而狎人能招引野雉翳者所以隱射也この媒鳥はをとりなり桂翳は古歌にまふしさすとよめる是なり鳥の人をみて驚かぬやうに目かくしするなり株を立そのうへに笠のごとく木葉を盛ふとみえたり

寒苦鳥

〇童の諺に梟は夜が明ば栖を作らうと啼といへりほうしくろうと鳴といへるにちかしされどしか啼といふは他の鳥なり本滿寺日重が【和語連々抄】に、はかなしや雪のみ山の鳥だにも世にふることはおもはぬものを寒苦責我夜明造栖これは雌鳥が鳴聲なり今日不知死明日不知死何故造作栖安穩無常身雄の鳴聲なり世にふることをおもはぬよしなり按【本草】寒號虫は鶡鴠と名く郭璞云夜鳴求旦之鳥夏月毛盛冬月裸躰晝夜鳴叫故曰寒號時珍云夏月毛采五色自鳴若曰鳳凰不如我至冬毛落如鳥雛忍寒而號曰得過且過云々【輟耕錄】（十五）五臺山有鳥名寒號蟲四足有肉翅不能飛云々【虚栗集】寒苦鳥（孤錦）かねさめを鳴音かな（李下）寐させぬ夜身を鳴鳥の寒苦術（才丸）貧苦鳥明日餅つからうとぞ鳴ける（其角）

寒號虫

孵鳥

〇錦孔雀紫鴛鴦雉鳥等の卵みな鷄に抱かせてかへすに大かた鷄と同く三七日にてかへるものなりその内孔雀は一月を經ざればかへらず錦鷄は卵四つばかりならでは生ず孔雀は十四五も生む鳥ひよどりは二ツ三ツに過ず凡雉ほど卵多くうむものなし大かた一月の内に十二ばかりは生べし飼ふに費多きものは丹頂の鶴なり一日の料鰌鰻三匁泥鰌三匁五分玄米二升なり一年に積りて凡金二十二兩許り飼料に

と【續山井】山雀は籠て水汲名譽かな（是も習はすれば目じろなどもよく戻り打ものなり）

鵙の草莖

○鵙の草莖【袖中抄】に奥義抄を引ていへる說は殊に附會なり【八雲御抄】にもすのくつてはわがみがはりにかへるやうの物をものにさしておくなり是郭公のくつてをせむるといへり是に說有れども不可過之とあれ共是又古き俗說なり【淮南子】高誘注云伯勞應陰而殺蛇乃磔之樹上而始鳴とあり然らば蛙やうの物を木枝などにさし置ておのれ隱るゝとするは非なり先さやうのことをして鳴出るなるべし思ふにわが食にせむとて取たる物の餘りしをさやうにして置なりことなる義あるにあらず【五元集】元祿丙子のとしむ月末つかたに淺茅かはら出山寺に遊び侍り畠中の梅のほづえに六分計なる蛙のからを見つけて鵙の草莖なるべしと折とり侍る「草莖を包む葉もなき雪間哉【同集】に小庭にうつしたる梅の小枝に鵙の草莖を見出て人々に句をすゝめけるついて梅の名をうたてや鵙のやとりとは似たること二度ありしにや）鵙おとしは【日次紀事】云山林間囮鵙縫目居架於頭傍設黐竿而執鵙鳥是謂鵙落

鵙おとし

○【呂覽】（五）仲夏紀鵙始鳴反舌無聲注鵙伯勞也是月陰作於下陽發於上伯勞夏至後應陰而殺蛇磔之於棘而鳴於上今思ふにこの說によりて蛙を草の莖に刺とはいへるなりこれは蛇を棘にさすよし有をしひていひつけしものなり本の詞はたゞ葉の草潜といふことにて久利を約れは幾となる故久を淸きを濁ていふべきを誤て異說につき上を濁り下を淸て莖の意と心得し也【萬葉集】にも鶯の木の間立くきと見えしは全く此意と同し潜ることをいへるなり

づく落し

○づくおとしは【和漢三才圖會】云世俗今蒙頭巾於鵂鶹或以氐牟皮作囮而執諸鳥といへり黃鼬の皮を鵂鶹に似せて作るなり【菟玖波集】霰よこきるかしはきの森いねふりのみゝつくのみや覺ぬらん【守武千句】にわれも〳〵のからす鶯のとかなる風ふくろうに山みえてめもとすさまし月殘るかけ【犬草子】

音に似たればとて琴ひくといひ梟のから聲をはのりすれとなくといひやさしきときもしきと各別なれど生れ付たる聲なればすべなしこれらも古くよりしかいへり【鴉鷺合戰物語】梟のいふせけなれどもかいふんの能をくす明日の雨を知ては糊すりをけとなく老者に死を告るにそのをとむを呼【續五元集】八重干椿壺の口張おのが音の糊摺桶に雪解て【輕口嘶】宿老いはるゝは此中こちのもみの木でふくろうかほゝしゆくらうとりおけ〳〵となきました【鴉鷺合戰】に老者に死を告るといひしが是なるべし【雅筵醉狂集】梟の繪に「寫し繪の墨はすみにき表具せむのりすりおけと鳴やふくろう

白鳥

○【古事談】寬德二年二月頃有白鳥長四尺許身長三尺來往侍從池件鳥鳴詞有敵無來云々

○白き鳥【北窓瑣談】といふものに天明年間白き鳥出て京師の人もてはやし王侯貴人の御覽に入遂に叡聞に達し禁裏に召れ上なき吉瑞なりとて公卿大夫各賀表を奉りいはひ祝し給ひける頃伏原故二位殿も時の明經博士にて考文を奉り王者の吉瑞とは賢人君子を得るをいひて異獸奇禽をいふにあらずとまめやかに申上給ふといへり【金葉集】後冷泉院の時近江國より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にも見せさせ給はさりければ女房たちゆかしがり申ければおの〳〵歌よみて奉れさてよくよみたらん人にみせんとおほせごとありければつかうまつれる少將内侍「たぐひなくよにおもしろき鳥なればゆかしからずと誰かおもはん【同集連歌】鵐鳥を籠に入て侍りけるがこよ雨にぬれけるをみて雨ふればきしもしとゞになりにけりかさゝぎならはかゝらましやは

しとゝ

狐なれぐら

○狐をねぐらとす【夫木集】寂蓮歌籠の内も猶うらやまし山がらの身のほどかくす夕がほの宿【鷹筑波集】水うみの水をふくべに取こめて昔ながらの山がらやかふ【俳夜中山集】へうたんからこまとりもかな四十雀「へうたんの口たゝくひからふ二【狂歌寶】山がら面白く戻りを打日暮にに籠の内にかけたる小き夕貌の中に入てまかしけるをみて山がらも源氏のきみに習ひけん夜ごとにやどる夕顏のや

を申し出られける朝臣そのいらへはなくて四方やまの物がたり時を移して後近侍の者を召てあづけおける鶉の籠を持來て並べよと有しかば悉くかいつらねし時其戸をみな／＼開き候へと有てあけしほどに鶉は殘らず飛去りぬそこにて朝臣申されけるは重職の人は物を好事大なるあやまりにて侍る今まで心つかで鶉をあまた集め置しに先の人のよき訓を承りて今より鶉を好事やめ侍る其方へ此禮詞を能つたへてたべと有しかば大夫もことばなくして出られける

鴿

鴿【菟玖波集】よみ人不知軒の下にて夜をあかすなり籠の內のぬぐら尋ぬるはなち鳥【新撰六帖】入ぞうきすゝめのひなの手なれつゝしばしも身をばはなれさるらんよく馴てその家をわすれぬものは鴿

傳書鴿

なり和名にいへばとゝいひ俗にどばとゝいふ是なり鴿に書を傳ふる事【本草釋名】に張九齡が故事をいへりまた【八閩通志】性甚馴善認主人之居舶人籠以泛海有故則繫書放之還家故又曰舶鴿とあり鴿は鳩より形小なり鳩はきじばとまたつちくればとゝいふ【大和本草】に斑鳩をつちくればとゝするは非なり斑鳩は數珠かけばと又としよりこいと呼ものなり京師にて鳩をもとしよりこいと呼り然れども鳴

はとの聲

聲に異なる處あり土くればとは聲濁りて末をかさねて鳴く九州にて是を與惣次こい／＼と聞て與惣次ばとゝ呼東國にてとゝつほう／＼と聞斑鳩は聲高く清てとしよりこいとばかり鳴末をかさねず東國にてとゝつほうと聞く【安布良加須】よふかよはぬか心もとなさ年よれば氣にこそかゝれ鳩の聲契沖が【餘材抄】にとしよりこと鳴てやがてしか名付たる鳩はげにもしか聞ゆればむかしよりかくよめり西行の歌「山はたのそばのたつ木にゐる鳩の友よぶ聲のすごき夕暮近き頃みつね集の古本を見侍りしに聲きけば老のみまさる人にくゝ來つゝのみ鳴よふことりかなと侍り此歌聲きけば老のみまさるといへるはまたく彼年よりことなく聲をさして詠ると聞ゆ【續山井】鳩の峯みよや年よりこい紅葉（末翁）

梟の聲

また【埋草】の內【卜養千句】ふくろうののりすれと鳴月の夜に【嘉多言】にうそ鳥のさへつるは琴の

麥うづら

いなや此鳥ほしくなりぬ云々岩翁が【若葉合】第二介我やくそくも二處なり月二夜鶉合は金ほどの聲」
麥うづらと稱するは麥秋の頃諸方より取て出す江戸には南部より多く來る近年明和安永の頃鶉合の事流行て大諸侯競ひて是を飼はれける鳥籠は金銀を鏤め唐木象牙螺鈿高蒔繪にて皆一双ツヽに作らせ裝束は足かけ天幕金襴猩々緋のたくひ用ひさるものなし其會日には江戸中鳥好のものは是また件のことく美を盡しよき鳥をえらひ持出て勝負をなす鶉は朝をむねと啼ものなれは必朝早く會あり飼鳥屋は江戸中のものみな集りよしあしを聞わけ甲乙をさだめ角力番付の如くに東西を分ち一二を以てしるす大本書を横につきて書付東西の壁上に貼付もし一となれば鳥屋共に祝儀として目錄を遣す此費許多なり凡鶉はよき鳥ありてち其音を移す付子などする事ならぬものにて鶯などのごとく其類出來す其うへ何ぞ驚さわげば忽胸をうちて死する事あり高價をもて買ふはかはりたる物ずきにて鶯をいやしむとかや（近頃は鶉を子を生せてそだつるとなり）

あひ夫

○鶉の雌をあひふといふ【懐子】草枯やあひ夫うづらも床はなれ（玖巴）鶉を飼ふ者よく其聲をまねて口笛に吹ば是を聞て雄なく【同集】なけばなく眞似の人江のうづら哉（宗治）西土には鬪鶉とて鶉のことく戰はしむ【五雜俎】云江北有鬪鵪鶉其鳥小而馴出入懷袖視鬪鷄又似近雅云々鶉雖小而雄鷙最勇健善鬪食粟者不過再鬪食稗者尤耿介一鬪而決故詩言鶉之奔々言其健也また【花鏡】に凡鳥性畏人惟鶉性喜近人諸禽飛則尾隨獨鶉其足而舒其翼人多畜之使鬪有鶉之雄頗足戲玩また小き布袋に納れ身邊に近つけ放ちて養ことなども記したり此戯はこゝにてせさる事なり唯放し飼にすることもなし此外の鳥は放ち飼にする事古くもありしなるべし

鶉闘

放ち飼

○【窓のすさみ】阿部豐後守忠秋朝臣執政たりし時鶉を好て多く集めおかれしに其國富る人世上に第一と聞ゆる鶉を持しが朝臣の御許に進らせ度よし立入候列大夫に申置けるを或時折よかりしにや其事

水陸鳥問屋のこと

○享保十年巳正月水鳥問屋六人陸鳥問屋八人飼鳥や只今迄之通商賣不苦候段先達て申渡候へども飼鳥も陸鳥の內に候間陸鳥問や八人の者計引受候事に候依て飼鳥や共上方幷在々より直荷引受候儀不罷成候陸鳥問や共より買請商賣致候儀は勝手次第に候同二月廿七日飼鳥の內下り問屋と唱候その四人は只今までの通直引受いたし陸鳥問や共八人より改を請商賣致候樣其外は直荷引受申間敷仰渡さる飼鳥も陸鳥なれば諸方より引受は陸鳥問屋のする事ながら飼鳥屋の內下り問屋と唱るもの四人ありて是は鶯こま鳥小つはめみ山ほゝしろ等を京大坂奈良郡山等より直に引受をする事なり其他はみな陸鳥問屋より買請て商賣すべしとなり事繁ければ略之（其已前は鳥問屋小田原町のみにあらず所々にあり茅場町藥師堂の邊七八軒あり瀬戸物町室町二丁目横町神田須田町等にありしか小田原町へ引たるなり）貞享四年卯二月魚鳥の御觸あり、せと物町安針町須田町連雀町湯島本郷彌左衛門町新右衛門町新肴町宇田川町芝井町麴町へしめ鳥の有數書出さすることあり【胸算用】せと物町麴町の雁かもさながら雲の黒きを地にはへたるが如し

鷺の目を縫ふ

○貞享四年發句合【續の原】桃青の判跋に判士よたりに乞て我も其一にしたがふまことや樂にゑらるゝもの笛をぬすむに似たりといはむされとも青鷺の目をぬひあふむの口を戸さゝむ事あたはず云云今水鳥屋にては鷺の目を縫ふなり

鶉合

○鶉合は歌に多くよめども飼鳥にする事古へは聞えず後世慶長より寛永の頃鶉合大に行はれし事其ころの草子どもに往々見えたり【犬子集】に籠もちつれてかへるさの袖幕るより鶉合やみてぬらん又【發句帳】（貞德）詰籠てもしくはくはひとなく鶉かな（詩歌會の心にや然らばしかくわいと書へし）又鶉の啼聲に七ツさかりといふ事あり【籠耳】に大藏といふ能の狂言師鶉をすきてかけるある時江戸へ下る道中はたごやの門に籠に入て鶉の挂てあるをふと聞ければなく聲ふとく七ツ下がりの名鳥なり大藏聞と

を天皇喜び給ひて天湯河板擧に勅して其鵠を捕へしむ擧津別の命此鵠を奉び遂に言語することを得給ふ是に由て湯河板擧に姓を賜ふて鳥取造と云ふ亦この時鳥取部鳥養部を定らる

鳥屋　付子　鳥さし

○鳥屋【人倫訓蒙圖彙】に小鳥屋諸の飼鳥を商ふ其外鶯鶉等の鳴鳥をもては諸方の鳥に音付をするなりといへれどよき鳥の音をうつすは鶯ほゝじろ等なり、これを付子ともいふ鶉はうつさぬものなり頬じろは虫つけとて鈴むし松虫などに付ることとあり小鳥屋といふもの古へは今とは異なりとみゆ【職人盡】に鳥さし有其歌に「春は又ところゝ花の千本にみせおくたなの鳥のいろ〳〵」鳥さし即小鳥屋なり鷹の餌などにも賣しなるべし【懷子】(十)見そめたりしは菅笠の内花の木にさいとりさしのねら寄て同集(八)菅の根の長き笠の緒引しめてさいとり棹にかゝりぬべき花【後撰夷曲集】はからめをためつけよりてさす竹のやぶにらみとはこれも申さん【櫻陰比事】に西の京なるゑさしの上手にさゝせける鳥さしむかしより西の京にあり後世は鷹の餌の取る故に餌をさしと呼り江戸の餌さしは餌鳥屋の鑑札をうけて出るとなり

○【俳諧綾錦】見送のかねも尾上も有明て茶の烟遅く一ツひよどり尾上のかねにひよどり鵯を付たるなれど鳥さしの學びするはやしこととなり

江戸鳥屋の事

○江戸にて鳥屋の定め有しは享保三年戊七月廿三日鳥問屋十人町中にて致吟味相極可申由月番藤左衛門方へより合せと物町安針町すだ町新石町其外鳥屋有之候町々鳥や共名主呼よせ瀬戸物町鳥問屋五人相定残り十人くじとり仕候内五人相究十人書付外五人別紙書付さし出す右之外餌鳥上候者七人外には八人都合十五人有之候處七人之者共御餌指集斯鳥共請負度旨御鷹匠頭へ相願候て七人に相極十人の問屋方にて札請取餌鳥[illegible]帰出候旨之事その頃西村斎之助と云ふもの鳥餌さしを似せ在々所々にて百姓より金銭を取しがあらはれて刑せらる

まめうましとはたれもさそひしりきことは何をなくらん又【下學集】にまめうましよりと有り次にいふひしりこきも此鳥の啼聲なり伊勢にてしいのごきと云ふもこれが啼聲によれり聞なしにて異なるなり【和漢三才圖會】に春月能囀如言比志利古木利ともあり山からにも似たることあり光俊が歌「山からのまはすくるみのとにかくにもてあつかふは心なりけり（此とは異なれ共あしりこきと云ふことあり【寛永發句帳】親重が「句かたわきて降夕立やあしりこき又【油滓】上にかた／＼下にかた／＼紅葉ばをふまじと人のあしりこき、あしりは足後なりこくは腕をこくなどのこくにて片足にて片足の踵をこくにあらん）

昔の鳥籠　鶯受取り渡し

○昔の鳥籠は今の丸き虫籠に似たり鶯うけ取渡しの事【貞順故實集】（天文永祿頃の記）鶯の事右にすゑ候て置狹間を人の前になし先緒をとき蓋をあけ左の方にあふのけ置籠を右にて上疊ツ足の方を人の前へなし蓋に据候てこおひを取我前に置さて蓋共に鶯を桶の上に据上候て見せ申扱こおひかつけ鳥を桶に入蓋をして緒を結渡し候又緒を不結して渡候も能候請取候人緒を結候ても能候少略儀にて候といへり籠丸くして鞠の如く下の臺に足三ツあり虫籠の臺の如し曲物(マゲ)の外家(ソトイヘ)あり桶といふは是なり蓋あり身まろき透しあり狹間といふは是なり緒は諸の箱の緒の樣にかた／＼は輪になり端は二つなり圖は【職人盡】に見たえり

鶯はうぐひすにあらず

○思ふに古來うぐひすに充しは誤にてたしかなる漢名もなきにや清の俗名には柴鷯鴿といふとなり成安が【埋草、卜養千句】花はなど火花ちらさん花軍籠に入來てうぐひす鬪

鶯の產地

○うぐひす奈良に出るを上とす信州なら井の產これに次ぐといへり江戶には大塚村の產をよしとす近時准后宮その所を鶯村と命ぜられしと歟

鳥を弄ぶ事

○鳥を弄ぶと【垂仁紀】二十三年冬十月譽津別皇子鵠(クヾヒ)の鳴て大虛を渡るを見給ひて始て物言ひ給へる

は食料とする事古も異なる事あらし兎にも今かりかも又かるともいふものあれどかりの子はそれらの卵にはあらず、鴨、家鴨は近きころまでも人の食はぬものなりしに今は夏月の珍味とし用る京師にても專ら用しは享和文化のころよりなるべし京人(香川景樹)の歌に、かも川に浮むあひるのあさな〳〵たらずなりゆく數ぞかなしき

鶯合

○鶯を合するは【莵玖波集】にさえかへりても春ぞかすめる(と云句に導譽法師)鶯の子がひすたちを啼あはせ「鳥の二に羽をかさねたる(と云句に關白左大臣)鶯のあはせの聲はこまかなれとあるも啼聲のよしあしを合するなるべし【卅二番職人】鶯飼の歌(題花)羽かせたに花のためにはあたこ鳥おはら巣だちにいかゝあはせむ(花の名所大原をいふなり然れども古歌におほはらとこそ詠と判詞にいへり鶯も大原はよきにやあらん)又(題述懷)すゑありてよきうぐひすもまんすればやかてとび鳴するもおそろし(すゑありては今俗に引のあるといふなるべし)【嘉多言】に鶯の子を巣よりおろしてよき鳴の雛にならへて飼そたて得れば程なく其聲を囀るといへり其聲に三光を鳴をよしとすといへり

三光

【正章獨吟】鶯も三皇の御代をはつ音かな貞德が判に長歌月日ほしととなふる鳥の三くわうをおもひかけぬもろこしのむかしのみつのすへらきに云々【櫻陰比事】に鶯の殊更に囀るに三光あり〳〵と聲のあやきれしたる【雅筵醉狂集】に鶯の月日星となくを俗に三光と稱するなり【片言】に日月ほしと鳴くとごきふせうとなくは同じ鶯なれどもならはしからにてよくもあしくもなる【堀川百首題狂歌】よみ人不知「山さとや非時過ぬれば鶯の鳴なる聲は五器ふせうとか三光と呼種々あり鶯の聲は三光を呼とも聞えぬものなり日光山の三光鳥は月日星と啼山鵲は月日星々とかさねて桑鳴は月星となけども是も三光鳥の名あり此鳥に豆をあたふれば嘴にてはさはす故に豆廻しとも呼といへどもさにはあらず家隆卿は鳥を好まれし人なり【著聞集】に二條中納言定高卿いかゝるかを家隆卿のもとへ贈るとていかるかよ

に作るは誤なり又【尺素往来】に五月五日賀茂競馬井深草祭上下之見物鶯鴨之鬪鳥可有此時歟（鴨合は五月二日と有に近けれど）【和名抄】に鵯（和名）比衣土里とあり此鳥鬪ふことを聞ざれば是鴨は鴨字を誤れるなり但し鶯鴨とあれば鶯合の如く鴨も啼聲を合せしにやとも云へけれどさにはあらず著聞を考れば聲を合するに非ざればこれも然るべし又【著聞】に宮内卿家隆ひさうのひよどり荻の葉といふを子息侍從隆祐にあづけてかはせけるをとりにやるとてやまといふ鳥をかはりにやりたる贈答の歌あり荻葉端山は鳥に名づけしなりこれにひよどりとかなにかけるもあてぬ文字を鴨字に誤りてそれをかなに寫しゝものならん同書に後久我太政大臣家におもながといふ鴨（鵯）の有けるを家隆卿所望せられけることもみゆれば荻の葉といへるものにや

あひろ
かりの子

○【吳志】に孫慮於堂前作鬪鴨欄ことみゆ又鬪鴨の詩賦など往々あり【五雜俎】云古人有鬪鴨之戯今家鴨豈解鬪耶といへり家鴨はあひろなりおもふに野鴨は水中にあらずば鬪ふことあるまじ今こゝの鴨合とあるは家鴨なるべし【著聞】に鴨合の集を記したるにかりやの東の砌に第一間にあたりてかさしの花の臺をたてゝといへりかり屋は假屋ならず鴨屋なりかりは今いふあひろのことゝみゆ卵をかりの子といふ是なりかりの子とりの子とはいひたれどもかもの子といふは聞えずしからばこの鴨合はあひろなることと知べし【五雜俎】に鬪を知らぬよしいへれどあひろも互に見馴れぬ鳥は鬪ふものなり【蜻蛉日記】にかりの子のみゆるをこれ十ヅヽかさぬるわざをいかでせんとてまさぐりにすゝし糸を長うむすひてひとつむすひてはゆひ〳〵してひきたてたればいとようかさなりたり【源氏】（槇柱）かりの子のいとおほかなるを御らんしてかんしたち花などやうにまきらはしてわさとならす奉り給ふ「おなしすにかへりしかひのみえぬ哉いかなる人か手にゝぎるらむ【伊勢物語古今六帖】にはとりの子は何にまれ廣くいふべけれどこれは鷄卵をいふかりの子はあひろの卵なるべし鷄とあひろは常に人家に飼て卵

しやむ

○しやむとはもと暹羅より渡りし鶏なり暹羅は南天竺の内にて唐山より西南の方に當れり草臥國の屬國といへりこれをシヤム又シヤモとも呼こゝにいつの頃わたりしか定かならず外國は鶏を常に食料とすればいつも船上に載來る故この鶏も早く渡りしにやされど古書には見えず【大和本草】に暹羅鶏紅毛鶏は外國より來れりとのみいへり西鶴が【大鑑】にむかしの芝居若衆（坂田藤之丞などにや）しやむの鶏合を好みたることを載たり（若衆歌舞妓は明暦二年に停止せらるそれより以前の事なり）この

野郎遊女が鶏合

戯男子のみにあらず【五元集】闘鶏句合島原へはや人やりの鶏行事判云名高き君どもおなじくよき鳥をもとめてものしけり所々のあらそひに人やりに合せ侍る芳野唐土などが鳥には翅に薫物し爪紅粉化粧して花美ことに人の心をなまめかし迷はせければ後法度になりて鳥どもみな放ちやりぬ云々いへるは寛文延寶ころの事にや薫物爪紅粉は羽芥金距にことかはり風流には聞ゆれど遊女の戯には似氣なしむかし世にはやりしことと是にても知らる【昔々物語】に昔は三月には男子鶏合とて鶏を持出て合すとあり又貞享頃にもしかりと見えて【日本歳時記】の繪にかけり正徳元年卯五月二十一日近き頃町中にて鶏合の會を致し其黨の町人等數十人組合屋敷方へも徘徊いたし候由さた相聞え云々右様の儀仕間敷御觸あり

小鳥合

○小鳥合は【著聞集】に、寛治五年十月六日殿上人所衆瀧口小舍人左右をわかちて小鳥合の事ありけり公卿はまゐられず殿下三位中將ばかりぞさぶらはれける殿上人左方頭中將仲實朝臣右方中將宗通朝臣以下夏の袍ともに冬指貫をぞ着たりける左勝て殿上にとゞまりて朗詠今樣雜藝などありけり右はみな逃ちりにけり小鳥は後に院へ參らせにけり

鴨合

○鴨合は【百練抄】云高倉院承安三年五月一日於上西門院有鴨合近習上達部上客殿上卿下官等分左右爲合人裝束目之義賞當時壯觀有勝負（此時の事も【著聞集】に委しく見えたり）この鴨字を鶏字

虫目鏡

吹以鹽湯浸洗則愈こゝの呪は何のみゝずにても取て洗ふに功驗あるも奇ならずや

○虫めがね【洛陽集】虫めがね老の波こす螢かな【燕展】むさし野はむさしのなりけり虫めがね（行正）【續山井】よりてこそそれ蚊ともみめ虫目がね（寛種）水底の月やもにすむ虫めがね（安信）西洋鏡の顯微鏡は高價なるをこゝに學び作れるには小兒の翫具もあり

闘鶏　しやむ　野郎遊女が鷄合　小鳥合　鴨合　かりの子　あひろ　鶯合　三光　鳥籠古製　請取渡し　鳥屋　鳥さし　江戸鳥屋の事　鶉會　あひ夫　放し飼　鴿　はとの聲　梟の聲　白鳥しとゝ　瓢のねぐら　鵙の草窒　鵙おとし　つく落　媒鳥　寒苦鳥　諸鳥飼

闘鶏

闘鶏の事【雄略紀】七年吉備下道臣前津屋以小雄鷄呼爲天皇鷄拔毛剪翼以大雄鷄呼爲己鷄著鈴金距競令闘之とありこれ【左傳】に季郈が闘鷄の事をいふに季氏芥其羽郈氏爲之金距と有此法を用ゐしなるし【和名抄】に【玉燭寶典】云、寒食節城市多爲闘鷄之戲（闘鷄此間云止利阿波世）【臺記】に天慶元三月四日闘鷄十番有之これによりて後世專三月の節物たり殊に好みたるものはいつと定りたる事はべらず唐には明皇本邦には相撲入道など尤これを好めり今禁中には每歲三月行はる【日次紀事】云禁年裡清凉殿南階前有闘鷄諸家中雲客被出之仙納彌市預此事決勝負是亦稱行事【御傘】に云鷄合は夜分あにあらず三月三日にある故に春に成といふ說ありたしかなる節會にあらず【平家物語】にも三月ならでせし事あり【禮記】にもこの事あり京童はいつもする事なれば雜にして置べき歟しやむといふ鷄ありわきてよく闘ふ故にこれを闘ふと名づく【秘傳花鏡】云一種闘鷄似家鷄而高大勇悍異常諸鷄見之而逃其以冠平爪利者爲第一每闘雖至死不休好事者畜之於深秋開場賭博先將兩鷄形狀稱得大小相當方放入園場聽其角闘每以負而叫走者爲敗養法闘後須用長鵝翁一根插入鷄口絞出口內惡血安養五七日再闘則無損傷之患雖令勝者亦不可使之連朝狼闘草鷄雖雄多望風而靡云々草鷄は常の鷄をいふなるべし

勝れる處あり）【群碎錄】に媽々北地馬群每一牡、將十餘牝而行、牝皆隨牡不入他群、故今稱婦曰媽々、蝗亦不入他羣、故爲馬蟻一名玄駒といふ說もあり【廣東新語】に潮州大馬蟻山有蟻岬峒、歲五月群蟻來朝

蟻の塔

○また蟻の塔をくむ事【五雜俎】人有掘地得蟻城者街市屋宇樓堞門巷井然有條【唐五行志】開成元年京城有蟻聚長五六十步濶五尺至一丈厚五寸至一尺可謂異矣蜂亦有之おもふに蟻の塔そのまゝにして置かば次年も又蟻集るものならむ【帝京景物略】南海子の條、海子西北隅、歲清明蟻日億萬集、疊而成丘、中一丘高大、旁三四丘、高各數尺、竟日而散去、今土人每清明節、往郡觀之、婦曰蟻墳（傳是遼將俊食、至軍沒此骨不歸矣、魂無主者故化爲蟲、沙感于節序其有焉）こゝに時々觀場にある事ありこれは香具造なり其法土の中へ砂糖を雜へ塔を造りて蚊を集め居らしむるなり

あはれ蚊

○蚊【物類相感志】九月蚊子嘴生花また【代醉編】に古諺有云、霧淞而蟹螯枯、露下而　喙折こゝにて八月あはれ蚊と云は喙の折る前なり花の如きもの出ては人を刺す

蚯蚓の鳴き聲

○蚯蚓は鳴ものにあらず土中にて鳴は螻蛄なりといへれば是はおぼつかなし鳴く蟲を尋ねみしが螻蛄は見えず猶みゝずなるべしその鳴ことは古人もいへり【虫の歌合】此ごろはつちの中なる住ゐして君おすかたもみゝず鳴なり【吾吟我集】目をもたぬむしのごとくにねをぞなくすみゝしらさる人をこふとて

蚯蚓陰晴を知る

○【本草啓蒙】に本草原始に雨則先出、晴則夜鳴、因知陰晴、故俗有地龍之稱、夏月晴夜地中にて鳴其聲長くひきて間斷なし【太倉州志】に蚯蚓半夜作聲雨時、有蚓竅但鳴螻之句、蓋今所謂曲蟮非鳴者非是、其鳴者乃螻蛄也と云へり然ども此詩句に據れば螻蛄の鳴は雨ふる時にありて其聲短し蚯蚓の鳴は晴たる時にありて其聲長し自ら分別ありといへり蚓の聲を【花鏡】に蚓笛と書たり

蚓笛

小兒陰腫

○こゝにて小兒の陰にふるゝ時はみゝずを取て洗ひはなつ說あり【興化府志】に小兒陰腫、多以爲蚯蚓所

は蜉蝣なり【和名抄】にひをむしとあり形とんぼに似て小く細き尾の二條あるは雄三條あるは雌なり水邊に多し人家の庭木などに居るは形小さしあぶら虫は豫州にてきらゝ阿州にてきらりなどいふきらら有故なり後羽化して飛その内一種白粉あるものをしろことといふ伊勢山田にておなつこしよろと云へり

蓑虫

○【清少納言】虫はの條におにのうみければおやに似てこれも恐しき心ちぞあらんとておやのあしきゝぬひきゝせて今秋風ふかんおりにそこんするまでよといひてにげていにけるもしらず風の音きゝしりて八月はかりになればちゝよ／＼とはかなげになくいみじくあはれなりこれ古への童が諺なるべし蓑虫のきぬ穢けきあら／＼しきもの故おにのすて子など云しことゝ見ゆこれによりておやに似ぬ子はおに子と云ふ諺も古きを知らる【續虛栗】親は鬼子は口おしき蓑虫よと云其角が付句あり

鬼子の諺

蟻の熊野參り

○蟻の熊野參り【長嘯子】虫の「歌合なさけなき君が心はみつの山くまのまいりをして祈らましそのかみ熊野に人多く參りしかぼかゝることわさあり古きことゝ見えて【家長日記】元久三年京極殿うせ給ひ攝政殿夢のやうにて上下北面の人々馬車にてはせちかふさまありといふむしのもの參りとかやするにこそよう似て侍りしが是には唯もの參りとあれど熊野參なるべし【似せ物語】にもとより酒のことは飲ざりければすまひけれどしゐてのませければかくなん「酒かめのはたにならへる人おほみありのくまのへまいるなりかも【犬子集】月にからすのおくる古みやありわらが熊野參りは冷しやなとみゆ蟻はおそれをなして他のむれに入らず僅ばかり隔てし處の蟻もおそれことゝなるをば必ず殺すものなり戯に

蟻の合戰

砂糖などの甘みある物を紙などの上に載せ蟻のとをる處に置ば須臾の間に多く集るそれを取て他所の蟻のむれたる中に入るればくひあふに主客のきほひことなれば他より入る蟻は敗走すかくして闘はしめされどもとより集りて戰ふものなり【五雜狙】云蟻有黄色者小而健、與黑者鬭、黑必敗僵屍蔽野、死者輙舁歸穴中、喪亂之世戰骨如麻、人不及蟻多矣（此ことかはづ合戰のさまに似たりありもかはづも人に

松虫の卵を取る

月の初ころ包みをとき蓋上より日にあて置ばやかて土中の卵かへりて微細の虫数多生出て日を重ねて大になる時瓶の内狭き故他の器に分ち置べし虫小きうちは瓶のふた紗の類を用ひてよしそだつに随て籠に移すべし紗などをば咋破るなり餌は茄子を用また細き葉の草に水を洒ぎて入置べし茄子なくなる頃には虫も死するなりかくすれば年々絶ることなく多く出来るものなり松むしは此しかたにてはかへらず【帝京景物略】に促織秋盡則盡、今都人能種之、留其鳴深冬、其法土子盆養之、蟲生子土中、入冬以其土置煖炕、日水灑綿覆之、伏五六日土蠕々動、又伏七八日、子出白如蛆、然置子蔬菜仍灑覆之、足翅成漸以黒匝月則鳴、々細于秋、入春反僵也これも大かたは似たる法ながら水を灑ぎ煖むる故ことなるべし

○松虫の卵を取ることは寛政七年の比江戸にて何人か考て始むと云按るに【備前老人物語】に松永弾正忠松虫を飼けるにさま〴〵に養ひければ三年まで生けり況や人間日用の養により長命ならんこと疑べからずといはれしとなりとあり養生はさることながら松虫の三年生たりとはうけられぬことなりこれ極て其卵をかへして養ひ年々其法の如くせしなるべし

螽を飛す

○児戯に土蚤また蟿螽を糸につなぎて飛せて遊ぶ【促織志】に螞蚱之種三俱不鳴青質而黄身躍近而飛遂飛、則見其襞羽・或紅爲或黄爲云々、嬉者股繋而提之、使飛不止以視其襞羽といへり【金瓶梅】(十八回)與月娘・孟玉樓、潘金蓮、并西門大姐四個、在前廳天井内、月下跳馬索兒とあり馬索は螞蚱なるべし跳らせて襞羽を見るなり

ハケ虫

虫の病を医する

○【六攻襲抄】に朝生暮死る蜉 と云は童部の打殺してかしらにぬる なり童部はふようびとこいふ秋の枝などに付く油虫といふ青き虫長く成て羽の生たるをふようびと名づけて頭にぬるあぶら虫なれば童のきぬに付故か貫ぬ蜉それにはあらず【淮南子】曰蜉蝣不飲食三日而死といへり許慎曰、蜉生暮死蟲也、生水上似蛺蝶と云へり此の事今世に言凄を用ひねもいなければ田舎の児女もかゝる戯れをするもいあらず朝蜉

【幽遠隨筆】に知呂林と鳴を松虫といはんこと據なきに似たりこれはいつの頃よりか流俗虫の名を取ちがへ松虫を鈴虫といひならはしたるを考へたゞさずしていへるなるべし松虫の音は松風の凛々と響あへるにたとへたればちんちろりと鳴は鈴虫なり法師の鈴といふものをふる音によく似たればなり和歌にも松虫の音を松風にたぐへてよめる多し爲顯百首「琴の音にかよふは峰の秋風をなほ松虫の聲やそふらん慈鎭和尙住吉の社百首に「住吉のいかきのもとの虫の音におのか聲にも松風そふく云々いへれど和歌には鳴聲などわかちよむものもなければいかほど引ても證としがたし

虫籠藤花

○【雅筵醉狂集】糸はきや虫籠にかけし藤の花（注に鴨の社人の細工に虫籠を組て其上に白と紫の糸にて藤の花を結かくるなり）【雍州府志】に下賀茂社司婦人、造養松虫鈴虫之籠其式纖細刳竹爲之以紫白糸作藤花云々）むし籠を虫屋ともいふにや【續千載集】從三位氏久虫屋を作り資季卿に贈りし歌見てのみやちとせもあかず聞ふらむわか神山の松むしの聲また麥わらの籠は【花鏡】紡績娘條に以小稭籠盛之、挂於簷下云々、以瓜穰飼之などみゆ稭はむぎわらなり釋求光といふ者蟬をきく詞に松むし鈴虫果は麥わらの家に臂を屈め風鈴のかたはらに長夜をまもる

虫屋

麥稭籠

○漢土にも松虫鈴虫などは琉璃瓶などに入るゝと也しかるをこゝにてそのかみは稭籠などを下さまに用ひたり質素なることとなり

虫を商ふ者

○むかしは虫を商ふ者などはなかりしなり【貞享四年日記】六月十三日きり〳〵す商賣いたし候者相尋候町々覺四谷麴町本鄕湯島神田すだ町二丁分相尋候處一人も見え不申とありそのころさるものゝあらんとおぼしき處を尋ねしなり

虫を種る法

○秋の末に小瓶に土を入て其內に鈴虫の雌を移し線子はりの蓋をおほひ日なたに出し餌を飼日を經れば衰へ死するを其儘にして蓋をおほひ稻草にて包み雨露のあたらぬ土の上に置【緣の下よし】翌年五

に凡都人闘促織之俗、不啻閭巷小兒也、貴遊至曠厥事豪右、以銷其貲、士並其業、今亦漸衰止惟嬉姹兒女
闘婦未休といへり（【陶説】に宣徳窯、蟋蟀盆云々、亦有饒命蟋蟀盆【吳梅村集】有歌云々、當時市促織之
戯、勝負至千百不惜重直購盆、故精巧如此因獨陶器といへり思ふべし）【懐子】貞徳が句　一鳴むし籠おの
が住野やちがひ棚

鈴虫

松虫

○【源氏】【鈴虫巻】すゞむしのふり出たる程はなやかにをかし秋の虫の聲いづれとなき中に松虫のなむ
すぐれたるとて中宮のはるけき野べを分ていとわざとたづねとりつゝはなたせ給へるしるくなきつた
ふるこそすくなかんなれ云々鈴虫は心やすくいまめいたるこそらうたけれ【年山紀聞】に賀茂の神官
云々松むし鈴むしおの／＼聲によりて名づけたり色をもていはゞ黒きは松むしあめ色なるは鈴むし
（賀茂の神官虫撰して林裡陸中に奉ることとふるくよりしかなり）關東にてはとりちがへておぼえたりと
いへりされど【大和本草】には松むし鈴むし江戸にておぼえたるごとく記しゝはいかに宗鑑が【犬筑波
集】はなの下にも松むしの聲はひげをちんちりりんとひねりたて【猿樂の野宮】に松むしの聲りん／＼
（唯りん／＼と計りは松虫鈴虫いづれも云べし今も歌唄ふ聲よきはりん／＼といへり）又【枕下俗】に誰

ちんちろり

をまつむしちんちろりん【堀河百首題】狂歌「なか／＼としやつきとしたる髭をなとちんちりり
んとひねる松むし」【懐子】（九）虫の音や名におふ松のちゝりちん（玖也）同（十）春よ秋よといつの間にや
ら千日せし野べの松むしちんちろり（不存）【續山井】松虫のちんちりろせぬ聲もかた（一六軒）につる松
虫籠やちんぷちりの不む　此外鈴虫の發句もあまた見えたれども一ツもちんちろりなといふはなし是に
てちんちろりんと鳴に誤むしたる事證すべししかく後までも誤ちきりしを京師には【年山紀聞】のころよ
りふと誤りしことゝ見ゆ【和漢三才圖會】松虫褐色而有黒斑云々、鳴聲細清如言知林知林、鈴虫黒褐鳴聲如
振鈴言里々林里々林また【世話燒草】に鈴虫松虫の外にチンチロリ虫を出せるは俗呼の誤しき故なるか
丈杜撰といふべし黒色なるは和名金鐘兒是鈴むしなりあめ色なるは金琵琶といへるもの是松むしなり

虫吹

促織

蟋蟀 蜻◎

虫をとりて籠に入て內裏へかへり參り萩女郎花なとをそ籠にかざりたりけり中宮の御方へまいらせて後殿上にて盃酌朗詠なと有けり歌は宮の御方にて講せられける簾中よりも出されたりけるやさしかりける事なり又【年中行事歌合】注に撰虫といふはあながち式ある事にはなけれ共殿上人の逍遙とて嵯峨野なとへ向ひて虫籠にむしを撰み入て奉りけるなりとみゆ(年中行事歌)いろ〳〵にさかのゝむしを宮人の花すりころもきてそとりぬる)【貞德文集】晚景吹可罷出候黑月闇無用心候へ共盆前は墓參仕る者繁候而路次賑敷候行燈挑灯聚置候へ者促織松虫蛬幾等も寄聚候按ろに虫吹とは今も虫を取に竹筒のかた方に紗のきれを冒これをもて虫を覆へは虫は上のかたに飛のぼるを籠また袋なとに筒さきをむけて冒たる紗のうへより息して虫を吹こむなり【開元天寶遺事】云每至秋時、宮中妃妾輩、皆捉蟋蟀閉養小金籠中置枕函畔聞其聲庶民家皆效之蟋蟀は促織にてつゞれさせと鳴むしにて晝夜ともになく物なり今京師にていとゞといひ諸州俗名甚多し一種形の大なるを京師にてこほろぎといふ是は晝のみ鳴ものなり【促織志】に油胡盧といへる是なり以上本草家の說なり今按に【和名抄】に促織(和名)波太於里米兼名苑云、絡緯一名促織、鳴聲如急織機故以名之とあればいとゞにはかなはず是今世にいふきり〳〵すにや蟋蟀(和名)木里木里須兼名苑云蟋蟀一名蛬とあるはいとゞなるべし蜻蛚(和名)古保呂木【文字集略】云蜻蛚とあるは蟋蟀の形大なるおにこほろぎにて所謂油胡盧なるべしこは【和名抄】に載る處に據て云のみされどいづくも名物の稱呼古今にてたがひぬればいづれを是とも定めがたし猶よく考べし(【萬葉】(八)ゆふつくよこゝろもしぬに白露のおくこの庭に蟋蟀鳴毛きり〳〵すと訓ては集中しらべとゝのひがたきが多し故に眞淵はこれをこほろぎと訓り)漢土にて後世促織といふものを專鬪しむる戲あり其事【袁中郎文集】また陸次雲が【鬪將軍傳】なとにあり賭をおほくかけて勝負を爭ふなり【五雜俎】に張廷方といふものがこれが爲に家產を破たる物がたりあり明の崇禎の頃には此事すたれたり【帝京景物略】

ゐかはりて

蛛の灸

○「狂歌咄」に平俊方朝臣の家お犬といふ女房灸治に泣ければ俊方よまれける「蛛だにもすゆるやいひ火に聲はせずいかにわびしきいぬの長ぼえ」蛛のやいとは火ともし蛛をいふにや是は山中樹間に網を結びてゐる常の蛛の如し晝もかくれず是【本草】の花蜘蛛なり

腹きり蛛

○又土中に三寸許の空を掘り巣を作りて居る蛛ありその巣の端少し土の上に出たるを撮みて捻をかけながら引抜は蛛窠の中に包まれて川袋の中にて足を搖しもがく故われと腹を破るものなり是に依て腹きりくもと云ふ又空くも袋くもなど多く名あり本草には蟷蟷といへり

あまのじやく

○又あまのじやくといふ虫あり春夏の頃地上に小き穴あり燈心に油を蘸して空に入るゝ事二三寸にして燈心の動くを見て引いだせば小く細長き虫の身白く首白き吳公の形したるが燈心にくひ付出つ身を屈曲れば背に高き所あり故に漢名鈎駱駄といへり

水馬を釣

○小兒水馬を釣ることは【五雜俎】にも見えたり水馬淮呼蝴以髮繫蝴餌之則擒抱不脫釣至案几而不知也

虫撰

虫撰　虫吹　促織　鈴虫　松虫　虫籠藤花（虫屋）麦虫籠　虫を種法　螽を殖す　虫の油を製に

ぬる戯　簑虫　蟻の熊野参　あり合戦　蟻の塔　あはれ蚊　蜉蝣　小兒陰睡　虫目鏡

【源氏】（野分）わらはべおろさせ給ひて虫のことにも露かはせ給ふなりけり云々四五人ばかりつれてこゝかしこの草むらによりていろ〳〵のこともをもてさまよひ虫を飼ふさまなり虫をえらみて奉ることは堀河の御時なとに起れるか【著聞集】嘉保二年八月十二日殿上のをのこども嵯峨野に向て虫を取て奉るべきよしみことのりありてむらこの糸にてかけたる虫の籠を下されたりければ貫首已下みな左右馬寮の御馬に乗てむかひける藏人弁時範馬のうへにて題を奉りけり野徑尋虫とぞ侍ける野中に至りて僮僕をちらして虫をばとらせけり十餘町ばかりはをの〳〵馬よりおり歩行せられけりゆふべにをよんで

蟬脱

に入て鳴する事をせず籠の内にても鳴ものにや忽に死すべし蟬脱は蠐螬の土中にありて蛹と成れるを腹蛸といふ指にてつまめば腰より上のかたを左右にふり動かすを興じて小兒これをとりて西はどちといふなり又西むけとも名付これが土中にて蟬と化り土より出て樹木に上り脱たる殼を蟬脱といふ空蟬是也然るに【俳諧西武】の句に「から／＼に身はなり果て何とせみといへるは誤りなりかやうに心得たる往々あり後ながら文章が「脱がらにならひて死や秋の蟬といへるはこともなし

西はどち

つく／＼ほうし

つく／＼ほうしは「蜻蛉日記」に八月ついたちの日雨ふりくらすひつじの時ばかりにはれてつく／＼ほうしいとかしかましきまでなく「小野宮右衛門督家の謎合」はきものならへたる祈りの師「はきものを二ツならべてつとめこしくつ／＼ほうしいつこなるならん（重ねていふ襪はくつ／＼もつよりいへばつく／＼となるつく／＼ほうしもほうしより聞なすときはほうしつく／＼となれり）

蜻蛉を捕

小兒蜻蛉を取らむとするにをんやまつるみしほやかねやといふことは陀羅尼を學へる祝ひのやうなるもをかし「沙石集」に東大寺の法師信救、山法師の事を一卷の眞言に作り陀羅尼を說て曰唵山法師腹黑々欲深々あらにくや娑婆訶

○「帝京景物略」云蜻蜓之類三、大而青者曰老青、紅而黃者曰黃兒、赤者曰紅兒、好蘸水而飛々、童圑竹結綵線網、曰綾循水、次群逐而撲之、名呼以祝曰猶栖、撲著曰綾着、得一日一朶、以色玩如花也

○「和漢三才圖會」曰小兒維雌鉤雄爲戲、江戸の小兒しほやかねややんまかへせと云て釣もし竿にても取る也しほはしほからとんぼ身黑白糝あるものなりかねはかねつけとんぼにて黑くして紺の色なるものなりいづれも胡黎の一種なりやんまはゑんまともいふとんぼの總名なれども其内殊に大なる青きものを名く「本艸」にも蜻蛉は總名なれどもこれを指て名つくるがごとし「懷子」（五）立わかれいなばのやんまかへせやまとんぼかへりとてかへるものなれどこれはよびかへすなり又「袖に付衆か尾花にかねとんぼ「犬子集」白きものこそ黑くなりけん一句に付句五十句ある中に貞德「ぬり蝶にかねつけとばう

夜の星とものせしもいひしらす思ひたどりぬされどこの虫も夜こそあれ晝はたゞことやうに夜のひかりにはけおされておとれる虫なりまいて手にふれ身にそへてはあしき香うつりきぬ手には闇を握り身には百和の香をぬるわかうと君の前にては心あるべき虫のかならし薄ぎぬの器は紗など貼たる籠なるべし〔秋長夜物語〕れいの童さきに立てきよたふのちやうちんに螢を入てともしたり其光かすかなるに云々（魚腦は魚魫とて魚の腦骨なりこれを煮て琥珀の如くなるを燈籠に作るとなり）〔荻原隨筆〕に青竹の筒に螢を入て蓋をして見るに外に光あらはるゝと云ふ

宇治の螢合戰

○螢合戰は〔狂歌咄〕に卯月の末つかた〔宇治〕とゝは螢の集りえたらぬ興を催せり餘所の螢よりは一きは大にして光りことさらにみゆ世にいふ頼政入道が亡魂にて今も軍する有さまとて夜に入ぬれば數十萬のほたる川面にむらがり或は鞠の大さ或はそれよりも猶大に丸かりて空にまひあがりとばかり有て水の上にはたと落てはら／＼とゝけてながれ行こと幾むらとも限りなし【正章千句】に細網をもちかよふ夏川、螢こよといふ聲波に響きわたり〔續山井〕に火廻しおせたから宇治に行ほたる（業下）〔和漢三才圖會〕に（本文漢字なれど今かなにうつす）石山の溪に螢多して常のよりは大なり此所を螢谷と呼北は

石山螢谷

勢多の橋南は供江ケ瀬に至る其あはひを群がり飛こと高さ十丈ばかり火焔のごとし又數百集りて塊ることあり大かた芒種の後五日より夏至の後五日までの間十五日ばかりを盛りの時とす其後下りて宇治川に到るこゝには夏至小暑の間をさかりとすまた一說に云小滿の後四日五日の間宇治勢田西智茂北宇喜多社及水上村に螢多くあり一時の壯觀なりといへり東國には下野佐野を名所とす（上州にて小兒螢を呼にほうたろこうおのがてゝの谷子でおふら田の水くれう高崎の螢に烏川といふ河あり）

蟬を捕る

○蟬を捕ること〔秘傳花鏡〕鳴蟬の條に取者以膠竿首承之、則黏而可得、小兒多捕以爲戲、以小籠盛之、非於風露或樹杪、使之朗吟高噪、雖不容於園林也こゝの童兒らも竿に[illegible]蟬を取るも同じ鳴籠

○【枕双紙】兵衛藏人を御供にて殿上に人さふらはざりけるほどたゝずませをはしますにすびつの烟の立ければかれは何の烟ぞみてこと仰られければみて歸りまゐりて「わたつみのおきにこがるゝ物みればあまのつりしてかへるなりけりとそうしけるこそをかしけれかへるのとび入てこがるゝなりけりおもふに火のもゆるすびつの邊りにかへるののぼらんことあるべきやうなしひそかに燒てくひなどせしことあるか知べからず

○〔括異志〕陳宏泰家富於財、有人假貸錢一萬、宏泰徵之甚急、其人曰請無慮、吾先養蝦蟇萬餘頭、鬻之足以奉償、泰聞之惻然已其償、別與錢十千令悉放之江中

蛙を食

○〔天祿識餘〕(二)韓退之答柳々州食蝦蟇詩あり又按るに【周禮】蟈氏所掌蛙黽之屬【漢書】霍光擅滅宗廟羔兎蛙古蓋以爲上食といへり

かじか

○かじか〔北窓瑣談〕かじかと云もの近きころ人の希々養ひ樂むものなり聲さやかにて駒鳥に似たり廣きざしきなどには飼おきてよきものなり北山矢せ小原邊の谷川の流清き處に住云々〔本艸〕中に錦襖子と見えたる是なりとぞ形は雨蛙より少し大に瘠て痱瘰あり色黑し雨蛙に似て物に飛付て止る先年人のもとにてよくみて寫生をしたりしに其時籠より一ッ飛出て天井にとまれるやうあまがへるの如し指先まろくひらたし〔本艸啓蒙〕にその聲小にして淸く抑揚多し七返反すものを上とす好事者生籠を以て畜ふ別にその器ありといへり

螢狩

　螢狩　螢合戰　蟬を捉（西はとち）脊々法師　蜻蛉を捕　蛛の灸　蛛の腹切　あまのじやくを釣

螢がり〔異本四季物語〕石山寺の御卷數納めらるゝ事は廿日あまりになん有べしつとめては治部のかみ圖書こうろくわんの人をめしてそのかへりまうしに石山にまうてぬかへさには螢いくそばくろうすきぬのうつはにつゝみ入て宮のうちに奉ればこゝらの御すあるは御つぼのそこらにあまたはなされて晴る

稱爲蝦蟇衣とのみいへり按るにかへるは戰ふことあり〔續日本紀〕神護景雲二年七月庚寅、大宰府言、肥後國八代郡正倉院北畔、蝦蟇陣列、廣可七丈、南向而去、及于日暮不知去處、〔著聞集〕に寛喜三年夏の頃高陽院殿の南の大路に堀あり蝦數千集りておぎりてくひあひけりひとつかひ／＼くひあひて或はくひころし或はかたいきしてはらじろになりて有けり又も／＼多くあつまる事かぎりなしあるもの心みにくちなはを一ツもとめて其中へなげ入たりけるにすこしもおそるゝことなしくちなはも又のまんともせずにげさりにけり京中の者市をなして見物しけりふるくも蝦の戰はありけるとかや〔紅梅千句〕のどやかにけふの軍をやめよかし（政信）何にかへるのなきちからわざ（長頭丸）〔寛永發句帳〕軍場へ而出しせてやひきかへる（親重）〔犬子集〕花いくさ今をさかりと見えけらし蛙ほえぬる山吹のかげ軍にや男らたせてあまがへるあまたありて舉るにたえず蛙戰て死ぬるも多ければ兒童これを弔ひたるより後には打殺して弔らひしは蛙の合戰常にあらねばなり〔結毦錄〕にも記したりあまがへるとは蛙は雨を呼といへばなり〔百物語双紙〕今に子供までがあまがへるどのはいつ死に給ひたなどいひてとむらひける〔一代男双子〕秋のなかばから竿の音のみ里のわらんべねぢかごあまがへるの家なとして

蛙が目を借る

〇又醒睡笑（四）唯有の條大名の前にて座頭のひたものねふるを見給ひ何の仔細にそれほど眠るぞとあれば昔より春は蛙が目をかりると申傳へて候それはよき目の事に申候かや我らのやうなるあしき目をかり候はよく／＼蛙のより合に目のはやる仔細御座候やと申けると有按るに此諺は作當代の頃より蛙出ればなり蛙は目壁ものなれば（蛙を食ふ處ありてめすり鱠といふとか漢土には蝦蟇鱠と云〔關東新語〕にも見ゆ）人の眠りたき風情に見ていひし俗諺と聞ゆ後がさまをいひしは宗鑑が、下をついて歌申上ろ蛙かなまた其角が「附木屋の手なり足なり雨がへると、いへろいよ／＼をかし

蛙を釣

〇又ゑのころ草をもてかへるを釣とあり〔和漢三才圖會〕狗尾草原野多有之、小兒用之釣蛙戲者

も其身なぐさみ、こはや蜂花見の庭に飛落て

ウソフキ

○神代記に嘯字をウソフクと訓もウソを吹なりウソとは虚き意にて管などの器を川ひずして吹けばなりはとふくといふも同じことなるにや今いふ口笛なり〔狂言記拾遺〕の内にしぶ柿をくひたる者うそをふくことならずとあり唐詩に獨坐幽篁裡、彈琴復長嘯などいへるは希有のことゝも思はれぬを鄭明選が〔秕言〕に嘯法不傳久矣、頃得嘯旨、嘯有十二法云々、善嘯者、可以感百靈致風雨、按後漢書趙炳、嘗臨水求渡船、人不知之、炳乃張蓋座其中、長嘯呼風、亂流而濟、此其驗也、今江東舟人每喉中作聲、俗謂之呼風、亦嘯之遺意とあるに據れは是幻術に似たり爰にも蝦夷人はかゝるわさなすこれをこそふくといへり爲家卿の歌にこさふかばくもりもぞするみちのくのえそになみせそ秋の夜の月おほかた似たることなりされど趙炳がことはよのつねのことには非ず虎嘯谷風至るといへり巣居知雨穴居知風の故なりもし人の所爲ならんにはあやしむべし嘯旨は〔續百川學海〕(癸集)に收めたり序に孫濱より阮籍に傳はりて後嘯法湮ひたりとあり其書作者を著さず唐人なるべし都穆と云ものゝ跋あり

蛙の弔

○蝦蟇を投て蹴り殺し地に少坎をほり車前草を襯て死たるかへるをその上におきまた車前草を覆ひ小兒その周りに居てかへるとのお死にやつたおんばく殿の御とむらひと、聲々にいひて祝ふに須臾ありてかへる蘇る此こと古き事と見えたり〔毛詩〕采苢の郭璞か疏曰、今車前草大葉長穗、江東呼蝦蟇衣(陸璣〔草木疏〕にも車前草一名蝦蟇衣とあり)〔本草啓蒙〕に車前カヘルは(南部仙臺)また漢名を擧たる内蝦蟇葉(靑浦懸志)かゝれば陸奥にてカヘルハといふは彼兒戯より名づけて漢土の名に符合せしなり

蛙の合戦

【蜻蛉日記】(中)出こもりの後はあまがへるといふ名をつけられたりければかくものしけりこなたさまならでは方もなどなけかしくておほばこの神のたすけやなかりけんちぎりし事をおもひかへるはおほばこの神とはかへるに奇功のあるをいふなり時珍はかゝる事をしらざるにや蝦蟇喜藏伏于下、故江東

と江口にぞいふ、世中をいとふ迄こそかたつぶり【尤草子】かきほにまふはかたつぶり【日次記事】云蝸牛兒人則蝟縮、兒童相聚謂出々出々、不出則打破釜云爾、此虫具俗稱釜とあり（今また江戸の小兒角だせ棒だせまひ〳〵つぶりうらに喧嘩があるといへるはます〳〵滑稽なり）

まひ〳〵つぶり

蠅の棒つかひ

○蠅を捕へて尻に棕櫚の毛を刺て燈心をつかはする事漢土にもあり【萬寶全書】〈〔笑林廣記〕卷七に出たり〉笑談門に小官賣屁股といふ語に青蠅引麻蠅、到酒席上、麻蠅恣意飲食、被小斯拿住、將竹簽々了、屁股把燈草、與他使裩、半日纔得脱身云々斎くこゝの戯とおなじ又【酉陽雜俎】指に蠅を握しめ其後脚を拈ふろに脱すことなき者をいへり物にとまりたる蠅の後脚を爪にて押ふることはこゝにもする事なり棕櫚の葉を蠅うちに作るも古き事とみゆ【童蒙先習】（慶長十七年刻本なり）直たる物棕櫚云々葉は蠅うちに〔洛陽集〕蔵主の蠅うたれて棕櫚に背をこなく（有知）又【一代男】（四）東國瀆人のことをいふ處に今江戸にはやるとて蠅とり蛛を仕入とありこれは先年にはやりし事ありきはい取蛛は（本草）に蠅虎と云り大小數品ありて其居る處に從て色もさま〳〵なり草に住ものは綠色なりいづれも跳りて蠅を取食ふこれを戯に飼置て印籠などの小さき器物に入れ持行てはいを捕らするとなりて虫繪とてさまさまの虫を畫たる手遊の一枚繪あり小兒これをきりぬき蠅の背に糊にて貼付てあゆきする戯ありいつよりありともいまだ見及はず

棕櫚の蠅たゝき　蠅取り蛛

虫繪

蜂拂

○蜂が刺たら子をとらうといふはもと蜂ふきなり【源氏】（松風）大井ら宿もりが爬をいふ處、はたゝど打あかめつゝはちふきいへば〔若菜の下〕にもはちふくと有【抄】に蜂の窠近く飛時恐れてうそぶきするやうに物いふなり物を聞いれず一向にいひそくるを蜂拂といふに似たり【守武獨吟】雛長や蜂のありともしらさらんうそをもふかすけたけなるところ【雅長老狂歌】旅人のうそ吹出す腰の角をさして旅行にはち川の客【油加須】みつのさかひの道のせたしき蜂原はみな人ごとにうそ吹て【世話焼草】いくらのうそ

投肉空中餧之、百不一墮、其送舟亦然と云り【滇行紀程】にも此事出づ不拘餅餌粒食、撒空餧之、群鴉飛舞接食、百無一墜云々あり

○上州藤岡邊にて童のいふは烏々かんがらす足を洗てどこへ行麴川へまかろかうじを貰てなにゝする酒に造りまうす酒に造てなにゝする西殿の犬と東殿の犬と甘いとつてはひんなめる酢とつてはひんなめるみんなひんなめまうすといへり江戸にて次郎どんの犬と太郎どんの犬とみんななめてしまつたといふは烏のことにいふにあらねどもおなじ童謠の移りたるなり

鴈のつら

○棹になれ鈎になれとて雁の連りて飛を興ずるは【卜養狂歌】春の頃鷹の雁をおほくさほにかけてとをるをみて歌よめとあれば「かんかりやうつかりかねとはしたかにとられて後も棹になれ〳〵【犬子集】舟にのれ棹になりつゝかへる雁（重次）【狂歌咄】棹になりて夜すがらわたるくらがりの空に云々【松の落葉】近江八景ひら〳〵とむれゐる雲にさほになりてとをろあとながさきへさきながあとならかろがいとらしよ或人云筑後柳川にてはがん〳〵しつちやうかんしつちやうあとのがんなさきになれさきのがんなあとになれ弓のおれた矢のおれたはやういたてみづかけろ（早く行て水かけろといふことこれにもいへり）是弓矢は雁行に准へたるなりかうがいもそれなるべし仲實の歌に「そらいろによそへることのはしらをばつらなる鴈とおもひけるかな江戸の童はがん〳〵みつくちといふみつ口とは琴柱の形になるをいひかうがいは釵をもいふ是も琴柱の形なる物故取出ていへるにや

蝸牛角出せ

○蝸牛【夫木集】に土御門院「家を出ぬ心はおなじかたつぶり立まふべくもあらぬ世なれど是が舞といふことも古くいへりとみゆ貞徳が【與止賀波】に牛の子にふまるな庭のかたつぶり角ありとても身をなたのみそと天神の御歌となむといへり其角が文七にふまる庭のかたつぶりは是によれり今小兒が角だせ棒だせといひて蝸牛をもてあそぶこともむかしより有とみえて宗鑑が【犬筑波集】に、まへや〳〵

烏がうのまね　蝙蝠山椒くりよ　雁々　蝸牛角だせ　蠅の棒つかひ　蠅とり蛛　虫締　蜂拂

蛙の弔　蛙合戦　かへる目を借る　蛙を釣

烏が鵜のまね

からすかん左衛門うぬが内はやける早くいつて水かけろといふ童こと鵜のまねする烏は水をのむといへる諺よりいへるものならん鵜のまねするなら早く行て水あびろなど云けむを内は焼ると誤りたるは（再按に、からすの行水と云ことより出たるなり）鵄とべば火ばやしといへるを混ひしなるべし【宗因獨吟】鵄の飛ほど油斷せず京、火ばやいとよその夕暮御用心また鵜のまねは【佐夜中山集】に水心ちや波の河筋、鵜のまねを洲崎の鳥羽つくろひ

蝙蝠山椒くれよ

○蝙蝠の飛を見てかうもり〳〵山椒くりよ柳の下で水のましよと呼ことは彼よくむせる物とするによれりおもふに鳴聲のちう〳〵といへるが咽ぶさまに見ゆるをいふなり【可笑記】にぶをとこのきたの限りかうもりのつにむせたるやうになきづらなる侍あり云々按ずるに唖にむせるとは後に訛りたるなり【犬筑波集】に（活字板）おぼろ月夜にわたるかうもり、照もせずくもりもやらずすにむせて昔くはみた醋といへり咽ばせむとて山椒くりよ水飲しよといふなるべし又醋を飲ましよともいへり同意なり【守武千句】に山しようことにむせわたらはやかうふりのすものがたりのつれ〳〵にかうもりに醋山椒をいへること古し【百物語】に山椒にむせてはあかゞねにかぶりつきてなをろなどみえたり【和漢三才圖會】云蝙蝠性好山椒包椒於紙拋之、則伏翼隨落、童捕之といへるは非なるべし紙につゝむたに山椒にはかぎらず何にてもおなじ事なり醋も山椒も彼が好惡によるにあらず

鵄空中にて投食をはむ

○日光山御宮の邊に鵄二羽あり二王門前茶店をはなれず此茶店にて團子を賣るこれをもとめて一ツ宛串を抜て高く空中になげ上ればかの鵄出來て宙にて團子はたゞ一ツも落すことなし按るに【蕉窓偶筆】紫江富池鎭、有吳王廟祠、甘將軍寧也云々、有鵄數百、飛集廟旁林木、往來迎舟數里、鳴噪帆檣上下、舟人恆

うそつき彌二郎

藪の中で屁をうそ八百

萬八千三

禽獸の勢を去ること

をばかすといへり世俗に僞をうそといふこと葉も是より起れりと云り今うそつき彌二郎藪の中で屁をひつたと童のいふことも是よりなるべし【嘉多言】にをそのたはれ尾とよめりとは萬葉をいへるなんめれどそれは於曾の風流士とよみておそは癡鈍の義にてオヲとかなもたがひたりたはれをは風流士にて獺の尾にはあらずされども今の諺は作の間違ひたる說を取べししやばで見た彌二郎といふ事もあり彌二郎に義なし權兵衞八兵衞も同じをそといふことはうそといふことなりといへるはよし【玉勝間】に萬葉四の卷に逢みては月もへなくにこふといはゞをそろと我をおもほさむかも又十四の卷にからすとふおほをそ鳥のまさてにも來まさぬきみをころくとぞなく此歌の心はそのことくまさしく來もし給はぬ君なる物を鴈といふ大虛言鳥の此來此來と鳴ことよといへるなりころくのろは例のやすめ辭にてこは此にて此所へ來といふことなり子等來にはあらず云々淸輔朝臣の【奧義抄】に或人云ふむかしの國の者はそらことをおそごとゝいふなり上作萬葉四之卷なるは本人の歌にはあらざればいにしへはをそといふこと京人もいひしなりかくてをそはすなはち今の世にうそといふことこれなりをそとうとは殊にしたしくいふ音なりといへり（是もゑのころの例をもていはゝ子等來のかた成べし）

○藪の中で屁を放たといふは獺と鼬の混ひたるにやともおもへどさにはあらじ人のみぬ所なれば僞るよとの意と聞ゆ【安布良加須】屁の穴より煙たつなりくひあひて術なさうなるみぞいたちか今うそ八百また萬八などいふを俗は千三といへり【櫻陰比事】に今は千いふことと三ツも眞はなし迚千三といふ男あり云々是なり

○こゝにはせぬことゝなるべけれど牛馬など其勢をとり去れば壯健なりとぞこれを名づくる獸によりて各異なり【蓴鄉贅筆】に人之淨身者曰奄宦肘後經曰牛曰宦・豬曰奄、馬曰騸・羊曰羯・雞曰鐓、狗曰善猫曰淨とあり六の內雞などはいかにするにか思ふに雄と雌と別ち置なるべし

てのことゝ聞ゆれど杓子は我が顔をいふに非ず足をいふなり折敷の足に猫足といふにても杓子に似たるを心得べし古き前句付に（賑やかになる〳〵猫の飯入添て行花盛（詫を廻して用たり）いたち火にた

狐火にたゝる

ゝると云ことも【望一千句】にいたちばかりぞ月にちろめくさよふけは心かけよの火の廻り

狐の窓

○わらべの戯に左右の手をうしろ前にして指を組合せ中に空あくやうにする是を狐の窓といひて其穴より覗き見る事すなり【浮世物語】に篠田の狐の事をいひて夫はこのとしごろ相なれてそれとはしりながらさすがに名殘をしく思はれつゝかくぞよみける子をおもふやみの夜ごとにとへかしなひるは篠田の杜にすむともと詠じてうちなきけるを妻の狐はたち聞て限りなくかなしと思ひつゝ窓を閉てかくぞいひける契りせし情の色のわすられて我はしのだの杜になくなり云々浮世坊心づきてこれはいかさまにきつねのばかしてかやうにつれてありくかとおもひ日ごろ聞たることありと顔をふところにさし入て袖ぐちよりのぞきみればせなかのはげたるふる狐うしろ足にて立て先へ行と行の物の下よりのぞけば狐の化たるはあらはれて見ゆると古くいひしと見えたり是又まかけさすなり【奇異雜談】寢やにて漸やく男狐をみたる物がたりに【天文年間】窓の下火焔の中よりみれば狐ひとつ雁をもちて窓のうへにおきて撫さするなり不思議やとおもひて起て窓のうへより見ればなが子をひざに置たり又おまの下よりみれば狐さきのごとしといへり狐の窓の戯は是其窓より狐を覗くなり狐火を狐の挑灯ともいふ

狐の挑灯

【洛陽集】大花野や狐の挑灯籠の妻（季風）

獺

○【狂歌咄】にいとけなき子の聞まはりてあしきことゝするをおどしておそ〳〵といふ詞はをそとは獺の事なり此獸はじめはたはるゝやうにて後には喰つくものなり（これに依ておもふに獺も似たるものたり雀などを捕へしを見しにそのことくして暇無の間たるをそのうへを飛越も躍りこゆるにかへるは獸りて背高〳〵して誑しかいふとしつゝ〳〵その果て見たりき

○【細々草】に顔をみたることと云はやしかうきさきにを狐をそのたきれ見とふぬり此に物見をふので人

如山、尾々相度衡江、過江中來、湖廣群鼠數十萬、度洞庭湖、望四川而去、夜行晝伏、路皆成蹊、不依人行正道、皆遵道側其羸弱者走不及多道斃とありその外諸書に鼠つらなりて河をわたりしことをしるしゝはみな是なり鼩鼱(ノカネヅミ)は土の中を行こと鼴鼠のやうにて土を出て日光をみれば忽死すつらねことは殊なり童戯はこれを學びたるなり鼬こつこは黑につきていひ出たるにて意義なし【耳袋】に紀州黑打村と云處は加田と向合て島のやうなる處なり此黑打より加田の海邊二日ほど眞黑になりてわたるものあり能々見れば黑打の鼠加田へわたりけるにぞ有ける其夜中津波にて黑打一村浪の爲に流されけるとぞ

〇鼬【源氏】(あづまや)浮舟の母の詞あやしく心をさなけなる人をまいらせおきてうしろやすくはたのみ聞えさせながらいたちの侍らんやうなる心ちのし侍れば【細流】にいたちは狐の性の類なり狐は狐疑とて物をつよくうたがふ心あるものなりその如くに鼬も疑ふ心あるものなり鼬のまかげなどいふも疑心ある故なり又手習卷に尼君しはふきおほゝれておきにたり云々はほかげにかしらつきはいとしろきに黑きものをかつぎてこの君の【手習君】ふし給へるをあやしかりていたちとかいふなるものが

鼬のまかげ

さるわざするひたひにてをあてゝあやしこれは誰ぞと云々【細流】に鼬のまがけをさしたるなりといへりまかげは【盛衰記】に高き峰に上りまかげをさして見わたせばなどいへり遠きをみるには額に手をかざしてみる是なり【細流】に疑心とするも物を見定むるは即その心となる鼬もさる風情あり【仲我物語】(二) 泰山府君の條今の世までもいたちなきさはげばつゝしみて水をそゝぎまじなふこのぎに依

鼬みめよし

てなり又みめよしといふは【醒睡笑】秀句の處世話に鼬眉目よしま一度貌見う【吾吟我集】情しらぬ人をたくへばみそいたち只みめよしといふばかりなり【鷹筑波集】顏を洗へば猶もみめよきこい〱と呼れて出る水いたち【犬子集】籬よりみめよき貌をさし出していたちばかりや住る古宮など多くみえたり今童部是をみる時は鼬みめよし猫の貌抄子といへりあしきをよしといふは反語なり見たくなき惡き物ゆえに然いふなるべし猫の貌抄子は後に添たることなり諺に猫も杓子もといふことをとり

鼠嫁

の嫁入は鼠の後なるべし鼠鳴は【今物語】ある殿上人かくれ居て局におるゝ女房をのぞきたる處此男何となくふしなからんもほいなくにねづなきをしいでたりけるさきなる女房ものおそろしや誰にも聲のありけるよとてつや／＼さはぎたるけしきなく【望一千句】唯ねづなきを身にしめにけん約束はあまたの袖にわかれ人【俳諧埋木】ねづなきはいづれ格子にならひゐて【輕口咄】に好色のわかいもの二三人日暮に門に立ゆきゝの女ぼうにわる口をいひねづみなきなどしける漢土にてもこれを淫姦不良の事にすとみゆ【龍圖公案】（一）淑貞といふ女亡夫の追薦に道士華元といふ者夜中高閣のうへに藏れて其女を迷姦する處に少佞人歸作鼠耗聲、淑貞秉燭視之とあり鼠の鳴聲を【笑林諷刺部】に終夜唧々叫到天明といへり

鼠おとし

○鼠おとし【犬子集】（四）おごくはよそか目前におるかけおけば非儀におつる鼠とり何かたならさる算用の上おごくおとしより又鼠さんと付たり【世話盡】落てみよおごくの鬼のはかりことといへり豆入ておく鼠とり極樂おとしと云は後の名なるべし【洞房語園】乙酉むかし【鼠亭記】に尾をかけ二ゝれて取むかしは鼠わなと云ものあり竹の中より緒をとふしわなにしたるものなり【夢溪筆談】（七）有一術士姓李、多巧思、嘗木刻一舞鍾馗、高二三尺、右手持鐵簡、以香餌置鍾馗左手中、鼠緣手取食則左手捉鼠、右手運簡斃之、以獻荊王云々

人を鳥獸に比す

○人を鳥獸にたとふること【瀧耳草子】に賤人を鵜鶘といひ小明を鵬鴟疑人を水鵲閑なる人を閑りの牛躁人をあつとりの火獸人を牛盜といふとあり今いはぬ言も多し【梅草】にはたまる人をばねむふむと云とあり

鼠こつこ
鼬こつこ

○童の戯に鼠こつこ鼬こつこといふことをすなり二人して手の甲をつみ下の手をはづしては上をつむ故果なきなり【本草鼠附錄】に鼴鼠あり【和名抄】に此篇を引て鼴鼠に作る和名は良鼠古と見えたり名義は連り行小鼠といふなるべし色黑き小鼠にて茶棚なとにむれ居るものなり七ツ八ツ計ツヽ尾を含み連り行過き事にも輕ゆくとなむ肥前にても鼬鼠と呼ぶ【草木子】に本草乙未年中、江淮間有鼠銜尾

みならず熊鼠と名付毛色眞黑にしてその上品は咽の下に月の輪白くあり又は白黑の斑なるありといへるは正德頃のことを昔がたりするにや【諸艶大鑑】に水右衛門がまねして諸藝を仕入云々鼠の宮參前にそり橋かけてそれ〳〵に世を渡ると云しは白か斑らか常の鼠には有べからず猫と一處に置こと抔はいつ頃よりの事か白鼠を福有ものとする事【世說故事苑】に宋高僧傳（二）善無畏傳云、畏夜至烏萇國、有白鼠馴遶日献金錢【太平廣記】（四百四十）云白鼠身如皎白（白は月か）耳足紅色、眼眶亦赤者乃金玉之精、伺其所出掘之、當獲金玉、鼠五百歲即白、耳足不紅者乃常鼠也【抱朴子】曰鼠壽三百歲滿百歲則色白、善憑人而下名曰仲、能知一年中吉凶及千里外事、この事【本草綱目】又【典籍便覽】にもいへり然らば常鼠にはあらず本邦にはかゝるものあるをきかず番頭の白鼠とは大黑は黑をもて北方の色とし北方子の位なれば鼠を使者とす番頭利にかしこければ主人富む主人は大黑番頭は鼠のごとし白鼠といふは白色に瑞物多ければなり世にめづらかなるを貴むはならひなり

熊鼠

番頭の白鼠

○又鼠のよめ入といふ事【藥師通夜物語】（寛永廿年の饑饉の時の双紙）いにしへは鼠のよめ入とて果報の物と世にいはれ云々白鼠野鼠小鼠二十日ねずみこねらおねらおねの子產屋の内の赤鼠に至る迄皆是飢饉に及申云々こねらは子鼠おねらは雌の子鼠か【狂歌咄】（五）古き歌に「よめの子のこねらはいかになりぬらんあなうつくしとおもほゆるかな【物類稱呼】に鼠關西にてよめ又嫁が君上野にて夜のもの又よめ又おふく又むすめなどいふ東國にもよめと呼所多し遠江國には年始にばかりよめとよぶ其角が發句に「明る夜もほのかに嬉しよめか君去來が云除夜より元朝かけて鼠のことを嫁が君といふにや本說はしらずとぞ今按に年の始には萬の事祝祠を述侍る物にしあれば寐起といへる詞を忌憚りていねつむいねあくるなど唱ふるたぐひ數多あり鼠も寐のひゞき侍れば嫁が君とよぶにてやあらんと云り此名あるより鼠の嫁入といふ諺は出きしなるべし又鼠を夜の物狐を夜のとのといふ似たる名なりおもふに狐

ちん

○拂菻狗【日本紀略】に契丹大狗二口猧子二口と見えたり猧子是なり大狗は俗にいふ唐犬なるべしといへれと猧子一本には狭子ともありて定かならず近くはいつの頃わたりしか【續山井】の發句はこれをいへりと見ゆ【安齋消答寒川儀太郎手簡】さつまより出候犬の一種ちんと申候並字御尋にござ候すへてかやうのこと心に留不申一切覺不申候【北窓書】通鑑に有之候東譙孝静帝高澄に逼られ朕は狗脚朕と申され候は近代の落しばなしに能合申候儀と日ごろ戯言に申出候迄にござ候とありこれもとよりチンの名義にはあらずをかしきことなればこゝに録すさてチンの名義例の押あてながら犬に似て小きものゝ故ちいといひしがチンとなりしにや近時チンも位を給はりしと云ふ物がたりあり【耳袋】に天明九年ある大名衆上京のことありしに常に寵愛のチンあとをしたひて付隨ひしかばやむことを得ずして召つれしことさたありて天聽に入ぬれば畜類ながら主人の跡を慕ふ心あはれなりとて六位を賜はりしとかやこれを聞て何物か喰ひ付犬とは後て知ながらみな世の人のうやまわん／＼様なしことには有べけれど其節處々にて取はやしけるまゝしるすといへり

白鼠

○白鼠【日本後紀】大同四年三月壬西山城國獻白鼠とあるは始て史に見えたるにや漢土にも昔は稀なるものとみゆされば【酉陽雑俎】にも白鼠毒毛火眼甚可愛、余數見之と珍らしげに載たりの文【蟫菴瑣語】崇禎年、市上有湖廣人、持白鼠數十來售、毛色如雪眼赤如火、閃爍有光、識者曰、此頭鼠也、見則天下將亂などいへるも見しらざる故たるべし【只竹子】に白鼠といふものは吾が幼年の頃までは世上に見る事ならずいかにも稀なる物にてその頭を商ふすがの者の手にもたま／＼ならではなくもしもあれば價もいかにもむづかし今世に畜ふ物とは人々かつておもはず大黒天のつかはしめとのみおもひ白狐は稲荷のつかはしめといふ心もちにて町人の手代など商賣にて金まうくるを何某[illegible]の白鼠なんどいひてみれば福のあるやうに思ひしことなるに近ごろより世上に白鼠澤山なることと常の鼠に殊なることとなしそれの

て飼立たるをば松山に置しに松山に一揆起りけるに文を竹筒に入れ犬の頭に結付け十疋放しければ片時に岩付へ持來しとぞ

犬けしかくる

○けし〱とて犬をかくるをけしかくるといふ古きこと〻見えて【筑波集】（西音法師）我心なたね計に成にけり人くひ犬をけしといはれて狗を犬ころといふ犬子等なりまた子等が犬を呼にころ〱と

犬ころ

いふ子等來なり【狂言記續集】（一）むかひどの〻ゑのころはまだ目があかぬころ〱（ころくは烏の聲にもいへり一休咄にひるけの燒飯を取出し犬にみせてころ〱と云ふ【後撰夷曲集】宗鑑が手向に「薄ほとまだ目はあかでゑのころの物にざれ句の手向草哉（卜琴）

犬の聲べう〱

○犬の聲をべう〱といふは彼遠吠するをいふなるべし猿樂狂言にもみえたり又卜養が【狂歌集】にいぬまもちといふものを出しけるにべう〱と廣き庭にてくひつくは白黑またらいぬま餅かな【望一

べい犬

千句】古宮はびやう〱とあれ秋さびし狐を犬の追まはりぬる【夷曲集】に犬櫻みてよむ歌は我ながらしかるべうともおもほえす候土佐國人は今も犬の聲をべう〱といふ又へか犬とはめか〻うしたるやうの犬の面なればいふにや【埋草】（寛文元年成安撰）堺云也【獨吟千句】（半井卜養【落髮千句】なり）「くれもせぬ花一枝を所望してのぞいてみればべゐか紅梅、垣の内に目も永へゑの犬ふせり【因果物語】にへか犬をつれて來れり又べいかともいへり是をおもへば吠狗の訛れるもしるべからず【續山井】珍花とてあいすへいかの犬ざくら（重昌）珍花は狆狗を含めり（中井竹山が【茅草危言】に狗の子をへかと云といへり子狗には限るべからず）

一もつ

○不角が付合の句に「無一もつ後生願ひの猫かふて逸物は馬にも犬にもいふ俗に犬猫なとの一つ生れたるをいふと心得るは非なり

○【武野燭談】に昔は鹿犬を飼る〻事大名役の樣にありしといへるは寛永中の事なるべし

有薦奨事　猫乳母

の談なり【鶏跖偶筆】前朝大内、猫犬皆有官名、食俸中貴養者常呼猫爲老爺、また【甄膝】にも合肥宗伯が夫人愛する猫斃たるに沈香にて棺を作りて瘞め僧十二人を延き三晝夜道場を建しことなども見ゆ【枕草子】うへにさふらふ御ねこはかうふり云はりて命婦のおもとゝていとをかしければかしづかせ給ふ【源氏】（若菜下）ねう〳〵といとらうたけになく【花鳥】に猫字の音めうなりねうは五音通ずるなり漢土にて猫と名づけしもさる心にや袋にてねことといふはそれとは異なるべし猫も杓子もといふ諺は猫のちよつかい杓子に似たればいふなりちよつかいは一能搔なるべし【洛陽集】ちよつかいにたつ名ぞ惜き猫の夢（友吉）これは柏木と女三の宮の事をいふとみゆ

猫も杓子も　猫のちよつかい　猫に袋

○猫に袋蒙らする戯古き戯書にみえたり【安布良加須】昔にきく猫の耳とは是やらん袋の貌をはじめてぞ見る（袋は母のことをもかねていふにや）予むかし畫の讃を人に乞はれて「着た笠は婿の袋か田植女が猫背中して跡にしさるは「紙ぶくろきねど田植が猫背中ちよつかい早く跡しさりする

○【江戸著聞集】に元祿年中三浦やの遊女薄雲は平生三毛の猫を愛し禿に抱かせて揚屋にも行ければ是を擧べる遊女もありとぞ其角が「京町の猫かよひけり揚や町といへるは此ことなるよしいへり

三毛猫

○三毛猫は【酉陽雑俎】また【月令廣義】などに金華猫は人を妖するよし見えたりこれにや但し金華は地名にて猫の毛色をいふにあらねば此にもあらぬにや

へげ猫

○へげ猫【今昔物語】に灰毛斑なる猫といふ是なり

犬に名を付くることいと古し

○【垂仁紀】八十七年に昔丹波國桑田村、有人名曰甕襲、々々家有犬、名曰足往、是犬咋山獸名牟士那而殺之、犬に名を付ることいと古し猫も初めて是に見ゆ珍らしかりしなるべし是後世の狗山といふことに用しか（狗山の事後にいふ）【枕の草子】に翁まろといふ犬の事あり犬はよく路をしる物ゆゑ【甲陽軍鑑】に武州岩付太田源五郎幼少より犬すきをする松山の城に飼立たる犬を五十疋居城岩付に

打てはしとゝうつ打けん枕の下よりも獸となりし石もありげに世中のうき事を思はさるこそまさるなれまた逢坂の關守も一夜はゆるせとまるまし百夜とかこつかよひ路をとがむる聲は深草の中にも是は狗子草ほえ出にしをころ〱とひとり苅藻の床とかやふしみの里に明わたるよめが君の心の内父こひしとはの給ひて油地獄に着給ふ鼠にもやがてなじまむ冬籠り「ほとゝきす我や鼠にひかれけむこの道行の文十二支をいへり。

○【雲谷臥餘】朱文公理學大儒、不屑爲世俗文字、然遊戲點染間、亦不乏其作、十二禽詩云、夜聞空簞嚙饑鼠、曉駕贏牛耕廢圃、時方虎圏聽豪夸、臼業兎園嗟莽鹵、君看蟄龍臥三冬、頭角不與蛇爭雄、毀車殺馬罷馳逐、烹羊酤酒聊從容、手種猴桃垂架綠、養得鵾鷄鳴角々、客來犬吠催煮茶、不用東家買猪肉、【艸山集】（十五）戲作十二辰詩、獨笑怪鼠叫唧々、神遊何勞疲牛力、時跨虎頭千里歸、偶學兎角萬仭陟、君看臥龍睡常濃、群蛇匿竄九淵中、長途馳馬客自苦、瘠土牧羊人未窮、貪月獼猴能溺水、牝鷄抱卵知所止、狗吠便有敲門聲、不用燒猪待俗子、また（二十七）武州赤坂圓通寺鐘銘序あり略す銘曰、鼠山流光人未驚、牛王出世振梵聲、虎狼野干氣縱橫、兎角方便誘群情、龍宮高處擊華鯨、蛇室睡破覺心生、馬腹忽變聖胎成、羊鹿牛車休復轟、猿啼霜降月色清、鷄人未鳴客先行、狗不夜吠王舍城、猪觸金山轉崢嶸、

十二相屬

○【暘谷謾錄】十二相屬、前輩具未有明所以取義者、余曩日見家璩公選云、子寅辰午申戌俱陽、故取相屬之奇數以爲名鼠五指虎五指龍五指馬單蹄、猴五指丑卯巳未酉亥俱陰、故取相屬之偶數以爲名、牛四爪兎兩爪蛇兩舌羊四爪鷄四爪猪四爪其說極有理、必有所據、惜不及詳聞之、

御猫童子
左右大臣

○【小右記】云長保元年九月十九日者、內裡御猫產、子女院左大臣右大臣有產養事、復重槐飯納筥之衣等云々、猫乳母馬命婦、時人咲之、奇怪事也云々、未聞禽獸用人乳嗟乎、とみゆ衛懿公が鶴を愛せしも同日

るねばかりをせし處に有時黑き牛一疋はなれて庭をはねまはる纔衛門とらへてみればいまだはたづらとをさずこの牛ぬしなしとて牛縻をとをしつなぎ置ければ書齋を好む僧が牛に成たるなりぬひ衛門ひる緣して又牛になりたり是はきたいのためしなればとて池をほり此島に二疋の牛を放ち置たる事百二十年以前の事なり今もその二つの島に時々出て見ゆるとかたる愚老聞て無智の坊主里の名に負てつら皮あつき牛となりたるも世に不思議なり一智はうすく欲にまどへるびくぞくの面かはあつく名にやおふうし（此外僧の牛となりたる古もの語いと多し）又李伯時好馬を畫くを道人戒て來生馬となるべしといひしかばそれより改めて佛像をのみ畫けりとぞ【劉公嘉話錄】には開元中に畫匠解奉先といふものその妄に誓を立て牛に生れたるもの語あり一世に傳ふむかし能筆の畫工牛をかゝたとて思ひをこらしいねふりけるに其形牛とみたりしかば人おどろきて呼起しかくと告しゆゑ其後は佛像をのみ畫きたりといふは書齋して牛と成といふ事と此畫工のその語を取りて作りし事なるべし

もう／＼

○牛の聲をもう／＼と聞ことは昔もかはらず【守武千句】けふもとはれず心もう／＼ことの葉をいはちかゆるはうしに似て

十二支の歌

○十二支の歌【新撰狂歌集】修行者一夜の宿をかりけるに其夜彼宿へぬす人來りて牛を引ければあるじ此ころをうたがひすでにいましめんとしたりける時我は西行法師と申修行者なりと名のりければよも西行にはあらじ西行とやらむはきこふる人なりさらば歌よめとせめければ「馬羊猿鷄犬はこちへいねうしとらぬみもうき名たつみにとよめりとかや

光陰の道行

其角が【光陰の道行】またおかし夜戸をあけて出給ふ當は人目をかくれ里あなめ／＼とかこちけん破れ扇のあなめより結ぶおもひは鳥の巣のうらみがはせし二見がた伊勢の野飼の花すゝき精進からおや小車のわれおふ物にくるふとはかの鵜飼のしのび妻その夜はさむし千鳥なく月海上にうかれ女の泪にくもる誹諧は雨を經て鳴神もいなでお事をさけてま
[illegible]色にてすつとん／＼とんと

たぬき寢

あり【續山井】つゞみ草に狸ねいりの胡蝶かな（友久）たぬきねいりといへども狸は空ねなりはせぬ

狢睡

にや徐賞父が【毛詩名物圖識】に狢睡といへり【本草啓蒙】になじなは晝は目見えず耳聞えず人近づきても動かずして眠れるに似たり此に觸れは驚き走るとぞ俗にいふ小田原評定と云ことをむじな評定

狢評定

とも云しにや【五元集】行年や狢評定夜明まで佐渡には狐なし土俗物さはがしくしどなき者を貉つきの

狢つき

やうなりといふ他にて狐つきといふとおなじ其地にては貉折々人につくことありとぞ

四國を廻りて猿となる

○四國を廻りて猿となるといへる諺は風來が【放屁論】に今童謡に一つ長やの佐次兵衛殿四國をめぐりて猿となるんの二人の連れ衆は歸れどもお猿の身なれば置て來たんのといへりその頃いひそめしにはあるべからず諺はもとよりありしにやさてこの諺は誤ならむ四國猿といふ事より移りしか【舊本今

人を馬となす

昔物語】に通ニ四國邊地一僧、行ニ不レ知所、被レ打成レ馬語あり【奇異雜談】丹波奧郡に人を馬になして買し事又越中にて人馬になるに尊勝陀羅尼の奇特にてたすかりし事などみゆみななかし物語よりいひ出し事なりさればこの諺久しき事と知らる後人これを猿といひかへたりとおもはる又按るに【搜神記】に蜀中西南高山之上、有物與猴相類、長七尺能作人行、善走名猳、一名馬化、或曰玃伺行道人有後者、輒盜取以去云々、取女去而共爲室家、其無子者終身不得還、十年之後形皆類之とありこれなどより出たる事か知べからす猴の類といへば猴のかたに似つかはしく又馬化ともいふ名をひかめては馬ともいふべくや

○【蚓菴瑣語】明朝南京孝陵內、畜鹿數千、項懸銀牌、人有盜宰者抵死、崇禎末年余僻糶到京、往遊陵上、猶見銀牌鹿徃來林木中、始信唐世芙蓉園、獲漢時宜春苑銅版白鹿、爲不誣也

食後に臥て牛となる

○飽まで食て寢れは牛になると小兒に敎るは食後に臥さしめざるなりさて又これにも諺あり【名所和歌物語】（三浦淨心の撰なり）見しは今愚老みちのくへ下りしにくりはらの郡つら川といふ在所につきたり爰に池中に島あり昔この里にぬひゐもんといふ老人あり僧を一人ふちする此僧經をもよまずひ

（道具といひしはその長刀の事なるも知べからずもし然らば入らぬ物のたとへならん）【狂歌咄】に名にたてる狗と猿とのいさかひも米みせられてかみつきもせず（端書略す）この猿牽腰に餌ふごと赤熊のやうなる物を提て刀はさゝず此頃は（寛文）そのこと止しにや又【訓蒙圖彙】に猿舞京に來るは伏見の邊其外處々に住す羽織に編笠腰にゑふごをつけ米をいるゝ猿聚こゑうたのふし分て備りたり古き前句付「淋しいことはどうもいはれず壁越に猿引の歌を書とめる【事跡合考】に西川屋又左衛門から

猿曳し廐の祈禱に出る

の話を記して云遊女屋京柳町にありし時揚屋の勝手の方に馬尾を立置馬五六疋ツヽ飼置曉に客の歸る時その馬に鞍置乘せて送りし也その揚屋に橋屋といふ最上のものなり依之其頃正月の初め猿牽揚屋中の馬屋を祓ひいたしに來る先橋やが馬屋より舞し始めしなり依之末代揚屋に馬は飼はされ共今年に至る迄毎歳正月猿曳吉原町に至る時先揚や町橋屋か許より舞し初るなり云々いへり（徒流云昔揚屋には茶屋一軒ツヽ付てあり尾張屋といふ揚屋には尾張屋といふ茶やあり揚屋にはみな外聚ありしとなり客の馬をつなぐ爲に設く尾張屋清十郎いまだ殘りたりし程は猿曳大門を斷なしに入て先尾張やへ來りて祝ひそれより家ことに歩行たり今は猿曳廓に入事なし）江戸は三谷橋のわたりに猿曳が家十二軒ありて正五九月には御廐に祈禱に出其外諸大名の家舖の廐に行皆此處より出るなり近國の猿曳とも江戸に來ればこの十二家の内に宿して毎日江戸中を引ありくとなり

猿眼　蚤とり眼

○猿まなこ蚤とり眼同じ事なり【守武千句】にこすゑより來てこそほゆれ犬櫻さるまなこにて花をみる頃【丹前能】に好物をいへば猿がのみ取眼云々今のみとり眼とのみいふは省きたることゝみゆ

猿眠り

○猿ねふり【可笑記】なまあたかたなるにこえとりもさ馬上にさるいねふりして通るかいとう打ねふりてやゝもすれば落ぬべき時にめを覺すこと度々なり猿がねふる形に似たるをいふとみゆ空ねふりをたぬきといふ【浮世物語】に家に盗人の入たることをいふ處たぬきねいりをして居たるも

るにえぼしといふ諺も古き事なるべし史記に項羽楚人沐猴而冠耳とあるに起る（楚國には、獼猴を沐猴といふとなり）【守武千句】まはゝやとおもふ心か難波かた猿もえぼしをきちのとをやま【猿樂狂言】にうつぼ猿に猿は山王まさるめでたいまつきおろしの春の駒かはなをつるべて參りたるぞや白かねこかね御知行まさるめでたきましよひんたのをどりは一をどり〳〵是其頃の猿廻しが唄なるべし【恨之助草子】くびつなにてひきも出されざるはさんわうまさるが參りたいぬはかう〳〵などゝいはれん事めの前にて候是慶長年間の猿廻しも同じ趣とみゆそのかみ猿引長刀をさしたれば諺にもいへり【貞德獨吟】自注百韻「畫中によその木實をかつものかつなげる猿にしつけすさまし（手飼の猿が木實をかちとる躰なり）月かけに長き刀のしらはとり（猿つかひの長刀といふ事あり）又【淀河】にものゝけは太刀をつかふに迯去て犬に用心するは猿曳また【安布良加須】におきんとすれば引ごとゝむる御禮をよく申せとの猿つかひ【犟草】に世中にいらぬものさる廻しの長刀などあり又猿まひ腰といふこと【京童】にふせきかねたる嵐山の猿舞腰となり云々伸ぬ形をたとふるなり漢土には【秘傳花鏡】に畜之者使索縛其脛、坐於棧上鞭棧、旬月自馴、養馬者多畜之廐中、任其跳躍、可辟馬病、丐者畜之教以戯舞、擧動儼如優人、好事者多般訓練、使之應門或對客送茶、以此駭觀取樂云々、又一種小而毛紫黑者、出交趾畜以捕鼠勝於猫貍、頗有靈性能知人意、飼以生菜果物則不大、若飼之熟物易大可厭、こゝにも一種小きものあり四國ざるといふいづれも予のうちより飼はされば舞されずといへり又いと小き三寸ばかりなるを木葉ざる又まめざるともいふは嶺南の產にて【廣東新語】に拳猴といへるものなり四國ざるは紀州粉川よりも出といへり西土には品數多くみえたれども今この條にえうなければいはず

猿引道具

さる引道具と云ことは【訓蒙圖彙】に中國の猿はさま〳〵藝をさする故に猿引が腰に道具を多く付るなり此故に腰に物多くつけたるをば猿牽といふなりといへりおもふにもと猿牽の長刀といふ諺より移りしなるべし

作りて天狗の巣立とてみすることと往々あり

猿まはし　○猿まはし猿字は手ながざるなりこゝに用せずよの常のさるは獼猴たり猴とばかりも云べしさるを馬の祈禱にする故廐に猴木とてさるをつなぐ木あり【稗海】の中に收めたる【獨異志】（上）に東晋大將軍趙固、所乘馬暴卒、將軍悲惋、客至吏不敢通、郭璞造門語曰、余能活此馬、將軍遽召見、璞令三十人悉持長竿、東行三十里、過丘陵社林、即散擊、俄頃擒一獸如猿、持歸至馬前、獸以鼻吹馬、馬起躍、

猿を廐に置く事　如今以獼猴置馬廐此其義也、たゞのみにもあらず漢土にも是を本據としたり（【齊民要術】【事言要言】などにみゆ）しかれどもこゝにこそ其物なければ猿も猴も通はしてさるとはよめ漢土にはもとより別れたる物なれば代用む事いかゞなりそのうへこれは正しく猴にもあらず猿に似たる物とのみいへれば何にかあらんいと覺つかなきものたらずやかゝるたぐひの事はいと多かれば益なき事をくた／＼しくいはむはをこなるべし世の習となりては改め難き事これのみならずさて猿まはしは【列子】に宋有狙公愛養狙とみえたればなすらへて猿舞しを狙公ともいふべきにや【賢奕合蹤】（二十一）四蜀成都城東七十里庫黒支山極多猢猻、向來遊手遊食的人、都將他教成、拖錦舞棒擬演雜戲、こゝには【東鑑】寛元四年四月廿一日の條の事【著聞集】にも見えたり足利左馬入道義氏朝臣（東鑑には正義と有り）美作國より猿をまうけたりけり其猿えもいはず舞けり入道將軍の見參に入たりければ前能登守光村に鼓うたせられて舞せられけるに誠にその興有てふしぎなりけりけんもんさのみたゝかに袴にきやまきさゝせて烏帽子を着せたりけり初はのとかに舞てすゑさまにはせめふせければ上下目を驚して興じけり（【東鑑】敦隆云是非直之事歟）舞果て必纏頭をこひけりとらせぬ限りはいかにも出ざりけり云々件の猿やがて光村あつかりて養ひける馬屋の前に繋ぎたりけるにいかゞしたりけん馬に背なかをくはれたり云々【三十二番職人歌合】猿引の歌「ちく生もつかひいるれば中々にわれにはましの能のみにさよ又さ

おもへば即祟りをなしてその人を惱ましむ往々あることなれば病氣も例の犬神ならむと知りそれが欲しかる物を問尋ねればいたく恥ていと淺ましき事なりいかにも何の物ほしかりしかとつゝまずいへばそのいふところの物を彼にとらする時は祟り止されども深く恥る故再應とはされぱいひ出かぬるとなり雲州に狐蠱あり（此はいづくにもあり）又四國に蛇蠱をつかふ者あり是をへびもちと云ふ石見などにて是を土瓶といふ蓄ふる器をもて名つくるなるべしよて犬神とうひやうとならべいへり邪術なりかゝるたくひは其處の人も婚を絶ち交を結ばず又備の前後州に猫神猿神など有て狐神のことし信州伊奈郡のくだ上州南牧の大さき使も同類なるべしといへり

くだ狐

○【秉穗錄】に遠州にてくだ狐の人につくことあり其人なましそを食して餘物を食せず尾州にて云ふかまいたちと的對なり

孔雀つかひ

○孔雀つかひは貞德が【油加須】まへや〳〵と江口にそ云ふ孔雀つかひしゝあてやよく覺らん【秘傳花鏡】に一名越鳥出交黃廣雷羅諸山云々、聞人拍手歌舞及絲竹管絃聲、是鳥亦鳴舞、畜之者毎俟其屛開取樂、其性最妬、見人着彩服必啄之といへり按るに杜甫が句に屛開金孔雀といへるも舞へるさまなるにやもとより舞を好むものなれば使ひならさばよくまふべしされど孔雀つかひ其後は聞かず此鳥の尾の金眼を孩童戯れに口に啣みて死にしこと有とぞ殊に膽と血と糞とは毒尤はげしといへり然るに嶺南の人は肉を餉饋となすに味ひ雁の如ししかも百毒を解といへり但しこれを食へば藥をふくしても効なしとなり

天狗のみせ物

○【洞房語園】局庵梟辨さいつころ葺や町小芝居にて天狗のみせもの〳〵と呼はつて手をたたき人を招く何ならんと僞さるゝとは知ながら這入てみれば梟の額の毛をむしり丹を塗こみちいさき兜巾をかぶせ紙にて裁付をはかせ其體畫ける天狗の如し世の中をたたはけにしたるやうなれど云々今も鷗などを

れば塩屋の長次が馬をのむ術もなる事と見えたり（塩屋長次郎は元祿中の目くらましにて名高き者なりその頃の草子に往々これが事見えたり）水右衛門は江戸湯島天神前に住り【江戸鹿子】にけだ物藝仕付水右衛門とある是なり

蛇つかひ

○蛇つかひは【尤草子】うるさき物蛇つかひ犬のつるみたる云々あり（此草子には天正中のことども見えたり）【葛藤】（下）關札りんと眞鍮の影あやつりに尾花曲球打蛇つかひ又不角が撰集に放下にたらぬ繩薄の蛇といふ句あり是は世にぬらくらものを蛇つかひといふ是なり蛇つかひの蛇ははじめ捕へたる時木綿きれにてとらへ逆しまにしてごけば鱗の縁にいと細かなる刺あるが皆木綿に着て落る又口をあけて木綿ぎれを含ませて堅くつめて引出せば細なる齒殘りなくとれて蛇は力なくよわるをつかへば自由になるなり餌は鷄卵をとき匙にて少しづゝ飼ふよし聞り【癸辛雜識】（後集）有蛇生者、善捕蛇、凡有異蛇必使捕之至、於赤手拾取如鰍鱔、然或爲毒蝮所嚙、一指腫脹如椽、旋於篋中取少藥傅之、卽化黄水流出平復如初、然十指所存亦僅四耳、或欲捕之蛇藏匿不可尋、則以小鼓管吹之、其蛇則隨吹而至、此爲尤異、其家所畜異蛇凡數十種、鋸齒毛身白質赤章、或連錢或紺碧、或四足或兩首、或僅如稱衡而首大數倍、謂之飯揪頭云、此種最毒、其一最大者、如殿楹長數尺、呼之爲蛇王、各隨小大以竹籃貯之、日啖以肉、每呼之使之鬪、升降皆如意、其家衣食賴焉、無他生產、凡所資命惟視吾蛇尙存耳、亦可彷彿豢龍之伎矣、

蛇蠱

おもふにこの蛇つかひのもの蛇蠱のよしはいはねどもおそらくは蛇蠱をもて資命とせし者ならむ蛇蠱犬蠱ともに【捜神記】にみゆ後の書に【嶺南雜記】に潮州有蛇神其像冠冕、南面尊曰遊天大帝、龕中皆蛇也云々、凡祀蛇神者、蛇常遊憩其家、其有向神借貸者とあるの類なるべし本邦には蛇を祠れるは所々にありされども蛇蠱は多く聞えず【和訓栞】に犬神は四國にあり其人を害す（信節云その國の人の語るを聞し

犬神

に今も犬神なる者の家あり良民これをいやしむによりてそのものとち婚娶す他の物を何にまれほしと

嬉遊笑覧巻之十二

喜多村信節撰

禽蟲（みせもの　水右衛門　蛇つかひ　孔雀つかひ　天狗　猴まはし　猴引道具　廐の祈禱さる眼　蚤とり眼　たぬき寐　狢評定　四國を廻りて猿となる　人を馬となす　食後に臥て牛となる　十二支の歌　光陰の道行　御猫　ちよつかい　猫も杓子も　猫に袋　犬けしかくるころ〳〵　犬の聲　へいか　一もつ　白鼠　鼠の嫁入　鼠鳴　鼠おとし　人を鳥獸に比す　鼠ごつこ　鼬のまかげ　みめよし　狐の窓　獺　うそつき彌二郎

見せ物　禽獸その外片輪の人などをも觀せものとする事は歌舞伎よりも前なるべけれど物に記せるも少し【東海道名所記】木挽町の處、うそかまことか異類異形のものを見する【洛陽集】に君が代や鬼の生捕初芝居（正武）これ何にても珍らしきものを觀場に出せしなり【伽羅女】大坂生玉の處、何事も此津の大さ

水右衛門　猿の狂言鬼の生捕錢はもどりと看板を見廻るなどいへり【諸艶大鑑】（貞享元年）水右衛門がまねして此藝を仕入る犬に烏帽子をきせ猿に袴かたぎぬ鼠の宮參前に反橋かけてそれ〳〵に世をわたる業覗いて見るも獨わらはれて【胸算用】長崎水右衛門が仕入たる鼠つかひの藤兵衛云々）其頃が【商人世帶

鹽屋長次　形氣】に過し水右衛門が犬猫に藝を仕入貴人へよい金取て上けるよしとかく金まうけんと我人工夫す

しその善悪をいふことゝろさくいやがりて一文ヅヽやりていひやませけるに次第に奢り付てわるいいひやみ賃直あげをして後は三文ヅヽ毎ばん取ければ此虫のあげ錢八十五双と外に三文は本堂坊主が取と大笑になりぬ

神事舞大夫

○神事舞大夫、元祿年中より大黑の像竈神青襖像繪馬都合三枚の札支配下の者共在々に賦申候いまだ御當地には相配不申候竈神青襖札壹枚宛江戶御町中相對を以年々正五九月私方より相配申度元文二年巳八月十八日奉願候處其通被仰付夫より年々配來巡行仕候兩人之者共老衰仕寶曆年中より江戶御町中巡行仕候儀中絕仕候由年然業御免候儀に御座候間淺草御町中年々巡行仕札相配申候何卒先規之通正五九月江戶御町中私爲名代淺野支之進八坂主水と申者巡行爲仕竈神青襖札相對を以相配申度段天明八申年十二月晦日先々八太夫奉願候處翌寬政元年酉二月十八日願之通被仰付是迄正五九月前月御月番樣へ御屆申上札配巡行仕來候處御町中御觸被仰付被下置候より十八ケ年余に相成候故町方町役之者追々相替り御觸之樣子不相辨勸化之樣に相心得候者もまゝ御座候間依之札配巡行不行屆難澁仕候且又名代之者老衰仕候に付遠藤帶刀昌津織部を私爲名代札配巡行仕度奉存候何卒先々之通差支無御座候樣御町觸被仰付被下置候樣奉願上候云々文化四丁卯年十月四日寺社方へ出したる願書之略なり其札は（出世開運大吉利市）火除守竈神火除神秘青襖御札（習合神道神事舞太夫頭田村八太夫）按るに青襖はあをぶすまにあらずあすはとよむべし【古事記】大年神の御子に阿須波神あり【萬葉集】（廿）爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之とも見えたり庭に竈神と共に祭りし神なり

垢離かきなとして有しもの故願人とはいふなり萬治元年戊戌八月十五日町宅之出家山伏願人坊主名前帳面に仕立町年寄へ可差出之尤旅人之出家は御番所へ可申上旨被申渡候慶安五年壬辰二月三日江戸町觸南方出家百廿二人之内三人家持山伏百八拾三人内十三人家持願人十三人道心者十四人行人五人五口合三百三十七人と有家持の山伏多きはむかし華美なる粧ひして峯入の供するを名聞として咎られたる者など有り寛文二年寅九月十八日町觸出家山伏行人願人町屋に宿借候はば本寺より弟子に無紛段證文を取其上請人を立裏店に差置可申候云々【洛陽集】寒垢離かあびける水に月もなし（有知）【俳度曲】

願人すた／＼

（享保七年刻）正尊を榎のかげや誓文ばらひ村しぐれ（貴山）これすた／＼坊主なり（願人坊主裸にて鉢巻ししめ縄のやうにわらを腰にさげ手に扇を開き錫杖をもてり）古き畫双六にも見えたり（今も手遊に此人形残りたり）京師に正尊の祠あり誓文拂といひて市人これに詣この願人はその代參の意とみゆ後にはわけもなくすた／＼坊主のくる時は世中よいと申すなどいひて踊れりとぞ【竹丈點冠付】浮

まかしよ

世かな賣僧すた／＼口の世話不角が【篗纑輪】早足に高聲あやし冬の空はだか代待自己の追剝其後は寒中行衣を着頭を白布にてかつら巻にし鐸を振て細かき繪紙を切たるを蒔ちらしながらありけは童部多く付てこれを拾へり（蒔けといふを子供らまかしよ／＼といふ故これが名をまかしよといへり）この繪を蒔しはそのまへに天狗の面を着たる社人天王樣の守とて小札をまきたり（此事【事跡合考】に具さに出たり）件のまかしよも寛政ころよりなくなりて榛田稲荷の代參となり住吉踊などとなれり

○正徳二年【鎌倉咄】我等は里々の麥秋をこゝろさす願人坊の玄海が體をして見せ申さんとたちまち日待山伏の姿になりまかはんにやはらみつと舌のまはらぬ所はあれど口ばやにくり返し印をむすびかけ手を打て其のまゝ法師がら

木葉坊

○宿なし坊を木葉坊と云へり【榮花咄】木辻鴨川に乞食此坊主あり坊世にある時あはぬ女郎一人もな

同心壹人ツヽ、名主三人罷出二十七日和泉橋と新數橋の間に貳間に貳十間の非人小屋三ヶ所可被仰付候間早々入札爲致非人小屋掛直出來三月二日より柳原非人共に施行被下候伊奈半十郎殿に支配被仰付手傳の町人足十人ツヽ、毎日出閏四月廿一日より非人少く罷成候に付役人も人足も減可申被仰付候廿五日よりもはや非人も無しに付施行相止小屋御崩し車善七に被下候

乞胸仁太夫　願人すたすた　神事舞太夫

乞胸仁太郎

○乞食の部類に乞胸と呼ものあり辻はなし辻講釋其外編笠を着て物乞ふものみな乞胸に屬す其者を仁太夫といふその由緒書といふ物ありその始め上がた浪人と見えて江戸に下り說經祭文を三線に合せ往來の路次に席を敷合力を請たるがいつの頃にか處々の明地寺社の境内にて葭簀を張木戸錢を取小みせ物綾取猿若江戸萬歲辻放下からくり淨るり說經講釋物よみ等支配いたすべき御ゆるしを蒙りしとたんおもふに慶安中に武士浪人御府内に住居いたすまじき御定めありし頃にもや有らむ非人頭善七より毎年節季に鳥追の編笠幾つにて何程とか定りて役錢と號し仁太夫へ贈る事となむこれをおもふに京師の與次郎にひとしきものなり乞胸といふは胸たゝきの名に似つかはしけれど是はもと乞旨などの意にや

新非人

○元祿十四年巳十二月十二日より翌年五月廿一日迄本所小梅村にて小屋がけ新非人に施行有之候扶持等のことは御代官伊奈半左衞門殿より渡り候男女小兒共壹人に米壹分ツヽ、被下當所立はなれ候やう申渡にて小屋御はらひ被成候金高五十八兩壹分此人數貳百三拾三人右の内六十二人は本庄小屋新非人善七松右衞門に預候分百六拾人今日牢屋より出候無宿十一人右貳百三十三人の内女小兒の分橋前伊豆守殿御番所へ町々のもの被召呼奴に被下候町々請取候町數合四十七町人數合五十二人

女兒の非人を町人の奴さたす

出家山伏人願人坊と名前人數願

又法師の乞食に願人といふものを一說におもへらく訴訟の事ありていづくよりか江戸に來りその事引しろひて久しくなり貯へ盡てその者どもかゝる者となりぬといへるは非なりもとより乞食にて代待代

かたゐの仕切札なりんぼ

らず眉なき人と見て彼病人に准へあしきものをよしといふ反語をもて然呼りとみゆ【見聞集】に髭を剃たるものを昔男のなりひらとやいはん又【下手談義】豐後ぶし語りの風俗をいふ處曲は頂上にあがり眉毛ぬけて業平に似たり【胸算用】南都のことをいふに十二月晦日夜都の外の宿の者といふ男とも大乘院御門跡の家來因幡といへる人の許にて例にまかせて祝ひはじめ富々々々といひて町中をかけ廻ば家ごとに餅に錢をそへてとらせける是をおもふに大坂などにて厄はらひに同じ

乞丐人髻を斷る

○【經濟錄】享保年中諸乞丐人をば皆髻を斷しめらる是より平人と異なる誌出來て混ずること能はず目出度政なりといへり按るに享保七年寅五月年來善七彈左衛門手下にあらぬよし爭論せしが此時善七方人とも負となりしことあり髻斷しめられしは此時なるべし

雪駄直しでい／＼

○江戸にて雪駄を繕ひにありくものでい／＼といふは悲田院の訛れるなりといへるは非なり【雍州府志】にも悲田院にはさる者なし東三條の南なる天部村は悲田寺と一双の處にてこれにはもはら屠人のみ居て牛馬を剝き革を作り種々の物に製す又市中に出て履のやれたるを補と有りでい／＼は何をいふにか上方にてはでい／＼といはずなほしといへりでい／＼は手入といふことなり【輕口咄】に田舍もの髮結錢十文なるを價やすきといふを宿主それよりあとの白川橋では七文で坊主にしてくれますといへる咄ありそこは餘部ある故乞食のあたまをそるなるべし【洛陽集】白河橋にて蓮の實やあまべをとんで水淸し（自悅）又歲暮「年波やかの白川の姥らが庵（有知）姥等は女こじきなり十二月出て物をもらふ年わかきも姥等祝ひましやうといふとぞ

非人小屋

○延寶三年卯二月二十六日町御奉行宮崎若狹守殿被仰渡柳原川端に罷在候非人共頃日の雨にて數多相果候由を聞召不便に思召候間今日の雨にも痛可申候間先今晩中にぬれ不申樣早々取あへず小屋かけ入置可申候此方三人共手代召連罷出三間半に十五間の小屋懸させ日暮前に非人不殘小屋へ入申し兩奉行

給次、掃除二條城外之塵埃、是出自棄不淨者也、いにしへ掃清めするものなればきよめといへるなるべし

非人

○非人はもと貧人と書り非人とは惡行ありて人にあらぬ者の名なりかたゐは路の旁に居て物もらふ故

かたゐ

なりといへり今病の名をもていふは癩の一名を【證治要訣】に害大風とありこれをものよしといふは反

物吉

語なり物吉はもと祝詞なり【江家次第】被補次侍從事、元日節會、輔親朝臣公則朝臣參入著鞾、稱云、元日奉拜龍顏、是物吉之事也、其後久無諸大夫著鞾とみゆ癩人にいふは【醍醐笑】祝ひ過るもいなものといふ中に或者正月二日の夜步におもひよらず我身に癩瘡いできたると見て目さめて案ずるやうかれをば物吉といふなれば仕合なにはに物よからふといへる咄あり【西武獨吟百韻】まだよに古貸のこるものよし何ひ賣行もかへるも二季のきはにはかならず初穗をもののよしが取なればかく付るなり

○【人倫訓蒙圖彙】に物吉は竹の皮籠のすみぬりにはりたるを負て洛中を勸進に出る物吉といへそめしより緣儀よしとて名付しものなり其圖は癩人籠を負手に棒を持たる乞丐なり貞享の頃には何ひ賣の初穗とりといふ定めもなく廣く物もらひてありきしにや【嶺南雜記】（吳震方著）潮州大癩瘋極多、官爲立癩瘋院、如養濟院之設也、在鳳凰山上、染瘋者其中、給以口糧、有瘋癩頭、治之其名帝胡、女冠濟楚頗能飽富、人家有吉凶之事、癩人相率登門、索錢索食、少則罵詈、必先賂帝胡、求片紙粘門、癩人卽不敢肆、院中有井名鳳凰井、甘冽能愈疾、瘋者飲之卽能不發、肌肉如常、若出院不飲此井卽仍發矣、入院游者癩則特設淨盒淨器以款之、其中男女長成自爲婚匹、生育如常人、癩女飲此水、面目倍加紅潤光彩、設有登徒犯之、次日其女宿病已去、翩然出院、而登徒徒染其毒、卽代其癩、不數日眉髮落手足執伸肢節潰爛而死矣。この事こゝの癩にひとし求片紙粘門といふは今いふ仕切札なり彼是似たるいとあやし唯癩女疾を人に傳とは俗說なるべし癩人を俗になりんぼといふは取坊をとりんぼといふと同例にてなり坊なり業平朝臣の像はもとよりの眉は落して額の上の方に眉を作りたる故俗人是を知

人足也悲夫、引以驗成式之言、知不誣云、(このたぐひにはあらねど俠客に腕を截たる者あり)【五元集】鶏合の判詞に中古野出の喜三郎と云もの片腕をきられ骨に皮引かゝりて見苦かりしを鋸にて肘の程より引きりて捨たり桑門となりて片枝と號すと見えたり

鼻で笛吹

○鼻にて笛を吹先つ年坊間にて鼻を口にかへて草笛を吹て物もらふかたゐを見たり今もありやしらずきたなげなること一目見るだに心ちあしされど笛は口にて吹にことならず張世南が【遊宦紀聞】に沙隨程先生嘗云頃於行在、見一道人、以笛柱頂下吹曲、其聲清暢而不近口、竟不曉所以然、此說已在三十年前、嘉定庚辰先兄岳翁趙憲伯鳳、自曲江携一道人歸三衢、亦喉間有竅、能吹簫、此飲食則以物塞之、不然水自孔中溢出、每作口語則塞喉間、語則以手掩口、先兄之所自覩、但不知沙隨先生昔所見者是此人否、

胸たゝき

節季候

鳥追

○胸たゝき【三十二番職人歌合】に胸たゝきといふ物もらひ有り頭に編たる頭巾のやうなる物を着裸にて腰に餌ふごを付たり手して胸を扣くによりて名に負るなり其「歌宿ごとに春まゐらむとちぎりしは花のためなるむねたゝきかな判云春參らむと節季に契りしを花のためぞと春おもひしらせぬる胸のうちやさしくこそ侍れとあり是後世の節季候なり胸たゝきといふ名は後世扣の與次郎といふも似つかはし與次郎は悲田寺の内に居て其類のかしらたり二季の彼岸又所々の祭禮の頃はたゝきといひて口はやなることをいひて物もらふとなり又每年臘月より節季候となり元日より十五日まで鳥追となるこれを扣といふといへり【俳諧染糸】たゝきくたびれかへる門前口々にこへと勸進いれずして

きよめ

○きよめ【今物語】に或藏人五位月夜に草堂へ參りけるにいとうつくしげなる女房のひとり參にあひたり云々かへりけるにつきて行ければ一條河原になりにけり女房みかへりて「玉みくりうきにしもなどねをとめてひきあげどころなきみなるらんとひとりごちてきよめが家のありけるに入にけり此きよめとは穢のものなるべし【雍州府志】に凡穢多之始、吉祥院南小島爲本、此處有稱乃保里者云々、此徒每日

べらぼう　〇又べらぼうも此例なり【永代藏】（四）都傳内といふ芝居の近所利發なる男色々見せ物出す或年頭のおかしげなる者を便亂坊と名付け毎日錢の山をなしぬ【世事談】に寛文十二年の春大阪道頓堀に異形の人を見す其貌みにくき事たとふべきものなし頭するどに尖り眼まん丸に赤く頤猿の如し京師東武に及び芝居を立て諸人にみせける是よりかしこからぬ者を罵はづかしむる詞となれりといへり是もそのかみよりべらぼうといふ言ばありて後その片輪ものに名づけしなりされば【卜養狂歌】この竹をけづ

穀つぶし　りてこくを押つぶす是ぞまことのそくいべらぼう物に命るに謎のやうなる一種あり世に益なきものを穀つぶしとは今もいふ事なり篦は飯を押潰す物故に件の如き者を篦といふなりぼうは例の賤しむる意なり古き畫双六にやほ太郎といふものあり上にいへる觀せものに其形似たり同双六の内に山鳥金太

足を手に代　夫といふものは總髪の男袖なしばをりをきたるが手はなくて兩足にて烟草をきざむさまなり此等みなみせものに出しものとみゆ【齋諧俗談】にとくり手と有て延寶年中津の國大坂にて生れながらにして兩の手なきもの有り足にて用を辨ず且文字を書き弓を射て芝居へ出て錢を乞ふ【谷響集】に頃年手のなき女兒の字をかき弓をいる者あるを云て【文會談叢】を引たり（文字を友字に誤り又其文始めに引る【酉陽雜俎】の文を拆て別に一條に出せり後文相應せずこれに依りて今原文のまゝ引出）其文に云、唐段成式書、大曆中東都天津橋、有乞兒無兩手、以右足夾筆寫經乞錢、欲書時、先再三擲筆高尺餘、未曾失落、書跡官楷手書不如也、此誠詭異也、然今京師有一婦人、年四十餘、全無兩臂、又双臂如削、循行衢道、求乞爲事、每梳頭髮、右足夾梳左足綰髮、及盤衣流面亦如之、其餘捷穩便與手無異、人多擲錢贈之、或伸足取貫索繩之上、略無凝滯、予爲兒時見之、雖出處不定、將一紀、而尋因寒暑彼且無恙、又段書、晷唸中、因事到孫州、曾見一婦人、無兩臂但用兩足、刺繡鞋片、纖緻與巧手相若、服飾雅潔、而此之處觀者如堵、人教以錢投之、直世有無歟之人、手足具完、目不能見、乃甘死爲乞、是其手腳反不如此二婦

葛西念佛

ひの名目となれり此泡齋はやされて躍るかたち異形にして人の笑をかさねしむかの葛西念佛が躍る所一様ならず左りへ飛あり右へはねるあり頭をうなだるれば尻をふりておのがむれ〳〵心々にして定まれる拍子もなく唯物に狂ふがごとし泡齋坊が躍るにひとしよつて泡齋念佛と呼ぶ誠に氣違念佛踊とも云べきなりといへり此念佛踊も氣違ひのはうさいも東國の事にて彼畫卷物に貴き僧の名といへるは非なるべし(念佛をどりの物狂はしく見ゆるをもて物狂ひをはうさいといひしにはあらず)【卜養狂歌】人はみな西方とこそ願ひしかさかさまごとぞはうさい念佛(鹿島踊といふものは此はうさい念佛をとりたるものとみゆ踊の條にいへり)下總佐原のあたりにては年老て家事を子孫にゆだね隱居して安らかに過る者は男女ともにをどりをならふ其内男は多く太鼓をならふ年老て似げなき事なりその初は葛西念佛にてありけんをいつの程よりかあらぬ小歌をうたひて踊れり

方藥拂
あはう拂

○【甲陽軍鑑】(六)方藥拂といふ物に成ければ又【十四卷】輕薄にして役に立ざる者を戯け者拂に成されと有今あはう拂と云と同じかるべし方藥とは懲しめて退拂ふはそれが身の方藥の義にや世の諺の如く癡呆につくる藥なきをいかにせんはうさいもゝし此事にて實にさる人有しには有ぬにや方齋の齋は

てうさい坊

人を嘲弄するを嘲齋といひしを是には下に坊を付てちやうさい坊といふ是と同例にて人の名めかしたるなり然るに【籠耳草子】に普光院義教の時尾州に長齋とてかくれもなきおどけもの有てつねに御前に侍んべりし云々又慶長ころよりのはやり言にせんしやうといひしを世情など略していひしかば

よせい

やがて世情をよせいと湯桶詞にいへりしもをかしこのせんしやうは僭上なるを其頃千石少貳といふ人權門にへつらひしかばせんしやうは此人の名を略して千少といひたるなりなどいへりみな似よりしことのをり合してとゝ見ゆ又たて者といふも功者だて男だてなどの立にてあるを伊達家の從士が衣服の

だて者

美麗なりし事有ければそれより始まれりといへるも同日の談なり

わけ猿若出て色々様々の物まねすることそおかしけれさうさい念佛猿まはし酒に酔ふ々昔慶長中の事なり【似せ物語】は寛永の冊子とおぼゆ其中におかし男いとかしげおところへて米錢もたかりけりさるをいな事をならひていさなふものにつきて世中をすぎんとおもひて出てをどらんとてかねたゞ買て首にかけゝる「出てゆかん心かるしとわらはれんよのはうさいを人のしらねば「をどらんとおもふこゝろの歌念佛ありき〳〵も申ぬる哉古き【畫卷物】（松羅館所藏）はうさい念佛のさまをかけるありその文に扨もほうさい念佛とて花をつくりて大鼓かねのひやうしをうちをどりとびまはるすがたを見る人おかしく腹すぢをかゝへ大勢こぞりて見侍りける是わたくしに踊るにあらずむかしひたちの國に貴き僧一人おはしけるその名をばはうさいとぞ申ける我すむ寺破損いたしければ弟子あまた引つれ太鼓かねのひやうしをそろへをどり念佛をくはたてしはんじやうの所へをどり出て一錢半錢の勸進を得て堂塔がらんを建立し給ふとかやされば今末代に至りてほうさい念佛と名付太鼓かねをたゝきおもしろくをどりければおさなひは申に及ばず老たるもわかきも我さきとこぞり出これを見くわんしんを入ければ思ひの儘に米錢をまつへやぶれたる堂寺そこねたる橋までこんりうをなし其功はんじやうすると申ける其畫寛永ごろの物とみゆ文中にいへるごとく笠に花唐草の作りものを付縁に絹を垂たり皆たちつけを着て二人は頸に太鼓をかけ四人は鉦に緒をつけたるを持一人は扨にて簓を摺ひいさくをもてりいづれも狂ひ踊るさまたり俗體にて法師にはあらずその時むかしといひて末代に至てなといへるはいつの頃にかあらん（寛永にかくいへるはうさいを可笑記に鄙陋と非しいへるにても其頃も古き事おもふべし）【世事談】に鎮西の十人鉦太鼓に笛を混へて一躍念佛にて江戸の大路を廻る是を鎮西念佛と云ふ泡齋と呼ことは泡齋といふ狂人の法師ありて町小路を走るわらんべ集りて氣違よ泡齋よとはやせり今もつてかくいふ言ありて氣ちがひの名目となれり其泡齋はやされて躍るかたち異形にして人の笑をかさ

追従し時々嘘をつきし迚誰がいふとなく輕薄がましき者の事をけいあんらしいといひふれて終にはやり言葉になりし由といへり【伊呂芝居】（享保三年双子）萬買半分のけいあん云々（萬買とは今いふ萬引これなり）又茶人をいふ處かりにも此道に入てはけいあんをいひならひ取賣かたぎになるぞかし（取賣とは道具屋なり）【安齋隨筆】諸家深秘錄を引て云、慶安といふ事武州江戸木挽町に大和慶安といふ醫師有けるが又同町に伊達三郎兵衞長谷川助右衞門といふ浪人彼慶安と參會し入魂の上にて世間の人々の出入或は訴訟公事沙汰男女婚姻の媒妁等右三人にて肝煎す然る處に（酒井家緣組の事に付）寬文五年乙巳八月廿四日彼三人御追放になりぬ其頃よりして謀計をなす人を慶安者といひけり按るに此等の說然るべからず【可笑記】（一）昔さる人のいへるは狂人走れば不狂人もはしるといへる禪話ありげにも〳〵江戸上下の人々が慶庵の泡齋のといふ狂人共が町々小路をかけ廻り趨りありけは是を見物にしておとなしきをさなき男女まじはり走り廻り見物すさあれば彼物狂ひもいよ〳〵氣亂れてつらくせ手くせ足ずりする（是は正保元年の記なり）是によりて見る時ははやく慶庵といひける氣ちがひ有て諸方をさまよひありき人にしられたる者にて有し程にそれよりいひひろがれる名なるを後に同名の醫師ありて其名混れたるにこそ【永閑節】寬活一休さてやま賣かな〳〵けゝらけいわんてゝんから今時そ

口入

の手をくんべいか今は專ら口入するものゝ名となれり人を口入するものなども古く有しと見えて【源氏】（玉葛）筑紫より京に上りたるに召仕ふ人もなしといふ處、京はおのづからひろき處なればいちめなどやうのものいとよくもとめつゝゐてくれ」これはつかへ人を市女など媒し將て來るなりされども今のごとくかゝる事を業とするものにはあらじ又口入といふも雅言なり常夏卷おとゞもねんごろにくちいれかへさい給はゞこそはとあり

はうさい念佛

○又はうさいは氣違の名なりとぞ踊の條にいへり【曾々路物語】もと吉原女かぶきの事をいふ處とり

仲間六部

○仲間六部【下手談義】に年中江戸に住居しながら日本回國とまぎ〳〵しき類つき是を仲間六部といふ

鳩の飼

昔はかやうのものを鳩のかひといへり此名義しるべからねど定家卿の鷹百首の内「男山鳩やかひたるたかはかりかけおくれてや落に行らん鷹枠の説あれども此歌聞えがたし鳩をもて鷹をとる事にや彼鳩の飼はたかばかりの意なるべし【後撰夷曲集】寄鳩戀(木莵)さま〴〵にかたり付てもなびかぬは鳩のかひなき君が心中後にかたりといへるも是なるべし(【和名抄】云々又はとのかひのすりからしたなど

すれからし

もいへり今すれからしといふ是なりすりからしはすりきりといふは貯の盡たるをいふなり又銭をすりと訓り行旅具なり【夜盗集】に旅人はすりもはたごも空しきを早くいましね山のとねたち）

鳩の戒

○【浮世はなし】(寛永十年板)鳩の戒とありて鳩は鷺の巢をよく作るを見てこれを學て巢を作れとも木の枝などを組てその上に卵をうむ故枝の間をもれて碎くそれ故物ごと心得がほにふるまふものを鳩の戒といへり(【浮世物語】見合すべし)【浮世物語】(二)京にも田舍にも鳩の戒と云ものの有て鷺のことの間を合せさながら其根に入たることはひとつもなけれども又しらぬ事もなしあれ是に成りかへ〳〵うそをつきて世を渡る是を鳩の戒と名付る事鳩は人里近くすむものにて云々鷺の巢をならひて作らむと作りやうを見るには丶き竹きれ柴の類を下にしきその上に巢をかくるそれまでも見とゝけずもはや心得たりと思ひ木の枝に柴の折四五本を渡し其上に木葉をしきて卵をうむに柴のあひだよりもれ落て打くだく口傳も師傳もうけずして只見及び聞及びたるに任せて根に入らぬわざどもをしらぬことなく覺えがほなるは鳩の巢にたとへたり又秋になれば鳩すなはち鷹となりて鷹のまねするものなれば時に隨ひ折によりて色々になりかはり世を渡る業をいたし人をへつらひだますものを鳩の戒とは申すとなり

啓庵

○けいあん【洞房語園】原本に傾城の命に露をいひ御游女ましき者のことをけいあんらしいといふ事今もつてやまず是は元和のころ京嶋の雲に隱居といひし醫者ありしが[illegible]はまたのごく下手なれども[illegible]人に

物もらひ
僞をし
手燈
頭香
腕香
火わたり
臑きり

みたる女のあだ名にやいとけふさめたり寛永七年七月訴訟のことありて山城國八瀨村童子十三人江戸に來る川端伊與、松伊與、安保出雲、讃岐コボ、近江のフヂマ、越前入道、サヌキのマシ中、播磨入道、出雲ノサル、近江入道、備前コホウ、丹後のサル、出雲のまゝ、等なり

○物もらひ昔より僞り多し順禮伊勢參納經鐘鑄怪我したりといふ船頭日雇取の類なり又僧の手燈頭香なとたきて經よむものを見しことあり恐らくは其方ありてするものならん【博物類纂】(十)掌中燒蠟燭、先以麪作餅、稠稀得所鋪放手、掌內外用薄紙、蓋定嚼紅麪噴之少間揭起、紙與燒爛肉相似、以燭放上火燒不痛、かやうの術にや又一種の腕香あり【鷹筑波集】(第二)からがいなほしすげる小刀(といふ句に)あらすのうで香たきやありくらん(吉勝)これは香を燒にあらず腕に小刀を指なり【訓蒙圖彙】に圖あり有髮なる者腕に刀を貫きたる物もらひなり注云佛法を求るには身命をおしまぬ事古今の通法にして諸祖師其行跡あまたなり然れども今行人はこれをふれありきて人にみせ食をもとむる手だてなれば名は行にして澆山かはれりとかくつらきは命かはといへるおかし是又苦痛なく身を貫く方もあるなるべし山伏に火わたりといふことする者あり又觀場に鐵火をつかむものゝ時々あり又膏藥を賣る者臑をきりてその痕に膏藥をはり卽功を驗するもの有り近年是なし予が稚き時よく見しに是は股を剃刀にて橫にきりたりその切やう二三分ツヽ引々して三寸ばかりもきるなり剃刀の尖少し殘して刄を引たるものとみゆ日々幾度となくきる故股の上五六寸の間すきもなし愈たる處を切るなり唯毛筋ほどに切ゆゑ血も出ざれば外に刄引のわきざしを拔みねに手をそへ抑切る體をなして切たる邊を抑て血を出すなり

○慶長頃の古畫に千日參りの如き行人高あしだに乘たるが腕に香を燒小刀をさしつらぬきたるもの一人又鉦打ならして米錢を乞ふ者一人其かたはらにありてゆく處をかきたり是より香を燒かで小刀ばかりさしたるも腕香といひしなり

帶とせしよりも是は勞せずしてと自然なり）

大原みこ

○大原みこと云ふものゝ古くは聞えたる事なし其うへ唯名のみにてまことは其里より出るにあらず【人倫訓蒙圖彙】大原、丹波國にありこゝに崇め奉る神を大原大明神と申て利生あらたなりこれにつかへ奉る神子昔は勸進にありきけるにや今の大原みこといふは京のかたほとりに住て人のわすれ時分にはありくなり女は鈴を振ば一荷のかますをかたげたる男鈴を合する大鼓のてうしそなはつて一風あるなり其頃か【賢女心化粧】に場末なる裏やの女共つどひて物語する處に、亭主の手計まもつて居すとも大原どのゝ神子に化て成とも面々が拵かれよとも有り

八瀨大原

○八瀨大原などは都の近き邊りなるにそのかみは詞いとふつゝかなり凡ニ都會の地少しはなれたる處其詞わきて聞くるしきは今もしかなり【東海道名所記】都の處に年五十計に見えしもの二人あふこといふものに繩をつけ薪貨とかやいふもの持たるは男とも女とも見えぬくせものなり髮をわけて結たるおさかやきもなしかね黑うつけ鬚はむさ〱として云々紺のちとみかたびらに白布のしごき帶白き足袋はどきけたれたるが黑木といふものをいたゞきかのえせもの行合女いふやう右手大夫殿は京へか我も今出るはのといふ彼くせもの是を聞て返事するやう父も母も京へ出たにやアけらも出てにやア今から京へけ(來)へたらにやア日がくれにやアといひけるとぞおかしきく世者は八瀨といふ處北山かたの男なり都よりは纔に二里の山家なれども人の形も言葉つきも京とは各別なり八瀨の明神の御祭は四月九日なり此男共かたびらに衣裡さし美しき帶を襷におけ御こしを舁奉り云々女は大原とて八瀨よりは一里おくの山家ものなりされども八瀨よりは人の形はるかに勝れり

姥たゝ

○【西武お國吟】姥たゝか參るは春の彼岸にて(自注)たゝはとゝたり左背門當たりといへりのちばたゝは都にてもいひし詞か【五元集】賀茂川に一たれとよみたるを「野逈とよふ姉も雪の黑木ふたちどれお

ある處には桂の里よりわかき女の參りけるその出立は顏うつくしうけはひ眉つくりうるはしき小袖をかさね我名をかつらと名乘て新婦いりむこ取家造り何によらずめでたき御事の候と聞て桂が參りて候とてその事につけてさまざま詞をかざりいひつゞけ祝言のはらひを致しその程々の賜物とりて歸る事侍りきといへりかく巫女めけるわざして推參し物もらふ事を古へといひしはいつの頃をいへるにか更に聞も及ばぬ事なりさまで古き事にはあらじ【山城名勝志】に御香宮の起立年代詳ならず太閤これを大龜谷に移せしが故有てまた舊地今の處に復すと有その神主の女を桂女といへるはもと桂の里の者なりしやいぶかしおもふに頭にかつら卷したる故にかつら女といひたるにや又桂の里の女昔より鮎を賣れり俗傳に神功皇后筑紫にて鮎を釣給ひしとも云ればこれらをかごとにして其先祖彼皇后に隨ひ參らせし抔いひ皇后の腹帶といへるはかつら帶より思ひよれる歟（又竊かに聞ける事あり八幡の正實寺より阿龜の方と申が將軍家に召つかはれし桂の女はその御方のつかひ人とか）【職人盡】建保のも後のも桂女はみな鮎賣なり【三十二番職人歌合】桂女述懷の歌「名のりのみあへは上﨟けたましやよこれわらうつしほれかたびら判云上句は桂が境談の持言下句は桂が朝暮出立也云々その鄕談に上﨟ともいひしなりけたましは消魂の義なりけたゝましともいへり又花の歌春風にわかゆの桶をいたゞきて袂もつしか花ををるかな（この歌のことは衣服の條にいへり）【春湊浪談】に古より京都將軍の頃に至る迄も布をもて鬘にしかつら卷ともいひて常の事にてあれば婚禮に古式なりとてする事なるべしこの體桂女に限りたるにあらずしかるに或は桂の里の女を用なといふは誤れり此說いはれたるやうなれど彼桂がことほきの處に參り祝ひごとゝなふることの有しよりさることも出來しならむ又おかしきは。【狂歌咄】に桂のことをいふ處此ほどは飴を煉出して名物となり桂飴とて世にもてはやすとかやと有る飴はいづくにもあれど是は桂女と世に聞えたるより飴もおのづからかつらあめと廣まりしなり（鬘帶を腹

桂女

ひするものをぼていふりと云も棒手振なりさて此ぼんでん江戸にては端午に町々に作り設て幣を多くさし山伏を雇ひほらを吹て持あるき家毎に幣を配りて軒にさし錢を集むることありもとより業あれども町々のわか者どもこれを行ふおもふに是そのかみ端午に小児が山伏の學びしたりし名殘なり

○桂女【鹽尻】に伊勢の子良鹿島の物忌は月のさはり知らぬ少女なり鹿島の内侍は老までも仕へ侍るにや又伏見の桂姫は代々同號を傳へて神功皇后の靈を奉祀すされば後は家主の如くして其夫は家司の如し男子生すれば他に養はしめ女子生すればやがて家號をつがしめ侍るとかや時々東都に參り諸家にも出入す綿にて製せる帽を戴く傳へ云神功皇后の三韓御征伐の時服しましませし御帽を學ぶとかや【安齋随筆】に天中雅言志が【淫鐵集】に委しく記せりその大よそは山城國桂村上下あり上村名主累世相續して桂女と稱す諸役免許なり遠祖神功皇后御腹帶を持傳へ代々女子相續して男は他家より迎ふ下村の諸役勤る者もこの分流なり其外にも其家筋あるよしなり女子家督する時代官所諸司代へも參る下知に任せこ關東にも下向し時服白銀を頂戴する由下知なければ叶はず諸司代へ參るやうす名主を勤る桂女が夫廳上下にて先に立玄關迄來る桂女は取次の者案内して殿中に入かの腹帶を包みて頭に戴きて入る鎌倉以往其後足利家の時分にさして其事跡見聞なしと雖豐臣太閤文祿元年朝鮮征伐に進發の時先日伏見御香宮に參詣せらる然て後紫樂出陣の砌桂女山崎の邊に至り首途を祝し奉り神功皇后の嘉例とて物語をなせり此時太閤より衣服金銀を賜るとなり按るに【花[illegible]後撰】（文祿五年撰）太閤御香宮に詣られし時禰宜主女の市女なる者神前の幣帛を持て公を三度祓ひ奉る公笑はせ給ひて市は心も賢くみゆるもよき女房かなとの給ふと有り山崎まで出て首途を祝し奉りしは此市女なるべし【鹽尻】に伏見の桂女は代々同號を傳へて神功皇后の靈を奉祀すといへるは是也但し今東都に參り諸家にも出入すといへるは昔の風より來れとなれば【鹽尻】の說誤れり又【狂歌咄】にいにしへ都の内にさもある人の家にめでたき祝事

なるべし（これとは異ながら聖といふことのおかしきは【沙石集】に上人の子は智者にてひじりなりと申せば或人難云父に似て聖るべからずといふ答云さらば一生不犯の聖の故父に似て聖らんすらんと比興す）

せり賣色々

○せり賣も色々あり持行て賣も人に賣まけじとする意にや買ふ人にしひるにはあるべからず春米を桶に入て荷ひ歩行町々裏家に五合三合の米をせり賣せし初は淺草花川戸の米屋兵庫屋松屋といへる兩人なりとぞ

作り山伏

○作り山伏【醒睡笑】に推は違ふたと云咄の中に信長公天下をしらせ給はぬ迄は關役所の難を遁れんとて皆その相を學べり駿河なる清見關のあたりにてにせ山伏東より上るは一人上より下るは馬に乘て強力七八人具したり互に怖れてへり道しときんすゞかけなどをとりたりといふ物がたりあり義經が奥州落などをおもふに此風古きことゝ見えたり後世はまた町人奢りて京師にて大身のまねをし正護院峰入の供奉などせしもの有りとか江戸には寛文五年巳十一月町中にて山伏行人のかんばん幷ぼんでん自今以後出し置申間敷事諸旦那より祈念之事申來候はゞ繪像を用可申佛壇幷木像置候儀彌可致無用事祈念仕舞候はゞ繪圖なども取置可申候これは在家を借て佛壇等を搆ふべからずと有し内なりぼんでんといふものはもと梵天帝釋尊と書しものにてもあるか但し梵天の影に准へたるか明和八年ごろ俗人多く集り袈裟をかけ錫杖をふり梵天を持町中をサンゲ〳〵と云て祈禱をなしありきしが禁ぜられて止む

梵天

○梵天、梵天と言はかな書なりもと捧手なり捧をぼんと云は【見聞集】にみを杭をぼんぎといへり是【松落葉】三瀨川と云歌にながるゝ水のかも川やころは卯月とゆふしでのぼんでんすごく立ならぶ捧木なり坊をぼんと云と同じ手は横につくものなり昔のなぞ〳〵に、やす半紙なに、もちつゝじとゝく、心は花が手につく是は竿頭につゝじの花を結付て四月八日に出すことあり今天秤棒をかつぎて商

いたか

驗忘にて常に彼が宿をかる呼聲にてありしなるべし一蝶等が畫に笈を居ゑ笠を上に覆ひ下に帳をはりて野宿するさまを畫けり(此帳の體を【職人盡】にもそは古様にて異たり)むかし戰國の中も出家は妨げずいづく迄も通ひしこと高野ひじりのみならず又【職人盡】にいたかといふ者あり流灌頂をするをもて物もらふなり後世の高あしだ是なり江戸にもありしが今はなくなりぬ【誰が家】其角撰「高野のうへの小田原の花(嵐雪)夜めくるいたかの袖に春の露(擧白)いたかは經木を卒都婆の形に刻み文字かくなれば板書の略にや

ひじり

○【骨董錄】高野山事略に聖と云は中頃時宗の此山に來り住で念佛を修行し或は廻國勸進せしを日御時に至て眞言秘密の靈場に其法侶にあらさるものゝ雜り居べきことと然るべからさるの由の仰によりこ悉く皆眞言の敎に隨しと云ふ又云正保元年十一月御使登山して歸て申すやう學侶は公家の如く行人は武家の如く聖方は町人の如しとなり

ひじりと呉服屋

○呉服賣ものにひじりといふもの有り【新聞江集】に江戸通銀町二丁目に堯順と云尙聖あり云々とあり思ふに呉服所笈屋と稱するもの剃髪僧形のものあり寛文八年申二月廿四日町觸に去年御觸之通今度呉服屋幷聖共手前三百匁以上之小袖表御改に付町中に呉服ひじり方より預り置候物於有之者早々其主方へ返し可申候按るに和州西大寺古淵法師のかける【職人盡】繪に絹賣ありさま〳〵の絹を脊に負ひ右の肩の處より削りたる竹を前下りに二本蓑夫にさま〳〵の絹切を付たること四手のごとし是負へる絹の色品の看ばんにするにやむかしの絹賣みな此體なり其形高野聖の笈を負へるに似たり又高野聖きんらん錦のきれはしを佛像經具の裝ひこしたれば守りにすべしとて賣たりと【見聞集】に見えたりかた

せり呉服

〳〵よしあれど箱を負ひあるくを聖と名づけたりとさへ今せり呉服といふものの見えたりせりとは迫るの義なるべし今さもなければ聖とはあまりおほぞうのものなれど高野聖を俗には專ら聖とのみいふし

○鉢をするに竹瓢を用たる證は茶筌を繋ぐにてもしるべし【寶倉】に茶に鷹爪の名有ば茶筌傳は鷹の羽の袖をかつぎ云々そのかみの書を見るに茶筅うりの十德の紋大なる鷹羽付たり彌兵衛ときけば哀や鉢扣(素堂)鉢たゝきいかにうき世を茶せんがみ(溜波)陸奥の人に聞しにそのあたりにてはこも僧茶せんを傳といへり是今も賣たる茶をたてゝのむ故なり

○高野聖【庭訓】に聖道とあるは眞言僧をいふ此宗の僧を俗にひじりといふ又天台宗にも聖道といふとなむ【沙石集】(一)高野の明遍僧都善阿彌陀佛といふ遁世ひじりをかたらひて三井寺の公顯僧正の行儀をみせにやる處高野ひかさにはぎたかなる黑衣きてことやうなれどもしか〳〵と申入たりければ高野聖と聞てなつかしく思はれけると有り【三十二番職人盡】高野法師「たかの山修行せぬまも宿かせと坊をうかれて花や尋ねん【甲陽軍鑑】に上杉家に盜賊はやりし頃高野ひじり半弓にて鍋釜盜人を射殺しければ則政これに千貫の知行をあたへて足輕大將にしたる事みゆ鍋釜など持ありきて野宿をもせし事と知らる【見聞集】に關東みだれ國郡在々所々まで私の弓箭を取挨かしこに關をすゑ海道往來やすからずされども高野ひじり笈を負て關東へ下る是は弘法大師信行のかたちを學べる聖とて弓箭の中をもあけて通す云々宗鑑が【犬筑波集】高野ひじりの宿をかる聲大きなる笠きて月もふくる夜に又「おひつかんおひつかんとや思ふらん高野ひじりの跡のやりもち此三句めを貞德が【與止加波】に人のおかたとるものわたす京の町自注に小歌にかうやひじりのおかたとると有罪科人を京の町わたすには警固あるなり跡の鎗持是なり【醒睡笑】廢忘條に高野の威をかりて諸國をありく聖の若輩なるが一夜の宿をかりけるに(中略あるじの女房に雞の鳴を學びて相圖にして忍び逢んと約す)聖高野笠を手に持はた〳〵としてけり女房はや雞が鳴はといふ聲を相圖にやどうかといへる唄あり彼の小歌のおかたとるといへるをとりて作れるなめれとその諺もさる事有しよりいひ出しことゝみゆやどうかといひしか

と云瓢のことなり勸進ひしりの諸の勸化にひさくを用るは件の故なり又むしろなと着たる僧を大かた
（其露）菰露といへり【榻鴫曉筆】（第三）草花の論に夕かほは云々はてには菰露人といふものにかたれて人の家
ことにかしらをたゝかれし有さま南無三寶いふばかりなしとあり是後世の鉢扣なり又七十一番職人盡】
（鉢扣）なる鉢扣はことに賤しけにて鹿角の杖は地に立て瓢を敲く處をゑけり其歌うらめしやたかわさつのぞ
昨日までこうや〳〵といひてとはぬは判云はちたゝきの祖師は空也といへりわさつのも此道具といへ
り（こうや〳〵を一本にくうやと有はわろし空也の音こうやといふべし）この歌來をこうといひかけ
たるなり後には杖をばもたで鉢ばかり扣くことゝなれり（其後は茶筅をも賣れり）笠は着ず一休
和尚のこれが讃にも晝不笠今夜不商東西南北自由身【京雀】に四條坊門通たゝき町南行に鉢扣の住侍る
も空也上人の跡なり（極樂院と名づく此地に獵師鹿を殺したるが發心して空也の弟子となりし古事有）
念佛となへ瓢箪を扣き修行しける故に今も鉢扣と名づけてふしをつけて申たる事は空也上人の作りて
致へ給ひし法語なりかの杖につけ給ひし鹿の角は今も極樂院の什物として去る頃後光明院崩御の御中
陰に此處より鉢扣十人打つれて般舟院に參り念佛となへ詠吟しける時にかの角をさゝげて内洲に立た
りけるをまのあたり見侍る世にたぐひもなくてなる五支の角なり又常に日鉢扣とも茶筅を作りて賣な
（鉢扣の歌）り鉢扣の歌「諸法實相ときく時は峯のあらしも法の聲萬法一如とくわむすればにはの蟋蟀も佛なり佛
は三世にましませどかゝるひくわんはたのみなしひくわん教主の釋迦如來にもねはんの空にかくれます
ましてや凡夫の身にていかで無常をのがるべき無常眼の前にきて火宅を出よとすゝむれと名利の心つ
よければ聞て驚く人もなし人は男女にかはれども赤白二ッに分られて生ずる時も獨りとり死するやみ
ちにたよりもなし東俗前後の夕煙蒸薩同事の草の露おくれ先だつ世のならひ只何事も夢ぞかしとたふれば
佛も我もたがひにて南無阿みだ佛〳〵くうや上人御法事（諸家の歌にいへり合せみるべし）

茄子の枯るを舞と云ふ

ゆむにて地の干わるゝより出たることとなるべし又よめわるゝといふこともありこれもよめとゆみと同言なるべしといへり東國にてゑみわるゝと云も是なりゑみは咲にてゑまひ(ツボミ)の約りなり何にても口の開くを云ふ

○【秉穗錄】に俗に茄子の枯るを舞といふ加賀の邊邑に舞々をするもの多しその地茄子を産す茄子のあしき年は舞者四方に出て錢穀を求む故に茄子の枯るをもやがて舞といへりとあり此說いかゞあるべき舞は仕まひにてのことなり

乞士

阿彌陀の聖

乞士（化子） 阿彌陀の聖 高野ひしり いたか ひしりといふ吳服屋 作り山伏 梵天 柱姬 かつら飴 大原みこ 八瀨大原 手灯 腕香 すねきり 仲間六部 鳩の飼 庵 口入方齋 葛西念佛 てうさい坊 べらぼう 足を手に代 鼻に笛吹 胸たゝき 節季候 物吉かたいの仕切札 なりんぼ 雪駄直し

乞食は佛氏の道ながらわきて一遍上人なとの如く遊行をことゝとするあり【舊本今昔物語】に阿彌陀の聖といふことして行ふ法師有けり鹿の角を付たる杖の尻には金の朳にしたるを突て金鼓を扣て萬の處に阿彌陀佛を勸め行ける云々此聖古畫に往々見えたるが其さま有髮なるもあり【撰集抄】に播洲小屋野にて髮生ひたる僧むしろを着足手泥によごれたるがさゝらすりて居たることをいひ又自然居士東岸居士なども頭を剃らずささらすりたること其傳に見えたり鉢は瓢を用ゆみな乞食の所作なり自然居士舊跡は山城東福寺龍吟庵の東溪に有居士は南禪寺開山大明國師の徒弟なり自然居士は法相を學び後に大明國師の弟子となる東山に住す泉州自然田村の人なり龍吟庵は國師の本栖なり【雍州府志】悲田寺條に【緇繡】下卷を引て云小兒捧定一個瓢云々といへり【類書纂要】乞丐條隱頭仰面操瓢而乞など見えたりしはかしこもひさごもて米錢を乞へること同じ瓢は水を汲に用故に水くむ器は竹木にて作れるもひさく

やまうり　やまうりとゝいふ【永代藏】に山賣人参のつきつけなどいへり物賣ならねど賣術なとをしか云るにや

ヤシ　【永閑節・寛活一休】にさてやまうりかな〱と有り不角が點「賣ぐすり木偶せんきいを臓に羅什が孫か針を呑所作」今ヤシと云は山師の略なるべし

めつらしき商人品々　○西鶴が【織留】に箔の上塗釜みがき餅米洗障子行燈のはりかへ猫の蚤取などをめづらしさうにしるしたり猫の蚤取釜みがきの外は皆今あるものなり殊に餅などは米洗ふのみにあらずすべて彼より器もて來て搗は自由の至りといふべし

耳の垢取　○耳取の唐人は【沙石集】に見えた（兒戲の條にいへり）耳の垢取は【江戸鹿子】に神田紺屋町二丁目長官とあり【五元集拾遺】觀音で耳をほらせてほとゝぎす【蓬被楠】延たる爪は指のふくりん耳堀の鬆唐物の似せ渡り【笑林廣記】（二二）一待詔爲人取耳といふ物語ありこは髪ゆひ耳垢をとることよと見えたり

飴菓子諸の菓賣　○飴菓子諸の菓うり昔より時々さま〲に趣向をかへて賣にはやりたるもあまたにて枚擧にたへず

蓮葉商ひ　○蓮葉あきなひ享保二年艸子【娘容氣】に桃や柿や梨の實是ぞ蓮の葉商ひ七月十三日より云々

しもたや　古道具屋　○商ひせざる町人をしもたやといふはしまふたやを約めて云なりそのかみ古道具やを仕舞物店といへるも身分をかへたとしたる者の家財をかひ取て賣ものなり承應二年丑六月十九日町中仕舞店之賣物はさし切に置可申候【一代男】（五）うきよの事も仕舞たやの金左衞門云々【風流旅日記】（二）大坂に隱町のことをいふにこの邊はよろづ仕まうたやの楽隱居ならずものゝ俄道心云々

まゆむ　○本居大平が【萬葉】（十四下）可奈刀田乎、安良我伎麻由美比賀刀禮婆と云る歌の註にまゆみはまゆむとはたらくことにてまゆむは地の下わるゝことを聞ゆされはまゆみは地の下われてと云ことなりしかいふ故は今いせの國人など夏の旱に畑ッものゝ枯るをまふと云是旱の時に限て云ことなれはまふは

よみ賣 ○よみ賣【松落葉】かゝぶし四條河原京八景こゝに戀路の世のうはさ唄に作りてよみうりの手びやうしそろう笠の內【諸艶大鑑】夜さへ編笠をきてつれぶしの讀うり（貞享元年のさまも今にかはらず）

辻賣繪草子 【人倫訓蒙圖彙】繪双子賣世上にあらゆるかはつたる沙汰人の身のうへの惡事萬人のさし合をかへり見ず小歌に作り淨るりに節付てつれぶしにてよみ賣なり愚なる男女老若の分ちなく辰巳あがりのそゝりもの是を買とりこ樂となす誠に遊民のしわざなきに事かゝぬ商人なり辻賣繪草子といふも是なり【元祿曾我物語】に遊女の心中三勝が時分はめづらしさの儘狂言にて作りぬ次第に類多くなりて今はふるめかしとて辻賣の繪草子にも載せず

紙畫 ○すべてめづらしきものなどを繪にして賣を漢には紙畫といへり【東京夢華錄】に蠻國より象の來ることをいひて御街遊人嬉集、觀者如織、賣撲土木粉捏小象兒幷紙畫、看人携歸以爲獻遺、

ほうろくの一倍 ○乙州が【曾禮〳〵草】にほうろくの一倍とて賣だにすれば利はあるものなり古き前句付（一倍になる〳〵）炮烙は世の商の惣領なり

つきつけ賣 ○【人倫訓蒙圖彙】につきつけ賣といふものあり老婆發燭（ツケギ）を持て人家の暖簾の內に入る圖はありて其よし記さゞるは誤りて脫しゝなるべし人の買むともせざるに强て賣に來るものをいふなり今もさる者あり女などはさま〳〵難儀にあへるよしをいひて憐みを乞ふ又一種憎むべきは物よりも價のやすけなるにめでゝかふものあれは數あるものは必足らず初によきをみせて價を定め賣すますときはわろきと

暖簾師 かへなどさまざまたばかり事する是を江戸の俗に暖簾師といふとか【誹袖海】に日本橋にたゞずみ往來の袖にすがり短册のつきつけ賣（其頃は橋番人などなかりしにや）【伊呂三線】【深あみ笠】に大脇差の似せ牢人家々に入ながら詑に是は御合力買とて壹文ヅヽが耳かき楊枝のつきつけ賣などみえたるは

口上商人 いづれも放蕩ものゝ落ぶれたるをいへり又人のつどへる處に出てえもしれぬ物など賣を口上商人とも

とつかへべい めける

○今江戸に飴と古きせるなどをかへにありく者ありとつかへべいと名く其ことばにめげたらしときせるの古いとゝつかへべにしよと呼ぶ【諸艶大鑑】松屋燒の土火入に取集めたるめげ烟管といへり損へることをめげると欠瓦をめげと云めげたらとはつぶれたるきせるを云ふなり今是をかへる飴賣も見付たらといふことと心得めり此飴賣の事を或說に正德の頃淺草田原町に善右衛門といふ者ありしが生國紀伊國道成寺の脩つき鐘建立の爲に江戸に下りてこの事に賴まれしかば飴と古がねと取かへて町々をあるきし是その始なりその後すたれて寶曆三年の頃より神田小柳町に甚右衛門といふもの異なる聲してとつかへべい〳〵と呼あるき專ら盛になりしは寶曆九年の頃なりといへり此說おぼつかなし其頃が【色三線】大阪の卷軸城買が落ぶれたる事をいふ處茶碗燒出す高原といふ處に風の神と相住して（風の神とは風神送りといふ物もらひなり）新町の名ある太夫天神の姿を紙のぼりに畫き其身は古き破あみ笠を着て端々をもつて廻りさあさあ丹波屋の小さつま明石やのもろこし云々古釘にかへましやう〳〵と子供たらして其日を送りける【本朝文鑑】左角が地黃煎解に此ごろの人の覺えたがひて唐からくりのあしらひと思ひ古がね買のきせるの雁首とかゆる又【伊呂芝居】にきせるの皿ひとつにもかへてもらひにくきしろものとも見えたり

飴賣の笛

○飴賣の笛ふくことは和漢同じくて漢土には古きことゝみゆ【詩有瞽篇】箋云、簫編小竹管、如今賣飴餳者所吹、また【周禮】小師掌教簫といふ處の註もこれと同じこゝにては古くは聞えず（三官飴といふは明より來たりしもの賣たりとなむ）笛を吹ことは彼國を學べるか【雲合奇蹤】（十九）挑了擔担一頭、擔有搖鼓兒泥人兒引線兒紙糊小篷兒燈艸發板兒、丁々云々

飴賣の傘

○傘をさすことは【俳諧案糸】傘のごとくかたぐるま花の枝祇園林におすな飴賣【後撰夷曲集】笠さいて出せる箱におくあめの白きをみれば粉ぞふりにける

棒手振　りとみゆ後にこれをぼていふりといふは訛れり【西鶴織留】に棒手振（ボテフリ）といへる是なり今常にも來すし

棒にふる　てみ知らぬ商人をふりに來る商人といへるはいよ／＼移りたるなり了意が【浮世草子】に家を棒にふりとあるは今もいふ諺にて身上唯初一つとなれるをいふなり

○建長寺圓旨か【東歸集】に十露ばんの詩あり認定盤星元是懇、且休分兩又分銖、人言八兩半斤重、我見知他算得麁、

青豆時　青豆時　十九文　とつかへどい　飴賣の笛　同傘　よみ賣　繪草子　紙畫　ほうろくの一倍　つきつけ賣　山うり　めづらしき商人品々　耳の垢とり　しもたや　古道具屋

商人の朝まだきに出るは多かれどわきて豆腐屋納豆賣などぞ早き者には有ける又江戸には聞えざる物ながらむかし京師にて青豆賣といふもの有て早きものにたとへたり【洛陽集】髮結と青まめ賣と白露と（信德）朝霧に青大豆うりに辻かく袖（秋風）青大豆やはじかみ二片匙をとる（我鴎）はしきたる大豆を賣とみゆ匙にてすくふなれば鑑劑調するやうに嚢を取あはせたりこれは手の指になぞらへいふなるべし箕山の【大鑑】に青豆を商ふもの京の町を黎明のころのみ賣まはりて日たけてよりは通らず是によりて早く來る客を嘲りて青豆といふといへり

安賣十九文　○【錦綿丈岳獨吟】我家か近うて喘あまるなりなんでも九文鼻毛まで濟九文なるもありしにや【我古呂裳】に享保八九年の頃小き道具品々安賣十九文にて目すきに撰とらせ賣商人ありことの外はやり町々辻々にて後には上物を並へ卅八文一通品々或は十三文一通品々並へ賣珍らしき故彌はんしやうしけるといへり其後は廢れたりしが文化年中より又此類はやりて今に盛りなり近ごろは古道具まで細かなるものを大路に並べ賣夜に入は燭を點して人通多き處に出て賣ことはやりものにて價は高下さま／＼なり、

りとなむこれ誤り傳へなり【人倫訓蒙圖彙】法論みそ賣の處に曲物に奇麗なることもをおほひさしにならひ何方にても下にすぐにおく事なし一方を高き所へもたせ置人にふみこゑさせぬよし子なき女これをこゆればかならず懐姙すといへりさらば望みてもこゆべき事ならずやさる物賣今はなければ似よりたるは納豆うりにてもあるべし

ふり賣札

○大路を何にても持ありきて賣をふり賣といふ【見聞集】にかい道をながめ居しにふり賣とて萬の物を賣むと呼はる萬治二年己亥正月振賣の者年五十以上十五以下并かたは者今度振賣御札被下候唯今迄振賣仕候者共計年數僞無之樣町中吟味仕書上可申家持札取候事又は新規に振賣商介札取候者堅停止之事絹紬木綿麻布并蚊屋紙帳振賣仕候者に御札被下候間人數相改書付上可申事（以下虫損）是は札錢壹ヶ年に金一兩づつ被仰付上候事同三月振賣札之覺、きぬ、小間物、木綿、麻、蚊屋、紙帳、右は御札被下御赦免被成候分、一御座、あみ笠、小刀、香具、かはたび、からかさ、木綿足袋、眞綿、ほうれい、さぬ糸、きんちやく紺、布切、帯紙、瀬戸物、つき米、かうじ、油、鍋、薪、しゆろはうき、物の本、かんぶつ、南ばん菓子、右は跡々より札なしに御赦免被成候分、振賣候者、肴、茶さうし、たばこ、時々のなり物、くわし、鹽、飴、おこしげた、あしだ、味噌、酢、しやうゆ、とうふ、こんにやく、ところてん餅、麺、ざる、とうしん、つけぎ、右は五十以上十五以下片輪者之分札被下（虫損、茶さうしとある

壹錢札

し文字は衍字なり此ころも茶さうといひ來れり）古着買、煎茶賣、髪結、右は五十歳以下十五歳以上之者札金出申候髪結も同時に改め有かみゆひ壹ヶ年に師匠は金貳兩弟子は壹兩づゝ札錢被仰付上（是今いふ萬治札なり後世役人足を出すものは札錢の代りなるべしこれのみ今に札を以株とす）ほどなく振賣自放になりて延寶七年未二月十三日振賣商賣人猥に多出來候由其聞有之近日又吟味被成候間を出し入數改當年新規に振賣致候者只今停止依之先達而知らせ置者也とありて其後聞えず遂に絶えた

藏は又其後絶たり云々大丸も朝鮮人の頃は新店と見えてめづらしげに人は云き（寛延元年なるべし）壽字越後屋が安賣の引札せし事あり【下手談義】に死字末後屋と書たるは是を取なしたると覺ゆ【わが衣】に享保十年本町に釘貫越後や新みせ出る同所壽字は延享元年に出寶暦九年に店を仕舞商家の興廢枚擧に遑あらず安賣札を廻すこと寶永頃よりたま〳〵あり享保より二季に廻し〆寶永以前は是等の事なしといへり

引札

○引札【耳袋】に元祖大木口哲狐からやく平藏油みせ五十嵐屋共に世話いたしける大阪屋平六諸風散といふ風藥こしらへ其頃いまだ引札などゝ申物なき折から委細に風を治する譯を認め初て辻々にて引札いたしける折ふし風はやりて此藥夥しく賣ける故俄に平六身上大になれりといへり

古着やの起立

○富澤町古着やの起立は友山の【落穂集】に見えて兩人づゝにて一人は麻布の袋を肩にかけ町中を左右に分れ古着かひありけりとか元祿十四年十一月富澤町名主彦左衛門願之通古着物代被仰付同十六年十二月十三日質屋惣代古着惣代向後相止

古金買振賣商

○享保三年戌十月六日古金買店ひかへ候者の外振商賣の者ばかり四百八十五人呼出しありこれにて人數殘らず相濟候

商物の相場をふれありく

○商物の相場をふれありくに迷子を呼まねすることも近時に始れるにも非ず享保三年戌七月十六日本所深川筋まよひ子を尋申候由是は諸色直段高下しらせの爲の由致風聞候云々

朸

○●は朸の名なり【和名抄】行旅具朸和名阿布古【新撰字鏡】にはあほことあり歌に多く逢期によせたれば【字鏡】の訓は普通にあらず【和爾雅】に楤擔（尖担同）輭擔（匾担同）【三才圖會】禾擔負禾其也其長五尺五寸、剡匾木爲之者、謂之輭擔、斫圓木爲之、謂之楤擔匾者宜負器與物、圓者宜負薪與禾さてあふこはおとあと通ふこと多ければおひ木なるべしといへれど朸木の意にて通ずべし又荷ひたるさまははかりにかけたらむやうなれば俗には天秤棒といへり世にいふ婦人これをこゆれは折るゝとて忌ことあ

現今安賣
掛直なし

々此きるものおぬしの娘に似合たるとや我も娘あり子にはきせて見たき物ぞおきやう御本尊おだいまんだら此じゆすぞ〳〵代物二貫はやすけれどもまけ候ぞと云て賣たりおそろしきたばかりいふに絶たり（むかしは常の人雜談の中にも八幡白癩など誓ことをいへり商人は殊更なり人情不直なるよりのことながら猶質朴といふべし又室町邊に其頃有し呉服屋後なくなりしと見えたり越後屋などは其後の事なり此小袖賣しは古着にはあらざるべし主が袴きたるもめづらし昔近江國蒲生刑部大輔貞秀入道智閑と云もの一向念佛を修し隣國もこれに心を安んじ居たるを俄に出陣して鈴鹿郡を討取れり其ころ智閑の虚念佛と云もてはやせりとなむ諺にして正しからざることと此商人と似たり

○凡商人の現金掛直なし安賣といふことは越後屋より始れりとなむ【永代藏】商の道はある物三井九郎右衛門といふ男駿河町といふ處に表九間に四十間棟高く長屋作りにして新棚を出し萬現銀賣にかけねなしと相定め四十餘人利發手代を追廻し一人一色の役目金襴類一人日野郡内絹類一人紗繻子綸龍門の袖覆輪かた〳〵にても自由に賣渡しぬ、越後屋八郎右衛門と云はもと駿河町木戸際に間口六間に奥へ十間程住て絹紬郡内權留木綿類を仕入て上物はなかりし上物は本町にて調へしなり云々享保六年燒失して後呉服店とは成ける此本店通室町三町目角迄一店となる切店の方西へ六七間ほど寛保三年廣むる木綿店元文五年東へ十間ほど廣かると【我衣】にいへりされども貞享の頃よき物も賣たるよし【永代藏】にいへるがごとし貞享四年【江戸鹿子】に商人を記せる中に別に◇やす賣小袖紬駿河町越後や本町富山や同町伊豆藏や同町いゑきと有り他の呉服屋も現金安賣を越後屋に習ひたるなり其頃の唄に「越後屋現金かけ直なしとて座當抔がうたひて三絃を彈たりと古老の話あり延寶中のことなるべし【後は昔物語】本町一丁目に伊豆藏二丁目は富山に花色暖簾の諸の字越後やかき暖簾の新賞越後屋いづれもはなやかなる店にて朝鮮人來聘の時棧敷の體いかめしく覺えしが[illegible]にいちはやく[illegible]に其後伊

き數十家とはなれり

江戸へみせ棚のさま

〔むかし江戸の町みせ柵のさま【見聞集に】今江戸繁昌にて屋作り美々敷事前代未聞なれば田舍人見物に來りくんじゆす爰に室町の棚に平五三郎と云て心横道なる人有そらばかをつくり田舍ものを近付て物をうらんと巧みて髮ひげむざ〳〵とはえさせ紙頭巾を目の上まで引かぶり綴りたる古小袖を靑木綿袴のよごれたるをむなだかにきなし手に長數珠をつまぐり口に題目をとなへ見せ棚に打かゝり（これ慶長元和の頃なり此ごろもみせ棚といへりみせとばかりいふことば）そらいねふりして居たり田舍人在所へのみやげものをかはんとて室町をめぐりけるにから綾の狂文唐衣朽葉地むらさきどんすりんず金らんにしき色々樣々の美麗なる物をつみかさねぶげんさうなる人たちが並び居て何をかめす御用かと問ふ田舍者のことなれば恥かし顏にて物買んといひ出さむ事思ひもよらず御免候へとふる〳〵棚の前を通り行ばかりにて物買べき所なしみれば是なる棚に後世願ひと見えて無骨なる一人我等が里のいくぢなし左衞門四郎によく似たり此棚にて物をかはではと思ひこれなるきるものむすめに似合たり直はいか程ぞとゝへども我は耳が遠きと云て口に題目をとなふ田舍もの是をみて江戸の都にもかゝる姿のばか者ありけるぞやと思ひなら棚主殿是なるきる物錢三貫にうらしめと耳のかたへ口をよせてよばゝるねぶりおのこ是を聞此小袖一貫にもとく賣たし扨三貫に賣らむといはゞ田舍者こひそこなひと思ひてにぐべし何々二貫にかひ度とやゝすく候いや〳〵と面をふり又いねふり題目をとなふ田舍者我三貫といひしを二貫といふは殊に耳きかざるにやたぶらかさばやと思ひ扨々お主は欲德にも取あはず後世の事のみ思ひ給ふ有難き人なり我里の左衞門四郎と云人によく似させ給ひたり誠の佛よと云ふねふりおのこ目を開き打笑て其事よ〳〵おわれの里の左衞門四郎殿（われとは自他ともに云ど人をさしてはおもじ付たるめづらし）御經宗にておはする歟あらありがたや正直捨方便と一の卷に說給ふ何

千駄櫃
○【庭訓の抄】七座の店の内千朶積の店といへるは何にまれ多く積あげたるにや林逸が【節用集】人倫部に千駄櫃（商人）と出たり櫃は器物なるを商人の名とするは一種の櫃ありてこれを用ひ商ひしたるものとしらる貞室が【かた言】に千駄櫃をせんだんびつはわろしこれ後世高荷といひしもの是なるべし【松落葉】外記節現在熊坂に山賊の盗のしれものら高荷をおとし云々近き頃高荷といひしものは木綿を高さ丈あまりにつみかさねしを背負て市中を賣ありきたるが安永の頃までありて今は絶たり

高荷
享保七年刻【俳度曲】は謡曲を題にして讀たる發句集なり其中に常陸帶を「籔入におし賣するぞふくさ帶といふ句ありて帶うりの圖高荷なり又【下手談義】に木綿賣の高荷ほどなにとく／＼しき戈を負ひ風來が【志道軒傳】に仰げばいよ／＼高荷の蚊屋賣といへれば木綿のみに限らず帶うり蚊屋賣も高荷ありしとみゆ老人云木綿一反ヅヽ段々に積重ね高さ丈程にして脊負て賣あるき買人あれば竹竿をもてあげおろしをして見するなり高荷うりやみて兩掛にして賣あるきしも近來はなくなりし處に【建保職人歌合】十二番左商人歌「商にも身にもかへんとおもへどもあふ事をうる市のたきかたその書のさまをみるに高荷をれんじやく／＼にて負たる男の紙を手に持たりこれそのかみの千駄櫃なるべし又高荷にあらで脊負ありきたるものをひしりといへり後の名主の條に云り

竹馬
呉服店
○竹馬と云もののこと【事跡合考】云行商市井と云老人語曰本町二丁目家城太郎次と云呉服の大商は寛永六七年頃始て京都より江戸に下り常盤橋ごめに立て腕に呉服ものを二三端ヅヽかけて居たりこれを大名御旗本の家來ども買に來りたり餘りに腕もかいだるくなりし故木馬の如く竹にて兩足をしつらひ上の方に長き竹を横たへてそれに呉服ものをかけて商ひたり是を代絹ともめん伯などの商人竹馬とて右の如くしつらひその商物をかけてかつぎありく其の始なりと云々然してかの家城本町に賣店を出してより日を追月をかさねて京大阪より呉服商人本町につどひ集り今の世の如

でいく\　いふことなりといへれど江戸にはさる處もなし是はもと手入く\といひしが訛りてでいく\となりしなり京にては唯なほしく\と呼り【簔紘輪】奈良晒身過す夏の呼聲に【六玉川】六編寒ひとつ通した聲でなら晒このさらし賣も今はなし古老云寶永の末大坂に天滿喜美太夫といへる者說經淨るりの名人にてありしが幾玉の茶屋にて口論しこれに付て江戸に下り名をつゝみて居れり一とせ呉服屋蚊屋を賣荷持にやとはれて萠黄の蚊屋と呼に節を付て美聲を高くはり上だれば聞人これをめでゝ此年蚊屋大に售たりこれ蚊屋うり呼聲の始なりといへりされど前に晒うり有り

○【川柳點】前句付らかんじは萠黄のかやのやうに呼げに羅漢寺勸化のよび聲ゟ今のごときは蚊屋賣以後の事なるもしるべからずまた或老人云おなじ頃にや挑灯うる者あり長き竹にあまた桃灯をゆひ付これを荷ひて挑灯やちんと呼聲長うして一聲一町にあまれりとなむ又奈良晒を賣しより以前は高宮を賣步行けるとぞ【昔々物語】に昔は四月比より伊勢津緥子とて板にはさみ擔き賣ありく事おびたゞしく千石已下の面々是を調着す價一二匁程なり帷子も縞高宮とて賣步行此高宮縞をみて帷子に買また夏袴にも仕立させ歷々衆着す價一反五六匁成しを近年は帷子は奈良半晒熨斗縮いづれも高直袴も郡內平精好平など高直なるを着す緥子抔は買ふものなしとあるは享保十七年の頃なり按るにからと云はかはうなりかはうはかはいと同くうらんと云ことなるべし【職人盡】に馬かはふ革かはふあり馬かはふは馬くらうにて我かたに買もすべし革は調度にも造らで人家にあるべきものならねば買にくべきやうなし賣に來るにこそあらめさらば此例にて馬かはふ馬を賣ものなりかはふのかなはわろしかはうと改むべし「かはいと云が如くかへと云ことなりされば賣かひ共に通じてかはうと云ことゝ見えたり【五元集】にかはかうや竹田へかへる雪のくれこれは件のかはかうにはあらず小便買などの肥とりなりかはとは圊も淸器も共にいふなり此かはうはかはんと云なり

小便買

あらたむ一又さだめおく宿もなさうのあさゆふにかよふ内野の道のくるしさ是は茶さうにて茶をうる者なりさうは候ふの略なり【甘露寺職人盡】鍋賣が詞にほしがる人あらば仰せられよつるをもかけてさう【同】蛤賣詞ひけのあるは家のはぢにてさうぞ【烏帽子折双子】牛若の詞下女を近づけこの邊にえぼし折ばしさうか烏帽子折が詞くわちや殿のめされうずるえぼしは大きひさうかこさひさうか【昇清草子】にあれはいかなる人さうぞ又れいのあさ丸ばかりでさうすは參りさうといふま〵に【宗因獨吟】人遣ふすへしらぬ笑止さおかしげに鈴をかまへて參りさう【佐渡中山集】摘うるやみやこは野邊の若茶さう（梶山保友）此集は寛文四年重頼が撰なりこの頃もなさうといひしことしるし又さうといふべきところにかうといひしこと有【猿源氏草子】いわし賣が詞にあこぎがうらのいわしかふゑいと有かふはかうと書べしゑいといへるは其餘聲なるべし【醒睡笑】に京の町を大根賣の大こかう〳〵といふて通る又（かすりの部）京の町にて小き足駄を賣商人こあしんだ〳〵といふて先に行けば其跡から茶をうる者のつゞきてなかう〳〵とわれがねに似たるひゞきがすまぬ（ひゞきとは末を引たるをいふすまぬとはこの聲ゆゑにいま〳〵しく聞ゆるなり）大この下にかうといふは上のこをかさねたるやうなれどさにはあらず【又同草子】（秀句の中）芹かうと賣たる咄もあり又萬歳といふ歌に始こ〳〵と賣たる者はやしよめとうたふ今も京難波にては賣聲に何ことこらじをそへて呼又昔も何はとよべるもあり又山家などの者京に來て物賣はむとて呼あるけること猿樂狂言にもあり古き咄などにもありておかしきやうなれど賣買ともに呼ありく事は古今おなじければ昔うた田舍の者などさることもありしならん狂言また古き咄などに賣ものを節に呼といふことあり今の數屋うりのやうなるもありしにや件のこあしだと呼し咄は魚呼あとより古鐵買がふるひ〳〵といひしにひとし聲のさま〳〵なるは今江戸にて柿賣に木さはしをきさんし鯛賣はかきんよ〳〵何とも聞わきがたきは雪駄なにしの呼聲なり悲田院と

所爲、孟子何以知之、意當時中國人、擔物亦如此耶とみゆ額に縛たらむも負へるにて戴にはうときかたにや、もし趙寶にこゝの大原女などがことを聞しめば實に負戴のまさしきをさとらなん今も三宅島などの女は額に絆をかけて物を背に負すべて伊豆國の島の女は大かた頭に物をいたゞく習ひなりわきて新島の婦女は何品にてもしかりおふごにても脫スルカ桶にても箍にても荷ふも頭上にさゝげ持はこぶ是にはわけものとて木綿一はゞを二ツに折長さ四尺餘なるをくる〳〵と卷て頭におき其上におふこを居る又俵もの樽などは管にて輪を作りこれをいたゞきて其上に持つべき物を戴く重さ十六七貫堪る此はたらき男に倍すと【南島雜話】にいへり

わけもの

○粤述に猺人推髻跣足云々、嶺磴險陁、負戴者悉着背上繩、繫於額傴而趨、上下若飛兒能行、即燒鐵石烙其跣、故能履棘茨無傷、

○【滇黔紀】遊滇中、苗猓擔負貨物、頂戴半木枷徒行、亦不暫脫、相傳武侯定南蠻、設此號令群蠻使其不敢與漢人爲伍、以別貴賤、殊不知非也、彼戴木枷者、殆可負重以便工作耳

○【鄭明選秕言】に老子曰、不得志則蓬累而行、註云頭戴物而兩手扶之、謂之蓬累愚按、本草蓬蘽、一名覆盆、蓬累疑蓬蘽、不得志者、如覆盆於頭而行也、太史公云、覆盆何以望天正、頭戴物之義、

看板

○看板酒店に杉葉のみならず簾をつるしたる畫もみえたり漢土は【水滸傳】に魯智深五臺山を鬧する條市稍盡頭、一家挑出箇草帚兒來、智深走到那里、看時却是箇傍村小酒店などあり

酒はやし

○酒はやし【奇奇雜談】に路次の小家に酒簾ありと見ゆ【下學集】に掃愁帚酒の異名とある故なり東波洞庭春色詩、應呼釣詩鉤、亦號掃愁帚、注に李後主中酒詩、莫言滋味惡、一簾掃閑愁とこれなり

物の賣聲品々

○物の賣聲【三十二番職人歌合】になさうとて女のこしきめく物に青き葉を入て頭にいたゞきたるを畫けりこれをなさう賣と書たる本あり誤なりその歌「春霞にくゝたちぬる花のかげにうるやなさうも心

大原女のはゞき

に此處にて魚を賣ものは女なり平なる桶に魚を入て首にいたゞきさかなめされよ（よを長く引）といふなり其體都の柴賣の女のごとし土人云往昔此處にて平家亡びし時貴賤となく女はこの邊の漁人などに身をよせて魚を賣たるより今に至りて此風俗なりといへり【房總志料】に長狹郡天津の邊は女の業に諸魚或は海藻など籃にもり頭に戴き山中を巡り米穀と交易す男は悉く釣徒なれば也又女郎は山を畑とす下より峯に階の如し糞汁など洒ぐも女の業にて小桶などにもりて頭に戴き幾ばくともなく山を上下す其勞する事なりといへり（今もさありやしらず【小聰間語】にも見えたれどそは此書をわがものに取て書たれば證としがたし）大原女が薪をいたゞけるさま古へより然あり【建保職人盡】にも見えたり又古き小歌「あの山みさいとの山見さい戴つれた大原木をへ【鹽尻】に山城國大原より出て薪を賣女の脛巾の結やう世俗と異なり昔建禮門院此山に入御ありて御修行の爲に薪を戴き下山ある人買べきよしいへばやがてうしろ向せ給ひて見せさせましましゝ餘風にてはゝきをうしろさまにはき侍ると八瀬の人語りしかゝる事も亦里俗の傳なりと有り魚賣も是と同日の談なり）【狂歌咄】にも大原の里は八瀬より一里ばかり北にあり女はかね黒く薄げさうし白布のぼうし赤前たれして柴木をいたゞき日毎に京に出て黒木めせと賣ける人がら山家なれど尋常なり木かはむといへば後向てみせ侍る建禮門院芹生にこもり給ひ人の見奉ることをおもはゆくおぼして打そはみ給ひしおもかげとぞいひ傳ふ今はさやうのことなし唯脛巾をうしろさまにはくを彼門院の後向せ給ひし餘風といへり魚賣と同日の談なるべし此脛の說はひがことなり【建保職人盡】大原歌「うき身には數はづかしくゆふはきの其むすびにもあらばこそあらめ判云大原の里には神の誓にて男になれたる數を足のくびに結ふことの侍るとかやそれもあはねばむすびめなしとよまれたる云々（かゝる俗故に前にて合せ後にて結ことゝなりしにや古畫をみるに桂女その外物うるもの又常の下づかひ女童までみな頭にさゝげ持こと常たり今大原女にのみ

物を頭に戴く者

をいたゞく事【源氏物語】（あづまや）薫が浮舟の三條の家に行たる處ほともたゝあけぬるこゝちする
に鳥などはなかでおほち近き所におほとれたる聲していかにとかきゝもしらぬなのりをして打むれて
行なとぞ聞ゆるかやうの朝ぼらけにみればものいたゞきたるものをにのやうたるぞかしときゝ給も
かゝるよもぎのまろねにならひ給はぬこゝ地もおかしうも有けりなのりは賣物よびて過るなりかやうの
朝ぼらけ以下は商人のさまをおもひやるなりこれ多く物いたゞきてありく事知べし又（常夏の卷）近江
の君の詞水を汲いたゞきてもつかふまつりなむ古へ水を汲は必いたゞきしなり【舊本今昔物語】（十六
卷第三十三語）此尼桶を戴て出行ぬ水汲に行なめりとみゆ又（廿卷第六語）餌袋折櫃云々下衆女に頂
かせて持來り【著聞集】（十）女の川の水をくみてみづからいたゞき行【山家集】に月をいたゞきて
道を行といふことを「くみてこそ心しるらめ賤のめがいたゞく水にやどる月かげ【源平盛衰記】（三三）
販女の女御とはされはたれぞ若し丹後の局の事かそゝ「桶櫃をいたゞきて物をばよもうらじ【沙石集】
北條泰時人々の雑談を聞貴賤貧しきものゝ妻われと水を汲いたゞき候ほとに頭には毛一ッもなきとこそ
承れ云々また千代野尼無着が開悟通徹の歌は人口にいひふりぬ【犬子集】（寛永）いたゞく桶にそふ
るべに皿と云に（徳元）いとまなくせがみつかふる一季をり【一代男】（三）程なく小倉につきて朝

おやう

げしきをみるに木綿かの子の散らし形にあかねうらをふきかへさせこしの帯前結びにひら元結ふとく
すべらかしに結ひさげはんきりのあさきをいたゞきつれて我からぬらす袂まくり手にしておもひ〳〵
に道をいそぐをきけば是なん此邊のさかなうりだいり小島より出るたゞおちやうと申いせ詞にやゝとい
へり所によりて替りたることをかし【物類稱呼】に上總にて他の妻をおちやうと云ふ御女郎の略語か
伊勢にてやよといふ下賤の妻を云となり江戸にて娘をおやうといふもこれらの詞の轉りたる歟或云尉
と姥の尉は官名なりむなるべしといへり）【夏山雜談】に西國へ下りし時長門國赤間が關を一見せし

替錢
問丸

て取をいふなり問丸は【和名抄】に邸今案俗云津屋此類也、古停賣物、古取貨處也と云是なりつやとは集屋の略といへり丸は今俗にはしたならぬを丸といふは是なるべし然るを【小栗實記】に古へ家號を丸と呼ぶ今の屋の如く稱す故に問屋を問丸と云ふ舟の號に何丸と呼も其遺言なりと云るは非なり何屋といふを何丸といひたらば此外にもいくらもあるべけれど何丸といふこと聞えず凡そ丸と稱するもの城廓はその差圖圓くするもの故なるべし舟にいふは古へ舟に官位を賜りし事などもありて人の名のごとく呼べるものなりそは舟のみならず猿まろ畚まろ犬の名に翁丸等何にも丸をつけて呼ことあり問丸も此義と同じ問は上にいへる如くつとひの略なり津をつといふも物の湊まる處なればなり集の字津ともいへり【親元日記】文明五年、紙問丸九郎三郎光次、西國紙商人問屋事、祖父孝願以來于今無相違、萬一雖競望輩、山緒之上、彌不可有其煩之由、可頂戴御奉書之由、また文明十一年、御材木問丸孫二郎國弘、四條道場材木代三百二十七貫余內、長祿四年百拾餘貫返濟、相殘分無沙汰云々などありかく問屋にのみ丸といへり今俗はしたならぬ物を丸といふは缺る處なきにて義異なり【宗因千句】手形してする庭の松風、女舟出る問丸の浦つたひ

甠給仲人

○また【庭訓往來】に甠給仲人安齋云甠本字は侹又尫に作る短小也弱也と注してちいさくよはき事也給は借也供也備也足也と注して物の備りて不足なきをいふなり然れば甠は貧者をいひ給は富者をいふ仲人は兩家の中に往來する者にて貧者の賣物を受取て富者に買しめ代錢を受取て貧者にあたへ其禮錢を我も受て世渡りとする者を甠給の仲人といふなるべし牙婆の事なり婆のみに限らず男にも有べし（今口入といふものとは見ゆれど恐は眼傍ならん甠給の字誤あるべし）

販婦

○【埃嚢抄】（三）に町人の下女をヒシヤメといふ辟言なりヒサメといふべし【和名抄】に販婦ヒサメと訓り云々（この下女と有は召つかふ女の意にはあらず只賤女をいへりとみゆ）販婦は多く頭にもの

駔まはり　物とは異にて駔儈の字音すあいなるべしされどもあひのかなに書ならへとすわいは駔儈の字音に近し【玉篇】云駔駿馬也、會兩家之買賣、如今之度市【呂氏春秋】段干木、晉之大駔【字彙】駔儈會合市人者、牙字は誤れるよし【雞肋錄】に牙郎本作互郎、取互市之義、今訛爲牙蓋誤と見えたりおもふに駔は駿走するを貨物の流通するに譬る賦漢土の義はかくあれ其こゝにてはさのみにもあらず【七草子】いへるはる物の内もの賣にすあひといふ物とも見えたり【和爾雅】に牙行を字訓してスアヒ又トヒヤとするは漢土の義はともあれこゝのことにはかなはず又思中お【海上物語】（明暦二年撰）肥前の長崎にすあひ市左衛門といふもの過ぬる承應二年の大雪ふりにかしばたにて金貫五百目入の金袋を拾へり長崎六拾人のすあひの中にどもりの市左衛門と申てかくれなき者にて唐物なと商買の中にたつさはりて世をわたるものとみゆ承應年中【紅梅千句】に「のぼりぬる糸卷物に利のありて繁昌しける長さきの町これ今の糸割符のことなるべしすあひ賣買の中立なるべし今物の相場と云もすあひの所なるべし又野菜などを賣る市をすといへりこれは物のあつまる處を云ふ洲東などみな然り

すあい雜魚　○【おこたり草】（五）京都大坂にすあい雜魚といへるものは小鮎とのみ思ひしに鯔の子なるよしいおなる故は小アイと云へるやらんと他年疑はしかりしに太平記をよみしに隱岐國より帝を船に乘せ奉り送り奉るに誰のあやしまんことを恐れて相物の下に隱し奉りて地の方へ送り奉るよし書り此相物は浪花の雜喉にて販く鹽魚のことなるを知れり是を以て見れば鯔魚の鹽引を小相物と云へる略語なるべし今【太平記】を按るに船頭是をみて斯ては叶ひ候まじ是に御隱候へと申て主上と忠顯朝臣とを船底にやどし進せて其上にあひ物とて下たる魚の入たる俵をとり積で水主梶取其上に立並て櫓をぞ押たりける

問屋　○とひや は【字訓】に淡々替錢油々問々國以豐符進上之とあり替錢は（かはし）に田舍より替して都の津に

十月晦日町年寄三人へ賜りし御書付に連着町とあり）【庭訓往來】の古抄に藝才七座之店、抄云凡藝才は銅鐵堀の事なり七座の店市井に七座あるなり座は物を賣座なり一に絹の座二に炭座三に米座四に檜物座五に千朶積座六に相物座とて魚鹽うるなり紙の座ともいへり七に馬商座是七座なり其外手買振賣とてあり皆々此七座と與力する賣物共多し按るに【和名抄】店家云々俗云東西町是也坐賣物舍也

相物

と有相物はその定りたるにはあらざるべし【鹽尻】に康富記を引て云文安六年三月云々雜談之次に云ヒヲを賣候ものをアイ物と申候此字不審云々予云アイ物とはアキナイ物といふ事歟一條院へ内々尋申て候へば商物と可書之由御返事云々あり漢籍の訓にはアキモノと訓り【詩】谷風賈用不售字義に依る時は賈は坐ながら物をうり商は持ありきて賣ことながらこゝにいづれにてもあきものといふべしあいもの即是なり然れども相物と假字も違ひいづれの座も商物ならぬはなければ此說はうけがたし【太平記】に相物とて干たる魚の入たる俵をとり積で（水主揖取共上に立並びて櫓をぞ押たりけると有りこは生物と乾物との間の物にや乾物は蔬菜をむねとすればなり）

すあひ

○又すあひといふ者有り【七十二番職人歌合】すあひ藏まはりと番ひて出たりすあひが月の歌「月のきる雲の衣をうり物やさふらふといふ人もかはめや戀の歌「おもふこと人に傳ふる道ならでおようや有といふはよしなし

毛二歳

○今も俗言にわかき者を罵りて毛二歳と云かねほりをいふ藝才はかな書にてけにさいなるべし毛二歳と云もかなにて字義にはよらず然らばわかき者のことにのみいふにはあらさるべしたゞ賤しめたることとみゆ其意下才などにや又埃螻蛄才と云とあり是も同言のうつりたるに非さる歟【埃嚢抄】けらさいのことと考ふべし

すあひ相場

○すあひは衣などの古たるを買ひありき藏まはりは何にまれ調度を買まはるものとみゆこれは件の相

賣しが家名と成しか）其の商ふ物によりて何屋とゝなへさて印はさま〴〵付もしたらん又物を持出て店をかまへずして賣たる處を立賣と呼ぶ【山城名勝志】四條立賣の條に建武以來追加云禁制一ヤクヲコボチウル事付車クレノ商賣四條町の立ウリ云々とあるを引たりこれ車の榑を以て商ことと車の榑をまた四條の立賣するを制したることゝ聞ゆ立賣いまだ其處の名にてあらざるなり終にいひ習ひて其處をもしか呼したり江戸にも京橋に立賣といふ處あり【事跡合考】にこゝの事古老の物語を記して云寛文の頃まで様々の商人おのれ〳〵が賣物を持て立ならび賣たり刀脇差などの商人辨舌切らして賣たるなり萬商ひかくのごとし四谷本郷淺草芝の端々より出て買たる事故殊の外賑なりし其後夥しく端々商店出來て自由になりいつとなく買に來る人なく物賣絶たり又立賣と云名はあらねども是よりさき慶長の頃【見聞集】に大橋に毎日刀市立しことをいへり大橋とは今の常盤橋なり立ながら賣ゆゑ立賣といひたるなり【人倫訓蒙圖彙】に口上商人商の合藥幷に擬付のたぐひ諸方の市法會の場等に出て辨舌をもてこれを賣又は神を探蛇をみせ操人形を出し物まねをして人を集めて是を商ふ賴の皮一種の商なり後にはかく口上商人といふ一種のものとなりぬとこれ立賣のさまと見えたり市に立といふことは即是なり

○れんちやくといふ猿樂狂言に目代この所御ふつきに付新市をたていとの御事故高札をおぐる是に打まうせう女わらはゝ此邊にひとり住ゐして酒をうる者しやとの處御ふつき故しん市がたちまらする一のたなをりやうしたらばすゑ〴〵までつけてくだされうと仰せらるゝわらはは一の店をもちましやうと思ふてまた夜の內にでた参る程に市場じや是が一のたなしや是にいませう云々狂言には棉賣かつこ炮烙等に多く新市一の店などのことあれども此れんちやくには故あり物を背負ふ具をれんぢやくといふ今是を連雀と書は鳥の名にして器物にあらず【下學集増補】に連索と書るがよしれんぢやくに假字たがへりすべて何によらず負ひ又は荷ひてありく商人をれんぢやくといひし事と見えたり（天正二十年

立賣

口上商人

れんちやく

嬉遊笑覧巻之十一

喜多村信節撰

商賈（みせ店　立賣　れんちやく　相物　すあひ　相場　問屋　胝給仲人　販婦　物を頭に載く事　ぢやう　大原女のはゞき　茶さう　物の賣聲品々　千駄びつ　高荷　竹馬　呉服屋　現金安賣　引札　朸　振賣札　かみゆひ札　捧手振　棒にふる）

商賈　暖簾　みせ店　厨子棚

今俗には工商をのみ職人といへどもすべて家業なきものなければ何にても職人といふべきなり【職人盡歌合】などを見てもしるべし【猿源氏双紙】にいわし賣の職を譲ると其頃までもかやうにいへり古畫をみるに商人の家はおもてに棚をかまへ脇に入口ありて長き暖簾をかけ軒に塵よけあり板或はむしろにて造る席にて作れるは是また暖簾なり【下學集】に暖簾（垂席（タレムシロ）也）と有り今も京師佛光寺邊の町家には軒に筵をかけたるあり件の棚に物を出し置て人の見て求るにまかす人にみする物ゆゑこれをみせ棚といひ略きては見せともいふ今も棚と呼ぶ土地の名處々に有り又京師には厨子といふ處も交かしこにあり江戸近在には龜戸村に厨子と云處あり是又棚と同じ厨子棚はもと御厨子所にありて物置處なればなり但し厨子は小路やうの處にて形厨子だつ故に名けたるべし又町は田區の名なり其界あること厨子棚の如くなる故にやこれを對していへりとみえて【源氏物語】（はゝき木）かやうにおほぞうなるみづしなどにうちおきちらし玉へくもあらずふかくとり隱し玉へかめれば是は二の町の心やすきなるべし

町

屋

○今何屋といふ家名は暖簾の模樣印しるしより起るといへるもの有こと〲くさにはあらず古き家名に納屋酢屋などいへる有りそれらは何を印につけてさとさせん（是もな屋はさかなを賣り酢屋は酢を

る古歌いと多しかた〳〵取て名とすそれよりしせつかひをも蘭といふは内裏はしためなどの云出し詞と聞の彼御製の香を薫でござといふは是の引歌にや味噌をば香といふなりせつかひ何にも用べけれどむねとみそに使ふ物なればかを薫るはよく協へり蘭といふ同名によりて引歌のかれこれまがひたるにこそせつかひは鐵匙なるべし（世に百炷聞などいひて香を多く嗅はいとたはけたるわざなり必氣逆上すべし何ことも過度すればわざはひあり香などはさやうに玩ものにもあらじ【岕茶餘事】に煮茶之餘、即乘茶爐火、便取入香鼎、徐而熱之、當斯會心景界、儼居太清宮與上眞遊、不復知有人世矣、噫快哉、

尋られしに露地に入てみの笠ぬぐさて紹知角に出たれば千鳥の香爐火のとりたるを是紹知とて右の袖より渡せばうけ取私も懷中候とて右の手より香爐をわたす休甚入興せらる手を暖むる爲とみゆれど灰こがれ火のちらんこと心易からぬ持ものなりここに雪中を歩こと危ふからずや主人は庭まで出ること故とりあへず座右の具を持出もすべしこれを思へば保光大將燒餅を温石に代てもたれしはいと賢しといふべしことゞしくいふ香爐の茶湯など云も件のやうのことなるべし

蛤貝に薫物を入る事

○蛤貝に薫物を入ること【續古事談】に頭中將公能朝臣殿上の一種物に蛤を籠に入てうすやうを立て紅葉を結びてかざしたり蛤の中には薫物を入たり中將とり人々にくはられけり今もねり香を蛤に入また伊豫の簾介などを香合するは古風なり

うぐひす

○香の札に客をウ字に書は省文なり【事林廣記】撫琴の手法に按字をウと書る例なり又組香の小疊紙をさす串をうぐひすといふは【續後拾遺】順德院御製あかなくにをれるばかりぞ梅の花香を尋ねてぞ鶯のなくといふ古歌をとり給ひて東福門院の名けさ給ふとぞいひ傳ふはいかゞ此御歌にては其名かなへりとも聞えず香の包み紙をさせばとてその串香を尋るよしにはなりがたし今按るにつらぬきさすものなれば縫てふことに取たるにはあらざるか【古今集】東三條の左大臣鶯の笠に縫てふ梅の花【催馬樂】に鶯のぬふてふ笠は梅の花笠といふ是なり双紙を綴る具にも鶯といふ物あり【花筑波集】(定時)鶯で歌書をやとづる糸柳また【堀川百首題狂歌】(了忠)うぐひすに双紙のこぐちとぢおくとなれか名殘し鳥にしらすな【後撰夷曲集】たつ春によむ歌どもを書寫す双紙をとづる竹の鶯(宗增)此器にて綴るを鶯とぢといふ中川喜雲が【鎌倉物語】の序に鶯とぢの梅が谷云々又帯などくける具に竹にて短く箆のやうなる物を造り先のかたを二ッにわりかけたるを縫べき處にはさみてくけるなる是をも鶯と名付くしからば縫てふことにやさしき物をとり出て鶯とは名付しなるべし彼串も今は金銅等にて美飾を極て作れどもゝとは竹にて作りしならむ鶯は竹をねぐらとするよし【八雲御抄】にみえ其外竹に鶯をよめ

○また一話あり周防の山口は大内家世々居城にして鴻の峯といふ高山の頂にあり舘は花園と名づけて城山の麓数十町を隔て遺跡あり貞享元祿の頃とか其あたり街道にかゝりし土橋を修理する時役夫集りて其古木を焼茶を煮けるに異香薫じ起りて数百歩に滿たり奉行人驚き燼餘を火中より取出し萩の府にさゝげしかば君侯大に悦ばれ佳名をつけて永く重寶とし給へりとぞ是は陶尾張守反逆して花園の舘を焼亡したる時の燼ぐひにてかけたる橋なるべしとなり其兵火の時香氣四五里に滿たりと諸記に見えたるもさる事ご覺ゆ（或云此香木の事は加茂より出たる瑞雞といへる御香の事に類せり）この頃人の隨筆に出たり實否はしらず

まなばん　まなか

○【和訓栞】云マナバンマナカといふは番香をいふなり眞名斑にや禪家に悪沈を速香といひ好香を鷓鴣斑とよぶよし【埃嚢抄】に見えたり共に漢名はりこいへり此説定かならずバンとは番か斑か疑はし

銀葉

○銀葉は銀ばんといふまなばんは奇南の内に赤袖手眞盤手と稱する上品の物なりもとより漢名にあらず蠻語にもあらざるべし銀ばんに乘て焚べきの意か又眞の蠻種といふにてもあるべし【和訓栞】又銀ばんを【安齋隨筆】に金偏の銀には非ず玉偏の琅なり雲母を琅葉といふといへるは何に出たるかしれがことなり【香譜】に雲母銀葉といひ其外銀葉といふ名香のことゝけるものに多く出たり（香のことを廣く集めたるものに【香乘】一帙あり

香敷

○香敷は銀よりも雲母をよしとす【物理小識】に浣剤布よしといへり和銅六年大和參河陸奥より雲母を獻れる事史に見えたり今に參河より出るは上品にて銀葉に造る【續山井】螢火に水ぎん盤や香の瀧

千鳥の香爐

○【茶話指月集】利休は過分の采地拜領して家貧しからず一とせ千鳥の香爐宗祇所持千貫に求めてやゝ時移る程燈に置て見けるが休が妻宗恩われにも見せ給へとてしばし見て足が一分高て恰好悪し截りまへと云ふ休われも先程よりさ思ふなり玉屋を喚とて終に一分截たり此爐は物ずきすぐれて知られたるがしは取手の穴たかりしを塞て明せたる人なり又云一とせ雪晩利休[illegible]町の宅[illegible]の所へ

初音

柴舟

香を多く用ひし事

に行て伽羅を買ふ其時大木わたりて本末二つ有しを伊達正宗の家臣と競ひて本木を望み互に價を増て買はむとす奥津が同役かく高價に募らむこと然るべからず同木ならば末なりとも調ふべしといひけるを奥津うけがはずいひ爭ひ遂に某を打果し思ひの儘に本木を買取國に歸りてそのよし申演切腹すへしといふを三齋とゞめられ某か子をなだめて遺恨なからしむ三齋逝去の後かの彌五右衛門舟岡山の麓にて殉死したりとなむ是は彼家の名香なれば貴くせむが爲に作り設たる虚談なるべし若そのことの如く是をゆるさば死にたるものを不忠とするかそは當らぬ事なりたとひ三齋ゆるさるゝ共某が子たる者いかでその言に隨ふべき後に殉死したるに付かゝる說も出來たりけむ彼香は其家秘藏して聞たびにめづらしければといふ歌をとりて初音と銘をつけらるとかきくといふことをとられたるは彼家にしては似げなし伊達家は此伽羅を世の中のうきを身につむ柴舟やたかぬさきよりこがれ行らんといふ歌を取て柴舟と名付らるゝこそ是も焦るゝを深く愛るかたにはよけれどはやく香爐なんやうに聞ゆるは辯める心にやいづれもとり／＼に優なるよしこそあらめ又本末を爭とるも心得がたし香のあつまり結ぼるゝ處はもとすゑのわいため有べからず末のかた誠にわろからむには其香名高く聞ゆる寳とならんやかた／＼件の說はうけがたし又かやうに多く求められしは初より後世迄の寳とせむとての事にはあらじ今世のことくたま／＼少許を焚むには多くなくてて有ぬべけれど其かみ常に多く用ひしことなり【昔々物語】にむかしは伽羅燒ぬは大身は不及中小身にもなし人參買ふ人稀なりしが近年は伽羅たく人なく人參下々迄買なり（人參は享保ごろのはやり物なり）といへり【松の葉】長唄の內香盡といふがあり六十一種の名香は法隆寺東大寺云々（此間に銘の文あり）てその末に伽羅の烟と命の君はいく夜とめてもとめあかぬといふを終とす遊びとも殊に多く香をもてとめ木にしたる故かゝるうたひものもあり（妓女の條に合せ見べし）奇南多く渡りて焚すてたるも夥しき事なるべし古へ合香用ひしころは加藥もあり又よき人の外は焚ものなかりしなり

系圖香

各五包合二十五包を打交て何れなりとも其内五包取出し香元より一包づゝ焼出す聞は一二三四五みなかはりたる香ときけば如此圖を名乘紙に書云々余は是にならふべしきゝたる覺え次第に圖を作れば自然と五十二の圖出來るなり系圖香は四炷なり一炷を四包にして合十六包を打交て其内四包を次第に焼出すきゝやう圖の作やう源氏香に同じ是も自然と十五の圖出來るなりおもふに系圖香はもとにて源氏香は出來きそれより無試の法は起りたるにやといへり

鼻根

○彼薫物合の判者は▲方にても侍待にても同じ方を合せたらむをいさゝかのけちめを嗅わけむはよくその方に明らかに又鼻根よからねばたらぬ業なり鼻のよかりしものは【續日本後紀】承和十年十二月癸未元興寺傳大燈法師善守卒云々六根之中鼻根最奇守印他去聞有人入其房守印歸來聞之云向來何人入其房又見童子云汝食其飯驗之信實焉鼻之通明皆此類也これらはたぐひ稀なるべし又【[illegible]】に四條太后薫物を合せ給ふに誤りて薫陸いさゝか過たるを公任卿答いこれを焼試られて薫陸過ぬと申されしを太后殊に褒給ひしよし見えたり

嗅
香を聞

○嗅　今鼻にきくと云は【家語】に芝入蘭室久而不聞其香即與之化矣などいへり故に【眞文伊勢物語】には聞をかぐと訓せたり又【齊本今昔物語】下の貫之が事をいふ處鼻にあてゝ聞けば艶ず馥しき黒方の聞にてあり云々などみゆるも聞はかけばとよむべしそれよりして口語には目のきく耳のきく口きくなどすべて一身に就ていはざる處なく廣く用ひたり

○奇南に六國と分ちたるは不穏のことにて杜撰といふべし其内蘇門答刺（明の永樂中に始て通信すといへり）などこそ國の名なれ其餘は然らずまた古き物には沈とのみいひて伽羅といふ名聞えず後世に【[illegible]】などにもちひらるゝもの沈香の中には伽羅といへり今もこの定にて奇南を沈香の上品とこもへり共に誤りなり後世名香といふものいと多し上種名香追加六種又五十種又七十種などと稱す世にいはゆる傳ふ細川三齋長崎に異國船來る折から人を遣し其物を求めさせらる興津彌五右衛門相役某と共に其使

香式
十種香

は奇南一種を賞翫せし事佐々木佐渡入道道譽より始れり其家藏の名香目錄あり文龜の初志野宗信家名香合また邦高親王の【五月雨記】など【群書類從】遊戲部に收めたり其式左右を分ちて燒出し其判をなして勝敗を決むる事歌合の例のごとしその初め十種香といふもみな此式なるべし【莚響錄】に文龜永正の頃十種被催候事度々有之候宣胤元長和長等の記に相見え候記錄など書候事有之候へは其體に無之候香元を火下と申たる事は有之候此餘競馬香宇治山香の類の他の香は無之唯十種香の名のばかりにて候といへり【尺素往來】に種茶種香之勝負とある是なり憶ふに貝種香といへるは名に負るやうなり十種香とはいへども實は客ともに四種なり十包みあればとて十種とはいかゞなりその故にや十炷香などゝ書ばいよいよ充らぬ事なり炷は【說文】に燈中火主也とあればさうすみをいふなり線香などは炷香とも云べし（唐山人も一炷の香など常にいへどもこは煎煉を經たる線香なるべし【現果錄】一佾韋駄天の前なる燈油を竊む事の條に一炷香將完云々倘香二寸在灰內なども見えたるは線香としらる）

十種香

十炷香

もとより十炷香といふ事は聞えずかゝる故に先輩も後代の名目は正しからずといへりもと十種とは人々一種づゝ出して香合したるが數多ければ大かたにいひし名にや古式いつよりか廢れて今のことし【春湊浪語】に今は回茶貢茶の式の如く勝負を爭ふ是を十炷香といふ其うへにさまざまの作り物をこしらへ盤上にならべ立て盤香といふ名所矢員競馬等種々あり）おさなきものも其式を知ことなれば委しく記すに及ばず再び此式茶にうつしまなぶといへどもむかしの十服茶などの式のごとくもあらぬにやといへり宗祇肖柏等も好みたれどそは蕭騷の時暢懷の樂にて人と勝敗をするやうの事にあらず其頃相阿彌宗信など風俗の法を弄びしかば後世其二流傳はれり【夏山雜談】香の式は十炷香を本としてさまざまの法はみな後に出來たるなり其內に公の製あり或は高貴の人の定め置れたるもあり往々好事の人のこしらへたるも勝て計へがたし

源氏香の圖

源氏香の圖は最初より其圖あるにはあらず五炷の香を試覺る次第をかきしるすに自然と其圖いできたるなり圖の作りやう大概源氏香は香五炷なり五炷の內一より五まで

いづくにもちりつゝひろこるべかンめるを人々の心々に合せ給ひつるふかさあさゝかき合せ給へるにいとけうあることおほかり（きくといはず嗅といひたり）勝負は優劣にあることなり又容たきなども是を用ゆ【鈴虫卷】女房ごものことごとしきをいましむる處火とりどもあまたしてけぶたきまであふきちらせはさしより給ひてそらにたくはいづくのけふりぞとおもひわかれぬこそよけれ富士のみねよりもくゆりみちいでたるはほいなきわざなり

合香の名

香合香の名は大かた梅花荷葉侍従菊花落葉黒方扶方薫衣香裛衣香百歩香百和香浴湯香潤面香拖香甲香供養茶等なり孰れも傳へによりて異同あり其古傳の方【薫集類抄】などに見あたり梅花は閑院左大臣冬嗣公（淳和天皇天長三年に薨給ふ）を初めとして数多の方あり荷葉は公忠朝臣天暦六年二月進之とあり侍従黒方なども閑院の大臣を古方とす【堤中納言物語】ひんがしのたいの紅梅のしたにうづませ給ひしたきものけふのつれづれに試みさせ給ふとて云々【花鳥余情】に薫物を埋む源を尋ぬれば梅花は梅花のもと菊花は菊のもとに埋むをさきとせり合香を土に埋むはもと漢の方なり【香乗】などにもあり又【香要抄】本末二卷あり古写本なり末卷に保元元年十月十七日申時許に書写了とあり是又合せ香に用ゐる香どもを集め記したり漢土の香方古く傳はりし事と見ゆ【宋書】范曄が傳曄性精微有思致云々撰【和香方】其序曰、麝本多忌、過分必害、沈實易和、盈斤無傷、零藿虚燥、詹唐粘濕、甘松蘇合安息鬱金捺多和羅之属、並被珍於外國、無取於中土、云々、此序所言、悉以比類朝士、麝本多忌比庾炳之、零藿虚燥比何尚之、詹唐粘濕比沈演之、云々、甘松蘇合比慧琳道人、沈實易和、以自比也、とありこれは唯序文にて其方にはあらざる事もあるべからず明の屠隆が【考槃餘事】に近世焚香者不博真味、徒事好名、兼以諸香、合成鬪奇爭功、不知沈香出於天然、其幽雅沖澹自有一種不可形容之、妙若修合之香、既出人為、就覺悪濁、即如通天擁冠隆蘭雲溪崔鵬嘴頭、雖製造極工、本價極貴、決不得與沈香較優劣、亦豈貞夫高士所宜耶、近世合香行はるゝといひてはされ近頃にて行しか然るにあるべからず嘉靖時のさまをいへるなるべしことゝに

相反き枕木は降し伽羅は升すといへり漢土にて沈香は嶺南の座と上品とし蠻國のを下品 す伽藍（キャラ）は嶺南を下とし蠻國を上とす本邦には嶺南の伽藍はわたらず交趾逛羅などより來るよしなり

奇南
蘭奢待

○奇南のこと若水が【本草別集】に廣く諸書を引たり【東大寺正藏院寳物圖】に蘭奢待三貫五百目紅沈香四貫七百五拾目とあり【大和本草】に奈良蘭奢待を黄熟香と云はいぶかし【本草】に水に沈むは沈香半沈は棧香不沈物は黄熟香なりと然らば黄熟香は今のヒヨンカツなり最下品なり棧香は沈香なるべし今はヒヨンカツを棧といへり或人云ヒヨンカツは薬名なるべし按するに【万寳全書】伽羅部瓢（ヒヨンカツ）伽羅の皮なり瓢勝（ヒヨンカツ）大木ありかざり物になるなりヒヨンよりよしとあり是香具屋の稱呼其木輕く浮の意にて瓢と云それより少し勝れるをヒンカツと云しなり【谷響集】に蘭奢待は是胡國褒稱云々【朱子語錄】曰王導嘗謂胡僧曰蘭奢胡語之褒擧也といへれごそれにては待の字ハ何とつゞけて心得べき憶ふに蘭奢待若は一音にて空靜にして諸の塵務を離れたる處にて寺を稱す待は迴なり俟なり閑靜の處にあひしらふべき心にて名けたるにや又普通にはその内に東大寺の文字を隱したりごいへるもいはれたる事なり但し東にはあらず柬（カン）の字なれど是は拆字などにはある事にて梅を木毋といふにひとし

たき物

○古は薫物とて合せ香なり其法種々あり【紫式部日記】に御たきものあわせはてゝ人々ふくばらせ玉ふまろかしゐたる人々つどひゐたり【榮花物語】はつはな此ごろたきものあわせ玉へる人々にくばらせ給ふ御まへにて御火とりとり出てさま〲のおこゝろみさせ給ふこれは只香をあはせて人々にくはる々なりたきものは香料を給ふて人々のおもひ〲にあはせさす薫物合のこと【源氏】梅がえの卷にかうともは昔今のとりならべさせ玉ひて御方々よくばり奉らせ給ふ々たくさつゝあはせさせ給へときこえさせ給へりとありさてその判者人々の合せたる香を焼て其深淺過不及を定むる處おなじほうこそ

松杉凡三十年程に罷成候ゟ立木ともに差上申候（元祿六酉年道奉行衆へ水道支配被仰付）元文四年巳未八月上水古來の如く町年寄三人に命せらる本多中務大輔殿被仰渡石河土佐守殿御達寛延二年八月出水のとき御褒美あり明和五子年九月上水の儀御普請奉行衆へ掛被仰付三人共掛之儀御免あり是迄の勤労を賞せられ賜り物共あり兩御組へも年寄同心家四人神田玉川へ二人宛三年の定役にて仰行儀被仰付候

芭蕉桃青水道之普請方にかゝりし事

○芭蕉桃青水道ノ普請方にかゝりし事あり延寶八年申の六月十一日町役十三日神田上水道水上惣拂行之候間致相對候町々は桃青方へ急度可申候相對無之町々の月行事同十二日早天に杭木かけや水上迄右持参丁場請取可申候云々若雨降候はゞ惣拂相延候間右樣相心得可申候また同廿三日神田上水道水上惣拂行之候間桃青方へ相對致候町々急度可申候相對無之町々は人足に道具を爲持明早天に上水へ罷出可申候勿論明日中水きれ可申候間町中不殘被相觸候六月廿三日とあり

香沈　奇南　蘭奢待　薫物　香式　十種香　香枕　香を聞　初音　柴舟　香ゟ多く用ひし事
銀葉　千鳥香爐　蛤貝　うぐひす

沈香

沈香のこゝにわたりたるはいつの頃にかあらむ【日本紀】推古天皇紀に三年夏四月、沈木漂着於淡路島、其大一圍、嶋人不知沈木、以交薪燒於竈、其烟氣遠薫、則異以獻之、と見えたりこれより前にわたりしことあらずは沈木とはいかでかしらむ沈とは水に沈むが故なりされどもきやらとは異なり【廣東新語】に香しくみゆ南方諸國に木ありて香木となるその内香となる處ありて其木みな香となるにはあらず木生ながら香となるを生結といひて是はいと稀なりまた木を截て置たるが數十年を經て香出來るを死結といふ伽羅は奇南香なり伽南とも奇藍ともいふ伽藍ともいふは一書の傳說なるべし伽羅は梵語也【翻

伽羅

譯名義集】云阿伽嚕【楞嚴經】云黒沈香[illegible]

○【寛永江戸圖】に溜池を江戸水道のみなかみとあり又昌平橋外御茶水の名あり其外連雀町龜井町堅大工町御水やしきの非など古跡【江戸砂子】に載たり玉川上水は古き日記に玉川清左衞門庄左衞門親代六十三年以前承應元辰年武州羽村と申所より玉川口を見立御當地迄道法十三里程の所仕御上水に可被成段御評定所へ御訴訟申上牧野織部殿八木勘十郎殿伊奈半左衞門殿右御三人場所御見分之上願之通被仰付御公儀より御金六千兩御渡被遊翌年四月より水道堀初め同年十一月四谷大木戸迄堀渡申候右入用金六千兩は高井戸邊迄に拂仕廻金子不足仕候段申上候處虎ノ御門迄手前入用にて堀候樣被仰付庄左衞門清左衞門自分金五千兩程出し虎御門迄堀渡申候上水見立之通無滯參候爲御褒美御切米二百石分金子にて被下置四ケ年頂戴仕候則町御奉行樣御支配にて兩御組より年寄同心衆壹人宛之定役にて水道奉行被仰付候右二百石にては役儀勤り不申候段御訴訟仕候に付玉川上水掛り候武家方町方共水上修覆料銀請取可申旨其節之町御奉行神尾備前守樣村越長門守樣被仰渡御割付被下候に付御切米貳百石分差上申候其以後渡部大隅守樣町御奉行之節右割付之修覆料半分を以相勤申度旨訴訟の者有之其者に可被仰付旨に付玉川上水堀立申候段申上候へば御上へ御伺の事に候故難被成候即最初御割付之高三分一減三分二にて相勤候樣にと被仰付候故御請仕三分二の割にて相勤候由申候○正德四年午八月神田上水之儀は御入國以來水上豬之頭之池水を御公儀御入用を以水道に被仰付町御奉行樣御支配にて右御用向拙者共へ被仰付其上關口小日向金杉右三ケ村拙者共三人の御代官所に被仰付御年貢取立御勘定仕上申候云々○玉川上水道は清左衞門庄左衞門門請負申候ニ付水道端之村々へ我儘不申掛候ため又村々水道へ不淨成儀不仕候ため寛文年中玉川水上羽村と申所より代々木千駄ケ谷各村迄拾三里程之間水道兩端三間通つゝ被召上水道南之方は喜多村彦兵衞北の方は奈良屋市右衞門拜領被仰付候に付其節自分入用を以松杉之苗木植直申候十年以前道奉行衆へ支配被仰付候ニ付右三間に十三里程の場所召上られ候尤植道候

煮茶
煮散方

に湯華のうすきを沫といひ厚きを餑といふ輕く細きを花とすと有り花は初めをいふことと其義似かよひたれは煮花といふ事かなへり

○【清風瑣言】に憶ふに唐の千金方に煮散方とて粗散の製藥を用み包み熱湯に漬して服用せし事みゆ茶も亦唐宋の始に粗散なるは此法に等しきものかとも思はると云へるはいとよしされとも疑ひたる迄なりとかく唐宋の始も點茶は今の法のごとしとおもへり故に烹點二製の分なく或は烹或は點じて翫びしものとこそ思ゆれといへりさまにはあらず前にも云へるがごとくし舂て團片となしたるを研て粗末にして煮て匙にて攪しものなり宋に至りて茶の製品精くなり今の點法の如くなりてもいまだ茶筅もなく元になりて全く今のやうになれり今の如き煎茶は明より始りて末茶は廢れしたなり

○袁宏道が【瓶史】に好事をいへらく嵆康之鍛也武子之馬也陸羽之茶也米顛之石也倪雲林之潔也皆以僻而寄其磊塊俊逸之氣也余觀世上語言無味面目可憎之人皆無僻之人耳

茶は宇治の本郷を最地とし
茶品

○茶は宇治の本郷を最地とし大鳳寺木幡是に次ぐ官園外園茶焙の製尤精妙也小倉寺内池尾川原郷の村里共に園數を開きて盛なり近江の信樂茶品殊に多し煎茶絶品此地天下第一たり(山吹一ツ森)山吹はもと宇治の品類なり(萬代高花嶋水花橘(政所といふ地より出信樂の山脈たり)其餘品多し洒落家の醇清を嗜翫して戸々に品類を稱ふる同じ又山城の手製も諸處にあり花園(洛北妙心寺)越溪(近江永源寺)昭(土山永雲寺)虎溪(美濃永保寺)仙霊(播磨牛達寺)是なり諸國名産には伊勢河(一伊賀服部大和の寶生紀の高野尾張の内津美濃養老駿河の足久保西國は肥前の嬉し野上首たるべし肥後の鹿子尾筑前の畚其餘肥州川棚楽寺園ゆ多は釜炒製にて味醇く清韻乏しく又唐茶といふ薩摩の將來れる物近年佳品なし武藏の狹山龍井園茶等の名あれど貢物にあらざるべし(丹波日向等の茶は常食の品にて文雅の友ならず)

しこれを宗匠と云ふ漢土の人は怪むべし又茶湯の字を用しも理りなり

茶店　鹽茶

○【江戸名物鑑】茶店、息やすむ人や松むし茶たて虫（他國は繁華の地にも水茶屋いと稀なり所々に軒を並べてあるは江戸に限れり【日覺草】に此頃は（寛永）都のふりかはりひなのせんじ茶をならひとし必鹽をくはゆるは茶とゝこほらずしてよしといひならはして鹽を入るこそ心得ね茶に鹽をいるゝは家に賊を引がごとしと或醫書に見えたりとあり唐人薛能が茶詩に鹽損添常戒薑宜煮更黄茶、を煮るに鹽また薑を加ふること【東坡志林】等諸書に見えたれ共茶の賞翫にはあらず昔は都鄙ともに晩茶の煮たるを茶筅にてたてゝ飲たり故にさゝらすり常に茶筅を賣ありけり【風俗文選】汶村が雲華園銘に檗

隱元茶

山禪師來朝して唐茶の鍋煎を製す世もつて隱元茶と號すこれは是出し茶なりそれより首の長き藥罐を作りて給仕の小坊主をたすくまた許六が雲茶店銘茶をめせ／＼雲茶散茶御川次第にめさるべし雲茶とは磨(ヒキ)茶をいひ散茶なりこゝに淹茶は隱元和尚より始れりとみゆ烹茶の法精くなりしはその時なるべし

淹茶　賣茶翁

近世賣茶僧遊外といふ者洛東に住し賣茶翁と號して茶を煮て賣たりそれが茶の具はみな蒹葭堂の藏となれり

茶煎

是より煎茶を玩ぶもの多く上田餘齋など殊に是を好で【淸風瑣語】（背振翁の傳一篇あり）を梓行す其内辨水のこと尤も精しむかし點茶家には住吉天下茶屋の水太閤賞翫ありし故是を名水といひ其他は京師に醒が井御の井宇治に三の間の水など聞えたり其後水をえらふ沙汰もなきは末茶は水の好悪も煎茶ほど明かに知れぬ故なりそれ故に湯の老嫩などには心もつかず唯熱くだにあればよしとして沸すのみなりかくては煎茶よりもいと易きものなり古人候湯を難ごするも茶を煮る故なり蟹眼魚目散布などいひていとむづかし瓶中にて見えざればなるべしこれを委しくみんと思はゞ今玻璃の瓶あり湯の沸やう又茗葉の色の出るやう細かに見ゆ勞するに及ばずして其中を得べしされ共唯雅趣なきのみならずもてあつかふに損じやすく瓶の暖なる内に水を添れば破るゝなりとかく瓷器に勝るはなし【茶經】

味よき藥を合せ用ゆ其方さま〴〵あり今にていはゞ枇杷葉湯賣のことし天明の頃より賣るありくとなり茶湯と云より佛事をいへり【貞德獨吟】自注に世俗佛事をなすを茶を立ると云ふ【色音論册子】に新橋通りの大路をいふ處）辻の茶賣下りさるやとしるしたる幟をはり地上に筵を敷き風呂をすゑ茶をたてゝ賣さまあり是寛永中水茶屋の躰なり今の上野山の香煎賣に似てたゞ鄙びたり是も一服一錢なるへけれど前に引るとは殊にてこれは晚茶を煮て茶瓮にたつるなり寛文二年壬寅正月十九日申渡貸座敷町川岸端に罷在候壹錢茶や向後道中間敷事これ一服一錢なり英一蝶か伊勢の明星の茶屋を畫けるに長き柄のひさくの先に茶碗をのせて客に出す圖あり【前句付】廣原海一倍になる〳〵茶碗出す柄杓は茶屋が腕の綱今も播州一の谷の海邊に蕎麦きり賣處あり竿にて長ひさくに茶碗を載し出す事有ることし古時野質の風なり【衣食住の記】にせむ茶も宇治信樂の名茶は下さまの飮ことたらざりしに小盗の安賣出

辻賣煎茶

一服一錢といふ茶店出しよう辻賣の名茶明和のころより通り町を始め所々に腰かけ茶屋多くなれり（一服一錢もとより有しことを知らざるなり）

煎じ物

○漢土に賣湯舖これ煎じ物なり種々の煎じ物を賣る【水滸傳】に王婆がこれを賣ることあり梅湯橘皮湯等種々あり【本草】甘草の集解に貨湯家に是を用こいふ語あり貨湯家とは湯を賣る店なり近ごろ櫻

櫻湯

花を鹽づけにして湯に入れて飲む【五雜俎】に閩建陽人多取閩花以少鹽水漬三四宿取出洗之以點湯絶不俗といへり宋人の【南窗紀談】に客至、則設茶、欲去則設湯、不知起於何時、然上自官府下至閭里、莫之或廢、有武臣楊應誠、獨曰客至設湯、是飮人以藥也、非是、故其家毎客至、多以蜜漬橙木瓜之類爲湯、飮客或者效之、予謂不然、蓋客坐既久、恐其語多傷氣、故其欲去、則飮之以湯、前人之意、必出於此、といへり今世人佛に供するに茶を茶湯と云は非なり茶と湯とは【中山傳信錄】に國中惟三種人、皆剃髮稱僧、云々爲王宮執茶役者、名曰宗叟、又名御茶湯、六人、云々これ宗匠といふ類御茶道と云へるを誤り書たなるべ

五徳

五徳は【庭訓】などに鉄輪とあり古へ此を用ひしに輪を上にしたるものなり今の如く倒にして用ゐは茶湯より始れりとみゆさて五徳とは呼たるなり

白炭

○白炭は【本草】にも出むかしよりこゝにも用ひし物と見えて【新撰六帖】に源光俊何としていかにやけばかいづみなる横山ずみの白くなるらん今は此處河內なるにや光ノ瀧より出づ【本朝食鑑】に白炭は躑躅の木を炭となし再び火におこし灰に埋めて白霜を生ずといへり【寛永發句帳】おく炭のながれも白し光の瀧（親重）【滑稽太平記】白炭やゝかぬ昔の雪の枝（忠知）此句によりて白炭の忠知といはれたり按するに【淸少納言双紙】名おそろしき物いりすみ又心もとなき物とみにいりすみおこすいこひさし【抄】云煎炭しめりを煎取し物にやこいへりおもふにこれ浮炭（ケシズミ）なるべし白炭なども同じく煎炭こいふべし

遊女が茶湯

○遊女が茶湯【東海道名所記】花わちがへに桐の紋は八千代とかや桔梗の紋は藤江なり揚屋の內に部屋をかまへその紋付たる暖簾をかけ其內に圍ひをしつらひ押入水屋くさりの間勝手よく拵へ知音がたに茶湯を出す庄屋殿の二ばん子など爰を晴と出たつ其太夫の紋を付て【芥子鹿子】揩箔の手を盡し引ちがへて是をきる會席すぎて茶湯になれば又それを着かへて染いれしめだし唐縫いろ／＼を盡して茶湯すぎぬればみな大夫さまに奉り白小袖唯一ッに替てきるとあり吉野廣東などいへる掛ものなども此類なるべし

一服一錢

○一服一錢は【職人盡歌合】に煎物賣も番ひて出たり其繪法師の托子に茶盞をすゑて茶筅にて茶をたつる處々なり詞其にこ葉の御茶をめし候へと有こはは小葉にて小芽の茶といふ思ふに宇治の通圓などかゝる者にて有しなるべし是今の水茶屋といふものゝ始なるべし煎物賣は擔ひありきて賣る【桂川地藏記】以柿團扇壓煎物賣高聲喚寄、此下【本草】藥種のことを載たり俗に茶湯といへど二物なり湯は香

水茶屋

敷居へおし付て切との一ツなり然るに武藏紹鷗か四疊半の座しきを作りはじめ爐を下中に切しより以來四疊半構といふ事ありて其後利休三疊大目構の座しき造り始て爐を中に上て切しより大目構の爐といひならはし其頃より昔からいひ傳へしあけて切さげて切といふ詞は捨り果て今の世なとは昔かゝる事ありしといふ事もしらぬ茶人多しといへり四疊半舖は紹鷗に始るにあらず東山殿の同仁齋是なり今に慈照寺にありこれ始といへり小座敷はもと簀居といふ今いふ部屋などのことし即居間なり【古事談】敦光朝臣愛酒して不斷簀居の棚に置また作別當人を相する條などにもみゆ源仲正が【家集】に北東風

ひたひつき

にけるの床までこほりつる小雪はみすのふるふなりけり是をひたつきとも云り狹き故なり【砂石集】ひたひつきしたるけると有り又身はひたつきの内に居て前の爐にて火を焚といふことみえたりこは附家のけるなり（居所の條に引り）按るに茶室は是を用たるものなり但し圍ひは利休か泉州堺淨土寺の

圍ひ

緣側を三帖しき屏風にて圍ひ茶湯せしより始るごなむそれ故に圍は新たに造るも片庇なり數奇屋は棟を別に立るといへり中くゝりはもとはなくて猿戸なりしを古田織部正中くゝりと云ことを始む圍ひ作事に種々織部の仕出したること多しとぞ【宗旦物語】にそむかはしは長押に張付したる四疊半に障子備り茶湯をしたり宗易覺悟して竹椽さひ壁など樣の栖居にしつらふ小座敷には障子取合ず或はいふ昔は障子にて爐はなし但し丸き鐵のだうこを板にきり入しは珠光紹鷗時代より有り今爐の灰を隅をあけて丸き形にするは其故なりといへるは非なり地火爐は古へよりあり四隅より灰よりあくるは唯火をも

地火爐

たする爲なり又だうこは丸きものをいふべからず

灰匙

○灰匙【指月集】に灰さじ昔は竹に土器など挿めるを道安銅にして付たり利休はじめは道安が灰すくひは飯杓子のやうなとて笑ひけるが後はそれを用といへり然らば底とりなどは又其後の製なるへし【懷子集】（十爪ときまでもおちふ足もと（春可）灰の底こらむ五德のわかこゝろ

も大小にはよらねども細きは多くしれ難きものをや

茶托

○茶托【演繁露】に唐の建中の頃蜀相崔寧が女茶盃に襯なく手の熨きを厭ひて楪子をとりてこれを承啜るに盃傾く故蠟にて楪子の中央に環を作りてより世に廣まり其底にも環を作りなどさまぐ\物ずき出來ぬよしいへれ共【周禮】彝下有舟、鄭子農曰、舟乃尊下臺若今之承盤これその象既に漢に具れりといへり光廣卿【和歌抄】に諸のしき物は何にてもかしはの名あり然れどもうれへかなしきことにはつかはぬ詞にて茶臺などを幽齋のすゝめがしはと常に申されしも雀舌どいふ良品の茶の名ゆゑにやそれさへめでたき時のことばに申されし

茶湯ふくさ
だうこ

○茶湯ふくさ【資暇錄】に貞元初靑鄆油繒爲荷葉形以襯茶椀別爲一家之楪今人多云托子始此非也

○だうこは道公と書べし千家だうこう棚に道幸とかくは誤りなりそは別に說あり事長ければ此にしるしがたし

茶桶

○棗といふ器は其形棗の實に似たればやがてかくよべるにてもと是も茶桶なるべし（棗も中欠て皆然り）【庭訓】に茶簍茶桶茶巾と出たり元來は桶といひしは曲ものなり後には曲物ならぬをも桶といへり

茶杓けつり

○茶杓など誰が作といふも多くは自作にあらずことに高貴の人はよき職人を召仕ひて自らは銘などしるすまでなり【卜養狂歌集】いつさいといふ人は小堀殿の茶杓削りなり年もより侍りければもはや細工もなりがたしかたみとて茶杓を削りてくれ竹の殊更見ことに侍りければ末の代にも又其實ならむと思ひ我もかたみに一首書つけて筒の上にかくなむ、くれ竹の末のよまでも殘しおく一さいしゆしやうのため茶杓哉

小座敷

○座敷【茶窓間話】に昔は茶會の席とて別に定めてはなく其席々に見合せて爐を切て點じ珠光の座敷などは六疊舖なりしとぞ但し爐の切處は幾疊しきても三所あり其傳にあげて切と道具飾のむかふの地

【禪宮集】佛印與東坡詩曰穿雲摘盡社前春一兩平分半與君遇客不須容易點々茶須是吃茶人よく茶を吃する人も稀なるへし

茶を挽事

○茶を磨ことむかしよりおろそかなり多くはあるじの留主に挽するならひなれば手つから磨ことはいと稀なり【俳諧埋木】また留守をして茶臼ひけとや【絵山井】松風の音や茶をひく神の留主【後撰夷曲集】日切の會を催す十月は神の留主しつ茶をひいつたり【俳諧染糸】殊の外ねこきは留主もたのみがた茶はとにかくに自身ひくべし古き【前句付】に春に成けり／＼唯ろてもねふりきようの茶ひき坊多くは茶ひき坊は盲人なり茶は手つから點るにあらずや然らば磨も手つからすべき事なるへし

茶具

○茶具【曲洧舊聞】に蜀公與溫公同遊嵩山、各攜茶以行、溫公以紙爲貼、蜀公用小木合子盛之、溫公見之驚曰景仁乃有茶器也、蜀公聞其言、留合與寺僧而去、後來士大夫茶器、精麗極世間之工巧、而心猶未厭、晁以道、嘗以此語客、々曰使溫公見今日茶器、不知云如何也、といへりし人にこゝの茶事を聞せてしかなた

茶筅
茶匙

○茶茶と云もの漢土にはむかし唐宋まではなき物なり【白集】湯添勺水煎魚眼末下刀圭攪麴塵か【遵茶錄】に茶器を論ずる處一切茶器を擧たれど茶筅なく茶匙要用擊拂有力、黄金爲上、人間以銀鐵爲之、竹者輕、建茶不取といへり是にて茶しやくを用ひて攪たる事知べし【家禮儀節】に古人飲茶用末、所謂點茶者、先置末茶于器中、然後投以湯沃、點以冷水、而用茶筅調之、茶筅之制不見於書傳、惟元謝宗可、詠茶筅詩、此君一節瑩無瑕、夜聽松風漱玉華、万縷引風歸蟹眼、半瓶飛雪起龍牙、【名物六帖】に元氏以後專用葉茶而末茶廢、故丘文莊【家禮儀節】因元人詩據彷彿其形狀、此一小器耳、世代遷、事由失其制、況大於此、宜乎古之多失也、と有ることの先生は末茶すたれて茶筅を用ざる故其製しれがたく丘文莊か元詩を引たると思はれたるない家禮儀節にいへる意はさにはあらず茶筅は現にあれども物にしるしたる事なき故に謝か詩を引たるなり宋の末元の初などに出來し器歟凡古ふるき事は傳ひよくしるゝもしれざる

茶をもみぢにたてよ

主の役しやによつて某がたつるであらふ湯七分に沫八分むく〳〵やは〳〵ほう〳〵昔やうになかだかに云々古法是を大事としたる事知べし【醒睡笑】お茶をもみぢにたてよとはこうようの謎なり【尤の册子】長井の青茶むく〳〵とたてゝ出す云々むく〳〵はふく〳〵と同じ沫たつをいふなり

先輩の論

○先輩茶人を誘る大かた同趣なりその内【春台獨語】に今の茶人是は利休が法是は石州是は遠州の法とて禮法を守ること一向にかたく守りて少もたがはじとすかた腹いたき事なり今にてもあれ世にいきほひある人茶をもて遊び先輩にかはりて新しきわざを仕出さんにくみする人あまたありてこゝかしこにて其しわざを學びてせばやがて一流となるべしといへる理りなり漢土にさる事なきをみよ陸羽が如き博士ありても人其法を貴むものなし却て季卿に鄙まれたるによりて【毀茶論】を著しゝとなむさすがに鴻漸恥を知といふべしされども後世茶を鬻ぐもの其像を瓷にて造り是を茶神と稱し茶の售(うれ)ざる時は釜湯を沃かくるよしその傳に見えたり

茶神

漢土の茶人

○もろこしにて茶人といふは茶を採て製する者なりこゝにいふとは異なり陸龜蒙茶人詩天賦識靈草自然鍾野姿閑來北山下似與東風期雨後採芳去雲間幽路危唯應報春鳥得共斯人知【唐詩品彙】にみゆ又【閩小紀】には延邵呼製茶人爲碧竪といへり（延邵は地名にて延平邵武を云こゝの茶人は或人云富るもの多く何を知らずさすがにはづかしく思へど俄にもの學ぶことかたくもとよりその才なければ茶事をならひて拙きをかくさんとす黄白を惜まず器物をもとめて互に相誇り品水棟芽はさたもなしひたすら名利の具となり侍るはすきやのせはき處に入刀劍手もとをはなれて捨をき油斷これにすぐべからずかりにも此道に入ぬればけいあんを云ならひとり賣がたきになるかし（とり賣は道具やなり【洛陽集】果報者やとり賣よんで年の暮（元好）【類柑子】に爐開や汝をよぶは金の事【六玉川】どろぼうめ茶に行良の唐物や鄙俗こゝに究れり

のむ人をためすに今時大かた茶碗にのこれるあとの香を意氣といひぬればわれひとり此事しりがほに蘭香とほめんより人なみにして居て心にあやまり　わすれずして古人に問はるゝ時は答へたき事なり土佐節の茶湯といふ浄るりにいのしろおほたか勝つが年はふれ共わかもりの姿は猶あさゝりの實はかは別ぎもあらし山もみぢのにしき色々にゑんがすくるゝ柳むじやう云々今江戸にては煎茶に蘭香といへど飲まぬさきの香をいふ件の説によればこれも誤なりされど蘭香とはその出所の香氣にてしかくきなれば唯香ぐはしき事にはあらず又飲ときの前後には意氣といひ蘭香といふべきよふしなきに似たれ共これは匂ひのみにあらず跡にのこりたる處の茶の吞定はあることゝなるべしよりて意氣とはたゞ香の事にて蘭香は茶の出處を聞定むるなりいきとはあと氣をいふのみ意氣の義にはあらず（野州にては魚うり杯魚の臭氣を意氣がよいわろいといへり同義なり）

雲脚

○雲脚【實町殿日記】に北野大茶湯の條に別寛雲脚をたてゝ差らす殿下きこしめしてさても茶は心の付たる者かな百座の茶にあひぬれば腹中に所なしおゝ〳〵と香煎をいたし事言語道斷にふはれのこし云々陸羽【茶經】に茶少湯多則雲脚散湯少茶多則乳面聚とありて水のおりをも脚といふごとく湯多くて茶うすければおりの如くちら〳〵となるをいふなり【下學集】に雲脚悪茶名也言茶泡早滅而浮雲脚早過去也また【甲陽軍鑑】は茶は雲脚にても（悪茶をいへり）【茶話問語】平常通用歌出（重點あり）一服一味一期中最後一念雲脚淡これらみな【下學集】の説にひとしされば香煎をいひたるも義はかなへり茶は飲ものなれば他事は大にして深くよき加減に照るを事とすべし夢庵が歌沸ばうめぬるくば浸をおきかへよ没たらむほどに水をさすべしいはでもしれたることをたがら程よきをいふなるべし【雜人首書】に人前にて茶持あつかひ不知は無下也大方可習知事なり祥盛に茶一服入て湯を半計入て茶筅にてたつる時タゝマサタと湯の音の聞ゆるやうにたつるなり三河伽井諸録一人被申き【狂言鑑綱】一茶は寒

青茶

一宿して蒸あげたるを青茶といふ上揃ともいふ下品なり下品は茶筅にて点じて茶味底に堅まる白茶は混じて堅まらず云々あり白茶の名は宣和【北苑貢茶錄】（白茶は政和二年ニ造リ龍團勝雪は宣和二年ニ造初、貢茶、皆入龍腦、至是慮奪眞味、始不用焉、蓋茶之妙、至勝雪極矣、故合爲首冠、然猶在白之次者、以白茶上之所好也）銀線水芽は古より未聞ざるの品熟芽を棟再び剔去りて其心一縷を取り清泉に漬せば光明瑩潔銀線の如し方寸龍團勝雪と號す新鎊を製す有小龍）然ればこゝにいふ白茶とは殊なる事知べしかき茶は【犬子集】はながあれば名もおのづからかき茶かな（文甫）【續山井】枝ながらかき茶といはん花香かな（滿長）【洛陽集】に御嗅茶いはど其銘たしかならず（可久）おもふにその年の新茶をあれこれ少許ヅヽ試の爲に配るなるべし公通卿の【雅莚醉狂集】（夏部）漫興嗅茶是鼻苑採瓜彼鬚田といふ狂句あり嗅茶とて鼻にかぐのみにはあらじ茶は芳馨を賞すればかく名付れども云々【ち樂叢事】天

はな香

池の茶を云に青翠芳馨瞰之賞心嗅亦消渴誠可稱仙品茶の香をばはな香といへり【新撰狂歌集】立春の心を宇治茶大臣母春くれば色もはなかもへちぎにてやどの大ふくたつかすみかな【同集】ある時紹巴すきに行けるを幽齋、はなかある人をばお茶によはるれとこちや又あとにのこるつぼこそ返し、のこるこそ猶もべちきにはなかあれうちある人はちや／＼とよばれず昔は人の一身に就て聞といふことは多きを唯茶には聞といふことをいはず香氣第一の物なれば十服茶など其外もすべて試るは聞といふべし酒醬油などには聞てみるといふをや

極揃 別儀揃

○茶に極揃別儀揃と云あり別儀は珠光松葉の眞壺に茶をつめしに眞壺あまり持すぎて茶焦る故に宇治へいひ遣し蒸を少しくさせしなり薄葉の上をば別儀と云ふとなり喜雲が【京童】に茶をのみしまひて

意氣

のあとに茶碗を鼻によせて意氣がよしとほむるは謬なり意氣といふはのまぬさきの香なり飲しまひて

苑香

あとの茶碗にのこりたるは薗香といふなりと世に名高き此道の者のがたり聞うけ侍るされども茶

しが下與四郎入道此御石塔の九輪を取おのれが塔とし及手水鉢にせしとかやかゝる大悪のつのりて次第に奢り後には私曲をせしを豊臣太閤大に怒り給ひ一條もどり橋に磔にかけられたり大罰なるべし加藤肥後守卿も花山衛正の石塔を取て中を穿らて石灯籠にし茶亭の庭に置れしゝたり此灯籠今に本國寺にありかゝる事は慎べき事なり

○鳩巣が手簡木村彌十郎方に利休亂世の歌自筆有之利休めが果報のはこそ嬉しけれ管丞相にならんと思へばおかしく候夫より前に最後いとま乞ふとて手前にて茶を立ふる御其茶入を直に形見にとて贈申候茶入の蓋に此世と書付申候内にあらざらん此世の外の思ひ出にと申歌を細書にいたし候由物語に候其時分隣々の大名初め一同に尊敬いかゞの義と存ては存候處かやうの唱承り候へばにくからぬことゝ存候花もみぢより見ことなるは人の死に臨み従容として潔きはござわすれがたきものなはし宗易一代のものずき此最後の見事に候といへり利休が辭世歌てには違ひはもとより一首の意も心得がたし無道の罪とのことにや菅神に比せんとするか笑ふべし是をおかしと思へる鳩巣が心いぶかし其茶入の銘聞て最後のことをほめたるもあやし草賊にも潔く死する者多し誰にひかれものゝ小歌といへる是なり

里見家ノ茶禮

○里見家禁へしころ茶の禮儀に格式あり【北條五代記】里見家元正の曉より義高の御前へ諸侍出仕の時其人の位によつて禮の次第色々かはる云々其上片茶の禮雨茶の禮と云ことあり其時は一人のまず両方を見合同時に茶をのむ是定れる禮儀なり云々かの昔ありしたぐひこの禮式と同日の談なるべし

白茶
喫茶

○【犬草子】大切なる物人々白茶また用ゐるゝ物奈良諸白に宇治の白茶まためづらしき宇治よりくばるかき茶とみゆ白茶は【風俗加波】に白茶ばかりを好む當ては【望一千句】國分たる國の目おもしにあひ露のしろ茶をたまはりにけり【雍州府志】一京師人物俗一慶長の末のにゆりの物俗に唱ていふ白茶面右榴に歌連歌と此四品をそへ頃貴賤翫びけり白茶とは灰汁に不浸して茶を製し始りたる極品なり灰汁に

九輪釜
人眞似

に鑄させけるに上に似る下の者迄我も／＼と九輪をとりければ和泉河内に有し塔はみな取盡しける趣後守悪行の報ひにや幾程なき内に上杉畠山の人々にうたれけり是を聞傳へし後の人もうしとは思はずして又ふるき塔の九輪をこり九輪釜とてもてあつかひけるこそはかなけれ爰に近來數奇の師ありいにしへの茶湯の樣をもときて新らしき茶の具を用今燒の茶碗茶入にあら釜をすゑ青竹をきりて花筒ふた置こし唐物よりも價たかしかくては古の數奇道具の寶物はみなすたりはてなんとておほやけより終に彼數奇の師をほろぼし給ひけりされども數奇の道なほたえずして茶好の男再び此道を起し當流とぞいひける皆人この男のまねをする事になりぬ或時かのすき男色好みなればひそかに遊女を數奇屋の内によび入けるにあるじの女聞つけきさうなきねたましき者なれば長太刀を振まはし茶壺を蹴わり走り出る遊女たまりあらずしていにけり彼女やすからず思ひけん長太刀にあたる儘に路次の木の枝はら／＼と切おこして入にけり其後二三日ほど經て茶會有しに客共をみて木のやうかはり珍らしとてすき好の人々聞傳へ／＼木の枝をもきあげたりかの蹴わりたる茶壺をつぎおけるを見る人は無病なるより壺はつぎめの有こそ見所も多けれとてわれぬ壺を漆にて繕ひけり或は土壇を高く築あげて數奇屋を造り遠山をながめんとて窓をあけたり是よりみな人地を高く築き數奇屋を作り改め窓を明たり或はうなひこのもて遊びに鳩梟を飼置しが會席の靜なる折ふし木繁きおくの方より鳴聲聞えしかばさながら山里のやうに覺えたりといふ程こそあれ我も／＼と鳩梟かひもとめしに其價鷹よりも高し當流の數奇をこのめる人は虎を畫くとおもひ頬狗に似たりと有り今これをみればたはけたるやうなれど凡物ごとはやりを好むもの古今かはる事なしこのすき人を世には利休が事にして語るは非なり爰に記されたる如く利休身まかりて後の事なり（【可笑記】は正保元年の册子なり一とせ豐臣太閤の御時利休といへる數奇者ごう欲邪惡に奢り傑にかけらる【夏山雜談】（五）二條院の御墓舟岡の麓にあり御墓に九重の石塔あり

茶式傳來

多く集め貯へ眞能眞藝眞相等をして茶を獻ずる儀則を議せらる此時南都稱名寺の僧珠光は此道のすきものにて將軍家愛し給ひ頓て還俗させ常にそれが家へ成らせ給ひし（六條堀川佐目牛通りの內に住せり）これより此風を學ぶ人世に少からずといへども此後は和泉國堺の浦の住人武野紹鷗といふ者其道の宗匠なりそれが弟子千利休先祖は足利殿の童坊千阿彌が後田中氏なり泉州堺の住人にて織田右府豐臣太閤兩代の御師範なり古田織部正重能利休上手の弟子にして政一また古田が第一の門人なり其道の事はいふに及ばす手よく書歌よみ眼高く書畫の珍器悉く其鑒定を待て世の價を高下すれば水より出し氷藍より出し青色世々の先達を超過して上中下のもてなしたこへをとるにことばなしといへり茶事を好むを數奇者こいふ今も茶室を數奇屋と云り【甲陽軍鑑】（十六）四國浪人村上源之丞堺の紹鷗が雜談を聞て語る數奇者と茶湯者は別なり茶湯者は手前よく茶たて料理よくしていかにも鹽梅よくする人を申數奇者は振舞に一汁一菜茶は雲脚にても心の奇麗なるを名付て呼候元來數奇は禪僧より出たり意地を肝要にして誠多き心ざしを執行の人のたつる茶を數奇者の振舞といふといへり【歌林雜話】にむかしはすきといへば歌のことに心え侍りたゞもりもすいたりければ彼女房もすいたりけりと平家にもうたへり好士といふも奇人の事なり然るを今茶の湯をおし出して數奇といふは歌道の世にすたれたる故なりこいへり伊勢源氏等の物語に見えたるは好事の意なりすきは字音にあらねばひとつにまがへて心得べからず數奇の字は（【史記】李廣傳に數奇不得封侯その注に奇斷也隻不偶也と有り）奇耦の奇にて命數の耦せざるなり時に逢はぬよしをいへり文人數奇詩人薄命と【白氏文集】などにもみゆされば字義はいたく異なり茶人はわびと云ことをいへば是も字義をこれるなるべし）次でに云すきこそ物の上手なりけりといふ歌の上句は人多く是をしらず何に出たるとはなけれど紀逸が【雜話抄】に器用を地盤として數奇を第一とすべし器用さと藝古こすきと三ツの內すきこそ物の上手なりけれと有り）宗

利久

わび

焙の茶は烹るに宜しく九州唐茶の炒製は淹煎によし其内點茶は宇治にかぎり煎茶信樂を勝れたりとす【翁草】に宇治に茶を作るは森祝、井氏にてありし上林は丹波の上林より來り茶を製するは近世のことなりとぞ【雍州府志】に近世上林峯順并竹菴等茶人自丹波上林遷居於斯所【大和本草】に唐茶の製は黄す炒てもみ陰乾にす故に性つよし上氣損傷沸湯に少入て其まゝ服す炒るべからず久しく煎すれは味よからず日本の製法は煮て焙爐にあぶりて日にほす故に性柔なり(【風俗文選】汶村が雲華園銘に檗山禪師來朝して唐茶の鍋煎を製す世もつて隱元茶と号す是はこれ出し茶なりそれより首の長き藥鑵を作て給仕の小坊主をたすく)

唐茶の製法

日本の製法

○茶式の起りは僧家より傳れば其式も宋の德煇が【百文淸規】などに本づく【鹽尻】に妙心寺再住開衣の會を見しに祝詞畢て饌を設け後餅果をすゝめこれを徹して濃茶を出す數十輩の僧なれば一椀にて茶を点し五六人して次第に喫しぬしかして立亭主賓揖し堂を下りかへる今濃茶といへば必一椀を數人して喫ることゝ思ふは拙し云々といへり【俗說贅辨】に筑前國崇福寺の開山南浦紹明正元のころ入宋し徑山寺虛堂に嗣法し文永四年に歸朝す其頃臺子一かざり徑山寺より將來し崇福寺の什物とす是茶式の始なるにや後臺子を紫野大德寺へ送り又天龍寺の開山夢窓へ渡り夢窓この臺子にて茶の湯を始め茶式を定むといへり又そのかみ十種香に倣ひたる茶式あり其甚しきは【太平記】に佐々木道譽が七夕の會に七所をよそほひて七番菜を調へ七百種の課物をつゝみ七十服の本非の茶を飲べきよしを申て宰相中將殿を招請しける【春湊浪話】に茶禮は慈照院の頃よりぞ專らになりける今の樣とかはりて本の茶非の茶といふを分ち品々の茶を點じ出す事十服より百服に至る是を飲もの褒貶をなして勝負を爭ふ相阿彌が書たる【君臺觀】に茶器を多く長盆にならべ居たる事のみゆるは茶數品なればなり其後すべて十種香のごとく試なきを畧攻茶ともいふ記錄に回茶と書は一を聞て十を知といふに取試あるをは貢茶と

茶式

一椀にて數人喫す

本の茶非の茶

回茶貢茶

也故各院外別造庫倉是稱壷倉初夏良賤遣茶壷於宇治納茶了而藏於壷此倉盛夏土用過秋名取之とあるか如く栂尾朝日の茶を好へたる趣か又は其種を植し處にてもあるへし傳說は誤たらむ深瀬に高山寺橋より東北の地明惠上人始て茶種を植る園地といふ今に深瀬三本木等の園名を稱す【新撰遊學往來】に茶深瀬小島大狗谷一ノ瀬外畑岩傳門不見橋返鏡樓花閑河陀とみゆこれみな栂尾の名所なり宇治の茶つみ

宇治の茶摘

は【狂歌咄】に宇治の里にそこら小屋多く造りて芦簾を入置たるは八月十六夜の初霜より茶園に霜覆ひする爲なり土をそゝりやしなひを入草を引虫を拂ひ云々頭生の頂木の芽はつかに出れば茶つみの女共手ごとに籠をもちて摘たるをとり集め幽に入焙爐をかけ茶師の家々數十人の女鍋數無く薄けさし赤まへだれしてひとやうに出たち打ならび鳥の羽もちて野おかしく曲おもしろく歌うたふて上中下の茶の葉を撰わくれは茶きゝの人は色と形と氣味とを心みすくり究めてうへつかた御物の壷につめて登る袋には何かしの茶と銘と名とを書つけてそれ〳〵積み來れる御方のあまたの壷にはと〳〵にまかせてつめ納る其程是にこみ入こむ誰にさま〳〵のもてなし會席茶菓子奇麗にものして濃茶うす茶とり〳〵にうからぬさま云々

龜色茶　初昔　後昔

○【事林廣記】に龜色茶即雨前者といへり穀雨已前に採るもはや晩茶なり時珍云清明前者上穀雨前者次之此後皆老茗といへり各其土地によるへし本邦には三月節に入て廿一日めに摘を初昔といひ一の後につむを後昔といふ昔は廿一日の字謎なり【好古日錄】に古茶書にはつむかしといふ茶名あり余按ずるに散芽は茶の名品なれば昔字を分て支昔と謂て上品の茶の名とせし歟今初昔といふは若支昔の誤りか廿一日より前をはつといふことも其意通せずといへとも此外祖母昔しろ昔いのむかしなどの名も有りしろ昔をはゝ昔とするにや

茶製造

○製造に茶焙炒鍋日曝等の製あり茶焙は上品なり九州四國の製は云は明の代の法なり宇治信樂等の茶

り榮西茶を鎌倉右府に奉り茶德を譽たる【東鑑】（廿二）に見えたり（茶德をほめたるは【喫茶養生記】なり）今の如き茶挽はこの時より行はれたり（それより先にも抹とよる事なきにはあらず【和名抄】木器類茶研章孝標集有黄楊木茶碾子詩碾音與展同訓岐之流茶碾子俗謂之茶研とあり今本に茶研の旁にキシルと点あそわろし茶研は音にてよむなるべし磑にて磨と碾にて輾るとは殊ながら抹となるは似たり古法は是を煮たるなり磨をも今は挽とのみいひてするといはず昔はすり茶といへり【犬筑波集】（活字本）すきの衆あつまの旅におもむきて　たづぬやすり茶つぼのいしぶみ　稲のものをば今もするといへり

宇治の茶園

〇宇治の茶園は【鳥鼠同穴集】に明惠上人茶の實を宇治と栂尾に植とはいへり又一説に將軍義滿公大内氏に命して宇治に栽しむとも云傳ふ【山城名勝志】（十八）報恩院（号森坊）土人云今纔に觀音堂一宇殘れり俗にほほん堂といふ是報恩堂なり又境内に求聞持堂の地名あり今茶園となる芳茗の名に宇文字といふは此名園の産なるを云謬れるなり森は今此地茶園となる森屋敷と稱する七所の名園あり云々【京童】にこの七所の名園の頌歌あり森岩井宇文字川下奥の山ふもとの朝日琵琶を引なり【尺素往來】（永享年中撰）に宇治を當代近來之御賞翫栂尾者此間雖衰微之躰候名下不虚之謗不可被思食忘者乎云々先被遣撿使於二方暫就早晚之左右可被定御出之前後歟隨而眞壺二箇進之候朝日并深瀬之走摘不散一葉可被納之候又淸香西江底入等都合五箇候閼伽井逆淵外畑小畠藤淵等之名苑木前茶摘弛摘合以下至一番茶可被收之候とあり走摘は名にもあらずはやく摘をいふなり（【春湊浪話】に地名のうちに擧たり）朝日は同名の處多し愛宕山五岳の第一朝日岳は今祉頭地といへり其外宇治また近江にあり【雍州府志】葛野郡聚樂城の處に朝日園古此地有茶園稱朝日園傳言此茗園先栂尾也今無茗然原上存數株松といへるは大内裏の時主殿寮の東に茶苑ありしと【拾芥抄】に見えしはこれ歟【同書】愛宕山條に此山淸凉地

宇文字　**走摘**　**朝日園**

飲矣適知古今之法亦自不同也これ古へも煎茶をも鍋炒とおもへる歟

○周亮工【閩小紀】に北苑亦在郡城東、先是建州貢茶、首稱北苑龍團、而武夷石乳之名、未著至元設場于武夷、遂與北苑並稱、今則但知有武夷、不知有北苑矣、吳越間人、頗不足閩茶、而甚豔、北苑之名、不知北苑實在閩也、

本邦茶の始

○本邦に茶のこと古く見えたるは【日本後紀】弘仁六年夏四月癸亥、幸近江國滋賀韓崎、便過崇福寺大僧都永忠護命法師等、率衆僧奉迎於門外、云々大僧都永忠、手自煎茶奉御、云々、六月壬寅、令畿内並近江丹波播磨等國殖、茶每年獻之、と見えたり是よりさきに傳敎大師入唐の時茶子を將來すといへるさたしかならず村上の御時【和名抄】に茶を載たり又【西宮記】三月朔日、差遣茶使事永祠例云々（三月朔日、差遣茶使頭並事物行ㇾ可被率者、使一人、侍臣校書殿執事一人、其□之、校書殿使摘茶、遍取藥殿生、以下韓摘進、法見例文）とまた後朱雀の御時【續本朝文粹】に惟宗孝言が茶讃あり東西隣僧來【唐人送

挽茶南台

茶】に茶者自上古我朝にあり挽茶南台とて於内裏行公事儀式然り葉上僧正入唐の時重て茶の種を被設栂尾明惠上人賦之されば本の茶と云は栂尾なり非といふは宇治等の事也と有り此僧正當時行はるゝ法をもて古へも挽茶にて今の如しと思はれし歟橘嘉樹云【公事根源】御讀經の度ごとに第二日には行茶とて僧に茶を給ふ事あり【藏人式】云天喜四年三箇日毎夕座侍臣施煎茶衆僧用加甘葛煎又厚朴生薑等隨要施之云々是は全く煎茶なり然るを行茶と引茶と誤り引を挽に作り【海人藻芥】には書たるやうなり【東鑑】葉上僧正の實朝へ上りし茶は煎茶やら挽茶やらわかりがたしといへり榮西（葉上僧正）が傳へし法は抹茶なり其時漢土いまだ葉茶を用ひず建久二年四月榮西禪師宋より歸る其茶種を齎來り筑

岩上茶

前背振山に栽これを岩上茶といふ又其茶種を栂尾の明惠上人に贈る上人これを栂尾の地に栽しとたむ然るに僧大盤が【茶湯記】に建保中葉上僧正と明惠上人と共に入唐し商船にて歸朝すとあるは非な

團茶

とうちや
にがちや

煮茶

團茶あり元末より明になりては研磨せず手に採て焙爐にかけてあぶる是葉茶なり專ら煎茶淹茶を用ゆ（淹茶はこゝにて出し茶といふ是なり）

○【嶺外代答】雷州鉄工甚巧、製茶碾湯甌湯匱之屬、皆若鑄就、余以比之建寧所出、不能相上下也、夫建寧名茶所出、俗亦雅尚無、不善分茶者、雷州方㗸登茶、奚以茶器爲哉と有り蓋は【本艸】に皐盧と出たりこゝにてとうちや又にがちやと呼ぶ山中自生の茶にして味苦さものなり碾に一種鉄にて作り歯を作り茶をきしる器あり古製の物には有べからず

○古へ茶を煮るやうは後世の煎茶と異なり【大學衍義補】に唐宋用茶皆爲細末製爲餅片臨用而輾之また蔡氏【茶錄】に碾茶先以淨紙密裹槌碎然後熟碾其大要旋碾則色白或經宿則色已昏矣これ製造を經て團となして貯へ置用る時碾るなり（歐陽永叔が【龍茶錄】に上品龍茶は輔相の臣といへども輙く賜はさるもの故南郊大禮致齋の時中書樞密院各四人へ一餅を賜ふその餅には宮人黄金にて龍鳳花草を造りて其上に貼す兩府八家割てこれを分ち不敢碾試宰相家藏以爲寶時有佳客出而傳玩爾といへり然れば團餅にて龍鳳は作りものを貼たるかおもふに印成のうへを金にて飾りたるものとみゆ【北苑貢太錄】に太龍鳳銀模銅圏【北苑別錄】太平興國中初爲御焙歲模龍鳳以羞貢篚また又宋無名氏【南窓紀談】に今建州製造日新歲異其品精絕者一餅直四十千蓋一時所尚故豪貴競市以相夸也）

○また【茶錄】云候湯最難未熟則沫浮過熟則茶沉前世謂之蟹眼湯者過熟湯也況餅中煮之不可碎故曰候湯最難碎とは煮て解るをいふ歟もしさもあらば碾を用ひぬ茶を煮るにやおもふに煎には碾るに及ばぬ理ながら碎字なほ疑はしかゝれば末茶を煎して匙にて點したることゝ見えたり煮ずに點する事は宋の代よりなるべし點法のこと下にいへり

○【五雜俎】に古時之茶曰煮曰烹曰煎須湯如蟹眼茶味方中今之惟茶用沸湯投之稍着火即色黄而味澁不中

茶

漢土の茶の事

○【茶坪錄】云茶即古荼字音途顏師古云漢時荼陵始轉途音爲宅加切【日知錄】に茶字中唐より變じて茶字となすことは【唐韻】に詳なり古へ茶と云しもの三種ありと【困學紀聞】を引てこれをも辨じたり宋の張淏が【雲谷雜記】にも云歐陽公【集古錄跋】に茶を飲ことの前史に見えたるは魏晉より以來なりといへり按るに【晏子春秋】に嬰齊の景公の相たりし時脱粟の飯を食ひ炙は三弋五卵茗菜のみ又漢の王褒僮約五陽（一作陽武）並に誤武陽に作るべし【僮約】注武陽地名也とあり魏晉の前既にこれ有り但し當時茶を飲ことは知れどもいまだ盛りに行はれざりしなりと有り郭璞【爾雅】を注して木は梔子に似て冬葉を生ず煮て羹とし飲べしと云れば茶葉冬に生ずれば苦味にて飲べからず凡茶は飲者稀なるを張華異聞として【博物志】に載すこれ茶を飲者すくなきのみならず茶を識ものもまた稀なれば唐の陸羽に至りて【茶經】三篇を著し茶をいふこと備はりければ人あまねく茶を飲ことを知れり其後茶はやゝ用て是を尚び回紇入朝の時馬をもて茶と交易す德宗の建中の頃趙贊といふもの始て茶税のことを

茶税

興す貞元の初ごろ詔を下しその事罷たりしが貞元九年張滂といふ者また奏してこれを税す歳毎に茶税緡錢四十萬とぞ鹽酒とおなじく國用を佐く宋の時唐の代に幾倍する事をしらずといへり（このこと沈括が【本朝茶法】に委くみえたり）唐代の茶を製るは蒸て臼にて舂き範にして是をつくねたりまた

臘面

臘面と名くるは唐徐夤が詩飛鵠印成臘面片とあれば模にて作りたりといふ是を用る時はすゝるには碾また碾をも用ゆ碾は挽うすなり碾は【進茶錄】に以銀或鐵とあれ共石にても作れり宋林逋が詩に石碾輕飛瑟々塵といふ何あり木にても作れりこれ今の藥研なるべし製造いよ〳〵精くなりて團茶とも

正月の庭竈

○正月の庭竈（カマド）むかしは奈良のみならずいづくにもあり【日次紀事】云、置火爐於庭上、令家舗席而圍座、是謂庭竈、云々、內田順也が【五節句】といふ物に（貞享戊辰）庭竈在家に常の竈の外に庭に新敷圍爐裏の大きなる樣に拵る寸法大小家の勝手あり不定なり其廻りに家來ども寄集り薪を燒き茶酒餅蛤等を喰て三ケ日遊ぶ事なり庭の竈との文字入ては雜なり叡慮にて賑ふ民や庭竈（芭蕉元祿二年句）今も吉原には正月庭火とてこの事あれど庭にて燒火するのみなりとぞ【風流徒然草】大晦日條家每に庭火たきて餅蛤燒など此頃江戶にはなき事をよしはらの內にはなほすることにしてありしこそ賑なりしが【廣東新語】（事語）永安歲除夕婦人置壚米竈上以碗覆之、視壚米之聚散、以卜豐歉、名曰視竈、男子則置水釜、傍粘東西南北字、中浮小木、視木端所向、以適其方、又審何聲氣、以卜休咎、曰瓮卦、この事は猶卜なり

救火のまとひ

○救火號帶失火消防人（ヒケシノマトヒ）是の纏は享保五庚子年九月十七日（一纏の形品々有り但組合數いろはの內へひらを除百千万迄四拾七組此內へ寺社門前町組合幷本所深川分は一組より十六組迄都合六拾三組右場所組分は片山三九承りにて出來の由）

火の見やぐら

○街上火の見は享保八癸卯八月十三日申渡町々火の見の高サ町屋やね棟より火の見棟迄九尺に定貳町程見通し候積り町々申合繪圖之通り喰違に火の見上ケ可申候出火之有は板木にて爲知可申火之見の近處に風見の喚鐘釣臺火の見番人兩人定置風有之喚鐘鳴り候はゞ壹人の番人は火の見へ上り可罷在候殘る一人は火之見番上り候段町中へ爲相知可申候火の見番上り候段番人相知らせ候はゞ組合の町々申合人足用意仕罷在火之元入念申付出火有之候はゞ早速罷越打消大火に不成樣可仕候

茶　漢土の茶の事　煮茶　本朝茶の始　茗苑　宇治茶つみ　製造　茶式　一椀にて數人喫す　回茶貢茶　同朋茶坊主　茶式傳來　數奇　わび　利休　九輪釜　人の眞似　白茶　嗅茶　はなが

距ること各七歩づゝ余も如意嶽に登りて其穴を見しが廣く大なるものなり

○【長崎歳時記】七月十四日の夜男女墓まうでして灯を点じ菓子を供ふることをなふすへて當所は山々相接り梵刹相連る故数多の墳墓に万灯点じたる光景餘國に類なき奇觀にて旅客これを見て珍とせざるはなしといへり又それよりも異なるは【同書】に正月十五日唐館に於て巨蛇を作り其体中にあまた燭を点じ館内を蜿蜒とつかひ廻るこれを蛇踊と云ふ又節分の夜は市中家々あまた灯火をかゝげ當侍過る頃一のくらみさて神灯並家内の灯を悉く消し夏はやしを始むと云り

蛇踊

○此條にいはむもつきなけれど唯光るものゝよすがに思ひ出たれば其文を記す文化五年戊辰正月元日余居稚池、魚復依舊追、是晩夏落成而比隣未有家、只碕壇中草蟲益吟、毎月夜乗涼散歩、八月十六日夜將半、異光四射、家人皆驚告、余仰見満空星稀無點雲、皎月一輪如寶鏡、而有暈七八層、如虹霓、重々環旋、其近月者紅色如胭脂、外層五彩鮮妍、燦爛瑳瓈不可名狀矣、知是月華也、東鏡云、建長五年十月十三日戊刻、月有五色光、指亦之乎、然則雖冬月亦有之、又文化十四年二月春分、日在西將沒、餘光閃動空中、細有花片霏々散亂者也、平常日光射眼不可向、而斯時正視日力不眩、以隨度既亦有雲而日光照時常彩不現、惟見景象明爛而已、【五雜俎】云、二月涉正午、有日華而人終不能見距條不然、一按に【秋平新語】に予幼時秋夜起溺、偏正午月白如晝、仰視満空、四際無纖雲、忽見月暈數十重、周匝鏇繞、半天、云々予時無知、不審爲何云情甚、邂歸室中、告諸父、越日乃以語先輩、曰見月華也、余獨見之、必異人、勉力可也、予識之不忘、乃今年踰四十歟、輒無成、云々またある【鶴窓影】十二回、月是太陰之精、一隈一動、使華不彩常、是夜更闌、云々、月裏的精神發見出來便●那波一團華彩、千層寶靄分外分明、西蔵老人云明和八年辛卯九月十三夜に小島橘洲一名恭從字温之のもとに會せしにこの時ばかりに月華をみし其色まことに五彩にしてあざやかにみえし事しばらくの間なり

月華日華

ど朽たるはいつくにも有べけれど風土に隨ひて異なる歟

鬼火

○【席上腐談】燐火俗謂之鬼火其明、如火而非火、吾家老僕素不信鬼、夜見鬼火無膦々而來、衆驚走獨、老僕乘醉赴前撲之、乃石楠葉之濕者、また【隴蜀餘聞】蜀金堂縣三學山有古樹三四株不記年代、毎春月其葉夜輙有光、如炬遠、近數百里以爲佛光、裹糧往觀此はつはきの光る類とみゆ

東大文字

○或人云今船岡山にて七月柴を燒て火字を作るは昔靈岩寺に御燈ありし遺俗かといへり【公事根源】松下見林の旁注にも北山靈岩寺今西賀茂有故迹七月十六日燒船形炬山是也とあり【雍州府志】慈照寺山の條下大字を燒こと委く見えて此外北山の妙字法字或は舟形等ありと東山なる大字をむねと書たり俗説にはあれど彼大字は高野大師の筆法などいひ傳ふるも古き事とはみゆこれもこ北辰を祭りし遺風なり

北辰燈

【日本後紀】延曆十八年九月廿四日云々是月禁京畿百姓奉北辰燈とあり【公事根源】に延曆十五年三月に始て北辰を祭らるとあれど史の缺文にや其こと見えす上ざまのことを學びし事とは知らる【異本四季物語】七月條北斗に火たむけらるゝなど都の内の山々ことやうの見物なりかし年々に行はるゝ事なれどわきてめつらじう思ひなされぬこゝの山さとにてもなほこのことわさはまねひて里のあけまきいとみなすもおかしかりけりとみゆかゝれば京師東北の山々に北斗の手向にせしが後は魂祭のかたにうつりて設けたるも有べし鬼貫が【獨言】に中元の次の夕は火をもて盆送るはかなし山には大文字妙法舟やうの物火をさしよする程はしばし心もうき立侍れど形あらはしてやかて跡なく消るも又はかなし【五元集】うす雪や大文字枯る山の草【嵐雪が集】松か崎妙法の火經をやく火のたうとさや秋の風大文字の句をもとめたれは雪の心出ける儘に山の端を雪にも見はや大文字○【北窻鎖談】に七月十六日の夜に立る東山の大文字の火は壯觀なり唐土にも無きことゝの由孔雀樓先生も書置れたり大字の横の一畫二十九丈薪を燃す穴十九左の畫四十九丈二尺穴三十一右の畫四十一丈七尺八寸穴二十一其穴相

風氣の煩しきほとにて御やきいしなとまいらす又【大鏡】に保光の傳にこの大將八條にすみ給へは内に參り給ふほとのいとはるかなるにいかゞおぼし冬はもちひのいとおほきなるを一ツちいさきをは二ツやきてやきいしのやうに御身にあて給へける（これまことに良方なり今は燒石も行り）

夜に光りある物種々有り

○夜に光りある物種々有り【大和本草】に陰濕の氣ある物には皆夜光りあり螢火も晝は光なし海潮夜光りあり月夜に光なし山茶木朽れば夜光る舊蘭敗草青鷺の羽翮の肉うろこ烏賊の肉鮮ければ夜光る章魚のねばり黑猫の脊を暗夜に摩ればひかると云り其内山茶青鷺などは俗に化る物と云も其故なり海潮の光は水泡の光なり烏賊は甲もよく光るすべて魚物はみな光る婦人の髮も暗夜に梳れば光る紅裙うらの小袖脫て暖みあるは光る【採蘭雜志】云ふ近見朋士暗中脫衣或用手拂皆有光灼爍一室但明といへりまた卵の光ることあり【槐西雜志】鷄產一卵入夜有光、仲坊偕數客往觀、時已昏、於燈下視之、無異常卵、撤去燈火果吐光熒々、週卵四圍如盤盂、置諸室隅、立門外觀之、則一宮照耀如晝矣、云々、予嘗謂腐草之爲螢以昏陰積雨、陽氣蒸而化爲螢、東北之夜亮木、以水浴雪岩、陽氣聚而附於木、螢不久即死、夜亮木移植盆盎越一兩歲亦不生明、出潛藏陰氣得舒則漸散耳、惟雞卵夜光、則理不可曉云々この光り木のこと高士奇が

夜光木

【東北小鈔】に出たるをみるに朽木なり西土の人の說往々かくのことし【東北小鈔】云、夜光木、生絕塞山間、積歲而朽、月黑有光、週身皆然、移置殿上、通體皆明、白如螢火、逼之可以燭物、以玉斧斫、水浸之、水光益微、開露日遠、則光漸減矣、致之群書、眞誥、良常山有螢火芝、大如豆形、紫花、夜視有光、【述異記】東方朔帝日、臣遊東流、至鍾火之山、有明莖草、夜如金燈、亦名洞冥草、【拾遺記】岨瑩山獻破金者、色如黃金、置漆盤中、照耀滿室、名曰夜明苔、若夜光木、未有載者、惟黃山志載、有放光木、宿日啖といへり按るに【宋史五行志】宋明帝泰始二年五月丙午、南琅邪臨沂黃城山道士盛□度、見一柱自然夜光照室內、此木、失其性也、或云木得自光、など是をは引ざりけん西土には遺跡ならではこれなきにやあやしむへし栗木な

櫓 大永七年十二月の處火櫓に足さしならべて云々後にこれを櫓（ヤグラ）といひ爐を火燵と覺えたるは誤りなり或人この櫓といふをもて戰國中の名といへるは非なりこは後の俗稱なるべし俳諧などにも古は櫓といふことなし【藥師通夜物語】に冬は置火に高ごたつ云々【鷹筑波】に暮て行春のかたみや置ごたつ（利勝）火燵は爐の上に置ものなればかたみに置といひかけしなるべし其外こたつといひたる句はあまた

置火燵 あり芭蕉が句住つかぬ旅の心や置こたつ是今製なるべし【備前老人物語】に渡邊水菴翁は火燵きらひなれども年よりのこたつにあたらぬはすげなき物なりとていかにも火をよはくして常によりそはれけり寒きころ客來れば先火燵へより給へこ請せられけれとも老人といひ武功ある人といひやすく近つく人少なかりけりかくては物かたりえずとてをき火燵を出してければ客も心易く火にあたりゆるやかに

板倉の冷こたつ 四方山のものかたりせられし也客多き時はなをおきこたつを出されしとなり

○世諺に板倉殿の冷こたつとてすりきり給ひしことのありしやうに心得るは火の消たやうにさみしきこといふとおなし意とするにてこそいみじき僻言なり【五元集】に周防どのは才ある人にて政事行はるゝに一生非なしひなきをめでゝ板くら殿と申すとかやこの中より燒たる錢を拾ひ出て火燵から青砥か錢

火を起す を拾ひけり同集に宮わらやはてしなければ矢倉賣とあるは火燵なるべし（今こたつやくらといふは重言なり）【枕双紙】いりすみおこすとあり【源氏物語】幻卷うつみたる火おこし出で御火をけ參らす今俗にかきたてゝなどいふことゝなり【尺素往來】に竹爐生炭木床消衾

火ひつ ○又火ひつこもいへり【今物語】に近き御代五節のころたれこかやの御局おしいらせ玉ひけりとあへすともし火を人のけちたりければ御ふところよりくしをいくらも取出て火ひつの火にうちいれ玉ひたりければおくまてよく／＼御らんじけり

焼石 ○焼石（ヤキ）とは溫石なり【源平盛衰記】の女房入水の處に硯こ焼石こを袂に入ることあり又【十訓抄】に

業こもり紋は鶴の丸ヨイナヨイハイナ（大文字屋の大かぼちやといふ歌のはやりし頃此十二挑灯も共節に唄ひしなり）花火の十二挑灯も出處は是なりとぞこ云れど奉納物は花火より思ひ付し歟古くより挑灯からくり有し事上に見えたるがごとし（【北條五代記】に北條左衛門大夫家中三好孫太郎といふものさし物に挑灯を七ツさしたりかやうの事もあれば花火も早く有し事知べし）【月令廣義】閩中有烟火名秦皇轡者、以火炮及各花地鼠水鼠等筒、聯成串、凡數百相間之、令一人提、而逐一放落迸散、其製甚奇、【帝京景物略】燈市條、烟火則以架以盆架高且大盆、層至五、其所被械壽帶葡萄架珍珠簾長明塔等、また【格致鏡原】云、宛署記、烟火諸製、有聲者曰響砲、架高起曰起火、中帶炮聲者曰三級浪、不響不起旋遶地上者曰地老鼠、築打有虛實、分兩有多寡、有花草人物等形者、名花兒、以泥函者曰沙礶兒、以紙函者曰花筒、以筐函者曰花盆、總之曰烟火、有集百巧爲一架者、有集のうへに【月令廣義】に引たるには動成案の三字有り）その內三級浪は今のろし仕掛といふ類地老鼠はこゝにもねづみいたちなどいふあり濱土には上元の放燈の時煙火を焼る故燈を見物する人群衆の中に火散て傷をうくることなど記したる者あり又類書などに烟火を爆竹の下に收めたるはその時此を焼る故なり

火桶に足を暖む

○【枕草紙】にくきものゝ條老ばみうたてあるものこそ火桶のはたに足をさへもたけてものいふまゝにおしすりなどもするらめ古へ地火爐はありしかどそは食物などまかなふ處なれば手足を暖むることなどはせず是をすひつといふ作の草子の內にもすひつに蛙の焦れたることみゆ【續古事談】又【後三年記】に地火爐ついてといふも食物を造る事なりされど田舍にはゆるりなど呼て何にも用ゆ【犬雙子】

火燵

ゆるり（ユルリ）は圍爐の音の訛れるかこれを濱土に地爐と云ゥ山谷が詩に地爐相對語々又足をあたゝむる足爐もありこれに非禮めく物を作りて火燵といふ【[illegible]記】に小細の帝は二燵のやうなる物にて【林逸節用集】に火燵出つ火燵は大かた此ころ始なるべし節用は文明中の刻本あり【宗長手記】

花火

〳〵影ほうし犬かとりわけ御意にいり
○はな火は品多し【懐子】見物もなびくすゝきの花火かな（重長）坂部胡兮が【到来集】延寶四年九月牡丹一枝到來してはな火ならて手牡丹となるながめ哉（伊勢三林）【洛陽集】（延寶八年刻）奥方や花▷線香せめて秋（梅水軒）鼠火や竹に生るゝ暮の風（嘉辰）手牡丹や韓湘笑てたちまち花（千春）すゝき萩流星もみちみだるめり（有知）【續山井】盆に牡丹みる花火もや仙の術（如貞）西鶴が【世の人心】に今身のうへは長町にかげかくし花火せんかうして朝夕のけふりほそく云々前句付　あとからは出來〳〵序はすゝき中はから松すゑ紅葉ま又しほりこそすれ〳〵消ぎはに唐松を出す手のかげん
○京難波には昔しより大なる花火はなかりしとみゆ烟火はもと烽燧より起る【和名抄】烽燧を度布比と訓り令に烽子と有はこふ火守なり古へ戯に用ひし事なし後世は是を遊觀の具とする太平の樂しさよ是を坊間にて猥りにともしたりと見えて万治二年己亥六月廿日町中にて花火一切仕間敷候但大川口にては格別の事と有り寛文七年御買上花火入用の内云々からくりから笠（九本代銀九十目）大丸挑灯壹（代二匁七分）中丸挑灯六（代十一匁四分）同小五十（代二十五匁）南茅場町賣主次郎兵衛請取申銀子の事合銀一〆八百七十七匁右是は未の七月御花火御買物の代也御花火百六十五本大からくり五本被仰付候に付右諸色買調花火屋與左衛門に相渡申候云々同八年銀二〆八百八匁三分右是は申七月兩度御花火御用之御買物代銀なり御花火二百五十本大からくり八本云々【紫一本】兩國川涼の處にしたれ柳に

大からくり

大櫻天下太平の文字うつりゝうせい玉火手ほたんや蝶やふとうに車火や是は仕出しの大からくりてうちん立傘御覽ぜよと有り大和年中の花火みな今ある處なり【五元集】鵺さばきも逆櫓もやるや花火臺一兩か花火間もなき光哉【後は昔物語】寶暦二申年と覺ゆ淺草觀音の開帳に玉屋の花紫（大夫なり）

十二挑灯

挑灯を十二つらねて奉納せしより十二挑灯の歌あり十二挑灯花紫の紐付て飾りし玉やの女郎衆か戀の

火廻し

○火まはし【堀河院百首】みどり子のあそぶすさみにまはす火のむなしき世をばありとたのまし又火渡しとも火もしくさともいへり【鷹筑波集】稲つまに火わたししてや行螢（忠俊）また牛王ともしらてよりぬるもとゆひに竹田の子供火もしくさする（貞徳）【寛永発句帳】に竹の子の火まはしするかと

火もじくさ

ふ螢（重成）【續山井】火まはしか片はしよりの三毬打（友部）【西武百韻】そこらこゝらゆりてしりぬる蹴よみにすゑたくさみはひもじくさなり自注に蹴鞠にとあるからかく付るなりひもじくさは紙そくに火を付て歌の五の句の下の文字にすがつてさきへわたして消る所をまけといふことゝあれば付るなり

文字鎖

といへりこれ今く文字鎖・同じ文字鎖の歌は上の句の終の文字をうけて次の句の上にその同文字を置ていひつらぬるなりそれより女童の遊びに古歌をよみてさの如く次第にいひつらぬるを文字鎖の遊びといふこのあそび火廻しより出たるにこそされど火廻しも種々のしかたあるべし火もじくさといふ名はひもじ上につく事を何にてもいふよしにて今もすることゝおなじき事も有したり【百物語】（明暦万治の頃の冊子）日待の夜色々の興ありて後火まはしをはじめてひの字をかしらに付てひたもの云まは

火渡し

しけるとあり【評判大鑑】に火渡し糸ごり淨土双六とあるなど尻とりにはあるべからず【續の原】に雨の日を酒の小瀬女と亂れけんかいつめらるゝ火渡しの負（溪石）

脂燭の詩

○【梅窓筆記】云當時の戯に火廻と云ことあり昔は脂燭の詩と云ことあり【玉海】壽永二年正月廿五日召中將於前脂燭詩兩度令作一度二寸（開山花未遍作）一度五寸（竹間鶯語滑聲）又【續世繼】（春のし

しそくの歌

らべ）歌を好ませ給ひあさゆふさふらふ人々にかくし題よませしそくの歌かなまりうちてひゝきのうちによめなどさへおほせられてとあり按ずるに歌このませ給ふは崇徳院の御事なり

影法師

○影法師【甘露寺職人歌合】かけ法師みくるしければはずすそふ月をうしろになしてねるかな【安和良加須】にわれもわれたりつきもつき二十日鼠をあたまの鉢のおけにして古き前句付に合せてさすれ

さ付たるこしにさしそへたるふるこたちのかたへに兒かゝへてたゝずむはいかばかりのよはひそや云々むかしより扇を飾りに用ひたり坊間の爆竹は制ありて止しかど猶田舍には行ふ處多し（【誰身の上】明暦二年たうどに立る大竹の云々明暦元年乙未十二月廿二日町觸左義長に新澤山に積かさぬ焼申間敷事寛文六年午正月跡々より如申付候町中にて十四日十五日さきてう焼候儀御法度候間此旨相守可申候勿論さいの神往行の妨に罷成候間是又爲致申間敷候此頃いまだ止ざりしなるべし）

左義長の法度

〇御火焼十一月にあり【世諺問答】に神樂とて諸神の前にて多かならずし侍る事の侍る是等をはじめと申べき云々【日次紀事】に御火焼諸社修之各其緣日異也八日稲荷御火焼也先朔日稲荷神氏子兒童造小神輿自朔振市中入人家謂米錢以是充八日火焼之資料也云々（又云三條小鍛冶宗近が力をうつ時稲荷神出現して相槌うちたる石の盤東山智恩院山門の下にありといふ吹革を用ゐる家業の者みな是を祭る故に是を吹革祭といふ智恩寺鎭守は元賀茂明神なり卅九世滿靈和尚稲荷八幡を加ふそれ故稲荷明神の火焼ありとぞ）すべて朔日智恩院鎭守賀茂神明より日次に諸神の火焼あり其内に四日上出雲路幸神の火焼あり是はごんごに混ひぬる事あり（諸國幸神祭を爆竹と共になす）別に考あり【鹽尻】に土佐某が描る古き十二月の繪双紙を上下見しに十一月の祭に大内より民の家に至るまで庭火をたき神をいさむる事故なきにあらずとて天の岩戸の故事を云り其御火焼の繪左に記すといひて聊其かたを寫し今は京の町にもかゝるわざ大やうなきにや七八十年以前のものと見えたりといへり（さいへるは寶永正徳頃の事なれば畫は寛永頃の物とにや其圖四角に箱のことく組たるもの木にやあらむこれ二ッ間を置て並べたり其中に葉ある竹を立ッ下より烟起れり又地上に机を居供物めくものを栽市中の体とみゆ）貞德が【淀川】にみとり子のけさしも袖のうへに寐てすゝきをたきやあかすおほたけ（自注に袖はすゝきなりおほたけは子どものする事なりと有り）

御火焼

吹革祭

庭火

す次に金の立烏帽子に大口を着し小さき羯鼓を前にかけて打鳴之舞曲をなす又笛一管小鼓一挺半上下着したる者打囃之也但舞曲をなす間に件の左義長に御吉書を添て燒上るなり又燒上る左義長の數は十二三飾なり（十二三と有は十二の誤なるべし）【和訓栞】云十八日清涼殿の南庭に於て燒上る其時吉書も添へり陰陽師大黑此を囃す舞曲もありもと山科家より獻ぜらる葉竹をもて拵へ扇等の飾ありて十二本を十二所に立並べたるなり又云今門戸に立し松竹標繩等を燒はもと神祭に用ひしものを燒がいつとなく一に混じたるなりと云りまた【和漢三才圖會】に云毬杖與左義長二物實按正月十五日於清涼殿庭燒青竹以彼上吉書於天十八日亦飾竹結付摺扇於清涼殿庭燃之唱門師大黑松大夫其徒四人（二人翁形二人嫗形）被鬼面蒙赤熊髮二嫗携太鼓三翁逐舞打之童子二人素面蒙赤熊髮打腰鼓又傍有椅衣者五人雙立囃之言毬杖也着指袴一人和聲謂波阿未知其來由云々凡民間十五日朝收取每家飾藁松竹等一處燒之爲毬杖兒童試筆書上於天以禁裏三飾曾唯一度爲之耳といへり（十五日十八日もとは兩日の內一度なりしと見ゆ後兩度行はるゝに至りて十五日には拍子ものはなく吉書を燒上るのみなり十八日は吉書を燒ことなしと是には見ゆれども前に引る【故實拾要】にこの日も吉書を燒とあり然らば別の事とするは非なり）もと一事を兩度に行はれたるなれば此說にひがことなりさて大黑と云る者陰陽師ともいひ唱文師ともいへり唱文師は唱門師とも聞ゆ然らば犬神人なり【滑稽雜談】に古老傳ていはく往昔は元朝寅時犬神人禁裏日華門の外に參て毘沙門經の文句を訓讀に唱へ祝の儀をなせり故に此者の黨類を呼て唱門師と稱すとあり大黑と稱するは福神の名を取て祝したることゝ聞ゆよりてしゆくの者ともいへり【滑稽雜談】には元日毎に夙に候する故夙の者と號す世に誤てしゆくといへりとはうけがたき說なり又大黑舞といふ事にこのとんどよりの起りし事と知らる

唱文師大黑

○【異本四季物語】にさぎてうの具も見たつ人のされば〻みたるあそびものとなりやけのこりし扇に赤きふ

さきちやう

爆竹

一とひ　火の見やぐら

さきちやうは名義定かならず【徒然草】に正月にうちたるきちやうを眞言院より神泉苑へ出してやきあくる也と云り李吟云昔は毬打三をたてゝ作れり今の爆竹の竹の三本をもて足に用るも其義なりとぞ【延響】に公事を被行候時夜に入候へば陣の座といふ處に結び燈臺といふ物を立て灯を設昔の記錄には三木張とも三叉杖とも有之候三毬打も其形似たれば三木張といふ意なるを後世文字も色々と書故さまぐ\の說有之候やう被存候愚存如此候此等いかゞ有べきもと幼き事より起りしやうなれば毬打をやきあぐるなどより名づけしならむさて此事漢土の爆竹に似たるより【埃嚢抄】には此を云て【徒然草】を非とせり左義長の字義などは殊附會なり漢土にも【神異經】には山臊を驚すことといひ又【月令廣義】などには除夕爆竹所以震發春陽除消邪厲今人遂以爲戲而傾貲爭雄殊失本意などみえたり【異本四季物語】云々末にあり後世三毬打諸家より獻れる由なり或書【元長記】を引て云く永正十一年十五日晴三毬打三本燒之御會始書廻文遣之同十四年正月十八日晴頭辨進上三毬打加茂社三毬打九本進之これをみれば十五日にも限らず十八日にも此こと行はれしなり燒ことを云ざれども每年の事故かく省きて記しゝなるべし後世十五日と十八日と兩度になりし【安齋隨筆】に故實中院家書拾要を引て云正月十五日御吉書左義長是左義長は以葉竹拵之扇等の飾あり常の如し左義長是に御吉書を被上事也又云十八日爆竹是去る十五日白山科家獻上の左義長今日清涼殿の南庭に於て燒上るなり天子清涼殿に出御天覽あり極老催此事なり夫御殿の階の下に北面の侍兩人蹲候也件左義長燒上る時陰陽師大黑囃之（大黑とは其陰陽師の稱号なり）凡其次第先陰陽師大黑烏帽子素袍を着し扇を持て清涼殿の御庭の中央左の方に立て囃之又大黑兩人上下を着し笹の枝に白紙をかけて持之立向ひ囃之次に鬼の面を被りたる童子一人金銀を以て左卷に書たる短き棒を持舞曲をなす次に面を被り赤き頭を被りたる童子二人大鼓を以て舞曲

遠州

燈の如く底板に燈盞を置たるを遠州といふ丸行燈出来それより角なる行燈にも燈盞を中に釣る事始れりといへりまた【庖丁聞書】にぼんぼりとは千鯛干鱈をふくめ高立の中へつまみもることなり

盆挑燈
箱提灯七月用

○そのかみ盆挑燈を用ひしと見えたり其角が【花摘集】元禄三年七月十四日鉄淡石が句に門並や箱灯燈は盆の中（吉原にて玉菊が追善より燈呂は起りしといふもいかゞあるべきその初め箱提燈を付しといふは其頃の風なり）

高燈籠用

○【昔々物語】に歴々の衆此外の人あるは大かた七回忌まで毎年七月高燈籠を立る長さ七八間ばかりの杉の丸太の上に三角にいらたか結杉の葉にて包みしでを切て附燈籠は辻番の行燈の様に小くこしらへ上を開き下をすぼませやねは板にてこしらへ玄関と台所の間の広き所へ立る七月朔日より晦日まで毎夜暮六ツより明六ツまで燈す一向宗には此事なし他宗は何も如此見分あはれに見ゆるものなりとあり其さまなおけるは【嵩本川紫遊】と云ものに七月玉祭の處に出たり画書に近きころ見うしなひし佛には三年の内高燈籠をともすたかとうろはみる人の目のうは火哉

地口行燈
初午
行灯に傘

○地口行燈【我衣】に宝暦六年子の二月初午いなり行燈六月祇園会の行燈はやりたることをいへり【娯息斎詩集】（明和七年）題初午、大鼓昔高童子集行燈地年々新（今は年々古し其故は画かきども手すきの内に多く書置し物をいくらも書て賣故一ケ所にも同じ物有り地口行燈に傘をさしたる事は予が父物語に一とせ小川原町の稲荷祭に俄に小雨ふりければ駿河町越後や呉服を借てさしたりとぞ）【還故集】初午の難むじたは燈下に始る（白笑）川柳点に初午の理つく〲思ふやうといふ句は是を取たり

さきらやう　唱文師火焼　御火焼　吹革祭　火廻し　火もじくさ　文字くさり　野法師　花火
火からくり　十二提燈　火桶に足を暖む　小燵　置ごたつ　腰掛の台ごたつ　火をおす　やき石
燒餅を温石に代用　夜光る物くさ〲　夜光木　東山大字　北辰燈　月輪日輪　庭燎　救火のま

に是を用ゆるなるべし【佐夜中山集】作りものや質にさま〴〵の舞燈籠とあるは是にや廻り燈呂にはあるべからず又茶人の用る櫻とう籠は（赤がね煮くるめにして張り圓く作り惣體櫻花を彫透したり）

櫻燈籠

かんてら

忠に風雨をさくる爲とみゆ軍中忍びの挑燈に倣へる歟又釣瓶の如く動くかんてらも件の挑燈俗に强盜挑燈と云ふより出たる也

影繪

○【武林舊事】に影戲爲繪革社云々靑藤山人【路史】にいはく影戲始漢武帝李夫人事宋仁宗朝市人有能談三國事者或采其說加緣飾作人影始爲魏吳蜀戰爭之象また【因樹屋書影】に書をうつす法を云ふに鷲燈取影以遠近爲大小若今人爲戲者云々これ今の影繪なり【洛陽集】春の夜や影人形のはつ芝居（浮石）寬文延寶のころ影人形といひしものは今も手をうつして影にし鳥さし犬の首鷹などの形をなし又いさゝか紙など切て其形をうつし又身にさま〴〵の物をとりつけて影ぼうしうつすことなどはあり今の硝子に繪をかきて彩色したるうつし繪も予か幼きころより見しものなれど其頃は今の如く巧みなる事はなく石臺の花の開く所又は掛ものゝ白紙なるにやがて文字のあらはるゝなとにてありし（化物らうそくなどは今もかはらず紙を種々の人形に切二ツを竹の串に挿みて裏かへせばその物かはるかげ繪は其頃はなかりし）

影人形

化物らうそく

ぼんぼり

○今小き行燈をぼんぼりといふ【續五元集】に餅(モチヒ)の紅粉も犬子となる龍燈のかさぼんぼりは月と花是は月花には龍燈も明らかならねばこれ龍燈のぼんぼりなるべし燈火の覆ひをぼんぼりといひ又茶爐の雪洞をもしかいへり火を覆ふ事おなじければなるべしかさほんぼりとはもとはさもいひしにや（ぼんぼりといふ物色々あり【續山井】にほゝけてはぼんぼり筆かつく〴〵し（以隱）うす雲はぼんぼりわたか月の良（有之）物の定かならぬをいふ耳を撚る消息子もその筆に似たればぼんぼりと呼なり）今の行燈の製は兵蝸か【翁草】に古老の物語を記して行燈今の如く蜘手を中に釣は近き事なり昔は路次行

よむ岩唐音歟といへり

懐中ろうそく

○【寛永の冊子】に懐紙ろうそくといへるは今の懐中らうそくなるべし【嶺南雜記】西洋燭有大至十餘斤一對者云々又有一種細如箸搦爲心盤折如香篆于欲點則引長其端息則仍盤之可入巾箱明而耐久かゝれば懐中蝋燭はもと西洋の製に倣ひしものか

ひしり行燈

○ひしり行燈は【諸艷大鑑】非寺里行燈の光をうけて大かた隙日を佯しかねたる女郎云々局みせのかけ行燈を云りひしとは高野聖の笈めく故の名にや又赤き紙にて貼たるはもとたばこやの目印なり【晃道通鑑】通天の紅葉をいふ所此里のたばこ賣が赤あんどんは是よりそ本つきぬらんとは紅葉のてるをいふなりこは近くまでありしにや【六玉川二編】節の夜の障子やたばこ店なともみゆ今も烟草やはかき色の暖簾かくるもおなじく目印なり（西瓜の赤あんどんこれよりや出つらん）

たばこやの赤あんどん

廻り燈籠

○廻り燈籠は【野草】にをとりの事をいふ所揚燈籠廻り燈籠の軒にふらめきまた【寶賓渡集】ことを巧みに色をよくするかゝくやまはり燈呂のすはう紙（日能）よを賦ふ姿か月のかげ法師かしこきちゑの廻り燈籠（宗朋）みな寛永中の作なり【懐子】めぐりあひて見しやそれ〳〵影燈籠身にそふや秋の月よりかげ燈呂【續山井】こたくみのいそげば廻るとうろ哉平仄をしあはせぬるやもし燈呂（文字を綟子の細にとり字の平仄をあかしの燈燭にとりたるなり）綱あまたあれど丝なれば錄せず廻り燈呂は漢土に走馬燈といへり【機西雜志】に壁上の畫ありくやうにみゆるを畫中人綫牽而行如燈戲之狀とはり燈呂に似たるをいへり

走馬燈

戴燈籠

○戴燈呂【貞德文集】六月十三日祇園戴燈籠笠鉾鐘鉦之時躍衆之裝束不殘可被恩借候戴燈籠を板本にあげ燈籠と点を付たるはわろし字のことくいたゞきと讀べし是をどり燈呂なり京師花園は北山邊の在名たり七月十五日の夜をどるなり在所の新婦は必道燈呂の尾のあるを頭に戴き踊るものなり鐘鉦の風流

○【天祿識餘管子】云左手執燭右手折堲亦作卽燭頭燼也とあれば堲は燭の燃えたる心なり跋はらうそくのもえのこりなるべし

朱かけの燈燭

○朱かけの蠟燭【宗五一冊】云わたましの時は公私ともに蠟燭は朱をかけず候【今川大草紙】にも移徙の時赤き色を用ひずらうそく盃等までも白きを本とする由いへり

○【正直集】（七）守武獨吟追加とて百韵ありみだれ碁いそぐらうそくのかげ斧の柄の一てう二てう取出てと云ふ句ありされど跋文に享祿三年正月九日夜云々あるは疑はし【守武千句】は天文九年なるにその前に追加あるべきやうなし

發燭 つけ竹

○發燭【職人盡】に硫黄箒賣あり燭奴(ツケギ)とはゝきとを賣ものなり古へはいわうとのみいへりと見ゆこれは木も竹もあるべし宗因か俳諧にたばこのむかと火打つけ竹さびしさは同し借屋のとりなごのと云句あり寛文六年の作なりその頃は竹を用ひしかばこれをつけ竹といへり雨森芳洲が【たわれ草】にいつの時にか有けん材木の費をいとひ乘ものゝぼう細まりし時昔はつゝら竹に硫黄をはき是をつけ竹といひしに今世ひの木を用るはいかゞなりとゝ小ざかしき人のいへるよりさらばとてつけ竹に改りければ程なくやみてけりと有り按ずるに杉檜の器などの議ありしことは元祿二年己の九月なれば其頃の事か

ほゝづき挑灯

○【鷹筑波集】（寛文十五年集）ほゝづきや口ひるてしも吹ぬらんらうそくの火をしめすちやうちん【吾吟我集】慶安二年君かふくほゝづきなりの挑灯に身をつりかねの片おもひかなほゝづき挑灯の名これらに本づくか（ゝ色三絃】に箔の團扇ほゝづき挑灯と有り【江戸名物鑑】ほゝづきや萱みは去て夜の色是等は今の製なるべけれどむかしのはさまで小さきにはあらず唯丸きをいひしならん）

行燈

○昔の行燈は今のごとくにあらず小く作りて持ありきしなり提燈行燈みな燈籠なり故に【埃囊抄】にも燈呂をあんとんちやうちんなんと云文字如何答提燈と書てちやうちんとよみ行燈と書てあんどんと

たちあかし

地中へ木を掘埋めもやし置候あり是を柱松と申由承り候といへり是たちあかしたり【榮華物語】初花かゝり火たちあかし又【紫式部日記】わか宮の御まかなひの處たちあかしの光云々松明は【鳥田路】鐵石屏風詩妾抄朝充食松明夜當燈此是山西本色語深山老松心有油名曰蠟山西人多以代燭云々之松明燃不提風

車たいまつ

○【義經記】（二）油さしたる車たいまつ是は【慈光大師傳】（一）夜討の圖に見えたり束ねたる松明を三ツ四ツほどをひとつにし中を結て車のやのごとくにしてめぐりに火をつけたる家内に投入て明りとするなり是に油そゝぎたるべしこは常に用べきものならず

蠟燭

○蠟燭燭云【儀禮】注云古燭未用用蠟直以薪蒸即是燭紫燭則以麻蒸灌之亦曰燭矣【曲禮】曰燭不見跋是則必有實可爇乃始有跋耳【曲禮】或是有蠟燭後從其所見而言之耶（跋とは【曲禮】上客起燭不見跋註跋燭本燭殘本客見之知夜深而辭去人倦也）こゝにはもろこし劉衆したるを用ひしたるべし【和當日工集】（一）燭十條など出たるも異國より渡りしならむ【令義解】にも蠟火條燭とみえ【和名抄】にも【唐式】を引て蠟燭を載たれども漢土の物をいふのみ也【太平記】大森彦七の條化物を從取て押へたるぞ火を持てよれと申ければ警固の者共東角して起上り蠟燭を燃て見るにと其の專用ひたるは持ありく挑燈出來しよりと思はる奥州の松脂らうそくなど古製なるべし【甲陽軍鑑】（十二）信長へ進物の内越後有明の蠟燭三千丁とあり大なるをいふ鐵會津の産なるべし

○挑燈は【節用集】に出たり（文龜のころには大かた今の製に似たる物も有べし挑灯行燈の事友人醒齋【骨董集】に多く諸書を引ていへり

蜀黍の眞　せつかんらうそく

○【續五元集】に上蠟かけは蜀黍の眞といふ句あり今もろこし稈の心を用ゆるはわろき蠟燭たり（奥州にてせつかんらうそくと云は蜀黍を心にしたる松脂の蠟燭たり燃て風たつ時頭を敲く故の名なり

はそれを染たるを茶屋といひし賦紺屋と云と今は諸色をそむる如く何をも染しなるべし」【條々聞書】かたひらの事つしか花又はくなどは女房兒若衆などは能候云々【用害記】にもつしか花女房衆兒など被着候）

燈籠見物

○燈籠見物【甲陽軍鑑】永祿七年甲子七月十四日の夜太郎義信公長坂源五郎御供にて燈籠見物に事よせ御城を忍出て飯富兵部所にて亂鳥迄談合云々 田舍にても人家多き所にては多く燈籠ともしたるにこそ

○一休噺（四）一休和尚の時代迄は方々の寺々より七月十四日には大内へ燈籠を捧げゝる大德寺にも開山大燈國師より故ありて捧げしかば後々まで例になりてやめがたく一休こむつかしくやおぼしけむ或時大裡へ燈籠あぐるとて狂詩一首作りて相添て捧げゝる性靈今日出來迎雨露直供万葉棚排得燈明天上月松風流水讀經聲（此下に自今以後大德寺よりも何方の寺よりも七月に燈籠をさゝぐる事有べからずと仰出されけると也とあり其實否は知ざれ共後世兩親なき者は獻せざるやうの事と成ければ寺よりのは更なり）

○【紫式部日記】に中宮（藤彰子）御産の後御うぶやしなひの條すこしうちなやみおもやせておほとのこもれる御ありさよ常よりもあへかにわかくうつくしげなりちいさきとうろを御帳の内に限もなきに云々翫びの燈籠なるべし燈籠は月なき夏夜篝にかけて庭のあかりとするなり【源氏】常夏月もなき頃なればとうろにおほとなふらまいれる【篝火】夏の月なきほどはにはの光りなきいと物むづかし【若菜下】月こゝろもとなきころなればとうろこなたかなたにかけて火よきほどにもさせ給へりなどあり（後世庭に石燈籠を置て同じ又庭には篝をたくも常なり臺を居て燒多く水邊なり【今昔物語】廿五庭暗ければ處々に柱松を立たり【莚響錄】に法然上人繪傳の中に葬禮の時つかの穴の邊りに大なる松明を

柱松

せしたり上元の灯こゝにはなき風俗なれど長さきにしよんかんと云ことあり【長崎歳時記】に福済寺は下筑後町山手にあり唐三ケ寺の一漳州寺なり正月十五日蝋燭替と云ことあり堂中仏前の蝋燭を釜断の者手前よりらうそく持行て取替きて貯へ病人の枕上にこれを点ずれば平愈を得と云ひ傳ふしよんかんはしやんかんの訛り上元の唐音なりといへり

公卿より内裡へ献らせるゝは両親なければならぬことゝ見えて【御ゆどのゝ記】享禄二年七月十四日御とうろども参るそちの大たこん頭中将くらのかみはく少将おほき町少将氏直おやもちにてとほさるゝと有り

辻燈籠

つじが化

○【言胤卿記】に辻燈楼とあるはいかなるさまにかあらむ【日本紀】に飄風【和名抄】に飄風をつむじかぜとよめり略きてつじかぜともいふ回旋の義なれば辻はそのかたにて今いふ廻りとうろ歟ともおもへど猶さにはあらじ按るに【三十二番職人歌合】桂女が歌作風にわかめの桶をいたゞきてたちともつじが化を折かな桐洞云布のひとへきぬながらつじか花をゝるとあるよくいひなされて聞ゆ云々【貞徳御傘】につじが花もつゝじが花といふことを中略したる名なれどもあかきかたびらの名に成たれば云々御傘の説は赤きかたびらをいひ習へるをもてつゝじか花といへるは本義にあらず誤なるべし目結は俗にいふ鹿子なりその目の正しく並びたるは即辻にて八十の巓あり今の鹿の紋といふ紋これ辻が化なり（後ながら【徒子集】（七）帷子染みての後の紅粉染や桔梗辻これは藍と紅との色を合せて桔梗辻と工みて作りしのみならず鹿の葉といふ紋を其頃も桔梗辻といひしなるべしその形桔梗笠の名などおもふべし）辻灯籠はこのかたにて即今の切子燈籠なり又に云今茶屋辻といふは茶屋染の辻が化なり鎧胴々図の【安吉染】に茶屋染といふは昔のあしで模様なりといひしつじが化のことは見えずあしてには辻もあるべきなりもと茶屋染は官仕浮模様をいひし歟そのかみ時行み茶とより茶の色に品数多き物なれ

切子燈籠

より十七日に終るといへり其間朝より夕まで毎日市あり蠻夷の商旅みな集るいと繁華のよしなり）

七月燈籠

○七月の燈は【五雜組】に宋初中元下元皆張燈如上元之例太宗淳化年中始罷之と見えたりこゝには【日次紀事】云凡中元用燈籠起於寛喜前後至今相承爲故事【定家卿明月記】曰近年民間建長竿其末梢設燈籠貼紙擧燈近共看之其數多似流星人魂といへり【明月記】此條は寛喜二年七月庚寅十四日なり是によりて寛喜前後に起るとはいへるなるべし但し民間のみにて堂上に用ひられし事はやゝ後のことなる歟されども【平家物語】に小松內府東山に四十八の精舍を建て四十八の燈籠を點ぜられしかば燈籠の大臣と稱しける事あり（【京羽二重織留】に內匠堂寺町四條下る淨教寺本堂は古代のものにて其結構凡工の及ぶ所にあらず云々此堂もと七條にあり世に燈籠堂といふ予思ふに平重盛公東山阿彌陀の峯に堂を作り阿彌陀の像を安置し每夜數百の燈籠をともすよつて燈籠の大臣といふ其本尊今山科の小堂にあり是堂恐らくは阿彌陀が峯の燈籠堂歟といへり）【明月記】にいへるは今も七月寺院に用ふる高燈籠なりこれを揚燈籠ともいふにやとうろはみな釣ものなればしかいふべし【宣胤卿記】文龜二年七月十四日壬寅晴燈樓一ツ（分注に）水中蟹屋上鳥有人持鉾挾蟹東坡詩怒移水中蟹愛及屋上鳥有本文同永正十四年七月十四日朝小雨則晴右少辨谷中納言進燈樓（分注）辻燈樓松殿相公來烝供如例云々同十五年七月十四日晴小雨大納言燈樓一進（分注）松葛有臺歌の心禁裏每年儀也云々とあり詩歌の心を畫にもかき作りものにもしたるなるべし是猜燈なり猜燈のおもむきは徐禎卿か【翦勝野聞】に太祖嘗于上元夜微

猜燈

行京師時俗好爲隱語相猜以爲戲乃畫一婦人赤脚懷西瓜衆譁然帝就視因喩其旨（謂淮西婦人好大脚也）甚啣之明日命軍士大僇居民空其室蓋馬后祖貫淮西故云（明の太祖の皇后馬氏の祖は淮西の人なり漢土は宋の代よりのならはしにて婦人は纏足にて幼少より帛布にて足を括りて成長せざらしむ足の小きを

しよんかん

美とするなり淮西のあたりは古風にてさる事もせぬ所なれば赤脚(スアシ)の婦人をかき西瓜にて淮西をさとら

嬉遊笑覧卷十下

火燭（切灯臺　結灯臺　高杯　菊灯　灯呂　漢土灯市　七月灯籠　錆燈　辻灯籠　つし花　切子灯呂　桂松　たちあかし　車松明　蠟燭　燭臺の頭　紙燭　ほゝつき挑灯　かしらの行燈　たばこやの赤あんどん　廻り灯呂　戴灯呂　櫻灯呂　影繪　ぼんぼり　遠州　箱挑灯七月用　地口行燈　初午燈）

火燭

切燈臺　結び燈臺

古へは蠟燭なくみな燈油を用ゆ【源氏物語】梅かえにおほとなぶら短くまいりて【花鳥餘情】に切燈臺にすゆるなり【孟津抄】に本のは一間ほどあるなり此切燈臺といふは結び燈臺を低く作りたる故に切燈臺といふなり本のは一間ほどあるとは常の結び燈臺をいふ其狀大嘗會の圖中に見えたり丸き木三本を柱とし上には土器を置ほとに開き下は鼎の足のごとく開きて立中を紐して結合す下に敷物あり【枕双紙】まさひろか事をいふ所除目の中の夜さし油するに燈臺の打敷を踏てたてるに新らしきゆたんなればつようとらへられにけり云々又同双紙所々に高つきに火ともすとあり是今の菊燈臺の製たるべし食盤の高坏に似たるなり

高杯　菊燈臺

燈籠

の燈籠は古へ常に用ひたり下におく事はなく上にかくる料の物なり物語ともに多く見えたり此上には

漢土燈市

正月十五日の夜（是を上元といふ七月を中元十月を下元とす皆十五日なり）燈を家々にともすこと漢代より始れるよし【事物紀原】にみゆれど燈を觀ることは唐睿宗の景雲二年正月に始て盛なりと傳に見えたり【帝京景物略】にも景雲二年燈の始にて上元三夜は玄宗のとき十五前後二夜を加へ[illegible]六夜となりしは南宋淳祐三年上元十夜燈は我朝永樂に始る八日

たる多く【本草別集】に載たり又近年【蔫錄めざまし草】等の書あればそれらのことはみな省きつ

嗅烟草

○一種嗅たばこと云もの有り其器物紅毛の細工にて犀角瑪瑙などに金銀を飾り精巧に造れる物あり(其形圓扁にして昔の薄き鬢木入の如く蓋は蝶つがひなり)【香祖筆記】近京師又有製爲鼻烟者云可明目尤有避疫之功以玻瓈爲餅貯之餅之形象種々不一顏色亦具紅紫黄白黒綠諸色白如水晶紅如火齊極可愛翫以象齒爲匕就鼻嗅之還納于餅皆內府製造民間亦或仿而爲之終不及これまた鼻飲のたぐひなり【秋坪新語】天主堂にて鼻烟をもらひてかへしことをいへり【烟草錄】(嘉慶庚辰刊本)【金川瑣記】云喇嘛僧善拾烟草口內咀齕不用烟管時々手搓少許納鼻中蓋俗尙鼻飯也また此書の內に舒位が蘭州水烟篇あり

水煙

又水煙のことを注して云案蘭州五泉產水烟云々嗜法製小銅壺狀似雀葫蘆等式腹貯水實於壺背之管撮火吸之作隱々聲其壺約高二寸許吸管自四五寸至三四尺不等今戲園茶肆廣場名勝遊手以裝烟㓮客爲糊口計者偏地有之不獨吳中然也聞烟中有砒以解水濕然久嗜之其毒入腦鼻中滴血亦最傷脇絡以喉間呼吸傷氣故也(先つとし予が家に近き田舍より來る下女ありしが常にかくして烟草を咀めり)

異さまなる烟管

○近頃異さまなるきせる出きぬ鴈首吸口は常の如くらうの處內ははりがねにて卷たるにや表はちりめんなどのきぬにて包めり長さ五六尺より一丈に至るもあり繩の如く卷きも伸もすべし遊山などに携へて木の枝に打かけまどひ付ても烟草を吸べし只一時の興にて脂をとをすこともならねばやがて廢りぬ横谷宗珉は彫刻の名手なること世に知る處なり烟草をすきしかど脂のらうにつくをきらひて日毎三四度づゝらうをすけかへさせしとかや打聞ては奢侈のやうなれどそのらうは葭を用ひしとなむされどもこは一癖なり人にすぐれたる處あるものにはかやうのこと有ものなりわろきくせと云にはあらず

烟管通し

○きせるとをしといふもの昔もあり貞德が【油嘉須】におれずまがらずとをらざりけりきせる洗ふ鯨のひげの短くてゝ有り今はりがねにて造れ共古製の如く鯨鬚にて造らばよからん

長烟管

まはしもどし良久して幾度もかくせしに座中の面々興を催す云々【秋坪新語】に呂萱精妻某氏鼓咏長烟筒詩名個長烟袋牧童放不開伸時窓紙破鈎進月光來きせるをきせりこも云り【佐夜中山集】金鍔は月

烟管の鍔
鍔の輪

に猶はたかゝやきてたばこきせりも共に新らし昔の烟管に鍔あり（鍔は取置になる是は吸口の際に付さる僞なるべし古圖にみゆ）【洛陽集】に若烟草阿彌陀吹出すや孤雲の輪（如風）【風流旅日記】山科殿の下烟草の名物此きざみを吞で輪を吹ばたゝやつときえず云々

刻み烟草賣

（二【我衣】に云貞享年中にて刻たばこ見せ賣ばかりにてせり賣なし葉烟草を調へ手前にて刻むなり然れども若き女中などは脂ふかきを嫌ひ刻たばこやにて色黄なる和かなるを調のみたり元祿中より刻たばこせり賣出る（箱の圖あり引用し多くありて提るやうにしたる箱なり）其後元文中神田鍋町に叶屋と云ふ刻たばこや荷なない箱にして六七荷出て江戸中を賣弘めたり寶曆年中には刻たばこ荷ひ箱となる（或人筆記に云我等幼年の頃（寛保）は樂簞笥の樣なる箱に引出しを付其内に仕切を入れ二行に刻烟草を入わらび手の環ありて此を肩に片かけにし通行して賣る右の環かちや／＼と鳴に因てかちや／＼たばこと云り此者五十ケ年以前より絶たり明和の初を云ふ又云我等二十歳頃迄はたばこ刻みやう五分切と云てあらく刻むを伊達こす近年は至てほそく糸の如く刻む別て近頃はこきの木口をこすりてのみ見ゆるをこすりこ云て賞美す）提る箱も稀に殘りたる今も有べし本所四ッ目の青物市に毎例その箱を提て出る烟草屋有り（忠兵衞といふ老夫なり）黄なるを薄色といふ（六七年間）にせきの小まんちやうす色をのむといふ何有り昔はたばこのむ女稀なりしとぞ【嬪容儀草子】に昔は女のたばこ吞むこと遊女の外は怪我にもなかりしことなるに今たばこのまぬ女こ精進する出家は稀なりと云り漢土も亦然り【華[illegible]野乘】明末崇烟有禁厲閩人効而習之他處百無一二也近日賣于街見其盛敎化偏遠婦婢僧尼咸嗜且好與城市販之口而消長鄉村支婦病明了嚴之復則偏滿閭閻大小俗鄉人咸有不知其然而然者多矣粉の流弊に見え

薄色

令民間私種者問徒法輕利重民不奉詔尋令犯者斬然不久因邊軍病寒無治遂停是禁予兒時尙不識烟爲何物崇禎末我地徧處栽種雖三尺童子莫不食烟風俗頓改（崇禎癸未はその末年にて本邦には寬永の終りなり）○太閤の時の落書に大中庵立志云誹人きかぬものたばこ法度に錢はつと主のみこゝにけんたくのいしや是は正德四年八十二歲になる鎭目正順と云人の物語なりたばこ吸事被禁斷畢然る上は商買者とも見付候輩は双方家財を可被下也若又於路次見付に付てはたばこ幷賣主を所に押へ置可言上則付たる馬荷物以下改出す者に可被下事但何地も烟草作べからざる事右之趣御領内へ急度可被相觸候此旨被仰出候者也仍而執達如件慶長十七年八月六日其後慶安四年辛卯町觸に烟草呑候處家内に定め置候て其場所より外にてたばこ呑ざる樣可仕事

花山たばこ
烟草の禮式

○【大和本草】に初め山州花山に刻み賣を花山たばこと云ふ又吉野に植ゆ後に丹波に植たり始めは竹の筒に入て火を吸ひしが後に眞鍮のきせるを用ゆ受取わたしの禮あり今は其禮廢れたり（【昔々物語】云昔は懷中烟草入といふことなく善惡共に亭主の烟草盆に入たる烟草をのむ今とは違て亭主座敷へ出る迄は不呑して亭主物語して烟草まいれと薦む時客は先亭主よりまいれと盃茶の挨拶の如く二三度もいふ其時亭主鼻紙を取て烟管を取り鐔をはづしきせるを紙にて拭ひ是にてまいれと差出す客取て戴きて呑なり烟草よくば譽る一服二服も吸て拭て我前に置き歸る時鼻紙に拭て烟草盆に入れ暇乞して立時亭主其儘差置れよと云近年は左樣にあらず不作法千萬なり）【百物語】或人たばこを好り此人烟草には十損ありとて十首の歌をよみながらひたのみにのまれける其歌云々四しやひきやくいぞく使に日を暮したばこ故にぞはなはつきける五はつこは天下にかくれなき物をそれを破りてのむはくせもの【擲草】

きせる廻し

（寬永廿一年の撰）一人は手もとにありしきせるの眞中をつ取り一ツの指先にてきり〳〵とまはし（昔のきせるは今の番きせるよりも長し）火ざらの中まではしもてゆき又のみ口（今いふ吸口）際まで

筆】に京師にては吉事に白強飯を用ひ凶事に赤飯を用る事民間の習慣なり江戸は上にて四月より八月迄白強飯九月より三月迄赤飯を御用なりとみゆと有り又黄飯は瀬戸の染飯是なり【東海道名所記】に藤枝の瀬戸の染飯は此處の名物その形小判程にしてこはめしに山梔子をぬりたりうすきものなり只し食料に作りたるにはあらずと見ゆ光廣卿の歌につく〴〵と見てもくはれぬ物なれや口なし色のせとの染いひ）

白強飯　赤飯・瀬戸の染飯

【庖丁聞書】式數品々の事鮑（海草）鱸（榎葉）鯉（桃花）生鱈（庭床）鮎（蓼葉）雁（水草）鶴（蘆葉）鴨（蘆）鴻（おもだか）鶉（振後）雲雀（地草又蔦芝草）右之外鳥魚によらず精進を數へし又年頭の式數といふ事あり口傳とあり何によりて箇様に定めたるか聢來なし口傳と云ふ年頭は鳥柴なるべし【調味故實】に見ゆ木は何にても鳥を付たる木を云にや膳頭のかしきは前にいへり改飾といふも假字書なるべし古くかいのかなを用ふれと誤なるべしかひにて飼と同意物のあはひに挿むをかひ物といふ是なりくわへさすることなり

倒れ喰

○俗諺に江戸の喰倒れといふはもささにあらず【元祿曾我物語】に實にまことに京は着てはて大坂は食て果るとかや云々此をとりたるなり

烟草

　烟草　烟草の儀式　きせる廻し　長烟管（銀）煙の輪　刻み烟艸賣　薄色　嗅烟草　水煙　烟管掃

○烟草は慶長十二年の頃はやりて其種を長崎櫻の馬場に植しとかや【望一千句】にたばこやも君の御恩や思ふらん治れる世の末も長き或書に其頃の日記に此ごろ多葉粉といふことはやれり是は南蠻より渡りたりといふ廣き草の葉をきざみ火をつけて烟をのむなり慶長十四年に[illegible]とて徒者京都に充滿す五月中七十餘人捕へられ頭たつもの罪せられ其餘は免さる組頭を名門といへり此者其多葉粉より組をなしたるといへり此によりて多葉粉を禁せらる其時のきせる大にして腰にさし又は下人にもたせたりとたむ【蚓菴瑣語】烟葉出自閩中邊上人寒疾非此不治關外人至以匹馬易烟一觔

手にとりて見よとあり云々【和名抄】に櫟をいちひと訓し松尾の攝社に櫟谷をもいちひだにとよむからは往昔より櫟をいちひと云か俗なるべしいちひのかな中頃よりいちゐとかけりといへり按るに【和名抄】木類に櫟なし【日本紀万葉】等地名にはあり【古事記】には赤檮をよめり

榧の左巻

○榧【一代女】（五）手元には塵籠もあるに栢の殼をたばこぼんに捨云々かやのみは吉野高野を名産とす吉野がやは左巻なり【懐子集】左巻をよしのよく見よ吉野がや（玖也）

玉づさ

○玉づさ【料理集】に玉章はからす瓜のさねなりきんふんしごもいふたまりにていりあげてよし其外あんにん桃仁くろ大豆から皮生姜なごも加へてよし【佐夜中山集】玉章は添ずとをくれ烏瓜

氷豆腐

○【貞德文集】御威嚴之氷豆腐一篇給候今頃佗數奇茶請之事闕候境節御芳恵之段不知所謝候

ころ柿

○ころ柿乾たる柹をならべていふに非ず【雍州府志】に宇治にて秋の初めに小き澁柹を採皮をむき蔕をとり繩につるし陰乾にしたるが圓き故に轉柹といふこいへり

かひ鋪
くだ物いそぎ

○かひしき。くだものいそぎ【源氏物語】あづまや尼君のかたよりくだものまいれり篙のふたに紅葉つたなごをりしきてゆゑなからずとりまぜてしきたる紙にふつゝかに書たるものくまなき月にふとみゆればこゞめ給ふほばにくだものいそぎにぞ見えける」此は薫が弁の方よりの歌に目をこむれば菓に心の移るやと見ゆると草子の地のたはむれながら此俗諺ありしなるべし又あげ卷にあじろのひをも心よせ奉りて色々の木の葉にかきまぜもてあそぶ云々是もかひしきなり【調味故實】しぎの別足を包むことの處下はをしきなりつゝみたるはこうばいだんしかいしきの葉はなんてんちく也云々ふるくより南天は難轉の名詮にて鏡の背のもやうに付又手水鉢の旁に植る（【甲陽軍鑑】（九）勝時を行ふ處になんてんの御水入と有などによるか）【一代女】（四）泉州堺の處に湊の藤見に大重箱に南天を敷て赤飯山の樣にして行ます云々昔よりおなじ事ながら赤飯の弁當今は繁華の地には稀なるべし（【萩原隨

山女

○山女【今昔物語】(卷五)猿は木に登て栗柿梨子棗柑子橘柏椿郁子山女等を取て持來れり【散木集】連歌に山女をみて仲實けふみれば山の女があそびけるつく野のおきなをぞやかむとおもふに【新撰字鏡】に蘭開香山女也阿介比【和名抄】蘇和名上古呂漢語鈔用野老とあり【油かす】に山のおくには何笑ふらんまつかいに見ゆるあけびが口おきてとある蘭は蕕を山女の陰にとりて作れる字と見ゆ山女と云も其意なるべし【空穗物語】こしかけ卷ありしわらはいできぬれいのいもところやきてうじとらてせてうせぬ

一位の實

○【發句帳】にしるよりやへあがりてなる一位の實(親重)【夷曲集】に吉總卿のもとにて櫟の葉三方にもりて出けるに狂歌とおほせければよみ侍りし(行風)百敷のお座にいちゐの葉こそ公卿のうへのくらゐ物なれ本草家の說に櫟はくぬぎなりいちゐは櫧の類にて【御武府志】に載たる行櫧といふ物なり葉飼栗よりも厚く皿橘よりも小く葉の背に白き毛あり實には櫧の實の長きが如く味柯の實に近し凡櫧の實は味苦澁にして食ふに堪ずいちゐばかりは食はるゝなりといへり又飛驒位山の一位は櫟なり【和名抄】に唐韵云櫟(背表漢語抄云佐久木)木可爲笏とあり笏に作る故に是を一位の木といふ上野にて蘇枋の

櫟サクの木

木信濃にて紫すはうと云ふ木理直にして色赤し故にすはうの名有り葉はきやうぼくといふ木に似て長し【古事記傳】に白檮と書るを白字によりてしらかしと心得るは非なり唯かしなり【日本紀用明卷】に赤檮此云伊知毘とあれば古へ赤檮を伊知比にあてて白檮をかしにあてたりしなり然るにかしに白かし・赤かしとある故に白檮赤檮の字それに紛れやすし又檮字は多く伊知比に用ひたるに此をかしに用ひしこともありしにや近江國の神社の名甘檮などは必あまかしとよむべけれとなり云々といへり【[illegible]筆記】笏に一位の木を用る事【八雲御抄】山くらゐ山飛驒六位笏木作之由也云々又【三玉集】飛驒國の位山にて基綱卿位山の一位の木を笏の料にのぼせられし時御こたへに位山峯のかき道我こえし道をば君が

みづから昆布

にや【細流抄】に海草なるべしとありかやうの物古く果子に用ひたり京難波にて昆布を用るは古風なり其内山椒を包みたるを菓子とすこれをみづからといふ【油煮須】におもふ儘にはいはれざりけりみづからのこぶの鹽しむ爪はらみ【懐子】おもひ出る人まつ前に數奇心むせふもうれし昆布に山椒【をこえたり】草に昆布にて製するみずがらといふものあり元山椒を入て製せし故の名なり不見辛と書ておもはざるの外に辛きものといふ名なり今は唯焙爐昆布をみづからいふはあたらずと云り古くもみづからと書たればあながち山椒の有無にはよらず果子として食ふ昆布をいふ水より生ずる物といふ意にても有べし其製色々あり【松落葉】昆布道成寺といふあづま上るり有り朝夕むねをやきてふやゆふかゆはぬかかもしこふ心にこてめ結びこふ云々古き物名の俳諧に蓬萊の山はこふかきこころにや【落くぼ物語】あこぎと云ふ女御厨子にかたらふ處雨にこまりてまだかへらぬにかゆくはせんとおもふをなくて土器少したまへさてはひきほしなどや殘りたる少したまへこいへば云々かたはらなる瓶子をあげてたゝとりにとるひきぼしをとるなり昆布などにもあるべし

國土の果子

○國土の果子【寛永發句帳】ほり出す國土の菓子はところかな（幸和）【佐夜中山集】しばらくも國土の恩は忘られず主の手よりも下さるゝ菓子（良庵）【吾嬬物語】山海の珍物國土のくわしなどいへるは一物をいふにあらず【新撰狂歌集】內裡さまおくわしに事はよもかけじこくしそうじやう種々のなりものこくしとは國土の菓子にや又穀子にて廣く雜穀をいふ歟【松葉】永閑ぶし寛活一体とたらくさんの大山ぶしむせうほゝひげぶにんさうこくとのべにをぬりちらし又【土佐節草摺引】長者のもとに打よりてこくどの魚のいぢりぐひあとはらやますの大ゆさん云々是等もこくどゝは天下といふほどの義なり今は一種こくどの菓子と稱する木の實あり此木江戶にはなししら木といふ物にて圓葉柹の葉に似たり實の形丸く中に仁みちたり熬てくふに榛より味劣る多く喰へば下痢すといへり

するとき五色さま〴〵に染む故京師の小児これを庚申の七色といふも彼菓子色々あるにたとふるなり又思ふに今もある十色菓子とて飴にて作りたるものも七色より思ひよれるなるべし

煉羊羹
○茶の湯の口取に煉羊羹うばたまなどは紅粉や志津磨始て製す寛政の頃よりなり

南蛮菓子
○南蛮菓子はほうるの類なるべし万治年間振売の物の内にあり（商売の条に出）【伊呂三絃】に揚屋に行三ツ取合のなんばん菓子を一人に一斤あてにあらし云々凡菓子何にても沙糖を衣にかくるをてんぷらと云鍍語なるべし小麦粉をねりて魚物などにつけて油あげにするをも云は其形同じければなり

てんぷら
てんぷらはこれもと寶石の名なるべし其さまに似たる故の名にや【五雑俎】（十二）今世之所宝名行猫児眼祖母緑顆不刺蜜蝋云々また下文に紅刺一顆重一兩以上即価値千緡然亦不可多得といへり【物理小識】に猫睛一名紅琍とあり

百一口の菓子
○【東海道名所記】島田の緑門の内より半町あまり南へさがる右の方は茶屋なるやうかんそば切やき豆腐其外百一首の菓子あり百一とは数の多きをいふ【釈氏要覧】道具総百一物大概之称也【論衡多論】云百物各一首一也今江戸にて澤庵漬の樽に塩干の茄子を入て漬るを百一づけといふも唯数の多く入るをいふなり冬瓜の花の色一はむだ花の多きをいふ百一口の菓子は小きをいふなるべし今いふ南京らくがんなどにや

ひきぼし　みづから　昆布　団十菓子　一位の實林サタノ木　榧の糸巻　玉章　氷豆腐　ころ柿
かひ餅　くだ物いそぎ　白強飯　くへ割れ

ひきぼし
【源氏物語】手習　中将小野の尼きみのもとにとふらひし處人々にすいはんなどのやうの物くはせ君にもはすの實などやうのもの出したれば又【夢浮橋】ひきぼしたてまつれたりつる返事に【宇治拾遺物語】ひいろのおしき四してひきぼしくだものなど云々【尺素往来】に砂糖饅頭薄付等云々とあるは大根の引干

あるものは羊肉のあつものなり菓子の羊羹は羊肝糕なり求肥ももと牛皮糖なると同じ獸を不潔とする故これらの字を書改めしならめど羊字をかへさるはいかが又羹は糕と同音なる故糕といふべきものをも誤りて羹とかけり

正德中の菓子とも

○【和漢三才圖會】に載たる果子ともはゝるていまがりぼうる（みな花ぼうるの類なり）すはまゝめ飴人參糖あるへい糖（毬のやうにふくらしたると今いふだてまげも有り）かるめいら（今の製とは殊なりすあめのやうに引たり）唐松あはび（今大黒に供ふる七色菓子はもと庚申の菓子なり此類にみどりといふあり【夷曲集】にときはなる松のみどりも春くへば今ひとしほの菓子のあぢはひと見ゆ）衣榧（源氏かやとも云なり）松の綠（上に出たり）達摩隱（此も同類に今も有り）ちまきまんぢうらくがん白雪糕粔籹餳羊羹外郎餅求肥加須底羅糖花小鈴（糖花の小者とあればこれ今の金米糖なり然らば糖花とあるは今の大平糖なるべし後に小鈴といひしものは霰餅に衣かけたるなり名は同くて製かはれるにや今は是なし煎餅（鬼煎餅なり）松風松風とはうらさみしきの義なりとぞ裏の方白くして紋なければなり美作米饅頭大福餅（はらぶとなり）金鍔たんきり飴打ツ切り豆板大捻等なり今のよき菓子ともは大かた（正德五年）昔なかりしものなり求肥も元牛皮なるべけれどいやしく聞ゆる故文字をかへしなるべし羊羹なとをかへざるはいかにぞや唯駄菓子はかはらずそれも今は品數許多にて枚擧に遑あらずよからぬものを駄といふは乘馬にならぬ駄馬より云にや祐信が畫の【謎の册子】にかうしんのもりものとかけて辨慶とこく心は七色かたてもの又蛇葡萄の實のさまぐ\の色になるゆゑ田舍にて庚申の七色と云も彼もりものによりてなり

七色菓子

○七色菓子今は甲子に大黑へ供ふれどももと庚申に供へしなり【洛陽集】庚申夜白悦が句一說に七色賣や呼子鳥とあり昔はこれを賣者來れり一錢にて七色を具す【難波鑑】などに圖あり野葡萄の實は熟

之子孫果合めづらしきやうなれど今正月の蓬莱などの果子ども食ふ者なきやうになりしは算木餅もおなじかるべし

青ざし

○青ざし【春曙抄】九青麦にて調したる菓子なり【枕双紙】三條のみやにおはしますころと云ふ條にいとおかしき薬玉ほかよりもまいらせたるにあをざしといふものを人のもてきたるを青きうすやうを艶なりすゞりのふたにしきてこれませごしさふらへはとてまいらせたれば（万葉）十二ませこしに麦はむ駒の云々）皆人は花やてふといそぐ日もわが心をば君ぞしりけると紙のはしを引やりてかゝせ玉へるもいとめでたし后宮の御歎みな人は薬玉の細工急く端午に清少は青刺を進らせて満足となり【芭蕉發句說叢】青ざしや草餅の穂に出つらん【句解】云青ざしは麦を煎て調したる菓子なりと上臈もきこしめすにや【枕草紙】青ざしと云物を人のもてくるを云々【二夜問答】に云此句意は麦の穂のわかきをすりてすこしくものを作る故にそれがほと成て出つらんと云意なるべし時節の観想なり【夏山雑談】に青ざしと云ものは青麦にて製したる菓子なり古へは高貴もめされたる物なり今民間に用る青ざしもこれなるにや

金餅糖

○金餅糖【永代蔵】南京より渡りて仕掛色々せんさくすれども成がたく唐目一斤銀五匁づゝに調へけるに近年下直なる事長さきにて女の手わざに仕出し今は上がたにも是にならひて弘まりける胡麻一升を種にして金餅糖二百斤になりける一斤四分に出来ける物を五匁に売ける云々昔は胡麻を用ひざりしにや物の価今とはいたく異なり

落雁

○落雁【菓子話船】に軟落甘といふは此の名なりこの軟字を略して落甘といひしをやがて落雁と書ことゝなれり【瓊山井】落雁をみせぬかすみの菓子袋（直久）

羊羹

○今の羊羹は昔の羹に非ず別物なり[illegible]といふもなり【宋書】[illegible]云々

算木餅

所にこゝにちい／＼ちや／＼うるもの有り色鳥に染餅を小串にさしこ云へりしんこ馬の類にて鳥なと作りしは飴の鳥の形なるべし色鳥にとは鳥に作りしなるべし然らばしんこ細工のもとゝ云べし又は色どりと有しを鳥こ書しもしるべからねどいづれにも是又餅はなゝり其始は吉野の御福の餅に倣ひしものと見えたり餅はもとより福の名あれど（【埃嚢抄】などにそのよし見えたり御福とは何にまれ神佛に供へたるおろしを給はるをしかいへり【著聞集】に鞍馬寺の別當すゞを人のもとへつかはすにこのすゞは鞍馬の福にて候ぞされはとて又むかでめすなよすゞは小竹なりこゝはその筍をいふなりこはそなへものならぬをも其地に產する物は福こいひしなるべし蜈蚣はくらまの使者といひ習はすこれをさへ福こもいひしとみえて此歌あり【長崎歲時記】諏訪社夏越祓御祓だんごとて門前より坂下に至るこれを賣だんごを串にぬき或はひさかきの枝に紅白黃の小きだんごをさしたり老婆兒子みなこれを買てみやげとす又六月朔日市中家々鱠をし氷餅とて正月のかき餅を貯へ置此日臺に盛り客の至る毎に是を出して相祝すとあり燒よしをいはざれば其儘用るにや見るばかり物にて算木餅の類なる歟

○算木餅【鹽尻】に伊勢宇治邊は年禮の客來れば先折敷にさんきちやかとり二寸ばかり割たる木二三枚はらにて結びたるを置田作かうじなどをまじへこれを年始の饗とし次に茅かしら三ツ椀に入て寶珠こいふこれをするわたし小紙一帖を以て引出物とす家の貧富により紙の大小多少ありといへり（紙をつかはす事京師にても贈り物もてくれば其使に半紙をつかはす大かた一二帖なり是古の祿物の遺意なり江戸にはうつり紙一二枚に過ぎ下總市川の邊にて新婦其近隣へ近付とて初てゆく土產に紙一二帖もてゆくなり）さんきちやかとは算木茶果なるべし伊勢ばかり風俗にはあらぬにや【花摘集】元祿三年七月十七日算木餅を文字にかさぬる灯呂哉（東順）これは其角が父の發句なり灯籠の組子をいふなりもと茶果も漢土に其製あり祝允明【猥談】江西俗儉果楂作數格唯中一味或果或菜可食餘悉亦以彫木謂

五分深さ二寸の箱に入て固む上に栗五ツを五角に置て蓋を蓋ふ云々木代村邊皆山城八幡の神領たり因て善法寺より捧之こいへり

花ひら

花のだく物

○花ひら【山家集】にみやたてと申けるはしたものとしたかくなりてさまかへなどしてゆかりにつきて吉野に住侍りけりおもひがけぬやうなれども供養をのべれうにこてくだものを高野の御山へつかはしたりけるに花と申くだもの侍けるを見て申つかはしけるをりひつに花のくだものつみてけりよしのゝ人のみやたてにしてと有くだものゝ圓扁にして花瓣に似たるなり吉野にて春の頃花餅とも御福ともいひて賣ものは竹串を半迄團扇の骨のごとく細く裂たるに小き花びら餅をさしたるなり（江戸にて近ごろ諸佛の縁日には辻に出て賣ものあり是なり下にいふべし）これはもと吉野に華供といふ事あり又歳首に藏王權現に備へたる餅を碎き他の米を加へ二月一日本堂にて諸人に施し又山中の僧俗に背く賦る是を餅配といふ委しく【滑稽雜談】に出たり【山家集】に花のくだものと云るは是なり【洛陽集唐】餅くばりおくれじ吉野山（友靜）吉野山去年のしんこや餅配（自悦）もろこしの吉野といふ枕詞をあやなしてもろこし餅にいひかけたり

ちまき

○ちまきは種々に製すれどもよの常のは角黍の名に似合ず越後などにて作る篠ちまき又長崎にて作る竹の皮ちまき三角なれば其形かなへり

宮笥

○【山家集】にみやたてといひしはみやげのことにいへり今もみやげをみやとのみも省きいふみやたてとはみやげたつ物にてみやげめけるなりおもふに土產をみやげといふは宮笥にて王都より鄙へもてゆくをいへり都のつとにいさといはましをと【源氏物語】にも見えたりそれよりして神社などある處よりもてくるをも通はしいへるにや是を伊勢參宮より出たる詞とするはせまし（【貞德文集】爲北國宮笥鮭墟引云々又爲長崎宮笥糠詰鷄卵云々）花びらと云もの外にも有り御傘に花びら僧衆の紙にてまろく

是も中世の武士矢口祭の黑餅を以て家紋とせし由或書に見侍りしといへり【東鑑】(十三)に山神矢口等を祭らるゝ事ありて矢口餅とも能祭餅ともいへりされど矢口はもと山口なるを其義を借て矢のかたには矢口とはいひしなるべし【源氏物語】松風卷かくこそはすぐれたる人の山口はしるかりけれ云々【細流】に物のはじめを山口といふなり伊勢造宮の時も山口祭あり又鷹狩にも先入ところを山口といふなりと有り又亥は猪なりといへば狩場の式を用ゐるといへるはうけ難しこは亥を野猪と心得たりといふは大なる誤なり亥は家猪にて豚なり引證にも及ばぬ事ながら【協紀辨方書】(乾隆六年)卷一【叢海集】曰十二宮亥子云々戌亥陰數而持守狗爲盛猪次之故狗猪俱戌亥狗猪者蓋謂之物也ともいへりさて【下養集】にいへるいぬゐ餅とは其名のよしも辨へされど白き黑き色々とは蓋日祭の餅にならひし物とはいふもまた黑餅の紋の說もいかゞあるべきもとよりその餅にかたどらば拍子木のなりに黑くすべきをさもあらぬはいかにぞや凡餅こは淡上にても丸き形のものといへりよりて黑く丸きものなればしかいへるにてこともなかるべし

○玄猪【麓柑子】に或人近衞公に召れて御茶御菓子を賜りぬ碁石の形して色々染たる餅きのふの御玄猪なりし嘉定供御の餘りなりとぞ丹波にの世郡氣多の庄より御玄猪備へ奉ること例歲是より是ぞ行ふ【安齋隨筆】にたゞ玄猪の餅のことなり碁石の如くしたる餅なり京都將軍家の時より御たりきりと云ふ【蜷川親元日記】其外其時代の記にあり將軍御手づから碁石を持つ如くに指二ッにはさみて諸臣に賜ふ遠國に居て在京せぬ人には紙に包みて賜はる紙は引合せ金銀泥にて菊しのぶいてふの葉を畫く切はぐらせたに菊しのぶいてふの葉を散しきにして餅六七ッ計り入て包む包み樣有賜る人の名を書付る禁中にては如此又當時代御嘉通とも云ふ御玄猪の餅なり能勢郡は津の國なり木代村はこゝ語の北山にあり門大夫といふもの數代住居して舊例にて毎年亥子餅を舂らす赤小豆を搗まぜてはゞ四寸ばかり大サ

玄猪の餅

御飯丞

臥饅頭　姫饅頭　洲濱　豆飴　いぬま餅　矢口餅　亥日餅　黒餅の紋

に淺草金龍山ふもと屋鶴屋と有り【紫一本】に根本は麓の鶴屋うみぬらん米饅頭は玉子なりけりといへるをみればもとは鶏卵の形にしたるか但しもとより今の形なるを狂歌は鶏子にとりなしたる歟【江戸土産ばなし】爰の山の麓のよねまんぢうは江戸にかくれなき名物なり一とせの小歌に金龍山で同道しよもどりがひもじかよねまんぢうとうたへりされど【料理物語】にけいらんはもち米六分うるの粉四分をこね黒砂糖をあんにしてきんかん程に丸めゆでゝ汁はうどん同前（これ後世けいらん温飩とてうどんにて製す）【物類稱呼】筑紫にて鶏卵といふあり江戸にていふ米まんぢうの丸き物にて今江戸にてはいまさか餅といふに似たり然らば金龍山にて賣しころのはこの形なるべし又漢土に臥饅頭といふは今よの常の饅頭歟其故は饅頭はもと丸きものなりひめまんぢうは今の花もちにや【矢の根鍛冶後集】よき作意とて譽られにけり先假りに姫まんぢうの釘隠し但しまんぢうの小さきを云か花餅は前に見えたるさゝ餅なり

○すはまは洲濱にて其形によりての名なりもと飴ちまきなり麥芽大豆を粉にしてねり皮に包みたる物なり又豆飴ともいふとなり今も大豆粉を飴にて煉り茶食とするもの是なり

○いぬ餅【卜養狂歌集】いぬま餅といふものを出しけるに痛き黒き色々の餅なり云々按るに【鹽尻】に武將の御狩の時に山神祭矢口祭といふ事あり折敷一枚盛餅三色餅數九枚黒餅三左赤餅三中白餅三右餅長八寸廣三寸厚三寸右三枚折敷如此調進也射手蹲踞して白餅を取て中に置赤餅を右に置其後三色各一ツ宛取り重ね（黒は上赤は中白は下）座の左に候して山神を祭る次に又前の如く三色を取り重ねて白三口食す（始餅の中に左廉次に右の廉）次に微音に矢聲を發す次に盃酒其外故實多し傳へて知べし【東鑑】にも此事あり按ずるに今世十月亥日餅黒赤白三種（朝廷如此）調進す亥日餅は唐の風といへども餅の製は矢口祭のする處に似たり亥は猪なりといへば狩場の式を用ひ來るにや又衣幕の紋に黒餅あり

杉原もち

○【寛永料理物語】に杉原餅と云あり杉原紙をよくむしりうるともちよの粉を四六に混てこね合せ製し六月用ゐ由いへりよりておもふに【著聞集】にふさだの習了房と云者能書にてありければある人【古今集】をうつしてたべとあつらへしに程も昔さりければ主かさねて今は只かゝずともかへし玉べしと云ければ習了房こたへけるは過にし頃胸病をつかうまつりし紙多く入り候ひて料紙をみな用ひ候なりと云ければぬしいふばかりなくおぼへて本は候はんそれをかへし玉へといひけるに習了房其ことに候其本をも紙みそうつにみなつかうまつりて候をはいかゝして候べきと（みそうつは雑炊なり今も加賀越中にてぞうすいを（みそつといへり紙みそうつはかの杉原餅の如きものを貧たるにや前に胸病かことをいへれば其薬食などにてもあるか）

あんひん　あも　いまさか

○あんひんは餡餅の音なり又なんひんともいひしにや【類柑子】に画賛の付合の句用舎があかね子試のたてたべつけぬなんひん餅を忍ぶらん闇内にてあもと云はあんもちの略なりいまさかといふは定まならず文字は美作なるべし【嬉多言】に美作國をいまさかはわろしとあれば専らまさかといひたることゝしらる但し餅に擬せたるはいかなる故にか世には南鍋町ゑびや作兵衛が餡餅よかりければゑび作餅ともてはやしたるより起りていひ誤りたる言なりともいひ又越後家へ立入もちやのもちより美作と稱したりごもいへり非なるべし

餅

○餅は小麥たんごなりそれより轉じてつくねたる物を餅といへりたゞごは糰字もちは餻字なり漢土にて十五夜に月餅とて小麥にて製することありよりて【[illegible]】に餅をもちひと訓は誤なりといへるは非なり【和名抄】に糯をもちのよねと云るは米の黏る者をいへり是もちの義なり故にこゝには糕にまの字にあてもちゝ云し餅字を通はし用ゆ

糕餌

○糕餌は小麥の末をこなしてすに分ッ名なり米にいふときは其類ども米粉の餅に作りしたるべし【江戸臘子】

横雲といふは麸のやきなりきぬた巻といふ類助惣より出たるものなり（其もとは是も麸の燒なり）

さゝ餅

○白石が餲餬の形を云たる（前にみゆ）にさゝ餅の中にさる形なるがありといへりさゝ餅とはしんこなるべし【料理物語】に見えたり染て色々に作れば定りたる形なきにや作りたる形に付て白糸あこやなご名付

藤の花

【續山井】餅雪を白糸となす柳かな（松尾宗房）白糸の餅に赤小豆を付たるを藤の花といふ（繪行器の處にいへり）藤の花また藤の實とも云にや寛文元年成安撰める【埋草】藤の實の咲かば粧おげしんこ馬と云發句あり

しんこ馬

又しんこ馬は【毛吹草】にしこん馬も今やひくらんもち月夜など出たり馬形造りたる眞粉なるべし又馬形ならねども後に白糸餅をやせうまと呼これは餅のうまき馬といひ細きもの故痩といひたるなり灯草をやせ男と云と同じ又しんこの鳥は後にいへり

あこや

○あこやは【圓珠庵雜記】に伊勢には女のわざにちいさうゝつくしき團子をうりありくとてあこや／＼めさぬかといふよし或人かたり侍りきあこや玉に似たる故に名を移せるなるべし

さゝ餅

さゝ餅は【洞房語園】饅頭賦さつさ餅は其性粳(ウルチ)にの團子より出てあるへはが尻まひするものなり

あかつき

又しんこをあかつきといふことは安井了忠が狂歌にやき餅のつめたきよりもやはらかなあかつきばかりよき物はなし是亦小豆の付たるはあかつきなりそを深更となぞ／＼のやうに解たるは附會なり故に【風俗文選】にも毛紈が赤小豆賦にあかの仇名をとり云々深更とは理屈人の名づけ名にして云々

龜甲もち

○龜甲もち【地錦抄】に菝葜は柿葉の小き如く中に三筋あり秩父山中の農家客ある時は小麥の粉を水に煉り丸くちぎりて此荆の葉を兩方よりあて柏餅の如くにして炮烙にて燒て饗應す葉をとれば餅に三條の紋見えてあいらしきものなり是を龜甲餅といふ此葉をかめいばらといへばなり

櫻餅

（近年隅田川長命寺の內にて櫻の葉を貯へ置て櫻餅とて柏餅のやうに葛粉にて作る始めは粳米にて製りしがやがてかくかへたり）

有べしむかしは兩度の彼岸の内佛事には是を作りしとぞ小麥の粉を水に解やきなべの上にてうすくのべて燒たる片面に味噌をぬり卷て用これ上にみえたるけふひやきなり池田正式が【狂歌合】に朝貌の

朝貌

花めづらしきふのやきもひなたに置ばねぐさくぞなる【嘉多言】（四）女の詞に麩の燒を朝貌といへるは火にてあぶり侍ればしほむによて朝がほの花の日にしほるゝ故に名付そめしといへるは如何花車なるやうにてさもしき注なるべし只人のつくろはぬ朝の貌のやうなるとの心なるべしといへるは燒たる面のきよらならぬなり【犬子集】明なば顏のみつちや見えましといふ句に（一齒）玉くしげふたをして置麩のやきに又逢の客昔と共に經よみてといふ句（弘永）世に逢坂の關のふのやき【雍州府志】に

經卷

麩のやきの卷たる形は經卷に似たる故にこれを食ふに經幾卷を讀といふとあり是によりて經讀といふに麩の燒を付たるなり寶倉にも卷作麩燒稱御經とみえたり江戸にて助惣といふは【總鹿子】に麩の燒麴町十一町目助惣と出その家今にあり（十五六年前迄はいと下品なる物なりしが近頃は世の風につれてこれもいとよく製して昔の風味にあらず）【雍州府志】に燒餅は米の粉に煉餡を包みやき鍋にて燒た

銀鐔　どら燒　金鐔

るその形をもて銀鐔とも云と有り今のどら燒は又金鐔やきともいふこれ麩の燒と銀鐔と取まぜて作りたるものなりどらとは形金鼓に似たる故鉦と名づけしは形大きなるをいひしが今は形小くなりて金鐔と呼なり（同じ物なれども四方を燒たるを餡を常のよりはよくしてみめよりと名付しは淺草の馬道に始て出たり享和のころにや予が先人なども知りたる者の思ひ付たりしぞは程なく無くなりしかども其名うせず所々にこれを作るその頃「元はなくなりし後なり」澤村田之助みめよりといふ歌を所作事にしたり）

雁金燒

（米の粉の燒餅【江戸總鹿子增補】に深川萬年町雁金燒とあり是今にあれども當時ははやらぬものなり燒鍋に遠雁の形あるにて燒たるなり）米の粉なるよりの粉なる故火よくは通らず）今其製は麁なれども

かしの煎餅は鐵の摸(カタ)にて燒やうの巧みなることとなし【尤草子】おさるゝ物の内にせんべいは竹の筒におさるさいへば筒に入て拔て截たりとみゆ其燒ところを【人倫訓蒙圖彙】にかきたり火鉢を助炭の内に置火筋にて餅をはさみて燒なりやきたる處蝦蟆の背のごとく疣痕出來るにより鬼煎餅と呼其頃が【賢女心粧】に泉州高須の事をいふ處所の名物鬼煎餅を賣る云々其繪をみるに餅入たる籃と助炭とを一荷にして負たりいづくにも此やうにして賣ありきしが【籰纑輪】に勇角がいろは五十韻に世わたりを痂氣がさせず煎餅賣といふ句ありこの頃上野の山下にて沙糖入のかき餅を火筋のごとき物の先を二ッ

鹽煎餅

に割(ワリ)かけたるに餅を挿み燒て賣ものをみたりこれ往昔の製に似たり文鹽せんべいといふものむかしの煎餅にて（沙糖は入るゝも入らぬも有べし）癈れて後近在にて稀に見えしをこの頃は江戸にも流行て本所柳島邊にて多く作り所々の辻にてたぐわしと同く賣また神佛の緣日にも持出て賣この故にや近ご

罌粟燒

ろは罌粟(ケシ)燒といふものすくなくなれり醒が井餅も近ごろ江戸にて五色かき餅などゝて有しが售(ウレ)ざるにやなくなりぬ【寛永發句帳】に（圭琢）さかり過て色やさめが井もちつゝじ雪燒氷燒は輕やきの白色なるをいふなるべし【江戸名物鑑】に（寛延ごろより明和の初めなり）木葉せんべい歌せんべい（百人一首歌かるたの形なり）文茗荷屋の輕燒き皆にくへと誓願たてんと身帶のほるめうがや（はやりし物と見えたり）其外吉原卷煎餅淺草餅など出たり菓子屋は上野山下の金澤のみなり

麩のやき　朝皃經卷　助惣　銀鐔　金つは　厂金やき　さゝ餅　白糸　あこや　あかつき　亀甲
餅　あんひん　いまさか　米饅頭今とは形異なり　洲濱　豆餅　いぬま餅　矢口餅　亥の子　罌
もちの紋　花のくだ物　宮笥　花ひら菱餅　はなくそ　御福　目黑の餅　餅花　算木餅　青さし
金米糖　落雁　羊羹　正徳中の菓子ども　南蠻菓子　百一口のくわし

麩のやき

麩の燒とは物の名とも聞えぬ呼やうなりおもふに燒麩といふ物あるからまがはぬやうにいひるにても

寳引

寳引の條に出）是は今江戸の俗にそなへくづしこいへりかき餅は別に海參餅とてその形に作り刀にて薄くきるをいふ故なり是又二種あるに似たり【雍州府志】に甲冑に供ふる鏡餅は刀をもて截るといふ事を忌故手にて餅を破一片づゝ缺によりて缺餅といふ今は一切缺もちといふ圓山安養寺井双林寺靈山正法寺の僧臘冬に餅を製し薄く切二寸ばかりの長さなるをかけ干にし遠火に焙り貯へ置て賓客に供なす他に製すれども是に不及故に圓山缺餅と稱す近世常につめて遠方に送る方物とすと云へり是圓山かるやきのもとなり

圓山かるやき

○窓のすさみ（二）土井大炊頭利勝朝臣大老たりし時ある諸侯老臣たちに語れけるは近き内に茶を參らせ度候御出被下へくやと申されしかば朝臣をはじめ各々一同に是は興あることに候其日皆々參るへしと約束ありてその日諸老うちつれて行向にれければ主人門内へ迎て來よしを述べ書院に招しやがて數奇屋に入られけるに小き重箱にかいもちひ五ツ入ふたの上に楊枝を添て出されけりさて有て主人茶をたてゝ獻せられて事すみぬ四方やまの物語にときうつりて各かへられけりつれ／＼草にかけるかいもちひのことと質素なるをたうとく覺えしが此ころの風俗いにしへにことならず今の諸侯まさにしられんや

かい餅

○【雍州府志】に云煎餅は六條にて製する故六條せんべいといふまた其邊醒井にて製する片餅も同し類にて近江國醒井にて作るものに倣ひたるなり煎餅は火を經る故面鬼面のごとく皺襞あり故に鬼面餅と呼片餅は火をあてずして賣求る人くふべき時燒なり[illegible]くさ／＼近世處々にて製すといへり醒井餅は名物なり【[illegible]一行手鑑】更行ば日もさめが井の浴やかに背につきたるもすゞしきなるかし醒井は【東長紀行】ト宿人いもとより[illegible]せんべい二色をおくられしに心ざしふかさにしげ今宿のあまき數ばせん致せんにいにしへにして【續通鑑】六條の[illegible]化くるり其術[illegible]に可す[illegible]（諸建）む

煎餅
片餅
鬼面餅
醒井餅
[illegible]焼

ふ名の由を聞て歌よむを一休きこしめし善哉々々とて尻ついてよろこば給云々（貞徳が【淀川】に咄しむ時尻もつくものなり云々）これ善哉餅をあやなして書たるなり赤小豆をこし粉にせざる汁こ餅と見えたり又【洛陽集】に日蓮忌御影講や他宗のうらやむぜんざい餅（高成）今は赤小豆の粉をゆるく汁にしたるを汁粉と云ども昔はさにあらずすべてことといふは汁の實なり【寛永發句帳】に名月(幸和)芋の子もくふやしるこのもち月夜又【油かす】に握られん物かやたとはおくまじやしるこの餅は箸そへてだせ又すゝりだんごは今と異ならず【料理物語】に出たり但し餅ごうると四六わりの粉にて作る【洞房語園】饅頭賦あんころはしは猪へ持に嫌はれ汁粉もちは上戸に叱られなどいへるは今と同し又ぼたもちは【宗因千句】にあだなのみ種々にいはれの野べの露萩のもちなしおみなへしなら（今女詞にお萩といふおみなへしも菓子なり）

汁粉

すゝりだんご

あんころ

ばし

はたもち

○かき餅といふに二種有り搔餅と缺餅となり搔もちに又二種あり【徒然草】に最明寺入道鶴が岡社參の次に足利左馬入道の許へ先使をつかはして立いられたりけるにあるじまうけられたりけるやう一獻にうちあわび二獻にゑひ三獻にかいもちひにてやみぬ云々【文談抄】に俗に萩の花といふ物なりとあれば今世のぼたもちなり【屠龍工隨筆】ぼたもちは牡丹餅なりとおもひしにさに非ず萩をぼたといへば直に萩もちといふことにておはぎといふおなじことなりと土達部の娘の老女となられしが語られしといへり按るにぼたとは肥たるを云なり又連歌のうへに奉加帳たま隣不知殿といへることを取てこの異名とするはよくつかぬといふたとへなり又蕎麥かきをかいもちといふ玄旨法印の狂歌有り（前のそば切の處に出す）正意千句に新發意をそゝのかしぬるうき藏主煖酒も過すかいもち是はそばがきのかたなり【寛永發句帳】に十五夜月蝕に（慶友）まん丸な月かきもちの夜食哉餅を手にて缺ゆゑに名付そは古き習なり【埃囊抄】に二人むかひて餅をひきわるをば編引と云ならはせるも故なきにあらず（全文

かき餅

萩の花

お餅

鶉やき
うつら餅
胴ばれ
姥がもち
はらぶと餅
大福餅
白作餅
ぼた餅
善哉汁

とてこそ賣べけれ餅と名をつけていつはれる事こそけいはくなれおあしひとつにかゆる物たにかゝるいつはり多ければまして外の事よろづ輕薄ならぬはなし云々有て下文に鶉やきはうす皮の十字のたぐひならんあまりにけいはくなるによりて翁の涙なかし感ぜられ候も理りなりといへり【鷹筑波集】昔たかきよくにやふけるうつゝ餅【洛陽集】二口屋御狩そいそく鶉餅かゝる何もあればよき菓子屋にも作れりこみゆ紀州道成寺の繪卷物にその路ゆく處に從者餅を篋めてふくたやしなはせ給へとあるも此たぐひの餅なるべし【それ／＼草】(乙州の作)藤森の店や十禪寺の胴ばれ草津の姥ケ餅は利得少なから然も富い炮烙の一倍とて賣たにすれば利ありといふ此胴ばれといふは餅の名にやしらず【名所圖會】大津十禪寺の處に胴ばれ茶屋とあるのみにて何のよしも見えずさて作の鶉焼とはその鳥の丸くふくらかなれば准へて名づけたる歟後世はらぶといふ餅是なり皮うすくして餡は赤小豆に鹽のみ入て砂糖けなく唯大に作りたるものなり大ふく餅ともいふ後其形を小く作り餡もこし粉に砂糖を加へたるを専ら大福餅と呼はらぶと餅は近頃迄もありしが今は絶たり又江戸にて今白作餅といふは餡を餅の上に付たればあんころ餅の大きなるなり【祇園物語】又云出雲國に神在もちひと申事あり京にてぜんざいもちひと申は是申あやまるにや十月には日本國の諸神みな出雲國に集り給ふ故に神在と申なりその祭に赤小豆を煑て汁をおほくしすこし餅を入て節々まつり餞を神在もちひと申よし云々いへり此事【壒囊鈔】大社のことをかける條にも云ずされど【犬筑波集】に出雲への留守にもれ宿のふくの神とあれば古きいひ習はしと見ゆまた神在餅は善哉餅の訛りにてやがて神無月の說に附會したるにや【尺素往來】に新年の善哉は是修正之祝言也とあり年の初めに餅を祝ふことゝ聞ゆ善哉は佳品にてよろこぶ意あるより取たるべし【鷹筑波集】よきおなや影もぜんざいもちの月代これ善哉を青餅ともに用たり【後撰夷曲集】に大納言の小豆ににたる物なればぜんざい餅はくぎやうにて喰へ（一休）【一休物語】或人一休とい

諸書に載るは以蜜和米麺煎作粔籹とあればおごし米にはあたらぬなり【桂川地蔵記】に道徳興米遁世粽とあるはされたる名と聞ゆ【雍州府志】おこし米の義をときて是自粘固之中挽興之謂也といへりおもふに米を蒸簀に入麴となすを俗に寐かすといふ是はそれにかはりて米を熬てふくらますによりておこし米といふ歟【料理集】には薏苡仁にて作るよしをいへれどそれは後の製にて名に負す炙麩は今も焼麩なり油物とは油にてあげたる菓子上にいへるからくだものなり【後撰夷曲集】つかみちらす龍の玉にしなりは似て其名も雲をおこし米哉

道明寺引飯

○焼米かれ飯の上品なるを河内國道明寺にて製する故道明寺といへばそのことゝなる【洛陽集】に引飯と有て道明寺喰ても涼し備後砂（湖春）

道明寺

【落くぼ物語】おうなどもの御許にくだ物とりにやらんとて何もあらん物たまへといひにやりたればゑぶくろ二ツしておかしきさまにして入たりいまひとつの大きやかなるにはさま〴〵のくだ物色々の餅うすきこき入て紙へだてゝ焼米入てこゝにてだにあやしくあはたゞしき口つきなれば對にてさへいかに見たまふらんはづかしう此やいごめは露といふらん人に物したまへといへり（露は下女の名と聞ゆ）

椿餅

○中頃の名に隨へば蒸菓子はみな點心に屬し干菓子は茶子といふべけれどそのかみはさにあらずなへてくだものといへり【源氏物語】若菜上つはいもちひなしかうしやうの物ともさま〴〵にはこのふたともにとりまぜわかき人々そほれとり給ふ【空穂物語】（國ゆづり上巻）檜わりごみきつばいもちひなど奉り給へり【集古圖】の中に椿餅の圖あり椿の葉二枚の間に餅あり【河海抄】に椿の葉を合せもちひの粉にあまづらをかけて包みたる物なり

やきもちひ

○【祇園物語】にあたりなるやきもちひと申すもの一ツまいるべくもや候云々老人ひとつとりて手の内したゝかにおほえよく見れば中にはあづきをつゝみ上にうすやうほど餅をはりつけたり是ならば小豆

やうにあるはかいしきに用る故なり（食物は何によらずむかしはみな然り重箱などには四隅にいだしたり）上に引る歌のたいたう餅は【下學集】増補に大湯餅とあるものにや

大湯餅

點心

○點心は【野客叢書】に漫錄謂世俗例以早晨小食爲點心自唐已有此語鄭修爲江淮留後夫人曰爾且點心或謂小食亦罕知出處昭明太子傳曰京師穀貴改常饌爲小食小食之名本此といへり空心にまつちとばかり物くふを點心といふ今俗に虫おさへといふ類なりこゝには飯後にくふ物をいへり是も食後小食こいへるに似たれども食前にもあれ食後にもあれやう〳〵空心なる程にくふ食なるを數多の料理喰て間もなく又食はむ物をいふは點心の本義にはあらじ又佛事法會の終日の勤行に氣を屈する故種々の物をこしらへ備るをもいへり茶食とは只かはれども饅頭などはいづれにも用べし此にて點心に用るは大かた

羹菜

羹の類麪の類に菜を添て食ひ湯を飲ことなり【尺素往來】にも點心者先點集香湯而後水蟾糟雞鮮羹猪羹驢腸羹筍羊羹海老羹白魚羹寸金羹月鼠羹雲鱣羹鼈三峯尖碁麪餅乳餅巻餅水晶包子砂糖饅頭鮮饂飩等又索麪者熱蒸截麪者冷濯不可過此等候云々點心菜者不要多矣生蘿蔔雞冠苔冬瓜繭根蘘荷酸茨等之内三種計可設之於點心菜叵數事者號元弘樣當世物笑候とあり禪宗行はれて是等の食物の法も傳へたるな

元弘様

るべし但しもとは魚獸の肉を用ひしを僧家には是を除きて製方をかへて又こゝの人の口にかなふやうになし又は其物の形色の似たるによりて名ある物も有べし後には名のみ同くて物のいたくかはれるも有とみゆ今の羊羹なご是なり【庖丁聞書】に魚羹とはかんを魚の形にして盛趣是指すなり惣して羹は

羊羹

魚羹

四十八かん拵やう有といへども多は其形によりて名有云々あるにて知るべし【秉穗錄】に金門歲節を引て云洛陽人家重陽作迎涼脯羊肝餅こ今のやうかんは是にやといへり元弘樣といひ傳ふるは後醍醐の御代には殊に此饗應行はれてあまたの菜を出し候習と見えたり件の點心の內水蟾は水繊なり【後撰夷曲集】この葛は味もよしのゝ名物とくはぬ先より誰もすいせん是葛きりなるべし今すいせん巻とて製す

すいせん巻

津名物器の處にも天王寺屋宗及が菓子の繪などいへるは草木の實の圖にて製造の菓子にはあらじ
○今江戸黑川家にてやごとなきあたりには嘉祥の日おしきに杉葉をかいしき菓子を種々調して盛りたるを人々に賜ふその菓子はあこやと云るはいたゞきもちなりきんとんは團子にて胡麻と豆の粉を付たる三色なりよりみづ是は算木の形にしてひねりたるしんこなり其外大まんぢうやうかんなり

沙糖饅頭

○沙糖は【下學集】また林氏【節用集】に載たればその頃には異國よりわたりも多くなりしにやされごさたうを用ひざる物多かり【庭訓】に羊羹と沙糖羊羹二種出たり唯羊羹は沙糖は入らざるなり饅頭も【職人盡】にてうざいの詞にさたう饅頭さいまんちうと有り又饅頭賣が歌に賣つくすさたう饅やまんぢうの聲ほのかなる夕月夜哉と饅頭二度出たりおもふに調菜のかたはむねと茶饅頭を作る料理菓子にて常の饅頭とは異なるべし【食物本草】餛飩の製やうをいひたるをみるに茶饅頭のやうなり【東

十字

鑑】に十字とあるものは饅頭なり【晉書】何曾蒸餅上不坼作十字不食これを名ける故事にいへりこゝには蒸籠に餅の皮をむくこともいへり今おぼろまんぢうといふは上の皮をむきたるなり是等は物の數ならずえもいはれぬ美食費を顧みざるもの枚擧しがたし是を何とおいはむ十字は蒸て折たるをいふ【職人盡】の繪に饅頭の頭に朱の點あり是もと點にはあらじ十字たるべし（高野山の或院に宿りしかば饅頭の頭に紅にて印をおしたるを出せり是も其遺風か）【松屋筆記】に智恩院の御忌法事に參備へ引饅頭面に紅粉を點ずるこれ十字引の遺風也と云と有り折たる狀を象るもいとおかしきわざなり昔し饅頭は賣歌ひたる物なり【[illegible]聞書】に折の內にていらとりたるはとんちうの折にて饅よ肴にても細へし【堀河百首題】狂歌に[illegible]まんぢうのかさの[illegible]にさせる[illegible]逢ざりしとやの松は柿か[illegible]こやとなゐふ[illegible]小さき[illegible]山[illegible]饅頭[illegible]

手束索餅　餅餤　粉熱　團喜　粘臍　餲餬　饆饠　䭔子

まく〳〵の形に造り多くは油あげにしたるものなり此外に餢飳環餅結果捻頭粉熱餛飩など諸書に出たり名と形はかはれどもいづれも八種の類なりまた索餅餅餤といふ物あり索餅に一種手束といふあり【延喜大膳式】にみゆ索餅は小麦を多く米粉を少くし手束は是に反すといへり山岡氏の説に索餅は今の索餅にはあらず京にていふ白糸美濃あたりにてしんこ江戸にてよりみづといふ細長くして捩りたる物なり餅餤は【枕双紙】はしたなき物の條へいたんといふ物を二ッならべてつゝみたる云々粉熱は【宇津保物語内侍のかみの巻北のおとゞよりまらうどの御肴おほみきまいらせ給ふそれに打つどきてふずくまいれり【源氏物語】宿り木の巻宮のおまへにもせんかうのおしきたかつぎごもにてふずくまいらせ給へり【花鳥餘情】に粉熱は五穀を五色にかたどりて粉にして餅になしてゆでゝ甘葛をかけてこね合せてほそき竹の筒をして其中にかたくおし入てしばし置てつき出し其姿双六の調度の如くまたぶなり【東雅】に通雅によるに環餅捻頭饆饠餛飩等の如きかしこにては詳ならざりしと見えたり我國には猶今もこれらのものゝ遺制はあるなり我むかし御厨子所より公にまいらせしものともを見たりきそれが中に俗間にもその制の如きのこれるもあり團喜は俗にだんごといふものゝ形にて餡を包めるなり粘臍は俗にへそといふものゝ形是なり餲餬はもと蝎といふ蟲の形の如くたるをいひけり俗にさゝもちといふものゝ中に其形なる物あり饆饠はひらなり俗に花瓢といふものに似たり䭔子は俗に芋の子などいふものゝことくなるなりこれらのことだもしるしぬるは煩はしけれど異朝にして既にその名もさだかならぬものゝ我朝にはなほありし儘に其製の遺りぬるいとめづらかに覺しが故なりと有り古き菓子ともののかたかけるは貞幹が【集古圖】卷十九果子圖二十七種出たり又近き頃本多氏の君高橋家濱島家に傳ける古き果子の形三十八種を土をもて模し造りそれに添られたる考を搏桑果と名付て【廛泥】といふ書の中に收められたり按ずるに【信長記】に堺の今井宗久が松島といふ茶壺紹鷗が菓子の畫云々また堺

甘葛

さらして賣やうになりしはこの頃のことなり古への菓子ともを考ふるに今のだくわしにもあるべし沙糖なければみな甘葛煎をもて製れり諸國よりこの甘葛煎を貢する事延喜式に見えたり【和名抄】に千歳蘽を阿末豆良とす【本草和名】も是に同じ一名止々岐と有り是つゝるあまちやなるべし【大和本草】に附石水の説を引て云千歳蘽をつるあまちやとするは非なり【本草】を能みるて同じからずつるあまちやも甘けれども形狀違へり自汁なしといへり【本草啓蒙】に甘葛煎はあまちやを用ひて製すといふ今のあまちやにあらず和州十津川のあまかづらは此類たるべし今のあまちやに草木の二種ありつるあまちやは【救荒本草】の茶股藤なり木あまちやは【本草】常山條下の土常山なりと云り孰れにも其味あまちやの如きものと知るべし【いも粥のもの語宇治拾遺】に見えて水と見るはみせんなりけりとあり此物語は【今昔】に出てそれに味煎と書たれどもこれも假子がきにて蜜煎なるべしあまづらをいふなり【和名抄】崔禹【錫食經】を引て云千歳蘽汁狀如薄蜜甘美且署預粉和汁作粥食之補五藏とあるによれるなれば今の物語には生なる署預を粥に雜て煮るよしいへり【食經】にはいへるは[illegible]のいうたる物にや

甘蔗

（漢土にもむかしは白さとうを製することをしらず元の世に始て出きたること【滇南雜史】に見ゆ又本邦にて甘蔗を植ゆることは享保年中琉球より傳へしが始めなり

からくだもの

○古へ菓子は木の實の外にはからくだものとて漢土の製具の類を學びて造れるもの種々あり寒具は冬至より百五日を三月の節とす即寒食なり漢土は此日火を焚されば前日より種々の菓子を調へ置て食ふたりあたゝかなる食ものなければこれを寒食と云ふ寒具はその備への食物なり【本草和名】に沙糖を載たれども藥劑に備るまでにて漢土より渡れるはいと稀なるべし【和名抄】に見ゆる[illegible]も見へしは知らざ菓子たぐひに用ゐる事あるべからず【和名抄】また【江家次第】に見えたる八種の唐菓子は梅枝桃枝餲餬桂心黏臍饆饠鎚子團喜これなり此外に[illegible]

ものは海蘿（フノリ）を解たる學くなる物を毒蛇の伏て居る廻りを遠慿て輪をまはす蝮蛇是を見て逃れんとすれども輪のうへを越す事を痛で已が身をひたもの少く曲（マ）ぐる程に土蝸は混々（ヒタ）と廻して後にはひかゝりぬ時に蝮蛇べた〳〵と崩れ朽て死す（上の托胎蟲これと同じ物語なり）【本草】を按るに蝸牛蛞蝓ともに主治功用相似皆制蜈蚣と有り（山中には土蝸一尺ばかりなるも有とぞ）【五雜俎】（六）後淡諸將相宴集爲手勢令其法以手掌爲虎膺指節爲松根大指爲蹲鴟食指爲鉤戟中指爲玉柱無名指潜虬小指爲奇兵腕爲三洛五指爲奇峯但不知其用法云何今里巷小兒有中指之戲得非其遺意乎（これによれば蟲けん却て雅に近し古めけり中指といふもの今の拳なるべし）安永六七年の頃拳玉と云もの出來たり猪口の形して柄あるものなりそれに糸を付て先に玉を結たり鹿角にて造る其玉を投て猪口の如きものゝ凹みにうけさかしまに返して細きかたにとゞむるなり若うけ得ざる者に酒を飮しむ

中指之戲

拳玉

與次郎人形

酒胡子

擲席

○與次郎人形は其向ひたる人酒を飮此人形は兒戲條にいへり【後墨莊漫錄】飮席刻木爲人而銳其下置之盤中左右欹倒欺々然如舞狀久之力盡乃倒視其使籌所至酬之以盃謂之勸酒胡或有不作傳籌但倒而指者當飮と是なり前和名抄に諸葛相如酒胡子賦云因木成質形象人質在掌握而可玩遇盃盤而則出とあり

○喚ばざるに自來るを擲席また撥坐といふ【禪喜集】に東坡佛印と宴するに官妓月素と云もの來りて酒令をせしことあり

甘葛　からくだもの　寒具　粢餅　粉熟　團喜　粘臍　餲餬　饆饠　鎚子　沙糖　饅頭　十字

大湯餅　點心　羹菜　元弘樣　水纖　饂羹　棊子麵　卷餅（ケンピ）　苔豆（シンセイ）豆　霰餅　米（おこし）

引飯　道明寺　椿餅　鶉やき　ふくだ　胴ばれ　善哉餅　汁こ餅　すゝりだんご　あんころばし

萩の花（ボタモチ）　かいもち　缺餅　煎餅　鹽せんべい　醒井餅　輕やき

食物の中菓子も又今の世ほど花美を極めたる事もあるべからずそも端々のみせ棚にも上菓子を風月に

市の童の早言に傚ひて事ねいへるなりといへり【伽羅女】(五)年中遊び給ふが役めなればのら如來身のら如來とそそつても云々歌舞伎にて外郎うりのせりふ又芝全交が【戲草子】に【鼻下長物語】こいふ早ことの本あり

物まね

○物まねは身ぶりなり【そゞろ物語】に歌舞妓の事をいふ處在鄕の百姓酒に醉あらゆる物まね云々有り歌舞狂言を物まね盡しといふそを又まねるを身ぶり聲色などいへり【輕口咄】臆病夜行して芝居役者の聲色つかふを聞て怖れたる處お氣づかひなされますな今のは役者の物まねじや昔よりあれども聞えたるもなきにや近世風來が【放屁論】鶴市が聲色は其人そこにあるが如し云々安永ごろ新地中洲にぎわひで鶴市といふ小屋もの身ぶり聲色よく歌舞妓者の眞をうつしたり(安永八年ばかりにや柿色の素袍を着て堺町より咎められたりとなむ)【俳諧時律風】庵から出たる盜人の恥丹胡粉貴賤樂屋のすき通り女の聲の細長う立といへる付合有これ明和の初めの作なり

さかな舞

○さかな舞【醒睡笑】病愈たる祝の酒もり半は臺の物の鶴を取あげて鶴の舞を見ばやなど拍しよきふりに舞おさめしを見て一腑ぬけたる人床に立たる矢をとりてやまひをみばやとはやしたる話あり【夷曲集】さかな舞の扇の風もいやで候今をさかりの花見酒には【卜養狂歌集】人みな酒のみて興の餘りにや鏡とぎといふはやしごとをしてまひける酒のみてまふつうたひつほめはやせかゝみといふを見さいなの月(今さかん舞とりて壁ぬるまねを田舍人のはやしことにすること有)はやし物といふこと猿樂狂言にも見えて古きふりなさかん舞羅漢舞みなおなじ類なり又みさいなといふはやしごと古き小歌にあの山みさいこの山みさい戴きつれたおはら木を了意が【狂歌咄】に大原木躍といふ曲あり皷は家の大事なりとて猿樂ともの秘するといふも黑木を賣ことなりとあり件の小歌は大原木躍の唱歌なるべし【大幣】などに出たり羅漢のまねなどの其次はと云ことみな順の舞の餘風なり松月堂不角か【矢の

見さいな

はやしごと

壺聖人酒なども云へり
〇日蓮上人【録内録外】等に聖人一筒とあるはたゞ酒を云へり

造酒改燒印

〇寛文九年己酉正月十四日帳はづれの酒屋來月朔日より改の者遣はし少し成共所持候て酒道具共に取上其身曲事に可申付候勿論請酒も帳はづれの者共は向後商賣可爲無用云々〇天和元年辛酉十月此度御燒印申請候桶數に造り込可申なり石高書上可申候御定の外一切酒爲造申間敷候寛文八申九月富春御改被成候通町中酒屋共酒造り申石高半分の酒桶に來る廿日より燒印被仰付候云々

酒の肴に雜伎

〇酒の肴に種々雜伎のさるから古より有り【酒飯論】に管絃亂舞白拍子立舞居舞東舞今樣古郷しをりはぎ神樂催馬樂其駒と猿樂物まね色々に聲わざ骨わざ力わざつくさぬことこそなかりけれ（聲わざは聲をつかふなり【著聞】に稲大神といふ狐人につきて朗詠さいばらなどの聲わざとも有り聲色なども是なり【天狗觴擬密定縁起序】に先生笑云我飯を喰ふて人の聲色をつかふも皆人々の物ずき也云々【傳家寶】三集に本儀科（身ぶり聲いろなり）詐聲科即急口令（いひにくきことを口とくいふ早言なり）鼓喉科開口科（ものまね）轉譯科（順にいひて倒にいふなり）數絡科（やま寶のまねを云り鼓も打たれば鳴ずものも言はざれば分らず人過る處に名をとゞめんとす我は天下の名醫なり云々などやうの事長ければ略す）猜酒令にはさま〴〵あり骰子をふりて酒を飲ことも有り景致如意また化紅御綠また酒風明月何なりとも其時の思ひ付に定めてするにや喩へば酒風明月は六を風么を月と定め骰六つを用てふり么と六とを出さんとす出されば酒を飲て骰と盆とを送るなり（景致如意などは賭和目なり目を么に定め骰一つを用ひ么をふり得ざれば酒を飲盆を送ること同じ重のするびんころがしといふことここに似たり

早こと

〇早ことと【本朝文選】支考が月歳行令の京は平かに荷桐々々三荷きり自在に荷桐は當時の御紋なるを

とをお松にたすけられて捲簾の花のかげに月と共にふしぬ【丹鉛錄】云車渠杯注酒滿過一分不溢只さかづきはこの故なるべし

雀盃

○【蒦絨輪】賣方しらぬ雀さかづき爵をいふなるべし

下り酒

○下り酒昔は江戸にて多く酒を造りて下り酒はなかりし【事跡合考】に南川語て云津の國鴻池の酒屋勝屋三郎右衛門と云もの酒二斗づゝ入る桶二つを一荷として其上に草鞋數足置きたるを擔て江戸に下り大名の家々に至りて一升を錢二百文づゝに賣たり其頃いまだ麁酒のみにてこれが酒の如き美酒なき故ばいこりがちに買はやらかし頻りに上下して夥しく利を得たり其頃は米は下直なり木錢は十二文ほどしたる故鴻池より一上下錢三百五六十文にて仕廻たり肩の上はかりにてはかゆかざる故その一荷四斗の酒を一樽として二樽を馬一駄として數十駄づゝ持下りて勝屋賣たり依之末代に至りて酒の價を極るとき十駄金子何十兩と立るもの廿樽酒八石の積りなり追日酒うれる故馬の背にても及びがたく終に東海を何十万樽ご云に至りて船につみ入津する事今日盛りなりと云り此いつ頃のことにか【江戸鹿子】に下り酒や中橋廣小路呉服町一丁目二丁目せと物町一丁目と見へたり

四斗樽

清酒
濁酒

○酒の今の如く清酒になりしは一百年以來の事となん今も邊地には濁酒を用唐山なども濁酒多しと聞ゆ酒の詩なごに浮白こいへるも此故【天香樓偶得】古人酒以紅爲惡白爲美盎酒紅則濁白則清故謂酒爲紅友而玉醴玉液瓊飴瓊漿等名皆言白也梁武帝詩云金杯盛白酒正言白酒之美近來造酒家以白麪爲麯丼舂白秫和潔白之水爲酒久釀而成極其珍重謂之三白酒於是呼數宿而成之濁醪曰白酒使詩詞家不敢用白酒字失其旨矣この白酒といへるも猶にごり酒なるべし建仁寺の河濟酒樽に書る詩見時如白水飲則勝丹砂八十老翁面春風二月花などいへりこれに依て思ふに古き連歌俳諧に酒を飲ことを霞を汲といへるもかすみとは濁れるをいふなり又唐人酒を聖賢にたとへて呼聖と稱するはすみ酒なり【寒山詩滿】答才子詩溢

世盃】首卷第一回阮江蘭接酒在手見那叵羅是尖底巨腮小口足々容得二斤多許是は中ふくらなる下細き杯なり【群碎錄】不落酒器名白樂天詞銀不落從君勸とあれば不落叵羅一音なり袁中郎が觴政十三杯杓の內に黃白金叵羅と有また【帝京景物略】城隍廟市のうり物の內有倭扇有葛巴剌碗數珠云々また西域双林寺條下に葛巴剌碗者解項顱骨而金絡瓣稜尖如蓮房也これこゝにていふ佛器猪口なるべしされば叵羅は異國の碗の名にて今こッふといふものと見えたりこゝにて五山の僧なと酒杯をへ羅といひしより小盞をおはらといふ事になりしなるべし

鬼ころし

○茅柴【葛京詩話】に俗に村店の薄酒を鬼ころしと云即村店壓茅柴と云是なり又茅柴酒と云べし韓子蒼詩あり飲慣茅柴諳苦硬不知如蜜有香醪【下學集】茆柴濁醪也一醉而即醒如燒茆柴火便滅とあり宋人【錦綉萬花谷】前集韓子蒼詩云々謂苦硬之酒如茅柴火易過とあり按するに壓茅柴とはこの酒の茅柴の火よりもまされる意壓倒するを云なるべし

可杯（べく）

○可杯【醒睡笑】人はそだちといふ條べく杯を戯れに夏菊と名付てこそ候へ其ゆゑはしもに置れねばなり【榮北咄】大坂の女郎越後が可盃云々【雅筵醉狂集】に盃の底に細き穴をあけて指を以てその穴をふさぎて酒をもらしむ仍て飲盡さねば下に置れぬなり可字は文章の上に有て下に置ざる字ゆゑ俗に可杯と名付用ゆ

五と土器 むさしの

○古へは杯の大きをいふに幾度入といへり五と土器といふも五度入の土器なり【犬筑波集】に大杯を好む山ふしかつらきや峯に五度入七度入また大杯をむさし野といふ【鷹筑波集】むさしのを見て肝つふすなり下戸の前へ大盃や出すらん【節用集大全】酒盃大者曰武藏野言野見不盡之意也と云り【吾吟我集】盃の名になかれたるむさしのに富士をたくへて蓬萊の【臺後撰夷曲集】むさしのはけふはな出しそ長酒に入もこまれり我もこまれりむさしのは酒にいるへきやうもなし下戸より出て下戸の客人

みすりながしなどあまた見ゆ）寫本にて外に僞も無らんにはさる事もあるへし是等はみな板本にて俗書なれば誤もあるべけれど諸本みなかうろぎとあるをやかんざしは髮のさまをいふなり源氏なとにも見えたり靑黛の立板にてこれも辨を待ずして明らかなりさてかうろぎとは香爐木なるべし伽羅をいふなり奇楠をもて造れる杯なりかうろぎの盃は唐製の香ばしきをいふ

黒塗の盃　朱器

○黒ぬりの盃むかしの物にあれど猶古にはあらず【内宮記】十月朔日旬餘下延喜十六年四月廿八日宣旨無侍從者爲出居此日親王四人參上太子以朱器爲飮具無盞これ朱染の杯なりかく記せる杯は常に土器を用る故なり（黒器いやしきよし【古事談】にも見ゆ器用部にいへり）【鹽尻】或人問古へ我國の盃如何答云上古盃は土器のみ漆ぬりは中世以來か相州鎌倉敎恩寺（時宗なり）に昔平重衡千壽前と酒宴せし盃とて寺寶あり大さ今の平さらの如くにして淺く薄し内外黒にして梅花まきゑ是中古酒杯なり古田織部介重能の茶亭の膳に備る時製し初し盃の形なり近世は蒔繪塗の器となれり谷川氏云とうさん

とうさん　織部

【北山抄】に蝶花銅盞と見えたり是にや湯盞とも書り又とさんともいへり今いふものは古田織部助製し初た岡大杯の形也といへり【貞徳獨吟百韵】折を出せかし此菊のやと見るもたゞ大盃はくるしきに自注に當世をりべ盃とてあり近來のことながら天下通用にしていふより取用ゆ是俳諧の德なりさながら近き事は大かたせぬ事なり能分別すべし（猶多くあれども略之）

をはら

○をはら【尾陳工隨筆】小原女どもの笠かぶりて歩みつれたるを義政の東山より見給ひて小原盃は作り初られしといへり此說非なり大原女を小原女とはいかゞ笠かぶりては物をいたゞきがたし但し小原の女といふにやそは小原女といへることとなし）凡かさといふは笠のみにあらず物覆ふをいふ名なり合子にかさといふもおほふ物なればなり（筆ことには椀ともかさといふかた然るへし）はらとは

回盃

杯の異名なるへし【事物異名】酒具の條に叵羅（▲音竝上聲）と出たり是くは常の杯とは異なり【照

相よし瀧のみ

と飲て扨獻數を合せて其上を呑又一つのみ申候へは獻の數三つにて酒をば三つ呑なりと見えたり又瀧のみは【卜養狂歌】瀧のみは絶て久しく醉ぬるによたれながれて猶ねむりける【古今夷曲集】うたひまふ袖はかへさもしら波のうてる鼓の瀧呑の酒

卯酒

○卯酒【大鏡】に兼通公のことを云て後夜にめすばうすの御さかな云々ばうす卯酒なりされば夜中のむにはあらず卯時に飲を云【朗詠】の注にもあり唐人の詩に往々見ゆ

硯水

○硯水【閑田耕筆】に今世造作せる職人に三時の食物の外に勞を慰むる爲に酒餅類をあとうけるをけんずると云橋洲は間食(ケンズイ)かといへりとあり

酒戰

酒の飲くらべ昔しよりあれど慶安のころ地黃坊樽次が大師河原の底深と酒戰の事【水鳥記】にしるして世に聞えたり底深樽次は作名なり【水鳥記】に大師河原に池上太郎衛門底深とあり【洞房語園】に縣升見といふ醫師大師河原甚哲と酒戰の事をいへりその酒戰の杯は蜂こ龍とを蒔繪にしたる大杯なりさすのむといふ謎なり【七部集】(沾圃)大師河原に遊びて樽次といふものゝ孫に逢ひてそのつるや西瓜上戶の花の種

杯に種々ありこうろぎの盃

○杯に種々あり【猿源氏冊子】にまきゑのはんにかうろぎのさかづきすゑてとみゆ【富士人穴冊子】にたけなるかんざしはせいたいがたていたにかうろぎのすみをすりながしたるごとくなり是を友人松屋が考にせいたいのまゆずみの誤にや【小敦盛の冊子】にもせいたいのまゆずみたんくわの口びるなどみゆこほろぎの杯は黑ぬりの盞をいふこほろぎといふむしも其色黑ければよしありといへり大に誤れり本書にはかうろぎとあるをこほろぎと引直したり說の付ざる故なるべし(【宇田のさいきの草子】ひすいのかんざしはせいたいがたていたにからすみをかけたるにことならず【師門物語】にひすいのかんざしはたていたにからすみをすりながせるが如くなり【恨之助冊子】雪のうすやうにかうろぎのす

まはり酌　鬼のみ　酒をのむに種々の名あり　中のみ　鶯のみ　三ツ星　最上　通のみ

時輩官議亦止一盃而唐書言之未白不如唐世説爲詳世説曰張説拜集賢學士於院廳讌會舉盃説推讓不肯先飲謂諸學士曰學士之禮道義相高不以官班爲前後説聞高宗朝修史學士有十八九人時長孫太尉以元舅之尊不肯先飲其中九品官者亦不許在後取乃十九杯一時舉飲長安中説既修三教珠英當時學士亦高卑懸隔予於行立前後不以品秩爲限也遂命數杯一時同飲時議深賞之これに准ふべくもあらねど今申侯の習ひに口論鬪爭の和議に酒もりするに必双方酒づきを取て一時に飲み其杯をとりかへて獻酬する事なりとぞ【伊勢家禮式】云まはり酌と云ことは我飲て則我酌をするをいふなりたとかはる〳〵するをばいふべからずと有り【御傘】に盃をはしむるを鬼のみといふ事あり云々といへる是今もあるじより初るなり酒をのむに種々の名ありおもひざし思ひざし横ごり思がへしなかのみ付ざしなど猶くさ〳〵あり（【松屋子摘書】漫筆に多くいへれば略きていふ）其中に中のみといふは【今川大双紙】などに出て今俗にあひをするといふ是なりすけると云ことと心得るは非なるべし鶯のみは【宗五大双紙】に上﨟人出て十杯とくのみたるを勝と申候といへりこれにては其名義解しがたし按るに【今川大双紙】に下﨟の花の杯をのむやう左のかたよりのみはじめ下を中なる盃に入てその蕊を本の所に置て皆順にのむべしさては後は中なるを飲なり三つ星も左より呑なりといへり是は盃に酒をつぎ丸く五つ中に一つ居置はその形梅花に似たり三つ星もおなじ形によりていふなり今も田舎には一とひろのみなどいふことある即この遺風なりさて鶯のみは梅に鶯といふ縁にていふなるべし鶯のみのかたは盃五ツづゝ二つ並ぶることと思はる【懐子】（八）呼客人をおかぬもてなし盆の鶯のみも興ありて【貞順故實聞書中】呑大中呑の事おやふの儀者於殿中は無御座候下々にては中呑をせられ候云々歌遊の事先貴人より早くまいらせ候事勿論なり云々二星三星之時は不用候通呑の事通な〻見物にまかりて於其座の中に候云々飲人は如常に不飲候者をさげて通呑の中へ入候て飲候と器のやうに呑候事はなり候はず云々あひよしと申事是一つうけて呑

本所瓜
本田瓜
銀まくは
金まくは
梵天瓜

の白めなるあり【增補江戸鹿子】本所瓜味美ならず本田瓜といふ形甚大なり云々いへり是ほんでん瓜なり今これを銀まくはといふ金まくわに對しての名なり【寛永發句帳】に後藤判とあるべき金まくは哉（貞德）【懷子集】大和人こんご賣なり白まくは(方好)【續山井】類ひなき佳味の梵天の眞瓜かな(沙長)今も肉多く肥たるをホテタルと云是なりおもふに本田瓜は梵天瓜なるを本田と書ほんだと誤れるなり【醒睡笑】和州より出るほてんと云瓜は延曆寺慈覺大師天長十四年四十にて身つかれ眼くらし命久しかるまじと思ひ叡山の北谷に草庵をむすび三年つとめ行ひておわりをまたれければある夜夢に天人來りたりこれ靈藥なりとてあとふ其形瓜に似たり半片を食す其味蜜の如し人ありて告るやうこれ梵天王の妙藥なりと夢さめて口中餘味ありしかして後やせたるかたち更にすくやかにくらきまなじります〳〵明らかなりその半片を土にまきければ歪き瓜の生ぜしいまの梵天これなり【元享釋書】に見えたり（これ附會の說なり釋書には有一人告曰是忉利天妙藥也云々羸形更健昏眸益明於是以石墨草筆書妙法華云々この以下彼の半片の瓜の事なしそのうへ忉利天と梵天とは異なりほでん瓜の名によりてかゝるこごを云そへたるなり）瓜を六かは半にむくといふも久き事にや【五元集】にあたまから章魚になりける六皮半

りんごの紋

○こゝにはせぬ事ながら【汝南圃史蘇州志】を引て云好事者以枝頭向陽未熟時剪紙爲花鳥貼其上待紅熟乃去紙則花紋熣燦入盤釘可愛

酒宴獻酬

○昔の酒宴獻酬今世のさまごはことたがひたり先我のみて扨酒づきに酒をひとつうけて其酒盃を持て對の人の前に置てまいらすこの時歌詩或は今様朗詠などうたひものを肴にせしなりさりながら京都將軍の時もはや今の世のさまごみえたりといへり漢土の酒もりの如し【雲谷臥餘】に予數歲時見鄕人旅飲間有止用一盃巡輪者而官府禮讌則各一盃十餘歲後并鄕曲亦無一盃巡飲者矣觀新唐書載張說事則知唐

て卸賣するもの持ありきて辻々の小みせにおろして賣るこれは中に物なきはなけれども只中にあるものゝ知れざるゆゑ小兒またこれを求む

西瓜

○又西瓜を輪ちがひなどに切ることあり【諸艶大鑑】嘉祥喰にする處に西瓜を香の圖に切ちらし云々あり又番南瓜を木魚に作ることは天明ごろよりといへり定ならず西瓜の灯籠【俳諧三疋猿】附録贅るとも盆の節季は月ありて西瓜にこぼす橋の行燈これはたち賣の赤き紙の行燈なるへし西瓜の肉をほり取て中に火を點す事は近きことゝみゆ火光青くみゆるものなり【廣東新語】に似たることあり廣州時序の條八月十五日之夕兒童燃番燈持柚火踏歌於道曰灑樂仔灑樂兒無咋糜搭累碎瓦爲寶塔者其塔多象光塔者其燈少柚火者以紅柚皮彫鏤人物花草中一置琉璃盞朱光四射與素馨茉莉燈交映益素馨茉莉燈以香勝柚燈以色勝

○西瓜は大和本草に義堂空華集和西瓜【詩あり】西瓜今見生東海剖破猶含玉露漿今按此種寛永中初自異邦來義堂は後小松院時人此時西瓜未可有不知何物稱之乎若は古ありて其種亡て近年又來れるやいふかし云々京都には寛文延寶の間に初て西瓜の種を植といへり【續柑子】西瓜は卅年來のはやりものにして今は和歌所へもめしあげらるべかりしを女房達のきらはせらるゝもあるにや【去來抄】に猪の鼻くすつかしき西瓜かな（卯七）正秀なればひこ鼻はくすつかしけん去來云させることなし此頃はいまだ上方に西瓜珍し正秀も珍しと思より猪の怪しみたるとは風聞せり予は西國生れにて西瓜も瓜茄子の如し曾て心ゆかず惣して人の句を聞に我知る場しらざる場迄にひ行べしと有り西國より漸々京に上りしなり【紙容譜】に貪り者のことを云て東様の御用とて西瓜の代三百六十五匁新小判にて八百屋が請取て云々あり大に行はれたる也

眞桑瓜

○眞桑瓜は濃州眞桑村の種を京師東寺邊に栽し故夫を眞桑瓜といひしが今は一般にしか呼なり一種皮

やたいみせにて吉兵衛と云ものよきてんぷにし出してより他所にもよきあげものあまたになり是また一變なり

てんぷらあげもの

栗生姜大根の花形

○享保十八年刻【樂燒秘囊】の附錄に茶寮料理十五條あり第一條に花栗を作る法有り大栗の荒皮しぶ皮をむき白砂糖湯に漬一夜よく熟し置ば栗軟かになる花を作らんと欲せば四角にきどりて角をそぎかけそれよりむき廻せば花出來るなり五葉になりとも六葉になりとも好みによりてさま〴〵作意出來るなりといへり是今大根などにて花を造るきりかたなり今はこれらの法その外にさま〴〵雞卵を殼ともに初鰒(アハビ)を介ともに截(キル)やうの事迄も書しるして人の集る街にて鬻く蓴蘿蔔胡蘿蔔をさま〴〵にきりて見すればめづらしからず【續五元集】さま〴〵に刻みてみよき栗生姜投入四五文が花とみえたれば寶永以前よりもこの切かたありしなり又【六玉川】二篇名月夜茗荷の鶴も生のこり又めうがの鶴のくさる舟底といふ句も有寶曆五年【白花鳥】といふ草子にけしきごり水肴の鉢に留る身はめうがの如く頭はとうがらしの如しいかの甲に生するは稗の中に留る子どもの慰になる鳥なり（鳥賊の甲は小兒のする事故今も有めうがの鳥などは用るものなし）

○【瑯環記致虚閣雜俎】を引て七夕徐捷妤、雕鏤菱藕作奇花異鳥、攢于水晶盤中以進上、極其精巧、上大稱賞、賜以珍寶無數、上對之竟日、喜不可言、至定昏時、上自散置宮中、凡上令宮人闇中摸取、以多寡精粗爲勝負、謂之鬪巧、以爲歡笑、また【東京夢華錄】以瓜雕刻成花樣、謂之花瓜、又以油麪糖蜜造爲笑靨兒、謂之果食、花樣奇巧百端、如捺香方勝之類、若買一斤、數內有一對被介冑者、如門神之像、蓋自來風流、不知其從、謂之果食將軍（果食將軍のことは錦袋圓の中の佛像又大黑煎餅の中より出る大黑に似たり）

大黑煎餅

○大黑煎餅はじめは多くの內に大黑の木にて小く刻みたるが一つせんべいに包でありこれに取あたらんとて多くせんべいを碎く故に數を賣むとてし出せしに後にはさま〴〵の物を作りてせんべいに包み

雀すし

○攝津名物の内雀鮓江ふな也腹に飯を多く入たるが雀のごとくふくるればかくいふなりといへり江ふなとは江戸にておぼこといふいなの子なり【後撰夷曲集】ちよこ／＼とおとれとへらぬ我腹は飯の過たる雀鮨かも【山井】はねのはへた飯に漬てや雀ずし（意朔）めしのこはきをはねのはへたと云もふるし【五元集】五月十日雷雨永代島の茶店にやとりして明石より神鳴晴て鮓の蓋（貞享頃の吟なるべし此句源氏明石卷雷雨の事をおもひていへり鮓の蓋にはむかし傘の紙を用たり）思ふに今謎に神ならば放つまじなどいふ此句これなるべし鮓はなるゝまでは容易に蓋を開かざるもの故かかみなりによつて蓋を開くと作れるなるべし

食すし

○【江戸鹿子】（貞享四年）鮓并食すし舟町横町近江屋同所駿河屋とあり只鮓と有は數日漬たるをいふ【增補江戸鹿子】深川鮓（深川富吉町柏屋）御膳箱鮓（本石町二丁目伊勢や八兵衛交鮓初漬中漬其外望次第云々）是にても食物賣し處少きを知らる【溫故集】地藏箱木の下闇を宿とせば（蓮谷）鮓や今宵の蓋をとらまし（貞佐）

おまん鮓　**當座鮓**　**鮓賣**

【後はむかし物語】におまん鮓も寶曆のころよりと覺ゆ京橋中橋おまんがへにといふ言より居所の地によりておまん鮓といふなるべし此頃までは當座鮓を賣ことは稀なり鮓賣といふは丸き桶のうすきに古き傘の紙を蓋にして幾つも重ねて鰺のすし鯛のすしとて賣あるきしは數日漬こみたる古鮓なりといへり（寛延ごろの兩國橋廣小路に鮓賣の出たる處を書しに今の涼み臺めくものを置き其上に賣人居鮓箱と旁におまん燈あり）【衣食住の記】芝の神明祭禮には鰶鮓の名物にて右祭禮の外は常に鮓あま酒の店賣はなかりしに芝邊にて鰶を賣はしめ鮓を賣出し近年おまんずしわけて夜のにしき鮓鰶は三國一の名物になる（此說おぼつかなし神明祭によりての事と聞ゆ【江戸鹿子】等に其邊の鮓屋みえず）

松がすし

○文化のはじめ頃深川六軒ぼりに松がすし出きて世上すしの風一變しそれより少し前に日本橋きはめ

みさご鮨 みさご鮨はみさごは詩經に雎鳩と詠し本草には鶚といへり【名物辨解】にみさご本邦古より有之【日本紀】（景行紀）に覺賀鳥といへり形鷹に似て深目走黑色なり水禽には非ずして水邊に魚を掠食ふ或は魚を取貯へ岸の沙石の間に積置をみさごの鮓と云ふ漁人或は好事の人探得て不加塩醬して食ふ味は人の作れる鮓に似たりといふ〔本草啓蒙〕に深山の巖陰に魚を多く積重置をみさごの鮓といふ是冬の貯へなり人これを取に重ねたる下の魚を取れば追々新に魚を含み來りて積重ぬもし積たる上の魚を取れは再び含み來らず又樹枝の繁茂したる處に柴を襯してその上魚にを積重ぬるもあり此等の鮓久しくなりたるも腐らず人取て賞食すといへり【秋坪新語】忠州山中黑猿善釀酒ことを載猢猻酒といへりみさごすしに對すべし

一夜すし なまなり ○むかしの鮓は飯を腐らしたるものにてみな源五郎鮒の鮓の如し早鮓といふも一夜すしなり【料理物語】一夜ずしの仕様鮎の鮓を苞に入焼火にあぶりておもしをつよくかくる又は柱に卷つけてしめたるもよし一夜にてなるゝといへり此外塩魚干魚等を漬ること【雍州府志】などに見えたり【似せもの語】になまなりをつけゝる女有けり云々早すしをなまなりといへり

○鮓字書に差魚藏魚也とある如く煑焼せさる物なりこゝにも生なる魚味をいふこと同し

○【枕双紙】に名おそろしきものいにすしそれも名のみならず見るもおそろしとあるは海膽(ウニ)なるべし【土佐日記】にほやのつまのいすしとあるは是なるべしほやは石勃卒と云ものにていづくにもあれど能登にて多くとり食料とす

釣瓶鮓 ○【日本鹿子】大和國名物の內釣瓶鮓は鮎なり曲物に入れ籐にて手をする故にいふ【大和名所圖會】つるべ鮓吉野川のあゆを下市村にて鮓に製す其魚を盛る器つるべの形に似たり故に名づく其味美にして官に獻る年魚は吉野諸邑より出す

しつぽく
食卓

○しつぽく食卓は食をのする机なり唐人流の料理をしかいふ【陶說】隆慶窯卓器【清異錄】に五代の時貴族以筵具たがひに相尙る方丈の案なほ足らず旁に二案を增して數百の器皿を排ぶこれを綽楔盤といふ又【北轅錄】に淳熙丙申待制張攸といふ者金國の生辰を賀する使にゆく館に抵れば晩食を供すまづ茶筵具瓦壠を設く此にいふ卓器即筵具なり一卓の器みな一齊にそろひたるものなり瓷色もやう倶に類從す明窯にはこの隆慶窯ご始なるべき今はさかりに行はる古人は几筵を用ひたり今の卓は几に代るものなり【楊億談苑】云咸平景德中主家造檀香倚卓借倚卓字後人以木作椅桌又卓字加木傍作棹俗書也【おこたり草】に云京師祇園の下河原に佐野や嘉兵衛といふもの享保年中長崎より上京して初て大椀十二の食卓をし弘めける是京師難波にて食卓の始とかや嘉兵衛が娘はんといふ老婆近ごろ迄存命せり大坂にて彼是食卓料理あまた弘めたれど野堂町の貴得齋ほど久しくつゞきたるはなし江戸にも處々にありしなるべけれど行はれず浮世小路の百川茂左衛門なども初め食卓料理したるなり大椀は大平なるべし故にそば初を太平にもり上おきしたるをしつぽくと呼今は大平にもらねどもしかいふは上おきのみとなりしやうなり又葱を入るゝを南蠻と云ひ鴨を加へてかもなんばんと呼ぶ昔より異風なるものを南蠻と云によれりこれ又しつぽくの變じたるなり鴨なんばんは馬喰町橋づめの笹屋など始めなり又

南蠻
鴨南蠻

會席料理といふは予が覺えて藥研堀の川口忠七竹嶋始めなり彼は芝居の笛吹なりし

みさご鮨　一夜ずし　釣瓶鮨　雀ずし　食ずし　栗生姜大根の花形　大黑煎餅　西瓜　眞桑瓜
梵天瓜　りんごの紋　酒宴獻酬　鬼のみ　中のみ　鷲のみ　取違　三星　蓮のみ　相よし　瀧のみ　酒戰　こうろぎの盃　黑骨の杯　茶器　とうさん　織部　をはら　目羅　可盃　五とこ器
むさしの　玉子盃　ふきよせ　貝盃次郞太郞　浮瀨　雀盃　酒のさかな　權俵　早こと　さかな
舞　はやしことば　拳戰　拳ずまふ　蟲けん　拳下　酒胡子　與次郞人形

青梅茄子 になれ〳〵なすびせごのやのなすびならねばよめの名のたつに【洛陽集】に切形や青海水に茄子浮(元好)墟鯨茄子の浪に寄にけり(友吉)今まつもどきといふやうに切たるなるべし**松もどき**とは松茸に似せて切たるなり又丸ながら竪にきりめを多く付る**茶筅茄子**と云ふ所見なけれど近頃の名には有べからず又竪に二つにわりてきりめ付たるは蓮の花びらに似たりこを**蓮花茄子**といへり【矢の根鍛冶後集】和尚への馳走貢物もれんげ茄子【篗絨輪】伊勢講は料理にも忌蓮花茄子さいふ付句あり

きくみ 唐なす さつま芋 笋 食卓

きくみ 【五雜俎】云司馬温公有晩食菊羮詩采擷授厨人烹[illegible]調甘酸毋令薑桂多失彼眞味完古今餐菊者多生咀之或以點茶耳未聞有爲羮者亦不知公所羮者花耶葉耶といへりこゝにて作るきくみの類か

唐茄子 ○かぼちやの小なるを唐茄子と名付はやり出しは明和八年の頃なり唐なすさつま芋の類は初ものとて賞する人もなし此二種享保のころ迄は江戸にはなきものなり元文のころより近國にて作り出す**薩摩芋**は青木敦書か功にて次第に行はる世に此人を**薩摩芋先生**と稱す今は大に民間の助となりて焼芋賣る處何れの町にも二三ケ所あらぬ處もなし【江戸名物鑑】唐茄子、初夢や一ふじ二たか十なすび、薩摩芋後の月みよ七またのくだり芋これ専行はるゝの始なり

笋 ○筍乾は【本草】に酸筍といへり天目筍と名けて舶來あり筍の皮を剝切らずして煮て乾したる故おし平めたるが如し【戴恩記】に京は御禁制にて笋なきにやいさや寺へ參らむ云々紹巴が貞徳を誘ひたるなり洛の中外の堺目を正し竹を植られし頃にや今盛りにもてはやす孟宗竹は【八閩通志】に載る江南竹一名雪竹にて元琉球より渡り専ら食料とすることは三十年來なり此笋正月より出て用ひ淡竹出るころやう〳〵終るこの故に淡竹出てめづらしからず苦竹はさらなり殊に孟宗は他筍よりもやはらかにして笋中の第一なるべし

菟の子を一度に取て取合せて母の幼き子をせゝらかすやうに我子々々と云て年の始の走り者を生む不食むは忌々しきことなりと云まゝに其平なる石に六つの菟の子を一度に打云々あり古くより年の始に走り物を食ふ習ひありし事と聞ゆ【師門物語】にはしり物に取ては峯をかくる鹿澤をわたる兎犬をこぶ鳥に至る迄云々これは唯走り物を擧たるにて新らしき物をいふ處にはあらず年の始に走り物を用ひし習ひ故後には何にまれ新らしく出來る物を走りといふこととなれり（今も年始に鳥の料理を祝儀として用る習ひありとか古きつたへにや）今おんざのはつものといふは終りはつものといふと同言と聞えたり【似せ物語】におんつめこいふ言あり押詰の義かおんさは是にて終の座の意にや又【類聚雜要】に大臣大饗の隠座は座席の名なり爲關白殿御座云々穩座肴物様器土高杯觚折敷などあれど是にはあらじ

おんざのはつもの

初茄子

○これをおもへば西鶴が榮花咄に江戸中の松だけの出そめといひしもさまつだけにはあらめなるべし初ものを賞すること昔も今もかはる事なし唯賞するものとまもなき物と有り茄子は昔はめてたる物なり【懐子集】庄屋さへやく川樂を食かねてと云句に（意翔）初茄子とて守護にとらるゝ【寛永發句帳】に（幸和）初なりや先是式のさゝげ物（此句瓜茄子の句中にあり其頃賄賂を是式と云り【永代藏】貞享五年）東寺邊りの里人茄子の初生を目籠に入て賣來るを七十五日の齢これ樂みの一つは二文二つは三文に直段を定めと云りこれ其頃初茄子の價なり【五元集】さみだれや酒匂でくさる初茄子賣ずごろの吟なるべしそのかみ駿河より五月出すを初茄子とす今は年の寒暖に拘らず三月に砂村より出るなり初茄子の賞翫こゝのみにも非ず【東京夢華錄】大内の簾下に其歳時果瓜蔬茄新上市并茄瓠之類新出每對可直三五十千諸閤分爭以貴價取之また秋茄子わさゝのかすにつけまぜてよめにはくれな架におくこもといへる古諺あり【堂一後座千句】のこれるもはやすなり秋[illegible]子にくまれにたる姿かしうとめ【大鑑】

相よし　瀧のみ

と飲て扱獻數を合せて其上を呑又一つのみ申候へは獻の數三つにて酒をば二つ呑なりと見えたり又瀧のみは【卜養狂歌】瀧のみは絶て久しく酔ぬるによたれながれて猶ねむりける【古今夷曲集】うたひまふ袖はかへさもしら波のうてる鼓の瀧呑の酒

卯酒

○卯酒【大鏡】に兼通公のことを云て後夜にめすばうすの御さかな云々ばうす卯酒なりされば夜中のむにはあらず卯時に飲を云【朗詠】の注にもあり唐人の詩に往々見ゆ

硯水

○硯水【閑田耕筆】に今世造作せる職人に三時の食物の外に勞を慰むる爲に酒餅類をあとうけるをけんずゐと云橘洲は間食(ケンズイ)かといへりとあり

酒戰

酒の飲くらべ昔しよりあれど慶安のころ地黄坊樽次が大師河原の底深と酒戰の事【水鳥記】にしるして世に聞えたり底深樽次は作名なり【水鳥記】に大師河原に池上太郎衞門底深とあり【洞房語園】に縣升見といふ醫師大師河原甚哲と酒戰の事をいへりその酒戰の杯は蜂と龍とを蒔繪にしたる大杯なりさすのむといふ謎なり【七部集】(沽圃)大師河原に遊ひて樽次といふものゝ孫に逢ひてそのつゐや西瓜上戸の花の種

杯に種々あり　こうろぎの盃

○杯に種々あり【猿源氏冊子】にまきゑのはんにかうろぎのさかづきすゑてとみゆ【富士人穴冊子】にたけなるかんざしはせいたいがたていたにかうろぎのすみをすりながしたるごとくなり是を友人松屋が考にせいたいのまゆずみの誤にや【小敦盛の冊子】にもせいたいのまゆずみたんくわの口びるなどみゆこほろぎの杯は黑ぬりの盞をいふこほろぎといふむしも其色黑ければよしありといへり大に誤れり本書にはかうろぎとあるをこほろぎと引直したり說の付ざる故なるべし(【宇田のさいきの草子】ひすいのかんざしはせたいがたていたにからすみをかけたるにことならず【師門物語】にひすいのかんざしはたていたにからすみをすりながせるが如くなり【恨之助冊子】雪のうすやうにかうろぎのす

時與官議亦止一盃而已書言之未白不如唐世説爲詳世説曰張説拜集賢學士於院賜讌舊學盃説推讓不肯先飲謂諸學士曰學士之禮道義相高不以官班爲前後説聞高宗朝修史學士有十八九人時長孫太尉以元舅之尊不肯先飲其中九品官者亦不許在後取乃十九杯一時舉飲長安中説既修三教珠英當時學士亦高卑懸隔至於行立前後不以品秩爲限也遂命數杯一時同飲時議深賞之これに準ふべくもあらねど今甲斐の習ひに口論闘爭の和議に酒もりするに必双方酒づきを取て一時に飲み其杯をとりかへて献酬する事なりと【伊勢家禮式】云まはり酌と云ことは我飲て則我酌をするをいふなりたゞかはる／＼するをばいふべからず

まはり酌

と有り【御言】に盃をはしむるを鬼のみといふ事あり云々といへる是今もあるじより初るなり酒をのむに種々の名ありおもひざし思ひざり横ざり思がへしなかのみ付ざしなど猶くさ／＼あり（【松屋子換書】漫筆に多くいへれば略きていふ）其中に中のみといふは【今川大双紙】などに出て今俗におひをするといふ是なりすけると云ことゝ心得るは非なるべし鶯のみは【宗五大双紙】（上）兩人出て十杯とくのみたるを勝と申候といへりこれにては其名義解しがたし按るに【今川大双紙】（下）梅の花の杯をのむやう左のかたよりのみはじめ下を中なる盃に入てその蕊を本の所に置て皆順にのむべしさては後は中なるを飲なり三つ星も左より呑なりといへり是は盃に酒をつぎ丸く五つ中に一つ居置ばその形梅花に似たり三つ星もおなじ形によりていふなり今も田舎には一とひろのみなどいふことある即この遺風なりさて鶯のみは梅に鶯といふ縁にていふなるべし鶯のみのかむは盃五ッづゝ三つ並ふることゝ思はる【懐子】（八）呼客人をあかぬもてなし盆の鶯のみも興ありて【貞順故實聞書中】呑大中呑の事おやふの儀者於殿中は無御座候下々にては中呑をせられ候云々取逢の事先貴人より早くまいらせ候事勿論たり云々二星三星之時は不用候先呑の事遠など見物にまかりて於其處の事に候云々飲人は如常に不欲者盃をさげて遊衆の中へ入候て飲候土器のやうに呑候事はたり候はず云々あひよしと申事先一つうけてみ

鬼のみ　酒をのむに種々の名あり　中のみ　鶯のみ

三ツ星

取逢

遊のみ

ふ句あれば種々の物を入しと見ゆ

○【長崎歳時記】正月四日の條古へより延命寺の僧徒金山寺味噌といふを曲物につめて檀家へ配る其製唐土の金山寺より傳へたるよし家々これを得て珍味とす

鬼みそ

○鬼みそ【太平記】八幡託宣條落書に唐橋や鹽の小路の焼しこそ桃井殿は鬼みそをすれ

三峯尖

しゆみせん汁

○三峯尖【尺素往來】點心の内に三峯尖とあり【下學集】に三峯相羹之類也【節用集】にも同く膳こ書たり【庖丁聞書に三峯膳の羹は五斗土器に羹三色杉盛にして出すなり此三色は須彌の三峯に表し盛なり四季を一季づゝ殘し過去現在未來にかたどり其時節により色どるなりと有り思ふにその色は北は黄に南は青し東白西紅に染色の山（此歌謠曲の歌占に須彌山の歌と有り【日本紀通誌】に泉式部が歌と云ども出所定かならず）といふは須彌山の歌といへりこれを春夏秋冬に配し用たとへば春の時ならばこれを現在とし冬を過去とし夏を未來とする盛かたこ見えたり【料理物語】にしゆみせんといふ汁あり菜も豆腐もいかにも細かにきりたるをいふみそ汁にだし加ふといへり是も三峯にならひたる物なるべし味噌の色は黄とするか紅とするかいづれ三色にかたどりし名には有べけれど（或は黄にとり或は紅に取るといふ書は有べからずいつも此三色に定りたらむば三峯のもとの義を失へり【博桑果】（古代の果子のかたを集たる物なり）の中に【和名抄】に出たる乳餅を三峯尖こしたる大なる誤なり唐山にも須彌山に似たることあり清人趙翼が儒餐の詩に土銼煤爐老瓦盆莫因鼎食羨豪門儒餐自有窮奢處白虎青龍一口呑自注に俗以豆腐青菜爲青龍白虎湯

梅ひしほ

○梅びしほ【汝南圃史】に杵白梅和以紫蘇作梅醬吉人用以調羹疑即此也こゝにてさらさと云なり白梅とはしほづけ梅なり

昔のひねりたる料理

○【伊呂三絃】に其頃のひねりたる料理をいふに何も入れずに鷄頭の葉のはしらかし汁割するめにあら

鰹節を○りて賣る　煮染豆　坐禪豆　寺納豆　一休納豆　金山寺みそ

りその邊に冬瓜のきり賣來りければ其荷へるを賤らず買ひていひけるやう此邊にかゝる物もてくるは土地の恥なり重ねて賣に來ば其儘にはおかじとて歸したりとかいと〳〵おこがまし貧人の居所には下菜をゆでゝ賣り鰹節を削りて賣も各々その便を得たり）

○煮しめたる豆を坐禪豆といふも座禪納豆より出でふるき名なり【きのふはけふの物語】長老さまへ與六太夫殿のおかた御見まひにざぜん豆を持て御こし有云々【犬子集】（三）抱て寐ねよ夜の下へ引入てといふ句に（貞德）座禪の僧がくふかしき豆望一千句座禪の床に有かひもなき茶臨にもたらする豆のこまかにて後の菓子ともには座禪豆といはず今專座禪豆と稱るはむかしに歸りし也【一代女】（五）さかなも生貝やき玉子は有ながらにしめ大豆山椒の皮などはさむは色町を見たやうに思はれ（六）堀江橋の鉢に飛魚の干物蓋茶碗ににしめ豆絕ず【調味抄】に黑豆丹州笹山よし押て汁貫流たといへり（正月殊さらにこれを設て式正のやうなれど昔酒の肴に絕ず用ひたる遺風なり又數の子を用ゐるも名産を取のみあらず是も常に酒の口取に用ひしものなり【椀久物語】に正月の學びする鷹揚やの肴に不斷數の子を漬て置事此時の用に立事と笑云々

○今の寺納豆も法論みそ座禪納豆の遺製京師大德寺眞珠菴にて造るを一休納豆と云金山寺みそには紀州若山金山寺の名物にて江戶に流行出しは享保年中よりとなむ他州にはなし東坡集金山寺寶覺長老寄惠能斗酒博西涼但愛齋厨法豉香また【寄園所寄】に天下第一名金山寺鹽豉と云【博物彙編】（十二）湖州名產を擧たる內にも江南鎭江縣金山寺鹽豉云々いひて皆稱天下第一他處雖效之終不及また【乾道庚寅奏事錄】（宋周必大）鎭江府金山龍遊寺に至りし處に會飯於方丈白餅黑豉豉粥三者山中之精者也云々今こゝの金山寺みそは赤黃にして黑からず其製異なるべし其方は【居家必用】などにも出たり又【日本歲時記】六月條に紀州宜淨寺の秘方と云て載たり【江戶名物】徑山寺味噌駿河の寶の寺開山四十餘年にい

濱名納豆　**ほろあへ**

はから糸といふてくれなるから糸〻は納豆の異名なり糸ひくをいふ【紅梅千句】に寄の能の棧鋪とり〳〵(可頼)納豆をさげ重箱に組入て(正章)籾へしには唯手を掛もせぬ(友仙)【安部泰雅東行話說】(寶曆十年)濱名納豆は見つきに似ぬ味にて酒の肴にはえならぬものなり今此邊にありやと尋ければ本坂越の路三ヶ村の大福寺より出るものにて此邊にはなしといふ然れは濱名の産にもあらず云々かさゝぎのはしもとかけし橋杭も朽てはまなのなとふばかりぞ(濱名納豆は鼠糞の樣にてかびの生たるものなり法論みそを白きものといひしも此さまにや今歟冬の藥にみそを加へて作るものをほろあへといふは唯ほろ〳〵とする故なり)

○もろこしには美噌なし然るに杭州の諺に一日吃三十丈木頭とあるは杭は戶口多く三十萬を大凡として十家每に擂槌一分を減すればこれ三十丈なることを云り擂槌は醬をする故なり

○【禪喜集】に東坡一日會爲佛印題眞贊云佛相佛相把來倒掛貝好擂醬(頭の丸ければ倒に見てすりこぎにたとへたりこゝにも俗に高野のすりこぎと云も同じたとへなるべし又僧畜にすりこぎ坊主などもいへり

扣納豆

○たゝき納豆に汁の實まで添て賣れるも近ごろのことならず【人倫訓蒙圖彙】に扣納豆薄ひらく四角に拵へ細かき菜豆腐を添うるなり直やすく早わさの物九月末二月中賣に出ると有れば貞享の頃よりもさありしなり(納豆江戶にも近ごろ迄寒き時節のものにて有しに今は夏も賣ありけり但し粒納豆なり

冬瓜のきり賣

此ごろは冬も扣納豆は稀にて粒納豆を賣れり○物は異なれども卑うして便利なる物は冬瓜のきり賣なり【武野俗談】に本所三つ目寄合辻番のものに仁右衛門といへる者西瓜の裁賣より思ひ付て冬瓜をたち賣にして一錢づゝに裏屋の者に賣たり大にはやりて冬瓜仁右衛門と異名をとりしとなむこれ元文寬保ころの事なり又或人語りけるは淺艸瓦町に大和屋某といふ者文魚とかいひて人の知たる放蕩ものあ

あすか味噌　法論みそ　坐禪納豆　濱名納豆　押納豆　冬瓜きり賣　坐禪豆　煮染豆　寺納豆　金山寺　三峯尖しゆみせん　梅醬　昔のひねりたる料理　醍醐嵩括芽　鞍馬木芽漬　淺草海苔昔と異なり　初茄子　青海茄子　松もどき　蓮花茄子　初鰹　走りといふ事　おんさの初物

あすか味噌

【著聞集】に式部大夫敦光朝臣のもとへ奈良なりける僧のあすかみそといふものをもて來りけるにいつのぼりたるぞと問ければ僧かくなむきのふ出てけふもて來るあすかみそ（敦光朝臣）みかの原をやすぎてまいらむ此あすかみそといふものは法論みそなり

法論味噌

【下學集】に法論味噌ハ南都法會時用之故曰爾【[illegible]】に法論みそもと南都の製なり興福寺維摩會十月法論日をわたる講師等小水のために塩をしりぞく事をうしとして黒豆豉を食ふ故に法論みその名ありとかやといへり【本草】にも豆豉は肌粥にとゞろ渋すことは見えたれど小水を禁むることは聞えず此功ある事をしらざりしとみゆ【大和名所圖會】に小塔院趾の條下法論味噌といふあり護命僧正の製作なり故に人みな護命みそともいひ又飛鳥地飛鳥川の邊なればあすかみそともいふ云々【嘉多言】第五法論みそ賣の夕立といふ謎あり物をそこなふことを忍ることにや【犬子集】（四）白きものこそ黒くなりけれといふ句に（隆友）夕立や法論みそ桶に入ぬらむ【人倫訓蒙圖彙】法論みそ黒豆にて製するよし町へ賣に出る男柿染のかたびらを上張に着る事これはほろみそ賣の看板なり曲物に奇麗なるこもを覆ひさし荷ひ何方にても下に置事なし一方を高き所へ持せ置云々有り曲物に蔵をおほひたるなど【職人盡歌合】の繪に書たると同じ遠州濱名の納豆は見たとしきものなるべし【[illegible]

納豆濱名

ざぜん納豆

州地誌記】（弘治二年の數なり）齋買之物少々記之とある内に坐禪納豆法論味噌と見えたりこの坐禪納豆に濱名納豆の製なるへし後に煮染豆大豆を坐禪豆といふもこれより出たり坐禪は小水の為にこれを

ちやのこ

用ひしたりむかしは茶の子にもせしものとみえて【[illegible]】に[illegible]

風鈴蕎麥　なるべし【狂詩諺解】に風鈴そば夜たかそばと似て非なるものなり大平にもり上おきあいといへりこ
しつぽく　わ上に大平盛とあるも今のしつぽくなること知べし（唯大平にもりしはむかしより然り）銅脈が【太平樂府】溫飩蕎麪焚火行とあれば京師もおなじころ夜そば賣出しとみゆ

夜の煮賣　昔は夜の煮賣御法度なり寛文元年辛丑十二月廿三日先日も如相觸候町中茶屋煮賣仕候者井振賣の煮賣夜に入堅商賣仕間敷候云々寛文十年庚戌七月日暮六已後より煮賣可爲停止前方相觸候今程方々有之沙汰とも彌可爲無用事

其後夜そば賣もありしと見えて貞享三年寅十一月晦日うどんそば切何によらず火を持あるき商賣仕候義一切無用可仕候

手打蕎麥　○手打そば予が幼きころ母の唄ひて聞かせられし小歌の節今おもへば難波十日夷の賣物の歌に擬したるものなり唱歌は赤いもの盡甘いもの盡色々ありうまいものにとりてはたうこうあんそばきり西の宮
葛西太郎　太郎が麥飯上林みな同時行はれたる食ものどもなり太郎は葛西太郎と稱せられぬ中ごろすたれて武藏
夷宮　屋權三のみ流行て太郎は無なりしが又近年再興したり其他は跡もなし夷宮は廿四五年前迄僅に殘りた
道光庵　りしが今は絶たり道光庵は【江戸鹿子增補】（寛延四年）淺草稱往院塔頭道光庵住侶生得蕎麥を嗜み常に食す此故に人間來れば取敢すもてなせしがいつとなく世に名高く京師丸山の茶屋のごとし歎息すべし明和二年川柳点道光庵草をなめたい皃ばかり次云【後はむかし物語】むさしや權三は始め麥飯斗を
麥斗庵　焚て喰せたりとぞ我十五六の頃なり（寛延年中）麥斗庵の計字を心得ずしてばくけいとはいはずばくとあんと唱へたるもおかし其後年を追て繁榮し今の姿になりてもぶら挑灯に抱澤瀉のわきに麥斗の字を
むさしや　書たり後これもやめてむさしや權三にて通りぬ（或人云太郎はもと村中の番人にて堤下に居て鯉魚を賣しが頓てそれを煮て麥飯に添へてあきなへり江戸にていふ番太郎これなり）

小宿のかゝまじりに呑てしまひ酔にまかせてうごんやのけんかん箱を枕にして書籍これにても其價知べし（一人五匁づゝは彼擲食奈良茶のあたひをまがへしか

温飩

○温飩【庭訓首書】に貞丈云【書言字考】唐韻を引て餛飩の字を出し其下に温飩和俗所用と見えたり【和名抄四聲字苑】云▲飩餅剉肉麵裹煮之云々【巻懐食鏡】に啓益按救荒野譜云以水和麪作皮包菜肉餡蜜等餡湯炊煮熟象混沌不止之義今俗多用之飩先云々按ずるに混沌後に食偏に書かへたるなり煮て熱湯に漬して進る故此方にては一名を温飩ともいひしなり今世温飩は名の取違へなりそれは温麵にてあつむぎといふものなりといへり

鶏卵うどん

鶏卵うどんといふは麪に砂糖を餡に包みたるものなりこれらをおもふに其もと餛飩なりしこととしらるる名の取ちがへにもあらず物の變じたるなりむかしは温飩にかならず梅干を添て食たり

温飩に梅干を添る

【犬子集】うどんものぶる綸筵のうへ（一齒）梅干のすいさんながらまじはりて宗因千句梅干くふた眞似は其儘讃くだり扨もうどんやこほすらん【料理物語】うどん胡椒梅とあり昔は温飩を專らにして蕎麥はかたはらなり近時までもそばやをうどん屋と稱へしなり又今ひもかはうどんと云は平うどんなり是は【東海道名所記】鳴海のあたりに伊も川うどんそば切と見え【一代男袖子】に二川と云所云々芋川といふ里に名物ひらうどんといふことあり然らばひも皮は芋川なるべし

二八蕎麥

○【衣食住記】に享保の頃温飩蕎麥切菓子屋へ誂へ細切にしてとりよせたり其後麪町へうたんやなどいふけんとんや出來蕎麥切ゆでゝ紅から塗の箱に入汁を德利に入て添來る其後享保半頃神田川邊にて二八即座けんとんといふ看板を出す（かゝればそばをもうどん箱に入たり二八そばといふこと此時始なるべし）

夜鷹蕎麥

○又云夜鷹そばは切其後手打そば切大平盛賣出の頃風鈴蕎麥切品々出る、あれば風鈴そばと夜鷹蕎麥とは別なりとみゆ思ふに今も御藥園にて夜そば賣か有初め夜鷹そばといひしはこのやうの者にてありし

うどん桶

諧三疋猿】これほどの廣き住居に桶のかけどちへもつかずうどん一桶【温故集】來山が句春雨やもらぬ家にもうごん桶實政の末迄も箱に盛て賣しか箱は今絶たり）後のうごん箱には蓋たく模様などを繪かず（家の印なごは付たるもあり）そのかみの箱大名けんとんとはいへと蒔木なる漆繪なり青貝など蒔たるも有【江戸名物鑑】大名けんとん新そばや二本道具の汁辛味又忍けんとん数入や二階へ二膳しのぶ山

伊吹そば

○【風俗文選】雲鈴が蕎麥切頌に伊吹蕎麥天下にかくれなければからみ大根又此山を極上とさだむ云々近頃は慳貪屋の手に落て所化寮の餓客に青貝の手桶荷ひこみ比丘尼宿の夫よせに錫の鉢をすゑならふ夫蕎麥大根は君臣佐使の付合なるを越路に胡椒の粉の折形を備へ都の方には山葵甞にてやらるゝこそ本意なけれ先師翁の云ることあり蕎麥切俳諧は都の土地に應ぜずとて一生請合申されずとかや【本朝文鑑】二竹堂（支考か作名なるべし）蕎麥切頌あつはれ武士の喰物にしてあま茶の男はかくことも得ざらん哉こそはせをの翁も我家の俳諧の都にうつらぬはそば切の汁のあまさにもしるべし（今に京難波には佳なる蕎麥なし）【風流徒然草】京町の三浦に几帳とてやんことなき全盛の女郎有けりそば切を好みて多く喰けり客よりの付とゝけば小袖の外は皆そば切となりけるそれのみか甘汁は愚痴なりと江戸汁のみ好み其外人集めしてくはせける程に出る時は半分はすみのつるがやの拂となりけりこのまねをして今も二三人そばきりずきの女郎ありけるとぞ云々【洞房語園】に嘖鈍は寛文二年寅秋中より吉原に始て出來たる名なり江戸町二町目に仁右衛門といふもの温飩そば切を商ひしが一人前の辨當を拵へそば切を仕込て銀目五匁宛に賣る端傾城の下直なるになぞらへけんとんそばと名付しより世間に廣るといへるはうけがたし端女郎を呼しは蕎麥のかたより准へたるなり女郎のみにあらず【都風俗鑑】に慳貪野郎こ云もあり延享二年草子賢女心粧しだらく女をいふ處集せんだし廿四文のそば切小半酒を

る座敷へ上るとて大名けんとんといふて拵出す【軽口男といふ草子】浅草旅籠町の處弓手も馬手もそば切屋一杯六文かけねなしむしそば切の根本こ聲々に呼（【鹿子はなし】に諏訪町あたりにて蒸籠むしそば切一膳七文とよびける其繪をみるに棚のうへに大平の椀にもりて並べたり軽口男は貞享中の草子またこれは元祿三年の草子にて其間程近けれど價異なり又寛文八年のころの物といふ流行物の短歌には八文もりのけんとんやとあれば前後あはずさま〴〵にてありしにや）【江戸鹿子】に貝割屋堺町市川屋中橋大か町桐屋同提重堀江町若菜屋本町新橋出雲町（【世事談】には瀬戸物町信濃屋といふ名始てこれをたくむ其後所々にはやりて堺町市川や堀江町若菜や云々中にも鈴木町丹波や與作といふ者其名高し）

むしそば切

〇慳貪は唯俗に覺えたるやさしみなき意にて一椀づゝ盛たるを食ふ人の心にまかせて愛もせさるゆゑたり（與服屋の現金安賣始りて向くれの物みな其定にたれり大かた同時なるべし）其呼聲に又一杯六文かけねなし現金かけねなしといふこと其頃のはやりたり外に持運ぶに膳を入る箱はけんどん箱なるをすなはちけんとんさばかりいひ其箱の蓋の如きをけんどんぶたといふ大名けんどんといふは【一代男女郎】とも食好みする處なた貝のふくらいりを川口屋の帆かけ舟の重箱に一杯と思ひ〳〵に好まるゝこそをかしけれ（【一代女】に川口屋の蒸そばとある其重箱なり帆かけ舟は諸大名の舟を五色の塗にて繪にかきたるなり（西國の大名難波にて艤し、出たつ故その紛ともの相印を目當へなり）大名けんどんの名はこゝに起る今も此名殘れるもの有て好事のもの蒸箱に用ゆ小く長き形の箱たゞ蒔繪に帆かけ舟のみにあらず種々の模様有て、一種の箱あり大にして四角なり内に入て有て緣の縁少しけつまの箱辛み色々入貞享の【江戸鹿子】に提重こあるはこれらをいふ後に忍びけんとんともいへりもと銘々ともはうどんをも入たりうどんは桶にて持運びしが後には件の箱になりたれども猫桶をも用ひしにや【俳

けんどん

大名けんどん

提重忍びけんどん

烹雜　雜煮餅　雜炊

麥の粉を鹽すこしやわらかめにして水にて練り暫く布など覆ひて寐さしむれば粘るなり其內に醬汁をうすく煮て茄子瓜の野菜をも入置かの粘りたる粉を手の內に少づゝ丸め持て引のばせば長く延るなりそれをよき程づゝに引きり直に汁の鍋に入手なれしものは甚平らに延し平うどんのやうにするなりといへり此說附會なるべし是むかしの入麪なり又庖丁の烹名は雜の誤りなるべし【梅窓筆記】に烹雜とは今の雜煮餅のことなり御廚子【所預記宗國記】明應六年十二月七日（取要）三獻公家衆ホウザウとありといへり今の雜煮餅と定むるもいかがなり何にてもくさ〳〵煮たる故なるべし然らは雜炊と云も似たることにや其ながら雜炊は野卑なるものなるべし上杉上州平井に在城のとき出仕の人の下部共平井の民家に充滿し誰かし初るこもなく菅を引て手ずさみに蓑を織て家主にとらすれば家主よろこび大鍋をゐろりにかけて湯を炊ば下部共豆粟菜かぶら何にても一品づゝ打込て煮る故にこれを雜炊と云へりとなり

蕎麥　蕎麥切　そばかき

○蕎麥は【續日本後紀】承和四年七月令畿內國司勸種蕎麥此時迄諸國に多は種さりし事こみゆ鹽尻（卅）そば切は甲州より始る初天目山へ參詣多かりし時所の民參詣の諸人に食を賣けるに米麥すくなかりし故そばをねりて旅籠とせし其後うどんを學びて今のそば切とは成しこ信州の入かたりしこ有かゝれば近きことゝみゆそのかみはそばがきのみしたるにや【夷曲集】に蕎麥搔餅出ける座にて玄旨法印薄墨につくれる眉のそばかほをよく〳〵みればみがとなりけりむかしは麪類をば蒸たり故に上に引る【職人盡歌】にもこしきのうへのあつ麥とはいへり【貞德文集】に點心は饅頭羊肝蒸麥とあり蕎麥切はさらなり【寬永料理集】にゝへ候ていかきにすくひぬる湯の中へ入さらりと洗ひさていかきに入にへゆをかけふたをしてさめぬやうに又水けのなきやうにして出してよし（昔々物語）に寬文辰年（四年甲辰）けんとん蕎麥切といふ物出來て下々買ひくふ貴人には喰ものなし是も近年歷々の衆も喰ふ結構な

しかごけふの花見に似るこめもなしむかしは花見遊山などには茶飯をたきて持ゆけり【おあん物語】其時分は軍が多くてなにも不自由なことでおじやつた面々たくはへもあれどおほくは朝夕雑水をたべておじやつたおれが兄様折々山へ鐵炮を打に參られた其時朝茶飯を炊て昔めしにもたれたわれらも茶飯もらふて給ておじやつた故兄様をさい／＼すゝめて鐵炮うちに行と嬉しうてならなんだ土御門泰邦卿東行話說目川にて時に群集して喰ける茶飯田樂我もこのもしく云々白き扇のたゝんでつまいとこがしたるやうなるをもて來る人の目川忍ひてさとくひて見たれば思ひの外に味なくぞ行ける當風にあはぬ大きなでんがくはむかしのなめし殘すため川

麥繩　○麥繩【今昔物語】むき繩の蛇となりたる物語に夏の頃麥繩多く出來たるを客人ども多く集て喰ける云々これは冷麥なるべし【康富記】文安五年八月十五日條二獻冷麵居之鯛指身居之【望一後千句】世中はからしご泪こぼれそひなきが手向になせる冷麥

冷麥

熱麥　○又あつむき有【職人盡歌合】てうさいのこしきのうへのあつむきのむしあけのせこの月わたるみゆ索麪賣の歌なりあつ麥はにうめんをいふ（冷麥と冷さうめんにうめんとうどんと異なるは近世の事なり）

入麵　【言國卿記】文龜二年正月廿五日內裏御月次和歌御會云々被召御末賜入麵天酒等とあり（天酒は酒にや）

庖丁汁　○庖丁汁【笈埃隨筆】日向より薩摩に至る處やがて夕餉して本温飩に茄子やうの物をうすき味噌汁に煮たるなり亭主云是は此國の一調味なり卑き品なれども顛據あり昔此邊大友宗麟領せられし時俄に菊地肥後守來會あり取あへずせし事なれば蛤の腸を汁に調して出さむとす然るに菊地思ひの外多人數にて其用意足らずいかゞせんといふに人數へて如此作らしめて中を足したりいづれも分かたかりしそれより名をほうてう汁と呼し蛙鷄と申ことのよしを讀いて庖丁汁と覺えしと話る其製至て無造作なり小

田樂は田樂の曲に鷺足とて竹馬の如きものを一本立て乘ることありその形に似たるをもて名とすることは誰もしれりされども田樂の豆腐のきりかた昔は今の如くにはあらず古圖をみるに丸く切たるなり今の茄子のしき燒の形に似たり但一切づゝ串にさすなりこれを後には四角に切たる儘にて角を落さず串は半ばまで割かけたり是を爐中の灰に立置てあぶり燒なり此さま田樂のすがたなり【醒睡笑】に此事を云て夢庵の歌たかあしをふみそみなへるめんぼくを灰にまふせる冬のでんがくと云るを引たり今はいつの物と定りたる事もなけれど大かたは春夏秋をむねとするやう也昔は冬の物なり【宗長手記】大永六年十二月の處に夜もふけ爐邊にひさをならべ田樂たうふの盃たびかさなりて云々（其頃は田樂豆腐といひしはさもあるべきことなり）【醒睡咲】に比叡山北谷持法坊に兒あまたあり冬の夜豆腐一二丁を求め田樂にする云々みな寒夜の賞翫なり飯の茶酒の肴にもあらで唯茶うけなどの慰にしたる事も有きのふはけふの物語ちご法師よりあひでんがくをあぶりなにゝても三つはねたることをいひて賞翫せんといひてうんりんゐんの南蠻陳せんさんひんの神泉苑などゝいひて皆一串づゝ取られける云々また或夜てんがくをして秀句にて賞くわんするに大ちご淸盛の長刀なんぞいつくしま新發意佛のつふりなそ〳〵みくし小ちご醫者の本尊なそ〳〵やくしなどあり此秀句は【新撰狂歌集】貧僧弟子とかくせんにて田樂をして弟子にはくはせず我ばかり食ければ新發意今の間に佛は二躰出きたりぼうずはやくし我はくわんをんといへるをとれり【寬永發句帳】一村が句寒き夜にあぶりくふべき岡部かな近くは【溫故集】百里が句田樂のあとさびしきそ冬籠祇園の田樂古く有しものなり望一千句でんがく串の竹のぶしやうさ腰鉉を祇園參りにおとし來て同【后の千句】にたりやきたり豆腐をそくふゆる〳〵と祇園の前にやすらひて田樂かならず茶飯に添こくふは寬永ころよりなるべし【懷子】やく田樂に身もこがれつゝ來ぬ人を待にござれば茶飯して茶飯に【似せもの語】にはらにおける茶飯はいつもくひ

奈良茶　ともなひ茶取あへず出す杯けんとん奈良茶のわけを立る云々）【江戸鹿子】に奈良茶は別に出して金龍山には食けんとんとありおもふに他の奈良茶は今の如く一ぜんめしにて一椀づゝの定なるべし金龍山は其後よき料理したりと見ゆこはさきの奈良茶やさは異なる歟【衣食住の記】に享保半頃迄途中にて價を出し食事せむ事思ひもよらず煎茶もなく殊に行掛りに茶屋へ料理いひ付ても中々出來せず其頃金龍山の茶屋にて五匁料理仕出し行がゝりに二汁五菜を出す人々好みに隨ひこさの外はやる其後兩國橋の詰の茶屋深川洲崎芝神明前などに料理茶や出來堺町にて一人前百膳といふもの出きてより是く所々に出たり湯島祇園豆ふ女川菜飯居酒やの大田樂湯豆腐始め寶暦の始より吸もの小付飯大平しつぼくのうまみ金龍山の料理は跡なく夫より宮地端々おひたゞしくわけて明和のころより辻々に軒を並ぶる（安永の頃より辻賣の油あげ燒肴餅菓子串菓子一夜すしくさ／＼算に及はずと云り）明和八年ころ深川すさきに譚やき場を開き兩國橋づめと云今もある中村屋洲先に升屋宗助なり是はするかの江尻の坊叔阿彌と云ものになれりとか

けんどん

百膳

淡雪豆腐　○【續鹿子增補】に淡雪豆腐兩國橋東詰日野や東次郎享保の初淺草並木町西側にわづかなる豆腐有て初て製しければ人もゝてはやさでいつしか跡なくなりぬ其後湯島切通し山田屋彌兵衛とこの日野や同時に賣初いづれも繁昌せし中にも日野やも稻荷の神感有てよります／＼繁昌する事をうらやみ隣の上舟屋有故賣藥方の道具迄紛はしく拵らへ根元本家などゝ知らぬ人を欺く云々

十二文茶漬　十二文茶づけは傳通院前に辰巳屋とて出たるが初めなりとぞ

田樂　菜飯　麥繩　冷麥　熱麥　入麵　庖丁汁　薯蕷　蕎麥　むしそば切　けんどん　大名けんどん　提重　忍び擇食　うどん桶　湯漉　梅干　二八そば　夜たかそば　風鈴　しつぼく　手打
葛西太郎道光庵　むさしや　藪十庵　[illegible]

永巳前には料理などして賣をばはたごといひしにや望一后の千句瓜や茄子や夕貌の汁立よるは五條あたりのやす旅籠

女の料理人

○女の料理人宋人撰に【暘谷謾錄】に京都中下之戸不重生男毎生女則愛護如捧璧擎珠甫長成則隨其資質教以藝業用備士大夫採拾娛侍名目不一有所謂身邊人本事人供過人針線人堂前人劇雜人折洗人琴童棋童厨子等級截乎不紊就中厨娘最爲下色然非極富貴家不可用これより已下ある厨娘か料理するありさま物の費多きこゝも委しくしるせり其用る處の鍋銚盂勺湯盤之屬小婢をして先捧して行しむ焜爛目に耀くみな是白金もて作れり刀砧雜器も一々精緻厨娘は團襖圍裙銀索攀膊臂を掉て胡床に據坐す切抹批臠慣熟條理眞に運斤成風の勢ありなどいへり

江戸料理茶屋

○江戸にて料理茶屋といふものむかしはなし（寛文の頃迄もすくなかりし寛文八年中の十月中町中諸職人諸商人共茶屋并借し座敷をかりより合相談仕候こと相聞候自今巳後左樣の者ざしき借候者共借し申間敷候凡ふれこと江戸中を南北中を分ち月番にかはる〳〵三げんより觸出す此時此方中通を觸るに茶や一軒もなし）西鶴か【置土産】（元祿六年板）近き頃金龍山の茶屋に一人五分づゝの奈良茶をしだしけるに器物きれいに色々とゝのへさりとは末々のものゝ勝手のよき事こなり中々上方にもかゝる自由なかりきとありこれは寛文のころけんどん蕎麥切出來てそれに傚ひて慳貪飯といふも出たり【江戸鹿子】食見頓金龍山品川おもたかや同（かりがねや目黑と并び載又奈良茶堺町ぎおんや目黑かしはや淺草駒形ひものや是なり【事跡合】考明曆大火の後淺草金龍山待乳山なり）門前の茶店に始て茶飯豆腐汁煮賣染豆等をとゝのへて奈良茶と名付て出せしを江戸中はし〳〵よりも是をくひにゆかんとて殊の外めづらしき事に興じたりそれより追々さま〴〵の美膳店出來しよりいつしか彼聖天の山下の奈良茶衰微におよびたり（【江戸鹿子】金龍山とあり家名なし【元祿曾我物語】三谷かよひの路次に丸屋へ

にては下品の人のみ食す（西國の産と異なりといへるは非なりいづくにも色のかはれるあり）團魚を賤ざるはこれもいと下品のものにて賣ことも稀なりしにや【寛永料理集】に眞龜は吸ものさしみ行かめも同じといへる眞龜はすつぽんをいへり浪化にてはもとより好て食たるものなり【諸艶大鑑】（二）世渡りとて丸魚突になつて天滿におはしける其繪をみるにヤスをもて突て取なり【元祿曾我】伏見船の乘合にて京の人と大坂の者と物爭ひする處大坂の人料理したすつぽんがあるが京人くゝし鹿子や紅染は都でなければはならぬ云々京は其頃迄すつぽん食ふもの希なりしを知べし【諸藝太平記】（四）元祿十五年放蕩女かここをいふにたとへ納戸ではすつぽんの料理をまいらうともそれはしりてがない云々又元祿十七年草子【難袖海】に京人江戸に下り居たる處寒さは鷄卵ざけにわすれすつぽんもくひならひ鷄のなき内はこれもましと云々あるをみるに下賤の食物なりそれより寛延四年の【江戸鹿子】新増近は五十年に近きに名産物の内にかずまへいれぬは鯰よりも劣りたるものにてありしなり寶永七年草子【伽羅女】に新地堀江の料理茶屋にて鰻のかばやき丸鍋まいる云々難波にては其頃うなぎと并び行はれたり江戸は【下手談義】に賣卜者のことをいふ處柳原の長堤に泥鰌の貪賣と軒をならべと有寛延寶暦の頃は此体にて葭簀の小屋にて今の山鯨の風情よりあさましき賣物と見えたり（是故にや今は價うなぎよりも貴ければごときうなぎやには是を賣らず）

すつぽん

團魚

○團魚高價なる故近時蝦蟇の肉を雜へて賣れることゝ有とぞ昔もかゝるたくひのことあり【今昔物語】大刀帶陣に賣る嫗の蛇を切て鹽を付て賣れることを載て其味愷になくて切々ならお魚買むるは廢置に買て食はむことを可止となりおり又料理茶屋はいゝ後迄も稀なりし事と見えて【きのふはけふの物語】武人十二三なる子を寵愛して常に盃を敎へけるがせつかくならへやがて十月十三日になるごときはたゞくひにつれて行そよく覺へてその時うたへといふほどなくおめいかうじやとて寺より案内ある云々賓

料理茶屋

はんぺい　不審なりしが是にてさとりぬ聊似たる形あれどいたく異なるをいふなりはんぺいといふ名もむかしは聞へず肉羹はゝもをよしとすれは海鰻餅なるべし【調味抄】に蒲鉾の條下鱧かまぼこ仕樣大鱧とへいといふものあしゝ中鱧の京にて步荷といふよし云々見ゆはもへいによろしからぬ故しかいふ歟どは詈る詞に多しどちくしやうとは唯畜生のことなりどせうぼねはど背骨なり京難波にてとたまといふはと頭なるがことしまた大なるをづうたいといふも是なり大なるはにく躰なればなり

鬼みそ　○鬼みそ【太平記】八幡詫宣の條の落書唐橋や鹽の小路の燒しこそ桃井殿は鬼みそをすれ是は燒みそ

天竺ひしほ　の辛きなり今天竺ひしほと云は種々の辛味を入たるひしほなりいふ心はから過て天竺に至るとなり

宇治丸　○宇治丸は饅鱺の鮓にて古く名高きものなり今の人うなぎた醋を忌といふはいつの頃よりいふことと

鱠　も聞えず【調味抄】鱠に用べき魚云々鰻やきて細く作り蓼酢おろし大根芹うど栗生薑ほけの酢大にいむべしとあり唯木瓜の酢を忌を常の酢もいむやうに誤りしなりうなぎを燒て賣家むかしは郭の内にはなかりしとぞ【新增江戶鹿子】（寬延四年撰）深川鰻名產なり八幡宮門前の町にて多賣る云々池の端鰻不忍池にて取にあらず千住尾久の邊より取來る物を賣なり但し深川の佳味に不及といへり此頃迄いまだ江戶前うなぎといふ名をいはず深川には安永頃いてうやといへるが高名なり【耳袋】に濱町河岸に大黑屋といへる鰻屋の名物ありといへり天明頃の事にやこれらや御府內にてうなぎやの初めなるべし京師も元祿頃迄よき町にはかばやきなかりしにや松葉端歌に朱雀かへりの小歌に松はら通りのかはや

なまづ　きはめすまいかと卑きものにいへり鯰魚は寬永の【料理集】にも載たれど是は近在にあるを廣く擧たる物なり【大和本草】に箱根より東に是なしと有これも又誤りなり【日東魚譜】に昔は江戶になまづなかりしが享保十四年九月井頭より水溢出たることありし其より鯰魚出來けるよしみゆ【增補總鹿子】に往昔は此魚關東には曾てなかりき享保年中より甚多くなれり西國のなまづとは其形やゝ異なり關東

駿河煮
うどん豆腐
茶碗蒸
杉焼

此法なり柔かに煮は駿河煮と混じたるなり同書するが煮たこをよく洗ひ其儘だしたまりに酢を加へいほのぬくる迄よく煮ごある是なり又今そば切豆腐といふを昔はうどん豆腐といひ茶碗蒸茶碗焼といへり是等もふと聞ては迷ひぬべし

○【後撰夷曲集】花に酒月に芋くふ春秋も冬にはいかてすき焼の鯛（行重）【櫻陰秘事】に杉焼のまはり振舞して町衆四五人參會伊呂三絃に面々杉焼ち鯛青鷺ならでは喰れずと云々杉焼と云に二種ありこれは【料理物語】にへぎやきこいへり鴨を大きにつくりたまりかけ置て皮を煮身をはさみ入一枚たらびにおきやくことなり又【調味抄】に杉の箱又面々にも和皷にどぶろく加事もあり鯛もしくは鱸鮎鮭取合に葱よく茄て又後卵餅を入煮ごと有面々といへるは面々杉焼なり是古の杉の折櫃なり又一種は一代男に杉板につけて焼たる魚お定りの蛸漬梅色付の嵯云々（其外鴈の板やき鴨の板やき有り）【調味抄】

かまぼこ
竹輪かまぼこ
板かまぼこ
下路と焼みそ

にかまぼこ竹に卷形を名とせり近代杉板よし（是こと雍州府志にも云り）こ云る是なり竹輪かまぼこの名は【櫻陰比事】にみゆむかしのかまぼこは湯熟ることなく焼たるものなり石屋の宗山か明暦の火災に逢たる記録に正月十八日本郷お弓町料理する人ありてそれをくひに行たるに火事起りて庭に火のこ落る勝手に行て見候へば膳立出來汁などもりかけ是あり庭に長火鉢を置杉大板のかまぼこ焼ちらし有之候を客三人にてこれを懐に入膳棚に菓子盆に見事なる枝柿蜜柑鉢につみおけり是をも懐中してはや此家に火かゝり申故亭主に暇乞申さず云々のり娘容儀は享年二年の神子なるにやきたてのかまぼこに生醤油つけて板ぐちかぶり云々いへり是にても知へし又板にて味噌を焼ことあり伊呂三絃に亂酒の事をいふ處むすひのしに小板の焼味噌漬いわしにほたではありやとさしつさゝれつ云々日光山の邊にて常焼みそは板に付て焼なりその板の形羽子板のやうにて表に縦ざまに溝にて筋を引その上に胡麻など入たる味噌を付爐中の灰に立てあぶるに溝の筋目ある故みこ落ず搖るに世上に下路と焼味噌といふこゝ

蘿蔔（千本）細粃（一石）麴（三斗）鹽（二斗五升）とありこれにては大根百本粃一斗麴三升鹽二升五合なりかくては久しく貯へがたし其うえ重しをおく事もいはず又法大なる蘿蔔（千本）鹽（三升）入おしをかけ置てなれたる時用是より鹽多ければあしゝ粃麴なども入べからず是又今の淺つけとも異なり又法蘿蔔をよく洗ひ三日ほどほし毎夜席をおほひ葉に少し赤み出て後さつと洗ひ水氣なき時に漬る大根一遍ならべ鹽を大根の少し見ゆる程にふり其上に麴をふり段々につけおしをかけ置べし又右の如くつけて後酒粕米粃鹽をつき雜右の大根を水にて洗ひ乾たる時つける尤よしといへり其頃大かたこれらの法を用ひしなるべし

ふくらに
すつぽう
櫻煮

○【甲陽軍鑑】（十）公界もみぬ奥山家の分限なる百姓料理するすべもしらず海老を汁にし鯛を山椒みそにてあへ鴈白鳥を燒物に鯉を菓子にして蜜柑をさしみにすれば能肴どもいづれを取ても喰ふべきやうなく皆捨る云々是究めて有ましき料理をいふなり鯉を菓子こいふのみこそさもあれ其餘はことなることもなし名は今も昔も同くて製し方變りたる物いと多かるべし服煮（フクサ）は【料理物語】になまこを大にきりだしたまりふかせ出しさまに入其儘もることなりすつぼうともいふ蚫烏賊もよし（【調味抄】も此法にて蚫いかの事なし）【調味抄】には鱆（タコ）の條にふくら煮は如常と有は上のしかたをいふなり今すつぽん煮といふは此すつぽうにて土鼈を專くふやうになりて名はまかひたり（其故はすつぽん煮とはいへしが是にまがへるなり）同書櫻煮鱆をうすく切さは〳〵と煮る江戸煮は一寸はかりに切煮酒等分にして久しく煮る半に醬油酢を加ふればやわらかになるといへり（西川祐信繪本笑の種にたこを江戸にゝせいといわるゝに依て大分の鱆を江戸荷に作ると有）今もこの定（ヂヤウ）なれど江戸もそのかみは然らず【料理物語】櫻煮はたこの手ばかりいかにもうすく切だしたまりにてきつと煮申なりとあれば櫻煮はもと

て云るなるべし

食前方丈

○【太平記】佐々木道譽か奢侈の事をいふ處異國の諸侯は遊宴をなす時食膳方丈といへりそれに劣るべからず迚面五尺の折敷に十番の菜肴點心百種五味の魚鳥云々飯後に旨酒三獻過て茶の懸物に百物百の外に又前引の置物をしけるに初度の頭人は奥染物各百疋六十三人が前につむ第二度の頭人は色々の小袖十重宛三番の頭人は沈の木百兩宛麝香の臍三宛添て置云々一様に是を引以後の頭人廿餘人我人に勝れむと様を替數を盡て山の如くつみ重ぬされば其費幾千万と云ことを知らず是をも負て取て歸らば互に是を以て彼に替たる物共とすべし友に連たる遁世者見物の爲に集る田樂猿樂傾城白拍子なんどに皆取くれて手を空くして歸りしかば云々ありこれらの前引物は客より出す物共なり

かよひ

今世飲食を持はこふ者をかよひといふ古きことなり【宇治拾遺】瀧口道則習術條ありつるやとにかよひしつる郎等また【沙石集】に（二）阿彌陀利益條女童かようしける（六）在家人學下禪師に申て拾得を呼てかようなんとせさせける云々同事なれば語も同じかるべしさらばかようは假名の誤なり

香の物

○香の物【秋齋閑語】に香物は生大根に限る物なりとは何によりたるにかおほつかなし【新猿樂記】に香疾大根とあるは香物なるべし江戸芝の金地院にて毎歳正月元日より三日までの膳部は香物生大根の輪切二を用ひしとぞ（今はあさ漬大根をかへ用ふとなり）これはそのかみ軍中の學びにて平生の事にはあらず又日光山の強飯に出すは生大根四五寸はかりはすに切たるなり是は種々の辛味を集めたる内なれば香物にはあるべからず【後撰夷曲集】澤庵和尚の歌とて大かうのものとはきけとぬかみそに打つけられてしほ〳〵となる樽の原にいさ哀なき町中の鹿（峡水）紫の糟漬貯の月すごき（素風）これは奈良つけなり今澤庵漬といふ香物はその和尚の製法なりとぞそのかみ其法を關西の國にては知らざりしと見えて貝原が【日本歳時記】に香物の製しやう多く載たれどもみな今の法にあらず十月條に

奈良漬
澤庵漬

後段

○【秋草】に飯の後に麵類にても何にても出すを今世は後段といふ後段といふ名目は古へなきことなり何を出すともそへ肴をして幾獻と云なり後段などゝいふ詞は用舍詞なり幾こんといふ詞を知らぬ故なりけに古くはいはぬ詞なり是も七五三といふことといひ出し此かたの名目とみゆ【料理物語】に後段の部あり其品麵類すゝりたんご雜煮などなり古くは雜煮なども初獻に出しゝなり【庖丁聞書】に魚羹とはかんを魚の形にして盛龜足指すなり惣して羹は四十八わんの拵樣有といへとも多くは其形によりて名有といへりこれ後にいふ後段の品々也同書湯藥の方あり又點心の粉と云もの有り此粉藥を點心と覺へたるにや點心は【輟畊錄】などに見えて食後の小食なりといへり先は蒸くわしの類を點心とするなり【七十一番職人盡歌】まむちうをてんしんとよめり【沙石集】に或僧人の請用に趣ところ本より食者なれは食後の菓子までかひ／＼しく行ひけりといふことあり是又點心なるべし今食後の引菓子是によれり此時香煎湯などをも飲へければ件の點心の粉その料にや今俗飯の湯は亭主より飲始るを禮とす安齋云古書に湯に限りて亭主より呑初るといふ禮なし客のもてなし飯計にて終にあらざれば飯の湯の時亭主隙になる故出て相伴するといふいはれなしといへり毒味は藥物のみに限らぬことなからそれを毒味したることなどありて例になりたるが毒味するを鬼といふも久きことなり【甲陽軍鑑】(一)大身衆振舞の時必亭主おにを仕尤なり云々

魚羹　點心　引菓子　飯の湯　鬼毒味

昔は寺々一食なり

○【著聞集】に在京太夫顯輔卿のもとへ或人ことをしておくりたりけるに櫻花かざしなどしたりけるを僧どもおほらかにくらひける云々あり此のことゝ云は僧の夜食なり無住が【雜談集】(三)に昔は寺々只一食にて朝食一度しけり次第に器量弱くして非事と名けて日中に食し後には山も奈良も三度食す夕べのをば事と山にはいへり未中の時ばかり非時して法師原坂本へ下りぬれば夕方寄合て事と名づけて我々世事して食すと云りとあり世上の俗は三度して夕食あればこれを世事と云にや事とは世事を省き

非時　事

すみつかり　**わさびおろしの製**

邊にて今もすみづかりとて調へて道祖神などに手向るよし委しくも聞ざりしがさいつ頃日光山に詣て其邊にて用る初午おろしと呼器物をみて其名のいぶかしくて尋ねしに此器にて二月初午にすみつかりといふ物を造るによりて名つくといへり其器は形よのつねの鮫擦に似て松板にて作りあまた竹釘を打て釘の末を兩方より諸刄の如く削りたりすみつかり調る法は大根を此器にておろし水にて洗ひよく搾り大豆を煎皮を去て酒粕を能摺漉たると二種交て煮る暫くして醤油を加へ鹽梅とゝのへて是を稲荷の

稲荷祭供

祠に供すその供へやうまづ藁苞を二つ作り一には赤飯を入一にはすみづかりを入て苞二ッ合せて一ッに結付るなり此は上野國沼田といふ處の一本塚稲荷は其邊にての大社なり關東惣社と稱す二月初午より巳後晴天三日をつらねて祭日とす若その三日雨天なれば日を延すとなり此初午及三日に近在より彼すみづかりを持來りて社頭に備る事夥き故に社前に四斗樽を幷べ置て是に入しむ樽に滿たるをば竹の簀にて水に漬洗ひて豆はかりを取て味噌に造る社家年中の食料とするに足れりとなむ竹木にて造たる

かりかりおろし

大根おろし今一種ある先年下總佐原より出たるを得たり是は兩股なる木の枝を用削りたる竹に鋸齒を刻み二またの木の間に横に幷へて兩端を釘にて打付たるものなり是も竹釘のも大根のおりたる樣はおなじ佐原にてはがりがりおろしといふ騎西にて用るも是なりといへり日光にて此製のことも尋けるに此地にてもその如く作れるも又箱に作りたるも有といへり調やうはかはりたれども是作の酢むつかりの遺製なり【本朝文鑑】に九螺が酷德頌に煎豆とは中おしく大根おろしとは剛發したしといへるは酢むつかりのことをおほめかしたりと聞ゆ

後段　點心　飯の湯　鬼面み　かよひ香物　奈良漬　澤庵つけ　眼煮　すつぽう　櫻煮　駿河煮
うどん豆ふ茶碗燒　すき燒　板かまぼこ　下跡と燒みそ　はんぺい　宇治丸　うなぎなまつす
つぽん　霰煮　江戸料理茶屋　奈良茶　自膳　淡雪豆腐

和雜汁 かざうなます うつら汁 あをがち

へに作りたる身をもりて出すべし柳の葉さき人の左又は向へなるやうに敷べしとあれば兩義なり今按の莖を筏に作るも杜撰にあらず

かぜちあへ かじやうなます

○和雜鱠かざうなます夏の料理なり【洛陽集】和雜なます蓼の酢たゞへて藍の如し【水榮料理物語】にかんざうなますきすごさよりかれいゑいゝかなご色々つくりまぜ候事なりこれは酢しほかげんしてあへけんばかりおくべきなり又鶉汁と云條にせんばほねぬきかぜちあへ又あをがちと云は雉子のわたをたゝきみそをすこし入なべに入てきつね色ほどになるまでいりなべをすゝぎさてだしを入にゑ立しだい鳥を入しほかげんすひ合せ出候なりとあり前の蓼ずも調やうはことなれどあをかちなりかつとは雜るをいふもとかちあへなるべきを字音に紛たてかざうと云ひしを訛りてかんざうと云かせちあへと云もせもし誤れり又おもふに嘉定の日などこれを作りしかばかじやうなますともいひけんをもとより和雜と書しなればかた〳〵混しあやまりて字音のやうにかさうとなりしか字音なればくわさうなり音訓のかちあへなます也

酢むつかり

○酢むつかり【宇治拾遺】幷に【古事談】(三)にも出たり慈惠僧正戒壇を築きたる物語に淺井郡司僧膳のれうに大豆をいりて酢をかけたるをなしに酢をばかくるぞと問はれければ郡司云あたゝなる時酢をかくればすむつかりとてにがみてよくはさまるゝなり僧正云いかなりともなしかははさまれぬやうやあるべき投やるともはさみくひてんとありければいかでさることあるべきとあらがひけり僧正かち申なばことく〳〵あるべからず戒壇を築て給へとありければやすきこととて煎大豆を投やるに一間ばかりのきてゐ給へて一度も落さずはさまれけり柚のさねの唯今しぼり出したるをまぜてなげやりたるをぞはさみすべらかしたまひたりけれどおとしもたてず又やがてはさみとゞめたまひける(この内柚のさねのこと見ゆればこの酢は柚の酢としらる今もゐなかにては木の實を酢に用ること多し)武州騎西の

納の日なれば名づけしなり然るを骨董集の書なりといふは似よれるをもて附會せる説と聞ゆ石原正明が【甲子隨筆】江戸にて二月八日十二月八日汁を煮る云々尾張にては二月は不さたなり昔のなき物をくふことなりと云ムシツ講とて無實の難を免るゝ義なりと云傳へたり蠟八は釋迦成道の義也と云は附會なりおことゝは何事ならんと年ごろ不審なりしを出雲國にては十二月十三日に煤とりなどやうのことをしそめて芋こんにやく赤小豆等の汁をくふこれを事始と云さて年神を祭りて正月廿日にかゞみ餅を撤却して飯を供ず是を飯くらへと云二月一日鱠を供ず是をなますくらへと云鱠くらへ七日ありて八日に年神の棚を取るこれを事納といふ十二月と同じ汁をくふといへりきこれにて事とは正月のことなることも初終もよくわかれたりといへり事始の條にいへり見併すべし二字一つに混じたること年中の行事に多し又いとこ豆をむしつ汁といへるはふし汁といふをかくあらぬことにいふなるべしふし汁は芋から赤小豆を入たる汁なり今のいとこにいもがらは入ざれども用ひしことも有しより此名を呼しものならんふしは芋からのことをり【女重寶記】大和詞の内いもの葉あづきの汁はふをつけとありふし汁なり又ことづて汁と云は【醒睡笑】にところゝ汁の出たるを座敷に古人ありてけふのことつて汁はいつにまさり一人出きたりとほむる是はめづらしきことばやと其子細をとへはされば此汁にてはいかほども飯かすゝむ故よくいひやるとのえんにことつて汁といふならんとありことと汁の名これらも似つかはし

○ばくち汁は【望一后の千句】あつまるは同じばくちの類にして瓜やなすびや夕顔の汁思ふに何にまれ小く四角に切たるを采のめと云これを汁のみとするなり

○夜鱠【庖丁家書】に經對すとき鱠なことをするなり皮をひくに依て夜鱠と云なり夜は川を引の謎なり【庖丁聞書】に鮎の夜鱠といふは鮎をおろして細つくりにして柳の葉をいかだの如く皿にならへそのう

（欄外見出し：ムシツ講　むしつ汁　ことづて汁　ばくち汁　夜鱠）

筍干

○さきに【雜考】の内に筍干を旬羮なるべしといひしは非なり【林逸節用】にも筍干と前また【親元日記】(三)寛正六年七月十一日小島向殿(飛騨)筍干一箱進上云々あり【本草】に醃筍といへるこれなり【料理物語】しゆんかん竹の子をよくゆにして色々にきりあはび小鳥かまぼこたいらぎ玉子ふのやきわらびさがらめ右の内を入だしたまりにて煮候よし又竹の子のふしをぬきかまぼこを中へ入煮候てきり入も有といへりこれは今の如く生の竹の子を用るてこゝみゆたごもとは文字のごとく乾たる筍にてありしなり

○太宰氏【經濟錄】に曆本二十四氣を書つけたれば是にて推て七十二候は知ることなり今曆本に餘候をば載せず半夏生の一候を載す半夏生は夏至の第三候なり夏至より第十一日に當る半夏艸此時より生ずるとなり今俗說に此日を過て生たる筍は虫を生じて竹にならず此日天より惡露ふる是故にその筍を食はずと云俗說あり凡七十二候を書つけなば皆かくべし半夏生ばかりかけるはいわれなし

○壚なき【年後撰集】(十五、雜一)壚なき年たゝみあえてこ侍りければ忠見しほといへばなくても辛き世中にいかにあえたるたゝみなるらん

さく〳〵汁

○さく〳〵汁【世話盡】(四)予正月七日或天台宗へ參侍て菜汁を振まはれて云寺てくふ〳〵じやくざくの菜汁かな菜を麁相に切てせしむるを世人詞にさく〳〵汁といへり又彼宗の根本空々寂々之法を以肝要なす然をじやくざといひしは兩意の挨拶なるべき歟(【料理物語】に蓬をさく〳〵に切などいへり菜を切る音なり【世話盡】は承應三年の撰なり)

いとこ煮

○いとこ煮今江戶の俗十二月八日にいとこ煑の汁を製るいつの頃よりの習にかいとこにの汁は古きものなり【寬永料理物語】あづき午房いも大こんさうふやきぐりくわい抔入中みそにてよしかやうにおい〳〵に申によりいとこに歟と有いつと定りてする物とも見えず又此をおこと汁と云ふはけふ事始事

おこと汁

つゝみやきなるなかの玉づさつゝみ焼は物につゝみて焼なり【醒睡笑】自閑落の條法師論に、を反古につゝみ焼て飯にそへて食はむごすと有すべてむし焼にすることをいふなるべし【應仁別記】落書云貞親は近江の浦の鮒なれやめにまかれてそ口に入ける是は今の昆布卷などにや

昆布卷

○精進物を肉菜にならひて作るもの【可笑記】(三)にさる御寺へ參る色々の御料理なるにきじやきのたぬき汁のとゞしめくこはいかなることにやと心容にてみればさもたき精進物の御菜なり寺かたの料理にて心得有べし【料理物語】にきじやきはとうふをちいさくきり鹽をつけつちくべて焼なり此製古きことゝ見えて宗鑑が【犬筑波集】しやうじの汁にまじるふしやうじ雉やきをよく／＼みれば豆腐にて【莚河】に此句に付て不審たつほごまつ白なしほ注にきじ焼はやき塩付る故なり（これをおもへばまことの雉やきも塩やきなるべし）又たぬき汁は【獸の歌合五番】左狐のかの穴ゑもん有たぬき汁のこんにやくと有り今も蒟蒻を汁に煮てしか呼なり【蔵絨輪】夢の窓つまは焦こじ扇たり結句狸汁にはけるこんにやく【芙蓉文集】桃鏡と云ものこんにやくの文に或はたぬき汁と化して舌つゞみを打する一際風流のさたたり又鴫焼のことも【雑考】にいへり精進のは【庖丁聞書】に鴫壺といふは生茄子のうへに枝にて鴫の頭の形つくりて置たり柚味噌にも用ゆあるは猶まことの鴫を用ひたるさま殘れり其後は名のみにてもこの形なし【料理物語】に鴫やき茄子をゆでよきところにきり串にさし山椒みそ付てやくなり慶長このかた今の形となれりとみゆ【寛永發句帳】德元か句に鴫やきやなすびなれども鳥の名【佐夜中山集】鴫やきはかならず秋の茄子哉

肉菜にならひて作る精進物　雉子やき　狸汁　鴫焼

○精鷄は【庭訓】に出つ安齋云此ものの名知れざる故全地院に尋ねしに其答書云煎點式に有之同吹鍋以沙糖點者也と云々いへり

精鷄

○壺やきはつぼいりといふ【寛永發句帳】諸くむそのつぼいりやにし肴

壺焼

りたる物は無之ニて冬向に成候へは見合次第打殺賞翫致すに付ての義なり（是故に近在迄も求めしこととしらる）これらのことありし故に犬を殺す事を禁ぜられたるより此風止て昔はくひたりと聞ばあるまじきことのやうにおもふはいとよきことたりむかし三州岡崎に獸店ありしとなり【東曲集】（正成）

獸店

獸のみかはをはいでみせ棚のこゝやかしこに岡崎の町むかし江戸四谷に獵人の市立ありしとぞ是故に今も獸店といふあり【類柑子】に鵙を鹽にさけふや雪の猿哀猿の聲さへたてぬなりけり昔四谷の宿次に獵人の市をたて猪かのしゝ羚羊狐狢兎のたぐひをとりさかして商へる中に猿を鹽づけにしいくつも〳〵引上て其さま魚鳥をあつかへる樣なり云々いへり（これに昔とあれば當時はなかりしこととしらる延寶天和のころにもやありけん煮賣の出來しは明和このかた歟

楚割

○庭訓往來に鱒楚割安齋云わりと訓は非也すはやりとよむべし魚肉を細長く割て鹽干にしたるをいふ楚は木のすはゑなりすはえの如くほそ長き意なりすはえわりを略してスハヤリといふ魚を背よりわるといふ說は妄言なり【和名抄】云魚條云々讀須波夜利【本朝式】云楚割云々條もえだとよむ楚こ同意なり【東鑑】（十）文治六年十月十三日條云於遠江國菊河宿佐々木三郞盛綱相添小刀於鮭楚割居折敷以子息小童送進御宿申云只今削之令食之處氣味頗懇切早可聞食歟云々殊御自愛彼折敷被染御自筆曰まちえたる人のなさけもすはやりのわりなく見ゆるこゝろさしかな按るに今加賀の產にすぢ魚といふもの

すぢ魚

あり鰤の骨を去りて鹽干にしたるものなり是即ちすはやり也すぢうをとは條魚を訓るなるべし古へも初より細かに作りしものにはあらぬなるべし削り物といふも此類の物をいふなり正しくはすはえわりなるをえわの反やとなればすはやりといふ其故に彼歌もすはえわりのわりなくと續けるなり

包み燒

○つゝみやき【和名抄】に包字をよめり【宇治拾遺】に天武の吉野に在せしに大友の妃たりし皇女鮒のつゝみやきの內に文を入て奉りしこと見ゆ又【新撰六帖】にいにしへはいともかしこしかたゝぶな

四足類料理

丹波國者の妻讀和歌語に後の山の方に鹿の鳴けれは男今の妻の家に居たりける時にて妻に此は何ごか聞給ふると云けれは今の妻煎物にても甘し燒物にても美き奴そかし又【調味故實】に懷姙の間いませ給へき物しかく\有てうさぎ（是も懷姙ありてより誕生の百廿日の御祝過るまで忌へし）鹿もろく\の魚頭云々【庖丁聞書】盛合せぬ品々猪に兎云々【尺素往來】巡役の朝飯明日令勤仕候云々四足者猪鹿羚熊兎猯獺等と魚鳥よりも初めに擧たり【海人藻芥】に四足はすへて不備之然るを吉野天子後村上院は四足をも憚らせ給はず聞召けるとかや四足の内にも狸汁は賞翫の物こ見えて【親元日記】（四）寛正六年十二月朔日御被官廣戸但馬入道狸進上と有これを汁にすること【守武千句】また【大草料理書】等にある事は雜考の中に載たればこゝに云ず【料理物語】（寛永中の刻）狸汁野はしりは皮をはぐみたぬきは燒はきよし味噌汁にて仕立候妻は大こんごぼう其外色々古法は味噌汁にはあらず酒のかす酒塩を用たり貞德が狂歌餕までもまた入たらずうましとて舌つゞみ打たぬき汁かな（精進にも此を學べり後にいへり又他物をもて似せ作るを何もどきと云もの色々あり【崑山集】宴語戒を一品が旬鰹を煮て河豚に賣る世の辛き哉今いふふぐもどきなり）また同書獸之部鹿は汁かひやきいりやきはしてよし狸はでんがく（山椒みそ）猪汁はでんがく〻わし兎は汁いりやき川うそかひ燒すひ物熊はすひ物でんがくいぬはすひ物かひやきとあり犬は鷹にも飼人もくひしなり【徒然草】に雅房大納言鷹にかはんとていきたる犬の足をきりたりと讒言したる物語あり【文談抄】に鷹の餌に鳥のなき時は犬を飼ふ少し飼て餘肉を損ぜさせじとて生ながら犬の肉をそぐなり後世も專にれを用ひたりとみえて【似我蜂物語】に江戸の近所の在郷へ公より鷹の飼に入とて犬を郷中へさゝれけるといふ物語あり【續山井】たかゝ淋のつゝ餌となるな犬ざくら（宗房）しゝくふたむくいは鷹の餌食かな（勝興）友山の【落穗集】に我等若き頃芝神宮地町方に於て犬と申者は稀にて見當不申事に候は武家町方共に下々の給物には犬に增

のくひやうの法なごはあざ笑ふ人多しといへり又【著聞集】に文治のころ後徳大寺の左大臣右大臣におはしける時徳大寺の亭に泉水をかまへられて中御門左府へ案内申されければわたり給にけり云々盃酌すこん有てゆきたかめしいたされて縁に候して鯉きりたり左府ゆきたかにしめし給にけるは鯉調修するやうをば存知たりとも食やうをばしらじくふてみせむとものしたまいけりまことにやう有げにてめてたかりけり人々目をさまさずといふことなし

物の食やう

○式作法の外に物くふに心がくべき事あり雖知苦庵道三【養生物語】に四條縄手にて正行が敵に後ろを射させなからしづかに竹葉(ベンタウ)をつかふと云こと天晴なる勇将とおもへり梅窓日そういやるで思ひ出した木村が上方勢をおつ立たいきほひより討死の時大手の前にて敵の方へ尻をむけ牀几に腰をかけて手の者五六人まんまるにして大佛餅を手に〳〵持しづかに食ていたその躰ことの外見事にあつた雨のふるやうな矢玉の中でのことじや云々不斷しづかに物を食ならはねはいそがしき時落ついて食れぬものじや食物が脾胃へおさまらず首のまはりにある物じやといへりこは英雄の振舞なれど併しながら又ならひにもよるなるべし

宍

○しゝとはもつはら猪鹿をいふ天武帝四年莫食牛馬犬猿鶏之宍以外不在禁例云々上つ代は天子も聞しめしぬれど中古より穢に准へたり【續古事談】（四）兵庫頭知定といふ陪従が娘に八幡の神つきて託宣ある處蒜鹿さらにくふべからずと有もこの知定なども日頃鹿をくひけるを誡むるなり【江談】（二）喫鹿宍當日不可參内之由見年中行事障子而元三之間供御薬御齒固鹿或猪盛之也近代以雉盛之也（【類聚雑要】供御御齒固鹿宍代用水鳥猪宍代用雉とあり）又上古明王常膳に用給又大饗にも用その止たる制は何の時よりと慥には知らぬ由みゆ神供には春日の若宮へは狐狸を奉り諏訪の明神へは鹿を供ふる古へよりのことゝぞ上さまには物し給はぬ事となりても其餘は女さへくひたりとみえて【今昔物語】に住

に北條氏康の前にて嫡子氏政食の相伴の時氏政一飯に汁を兩度かけたる物がたりありまた【悔軸】に貴人よりはやく汁などかけず湯をのむとも見合てはしを下におくべしなどいへり

鵝足

○鵝足といふことあり串などにさしたる物の串の本を紙にて卷て其餘りをひねり置てくふ人の手を汚させぬためなり【調味故實】にさめといふは魚なり磯にあり盛ことと口傳ありきそくあるべし【庖丁聞書】筋打といふは鶴を毛なしはきの方より刀目を入て引さけば能ころにさけるなりあぶりて鵝足をさして添肴などに出すなり又梅燒といふはくづしを梅ほどにまるめ湯びきたれみそにて味をつけて青のりを衣につけて梅の枝に指て鵝足付を添肴などに出すなり又くりから燒といふは鯛のひれを串に卷つけ燒て鵝足を付添肴に出すなり（この外猶多くみゆ）【貞順故實條々】魚の折の中に上りたるはきそくの折たるべし惣てきそくの折は賞翫にて候また鵝足の物給やうの事給候を左の手のうへに右を披下時鵝きくひ抜て給候事に候是は御酒の時のことなり只給候時は左の手にて抜候て受用候これも人の覺悟に依て相替候とあるをみれば串にさしたる肴にあることゝみゆ【庖丁聞書】に向の茶は五種の削物饒鳥云々鵝甲又は土器に高立して盛なりとあり古圖をみるに六角の折あり是なるへし故に亀足も鵝の足に形とりし名と聞ゆ又おもふにこのこともこ別足より出しなるへし

別足

○物を食ふに法あり【古事談】に德大寺の大饗に宇治左府令向給時如法令食給云々事畢之後別足ノ食樣見習ハントテ人々群寄見ケレハ器目ヨリハ上チスコシツケテ切タリケルヲカヽマリタル方ヲ一口合

大臣大饗

食給タリケリ（大臣大饗は大臣に任ぜられたる人外の大臣を正客にして百官を相伴に招き饗應あるなり正客の大臣を尊者といふ別足とは鷹の捉たる雉の股をいふ雉必やき鳥にするなり多く刀目を入て足のさきを紙にて包むなり）膳の下たる時人々打よりてくひのこされたるをみる安齋云古の人は禮儀古實を貴びし故如此事も心をつけて見習ひしなり今世の人は風俗かろ〳〵しく樂の先智慧のみにて食物

本立にてさいの數のことなり七五三の膳部にはあらず七五三といふは先三とは式三獻なり膳三つ有（引渡し打身わたいりなり）五とは五獻出すをいふ其五獻は初獻は烹雜（皿にもるなり）添肴あり二獻まんぢう添肴あり三獻あつもの（すひ物のこと）四獻むしむき（冷麥ぬる麥時節によるべし）添肴ありこんやうかん（又すひせんかんの類）添肴あり右の膳いづれも組付もの有七とは飯湯づけにてもおなじ）七の膳迄出すをいふなりこれこの食物の調樣は庖丁の家に傳へて故實あることなり武家の知ることにあらずとあり按るに【貞順故實條々】三ッ目五ッ目七ッ目八ッ目といふことあり三ッ目は一より三迄三膳五ッ目は一より五迄五膳以下これに准ずいづれも一は本膳なり各一組づゝの膳なり七五三はこれ幾本立といふを幾ッ目といひたる歟（八ッ目は九ッ目の誤ならむ）【老人雜話】に信長齋藤か所へ聟入の處に七五三式法を用と有り七五三はもと奇數を用偶數を忌よりのことと思はるゝに七五三

菜

の膳立を書たるをみるに本膳ともに四膳あるあり菜の數は增されとも誤なるべしまた五本立七本立は膳部にて菜の數をいふにあらす（類聚雜要）御齒固六本立の圖あり又【後三年合戰繪】などをみるに古への膳部は高き臺にて食物はみなかはらけに盛たり居やう中に飯を高盛にして置そのまはりに菜を排<ruby>ナラ</ruby>べたり【海人藻芥】に每日三度の供御は御めぐり七種御汁二種なり御飯はわたりたる强飯を聞召なりとあるもその躰にならべたるもの故菜を御めぐりといふなり菜は數々ある故に後世これをおかずと云【卜養千句】にいり昆布に又よろこぶのおかずにて旅の客僧しはしとゞめん又【雜要抄】をみるに臺三つ盤四つ有てもこれを三本立さいふ五本七本も皆臺につきていふなり菜はあまたあり大臣大饗は人數多きによりて一脚の机を二人にて用ひたるもみゆ【調味故實】に僧の膳にも幾本立と云ことはあり三本立五本立にも打身はすしほをばそへず只うち身ばかりをすふる也とあり

汁かけ飯

〇【說文】曰饡以羹澆飯也これ汁かけ飯なりこゝにてむかし汁をば飯にかけてくひしなり【武者物語】

○方外の事なから澤庵が晝飯は何のために食ものそひだるきを止めむためにと喰ふものゝかひだるきことなくはくふて入らざるものよそへ物なくて飯のくはれぬはいまだ飢の來らざるなりもし飢來らば精髓も撰ぶべからず受食如服薬せよと佛も遺教したまふ衣食住の三にこそ一生をくるしむれ此心あるより我は三の苦みなし

昔武家にて晝飯食ふことなし

○武家にて晝飯くふこと昔はなし其も勤きはたらく者はくひしなり【今昔物語】などに晝の食は往々見えたれど夕飯は見えずこれ又多く二食なるにや【飛耳蝉子】に侍は中食といひ町人はひるめし寺がたには點心道中はたごやにては晝息みといひ農人は勤隨御所方にては女中のことばには御供御といふこれをあやまりておこととゝ云はわるしといへれどさばかりにも非ず【きのふけふの物語】ゑんりやくじの小ぼうし御とき過て山へ木葉かきに行とてちごのちうじきをぜんたなにあげをき其下に小ぼうしがひるめしもおきて云々小法師ばら山へ行さまおちごさまこゝに御ひるが御座る九をうつたらばこしめせと申云々

五本立

○【鹽尻】に云或問中世の書に五本立七本立といふ膳あり今いふ七五三のことゝ歟予云膳部家に聞り五本立とは五菜盛七本立とは七膳なり紫樂行幸には九本立なりしとかや其傑具皆甚美を盡したることにて是を膳家樂膳と云予もこれを傳へ侍れど紫多なる故略之七五三は唯三膳なり【秋草】に七五三の膳といふを今世知らぬ人には本膳にさい七つ二の膳にさい五つ三の膳にさい三つ付ることゝ思へり（【安齋隨筆】に地下にて規式の膳部七五三といふは本膳に菜數七つ云々何れも汁は數の外なり香物も數の外なり五々三といふも右に准じ知へし五三々また同じ右は三の膳までのことなり五の膳七の膳までも出す時は七五三とはいひがたし菜多くあるなり然れば今世さい數のことを七五三五々三なとゝいふは誤なり七五三の膳部といふは別のことなり【大草流七五三膳部記】を見て知へし）夫は七本立五本立三

七五三

嬉遊笑覽卷十上

○飲食（飯 臺 ひめ 幾本立 七五三 菜 龜足 別足 物の食やう 宍 四足類 料理 獸市 楚割 包み燒 昆布卷 雉子燒 狸汁 しぎ燒 糟雞 壺やき 筍干 ざく／＼汁 いとこ煮 筏鱠 和雜鱠 かぜちあへ 酢むつかり わさびおろし 異制 稻荷祭供）

飯臺

飯を臺といふ女房詞なるへし【源氏物語】夕霧卷落葉の宮の不食なるを御息所のすゝむる所おほとなふらなどいそき參らせて御臺などこなたにてまゐらせ給ふものきこしめさすときゝ給ひてとかう手つからまかなひなほしなとし給へどふれ給ふへくもあらず（なほすとは裂むしりなごするにや今も病人小兒などにはかくしてあとふ又切るといふ言を忌てなほすといふなり）同卷夕霧の館の處たれも／＼も御だい參りなとしてのごかになりぬるひるつかた【橘姫卷】薫大將宇治より歸らむとする處御かゆこはいひなどまいり給ふと有こはいひは古の常の飯なれど粥をいふ故にそれに對してかくいへるなるべし【海人藻芥】に公家御膳飯は強飯也執柄家等如此姫飯坌分略儀也但人々依好惡用之【資益王日記】に明應十年正月條諸社ノ遙拜ノ後三獻アリ次ニオコハ次に比目【和名抄】糒糅和名比女或説云非米非粥

ひめ

之義也こあればひめは今世の常の飯ごみえたり御臺と御膳といふとおなじ食は必す臺に載るものなればなり

飲食ノ節用

○幸ありて富貴なる人といへども飲食を節用せんこごは衣服居住よりも第一に心得常に凍餒のことを思ひてわが分に過さず精粗美惡も得たらんまゝに安んじ用ひて擇ふことあるべからず惡食蔬食をも忍びなば凡百の嗜欲を抑へ制せんこと何の難きことあらん

煮て食ぬ殻は物の陰を尋て捨たり老父歸り來て蟹を呼べども出こず唯細き聲にていらへするやうなればよくその聲をきけば甲らは茶畑はさみは木の下ばゝがはらふくれたといふにぞやがて其あたり尋ぬれば殻とも捨てあり老嫗は腹脹て堪がたげにうめき苦みて死たり是山城國相樂郡蟹滿寺の古事より出たる話なるべしその古事を考ふるに【舊本今昔物語古今著聞集沙石集元亨釋書】等に出てみな少ツヽ異同ありいづれも蟹を飼しは女にてその女蛇におもひがけられしかど蟹出て蛇をはさみ殺しぬと見えたり【元亨釋書】には蟹も手足ちりみだれて死たりといひ此女法華經普門品を誦し覺えたりと有今昔著聞には觀音經をよみて加護を得たりといへり（郡も久世郡と有今とは異なるにや）又今昔には其に立たる寺の名を蟹滿多寺と云ふ其を世人和かに紙幡寺と云也けり本緣を不知故也とはあれ其綺田村にかにはらの社と云あり是神名帳に綺原神社とある是なるべしと【山城名勝志】にいへり然らば蟹滿多は綺の假字なるをそれにつきて出きし是も昔話ご聞えたり

（唐山の諺に物語といふはあらぬ物の人のことばを云なり【秋坪新語】（二二）物語ごありて李姓安德は巨族ナリ所畜猫鴨犬豚忽作人言こゝをいへり又かしこの俗語に說鬼話と云はひとり言なり【傳家寶二集】（三三）凡無人處自言自語或一人獨行路自言自語俗謂之說鬼話極是下賤窮相切須謹戒と見えたり

心學

（）心學寬政の初めつ方より中澤道二と云もの來り江戸の所々にて心學講釋をなす聽聞の人あまた有て行はれたり或人の話に聽て聊か道二が事をしるせり道二先生中澤氏名義道俗稱久兵衞京師人也以享保十年乙巳秋八月十五日生性好學然家貧無餘暇常疑妙字義聞高僧宿儒後自有發明及長貴石田先生之敎於是游手島堵庵先生之門深極性理發奥歲五十有五薙髮号道二來於江戸創說神儒佛三道專爲俚解命名道話從諸侯大夫致庶人賤隸聞其說者喜之社友日衆門盛井記先生口授而名道話聞書行于世先生歲七十九享和三年癸亥夏六月十一日病没于參前舍埋葬在本所猿江妙壽寺文政十三年庚寅三月十七日草

○【古杭夜遊錄】に詭話有四家一曰小說謂之銀字兒如烟粉靈怪傳奇公說案皆是博拳提刀趕棒及發跡變態之事說鐵騎兒謂士馬金鼓之事說經謂演說佛書說參謂參禪說史講說前代興廢戰爭之事

はなし家

○また【堯山堂外記】杭州男女瞽者多學琵琶唱古小說平話云々また【秋坪新語】滄州趙商玉善說平話俗名江湖者是也云々これ今いふ談議說法はなし講釋うきよ物まねの類なり笑話には【笑林評同續笑林廣記四書笑】など皆落し咄の書なり其他いと多し

豆藏

○今豆藏といふは口まねといふことより然名付る歟又は物まねする者なれば眞似藏の訛か近ごろ江戸にははなし家と稱する者石井宗叔より盛に行れて今是を業として口を糊する者其類擧てかぞへがたし

口づゝ

○次でにいふ舊本今昔物語傒平入道弟習算術語の中におのれは口づゝに侍れば人の咲ひ給ふばかりの物語もしり侍らずとある今いふ口無調法なり

寄せ

○寄せとは人集する處を云ふはじめは話淨瑠璃凡て興行するには手ならひの師又は水茶屋など廣き處をかりて興行したりしかやがてその家を設て業とするもの出來軍談をはじめとして落しはなし其外種々音曲あやつりかげ畫狂言ものまね等興行せざるはなしこの處を名づけて寄と云ふ人をよする故なり又席などゝもいへり定まりもなく人々思々に是をなす文化十二年の頃このよせと云處より乙胸仁太夫方へ出銀することゝなるに至りて江戸中に七十五軒ありそれより十年ほど經る内に百二十五軒となる其後飢歳あり又女上るり興行人集めを禁ぜられてより寄場も減て七十六軒となりしが此ごろ皆禁止となる

蟹のはなし

○兒どものはなしに猿蟹の外に老父老嫗ありしに老父は慈悲深くよろづの物を哀れみけるに庭の内に蟹の居たるを常にやしなひ食物をあたふる時はかにごそ〳〵よといへば聞しりて出きぬ老嫗はそれにことかはりて慳貪にしてなさけを知らぬものなりしかば老父の他に行し時を伺ひその蟹どもを捕へて

曾呂利

々）曾呂利（【狂歌咄】といふ草子巻首にすこしばかり曾呂利が事をしるし外題をなほしそろり狂歌咄と名づくそれに此者の本名は新左衛門といふ泉州堺南庄日口町の內に淨土宗の寺內をかりて居住せし刀の鞘師なり細工に名譽を得て小口より刀をさし入るにそろりと鞘口よくあふ故に異名をそろりと云けるが秀吉公へ召出され細工を承るにおごけものにて輕口を申せし故御きげむに預り出頭せしなり云

藤六に同名の者

々流布の【太閤記】にもかくあり）さて藤六とておかし氣なるもの同名あり【宇治拾遺】にむかし藤六といふ歌よみあり人の家に入て煮ゆるものを喰て歌よめかしといふ物語あり又【本朝文鑑】に藤六坊が傳ありこれは狂人やうなる乞者なり曾呂利は【洛陽集】短夜やそろりが袖に月もなし（竹子）【大幣】木やり歌うつものゝ中じやうぜんがこつくいしよろりがむちは鹿の角云々【俳諧溫故集】（古人の句の內）そろり新左衛門「祇園會や詮義まち〳〵引の山【續五元集】（上）慓しと白骨のかね付て居たる曾呂利話をよむに夜長し（是は曾呂利が【煎燈新話】を見るヿ付たるなり延寶八年の作とぞ（さて

スッパ

按るに此そろりといふヿ刀劍の室（サヤ）などによるよしの說は非なるへし【壚尻】に篠木庄出川村に往昔曾利呂惣八といふ盜人あり是を時俗スッパといふ戰國の時村落に有て人を惱しける者共の稱なり惣八が子篠木お松といへる少年信長公にめしつかはれ本能寺の變に逃れ在所にかくれて老しといひ傳ふ惣八が事は大草村福巖寺にもさま〳〵稀有の事を語り傳ふ彼村の邊長範が事をいふものは彼スッパを比して言けるを今は直に古のことゝするにやと見ゆといへり曾呂利はこれより出しなるへし又惣八がことは【壚尻】の說もしからざる賊猿樂狂言に惣八といふスッパ料理人に詐りなりたる事を作れりかゝ

ラッパ

れば時代今少し古きものにて名高きスッパと見えたり（スッパは關東にてラッパといふとおなじことゝ聞ゆ【北條五代記】に氏直亂波（ラッパ）二百人扶持す同類の內四頭あり山海の兩賊強竊の二盜是なりとありわつぱすつぱといふ諺は是なるへし但しわつぱはらつぱの訛にや）彼新左衛門はお松などがゆかりあ

三人ひとしくそはともあれ母の命を救ひ給ふはこれ大恩人なりとてその夜はひたすら留めもてなし夜の明る頃ほひこがね十ひらを贈り今より好人となられよかしと勸めけるに感悟してそのこがねもてなりはひのもとゝして遂に千のこがねを貯へもたり家とみて今に榮ふこれ明末の事なりといへり此物がたりなどむかしより聞傳ふるは本邦にての事のやうにいへり此類多かるべし

落し咄

○落しの咄は【醒睡笑きのふはけふの物がたり】等の話の中には今當にもの語るもの往々あり

お月様いくつ

○今宵の月をみてお月さまいくつ云々おまんどこへいた油かひに茶買にとて戯れ唱ふることあり其後わきまへかたし但し油かへに云々いへるは是もとゝと物がたりにてありしにやとおぼし【甘露寺職人歌合】に山崎やすべり道ゆく油うり打こぼすまであく涙かな判云此歌の故事をおもふにも山崎のうばがもとにあぶらかひにいたればとこそ侍れそれを今作者なれば油うりとよめるも本說にたがふありたゞ油かひと詠べきにこそとあり此事いまだ考へざれどもさる物語より兒戯は出たる歟

咄に名ある者

○輕口【三代實錄】に大神朝臣虎主が傳に幼より俊辨にして醫道をうけ學ぶ性戯語を好み最滑稽たり云々嘗て禁中より出て地黃煎を作るの處に向ふ途にて友にあへり問て云く何れの處に向ふ答て云ふ天皇の命を奉はりて地黃所に向ふと其輕口皆この類なり天皇を地黃の對に取たるなり

○俳諧堂が【日工集】（三）康曆三年辛酉十一月二日同大濟赴二條准后之招永和山等三五人官人爲里小路等數人時有善談劇者謂之物語一日日本紀俳宗論二日准后將軍兩人入內將馬之戯ふるくらかやうのものあり又滑稽にして興言利口に名を得しもの

野郎藤六

野間藤六二【醒睡笑】に）信長公岐阜に居られし時尾張より滑藤六參りし咄あり【寫懸想物語】に滑須の城に住給ひし織田城之助信忠の御內に野間藤六とて名譽の當意利口咄の上手あり其弟野間衛門作といへり）

仲內

仲內叢殘後覺弟六仲內と云ものは世に無類の咄の名人にて秀次公の御前を放れず咄多き中にも十の內李分は親世又次郎が當氣たることをまふすと云

佛すといふ酒呑童子といふこと謂れなし【著聞集】に源頼光鞍馬詣の時市原野にて鬼同丸を誅すと云或書に云市原野の乾に當て一の岩窟あり鬼同丸といふ狡童住めり其先比叡山の兒也山を追出され彼窟を構へて隱れ住けるといへり按るに大江山の畫卷物は古法眼元信が筆なり是は白猿傳を頼光の事にして作りたるものなり渡邊綱が鬼を切しといふも彼鬼同丸が牛の中にかくれ居たるに牛追物に射られしといふことなりしをさま〳〵附會したるなし但し

羅城門鬼

羅生門の鬼の諺は古よりいひしことにて都良香が詩句を或人月夜に羅城門の邊にて誦したるに樓上に鬼神のあはれとほめたること【江談】にみゆ又盜人羅城門の上層に登て死人の骸多く有しを見たる事【今昔物語】にみえたりこれは死人を葬ることをせずこゝに捨置ものも有し也【隣女晤言】に大江山のこと或家の日記とて引たる文古躰ならず又その記しさま如是ありとなりとあれば旁聞にてたしかに日記を見たるに非ず且前太平記等の俗書を正とすへしといひて【湖亭涉筆】にいへるを俗說によりたりといへるは云ふにもたらぬひがことなり

花咲せ爺

○花咲せ爺【宇津保隨筆雜】の園花さかせ爺めされずや（老尾）【類絨輪】白粉なくば世は黑い貞花姿しこむ忘八が咲せ爺（不角）物羨みしてからきめに逢へる趣福富の翁が畫詞にも似たり

○又いと後世の話にはいまだそを記したる書こゝにわたらざるにまづ其物がたりとまたくおなじきありこは濟商等が話を聞つたへたるなともあるべし【現果錄】に蘇州石湖の民赤貧によりて一老嫗の窓へあるをしりてその房に入て床後に伺へば嫗は燈下に紡とり居れるが忽ち青面のもの出て圈をもて項にかくれば嫗も吊死せむといひて繩を尋ね梁にかけてすはやと見えければ高聲してこれを救ふ嫗が子三人駭きてはせ出嫗が恙なきをよろこびをいひてさても恩人は黑夜にいづくより來ませるにかと問へばとみにいらへかねしか我實は夕人なり貧極りて小ぬすみをなし命をたすからんとすおもはずも君が母とじ青面の鬼物に害せられむとするをみてわれを忘れ聲たてたり我罪を赦し給へとわびつれば兒弟

其内に入ること三寸許燈心の搖くを候て引出せば虫これに喰付て出づ長一寸ばかり黄白色首赤黒くして蜈蚣の如し出る時屈曲す背に二封ありて駝背に似たり故に駱駝の名あり

桃太郎

○桃太郎が鬼が島に寶物を取りに行たること桃は五木の精にして仙木たり故に邪氣を壓伏し百鬼を制するよし漢土の諸書に載こゝにもゝのいみに是を用此説によりて鬼を制伏するを桃太郎と作れるなり鬼の寶は【平家物語】祇園女御の條に是ぞ誠の鬼とおぼゆる手に持たるものは聞ゆる打出の小槌なるべし又康頼が【寶物集】打出の小槌のこと【西鶴雑組續集】なる勞色が金帽子を得たる話と似たり（これらの事既に醒醉笑が【骨董集】にいへり）また【狂言記】に鬼の寶のことあり又【江談】に見えたる朱雀門の鬼の笛なども寶物たり猶いくばくも有べし【安布良加須寶】をば身にあまる寶持にけり蓬萊島の鬼も死べし【望一千句】寶の數をはこぶ黒舟かくれ蓑かくれ笠きる旅やつれ【俳諧梅おろし】鶏冠が高麗の何土舟の崩れぬ内に子は麻人

鬼が島　舌きり雀

○鬼が島【保元物語】に爲朝鬼島の名を問給へば鬼が島と申しければ汝等は鬼の子孫かさん候さては聞ゆる寶あらば取出せよ見んとのたまへば昔はまさしく鬼神なりし時はかくれ蓑かくれ笠うきぐつ劍なんと云ふ寶有けり【百喩經】に雜譬喩經日向東海邊見二人共諍□形相履水瓶殺語杖とあり

○舌きり雀のこと【捜神記】（廿）慈雀得報ことに本づくや【宇治拾遺】（三）雀報恩の話あり其内に瓢の中の米用るに盡ることとなし【睽車志】（宋郭彖撰）に孝感によりて米の袋を得たるに其米つかへとも減ることなき物がたりも似たり【色芝居】（正徳年間の作）むかしの女子のことをいふ處糸より謎かけむいさばとゝの昔はなしに舌きり雀の舌つきおもしろかり男のはてのやうにそだつ云々

酒顛童子

○酒顛童子の事【山城名勝志】云【羅山文集】云洞在八瀬河西山中俗號曰酒顛童子洞【[illegible]】云門跡輿舁丁八瀬童子也云々鬼の洞は此線によつて名付たる歟每年七月十五日村民この洞の前に來て念

すゝきの葉にてひきて切殺しぬすゝきの葉のもとに赤く色つきたるはその血の痕なりといふ物語川合には今も語れり（信濃の人の語るを聞し事あり）桃太郎の話といづれか先なるかもとづく處は竹取の翁などにや古き雀小弓の射乏に嫗の河ばたに衣洗ふ處に瓜の流るゝ畫をかきたる有り大和貞享この繪とみゆさて瓜姫のことは小兒姫うり（【食物本草】に金鵞蛋といふ物是なり葉も蔓も瓜に似てちいさし）を人面に繪き衣服を着せて玩弄とする事【雍州府志和漢三才圖會】等にも出つ【枕双紙】にうつくしき物瓜にかきたる兒の顔とあるも此事なり【俳諧懐子】（十）丸ひたひには名残こそあれ（小町女）姫瓜をみはやす夏もみな月に同集（四重昌）白粉をぬればや人の小姫瓜また【洛陽集】姫瓜や三千の林檎顔色なし（自悦）又【京羽二重】姫瓜のはたけも見せぬ化粧かな（了心）又【雅筵酔狂集】に姫瓜は人のちぎるをむつかしご葉がくれけりな露の丸貌（自注に）この瓜に粉をぬり目はなをつけて兒女の弄とすなどあまたみゆ姫ごはうつくしきをいふ（うそ姫ひめ糊の類なり）また機織こゝ世のことは【淀川】にとこともいはずちぎりこそすれ秘藏する庭の草花小姫ごぜすゝきの糸で絹を織まね（貞德自注）小姫こせか絹を織まねするによりて庭の薄を秘藏するなりといへるも昔より小姫子の戯なり鳥の鳴たるこあまのしやくは【日本紀】神代卷に天探女無名雉か杜梢に居るを見て天稚彦に告て射斃しむる事ありこれをふまへて作れるのみにもあらず小き虫にあまのじやくと云ものあり春夏の頃地の上に穴あり其内に此虫居るを燈心にて釣出す戯ありあまのじやくの名これらに據る（按るに此虫をアマノジヤクこいふは【和名抄】に馬陸を阿末比古と訓り馬陸は京師にて圓座ムシこいひ江戸にてヤスデといふ此虫の和名アヒコといふをとりちがへて彼地むしに其名を負せしが訛りてアマノジヤクとはなりしにや虫の名より天探女をとり交へしことゝしらる

釣駱駝

○【事物紺珠】に釣駱駝通雅に釣槖駝といへる虫なり春夏の時地上に三分計の小穴あり燈心に油を蘸し

猿の尻

こまりたりとは申せども山へせんたく川へ柴かりにと申ければ古めかしのはなしやと云々今も小兒のすなる昔々の咄はげに古きものと聞ゆ猿の尻は眞赤なといふこと昔より彼を赤きものに喩ふ【新猿樂記】に十三娘の條著歸猶猨尻また【犬筑波集】（活字本）さるの尻こがらしゝらぬ紅葉かなゝどみゆさてこの詞はむかし咄に云來る事なり【尤草子】赤き物の内にいひたるもそのことをとれり【犬子集】一正が句むかし〳〵時雨やそめし猿の尻（元和寛永の頃の發句）また【俳諧染糸】の千句に「おもひながらも盤をつどめぬ人事はいはじや猿の尻わらひ狐格子をのぞく往來（元祿中）また【丹前能】（元祿十四年）紀州日高河の故事を物語する處になんぼうおそろしき物語にて候猿が尻はまつかいなと語りぬとあり是等みな幼稚の者のむかし〳〵を物がたる趣なり猿は赤いといはん爲にいふ又猿と蟹の古き話もあればなり赤いとはまつかくさいといふ言の訛りたるなりまつかくは眞如此なりそれを丹心丹誠の丹の意にまつかいといへるは僞なきことなるを後にその言葉をされて猿の尻などいふことを添て遂に眞ならぬやうのことゝなりて今はまつかなうそといふ是は疑ふべくもなく明白なるをまつかといふなれど實はうつりて意の表裏したるなるべし

狸が火偸の咄　瓜姫の咄　幼あそびの話

○狸が火偸の咄は【古事記】の素菟の故事に似たりその他小兒の昔咄古書に似たるもの多かり又必古事にもよらずをさな遊びのこと付て出來しもあるにや瓜姫の咄など是なり今江戸の小兒多くは此話をしらず老父老嫗あり老父は柴を刈に山へ行老嫗はせんたくに河へ行たりしに瓜流れきければ嫗拾ひとりて家に歸り老父に喰せむとて割たれば内より小き姫出たりいつくしき事限りなし夫婦喜びて一間の内におく姫生たちて機織をる事をよくして常に一間の外に出すある時庭の木に鳥の聲して瓜姫の織たるはたのこしにあまのじやくが乘たりけりと聞えければ夫婦怪しと思ひて一間の内に入てみるにあまのじやくが姫を繩にて縛りたり夫婦驚きて是をたすけあまのじやくを縛り此女薄の葉にてひかんとて

かもしは放し歟といへり無端の義とする說もあれど非なるべし按るに【源氏物語】（竹川）に薰が藤侍從のもとに藏人少將と物語りする處こよひはすこしうちとけてはかなしことなどもいふはなしはこのはかなしことの略にや

巡物語
利口物語
百物語

○巡物がたりと云ふは【古事談】（五）鳥羽法皇御灸治の時あつさなぐさめさせ御座さむとて御前に祗候の人人に巡物語可仕と少々利口物語など令申の間粟田座主行玄御持僧にて祗候中云此物語同者佛神靈驗の事を可語申云々（今の落しの咄なども利口物がたりなり）百物語といふことも又是巡物語ながら怪事を語る戲なり百物語といふ草子あり作者の名并に年号等もしるさゞれども万治頃の板本とみえたり其序にいにしへ人の語りつたへしは何にても百物語をすれば必こはきものあらはれ出るとうけ給りし云々かた〳〵唯今はなし給ひし其中にこはき物出たりかの奴が着たりし衣裳の色々を見たまはずや牛首布のかたびら糊ごはのしふかたびらみな〳〵こはきものなり云々又【宗祇諸國物語】といふ草子に越後にて或侍傍輩數十人集り白物語を始し此ことの作法とて人のいひしは一間なる處に其連衆こもり居戸の口々ひしと鎖をおろし燈に灯心百筋いれ青紙を以て闇灯に用ゆさて座中のひとり〳〵兩手のおや指をひとつ處によせてしとゝくゝり働事を得ざるやうに相はかる物がたり初めてより一こと〳〵に灯心一筋ヅヽ消す然るに連衆はいふが如く手を結ぶによつて其事不叶臆したる中間小者を置んに自然の時さはがしからん貴僧は動せぬ本性なれば此ふしぎの證據のためながら此役つとめてたふべんや云々（此草子何人の作なることをしらず貞享二年と序文にしるせり其頃の作とみゆ）又【元祿曾我物語】に化物の出る百物語とやらをはじめてはといへば是一興たるべしと行灯かすかに浴衣打かけ云々【俳諧染糸】に鬼ではあらじ夜半の足音中々に百にはみてぬ物がたり趙翼間居詩呼童說鬼遣宵長

ぢゞばゞの物語

○【異制庭訓】に祖父祖母之物語とあるは一休はなし序文に祖父と祖母との咄よりしらぬ我なればかし

おりその前に床几ならべたるに聞人尻かけたる處あり小屋の軒に看ばん懸て太平記信長記四十七人評判と書たりこれ今とかはりたる事なし【世事談】に江戸にては見附の清左衛門と云もの始なり年來淺草御門傍に出て【太平記】を講ず此ものは【理盡抄】といふ太平記の評判の書を只講釋せり又其頃赤松青龍軒といふもの堺町に芝居をかまへ原昌元と名のりて軍談をなす京都にては原永惕といふもの世に鳴る【理盡抄】は寛永頃北國に法華法印日勝と云僧名和伯耆守長年が遠孫より傳へたりと作せり【我衣】に清左衛門は淺草御門の側に高き處ありしが其上にて人を集めたりこゝは今の御舟藏前にある稻荷の舊地なりとぞ清左衛門は京師の人なり類の叢ありて江戸に來り三四年經たれども竟不叶京に還る事を恥て爰に講釋をはじむ其頃めづらしき事なれば日々群集したりといへるは元祿頃の事なるべし

軍談の双子

○世に流布の軍談の双子中世以來公家の記錄の外に武家にも書置し日記覺錄多し【永正記】の頃までは實を正しく書たるものすくなからず近世關が原大坂のこと書たる書數十部にして其實を失ひ虛を傳へしとのみ多し中にも大坂の軍事かける始は馬淵道士とて其かみ大坂の城にこもりし小身ものゝ生殘りて書を說しより難波戰記の起りし其後所々より作り出して虛實を論ずる江戸にて鯖江正体といふもの佐々木の氏族と稱して山系傳記を傳ふ後材氏松下氏など各々諸家の系圖を語れり右の數人も始のほどは實事を傳へしに諸大家より招かれ又は時物にて人の傳記など著述せし後にはあらぬことを附會して書しなり又江州の六角氏と稱する人ありて殊に僞作を巧みにして後世に疑惑をなさしむ

辻講釋

○近世に至りては辻講釋するもの其冊に流布する本のまゝにては珍らしげなき故に種々附會の說を交しへて說く其が爲に書る本やがて世にもてあつかふことになりて益なき双子數增れり

噺

○物がたり【下學集】ハ今世に物語をはなしといひて咄の字を書り【說文】に咄相謂也としるし【文選】たる張景陽詠史詩に咄此蟬冕客君紳宜見書とあればはなたへるをはなしと云はいかなる意に

藏 はなし家 口づゝ

講釋師 講釋師は【太平記】無禮講の條に其ころ才覺無双の聞え有ける玄惠法印といふ文者を請じて呂黎文集の談義をぞ行はせへることありこれは徒弟を集めて學を講ずる會にあらずたゞ事を文談に寄たるばかりにて今軍書よみを呼で聞とおなじ又辻談義は【信長記】(十四)夜話の條澁屋萬左衛門尉申けるは此ごろ洛中に翠竹院道三福神の十子に假名實名など付侍りしかば京童屏風或は扇疊紙などに書記し口號み候云々嗇太郎爲持內寢二郎仲吉などいまだ語りも果ざるに信長公御氣色變り居長高に成給ひていやとよ其上は工商等には福神ならむか武家の爲には貧神なり吾黨の福神は知人太郎國清才二郎國綱等也夫嗇太郎爲持にして天下國家を失はざるは稀なるべしと高聲に宣ひしはさも

辻談義 辻談義坊主の倚子に上りていかめしかほに說法し諸他法術自法にも猶超たりけり辻談義の事猶下にいふべしさて軍書をよむ事は太平記をよむ事むかし流行て太記よみといふものありその始めは【歌林雜話集】に道春初めて論語の新註をよみ丸(貞德みづがら云ふなり)にも歌書をよめと下京の友達ともすゝめしに云々同書末のかたに道春永喜と兩人云々其座に一華堂宗務法橋五十川了庵などゐられしとあり一華堂は貞德道春などの友なり太平記を講じたるはこれらや始ならん【人倫訓蒙圖彙】太平記讀近世より始れり

太平記よみ 太平記よみての物もらひあはれむかしは疊のうへにもくらしたればこそつゝりこみにもすれなまなかかくてあれよかし祇園の涼み糺の森下などにてはむしろを敷て座をしめ講釋こそおこならめそれをまたこくびかたふけて聞る者もありとかく生るほど品々あるはなかるべしといへり(此草子元祿三年の板本なり近世とはそのかみとしるべし)【一代女】(貞享三年板)長けれど唯なら聞もの道久が太平記また【義理物語】に大坂道頓堀芝居みせものゝ事をいふ處竹田からくりの見物甫水が太平記をよめる處また【伽羅女】(寶永七年)大坂生玉社頭の圖に太平記よみ葭簾はりたる小屋に見臺ひかへ手に扇もちたる者

やけのやんぱち　わんぱく　(熱鵬の義)やけはやけぼこりも是にややんはちはもとわん八といひしと見えて【隣女晤言】に東國にて狡兒をのりてわん八といふ忘八なるべし唐山俗語に烏亀忘八といへり又小兒の頑耍するをわんばくといふは是とは殊なりわやくの轉りたることゝ聞ゆ

なんかん　○又わろものをなんかんといふは難癡にやとおもへどさにはあらでことの誤りたるなり【浮世物語】遊女の事をいふ處中ごろは南華とかや名づけしいかなる故ならん莊子は寓言とてなきことをあるやうに書たる道人なりさだめてうそつきといふ心にやたゞうつけたるものを今も南華と名づくるなり【寶山大鑑】に戯ふれたる者を南華といふ昔は鈍なる者にいはず常とかはりたる人をいへりその心は南華莊子なり莊子が寓言の儒にかはりたるによりていひたる名なるを今誤りて鈍なる方にこれをよすといへり再按るに俗のなんかんは當否をしらず今半可といふ言即是にて南華を訛り半可の字を充たるなり又

きいた風　今きいた風と嘲るも此たぐひなり

○【東牖子】唐音に爽快なるを好(ハウ)と云よからぬことを不好(ホハウ)と云此頃卑語に仕損せしことをホハと云ふ浪花にてはホハルと云ひ京都三條五條の旅籠屋の隱語によきをハグと云あしきをアハイと云これ皆好不好の轉語なるべし

耳こすり　あてこすり　○今小聲してさゝやくを耳こすりと云へども昔はさにあらず【娘容儀草子】に女の性にはいひ合さねどいづくも同じことと内儀へ耳こすりいふて云々今はこれを當こすりと云ふ

講釋師　太平記よみ　咄巡もの語　利口物語　百物語　祖父祖母の物語　猿の尻　狸がやけどの話　瓜姫の話　幼あそびの物をもて話をする事　桃太郎　舌きり雀　酒顚童子　羅城門鬼　花咲セ爺　蟹のはなし　油かひ　咄に名ある者の　野間藤六　作内　付呂利　藤六に同名の者　付呂利　安樂庵策傳　露五郎兵衛　塩野武左衛門　休慶小左衛門　四郎助　露休　彦八　おどけ萬こい　志道軒　よこ一わ銀杏　豆

なむ一か八か四の五のいはずなどの數目の詞は大かたそれなるべし

しみたれ ○近ごろしみたれといふことをいひ出て老人などもいと今めかしきはやり詞のやうにいへり是もむかし詞なり【嘉多言】に兒女房などの言葉をいふ處然はあれど源氏物語にいひしやうに纏なる聲きくばかりいひよれど息の下に引入ことゝずくなゝるがとやうにしみたれ過しあまりなさけに引こめられたるも又うるさかるべしといへりしみたれはもと墻垂なるべし泣ことをいへり藻塩たるゝよりいふなり

江戸の流行 明和の初ごろより江戸にはやり詞ばからしい。けしからねエ。虫がいひ。聞ておきれる。よくいふ奴だちよゝら。ぢやらくら（是等みな今遣ふ詞なり）いきま（後に略していきとばかりいふ意氣揚々の貞にや）かふる。とんちき。黑い白い（これらは歌舞妓芝居より出白黑は評判記の吉字なり）大吉（これは反語なりしやうの悪きをいふ）とんだ茶釜。お氣の毒蠅のあまた有べし明和四年【篠惚文章】に大平樂兮大之窮云々親分子分茉和理是また其頃の流行なり同集に屋船強飲略語遊といふ句もあり專ら言ばを略すことはり後世は人の心こざかしく長々しきをきらふ故なりされことばともあれ漢籍をよむにも道春點などは惺窩先生より傳へたる博士家の古訓も存せるを迂遠に心得ひたすらてにをはを省き讀はいかにぞ安永七八年ごろよりよからぬ女をすべたと云は骨牌より出たる詞とぞ【太平記北野通夜

すべた 物語】宮方の政道もロハ是は重二重一にて候

○【籠耳双紙】に侍などの詞にきゝにくきは腹をおなかひだるきをひもじかみをかもじ汁をおつけ強飯をおこえあえものをよごし豆粉をきなこといふたぐひいかほども有べしと云りげに髮男のいはむはめゝしくて似合しからねど今は習ひて常となりたれば聞苦しくもあらぬやうなり其俗に從ふとは此らのこととも及ぶなるべし又商人おのがとち用ふる隱語あり商人はふてふといひ其外はせむぼ又とはともい

ふてふ ふとなんふてふは符牒にてもあるべし餘はいまだ辨へず今俗是非を顧みぬをやけのやんぱちと云ふ

お茶あがれ

骨となりてされたるをいふに似たり何にまれ山礦とは別なるべしちやかれといひしことをお茶あがれとし大きにお世話と添たるやうのこともあれど其例とも聞えずちやかれとは上總邊などにていふ詞にて脇へ退といふことなり【物類稱呼】にちやがれはあかしやしや庭のさり〳〵すおなじ所にねまりてぞなく下野の方言をよみたる歌なりと古く言傳へりはあははやなりすべて東國にていふ詞なりかしやしやはかしましやなりねまるは居るといふことなりといへり

耳たぶによる

○さちあるものを耳たぶによると云【天智香爐偶得】に後漢書南蠻傳哀牢人皆穿鼻儋耳其渠帥自謂王者耳皆下肩三寸庶人則至肩而已蓋設假耳於眞耳之上以長短別貴賤儋與擔同擔耳此假耳也

若いがきどく
さばほん
あんぽんたん
おや玉
近來流行詞

○【風流徒然草】にわかいかきごくといふことば寶永のころ迄はいはざりし云々然らば正德頃のはやり詞なり（近時にはいつもお若いといふことはやれり）又其頃さばほんといへることはやれり（近時ばかんといふことはやりし類なり）寶曆十三年の頃あんぽんたん。おや玉といふことはやり出たりとぞ【俳諧名物鑑】（寛延頃より明和中なり）當時流行詞何もかもやみ雲介の旅のそらあめよ月よとちやらくらの夢と有これら今も云詞ありはやり詞はやがて廢れるものながら傳りて常語となるも多く廢れたるが後にまたはやれるもありいづれ後世詞のによきはなし

やくざ
べらぼう

【洞濱庵隨筆】（寛政元年七十七翁烏飾丸）亡父語りしは我覺てより新言葉三ありやくざべらぼう今一ツは何とやらんいひしか是も博徒のことばにして常人のつかふべき詞にあらず今は天下の常語となりぬ物のあしきをやくざといふは博奕に三枚とかいふものをするに八九の數を高目にとして十とつまるは數にならず八九三廿につまる故惡きことの隱語を八九三といひ始めたるなり又べらぼうとは始も十中たびも十なれば終り一枚には八九の高目も出んかと樂み開くに又釋迦十の出る事をいふ故に阿房らしきことをべらぼうと隱語すといへりこのわざはしらぬ事ながらべらぼうの說は非なり（後に其據あり見合すべし）博徒の詞常語に猶多くありと

ぬ金商よりしれた小糠商。薬千本有ても柱にはならぬ。粉米も嚼ば甘い。鳶の子鷹にならず。やせ坊ときにあふた。（今貧僧のかさね齋といふ方勝れり）鬼の人不食。千里一はね。食に餅を嫌。やけご火にこりず。風下にざる。長者のはきに味噌。我物喰て主の刀もち。水入て垢おちず。時しらぬ山伏。借家榮て大母屋倒る。目細あれど口細なし。尻こいふとも口といはるな。一さい起れば二さい起る。主關白。犬にもくれず棚にも不置。相撲も立方たふ。鬼に念佛猫に經。二度めは馬の鞍。身のもので相聟。虱の皮を鎗ではぐ。木欒子は白くならず。達摩の目を灰汁で洗ふ。理を破る法はあり法を破る理はなし。高かろ能かろやすかろわるかろ。樂やで聲。小家より火を出。因果は車輪今は錢の輪。餓鬼の物を虫がせびる。猿樂の跡七日面白。やせ子にも產神。蟹の死はさみ。立佛か居佛をつかふ。墨は餓鬼にすらせ筆は鬼にもたせよ。ほらはつら。水三合あれば大海。せつは時をきらはず。かまの神はお荒神。猶あまたあり【世話燒草】に諺あまた擧たり今世に聞なれぬこと多しこれは明曆二年の板なり其内一種謎の如く尾の多い烏賊のぼりで尻があがらぬなどいへること昔より多くあり

圖はづれ

○今大なる物などを圖はづれこ云は聞えたることなれごもとはさはいはざりし【櫻陰比事】に帮閑を事とする者のことを世を夢の如くわたりて世界の圖はづれなる者といへり古くより皆かくざまに用ひたり江戸にては世界のてつぽう洲とはやりことといへるは【卜養狂歌集】などに見たり

みしやれかつたい

○【元隣が誰身のうへ】（三）誓言にみしやれかつたいといへり昔から人のちかひに山礪河帶とちかひしを末の世にかのあしき病のかつたいにとりまぎらはしたるにやこの心は山か礪石ほどになり河は帶ほどになるこも今の約束はちがへまじきとの心なりこ云るは誤れり礪山帶河こもいひて山を礪にし河を帶にすこは子孫永世不朽のことなり漢籍にみゆる皆その意なり【嘉多言】に誓言のことをいふ處八幡氏神云々ゐすくみ見しやり云々有り今も皆はしやりとなるこもなどいへる是にやしやりともあるは

與吉が女房

○與吉が女房といふもきのふけふの諺にあらず【後撰夷曲集】獅子踊詞）けみもゆるせ神田の壻の百姓の與吉が女房植し早苗は（貞富）是をみれば踊歌に有と見えたり

○【吾吟我集】に諺の歌多しもとのめに中人なしや男山またこの秋も唉をみなへし。これぞこの炮烙千につちひとつ月におさるゝ星の光は

古今の諺

○【民のかまど】（享保十一年丙午二月佐々邊青人と自筆に書たる物とみゆ七十ばかりの老筆なり古今の諺を狂歌によみたり歌はおもしろからず）其内耳なれぬやうなるもあり。たまにふく風ものにあたる。まては海路に日より有。用にしもなまぐさ物。落こぼれは沙彌の物。卯月の中の十日に心なきものに雁はる。河童も河流。帶子きて河立。冬瓜の花で百一ツ。忠は孝のもと。門の姥にも用有。体寒と氣ひだるいはこらえられぬ。上戸のひたひ盆の前（酒のみのひたひにさめぬほとぼりは玉まつるころのまへのあつさや）ひだるあくび寒さ小便（近ごろいふことかとおもひしにもあらず）女の鼻の前女は曾稀のあまれ。莫耶が劍も持人がら。破頭巾で耳にかゝる（今古稀ぼうしといへり）男は氣でもて。逸物の蹴もはなさねばしれぬ。人のいけんに餅をつく。紙子にもゑり祝ひ。初のさゝやき後のとよめき。鬼とのされ。ねて花をやる。ごぜの目たか。駒の朝はしり。百日の照にはあかで一日の洪水にあく。世の中流れ渡り。死人に妄語。餓鬼の目水。十王が勸進もくはふが爲。生ぬ前の襁褓定。やしやが馬。下手の長談義高座のさまたげ。土佛の水狂ひ。風は吹ども山は動かず。坊主の憎たくれへ。是非は道に依て賢し。投とを見る共落とをみるな。夢と鷹とは合せから。なま物しり川へはまる。心なき子は親の古さとを語。錢なしの市立。ひや酒と親の異見は後藥。松水柱も三年。身でないものは骨論。大海芥をえらばず。えせ者の空咲。聾の立聞。なりにせてへそをまく。馬子にわんぼ（今馬子にも衣裳といふは違かはれり）短氣はみれんのもと。好物にたゝりなし。雁も鴫も喰たれか知る。しら

える其たもと邪魔にならふば切ラつしやれ【丹前能草子】田もやろあぜのはたよろめき行く云々今は田を行もあぜを行もといへば意異なり又【同草子】に酒に酔たる不賴もの若衆をとらへ無理をいふに同友惡徒また二人來たる處是非御杯をいたゞかんそれ酒肴取てこいと俄に詞つよくなるは友の來し故ならん誠に是はお茶がわいた我らとても其方同前いざ召上られ御心ざしの方へさし給へ云々これは美

お茶が沸

服したる者を咽が乾にやといひしことわざ有り（これは他にゆきて同席の人よりも目につくもの故茶の給仕する者も他の人より是には茶を多くはこぶとて咽の乾ゆゑ茶を飲たさに美服するかと嘲りし

咽が乾

也）今お茶がわくといへるは爰に飲たがる者多かればいとよしとなり【世說故事苑】云他を羨むを咽が乾と云は【藝文類聚】七十二云晋東晳餅賦曰擎器者舐脣立侍者乾咽この語を取て云へるなり轉りてはかくさま〴〵の義ともなりしなるべし

へらぬ口　あぐむ

○【太平記】（卅五）減らぬと云詞義長は暫は減ぬ体に打吹て云々又あぐむと云詞は飽なり同卷に今度の軍は定て手いたからんと飽て思けるが按に相違して云々【日蓮御書】にかう申せば謙ぬ口と人はお

喉過れば　あつさわすれる　ほうろく　千につち　一

ぼすべけれども云々【錄外】（十二）世俗の譬に喉過ぬればあつさわすれ病愈れば醫師わする同（十五）かぶらは鶉となり山芋はうなぎと成なり同（五）權宗の人々無量にいひくるふとも只ほうろく千につち一ツなるべし云々あり

座頭のよばひ

○座頭のよはひ杖をつく【江戸町名俳諧】（【季貞獨吟德】元判正保三年季貞は秤屋善四郎なり【崑山集】にも數句入たり）座頭は杖につく竹屋夜道には油なる火をしめ今も大津繪に裸の座頭かけるは此諺なり

鍋尻やく

○貧窮に家の内のうしろみなどたのめるを鍋尻やくなどいへり世話やき肝煎などの煎燒よりかゝる諺も出來しにや【同雙十】に大は小をかなふといふことなかれ今人は大は小を兼るといへり

誰なる事をしらされどもそのかみの坊主小兵衛を學びて坊主といひしものなるべし坊主を倒に頭坊とは今もざれていふ事なり【風流徒然草】長瀬法師はすいしやれの功つもりたる人なり比丘尼宿の二階に入られけるに下に居ける比丘尼の申けるはてんかいちこはひかわてはないかと聞えけるを二階の客は若い客かと申と知るといへりてんかいは二階なりきごは兒にて客を云歟

一字はさみ

○一字はさみといふことあり明和七年【辰巳園】と云冊子に唐こと〻名けて五音を以ていふ事人の知る所なれど爰にあらはすアカサタノ此通りヘカの字イキシチニ此通りヘキの字ウクスツヌ此通りヘクの字エケセテネ此通りヘケの字オコソトノ此通りヘコの字右のごとくカキクケコの五音の字を付いふなりたとへば客といふ時はキヽヤカクヽ又女などゝはねる時は付字にてはねるなる女はオコンナといふがことし清濁は本字に直に濁るなり此外にシ付キ付などゝ云て其時に應じて一字置に付るなり口付ていふ時はいかやうにも早くいはるゝなりと有ればこのこと實暦末頃より始りしにや【来山が點前句付】さてもとへほにはろいなりけり九十九夜の草履代では風呂もくろ物さしてたらぬ〳〵と島たゝく

ちろまかす

○貞享五年【榮花咄】ちよろまかすと云はやりことば云々罪にならざる當この僞りをまぎらかすといへる件詞と聞えたりとあり然らば今と意少し異なり

やくしの前地藏の後

○藥師の前地藏の後【新撰狂歌集】さる寺に地藏院は女を好き藥師院は若衆を好ければすき〳〵は地藏やくしの前うしろへだつ處は蟻のとわたりこの謎は暗夜を云たり地藏の縁日は廿四日藥師の縁日は八日なればなり御亭云後暗(アトクラキ)觀音と云も地藏の後といふに同じ觀音縁日十八日より廿三日に終る是なり

ぢゝむさい

○江戸にて物の清らかならぬをぢゞむさいといふは【甲陽軍鑑】などに意地むさきと有是なるべし譏は物にみえたるいと多くして記しがたし其内今人のいはぬやうなる又いびながらも恐れるもすくなからず一ッ二ッ記さんも中々なることゝ作らぬ獻中の前句付に用もあぜもやろ〳〵それめすと又三ッ類行見

ないと云詞も是にひとし束もなきにや今不束といふ約まらぬ事なり【鬘織輪】につかもない物事欠に用られ急な店かへ座頭跡肩寛延寶暦の頃悪少年等誇るやうの事に用ひたるは義の轉りたるなり【下手談義】に割青(イレボクロ)を賞る處扨も〱見事な御細工彫しやる時は痛ましたで御座りましよハテつかもないそんな事でぼらるゝ物かこれがきほひの表道具云々

まんざら

○まんざら貞室が【嘉多言】に滿更といふ言葉も湯桶なるべし【續山井】卯花のやへやまんざら白かさね（治安）【京羽二重】まんざらに蛙答なしけふの雨（雪山）この詞滿更にはあるべからず眞さらを音便にまんといふなるべし眞をば常にまんといへり

十方もない

○十方もない細川幽齋の心得を書たる中に道筋不案内にて俄の時十方なきものにて候云々

てつほう

○てつほう【後撰夷曲集】いつはりを云を世話にてつほうはなすといへば「いつはりと思ひながらもてつほうのはなしにきもつぶしぬるかな（政長）

ふがいなし

○片言に云甲斐なきと云べきをふがいなしといへるはふもじを上略したるにや云々此説わろし詞各別なりふがひなしは腑がひなきなり腑ぬけと云詞もあるをや

逆こと葉

○逆こと嘉【葉多言】にむかし山崎の宗鑑法師といひしえせものゝかしましや此さこすきよ郭公みやこのうつけさこそ待らんと讀侍しはいとことさめてにくきやうなれど是はいまやうとて狂歌狂句の本体とこそ承はれ云々【本朝俗諺志】に大原の雜魚寐も今はなし入間の里人の入間ことばを知らぬ世とかはれば云々こは今もかはゆきをにくいといふやうにことを表裏にいふことゝ聞ゆ後また一種の倒こと

葉大原の
ざこね入
間詞

ぐりはま

あり立圃が發句に蛤のくりはまとこそ水の月又宗因が句にあかがひも何ぐりはまの生身魂今も物こと倒なるをくりはまといへり不角が集に虹梁(ツボウ)を息ともいはむ蛙俣屦蛤の相違くりはま【元祿曾我】に堺

ありや〱

町のことをいふ處ありや〱三番三じや頭坊雲樂じや彌之助躍じやはじまり〱といふ聲云々雲樂は

そつこへやるまいぞなんだ辨慶むさしのゝ虫讀人不知）彼曾我の狂言に近江小藤太などが詞にとつけへそつけへさうはしよねいといへり）同集〔蕨〕の宿にて馬子どもけんくわするを見て奴詞にて手をおろせおつてくれべいばかづらめとこさ蕨の宿の馬かた（行風）奴詞に俳諧にも往々見えたり奴の條にいへり

致ます御座ります

○又田舎ことばならで致ます御座りますなどいひますはまうすの中略なり是を【東牖子】に鈴屋翁の【玉くしげ】にますは座にて致ますといふますはなしといへるは堂に登て室に入ざる說といふべしといへり

やつかれ

○【和名抄】奴僕をやつがれといへり【日本紀通證】に吾は憔悴枯槁之義謙辭也と是なり我子をせがれといふも同義にてやせがれの略なり【倭爾雅】に悴俗作悴倭俗稱我子曰悴猶唐人稱我女謂焦萃江戸にて下賤のもの私といふをわつちと云なども昔の奴詞なり【雑兵物語】にわつちあと云へること多し

ちんぷんかん

○ちんぷんかんとは今唐山人の言のやうにいへ共むかしは【洛陽集】（延寶八年）蝶阿蘭陁やきたつて蝶まふちんぷんたる聲（爲誰）これ紅毛人の詞のまねびなり

すこたん しこたま

○【續山井】下手のまりかまにすかたん存代とり（利定）これによりて思ふに透されたるを云なり今江戸にてするこたんと云は訛りとみゆ又しこたまと云は西國にて是ほどゝいふことを是しこあれしこと云ふしこなべし遠江にてしこたまと云ふ

つがもなき

○つがもなきといふなり【原俳論】荘子寓言希逸註に斷頭話としるせり諺につがもなきことを云といへるに似たり云々【本朝俚諺】に【清輔奥儀抄】のうたに人にあはなつきのなきには思ひおきてむねはしり火にこゝろやけをり俗にはつかもなし共いふ不都合と云がごとしといへり【物類稱呼】にあるまじきことをするを云詞のかはりに東國にてゝんこちもないと云又つかも

てんこちもない

の祝言に聞えたり【寛永發句帳】聟ならで三國一や雲の月（親重）

門前一

○又門前一は【埃嚢抄】（三）建仁寺大道に表卷と云酒あり門前一と云心なり【斎諧録】云近世凡百工匠其所造器物招牌必記天下一字天和二年壬戌七月教旨停之後觀綦錦邊礫其當中題天下一三字又漆盒有書魁字者皆誇尚之風といへり

よござりましやう

○藥師【通夜物語】（寛永廿年）この頃は又よござりましやうなといふことはやり【卜養狂歌集】その頃世にはやりし小歌にさせ〳〵よござんしよてんとよござんしよ【百物語】世の中のはやり詞を俳諧にしたるとて百韻人のみせける其中におかしき句ありとて語るをきけばお汁にはよござんせうのからみにてあへものによきあのさまのうこ（かのさまあのさまといふがはやり詞なり）文がやりたや室町前へといふ歌に花のかのさまの手にわたせとある是なり

もさ奴詞

○もさはむかしの坂東ことばなり【可笑記】（四）江戸の町をいふ處こえとりもさといへる者痩たる馬に大なる桶二ッつけて打乘云々【埃嚢抄】に坂東まうさと見えたり故に是を猛者の音なりといへるは非なるべし今も詞の終にもしといふことをそへていふ處あり（もしを或はのしともねしとももしともさま〳〵に處によりていふなり）もさも是とおなじ申といふ音のやうにも聞ゆれど猶さにはあらじ後にはいつくにまれ唯田舍ものをもさと心得たるにや【伽羅女草子】にこちこらは備前の牛窓あかりみぬ田舍者ゆゑ珍敷はやり歌新らしき唄がのぞみと誠しく海男(モサ)になり云々などいへり古き歌につくば山つくばつてさへでつかいにつッたつたら猶でつかゝるべい是いはゆる關東べいなり諺にべい〳〵詞がやむべいなら借りて三百つんだすべいそのかみ俠客好みてかやうの詞をつかひしを奴ことばといへり（是故に歌舞妓にて曾我狂言などに其詞をとりて用ゆ朝比奈がもさなど是なりこれ坊主小兵衛等が奴を學びたるを後又これを取て朝比奈に用しなるべし（【後撰夷曲集】爰でなげごつこへ

らひ得ざる條五郎が申けるはされはこそ今はよき事あらじ日本一のふかく人にてありけるものを（日本一は【義經記】八卷九ウにもみゆ）

天下一

○又天下一は甲陽軍鑑（二一）猿樂に高安道善と云者此頃天下一の大鼓打なり此者若き時分大鼓の天下一は大倉九郎と申者也【信長記】（十八）天下一號を取者何れの道にても大切なる事なり但京中諸名人として內評議有て可相定事元龜四年七月（卷十二）天下一共の舞者を揃へ桟敷を結構し能を被仰付（卷十三）鏡屋宗白といひし者を村井長門守召連手鏡を以御覽申させける云々角て鏡の裏を御覽ずれば天下一と銘せし也公御氣色變り去春何れの鏡屋やらん捧けしにも裏に天下一と銘しつる天下一は唯一人有てこそ一號にて有べけれ二人有ることは猥なるに非乎是偏に長門守が不明より起れり汝が不明は予が不明也とて殊外にぞ痛思召給ける【醒睡笑】（頓作錄）春日大夫を天下一と存ずる云々【寛永發句帳】月も日も天下一なりけふの春（親重）くもらぬや月のかゞみの天下一（長吉）【見聞集】（七）見しは今江戸の町の門々に天下一万能鏡日本無双者扁鵲などゝ異樣たる名を付て金札に書付て街道に立置たり（金看板を云なるべし）【曠筑波集】（一）操をからくる智慮や天下七（日如）操の看板たり登を取てはびつくりとする念を入ゆふたる筆は天下一（清正）【色音論】（上）あるかたの軒の端の下に立よれば本道外科目のくすりなんばんかうやくうつし物手本の御用すみ筆の天下一ぞとかきにけるかればんあまたかゝりけり（こゝは中橋の通り町寛永中のさまなり）延寶中の【奈良の名所記】に墨屋[illegible]に天下一としるしたり【堺鑑】に湊燒壺今の壺燒屋先祖は藤太郎とて猿丸太夫の末孫といへり花器土[illegible]枝村の人也天文年中當津湊村に來り住居してより以來紀州雜賀壺を求め土壺に入て燒反し諸國へ商賣して云々承應三年甲午に女院御所より天下一の號不苦とあり時の奉行石河氏是を承り頂戴す云々

三國一

（この[illegible]壺に天下一の名字有り又古き物などには天下一の刻印あり又三國一は今も婚禮に殘り又買取

とより話をつゞけたり【松落葉】にとかし城と云に向ふてかゝるはから竹わりらひんらんくわいとらばしり云々【北條五代記】に氏直亂波（ラツパ）と云者二百人扶持すとかまりとも忍びともくさと名付たり過し夜は忍びに行今朝は草より歸りたりなど云しみな盜人にて草に臥敵陣に夜討などする者なり今も俗言

すつぱのかは

にらつひらんごくといふ是なり又すつぱすつぱのかはなどいふも是なるべし誰か家集に素波に出て朝かへる月と云句あり嵐雪）【後撰夷曲集】白波のにごりて黒きどろぼふやすつぱのかはの流なるらん（良久）

ちょい〳〵

あつちやあ〳〵

○物を見聲を聞て感じてほむるに昔はちよい〳〵といへり明暦より元祿寶永頃の双紙に往々みゆ又あつちやあ〳〵ともいへり（【可笑記】若衆かぶき見物の處ちよい〳〵とあり【吉原新鑑】（寛文）遊女の評にうんけいの御作ちよい〳〵【色三味線】柴や町はやり唄うたふ處などにもあり（【紫一本】花火船の條に出（奈須與市の淨るり化生屋敷の段にやつちやといへるも同じ）あは歎じたる聲ぢやはちよいをつめていへるにて同言なり一能と書たりしかればちよひ元つまりたる詞なり余が稚かりし時ちよいといふ體うりてはやりこれも一能なるべし今はほむるにいよ〳〵又はやんやといへりやんやはいよ

やんや

〳〵をつよく發ていふにやいよは一能のちを省けるなり聲を發してはづむ言ゆゑかやうに轉れり

日本一

○日本一【大鏡】（三）佐理卿三島の額を書く處またおほかた是にぞ日本一の御手のおぼえはこの後ぞとり給へりしか【平家物語】篠原合戰の處あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうずよなうれとて鞍の前輪におしつけて是を謠曲にはくんでうつよとて有はわろし【拾葉抄】にくんでうずるよと云義なりするよのるを略してするといへりなうれとは言葉の跡にいふなり今も言葉の跡につゝけてなうと云者あり此たぐひなりといへり或云よな句としうれはうい奴の意なりともいへりされど上におのれと有て又うれといはむは重復なり名賣れにはあらぬにや【曾我物語】（四）曾我兄弟京の小次郎をかた

けちない なりでとりゐがない

じはさかなもとむとてこゆるきのいそきありて雅俗はあれど語のつゞき似たり）寶暦明和の頃じやうがないを上總木綿しつふりを本所の穴藏と隱言葉にいひしを又其後には取どころなき者をけちな稻荷でとりゐがないなどの類のされことあり【紫の一本】にいへるに同じ

きそん十七寅の年

○きそん十七【世話盡】（明暦二年刻）また闇まぎれ着るをどり笠月かげもちつくときそん十七夜【後撰夷曲集】寛文十一年撰をどりもてきそん十七八人もまじる役者は笛太鼓かね【一休ばなし】きそん十七寅のとし角のないこそよけれ【松の葉】のらつひといふ小歌に我は都のちつひらくくわい寅藥師しかも我等はまうし子でナうかれものでござる云々又【松の落葉】京わらんべといふあづま淨るり初秋の盆のをどりはいせをどりきそん十七とらのとし簪るやくしはとらやくしさつさとふりやれさつさふれ〳〵男女に限らず年のわかきがはすはなるさまなるべし多くをどりのことにいへり【俳草】に氣ずいものこといへばあれは木なりと云とあるこれなり【續五元集】むかしなりぬ喜首座十七音羽こは切しいたゞく柳の音これは浮藏主にてありしをいへりきそんとは木曾木なり【羅山文集】慶安辛卯五月云々童兒立紙幡木曾これは菖蒲刀を木曾といへり其角が【錦繡緞】十八がすまふに色をふくむなり一潮川）木曾木つかゆる月の川音（素千）これには十八といへり【伊呂芝居】に近いところ迄きそんぼのやうに痩肉でその無藝さ無器用さ云々あり是は唯木のきれのやうなるをいふなり元なりふりに拘らずかの奴また金ぴらなどいふたぐひなり虎は猛獸なれば少年の血氣にたとへたり寅藥師に詣るは似つかはしかるべし太秦の藥師安置は【日本紀略】云長和三年庚寅五月一日丙戌五日庚寅東西京貴賤聚合詣廣隆寺人云寅年五月五日庚寅日藥師奉安置此堂故也又らつひらんくわいは【師門物語】に向ふものをば

らつひらんくわい

らつひらんくわいかゝる者をばゆうおんつはせめ云々戰の趣をいふなりらんひは亂飛なりらんくわいは亂廻などにや落花にても有べしこれを小歌には洛外にいひかけたりこみゆ寅藥師は虎走りといふこ

來々

よりて中頃より來々（くる〳〵）と書たりとあり【撮壌集】魚名に來々とある是なるべし【白石手簡親元日記】鮃の腸やらんをコス〳〵としるし自注してコス〳〵とはクル〳〵のうら詞不來々々と申義に候魚腸のクル〳〵巻に是はさもなき故にコス〳〵の名出來候事と聞え候

しらぢ

○【沙石集】に洛陽に世智辨聰なる女房あり女童におしへて客人などあらん時一合二合などいはんはまさなし源氏の巻の次第おぼへに一桐壺二帚木三若紫などいふぞかしされば きりつぼなどにもせよかしといはゞ一合と心得て二三もかく心ゑよと教おきつ云々女童つぶやきけるあら心つきなの様やまだこそいかなる昔の衣通姫小野小町といひし人も源氏かしき料にしたること聞ねと云けるいみしき利口也

○【物類稱呼】にすりばち東國の文言にしらぢと云ふと有り下總鴻臺邊にては男もいへり【眉目男冊子】女房は御所かたに奉公せしとて今にそのうつりあつてしほらしくすりこ鉢のうつむけてあるを富士山と見たてなりはしほじりのやうにと万にきやしやなるいひかたといへりしほじりといふがしらぢとなりたるにや【似せ物語】に富士山をいふ處ものにたとへばひ盛めしをかさねあけたらんやうなりはすり鉢のやうになんありけるともいへり又白地にやともおもふは【卜養狂歌集】ある人白地の扇にたてなる歌をよめと有ければ「御所望にあひにあふぎをかきよごすもとの白地があらましぢやもの是は其頃の小歌をとりしなるべし【風俗文選】許六が百花譜に多杜丹のしやれ過たる云々白地のむすめども傾國の風俗を見習ひ一向遊女の立振舞に似たれば兩親いか計悲しと制しつらん【白千鳥娘道成寺】と云歌舞妓歌にもとのしらぢにしてもどしやと云るも同じ白地の娘とは今きむすめといふがごとし播盆は藥もかけずす燒なれば奥州三の戸にてはかわらけ鉢ともいへり是も又かなふべくや皆爐が【世話盡】地ごくの馬でつらばかり破れ頭巾で耳にかゝる

たち木に水かれ

○【紫の一本】にたち木に水かねきのとくなこと門口のかざりなはくるこしも〳〵【源氏】帚木巻ある

うくひす　へて上臈かたにはさくぢといふを禁中はまちかねとかやもてあつかひ給ふことこぬかといふ綱の緒にやれんきも女言葉なりと【嬉多言】にみえたり擂木の香なり木枯しとは葉の落たる木をすりこぎといひふかことしせつかひ褻匙なるべしうぐひすといふは鶯の香を尋るといふことをとりて異名としたるなり其よし香の處にいへり香は味噌をいふなり

鰯なむらさきと云と　○【海人藻芥】に内裏仙洞には一切食物に異名をつけて被仰事たりムヽ味噌をばむし鹽はしろもの豆腐はかべ索麪はほそもの云々二條良基公上臈の上臈しきと味噌の味噌くさきは下品なりと御利口有と見えたり日蓮上人御書聖人一ヅヽ味モジ一ノケとあるは酒一筒味噌一桶なり

○【女重寶記】にいわしをおむら【梅村載筆】女房詞に鰯をむらさきといふことはあゐにまさるといふ義たり藍鮎調進しと見えたれどもあゆはあゐとも聞えがたくや鰯をとりたるはすこし紫だらで見ゆるなり【魚の歌合】君あたりめしよせらるゝむらさきの色になるまで身をこがすらんこれにては焼たる色をいふやうなれどさにはあらず【續山井】むらさきの赤鬼うばふいわし哉又牛頭馬頭にまけぬ尾はそやあたまがち又これをおむらの例にしておほそとは誤りなり【埋木】「もはや年のをほそになりぬ小鰯日尾の細きをいふなり【[illegible]柑子】年の緒の文箱にそふやお紫（松雅）【五元集拾遺】いはし推て弱にしてもろし潮をはなれて忽死す鰯は俗字なりよはしと訓すおむらとはいかに小いはしや一日崩て膝の門いはしにておなたがへりされど鰯字かけるはよわき義とみゆ【和名抄】鰯【新撰字鏡】に鰯字たとかけれど淺口は鰮なり）【娘容儀】と云ふ草子に一文奈の鰯をむらさきの おほその[illegible]もとばかりせより箸して

こすノ＼　○今俗青魚の子をかずのこといひ正月これを用て女詞に又かずノ＼と云似たることあり【親元日記】に寛正六年乙酉正月十日餘齋藤遊中入道雁二來々一折云々鯑の腸を不來々々と云て正月用名ありしき

かきたてよなどいへりしを歎きてつれ〲草に書たり今は其もちあげよかきたてよがよきことばの品になり侍るにやかゝげよもたげよなどいひ侍らば人笑ひになり侍るべし歎かしきことならずや應仁の亂より都の風俗多くあらたまりてあしう成行侍りしとかやいひ傳へし應仁はさのみ遠しともいふべからずと云り【和訓栞】につれ〲に云々テア反タ、キア反カなれば緩急は異ながら古今の雅俗にわたれり今按ずるにかきあげよもちあげよは文字あまりにも非ず正言なれども口語なだらかならねばわろきなるべし徂徠云いにしへの詞は多く田舍に殘れり都會の地には時代の流行詞といふものひたもの出來て古きはうせて皆かはり行に田舍人はかたくなに昔をあらためぬなり此ごろは田舍人も都に來りて時の流行詞を習つゝ行て田舍詞もよきにかはりたりと云はあしきにかはりたるなるべしとも云へり都のことば田舍ことばうつりてわろくなれりと云ことは相反せるやうなれども田舍詞に古言殘れるはいこ稀にて大かたはよからぬなり

さゝじん
まちかね
こがらし

○【女重寶記】に五斗みそはさゝじん小糠はまちかねれんぎはこがらしせつかいはうぐひすなどあり五斗みそは糂汰なり其法は【調味抄】に五斗豉は豆二斗糠二斗鹽一斗搗合ぜ年を經て用ゆ當用には餅米ぬかを粱酒にて洩るなりと云り米を菩薩といふ菩薩の略書は卉とかく片假字のサさもじをかさねたるが如し故にこのやうの字を略舗にして荷菩提卉菩薩爻聲聞書緣覺七火涅槃四四煩惱といへり佛家の書この類多し是を抄物書といふその内卉荷は【龍龕手鑑】に出てこゝにて作りたるにはあらずされば米の糠ごいふ迄にて卉糂といふ歟又はさくぢとは糠のことなればくを省きちを撥たるにやさをかさぬるは魚飯など例多しされども糠をさくぢとは何の義にか雜屑にては有べからず然らば是もさゝじんを訛りたるものか【醒睡笑】云々安部泰邦卿【東行話說】に能古茶屋に休む名物とて出すをみればはつたいの粉の如き糠味噌なり女中言葉にて水の粉のやうなさゝじんと云ひてもやはりいしからず【醒睡笑】にな

やがて曲をも女のごとくにして今は衣類迄も全く女の形狀なりむかしは女を男に作りしに今は男を女とたす人情古今のたがひみつべし

金剛

○野郎が召つかふ男をこんごうといふ【雨夜三杯機嫌】（元祿六年）題惣尻自注に彼里には云若者或金剛、非僕非牛又非雲且向親方高舉筋因露飛廻如蝶集見紙遣蹤似羊群こんがうは草履持の義なり

○【笑林】世諱部兩童以後庭相易俗云兒車是也【天香樓偶得】に漢書趙皇后傳宮婢道房與中宮史曹宮對食甚相妬忌也此風相沿至後世曾不改单如酌中志略所載明熹宗時乳媼客氏初與宦者魏朝有私徒後惡朝而喜魏忠賢是也と見えたり然れども對食とは宮婢相共にかたらひむつふをいふなるべし男女の上にいふ名にはあらじ

言語

言語（さゝじん　まちかね　木がらし　うぐひす　紫　こずく〱来々　しらぢ　きそん十七寅のとしらつひらんくわい　すつはのかは　ちよい〱　日本一　天下一　よござりましやう
もさ奴詞　ちんぷんかん　すこたん　つがもなき　まんざら　てつほう　ふがひなし　逆ことば　やけのやん八　なんかんもの　一字ばさみ　ぢよむさき○諺お茶か湧　咽が乾　座頭のよばひ　鍋尻やく與吉が女房　お茶あがれ　若いがきごく　さばほん　○近來はやり詞　やくざ　しみたれ　近來はやり詞女詞

詞に古今雅俗の異あり

詞に古今雅俗の異あり世間の口語も亦同じその言語繁にして短筆の及ぶべきにあらず是一大學問なり今は唯女童のもてあつかふいとはし近き俗語の千万の内一ッ二ッを云になむおもふに口語も世のみだれし度ごとに都も鄙にうつりかはれることとあるべし貞室が【片言】に總して都のことばも昔はよかりしかどいつのほどよりか田舎ことばのまじりてあしくなりけるこそ吉田の兼好法師は後宇多院の時の人なりそのころはや賤しきことばのはやりはべる上に車もたけよ火かゝげよといふべきをもちあげよ

野郎

木をおほはら山にへこたふれへつほこ侍こいふこのやうの賤きさまをいふにや【風流徒然草】に野郎かげ間いづれも大きなるよしぬれは曾我小栗あいご武道はしだ哀なるはしんとくすみだ川女郎の名なご付たるをめづらしくありがたがるはやぼのもて興ずる物なり【西鶴置土産】に花山藤之助松風琴之丞雪山松之助こいへる陰子の名あり【一代男】やらうもてあそびは散かゝる花のもとに狼のねてゐるが如しけいせいになじむは入かゝる月の前にちやうちんのない心ぞかしとなむいづくへも招く處に行

江戸かげま茶屋

たるものなり江戸には法度ありしかど止ざりければまた寶永六年丑七月狂言芝居野郎并狂言に不出前髮有之者外へ堅くつかはす間敷旨前々より令停止候處頃日右の族方々へ參藝致候由相聞不屆候向後木挽町さかひ町野郎子供不申及役者共又は白人にて藝いたし候者一切外へ參間敷候云々或人云江戸はよし町を初めとして木挽町湯島天神麴町天神塗師町代地神田花房町芝神明前此七ヶ所天明の末まで有けり近歲は四ヶ所絕て芳町湯島芝神明前のみ殘れり（これは八町堀を脫したり）三四十年已前は芳町に

舞臺子色子

百人餘りも有けるよし此內より芝居へ出て歌舞するを舞臺子といひ又色子とも稱して四五十人もありて此色子ども末には皆役者になれり女形は多分此者ともより出て上手の地位に至りしも有けるとなり【古評判記】をみて知べし既に當時の尾上松綠（岩井喜代太郎等も同じ）は舞臺子にてありしなり近年舞臺子絕てなし此節野郎芳町に十四五人湯島に十人ばかりもあるよし聞り寶曆のころとは違ひ減少せし事にて男色衰へたりこいへり【賴作江戸雀】（師宣が畫入元祿の初なるべし）難波町邊にことのほかはやりけるかげま有けりと書り是は堀江六軒町（今いふ芳町）にはあるべからず住吉町高砂町或は難波町裏河岸の內なるべし

男風すたりし事

○其出立も羽織なごを着かならず編笠を着て茶屋へ行しとなり近ごろ迄も湯島の野郎茶屋へ行ば編笠をかぶりはせねど手に持たり此ごろはそれも止しなるべしもとより髮は若衆なりしも後には鬢を出し

廻し奉公に出し候事可爲無用此旨於相背者急度曲事可申付事一六尺小者私に草履取を抱人主に成り奉公に出候事是又令停止候間親子兄弟親類之外人主に成奉公に出候はゞ其草り取は身之儘に致し人主に成候六尺小者穿鑿之上急度曲事可申付事

渡り小性

○後年寶永ころには渡り小性とて大名旗本にて美童を抱へし事なり【耳袋】に或老人八十餘にて予がもとへ來り咄しける我も壯年の頃は渡小性いたし今の主人家譜代にも無之若き時は美少年なりしといへり紅顔美少年半死白頭翁を思ひ出してをかしと有り

○萬治のころ小女舞曲をならひ後かたち若衆にしたて脇差をさし中剃をし酒宴に招かるゝものありしと西鶴が冊子にいへり後を若衆のここくにしたるは猶古く慶長ころにありて古畫にみえたり十河額などもその風なり（前卷丑條にいへり）

かげま看板

○かげまは京師にては宮川町大坂は道頓堀其外にも有べし【人倫訓蒙圖彙】に狂言役者男子を遊女屋の女をかゝゆるごとくにかゝへ置て藝をしいれ十四五になればそれ〳〵に色づくり芝居へ出し藝よく名をされば我門口に大筆にて誰がやごゝ名字をしるし夜は戸口に掛燈嚢に名を書付おくなりいまだ舞臺へ出ぬはかげまといふ他國をめぐるを飛子といふ野郎かげまともに看板を出す【雨夜三杯機嫌】（元祿六年）陰間看板界町媚云々淺草神明増威勢目黑目白仰悲憐とあれば其あたりにもかげま有しなるべし【落陽集】顔みせや十有五にして樂屋入（千之）顔みせやうゐかうぶりして影聞共（秋風）【賢女心化粧】今時男子を野郎屋の新部子ト質云々【歌舞伎事始】に新部子といふは幼少にて藝の至らざるをいふとありへこは豫州の方言なり其國にへこ侍といふものありみな知音を求めて義兄弟となるよしなり輕き小者ながら義勇を宗とすとなむ其さまも古風を守りて寒中も短衣一ツ着細き帶をすると聞り今江戸の俗にへこたれと云ふはへこたれの訛りなり【季吟獨吟百韻】やせ馬おひのおやな騎たてをもき

飛子

新部子

履取持ことならず慶安の頃世上にすきと相止其後寛文の頃一盛り流行爰かしこに有りしが是又むづかしく口論出來てまた止む近年すきと相止たりとみゆ

香具賣

○又香具を商ふ者あり【卜養狂歌集】ある人のもとへ行けるにわかきかうぐや參り色々のかうぐ出しけるに燒ものに仙人黒方若草といふ云々少人のかほよきを愛して云々【一代男】十五六なる少人かのこじゆすのうしろ帶巾脇差印らう巾着もしほらしくたかさきたび筒短にかずせつたをはき髮つとづくなにまげを大きに高くゆはせて續きて桐の挾箱のうへに小帳そろばんをかさね利口さうなる男の行は是なむかうぐ賣と申宿元を聞ば芝神明の前花の露屋の五郎吉おやかた十左衛門とぞ申けるかれらも品こそかはれかけらうと同じ小草り取のはなすぢけだかきをかやうにしたて屋敷がた一年替り長屋住ひの人をだます物ぞかしさて其ざうり取はとたづねければ是にはそれ〳〵にねんぢやありてとりなりきるものをもかうりよくして頼もしき事ありつとめも旦那ばかりにはゆるして外はかたくせいとうして其屋形にも出入して月に四五度は我ものにつれてかへる事ぞかし近年多くすたりて（延寶の頃をいふか昔々物語に合へり）このかたは寺かたにかゝへ侍る【武家義理物語】（六）大藏といへるもの前髮さかり小草履取東山南禪寺の末寺に奉公せしが云々いへる上の文に合へり又【二代男】年季の小草履取仕着せ物の事をいへるに小草履取などは世間を廣うつるゝ物なるに盆正月の仕着物たとへば近江島一たん裁合せば風俗もよきに殘して何の役にもたゝざりし【俳諧染糸】つきものゝ恨はさらにおもほえず小草履取と終にちきらぬ今武家の草履取を呼でおざうといひ町家にて丁稚を小ざうといふは小草り取の名殘のやうなれど是はさにあらず（おざうは御草履の略小ざうは子供を略し藏を添たるなり藏のことは百藏の處にいへり）

小草履取

草履取禁制

○慶安五年壬辰四月七日町觸一町人之草履取六尺小者或は智音致し或は兄弟親類之契約致ざうり取引

かげま
かげ子
かげらう

諸家彼か色に淫せしこと此記にみゆ田樂の美少人ありし事もしるせりかげまは近き名ゝ聞ゆもとはかげ子又かけらうといへりそをかけうまの略なりなどいへるは捧腹すべしかけまの始はおくに歌舞伎やみて若衆かぶき起りしかど其頃は舞臺子のあそび猶稀なりとぞ定りて勤するにはあらぬなり【似我蜂物語】に當時のはやり物の諺に河原かぶき子といへる是なり西鶴が【大鑑】に其頃迄は晝の勢して夜の勤といふ事もなく招けばたよりて酒ごとに暮し執心かくれば世間むきの若道のごとく云々又一年妙心寺開山國師三百五十忌の時諸國諸山の福僧京着して御法事の後色河原を見物し万事をやめて買出す程に前髪ありて目鼻さへつけば一日も隙なく是より晝夜に賣わけ花代も舞臺踏ば銀壹枚に定めぬといへり

若衆歯を染る事

其頃歌舞妓子ごもの假裝を【京童】に十手のさすところそれいつくしい哉おはぐろつける口もとべにさせるつまさき女とも見えつ男なりけり云々すみぞめの櫻はありと何かせむおはぐろつける花の口もとゝあり是女を學びたれごもゝと男子の眉を去歯を染ることとは鳥羽院より起り山にも寺にも稚りて兒ごもこれを習ひたるが此若衆共もこれをまねびしことゝしらる其故は民間の女は年の若き程は歯を黑めざればなり【太平記山門】より三井寺を打やぶり鐘を叡山へとりし時一みる寺の兒はゝじろになりぬらんつくべきかね を山へとられて（かぶき子ごも前がみとらせらるゝこ ごは歌舞妓の條にいへり）

小草履取

○又小草履取といふものあり【昔々物語】にむかしは小草履取といふもの十五六歳の随分とうつくしき目子草履取にして下には絹の小袖上に唐木綿の袷を着せ伊逹なる帯をさせ夏は浴衣染なごきせ脇差随分結構に拵へてさゝせ客へ馳走に給仕にも出し供にも連る但供には道のあしきにつれず雨天につれず天氣晴過たる暑氣に不連跡より中間に笠をもたせて連る草履をはかせかたのごとく和らかに拵へて連るさたの限り不自由なる者なり此小草履取に付度々喧嘩口論あり若人随分器量ある人ならねば小草

すはり

るみな尻をいへり命の移りたるいとおかし又すはりといふことあり【後犬子集】薄なさけかくる若衆はすはりにてといふ句に（德元）星の逢せに一よねよかし【前犬筑波集】七夕はよもさはあらじすはりぼし此ごろの俳諧にあまた見えたり【犬草子】にせはき物の內に出たり【醒睡笑】に若衆のことにあかすはりなどいへることさへありすはる星といぬかぼしなど小さきをいふなり今も干すつるといふとおなじ此詞古く見えて【菟玖波集】廣き空にもすはる星かなといふ句に西行法師ふかき海にかゞまる海老のあるからに【下學集增補】窄乾口号に呼無心若衆云ーーともありおもふに本邦にては其始法師のもてあそびより事起りしならん中ごろまでも俗間には稀なり【徒然草】にいとをかしき物語あり大納言法印召つかひし乙鶴丸やすら殿といふ者をしりて常に行かよひし云々法印其やすら殿は男か法師かと問はれて袖かき合せていかゞ候覽かしらをば見候はずと答へきとあり俗家は勿論俗間には永祿の頃より元祿の頃までわきて甚しきやうにて彼桃を分ち袖を斷けむは物かは家を亡ぼし身を失ふ類種々の草子どもに多くみえたり古くは田樂後は猿樂の役者どもに男色もて行はれたる者多し今の芝居役者もおなじ趣なり今俗お釜と云いつより此ことゝなりしにや【本朝俚諺】（正德四年）本國の俗妻を呼で阿釜と云據あり【酉陽雜俎】云王生善卜有賈客張瞻將歸夢炊臼中問王生々曰君歸不見妻臼中炊無釜也瞻歸妻巳卒かくいへれば其ころいまだ若衆のことにはいはざりしことゝしるべし

阿釜と云事

○【文安田樂能記】文安元年六月廿九日貞常親王實意大僧正の宅に成らせられて田樂見物あり本座田樂菊阿か子に福若丸ことに勝れたるよし云る處福若丸能藝容儀尋常たり此福若丸年少の時白地に立入此門室處先世之宿緣歟云々然間同宿己及數箇年へり今季十七歲なり入夜の後有御前之召御賞翫之次第言詞も難覃云々また【二水記】永正十四年四月十五日宮千代丸昨日上洛今晚參御禮於小御所御酒宴云々白注云宮千代丸は美少人有百媚云々此兒猿樂无双器用也二三ヶ年密々令候禁中云々親王大樹已下公武の

男樂猿樂の少人

若氣
にやけ

昔むものには賞錢五十貫を賜はらむとなり南渡の後英の俗尤この風盛りにてみた脂粉をぬり衣裝を粧りて婦人の如く縫針のわざをなす昔首たるものを師巫行頭と號せり凡官府に不男の訴ことあれば師巫行頭に命じてこれを驗使とす風俗を敗壞する事此うへなし今按るにこれよりさき沈約が宋書五行志咸寧太康の後より男寵大に興り女色よりも甚しくて士大夫もこれを尙ばざるはなし天下みた相効ひてた婦離絶し怨曠妬忌する者ありといへり又陶穀が【淸異錄】に京師男子舉體自貨迎送恬然とあれば唐より以來今のかげまの如きものはありしにやかげまを漢土には小唱と云西土には歴代かやうの習風なりしに公然たるかげま茶屋などはなかりしやしらず（彼師巫行頭などは唯一時の事のみと聞ゆ）【談往】に馮相鈴と云少年のことを云て【異物志】云靈狸一體自爲陰陽故能媚人皆大地不正之氣又【癸辛雜識】靑藤山人【路史】成可証也吁以如是之人處揆席又何怪乎一國若狂也哉悲夫

○【板橋雜記】金陵都會之地南曲靡麗之鄕云々變童狎客雜伎名優獻媚爭妍云々【天祿識餘】に水滸注曰宦岫女婦年崽子とあり今北人屬頑童曰崽子といへりおもふに變童はもと女子をいふ童男は頑童といふべきにやこゝには男色の起りしこと定かならず專ら行はれしは世に鳥羽院このかたといふめり白河院は東大寺別當敏覺が兒童を召て寵し給ひ又鳥羽院は宰相中將信通を愛し給ふされど物には猶ふるくも見えたるにや【古事談】などにも長季は宇治殿若氣也仍大童にて不加首服云々久不答の時はいみしく合恩給けり大歡之間依酒事御おほへはさかりにけりと見えたり宇治殿は賴通なり今按ずるに男のたまおけるものをニヤケたりといふは卽この若氣なり若道衆道なざいへるは若衆の二字を分ち呼たり【師門物語】（寬永六年寫本）中條なる人女を嫌する處にせいのひきゝは見たてもなし色の白きはにやけたる相また【きのふはけふの物語】に若衆のすがたのこゝろも御座ないといへばそばなる坊主たち是をきゝ仰の如く御すがたは天下一おにやけはしやこふ入しやと云など此草子ににやけといふことあまたあ

夜鷹

か男と物いひてゐたるをあれはさうかといはれてまとひにけり未練のさうか賣そんじけるとあるはおどけばなしながらさうかの義は是なるべしくらき處に彳み居ればさあるものともおぼめかるれば名つけしならん【物類稱呼】に京大坂にてさうか江戸にて夜鷹紀州にて幻妻長崎にてはいはち四國にてけんたん(間短)大坂及尾州にて人の妻をけんさいと云ふは罵る詞に用云々いへり間短の字を當たるもいかゝ風來も此字を書り)けんたんけんさい元一ツなるべし幻妻も正しとはいひがたし又其料【一代女】に上中下なしに十文に極りしものなればよい程がそれ〳〵身のそんなり又【娘容氣】にさうかのことを云て往來の袖をひかへて拾文ツヽに情の切賣いんきよもしさうな年ばへにてふり袖きてのたはふれあさましとあれば貞享三年も享保二年も同じ價なり其繪をみるに黒き布子に白き反えりをかけたる振袖をきたり是等に論はなけれども今にくらぶればおかしからずや是貞享三年の頃よたかの價なり世にこ

立君
つじ君

れを古へは辻君といひしと覺えたるは非なり【甘露寺職人盡】立君とある是なり宵の間はえりあまさるゝ立君の五條わたりの月ひとりみるつじ君は厨子君なるを辻こ心えたるは街に立もの故なりつじ君は家に居るものなり【同歌合】に妻こふるかせきかつし地こくかつしなごよめるみな厨子てふ處の名なり厨子とは今俗戸棚といふの類なり其家のさるやうなれば名けしなり今の局みせの類と見えたり今も京師には厨子といふ處の名往々あり

男寵

男寵 若氣 すはり 阿釜といふ事 用樂猿樂の少人 陰間の始 かねつけし事 小草履取 香具賣 まひ子 かげま看板 飛子 新べこ 金剛 江戸かげま茶屋 男風すたりし事

【陔餘叢考】(四十一)比頑童の訓尙書に見ゆれば三代より此風あり後世彌子瑕鄂君龍陽君が事ありて漢の籍孺閎孺鄧通韓嫣董が徒脂粉を傳て媚をなすに至れり【癸辛雜識】に云く東都の盛なりし時この事をもて衣食のはかりことをなす者あり政和中に法を立男子を捕へて娼となすものは杖一百この事を

なるまじ云々品こそかはれ望めば遊女のごとし（【人倫訓蒙圖彙】に丹波國に大原大明神あり爰に仕へ奉る神子むかしは勧進にありきけるにや今の大原みこは京のかたほとりに住で人のわすれ時分にはありくことあり是京師の風なりこれにはあやしきことをしるさず此ごろ江戸にいづこより出たる賤女舞のまひきぬを一蝶が書を書たるなりとて賞ものに出たり日月と鶏などかきたりさこそ思ふに是鶏神の神子のうす衣なるべし

○【北里爾】都城々北里門、々中別是一乾坤五街萬燈夜做晝、不知長空雲霧昏、南北娼家連對戸、東西酒樓接開軒、傾城傾國色世界、盡意盡情觀自在、管絃喧嘩瓊筵遊、盃盤狼藉珠簾内、無貴無賤競嬌客、一擲千金如土塊、神乎仙乎看佳人、八字歩來妖嬌態、弱骨猶能事錦繍、滿頭却堪飾瑇瑁云々、年々街上植櫻花、々々爛熳匂閑窓、色已衰香已殘、一切拔去無蹤迹、可憐娼妍莫此身、暴風淫雨損青春、此時棄却誰復顧、九春芳菲僅一旬、不知翠帳紅閨裏、幾般憂歡笑與嚬、雲泥何論升沈事、應須有果又有因、休恨青樓多少妓薄、情恰對薄情人、（請見青樓多少妓、輕薄恰對輕薄人）

比丘尼舟

○江東歎、此地亦是震嬋媛、過客一擧到水涯、就中々街又高妓、時世粧様弁紫華、戯合放飲酒泉湧、掛戦爭勝肉陣遮、朝三暮四情不定、東戸西門宿誰家、同僚團欒話心哀、或歡笑或嘆嗟、緩急有事見交態、恩義亦自如姊妹、海誓山盟竟何心、昨是今非空多悔、尺素鯉絶長江頭、華表鶴去夕陽愁、竹枝一曲欲誰興、朱欄油風醒醉眸、佳麗盛名一瞬息、此中意味君知不、總是開宵一場話、畢竟此生付浮漚、君不見深川無情水、悠々長送去留舟、　こはおのれがうた作りならふころものせしがその稿もうしなひてそらおぼへのおぼつかなきは句の落たる處なども有べけれど此條の笑ひぐさかいそへんとて筆のついでにまかせつるなり

さうか

○【浮世草子】にさうか惣嫁の字かけり此說非なり　【風流徒然草】五條の河原にはさうかといふ物あり晩の武左衛門かたりしは或夜河原をとをりけるにこゝそかしこへて行ものあり點と見おきたればさう

ともきあげてなりもはすはに花をやり候【吾吟我集】はつはもの戀慕にしまぬ心もて何かは露の世ぞとあだめく蝶々子か【船遊記】三線のことをいひて戀慕の道のよせ太鼓とやまことにはすはなるものなり元隣が【誰身のうへ】に町人の子供兵法を好むをいさむる處まづ其方のなりふりがはすはなるにより向ひにも血の多きものありて云々ある是なり又大阪にははすは女と名くるものあり【一代男】とひや方にはすはと申てみめ大かたなるを東國西國の客のねどころさすためかゝへ置ておのが心まかせの男ぐるひに宿かへてあふ事いたづらのちうやと限らず出ありくことも親かたの手前をはぢず云々【一代女】難波の浦は日本第一の大港にして諸國の商人爰に集りぬ上問屋下問屋數をしらず客馳走のために蓮葉女といふものを拵へ置ぬ是は飯炊女の見よげなるが下に薄綿の小袖の紺染の無紋に黑き大幅帶あか前だれ吹鬢の京からがい伽羅の油にかためて細緒の雪駄延のはな紙をみせかけ其身持かくれなく面の皮あつくして人中を恐れずびらしやらするが故に此名を付ぬ物のよろしからぬを蓮葉ものといふ心なり云々【娘容氣】に實めなる奉公はせぬ心なれば上問屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公つとめはては云々新地堀江の二瀨ながれわたり云々【物類稱呼】にも京大坂の旅人宿の下女をはすはといふと有もと一種のものなるを後はなべてその名をいふにや

○竈はらひ昔は江戸にも有とみえて【吉原つれ〳〵草】に下やしき守の若き男釜はらひになじみありけり舞子のことを云處かめやの小三郎多くおどり子共を取たてたりかまはらひお梅がすゞのふりもありと云り一蝶が繪に其圖あり手ぼそかぶり振袖着たる上にうすぎぬ着たり西鶴が【大鑑】に竈はらひの神子男ばかりの內を心がくる【一代男】にもあらおもしろのかま神やおかまの前に松うえてとすゞしめの鈴をならしてあがたみこ來れり下には檜皮色の襟をかさねうすきぬに月日のかげをうつしちはやかけ帶むすびさげ淡化粧して眉黛こく髮はおのづからなでさげ其有さま中〳〵御初穗のぶんにては

作価なり官に隷せず家居して姦を賣る者士妓と云ふ俗に私窠子といふこれ又數ふるに勝へずと云り【板橋雜記】に樂戸は敎坊司に統たり司には一官ありてこれを主る衙署ありこゝの役人は客を見ても禮をせず

○本邦には昔より彼脂粉錢の如きことをきかずされば二【和名抄】にも遊女を乞盜類に收めたり後世も只許されたる處の外はこれを賣ことを得ずさるをかくれて色をひさぐものたえずこれを地ごくと呼ふ

地獄

地獄といふは暗物より出たる名なり【一代女】（六）借屋に住る女の衣類と首は各別に違ひ合點頭のことしいかなる女房やらむと子細を尋ねしにいづれも世間を忍ぶ暗物女といへり名を聞さへうろさし居物宿に行て分の勤めも耻かしすゑ物は其内へ客をとり込外の出合にゆかず分とは其化代宿と二ッに分るなるべし月掛の男万金丹一角ッゝに定めて當座の男は相對づくにてじだらく沙汰なしにすることとぞかし又暗物といふは戀の中宿に呼れてかりそめの慰を銀二匁中にも形のみよきに衣類うつくしきを着せて銀壹兩と少し位を付置ぬといへりこれと同く江戸にて地獄といひたるもくらきなり【一代男】にも暗物くらこと見えたり月掛は月がこひなれども一人に任すにあらず【伽羅女】に大坂中の茶屋白人出業掠屋云々あり白人は江戸にていふしろうとなり出衆は風呂屋ものをいふ【東鑑】建久四年其後里見冠者義成を遊女別當とせらるゝことと見えたれば所役もかゝりしなるべし京師に大永八年傾城局の誓書を傳へたる者あり其中に仍御用年中に拾五貫文宛於有其沙汰者被仰合訖若就不沙汰者斷罪何時可有御改易者也とあり吉原町出來て諸處の遊女を止められしが其後ほどへて又處々にこれ有しを正德享保の間に悉く禁ぜらるゝ後又次第に出來て今に至れり又やがて禁止もあるべけれども久しからず又これあるべし

暗物
月掛
掠もの

○江戸にてかろはづみなるものをさしてはすはといふト養歌遊の神に（一端書あり）枝もなくすらり〳〵

渾業

新町遊女の數

○【諸藝太平記】大夫（引舟共に）六十三匁天神は三十匁鹿戀十七匁小天神廿三匁半夜にては十五匁端女郎十二匁各その中にて揚屋の取あり局のあそびは小天神十五匁或は十匁夜に入ば三匁女郎十匁二匁女郎八匁壹匁女郎六匁分の女郎銀壹兩と極む寶永七年【伽羅女】に六百三十一人內天神八十七人大夫四十一人

【みほつくし】に女郎屋惣て六十軒大夫四十三人各ひき舟禿つく小天神百廿四人各禿付くかこひ九十九人げい子卅八人わけ四十八人げいこの名女郎のごとし總計五百六十二人はかりなり

大阪中茶屋

○【伽羅女】に大坂中色茶屋を記せり疊屋町太左衛門橋六軒町道頓堀川裏町同土橋町南堀江北堀江竪横筋かい新地曾根崎蜆川中町よこ町安治川新河兩むかひの外蘆分橋の邊まで吟味せしにいかなる茶屋にも二人三人五人ならし客をつとめぬ女もなし（此冊子寶永七年の刻なり）寶曆の頃風來が草子に難波津に今を春べと盛りなる松梅の全盛は新町に色香をあらはし白人藝子の今様めけるは南北に風情をたゝかはすねたみそねざき島の內戀の坂町登りつめ隱せど出るはいろは茶屋ちりぬる客を釣よする目もとの鹽町こつぼりとたまらぬ味の安治川に深くはまりし堀江大露次次第に高津新地より我を忘れて神明前何ほご廣きのご町でも柳小路と身はせまり何としやうまん一家には七里けんはい八けんや我身の難波新屋敷れい婦尼寺田山浮名をかぶる編笠茶や穴に間近き臍か茶屋六十四文あり合町ぜうゆうじ福ぜんじ裏々にすむ夜發の繁昌そうぢや堺にちもりより云々

脂粉錢 樂戶

○隱れて色を鬻ぐものを漢土にも後世娼妓天下に滿つ兩京の敎坊官その稅を收むるを脂粉錢と云郡縣に隷する者を樂戶と云て使令に隨ふ唐宋の代官伎をもて酒宴の佐とす明の代になりても然ありしが宣德の初に至りて始てこれを禁ぜられて公庭に出ること絕たりといへどもます／＼里閭に充牣して猶これおほやけの妓女なり昔晏子齊國を治るに女閭七百を作り其夜合の資を徵て軍國の助とすこれ是法の

阿波の大盡

こにや【伽羅女冊子】（寶永）新町九軒のことをいふ處昔阿波の大じん木屋のみはしを馳走の爲に熊野浦より鯨の生捕を取よせし事世に噂高く阿波の大盡と名はあげたれども穿鑿してはたはいもない虚人此人目半分なりど共其女郎の爲にしてこそ　後北濱の大五と云しが此阿波が噂を聞丸屋の奥州に小判で歌かるたを拵しかも繪は長谷川等伯歌はさる御方の手筋たのむに大分の物入おもひ入花車にしてあと

山本與次兵衛

のすたらぬ進上なれも是又手重し其あとへ山本與次兵衛吾妻かよひの夕暮蚊のない里もがなと兎がすさみ不便に思はれ揚屋中へ屋形袋とて絞紗の蚊帳を四方に取まき金銀の高しれぬ事も其やうに名は發せず唯かさびくでも椀久が松山に大年の夜壹歩壹升つゝまきしこと堆う人もしれりといへり【露棲】に寛文中佐渡島勘右衛門抱吾妻といへる大夫に播州山本村の坂上與次右衛門といへる有德人馴染けるこれを世に山崎與次兵衛といひかへたり其頃の小歌にあづま講出せ山崎與次兵衛云々こつこてつけ出せ三百兩　諷ひしなり其頃女郎の身の代三百兩といへるはめづらしきことにて今いふ千金の蝸よりも

椀久豆蒔

すさまじかりし又云松山になじみし椀久を元日金年越といへる淨るりに作りたるをみれば節分の夜升に壹歩豆板を入て揚屋ざしきにて蒔たる事あり是は元祿中大坂玉屋某といひし人越後町茨木屋長左衛

瓢簞かしく

門方にて致されたる事なり又其頃有德人の果にて殘髮に十德を着し竹杖に瓢簞をくゝり付門々に立かる目をいひて物を乞し瓢簞かくしといひし隱者ありしこれと二品を一ツにして作りたるは作者の發明なりといへり（【椀久一世物語】こいふものあり淨るりと前後を知らず）又江戸にて紀文にも此豆まきの事ありといへり疑ふべし（椀久の淨るりは丘屋某が事をとりて作れるやうなり紀文これを學ぶべからず）

椀久墓

（○椀久墓は大坂八町め寺町實相寺にあり宗達之墓としるせり沒年は延寶年中なり又瓢簞かしくは寶永ころの者にて佛說を俗談して河原に立市中をありきしなり

と云々女歌舞妓これを學ひてさまさま名乘る中に佐渡島正吉といふ大夫ありて歌舞せしは京師までの事と聞ゆやがて江戸に下り程なく江戸を拂はれしとなむ此處の佐渡島是なるへし然らば越後町に付ての名にはあらず）其南を吉原町（北組）北天滿鄕に吉原といへる處あり・それより移す（これらも慶長中に江戸のよし原を追はらはれし者などの居たる處なるもしるべからず）新京橋町新堀町（共に北組）

揚屋町

其西を九軒町（南組）揚屋町なり（揚屋町此外處々にあり）【一代男】（六）京の女郎に江戸のはりをもたせ大坂のあげやであはゞ此上何かあるべきといへれば此諺古きことゝ見えたり又この處に大夫出きしは【榮花咄】に一とせ大坂の新町に木村屋といへるより御大夫を仕出し其名を越中とあらため難波に五三はめづらし都の如く引舟つけて堀江の水揚より一日も隙なくて盧の一よの情を爭ひ久しく此里めいりけるが人の移り氣にして云々女郎一人作りなし親かたよりはやり衣裳の仕出し素足に雪踏の音たかく禿もはな紙めに立ほど入て云々此扇屋が此に來らぬ已前なるへし其中扇屋四郎兵衛といひしは京都島原より寬文十二年大坂に移る是林又一郎が末なり（林又一郎はもと伏見遊廓の開發の者なり後島原に入また大坂に來れるなり）世に聞えたる夕霧は此家の名妓にて京より此時下りしなり伊左衛

夕霧

門と云ものは跡かたなき空ごとなり藤屋伊左衛門扇屋夕霧阿波鳴戸といへる音曲の作りもの有り此趣向の內に阿波の大盡といへるは由緣ある事なり其頃大坂阿波屋某とて大分限の者あり吉田屋喜左衛門か方にて此夕霧になじみ深かりしが夕霧は延寶六年正月六日死す其頃かぶき芝居の立役坂田藤十郎同年二月三日より夕霧名殘正月といふ外題にて藤屋伊左衛門に藤十郎なりたり云々（是によれば阿波鳴戸は夕霧死せざる內の狂言のやうなれどもさは有へからず【耳塵集】を考るに名殘正月といふが夕霧の初狂言なるべし）當津の大夫二人禿はつれたれども引舟女郎は此夕霧に始る云々（其始るよし夕霧はやりし故自身に圍を一人揚て勤たりといへるは非なり是京師よりしきたりし風なり）又其後のこ

つ程にしてよしあし共に三線をにぎりづをふつてうたふ立よるものは馬かた丸太舟のかこ浦邊のれうしすまふとり云々此處をいさかひの場にして命しらずのより合身を持たる者の夜ゆく處にあらず【永代藏】に大津の事をいふ處近年問屋町長者の如く屋造り昔にかはり二階に撥音やさしく柴屋町より白女よびよせ客の遊興晝夜かぎりもなし（此事延寶中には止たりといひしが又貞享頃再興したりとみゆ）【丹前能】に柴や町格子女郎禿あり揚屋を中宿ともいふ端女郎小家に青のれんかくる局といふとあり

大坂新町

○大坂新町【澪標】に富津の花巷はむかし天正慶長の頃より諸處に遊女をかゝへ渡世のもの有しを寬永年中今の土地を下し置れ諸所の遊女を一所に集め一廓の内に軒をならべたり其頃木村又次郎といへる浪人者に廓の庄屋年寄を被爲仰付永く傾城町と成り新に町と成しより世人新町とよび惣名とす當所にては中といふ

瓢簞町

瓢簞町（但南組）此已前道頓堀にひやうたん町とて有其處の一町元和の頃此所へ移せりまた古老云元來伏見浪人に木村又次郎といへる浪人ありし由此人もと木村氏の御乳の人の子にて故ありて豐臣家御馬印の瓢簞を傳來す故に小名となりたるよし元和寬永の頃木村をかたとり木村屋又次郎と名乘廓七町の惣支配して二代又次郎が時天和年中役義に障ありて庄屋年寄役斷絕すこれ迄新町通り筋を又次郎町と呼けれ共其後より改て瓢簞といひならはせり（又木村氏に聞えはゞかることなどによりてこのむらやとはとなへしならん瓢簞町とはうは氣なるものを瓢簞といふ是にてかろくして水にうくよりなぞらへたる町の異名なり）

佐渡島町
越後町

其南を佐渡島町といふ（南組）天正慶長の頃より上博勞に有之佐渡島與三兵衞といふ者相續の地なりしに寬永の頃今の地に移りぬ此西の一町を俗に越後町といふは佐渡に並ぶの心なり（【後撰夷曲集】に大坂佐渡島町を此頃世に越後町といひならはせばよめる　傾城に迷へる人は親しらず子しらずに行越後町かた此集寬文十一年の撰なり然れば越後町も佐渡島町なる事知べし又按に佐渡島はもとお國歌舞妓の名殘なるべし慶長の古書に於國は出雲より佐渡へわたり京へ出

の薫また八千代杯は此地より出たり奇妙と謂べし

○【旅日記誰袖海】撞木町はさすが都に近く島原のながれを汲で鄙びす大佛耳塚の邊りに卸もおりて爰に行ことなり女郎押なべて禿をつれる京の圓よりはやうすよし【旅日記】撞木町鹿おはします次は端ばかり夜みせも難波にかはりて燈をこほさぬ闇路に面相おがみたしといふ時硫黄をばつとかゝげて木地迄は見とゞけぬ稲妻さなきだに夜目遠めみそこなひはある筈なりこゝにくるぞめき舟頭馬かたやねやの弟子云々鹿戀も格子よりみるに燈をいだす半夜は十といひてひとつたらぬ云々いへりされば【玄峯集】に伏見撞木町炬松ふつて野邊行もけに爰もとの古風なるべし(嵐雪)行燈で來る夜送る夜五月雨ぁけてのく家にふしみや夏の月【北窓瑣談】に伏見撞木町は安永の末ッ頃まではいまだ數家殘り居て賤しけれども妓女も數十人有し大石内藏助山科に在し頃折々行通ひし笹屋清右衛門といへるは撞木町第一の大家にて大石の時の儘にて清右衛門七十余の老人なりしその母の若かりし時の事にて大石をもよく覺えて文なども多く此家に所持せり其外の義士ども大石こ共に來り遊びし人々の文も多く殘れり大石の契りし妓を夕霧といひしが大石より贈りし三線また硯などもあり云々其後清右衛門死失せ撞木町も年々に衰へ笹屋の樓も段々に毀ち賣り終には撞木町殘らす草原となれり見る内に移り替れる歎ずるに余りあり其後寛政年間に至り誠にいやしき靑樓纔に二三軒にや建立せしかど昔の悌にもあらずと云り

柴屋町

○柴屋町箕山云近江國大津遊廓を世に柴屋町といひならはし侍れども馬場町なり柴屋は遊廓の外下の一町をいふ傾城廓中の外へ出ず天神廿六匁小天神廿一匁圍十六匁靑大豆十匁半夜八匁なり夜みせのみ晝みせなし傾城先年は八町の旅舘迄も出しぬいつよりか制禁なり今はさびわたり昔の五分が一も非ず伏見より少まさりたれどかくおとろへたればいづれとわきがたし【一代男】柴や町みやこに近き女郎の風俗もかはり端局に物いふ聲の高くありくも大足にせはしくきる物もじたらくに帶ゆるく化粧も目だ

次第に建つゞき野中にありし非人小屋今は新地と町つゞきに成たり頂妙寺新地も二條新地と町つゞきになる今出川新地もその前後のころより建しが今はいかゞう閉たり云々

藤森稲荷の茶屋

○藤森稲荷の茶屋【風流旅日記】藤の森過て稲荷明神此あたりの茶屋簾の隙よりまねくをみればみな廿にすぎたる女どもなり云々出さまに百文下んせと云何にしやるといへば此棚のかり賃に亭主にやります【丹前能】（元祿十四年双紙）稲荷の條近年御遣宮より此かた鳥居の前には軒をならべ簾をかけうつくしき女男をみて鼠なきあやしや狐のわざかととへばいや〳〵あれは此處の茶立女のぞめば奥にともなひ花代が月酒を望めば外に分入事なりとかたる月分とはいかなることぞ日那衆はいかいぐわちかな月は壹匁分は五分といふふるひ詞を御存ないか（月はひとつかけば二ッといふ事をとれり分とはその半分なるべし分の勤といふは遊女年限あけても猶我勝手にその主にかゝりゐて勤るをいふ又分さとなどいふ時は唯色町の事なり）【誰袖海】に稲荷の色茶屋八坂よりもはるかにわろしと有り是又元祿の末の草子なり

伏見の撞木町

【箕山大鑑】に伏見の撞木町は本名夷町なり撞木町とは油掛通東の行あたりの町なり夷町も町の形撞木に似たりとていひならはしたるなるべし（已下長ければ要を摘）林又一郎といふもの豐臣公の時願ひて田町といふ處を賜ひて慶長元年に傾城町を立たりしに大閤大坂に歸城し賜ひ程なく薨じ給ひければ伏見の繁榮ことかはりて此處の者洛陽に移り又大坂に行て都は野はらとなりぬ然るを渡邊掃部前原八右衛門といふ者遊廓の再興を願ひ慶長九年甲辰十二月二日開地せしむ今の夷町是なり當處の傾城先年半夜女ばかりにていたく凡卑なりし万治三年初音小左衛門といふ二人の圍女出來また寛文三年淡路小藤とて天神も出來たりしが同五年のころなくなりて天神中絶しぬ遊料は天神廿八匁圍十六匁半夜八匁なりしかど擧屋困窮によりて延寶四年より圍十八匁半夜九匁總而處町俗に泥町といふ夷

柳町

町より十六町坤の方なり船着の處にして船人馬借の類入込て興する風俗をいふにたらずされども元祿

絶ず疊は何となく打しめりて心地よからず【艶道通鑑】（正德五年板）清水寺につゞきて北斗堂靈山寺法觀寺云々いつしか淫婦屠兒の栖居と成揺立し法燈は夜店の行灯にかはり燒しめし香烟は樺燒のにほひに變す鼠島が簾をくゞりてあみ笠の後甲を抓み暖簾が風に動て家名ぞ人を招ぐ云々藪の下の二八こつほりのぞめき

石垣町

○【一代女】石垣町茶屋といへど此處には一軒に七八人づゝも有て衣類の仕出しよき人相手に分里の事も聞おぼへ云々（【武野燭談】に石がけ茶屋河原を見おろしがけ造りにしたる四壁金襴純子にて張床をば疊を止て天鵞絨を以て包み天井をば水晶の合天井にして水をたゝへて金魚を放ち障子はひゝところを以四方は見えて內は見えぬやうにかまへ珍膳美味を盡し美婦是を配膳するほどに貴賤共に金次第の遊興放埒なりしかば天和年中禁止せらると見えたり祇園町も此時なるべし）【內鶴大鑑】（六ノ祇園石垣上八軒穴奥八坂清水の茶屋こつらねいへり【一代女】町の髪ゆひらしき男細與に八軒の茶屋あそびの諸分ならでは知らず云々このこつほりといふ處は猶そのかみはやりたる處なり【似我蜂物語】（寛永ごろの冊子なり今の本は後に摩滅を補ひ目錄に番付を加へさし繪をしたるは寛文ごろなるべし）今の都のはやり物云々しはがき町にこつほり町こ見えたり

こつほり

所々の新地

○又處々の新地のこと【居行子】（後篇安永五年刻）愚も七八歳のころ祇園新地もいまだ建そろはでそこかしこ草生じけり薄と家こ入まじりまばらなりしを覺侍るその邊今は大やしき賣買には千兩二千兩の價となる北野の新地も五十年ばかりのむかしは三番町五ばん町と段々に開けはん昌なりしが移りかはれり此近年はさびしく成たりむかし景清ほどの武士の通ひしときく五條坂も今は一二軒そのしるしのみ残れり田畠野原なりし七條新地は五條より建つゞき甚にぎはし二條新地も川ばたの茶やはむかし若狹街道の茶店の株にてそれよりのみ酒にうつり色にうつりこそ〳〵したる處なりしが段々こはん昌し

君孫君等也云々是船を家として遊女のここく定居なし浪のうへに生涯を送るものなり委は【傀儡子】に記したればこゝに畧す遊女もその始はかゝる趣なるべし都にてもそのかみ【建武元年二條河原落書】一たそがれ時になりぬればうかれてありく色好みいくそばくぞや數不知内裏ふかみと名付たる人の女柄のうかれ女はよそのみる目も心地あし

日本國中遊女町目錄

○日本國中遊女町【箕山大鑑】云第一京（西新屋敷號島原）二山城伏見（夷町）三同處（柳町）四近江大津（馬場町）五駿河府中（島）六武藏江戶（三谷）七越前敦賀（六軒町）八同三國（松下）九大和奈良（鴨川木辻）十同（小網新屋敷）十一和泉堺（北高洲町）十二同（南津守）十三攝津大坂（瓢簞町）十四同兵庫（磯町）十五佐渡（鮎川山崎町）十六石見溫泉津（稻荷町）十七播磨室（小野町）十八備後鞆（有磯町）十九安藝廣島（多太海）廿同宮島（新町）廿一長門下關（稻荷町）廿二筑前博多（柳町）廿三肥前長崎（丸山町寄合町）廿四肥前樺島廿五薩摩山鹿野（田町）以上廿五箇處【京本洞房語園】に載るを按正して記す右の處々遊女名寄位附等其績か【傾城色三線】に出たり

祇園町

○【一代女】云々【好色旅日記】貞享四年板）祇園町綱手つゝきて色茶やあり女の形つくろひ姸を試みて二匁ツヽに賣たるも今法度故ひとりもなし茶くみ女のちとふけたるが前だれして酒飲たしといへばおよつと屏風も引まはす（一代女【貞享三年】祇園町八坂は花代二匁せはしく寐ごしに帶かけてよらしやりませいといふもよしなや二人あるよねに客五人座につくよりはや前後の闇取云々【今日はなし】元祿十四年）祇園やぶの下の色茶屋にさはといふやましう有ありやういひのくわちなり云々【元祿村我物語】祇園町井筒屋にて舞子四五人呼でさつと踊仕舞云々（貞享に一度破し元祿より又出來しといふ）

八坂

○【一代男】（一）淸水八坂にさしかゝり茶屋に三河屋萬屋か、投して細道の萩垣を奧に入かば爐に鶯の好風味には誰か引すてしかし木のさほに一筋きれて結ぶともなくうるみの朱の烟草盆に炭團の埋火

元賞杖殺、更有取名賢、詩中意細刺樹木人物、至有周身用、白樂天詩意、刺涅人呼爲白舍人、行詩圖者【雜俎】統名之曰劄青云

○島原といへども江戸の繁華にくらぶれば物のかずならす【俳諧三疋猿】（寶永元年撰）女房に附さしすればをかしかり鴛の隙さはさびた島原（【一目千軒】太夫三十八人端五十三人かこひ廿八人凡秃牽頭迄かぞへて二百計りなり）

○【諸藝太平記】（元祿十四年）太夫三十八人引舟同前天神九十一人鹿戀五十二人端女郎迄打込凡八百餘人揚屋廿五軒茶屋四十五軒

傀儡　諸國中遊女町目錄　祇園町　八坂　石垣町　こつほり　稲荷の茶屋　橦木町　柳町　柴尾町　大坂新町　瓢簞町　佐渡嶋町　越後町　揚屋　夕霧　阿波の大蠹　山本與次兵衛　椀久豆蒔　新町遊女の數　大坂中茶屋　地獄　掠もの　蓮葉　竈拂　比丘尼舟　さうか　立君　つじ君

くゞつは【和名抄】にも雜藝具に傀儡を載て久々豆とあるごとく偶人なり然るに遊女と同類のものとすること何の故とも辨へたる者なきにやあらぬことのみを說り偏に旅館の出女とばかり心得るは【詞花集】に（別歌）あづまへまかりける人のやどりて侍りけるがあかつきにたちけるによめる（傀儡靡）はかなくもけさの別のをしき哉いつかは人をながらへて見むなどあれはにや遊女とはいさゝかかはれ共旅店の女をしかいふは後に准へていふなりこはもと人形を舞し又は放下などするものゝ妻むすめどもの色を賣ものなれば傀儡とは呼たるなり【朝群群載】（第三）傀儡子記あり其文長ければ要を摘ていふべし傀儡子者、無定居無當家、逐水草以移徙、類夷狄之俗、男以狩獵爲事、或弄双劍七丸　或舞木人云々、女施朱傳粉、唱歌淫樂以求妖媚、父母夫知不誡、逢行人旅客、不嫌一宵之佳會云々、皆非士民自限浪上云々、東國美濃參川遠江等黨爲豪貴、山陽播州山陰馬州次之、西海黨爲下、其名傀則小三日、百三千載、万歲、小

り（萬治寛文には最早なきことなり）

朝込　○朝込夜の未明に來て廓門の開くを待て入るをいふ英一蝶が畫に島原出口の處客は門の外に居り内の腰かけに遊女あまたあり閉たる門の扉の下の透間より杯を外に居る客にさす所内には今開かむと一鑰もてくる者あり夜のさまにて挑灯もてり此圖朝込なるべし古き前句（うつりこそすれ／＼）朝こみに手まつさへきるかふろ共

壺入　○また壺入と云ふは寛山云樂屋にて遊宴せず傾城の家主の舘へ行て女郎と興するなり此名目酒屋より出たり調へて飲ずに酒屋の内に入てのむを壺入と云ふ【一代男】（八）よきやらうのかたに二三日のつぼ入【下手談義】に門前の茶屋へつぼ入してなどいへり是も酒屋のことにいへる說は壺と云ふ字になづみたるなり壺は瓶を云ふにあらずつぼめる處を云ふ瓶につぼと云ふも此義なり局と云ふもつぼねたる處なり

入ぼくろ　○遊女眞情を顯はして髮きり指きることはむかしもあり唯剳青は近時のことゝみゆ俠客の文身することはやりて後のことなるべし（一代男）【五】山三郎と野郎がことを云ふ處けい一大事といへばほくろ有しはかのほうしをけいじゆんと申けるとかや【關東遊俠傳】に鐘彌左衛門と云ふもの肩より腳に南無阿彌陀佛と大文字に彫付たり其頃迄は入ぼくろ大なるは珍しかりしといへり元祿ころの事なるべし按るに【續說郛】【藝林學山】（三）長安貧兒鏤臂文云々、鏤臂或謂之剳青、俠斜遊人與倡伴多爲此態（已上【丹鉛錄】）此事見【酉陽雜俎】云々、唐宋間、惡少競刺其身、恣爲不法【雜俎】載其事甚衆、非俠斜故也、宋末渡南尚多此俗、水滸傳豈不足信、然亦可識當時習尚矣、國俗世風多變、惟市井游兒與倡伎、時或剳刺名號、以見盟誓、斯則皆所見者耶

（【武林舊事】に[illegible]中瓦、長安惡少、多只[illegible]、今過り圖に坊間、[illegible]妓[illegible]成群、[illegible]北

大門をうつ事

富にて吉原惣仕舞とて大門をしめさせし事兩度ありしとぞ六條一日買は上がたのむかし噺にて其事知べからず紀文がことは究めて虛説なり千をもて數ふる遊女に通ふ客の數はかるべからずそれをやめて大門を閉ることゝなるべきかはむかしより聞ことゝなれどいと不審

紀文の事

○世に紀文を其身一世に富有となりてあまた金銀をつかひ盡して終れりと云るも非なり延寶八年三月廿九日長崎町廣小路小屋場長五十間横十一間右之通鈴木町名主甚太夫南ぬし町名主與兵衛南傳馬町名主新左衛門右三人へ相尋候處何の構にも不罷出候由申候間本八丁堀三丁目材木屋紀伊國屋文左衛門に相渡申候右は御作事小屋場なり【明良洪範】に富有のさた有し紀伊國屋文左衛門上野中堂御普請うけ負にて數千の金をまうけ奢甚しきが元祿十三年夏評定所へ出て只今は御用の間に候まゝ病氣養生として入湯仕度段願申ける伊豆守大に怒て町人の分として上を輕しむ奴かな湯治ねがひなとは我等か組與力か家來共迄頼み願ふへきことなり然るに今歷々公用の評定の席へ願出るは大なる侈り者なりとて牢舍申つけられたり貪利深き者故後年終に金銀を失ひ一日も送り兼るやうになりて隱遁の躰にて人しらずなりしとなり

桶ふせ

○揚錢多く負て返すことのならぬをは桶ふせといふことすといへり【似せ物語】に男女うなつき合て走らむとするを長聞つけて男をはつけとゞけしければ女をばたばかりてくらにこめてしばりければと云々此ころは桶ふせなどは未なかりしにや寛永十九年【吾嬬物語】やかれつゝかねのあるほどとられんぼ後はかならず桶ふせさしれ了意が【浮世物語】にその外あげ錢につまりて桶ふせとなり云々【江戸土產咄】つひには吉原にて桶ふせになりやう／＼友立のかげにてのがれかへり云々箕山云擧錢を負たる者をとらへて入湯桶を打かふせ銀の受合する事なり昔はたまさかに斯ることも有もやしけん今は名目のみ有てかやうの仕業はなし當時は銀を負たる者の忍びて來るをみ付ればとゞめて歸へさぬ廓法な

傾城は油とろ〳〵かね黒く薄げしやうに花車めかしてしやらなる風情【大鑑】（うきよ組）たれもうき世はかりの宿とのみ人をつゝむまよむしや昔しやふり【續山井】に月花はしやらなり風の糸御しやらつくしやらくさい皆同語と聞ゆ箕山云しやらつくは諧るにされことを交へいさむる貌をいふ是戀の一かゝりなり【原本洞房語園】傾城のことばに余情を好むものをしやらくさいといふ此起りは越前の三國あたりにては遊女のことをしやらこいふとあり今もおしやらくといふもと洒落の字より出て其義さま〳〵

おさばる

に移りたるなりのさばるは【無名抄】歌の詞にのさなる處とあり【圓光大師傳】（廿三）上人ある人に返事の中身の毛もいよだつほどに思べきにて候をのさに思召候はむは本意なく云々【太平記】秀詮討死餘りに閑かに馬を飼てのさ〳〵としてぞゐたりける【東海道名所記】島原の處しどろなるはな歌をうたひのさばり行のさはのすの義のさ〳〵などいふ是なりはりはふりの俗言なり態字の意と見べし

太鼓もち

○太鼓もち古くは太鼓衆といへり（了意が記などにみゆ）其義は【誹諧袖海】に能の太鼓打になぞらへて太夫を心よくのせて廻し大盡の氣に入やうに拍子たつれば太こと云ふ末社ともいふは大じんのそばに有故なり

どらうつ

○鉦うつといふは江戸の詞とみゆ【吉原徒然草】買手みな女郎にだまされぬべきに定りたれば程なくどらうつべし有德なる大盡なり共おこたるまたく此里にかよはゞやがて金つきぬべしといへる詞勢どらうつとは身上を果すことなり金盡といふを鉦撞に取たる例のなぞ〳〵にや（又思ふに是も隋落の訛音にて鉦とまがひ打といふことをもいひ出し歟今江戸にてどうらく者といふを京難波にてはごろぼうといふごうらくの轉語なり）

一日買

○一日買【諸艶大鑑】に越後の竹六といふ男かりそめにもこかまへたること嫌ひたり六條の一日買と申も此人始めての都のぼりにせしとかやといへり一日買とは大門をうつといふ類か世にいふ紀文は豪

種々
すいぐわち

氏神はどうしたぐわちな神さまぞ云々そのかみ江戸にもつかひし詞とみえて【吉原犬枕】にやかましきものぐわち大よせとあり舊說に月の音にてかく異名せる客は此道に至らずして物しりたる面かげをうつせども粹に及ざる故に水の月にたとへ月といへりとなり其理聞えがたしもと杲[illegible]なこの詭言にやかくいふも亦ぐわちる歟

ぬめる

○ぬめる、しやら、わさくれ、のさはる、なごいふことは皆昔のはやり詞なり【宇良葉のすけ草子】（慶長九年）かな夢のうき世をぬめるやれあそへやくるへ皆人云々【犨草】（寛永）當世だてとて遊女ぬめり男【吾吟我集序】（慶安）今ぬめり歌天下にはやること四ツ時九ツの眞晝になむ有ける其外にも太夫がぬめり道中などいへること多かり元祿の頃岸野次郎三といふ三絃ひき古き唱歌を好み尋ねさぐり三絃の妙を得たり人に望れてぬめりを十七段に引わけたりとぞぬめりといふ曲節ありとみゆ今も淨るり作者の文章緣語をつらねたるをぬめるといふ滑字の意なるべし

しやら

ゝやらは【似せもの語】若きもの傾城に馴染める處男つづけ買にして常に女とむかひ向ひ居ければ女いとしやらなり金もいとうせなむかくなかひそといひければ「おもふには忍ぶることもわんざくれおひにしかねはさもあらばあれといひて格子の内にをれば例のこのかうしの外には人のみるをもしらでのさばれば云々【竹齋物語】踊の小歌心盡しの内裡はうこやしんくしながら殿はもたいで若きが二度と有物かあらしんきやわざくれ【悔草】（正保四年）に我も昔は夢のうき世わざくれと迷ひしことを後悔江戸小網町なるわざくれ橋のことは【見聞集】

わざくれ

【そゞろ物語】に出たり慶長中の異名なり【江戸土產咄】誰が百年を送らんなんのわざくれ一寸先はやみ云々【永代藏】にはかどらぬ算用すてゝわざくれ心になりなど後にもあまた見えたり【和訓栞】にわざくれのくれは是の義なるべし又云好事の意なりといへるは通じがたしわざは事なりくれは榑にて物のはしくれなどいふにて万事をはしくれとして擲ち拘らで遊戲三昧となる意なり又【可笑記】（三）

大鑑】云太夫の服小袖帷によらずひつたの鹿子地なし縫箔の小袖縫箔の小袖伹箔の類六條にては多く着しつれど此里に至りては傾國の服には初心なりとて是を着せず殊更當時鹿子縫箔の類停止なれば其さたに及ばず云々無紋無地の紫紋所あるは太夫職着しても苦からず云々八丈八反掛大鶉絨の小袖云々など見えたり【板橋雜記】南曲衣裳粧束四方、取以爲式、大約以淡雅樸素爲主、不以鮮華綺麗爲工也

若衆女郎

〇若衆女郎古くありしものと見えて【吾嬬物語】にまんさくまつ右衛門兵吉左源太さんさくしらの助熊之助などいふ里名あまたあり是もと歌舞妓をまねびて太夫といひしころより佐渡島正吉などいへる太夫もありし名殘ごふゆこれそれのみにもあらず男寵の流行し故に後までもかうやうの名を付るたりされど太夫にはあらずみなはしかうしの內なり勝山が奴風の行はれしも此故なり【異山云近年傾城の端女に若衆女郎と云あり先年祇園の茶屋に雛といひし女姿かたちな若衆によく似せて酌を取たりされ共是遊女ならず是のみにて斷絕しぬ若衆女郎の初る處は大坂新町富士屋といふ家に千之助とて有此女は初は𢌞原町の局にありしがおのづから髮短く切てあらはし居たり寬文九己酉年より本宅の局に歸りてさかやきをすり髮をまきあげにゆひ衣服のすそみぢかく切うしろ帶をかりた結にし懷中に鼻紙たかく入て局に着座すよそほひかはれるしるしに暖簾もかへよとて廓主木村又次郎がゆるしを得て暖簾に定紋を付たり紺地に鹿の角を柿にて染入たり是若衆女郎の濫觴なり見る人めづらしといひて門前に市をなす故にこゝかしこに一人ツヽ出來るほどに今はあまたになり堺奈良伏見の方迄ひろまれり是若衆道にすける者をおびき入むの謂ならん歟されどもよき女をば若衆女郎にはしがたしそれに取合たる顏をみ立てするとぞ見ゆ大坂の若衆女郎は外面よりこれとしらしむる爲に暖簾にかならず大きなる紋を染入るといへり【洛陽集】南無あはれなるものや柿暖簾（有和）

うき世詞

〇すいといふ詞は粹にて拔粹の上略なるべしたゞくわさに【松の落葉】一中節方屋助六道行そもまあわしが

がる事なるにこれを贈る人稀なり其いはれあしき木がやられずよきは價おもくして目にたゝざる物なれば此價にては衣服を遣したるかたまされりとの利けん故たり衣服調度は傾城自分にとゝのふるとてもおもひの儘なり伽羅ばかり人を賴みても求めがたく難義に及ぶ諸廓共にかはる事なし長さき計他にこへて面々所持侍るといへども昔にかはりよき香をたしなめる女郎なし是故に【吉原讃嘲記】などには富る人をさして伽羅多き人といへりこれは金銀をいへり金銀とはいやしければ隱語に伽羅といひしなり（江戸にも江戸町西村庄助が抱への香久山がもとに何ものか用舍人のまねして來り伽羅の劇木を二本火にくべて酒の間をしたる戲なども女郎の珍重するもの故なり伽羅の下駄は浮説なるべし）【松の落葉】福助買初踊皮の財布を肩にかけて古かねを唐かねかを文の上書きしやうの下書かひましよゝい〳〵伽羅のたきからかを【望一后千句】火を埋む香爐の中のおぼつかな雫おちけりと云洗ひがみ此句は遊女をいふに非ずそのかみ婦人髮を洗へば香をたきこみしなるべし香爐の枕と云ものゝ料又枕にも香をとめたり【西川畫草子】詞書に好色女の畫に靜御前を合す誠にかまくらにとめるとあるは香枕に止るの謎なり昔は何によらずよきものを賞て伽羅といへり延寶六年【露言歲旦帳】に國厚う千代のつやあり伽羅の春近き頃までも俗諺につやを言ふといふことを伽羅を言なごいへり通りものゝよき男と言ふことを金看板伽羅の男と云ふ昔の浮世草紙に伽羅女と云題號などもあり同意なり然らば伽羅の下駄と云も唯よき下駄を稱へたるなり又【江戸鹿子】に見えたる伽羅休慶伽羅小左衛門など云もよきたいこ持のあだ名なるべし

金看板伽羅の男

衣服

○衣服も時々の好みかはれ共【一代男】（六）女郎の年禮をみる處空色のはだ着中には樺しゆすにこぼれ梅を散らし上はひどんすに五色のきり付紋根はご板はま弓玉ひかりをかざり肩にはしめ繩ゆづり葉おもひ葉の數を盡し云々あり遊女無地縞の類を着たりしは好むとにはあらず制禁によりてなり【箕山

彼御家より布を柿染にして長さ四尺ツヽ三布にて縫合の二所に柑子革の露ありしなりといへども此儀は今断絶して彼御家より吟味もなし傾城屋自分のはからひとして是をかくる當時暖簾の色は紺染を用たれど大夫町ばかり今に柿色を用る事古例を以てす殊勝の事なり此局の内土間は外にして疊二疊敷をまづ定れる法用とす或は三疊四疊半しくもあり床棚付るもあり壁に寄て竿をつる衣掛の竿といふ仔細は是なり江戸の局は口の間も廣く奥間も寢所をかまふ云々（【堺鑑】にも乳守遊女町の事をいひて暖簾に紫の耳を作る事は他所にたらぬことなどいへり古き俗説とみゆ【望一後の千句】似たるが多き傾城の門とひくるに青のうれんを懸つゝけ

暖簾

○廓中昔のやうす【東海道名所記】さて本町に入てみればかうしの内には金屏はしらかしたばこぼんに眞きざみ匂ひたばこ金ぎんのきせるとりそへ池田炭を富士灰に埋み時々伽羅梅花侍従なんどくゆらかし打しめりたる處に三線の音折々ひきたてさすがにかしましからず云々又はし傾城は蜂の巣の如くにめん／＼にちいさき局ひとつ／＼かゝへて門口にはなめし革にてつたる青のうれんをかけたら火はち又は目のつぶれたる摺ばちに火をいけ雁くびのかたくじけなる吉ざせるにたばこを取そへて前におきつくねんとして居るもあり門へ走り出て男きれに行あひ狗ころのそばゆるやうにすれまとひ引とゞむる云々あり其さま今にくらぶれば質朴なり後局の道具主人よりわたすよし箕山いへり

廓中昔のさま

○昔の遊女伽羅を多く焼し事【諸艶大鑑】に十年と申は水揚より定めの勤めに姉女郎に引まはされ万のあてがひは親方より先大夫はゝじめ二ヶが間毎日伽羅二燒本書五枚云々【一代男】にきやらもあしまゞたきすて香爐二ツを兩袖にとどめむろのやしまと書付たる筥より立のぼる烟をすそにつゝみこめ云々【色三線】女郎身の上の苦をいきて近年世につれて留木も人のきゝしれる名の木を留ればならず云々是故に箕山も傾城に金銀を遣す外に伽羅を贈へしたくて叶はぬ物なれば身にかへてもはし

遊女伽羅を焼し事

打やう巧者になり十一にても十二にてもかこふやうになり遊女の價もたかくたりて十五匁になればかこひの名も何のわけやらしれぬやうになれりと云りされど西鶴なども十五女郎と書たりもこより十五なるべし是を鹿戀などゝ戯れ書て鹿と計略てもいへり（貞享三年の册子）鹿戀は十六匁四々の十六といふ九々よりいひそめしとかやといへれど非なるべし十五匁のときより鹿といふ名をいへるをや【諸藝太平記】大夫（引舟とも云）七十六匁天神三十匁鹿戀は十八匁端女郎あげやへ行はかこひなみ半夜といふは十二匁端女郎出口の茶やあそび北の茶やも同前半夜は闇の晝夜に分ちたるものなり闇を分て賣に

半夜

はあらず外に半夜女あり（【貞享の畫草子】半夜は九匁しれた事江戸にて局また散茶の類なるべし）晝よりは闇幷夜に入ては十一匁午の刻まで書隔子あり大夫は出ず借しなし宿の夜泊ありあけや廿四軒出口

端

北向茶や合て十九軒此分にはし女郎を擧る晝ばかりにて夜泊を制す端女は假爽ともいふ端居しておふ假の契りなる故しか云とあり北向は【貞享三年畫册子】に北方の横町にあたりて鳩のこやのうちに住で夏冬なしにすゝはなをたらし無常迅速を觀し給ふ云々（【一目千軒】に中堂寺村住よしや太兵衛といへる者價下直なる女郎をあきなひける今島原揚屋町上に中堂寺といへる一町あり北向女郎始は價五分後は壹匁なりしが今はなし）按るにもと大夫天神は口の茶屋に出ず夜とまりあるは揚やばかりにてありしが寶曆のころより端女郎口の茶屋に泊ること始り（それ迄は晝のみなりし）爰にては花一本三匁五分と定め（揚屋にては價貳十匁となり）又闇は延享まで價十八匁なりしが後改て花一本壹匁壹分但し揚屋にても茶屋にてもよぶ時は端女郎同直なりと委くは【一目千軒】にいへれども何故に闇は端の次となりしか其よしは見えずおもふに價かはれるに闇の名に負すとにやさらば天神も名を改むべきにや古今の沿革なり

局

○局は端女の居る所なり箕山云局にかくる暖簾昔は花族の御家へ申あげ御ゆるされを蒙りてかけたり

夜みせ　をどり場　灯籠并作り物　遊料の異名　大夫　三八　天神　かこひ　きんご

寶永十七年辰秋中町賣御停止あり同時商賣の事甚ばかりとなりしとなむといへり箕山云酉の上刻より大門を閉て客の出入なし卯の上刻に開く（按るに夜のとまり客なきにはあらず又廓門を閉て知音の客來ればひらきて入れし事と見えたり古畫にも其さまあり）【一目千軒】に夜みせ昔はなかりしに享保十巳年御願申上御赦免ありて同十一月一日より始る中頃迄半日なりしか今は定りたる事なし灯火夜を欺き白晝の如し又躍場むかしは揚屋町の眞中にてありしに元祿十六年宝屋徳屋といふ揚屋二軒の跡を躍場とす其角が句に玉笹にあらぬ一夜のをどり哉踊の日數は七月十五日より八月十五日迄灯籠并作り物むかし有て中頃絶たるを寶暦四年再興す七月廿一日より八月晦日迄日數年により極りなし元祿十五年都の内四時の遊興をいふ處【花見車】に七月は島原しゆもくまちの踊にたをされ云々あれば其ころはしゆもく町にも此ことありと見ゆ

（箕山云ふ五三三八（五十匁）天神（三十匁）圍（十八匁）とて皆一日の遊料の數をたとへて名とせり價數昔に替れども今以改る事なし三八は大夫と天神との間の職なり此名目當時斷絶すと云ども今大坂の大夫こいへるも是と同じ心なり今大坂に昔の大夫を停止たるにより此職を大夫といへり（寶暦ころ）は大夫七十六匁なり三八は五三の例にていへば卅八匁としらる延寶の頃大坂の大夫の價この（の）江戸長崎も價は少々かはりぬれど其廓にて上なきを大夫と號す天神圍のたとへ其源を糺せば偏にちんちうなりかたへに松梅鹿の三名をいふ大夫を松こし天神を梅こし圍を鹿とせり昔の價に准じて天神を梅と稱せば圍を鹿と云ふ事當らず（これは昔大夫の次は貳十五匁故北野の緣日の心にて天神といひしかこ延寶比にや小松や野風より廿八匁となる圍をばキンゴともいへり【一代男】に新町の夕霧をいふ處キンゴの長持をはこびとある是なり博徒の詞なりと三郎亭子云キンゴ打といふにたとへば十四の數出れば是をふせ道なり目徒の詞にかこいこいふ故十四匁の遊女をその頃かこひ女郎といへり後にはかこひの

三線】過し頃までは毎年定て正月十六日に人形みせ出してあげやの門々を分がたく暫時のなぐさみに人形屋数千の商ひをして悦びけるが廓の内に世智賢き男あつて前日に人形屋手前より多の人形を買切廓中に店を出しねぎり人のない商ひ只取とは是なるべし是にくきしわざと其頃の大じんいひ合せて又來る春を待て面々手よりの人形やをよび寄美を盡したる人形五兩七兩ツヽ前かたに求め置大じん一人に人形や一人ツヽ召つれ十六日の晝から揚屋に來りて大夫禿の望次第の人形抓み取座敷中に蒔ちらせば云々せちな男のまはし者の人形店には誰ひとりかふものなく多くの仕込其儘にすたりて大分の損となり是より人形みせかざる力もなくて今の十六日遊びさりとはおかしからずといへれ共是又其始め終たしかならずそのやみたる趣意も設ていへるにやあらん

轡

○轡は傾城屋の異名なり箕山なども名目の來由をしらずといへり或云原三郎左衛門は大閤の馬の口取なればそれが取立たるによりてしかいふ又一說には伏見の遊女町十文字なるといふともいへり三郎左衛門馬の口取といふこと慥ならず又伏見などよりいひ出て廣くわたるべき理もなし【信長記】に織田右馬助といふもの人の賄をとりければ（憑を再三取申けるに）信長卿錢ぐつわはめられたるからうまの助人畜生と是をいふらむと一首の狂歌を遊ばして送られけるとみえたり是欲心のみにて漢土にいはゆる亡八の義なり金銀を贈るを轡をはむるにとりていへる名なり

亡八・

傾城町賣

○古畫に花紅葉をみる遊山の圖多く遊女を畵きたるあり【竹齋物語】花見の處に又あるかたをみてあれば遊女ゆう君あつまりてわかき人々打まじり云々【望一千句】花ざかりあなたで歌ひ爰で舞傾城つれてきさらぎの末【原本洞房語園】に慶長年中迄は傾城の町賣とて雇ひ來れば何方迄も遣しけれども元和中に町賣は相止神社佛閣へ參詣の事はさせたる故それにかこつけて知音のかたへ立寄しことなど有しかば寛永十八年の頃より故なくて大門より外へ出さず京都の島原は前かたより町賣しけるが是も

路上中下三町名て柳町といふしかりしより十三年の後慶長七年壬寅に柳町を室町の六條へ移さる今の新町五條下ル處是を三筋町といふ方試町なりこゝにある事四十年寛永十八年にまた六條より今の新屋敷に遷さる【一目千軒】に原三郎左衛門林又一郎と云兩人の浪人けいせい町を願ひて開發すといへるはたがへり林又一郎は伏見の開發人なり後此處に來りしたるべし三郎左衛門子孫は今島原上の町桔梗屋これなり（【翁草】（四）享保三年）浪花新町の茨木屋幸齋奢りに超過し追放され子治助島原に來りしに廓のもの共がなさけにて桔梗屋とよぶつぶれ株を興させて渡世をはじむ日を追て繁昌し廓にて名を得し上林、文字屋など皆衰へ果て絶たるに桔梗屋のみ榮へて治助呑鯨は寛延の始に沒し甥の呑鯨これをつぐ今にては一廓これが有となるが如し家內三百人くらしにて時めきぬ

おろせ

○此に通ふ遊客むかしは駕籠なくみた歩行にてありしとぞ古畫を見てもしらる後世人驕り駕籠にて通ふことゝなりその家を中宿とし音信の便理となる【一目千軒】に云或者駕舁をかゝへ置かよひけるが行けといはゞいづく迄もゆくべしおろせといはゞおろせよといひしより駕舁ものを卸と賓名するとなり今おろせは駕はかゝずかごを廻すものなりかご舁は別にあり此內にてかご自由をなす故島原かごと人々呼なり其外町にても駕人足を出す所みなおろせなりといへりおろせの名義いとおかし按るに卸は駕籠に乘は侈奢の至りなればかご舁とゝなふることをはゞかりて異名を呼しものなり字書に舍車解馬脫衣解甲皆曰卸今舟人出載亦曰卸など見えたりすべてつみ載たる物を下す事なれば唯荷物のやうにおほめかしいへるにこそ

島原人形みせ

○島原人形みせの事【一代男】（四）其頃は（承應三郎將軍をいふ）正月十六日此里に人形みせ出して揚屋の門々押わけがたしいかなる太夫も拾兩拾五兩がまでにあそびをとゝのへたゞもなりまぞかし其日の大じんのめいわくなり（【誰袖海】に吉原七月草市のことをいひて吉原昔の人形みせの如しといへり）【色

いや有けりそこの女の乗ものゆるされたる有ける云々尊氏の御時なるべし大傾城屋はその物やのかくなり六條のかくともと書さしたり（此書戯作にてされたる書さまにて其心してみざれば辨へがたし染物やは賤き部類とす六條は三筋町に傾城屋ありこれはその格なりといふなり）元亀の頃には武家の嫁迎ふるに負木といふものにて負せたりと【落穂集】にみえたり負木は今も田舎にて物負に用るもの有遊女は尤これ制外の者なれば士庶の格をもて論ずべからず慶長元和寛永ころの古書に乗物見えたり（万治寛文ごろの板本【吉原用文書】といふ冊子の繪にぜにやといふ揚屋の門に乗物ある處をかきたり客人の乗ものにやまたは女郎の乗しことなどもあるにや）元吉原にてもさることなく雨の降時だに下男の背に負れて揚屋にゆきしとぞ【吉原徒然草】百五十五段菱屋の若むらさき殿揚屋町へおはしけるに雨降にければ乗物にて出給ぬ【犬枕】におくゆかしきもの揚屋町へとをる乗物の内

島原の起原

○【雍州府志】傾城町は朱雀の西七條の北にあり初は六條室町の西并に西洞院中道寺町にありけるを寛永年中に今の處に移さる方二町餘其内に三條の町あるによりて三筋町といふめぐりに壁を塗廻し溝を堀東一方に門あり凡夜に入ば妄に出入ることを許さず此時肥前島原に凶賊寨を搆へ溝を深うす此處それに似たりとて世俗に島原と稱す始は六條の外荒神河原の口并に三條四條の樵木町下粟田口の松坂五條及北野等に遊女町あり近世島原の外は皆禁ぜらると見えたり此説によれば三筋町は今の處に移りての稱へにや【色道大鑑】には西新屋敷といへるよし也島原はわる口にいひし異名と聞ゆされば【京童】に十とせあなた今の處に移りしといひて島原とはいはず（【京童】明暦四年の刻なれと大よそに十年とはいひたる歟島原出來しは寛永十八年なり）【色道大鑑】島原の起源は原三郎左衛門（豊臣公の下部）といひしもの許命を得て天正十七年洛陽万里小路に遊里を建そのかみ道の左右並木の柳生つゞきたれば俗に柳の馬場といひけり此時諸方に散在したる遊女屋共みな此に集りしとなむ万里小路通二條押小

四人候し云々みえたり【板橋雜記】に妓家僕婢稱之曰娘、外人呼之曰小娘、假母稱之曰娘兒、有客稱客曰姐夫、客稱假母曰外婆、とあり

古へ遊女招かざるに押して參る

○そのかみ遊女自招子など招かざるに押し參りしならひとみえたり其名もさま／＼なれど佛の名持家の語を付たるも多くみえたり書寫上人が生身の普賢を見むとて神崎の遊女の長者を尋ねしに長者鼓をうちて歌をうたふが普賢に見えたりといへるはこの長者名も普賢といひしなるべし磯の禪師が付つかひし女をさいはうそのあまといへり

遊女人を撰て逢ふ

○後世もよき遊女は人を撰みて逢しこゝにや【猿源氏册子】になかれをたつるかはたけの遊女なれば大名かうけより外へは出ず云々五條ひがしのとう院なる遊女が家を過る處にけいぐわいす其はるさめとて其外のゆうくん十人ばかり立出ていかにや／＼情なくもまのあたりをとほらせ給ふぞやといひて袂にすがりつゝざしきへ手をひき入にけり云々さてあるじはかうろぎの香すゑていかにや宇津宮殿ひとつきこしめされて誰にも御心ざし有かたへさし給へと申ければうつのみやたう／＼こうけてかれこれと見廻しさかづきをさしければけいぐわにてぞ有けるけいぐわ時の興を催しめづらしの御杯さふらふやとてとりあげて次第にめぐらしければのこりの君ごもこれをみてあなうらやましのけいぐわかな今より後のすてさかづきさゝれてもせむなしとてざしきをたちし遊君も有るのこりもてはやすもあり云々うつのみやまことにことの外のおほ酒にてたちゐを忘れて幟いとま申て人々とて宿へこそかへりけれ云々けいぐわたそがれ時にうつのみやとのゝやどへ尋て來りしかば云々（こは室町家のころの事なりかやうに初は座敷のみにてかへる事後も其定なり遊女宿處へ來るは後に町賣と云ふ是なり）其頃は遊女專ら乘物にのりたり

町賣

遊女乘物にのる事

○【猿源氏册子】に遊女のりものにのりてとをりしをみそめたることをいへり【伊勢物語】にたけいせ

乘て旅船に着枕席を薦め歌うたふ上は卿相より下黎庶に及ぶまで接らざることなしこれを愛しては妻妾とするものもあり長保年中東三條住吉天王寺に詣でさせ給ひし時禪定大相國殿下小觀音を寵せられ(御出家の後七大寺に參らるゝとき小觀音來れり御堂此由をきかれて赤面ありしと【古事談】に見えたり)長元年中上東門院また御幸ありしに宇治殿中君を賞せらるなどありこの御詣の事は【榮華物語】に見えたり(長保のたびのことは上に引たり)【殿上花見卷】長元四年九月廿五日女院(上東門院)すみよし石清水へ詣させ給ふ云々くだらせ給ふ程に江ぐちといふ處になりてあそびとも笠に月をいだしらでんまきゑさまぐ\におとらじまけじとしたてまいりたりと有り【古事談】遊女香爐は小野宮殿と二條關白と大臣二人に通じたりとあり此ごろ公卿神崎の遊女に通はるゝこと多く見えたり

遊女傘をさす

○遊女かならず傘をさして船中にあり明衡の【新猿樂記】に遊女をいふ處晝衒姿任身上下之倫夜叩航懇心往還之客といへり【圓光大師傳】に圖あり遊女は鼓を持て居り一人傘をさしかけ一人櫂をとれり傘は周りに帛を垂處々に總角のふさあり旅船につきて乘うつるなり【長門本平家物語】淸盛嚴島詣の時遊女が淸盛に贈りし歌「花うるしぬる人もなきわが身かなむろありとても何にかはせん

○【菟玖波集】に建文元年上洛し侍し時はゝまなの橋の宿に付て酒たうべてたゝんとしければはしもとの君には何かわたすべき前右大將頼朝平景時たゝそま山のくれてあらはや(【東鑑】にはすきはやとあり)

子夫子君

○古へは遊女なじみて來る人を子夫といひなじめる遊女をば子君といひたり【沙石集】に遊女にて侍るが五人の子夫をもちて候しが四人は事にふれて情ありてふるまいしかば心ざしもたがいにあさからず一人は物をも覺えずして我を煩す事のみ侍りしかばにくゝ思ひながら過ぬ云々このにくみし男の甥がこざば某が伯父にて候ひしが子きみにて候きと云さかのきみは子夫猶ありけるにやと問ば伯父が外

うかれめ　あそび

遊女をうかれめ又あそびといふ【榮華物語】（松のしづえの卷）二月廿日天王寺に詣でさせ給ふこのゐんをば一院とぞ人々申ける後三條院とも申め、女院も一品のみやもまうでさせ給云々廿二日のたつの時ばかりに御船いだしてくだらせ給ほどに江口のあそびふたふねばかり參りゐくなどぞ給はせける【源氏物語】（みをつくしの卷）社參のかへさ難波川簑の島のあたり（上略）あそび共のつどひ參れるも上達部ときこゆれどわかやかに事このましげなるはみなめとゞめ給ふべかめりされどいでやおかしきこと も物のあはれも人からこそあんべけれなのめなることをだにすこしあはきかたによりぬれば心とゞむるたよりもなき物をとおぼすにおのが心をやりてよしめきあへるもうとましうおぼしけり（大方のことあは〳〵しきには心とまらぬものなれば遊女などはかほよくともうとましきなり）【江家次第】八十島祭日、到難波津、宮主作壇云々、修禊了、以祭物投海、次歸京、於江口遊女參入、纏頭例祿如何云々【撰集抄】治承二年長月の頃あるひじりと伴ひ西國へおもむきしにさしていそぐともなき儘に日の傾くにもいそがずして江口はしもとなんといふ遊女が住居みめぐれば家は南北の岸にさしはさみて心は旅人のしはしの情を思ふさまさもはかなきわざにて云々あるひじりと打語りツヽその里を過なむとするに冬を待えぬ村しぐれのはげしくて人のことゝもに立やすらひて内をみいれ侍るにあの庇の時雨もりけるをわびて板を一ひらさげてあちこち走りありきしかは何となくかく一賤がふせやをふきぞわづらふとうちすさみたるに此庇さばかりものさわがしく走りあはつるが何とてか聞けむ板をなげ捨て一月はもれ雨はとまれと思ふには又【新古今】に天王寺へ參りけるにゝはかに雨ふりければ江口に宿をかりけるにかし侍らざりければ讀侍ける一世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりを惜む君かな、世をいとふ人とし聞ばかりのやどに心とむなと思ふばかりぞ（遊女）

〔二洲野辟紋〕遊女此を按るに河內國江口攝津國神崎蟹島などの河邊に門戶を比へて居る娼婦は扁舟に

十三】伺人作奸、從而嚇詐取財、俗謂之拏訛頭、此俗語未有見之筆墨也、願寧人日知錄載明泰昌元年八月、御史張潑上言、京師奸究叢集、游手成群、有謂之把棍者、有拏訛頭者、請將巡城改僞中差拏訛頭三字見此、これの人隱惡をしりてゆするものなり

呼出し藝子

○【武野俗談】云深川の呼出し藝子は山猫といふの属なり人往て是を呼ば則來る常に何くに有を知らず（寶暦中のさまなりむかしとも今とも異なり）又云品川は北里に似たれども多くは結び髪にして眉毛払けんなり人に馴む事早く上るり語れども三線にあはず

深川新地

○深川新地は【六玉川】に、新地の間夫に蚊柱が立、新地がゝんこ夜は明にけり、新地の枕石にたとへる新地の意地に赤い物子、彈たか因果新地掃れる（寛延の頃潰れたる事も有しとみゆ）【明和七年冊子】吉原深川と並べいふ内書三あれば仲町土橋あり打附あればやぐら下佃島あり（これは今いふあひるなり）壹歩貳人六寸には新地入ふね石場三間堂をたとふとみえたり

○正徳享保中隱し賣女共捕へられて吉原町へ下されぬる事度々あり又延享三年寅二月六日四年以前亥年中吉原町へ被下置候遊女共御定年季明女數覺書深川佃町同大和町永川町門前〆百七十八人根津宮永町五十人本所入江町一人市谷谷町七人神田小泉町踊子賣女十八〆六十八人北品川二十二人杯見えたり

○寛保三年亥四月廿八日勸進比丘尼花麗なる衣類着賣女体紛敷不屆ニ候右中宿等致候者有之候ハヾ早々可訴出旨御觸ありこれよりさき寛永三亥年にも御觸有しとぞ

古へのあそび傘をさすこと　傾城乘物にのりし事　島原の起源　おゝせ　島原人形みせ　瞥　けいせい町賣　夜みせ　をどり　灯呂　大夫　天神　かこひ　半夜　端　局　暖簾　廓中昔のさま　伽羅　衣服　若衆女郎　うき世詞種々（すい、ぐわち、ぬめる、しやら、わさくれ、のさばる、大鼓もち、どらうつ）一日買　大門をうつこと　桶ふせ　朝込　壷入　入ぼくろ

と成けらし（此説附會なり後の啃物の條にいへり）物の名も所によりてかはるなり浪華にて惣嫁（遊女を云【物類稱呼】）伊勢の鳥羽にて走りかね（鳥羽は湊なれば走るとは船人の祝詞なり）古市にてあんにや（艶女）といふ伊豆の下田にせんびり有り松崎にかねんぼ有り丹後にしやらかう越後に冷水浮身（これは旅人此處に逗留の内女をまうけて夫婦の如くす此家を浮身宿と云はせなが旬に海にふる雪や戀しき浮身宿）あをのごあり長門の萩にかごまはし下の關にて手拍ごは舟をみかけて手をたゝく肥後にきぶし長さきによたかはいはちあり小女子性あり信州上田にべざいあり松本に張箱あり加賀に北島名護屋にもり出羽秋田にて根餅奥州におしやらくとはその初女共わらび餅を賣ける故其名ごは成たるなり津輕にてげんはごいひ南部にておしやらくご呼松前にて藥鑵といふは尻が早いさいふことなりよいさわるいとの差別はあれごも情を賣は一ツなり近江にてそぶつ越前敦賀にてかんぴよう夕顏をさらすと云ふ心なり

船まんぢう

○船まんぢう【洞房語園】道恕が饅頭賦往し萬治の頃か一人のまんぢうとらを打て深川邊に落魄して船賣女になじみし」が名題をゆるしたり云々又有氏が其賦を讀む文近年東武深川邊に八島にて入水せし二位殿の船幽靈のごとき者に我名を呼ゞと聞云々（天明七年丁未永久夜泊の狂詩あり尻落聲明錢掩身、饅頭下戸毀錢緡、味噌川樂寒冷酒、夜半小船醉客人）明和二年川柳點おちよ船神迄こぐはなじみなり

筒もたせ

○【水花集】にわろき者共を擧たる內人参のおきつけ筒もたせ大釣とあり【風流徒然草】はしばしそうせんじに詣てといふ條後に聞侍りしは筒もたせとて男合點にて女房をうまくこしらへすそぼりなる者を引こみ首尾よき時分大出あひねだりて金銀をとりける云々あり按るに筒もたせは手簡といふことの異名にや手簡は表裏ことなる手ばかりなり或は筒もたせごは博徒の詞にやあらんしらずかし【後川男草子】いにはけが心をうてうくれにして筒もたせと出て金銀かねたり取たと見えたり（【隣旅談らう】一四

地ごく

灯火多く點じて夏日納涼の勝地となる賣女さへ多く出來て是を地ごくと呼り折ふし新吉原町類燒して妓家此に假宅していと賑はひしか程なく居住の者共に引料金賜はり不殘追拂はれ其あとは寛政元年霜月下旬より堀始翌二年戌五月迄に畢りてもとの河と成る此土を以て深川石場の築立地出來また佃島の端を埋て人足よせ場と成る

町藝者 はをり藝者

○今藝者と云ふ女は昔の舞子の名残なり又はをり藝者とは深川のげいしやより云ふ明和七年の冊子【辰巳園】藝者を喚むと云ふ處はをりにしましやうかといへりもと女共はをりを着たる故なり豐後節はやりて此風起れり【下手談義】ぶんごかたりのことをいふ處あまつさへ女があられもないはをりをきて脇差まで差た奴も折ふし見ゆるぞかし昔は堀の舟宿の女房ばかりぞ羽をりをきける今は大てい小家の一軒も持たる宿の子も女のあるまじき羽織きせたる親の心おしはかりぬみな是愚人のするわざぞや（昔女郎にも男に作りたる有り）其餘風なり明和二年川柳点おめかけもうきふしんこを近所の出（その頃橘町に女藝者多くありし故なり）

百藏

○百ざう、徒流云中ごろ江戸町貳丁目の河岸迄下品の遊女ありける小部屋やうの店にて二軒打拔に行燈一ッを用ひたり俗に百ざうといひける云々いへりざうとは何の義にか思ふに百藏などの例にて房州の方言に寄居虫をがなざうと云又蟹にもくざうの名あり陽物をさくざうといふも同じ人の名めかしていふ事なり坊と云ふことゝ似たり

さげ重 山猫

○【里の小手卷】の評近年提盤と稱するは持はこびの手輕きよりいひはじめ山猫と名付しは化て出るをいふ事ならむ寛文ごろ一人前五分のけんどん食出きてはしけいせい五分なるをけんとん女郎といへりけんとんそはやには提重あり今このさけ重の名似たり又地獄とあだ名せしは其初清左衛門と云へるもの此事を企けるを箱根の清左衛門地ごくにもとづきて仲間の者の合詞にぢごくといひしより今は其名

は未明より出居たり【江戸名物鑑】山下做脉ひと銚子足に恨やこぼれ萩とあり是なるべし（寛政以來これら絶てなし）

遊所

○風來散人【志道軒傳】（寶暦十三年癸未）遊所をいひ并ぶるに神明参の歸足は本地垂跡の山道になつみ湯島の二階は千里の目をきはめ英町の向側は隣よりも又近しよこれるをふく茅場町眇目もまじる神田の明神外になければ市谷の八幡前天滿神のあたりに近き室さきの櫻手折むと麹町には寢ろか樂み土氣とれぬ土橋より一ツ目山猫なんどいへるはさながら化ものゝ名に近し所かはれば品川の風流女郎が島の辻番かと覺ゆる看板に僞ありそ海深川のびんしやんも度かさなれば飴のことし和かて歯につかぬ大根畑の居つゞけ鮫が橋へ走ッて鴇のつまる鐘つき堂借つた跡てのいた橋より千住といへば觀音めける万福寺の戀無常朝鮮長屋の異國くさきいろはぢく谷世尊院人を引だすおたんす町八まんたまらぬお旅のさはぎ三味の音しめの音羽町あたり明して夜を根津の東の空も赤城より暗きに迷ふ鮫の下通ふ足音高いなり愛敬稲荷の狐より化そこなひの市兵衛町水の氷川の寒空はふるふて通ふ駒坊町丸山の丸寐すがた新大橋のながく\／しき三十三間どうよくに又も一座を直助やしき出る舟あれば入舟町石場につくだけころばし踏返したる丸太の名物「立うと伏うと錢次第」舟まんぢうに餡もなく夜鷹に羽はなけれ共皆それ\／のすきはひは鳶とんで天に至り魚淵にをどり子の氣色まで殘方なくながめ盡せば云々【丸太は比丘尼の異名と聞ゆ不角が点の句「小あげ鳥が交る川鳶背柏も丸太の岸に雙はなし【後は昔物語】寛保元年ごろのはやり歌をいふ内に傾城遊女白人踊子呼出山猫比丘尼飯盛湯摘夜鷹蹴轉舟饅頭かくの如くてにをはの一向なき唄も此ごろのことなり按るに寶永六年己丑六月廿日町中に遊び女を綿つみ抔と名付隠し置候儀前々より停止申付候處頃日猥りに遊女など差置候よし相聞不届に候云々

綿つみ

○安永の初より江戸新大橋際三俣を埋立新地を築き是を富永町と名付みせものや居茶屋ども出來夜は

踊子

かこひもの

なきは茶屋ものかなまた踊子をかこひ精進日には比丘尼戲れ云々（かこひものといふ事はやく有ける）【原本洞房語園】（享保五年）近年町々に踊子といふもの時花出て寛永年中九二か類なる（寛永とは非なり歌舞妓は慶長年中なり）歌舞妓の女に紛敷なりし所に是又御停止にて漸止けるとはいへと其後又はやれり【江戸名物鑑】舞子あり發句に加茂て着る夜を舞子の要かな【我衣】に寛保元年踊子停止せらるころひ藝者の鼻祖なりと見えたり（踊子のことはをどりの條にいへり合せみるべし）

ころひ藝者

○正德六年四月十八日護國寺門前音羽町名主八郎左衛門支配の內二丁目平野屋吉三郎と申者茶屋女抱置候儀に付今朝能登守樣御內寄合にて八郎左衛門名主役被召放閉門被仰付又翌年享保二年六月十三日音羽町八丁目善八店仁兵衛と申者に遊女二人有之當八日當人牢舍被仰付享保六年辛丑三月十四日松島町にて當二月被捕候遊女十二人吉原町へ被下右筋之者共所々にて家財欠所被仰付下谷龍泉寺町赤坂傳馬町永島町松島町永代寺門前町松山町何も今日有之出役兩人ッヽ此方三軒手代一人ッヽ立會候同年六月六日根津門前にて遊女一人被捕吉原町へ被下同九月廿二日深川久右衛門町隱賣女之事これあり神田永非町賣女二人享保七年四月なり同八月八日音羽町橋屋治兵衛抱女拾人吉原町へ被下同二月九日鮫ケ橋遊女二人吉原町へ奴に被下同八月廿八日麻布新網町家主甚左衛門抱賣女二人吉原へ被下同十一月廿八日越中島町賣女拾四人新吉原町へ被下

いろは茶屋

○谷中いろは茶屋は【江戸砂子】に感應寺門前にいろはと書たるのれんして水茶や數十軒ありしが今は見えず一二軒も有かといへり明和二年【川柳点】いろは茶屋醫者で行ほどあひはなし

蹴ころばし

○蹴ころばし【艶道通鑑】に白人呂州茶や臭や間短蹴倒夜發迄とあるけたをしなり古老云比丘尼すたれて出來たり天明の末迄下谷廣小路御數寄屋町提灯店佛店廣德寺前通淺草堀田原其外諸所にこれ有これも一軒に二人三人ッヽ出居れり花貰は貳百文ッヽにていづれも容顏を撰み出したり每月大師緣日に

づみ町八くわん町なごに宿あり日毎に行なりわけて補町疊町へ行を上品とす頭巾に針させるは鉢卷に留けるなりとぞ（源太郎と云ふ比丘尼米屋のむすこと情死したる事などみえたり）是を異名にまるたと云（元祿六年）【野郎評判記】に笠龍傳藏拐丸姫屋箱作内襴夜鵆）古老云寛延寶暦の初ころ迄も勸進比丘尼も賣比丘尼もあり芝八官町神田横大工町にあり是につゞきて下直なるは淺草田原町同三島門前新大橋川端なごに家毎に二三人づゝ出て居たりとぞ表に長き暖簾を立たり【後紙輪】帶しなほして化し風俗夕比丘尼淺黄に尽る日和虹覧られぬさきに遊女しならふ紙はつた納抄て小倉うち付て【六玉川】比丘尼の化粧よしづから見る

まるた

勸進比丘尼

賣比丘尼

めし盛女

○上に引る【一代男】諸處をいひたるに四ッ谷新宿をいはず其頃はこゝに飯盛女などはなかりしにや【洲細海】護國寺門前音羽町四谷の新宿板橋立川千住の色茶屋堺町の裏筋あたごの下八官町の比丘尼是も百に三人より一人一角まで有（四谷新宿は享保五年故有て廢せられて五十三年を經て明和九年願出るもの有て又古來の通りはたごや五十二軒飯もり女百五十人出來たりとぞ）踏橋が【安永九年の草子】に今岡場所の多きことさつま芋のふゑたることとく中に取わけ賑はふは北と東と南なり淵のことくといひたるが次第に西方盛なれば碇のこごく爭ひて云々あるは四ッ谷の後にはやり來つること知べし○音羽町は【願武が雜記】よし原昔にかはれる事を云ふ處其昔音羽町一丁目の結棲屋相模屋虎屋など繁昌の町よりは（接るに享保中のことを云ふなり）惣体風俗はゝるかおとり根津品川にしては座敷も廣し少しはしはらしき所もあれどそうたいの下卑せられきしこなし音羽町と品川との合のものと云ゆる云々いへれば音羽町は吉原に勝りたる也【風流徒然草】堺町大根町品川護國寺にも行人あまた云々されば比丘尼後盛に盛なるはなし【江戸雀】に音羽町たつるとすればそのはらや寶曆十一年集なり此頃發れたりとみゆ）根津の茶屋女ども誰り出たる手足ふとく顏に白粉こてこてとくつけたるはした

○比丘尼は【同書】赤坂の條うら傳馬町へ出たるに下町めつた町から來る比丘尼風流に出立て云々やうすを聞ばめつた町よりあまた來る比丘尼の中にても永玄おひめおまつ長傳と申が爰もとで名とりにて候あげやは仁兵衛安兵衛と申すがきれいにて候今の小袖かたびらを宿つき着とぬきすてゝあかしちゞみ又絹ちゞみ白さらしうこんぞめにもみの袖口うらえりかけ黑しゆす茶しゆす幌廣帶黑羽重の投頭巾はぼうしで包むもあり小比丘尼供につれ是に酌とらせ市川流の夜もすがらもしほ草の大事のふし云々（【一代男】越後坂田の條くわん進比丘尼聲をそろへてうたひ來れりかちん染の布子に黑りんずの二ツわりまへ結びにしてあたまはいづくにても同じ風俗なり元これはかやうの事をする身にあらずいつ頃よりおりやうみたりになして遊女同前に相手をさためず百貳人こいふもおかしあれは正しく江戸めつた町にて忍び契りをこめしせいりんがつれし米かみ其時はすげ笠がありくやうに見しがはやくも其身にはなりぬ云々按にめつた町は寛永江戸圖に神田なべ町新石町の南の方に二丁あり是今の多町なり今の名は略名と聞えたり今小柳町邊に比丘尼横町の名あり其邊昔よりこれ有し處なり）【東海道名所記】小川原の條比丘尼共一二人出來て歌をうたふ云々繪ときをしらず歌をかんようとすみごりの眉ほそくうすげしやうし齒は雪よりも白く手足に胭脂をさし紋をこそつけねどたんから染せんさいちや黃からちや云々白うらふかせ黑き帶にこしをかけ裾けたれてながく黑きぼうしにて頭をあちにつゝみたれはその行狀はおやま風になりひたすら傾城白びやうしになりたり（【人倫訓蒙圖彙】歌比丘尼はもとは淸淨の立派にて熊野を信じて諸方に勸進しけるがいつしか衣をりやくして齒をみがき頭をしさいに包みて小歌を便に色を賣なり巧齡歷たるを御寮と號し夫に山伏を持女童の弟子あまたとりてしたつるなり都鄙に有り都は建仁寺町藥師の圖子に傳る皆是末世の誤なり）

○【好色徒然草】昔は小者奴などの遊ものなりしが今やうは人によりて若きさふらひもすると語れりい

へり品川のれんとびとはかはりたる名なりれん飛は輕わざの種類なり）清水町はむかし谷中しみず門の邊の町名とぞ本所に今この町名あるはもと法恩寺は谷中清水門の邊にありしが引たるよりこゝに此町ありと土人いへり

〇本所長岡町西かは長屋を土人方言に下（しも）と云は入江町の方を上とするにや又云下の長屋をてつきうと呼りそは今より四十年前その長屋の前今の如く大路にて下水の溝廣くして處々に踏板をわたして通へりその形てつきうに似たりとてしか呼しなり家は一棟つゝはなれたるくずや高低ひとしからず家の間あきたる處みな葭かや生茂れり淺草まんだら堂火事延燒の後溝も狹くなり家もその端まで出き今の如き長屋となれり

女の牛鬼

〇又淺草駒かたの茶屋販はへり神田貞宜が【淺草船遊の記】に道春紀行にも此門前より女の牛鬼出て走りけるとも書り尤不審くこそ侍れ今も駒かたの茶屋を見れば出女とおぼしく顏には白粉を鹿子まだらにぬりちらし眉を眞黒に不二の形を眺みたり髮は楊柳の春風を痛み髻おかしくて銚子取て諸人を汚し金銀を貪る是女の牛鬼とや云べき（此記万治の頃なるべし）【柴一本】並木の茶屋や入たるに左右の簾の内（古へは出茶屋なども簾をはりたり其名ごりなり）よりやすま〳〵とよぶ聲に付て入みたるに年のよはひ二八はかりを先として光かゞやく玉かつらかとみゆるも有た下染小袖はゞ廣帶尻のとがりに引かけてぜいをやり戸をおし明てお客おそしと待たるを云々先廿間路を見物せんと廣小路を西へ行（且下茶屋女多く有）あまたの茶屋をみのこして（今廿軒の茶屋と唱ふるはもしこの名殘にや）又並木にぞかゝりけるふくやか所にはおなつおはたおくにと云ありそれをひとつによめよといへば貴僧がよむ「花の色は榮あかなくに春風のふくやかほりのおなつかしやなよ（一説花の枝はなひくつけと云々）此下に女共酒の相手に三線ひきうたなづきあふ事などあり

がたかるべし當時吉原町諸法度のことは規定証文あり

○【板橋雜記】名妓仙娃、深以登場演劇爲耻、若知音密席、推奨再三、强而後可歌喉、扇影一座盡、傾主之者、大增氣色、纏頭助釆邊加十倍云々

永代島

○永代島は【紫の一もとに】八幡のやしろ有り此地江戸をはなれ深川の地にて宮居遠ければ參詣の人も稀にして島の内繁昌すべからずとて御慈悲を以御法度もゆるかせなれば八幡の社より手前二三町が内はみな表店は茶屋なり數多女を置て參詣の輩の慰とす就中鳥居より内を州崎町の茶屋といひて十五六廿ばかりの女のみめかたち勝れたるを拾人計つゝかゝへ置て酌とらせ小歌うたはせ三線を彈皷を打て後はいざ踊らむとて當世はやる伊勢踊云々風流たる事三谷の遊女も爪をくはへ塵をひねる花車屋のおしゆんおりんおもだかやのお花ますやのおてう住吉屋のおかんなどは御守じやといふ（一蝶がいまだ信香といひたりし頃かける諸國の遊女の繪の中にこの花車屋の圖ありふり袖きたる女門にたてり）【西鶴置土産】江戸の事を云ふ處清水町のかくしよね百で酒肴もてなしさま〳〵なるもおかし又深川八まんの茶屋ものは本所築地より各別見よげ京の祇園町しかけ程ありて鳥居の内は二人壹分外は三人壹分と極め置しも物がたし三谷をむづかしき女郎計りかとおもへば新町かしのかき暖簾の分は銀で壹匁錢では百に定めける【一代男】（二）なをやむ事なく深川の八まん築地本所の三ツめの橋筋めくろのちやをさかししな川のれんとび白山さん崎のゑしれぬもの淺草橋の内にてうなづく事までをがつてんして（この内本所三ツめ云々いへるは其わたり今に夜發の類多し寶暦七年に馬文耕が書る【武野俗談】入江町のことをいひて三間堂前入江町かねつき堂とてやくざばしよにいへどもはんしやうに隨ひ今は格別路次數も多く四十一路次女の數千三百餘あり其中にも甲州屋路次といふは遊女の勤晝夜金貳分ツヽ、なり吉原の座敷持の價に異ならず其衣裳道具女の器量等甲州屋初ごみなどは今全盛并ぶかたなし云々い

かくしよれ

處々の茶屋者

散三

相の頃より行て吹てふかれてさつとあがり場に座して云々同じ心の友あそび皆でなんぼが物ぞありたけ出せと二階にあがれば丸行燈たばこぼん菓子盆を段々に又氣が替りて面白しかゝりしものゝ後には祇園町島の内みな全盛のことゝなれり江戸も風呂屋茶屋のものより散茶始りて今の晝三是なり【似我蜂物語】有馬湯座藥師の戸びらに書付ける「ありま山いなのさゝはらいなといはじ一夜はかりのちぎりなりせば

女藝者
太鼓女郎

○女げいしやの事歌舞はもとより遊女の所業なるを後には其道心得ぬもの多くなりしよりおのづからせぬ事となれり【一目千軒】に太夫天神みづから三線ひかざる故たいこ女郎を呼なり又藝子と云ふ者外にあり昔はなかりしに寶暦元年未年に始るといへり【大坂新町細見澪標】にたいこ女郎と云はあげや茶やへよばれ座しきの興を催すものなり音曲はいふもさらなり昔は舞などもつとめしものなり享保中より藝子といへるもの出來りこれは昔のたいこ女郎とは譯ちがひ三みせんを表に立てうらは色をもとゝするなりさるに依て美女ありつとめ方は同じさまなり江戸は大に後れたり【後は昔物語】よしはらの藝者と云ふもの扇屋かせんに始れり歌扇は唯一人なりし寶暦十二年の頃より其後追々に外の娼家にも茶屋にも出來て細見のやりての前の處にげいしや誰外へも出し申候と書たりたよりはるか後に大黑屋秀民けんばんを立たりげいしやおどり子と肩書して傾城同様に見せに并べて客をとりたる娼家もありきむかれらはうしろ帶にて并び居たりもとげいしやといふ者はなくてけいせいの内にて三線ひきてうたひし事なり多分新造なり三線のなる新ざうを揚よなどいひてひかせたる事なり夜見世にてもみな歌をうたひ三線をひきたてたり是はむかしよりのならはしにはあらで其頃ふと初めたる事と覺ゆといへり昔よりの習はしにあらずとは中ごろを昔といひしなりその昔はみな歌うたひて彈たるなり茶屋女の頭一たび寛文中に吉原に入こみたりし其後また處々に出來しもゝとより隱れたるものなれば否しくはしれ

なりしなり湯女はもと諸國の溫泉にありしがもとなるべし【太平記】の頃既に風呂屋にありしとみゆ【落穗集】に我等若年の頃迄右の風呂屋は御當地所々に有之體に覺居申事に候風呂は朝よりわかし晩は七時仕廻申候晝の內風呂入共の垢をかき申候湯女どもそれより身仕度を調へ暮時分に至り候へば風呂の上り場に用ひたる格子の間を座敷にかまへ金屛風などを引廻し火を燃し件の湯女共衣服を改め三線をならし小歌やうの物を謠ひ客集め候なりと有り其さま此文にて明かなり慶安四年辛卯二月十九日町觸風呂屋鑑板賣買之儀自今已後可爲無用候親類兄弟之讓候儀但賣買仕候共町年寄三人方へ穿鑿請差圖次第賣買可致事又同五年壬辰六月廿七日跡々御定之通風呂屋に遊女三人より外抱へ申間敷候勿論ゆな他所へは不及申風呂屋仲間へも遣し申間敷候若相背候はゞ急度曲事可被仰付事また明曆三年御觸書跡々より度々風呂屋共に申渡候通吉原町御立に成候に付彌當月十六日切遊女之分町中御拂被成候自今已後風呂屋に遊女隱置候はゞ五人組は不申及其壹町者に御掛被成候間町中致僉儀若只今迄隱置候遊女有之候はゞ早々拂可申同酉六月廿五日御觸（町中連判これあり）度々喧嘩など有て（寛文元年丑十二月廿三日御觸ありてばいた女御番所へ驅込候はゞ其女身まゝに被成候間早々可申出事と有）停止になりしかど上がたには猶絕ずして有しとみゆ（今に大坂の島の內娼家は某風呂といふさくら風呂ときは風呂といふたぐひなり）但し江戶の美麗なるやうにてはなく賤き体なり女內に居て客を待にあらず客に約束して中宿へ行なり諸國溫泉みな邊土にて湯女あり共云べきほどの處はあらじされども【好色つれづれ】風俗しなしなどよき女は極て三ケの色町にもかぎらず當世にも有馬のふぢ伊加保の江州など有といへり【一代男】に兵庫の風呂屋をいへるもそのことし又【一代女】（五）一夜を銀六匁にて呼子鳥是傳受女なり覺束なくて尋けるに風呂屋ものを猿といふなるべしくれ方より人によばれける（風呂屋女に仇名をつけて猿といふは垢をかくといふ意となり）【榮花鼎】大臣にさそはれ姉が小路の和泉風呂に入

藥湯

○【遺老物語】永祿已來出來初し事種々の中するふろ是は高麗陣有之より初ると云り
○又藥のためにする湯は病者發汗せむとて湯に入ることあり【榮花物語】（本雫卷）御風にやとてゆでさせ給ひて云々此外の卷にも見えたり【（字鏡）に㵒以菜人湯云々奈由豆とあり其ごとくよく入しむをいふ）【庭訓】に五木八草湯治風呂是は本草に見えたる藥湯なり【貞德文集】霜月の文に貴殿御望み桑風呂焚可申候【狂言鼎】（五）八瀨の釜風呂は都がたの人わづらひ有もの絶ず入侍り極て効あり黑木といふ物をふすべける次でに釜ぶろをたつるに生木を燒てその氣をうくる誠に人身に藥なるべし【油加須】

しほふろ

竈風呂

土の中にもしはぶきの音痰氣なる人や竈湯へ入ぬらむ【紅梅千句】にたく風呂のかげんのよきは上の町（政信）逆い八瀨まで客は分まい（季吟）今俗塩ふろと云ものも竈風呂なり古き【前句集】に出たり入たり〳〵竈風呂もあまがつゝかぬそこの息

湯女風呂

○湯女風呂といひて江戸に行はれし事は【見聞集】（四）【昔々ろ物語】江戸風呂の初天正十九卯年の夏の頃かとよ伊勢與市といひしもの錢瓶橋のほとりにせんたう風呂を一ツ立る風呂錢は永樂一錢なり皆人めづらしき物かなとて入給ぬされどもその頃は風呂ふたんれんの人あまたにてあらあつの雫や息がつまりて物もいはれず煙にて目もあかれぬなどゝいひて小風呂の口に立ふさがりぬる風呂を好みしが今は町ごとに風呂ありびた十五錢廿錢づゝにて入なり湯なといひてなまめける女共廿人卅人ならび居て垢をかき髮をそゝぐ扨又其外に容色たぐひなき心さまゆうにやさしき女房ども湯よ藥よといひて持來り戯れうきよがたりをなす一度笑めばもゝの媚をなして男の心を迷はす是を湯なぶろと名付こいへり（此時までせんたうは江戸になく又蒸ぶろもこれ初めと聞えたり又同【見聞集】（六）江戸に初めてすい風呂出來しこともみゆそれ迄江戸にて便理なる風呂はなかりしにやいといぶかし水風呂などはありしなるへし）湯女元和の頃なるべし【色音論】ふろやの女はやりもの云々寛永中ます〳〵盛り

風呂吹

また有べし）風呂吹とは息をふきかけて垢をかくなり（湯氣の中にて吹なれば其處うるほふなり）【下
養狂歌集】に名を衛門といふ若き人風呂吹ことと上手なれば云々（今も巧拙ある事となん）又或人風呂
を新たにたてゝ入そめしけるに入風呂に祝ふて三度長いきにふくとく／＼＼と吹【犬根のふろ吹と
いふも熱きを稱す是より出又芋をいひたるにや）【夷曲集】（戀部題不知）めをこのみ入ぬる風呂はあ
かなくにせなに向ひて猶もいもふき【老人雜話】に蒲生氏郷諸士をもてなすにみづから頭を包み風呂

水風呂
錢湯

の火を焚れしとあるは陣中などは便利をことゝすれば水風呂なるべし錢湯とは錢をとりて人を入る風
呂なり【百物語】にせんたうの風呂にはかならず喧嘩出來るものなり若もの髮洗ひ湯あふるとてとは
しるちりて云々（蒸風呂にもかゝり湯は有なり）其頃は湯に入て髮をあらひしことなり【筑膺波集】（四）
こぬかましりにけふる空だきそさうにも髪を洗ひしふろあがり又いる人のみもやあからむざくろ風呂
（今俗ざくろ風呂こはいはざれど入口をざくろ口といふ是なり）【望一千句】坊主こねたる露のぬれが
み傾城のくどく風呂よりあがりきて【同后度千句】吹ばあつ風呂ふくはけいせい汲かへて持水桶のわ
かざかり是みな湯女をいふなり「髮をさばいて帶しどけなしさん／＼に吹くたびるゝ風呂上りいぼひ
さがりし灸のかず／＼

湯舟

○【續武家閑談に】慶長五年伏見豐後橋に錢湯ありて歷々の士多く入て喧嘩有しことみゆ漢土の錢湯は
【七修類稿】に吳俗甃大石爲池、穹幕以磚後爲巨釜、令與池通、轆轤引水穴壁而貯焉、一人專執爨、池水
相吞遂成沸湯、名曰混堂、榜其門則曰香水、納一錢於主人、皆得入澡焉（此方の溫泉の湯ぶねの如し）又
【永代藏】（四）江戶のことを云處或人船つきの自由さする行水舟と云ものをし初たることをいへり今の
湯舟なりこれらも古くありしものなるべし自笑が【色三線】に京の處水ぶろより湯ぶろが德なれごこ
しらへることを造作に思ひ云々ある湯ぶろは蒸風呂なり

風呂と心得たるとみゆ蚊ふろは蒸ふろにはあるべからずむし風呂もゐなかにはありしなるべし【海人藻芥】云、於湯屋風呂進退事、湯ノ汲搔簡、懸所添左手、添手湯ノ懸也、不添手湯飛、汁散近邊、無骨者也、或於湯屋様々故實多之、當時其禮絶畢、於高野山者、當時致其禮云々、入風呂時可敲戸二三度是禮也、於湯屋禮談不可然事也

○【沙石集】に近代は湯屋にとめ湯して女房入參らせむとてひさ〳〵とひしめきて後にみれば泥佛の金泥を洗ひ落して佛をば黑々として打捨て行事ありと申あへりとあるは寺の湯にはあるべからず女房入るなどいへるは風呂屋といふものはやく有しやうなり【太平記】延文五年京都のことをいふ處今度の亂は併畠山入道の所行也と落書にもし歌にもよみ湯屋風呂の女童部までもてあつかひければ云々【花營三代記】春日亭へ風呂御成といふ事年々あり春日亭は伊勢守の里第なり（湯女といふもの往々ありしたるべし）

伊勢風呂

いつ程よりかそのかみの風呂多くは蒸風呂なり（【甲陽軍鑑】（九））風呂に何れの國にもあれど取わけ伊勢風呂と申すは勢州の國からにて在鄕までも大方村一ツに風呂一ツ、有て大常仕子までも風呂吹すへを能存るは蒸風呂にすく故なり【枕草子】きひのよきものたち風呂へ入たるもきびはよしと有り）伊勢國今にこれ多し（おのれも楠部といふ處の茶屋にて其風呂に入しに作りさまおはりたる事もなく中には湯なくかの風呂にて湯氣のみむして熱きこと堪がたし慣はざれば入れぬものなり塗ふろなどに入とおなじその作所にてたつるやうを聞しに小屋ありて其内に石を多く置これを燒て水をそゝぎ湯氣をたて其上に竹の簀子を設てこれに入よしなり大かた村々にある事なりと）【醒睡笑】に常に

柘榴風呂

たくを風呂といひたてあけの戸なきを柘榴風呂とはかゞみいるとの心なりとは鏡を磨に柘榴の酢を用ゆ鏡人かゞみいると云歌又【守武千句】などにもみゆ【昔葉集】に大かた引出たり略之【犬子集】に秋はつざくろの實を好む人目はともなき鏡のくもりとぎ拂ひ【佐夜中山集】目のかゞみ磨や木末のざくろ粒【犬あ

數籠なき時よりは見おとりぬれど云々あり馬は次第に廢りてすくなくなりしなり【洞房語園】日本堤謡に御高札の邊りにして戶なし駕定ンておろすといへり四ツ手駕籠たれといふものあるもゝとよりなるべし戶にあらねば戶なしかご共いふべし

溫泉　風呂　芋吹　錢湯　さくろ風呂　湯舟　水風呂　薬湯　竈風呂　湯女風呂　女げいしや　大鼓女郎
永代島　江戶處々の茶屋者　比丘尼　踊り子　蹴ころばし　綿つみ　町藝者　羽おり　百藏　さげ重　船まんぢう　筒もたせ　山猫

溫泉

溫泉に浴する事【日本紀】舒明天皇十年冬十月幸有間溫湯宮云々同十一年十二月己巳朔壬午幸伊豫溫湯宮【續日本紀】大寶元年九月丁亥天皇幸紀伊國冬十月丁未車駕至武漏溫泉【万葉集】（十四）あしかりの土肥のかふちに出る湯の云々（足柄の下郡云々今湯河原なるべしとなり）【詞花集】（雜）ありまの湯にまかりけるによめる宇治前大政大臣「いさやまたつゝきもしらぬ高ねにて云々【後拾遺集】（夏）四月ばかり有馬の湯よりかへり侍りてほとゝぎすをなむ聞つると人のいひおこせ侍りければ大中臣能宣朝臣「聞すてゝ君がきにけん時鳥云々【千載集】（神祇）ありまの湯にしのびて御幸ありける供奉に侍りけるに湯明神を三輪の明神となむ申侍ると聞て書付侍る按察使資賢「めづらしく御幸を三輪の神ならばしるし有馬の出湯なるべし【輶軒小錄】【枕草紙】に湯は七くりのゆは有馬の湯たまつくりのゆと云々ありまのゆ天下にあらはる玉造の湯いづれにあることを知らず七くりのゆは伊勢榊原と云所にあり今に至り人々湯治のために往もの多し津の領内と聞ゆ

湯あみ　○【今昔物語】利仁薯蕷粥の饗をせし物語に東山へ湯あみにとて人をいざなひしことあり寺院などに湯

板ふろ　ありしにや信實朝臣の【今物語】にいたふろと云ものをして人々入けるに云々此文を考ふるに板ふろ

むし風呂　の有さまもしらぬものゝわき戶のうちに入てあなぬるのふろやたけ〳〵と云ゐたりとあるはからの蒸

編笠やみし事

○編笠吉原に通ふ者編笠着ざるやうになりしは享保より稀になり元文に至りて全くやみたり（太田南畝余に語りしは原武より編笠きて顔かくすことやみたりとなりおもふに然らずおのづから止むべき時にて貴遊びなど少くなれるなり）

あみ笠茶屋

田町また五十軒路の左右あみ笠茶屋は明和五年四月五日燒亡巳前迄は兩側にて廿軒有しとなり今も【細見記】にあみ笠茶屋の部あり大盡舞に新吉原のたからはから尻にかくれ駕籠云々淺草橋の外より遊客から尻に乘て行圖は【吉原戀道引】【小歌總まくり】などに見え所々より吉原迄の駄賃付をもしるしたり

土手の馬

其角が句に土手の馬くはんをむけの菜つみ哉京傳云右の句に土手の馬といへるも三谷馬の事なり今日本堤に立て船か〳〵とよばふ船人を土手馬といひ又嫖客につきて揚錢をとりにゆく日雇の者を附馬といふもすべて昔の遺言なり

附馬

駕籠は寛文五年巳二月九日町中にて籠あんだに乘候者有之由に候前々より御法度に候間自今巳後は町中不及申品川千壽板橋高井戸此内を限り堅乘申間敷候云々（其頃小山田彌市といふ惡徒捕へられ此事に付てかご嚴禁有しと【事跡合考に出】）小山田彌一郎大野十郎左衛門野村內藏介二村清右衛門等より合て御中間頭小屋權兵衛といふ者と博奕して右の四人權兵衛を殺害して立退たりしが追々召とられぬ寬文元年丑八月九日新吉原町へ參候者乘馬だちん馬并乘物にて參候事御法度に候間其通町中に申渡候云々

町駕籠の停止　吉原かご

○延寶五年巳四月寬文八年申三月云々元祿十年四月云々元祿十三年十二月云々寶永六丑年云々其は諸用の部に出つ正德三年巳三月町駕籠之儀只今まで町方に三百挺差免候得共向後百五拾挺に減候之間吟味いたし持主書付差出へく候云々吉原かご中ごろ止たり【諸艶大鑑】おくりの男長棒土手の數奇屋引うつりて云々むかしは借乘物もありしに近年やみて舟またはやし（貞享元年にかくいひしは延寶の法度巳前借駕籠ありしをいふなり）其後元祿中【離袖海】に三谷へは手寄〳〵の舟宿ありて乘から尻もあり今は駕籠も有て京よりはるかに心やすくゆく事なり又云道哲の寺の前につなぎとめたるから尻の

ふ（女を若衆に作りしことそのかみはやりしことなり西鶴が草子などにあれこれ見えたり）【一代男】

丹前風

（一抑）丹前風と申すは江戸にて丹後殿前に風呂ありし時勝山といへるなすぐれて情も深く髮かたちとりなり袖口ひろくつま高くよろつに付て世の人に替りて一流これより始て後はもてはやして吉原にしゆつせして例なき女なりと有但し六法ふることなどは奴のよしや風をとりて戯場にものせしなるべし

勝山

（或人云一枚摺の細見に巴屋三郎左衛門方に太夫勝山と有その隣山本助右衛門なり太夫ありしは角町茗荷屋吉十郎に小倉京町壹丁目三浦四郎左衛門に薄雲高尾小柴新町巴屋三郎左衛門に勝山都合五人ならではなし山本は五寸とありうめ茶みせなりさすれば山もとのかつ山はいぶかしその後山本にも勝山といふ太夫出來しやしらずといへりこは慥なる証なれば山もとに後同名の太夫ありしを道恕がそれとまがひて誤り記しゝなるべし）此勝山より風俗一變したりとみゆ【色道大鑑】近代は傾城の中に奴風

奴風

といふあり野郎若衆にも奴風あれど是は根本男子なればゆるす處もあり女郎の奴だていかゞいぶかしき事なれどきやしやなる事は好まずはづみたるをすく世にしあればかゝる風情もなくてや有べき然りといへども太夫職の用べき風儀にあらず云々近世のあたり見及びたる奴には江戸の勝山京には三笠藏人大坂に八千代御階大隅等なりと有る勝山是なるべし（【色道大鑑】は延寶六年に成れり勝山が吉原に入しは明暦三年なるべし）公より隱賣女を捕へられて吉原町へ奴に賜はることあり勝山も其類なればこれが奴といはれしは其義にあゝぬなるべし【東海道名所記】小田原の處比丘尼歌をうたふ頌歌は聞分られずたんぜんとかや曲節なりとて只あゝ〳〵とながくひきづりたるばかりなりと有こは萬治元年に作れる草子なること書中に考ふる處あり彼風呂屋にてうたひし歌をたんぜんといひしなるべければ勝山が吉原へ入らぬ前より丹前といふことはいひしを知べし（勝山吉原に入し明暦三年その翌年萬治となる間もなければなり）

なをよしやれ、こそはいをこそぐつたい、女郎のよこきるをてれんつかふ、と云是は唐音なり云々おさらばゑ、さうさ、かうさ、おつかない、さうすべい、所がらとはいひながら島原の心ではさてもうつくしい顔してけうこつな物いひとなんぼたしなんでも吹ださずといふ事なしご有り此内今もみな人のつかふ詞もあれど大かたはむかしの奴ごも六方ともいへる詞なりこれは男子の内にも一種の鄙言にて

きやんといふ事

侠氣を好むもの丶詞なり其頃は遊女もこれをこのみ奴の名を取たる者などもあり（奴とも金ひらとも云へり【松の葉】の春ごまといふ長歌こちの町のよねたちはいきもはりもつよいはきんぴらだんべい是土佐浄るりの金平よりいふなり又金時ともいへり【温故集】遊女歳旦盃や金時らしき初笑といふ句あり又紀逸が【六玉川】金ひらは女にありておもしろき今も男めける女子を金平といひきやんといふきやんは侠なり）それらのつかひたる詞の移りたるものとみゆその内てれんは唐音なりとあるは【吉原徒然草】（寫本）えびすのこはき宗旨ありそれに引入むとするが如くだます詞をてれんといふなりといへり今普く人の用る詞にも彼奴詞残りたるも少からず

おいらん

○おいらんはおいらなるを末をはぬるは上にみえたる例なり姉女郎を云ふ我姉と云ことなり【無嘲記】になるほごおんらんなりなどもいへり「いつちよく咲たおいらが櫻かな（享保十八年淺草寺の後飲をひらきて櫻樹を多く植一本毎に願主の札を立つ其中吉原の遊女多し此時かしくが發句なり）

丹前

○丹前【原本洞房語園】に新町山本屋芳潤か方に勝山といひし太夫あり髪の結やう黑く長き髪を白き奮にて片曲の伊達結び勝山風とて今にすたらず云々全盛は其頃廓第一と聞えたりもと神田丹後殿前津の國風呂の市郎兵衞といひし風呂屋女なり風呂屋停止ありて勝山は山本芳潤か方に出て勤たり彼風呂屋にありし時主ふちの編笠に裏附の袴を着て木刀の小刀を差もの游などするに風俗勇しく懸々衆の如く見えしとなり彡門庄左衞門なごいふ芝居のものが彼風を眞似たりとて丹前の名に勝山より起りしとい

心にや又さなくて廣く剃髪の人をいふとしても通ずべしさりながら長ばをりは醫者の風なればかくいふ）この小歌をとりたるにや大盡舞の小兵衛の坊さまの長ばをりと唄へりこれを或人の考證に彼の寛文にうたひし小兵衛が事なりとてけんさまごあるを坊ンさまご引直して證としたるはいかにぞや俳優小兵衛は延寶より貞享のころ行はれたる道外がたなりとぞ頭糸鬢にして坊主ご異名取たれどもそれが長ばをりのそのうへ寛文に小歌に作るべきやうもなしかた〳〵非ことなり今も坊主をけんさまといへるをや猶その證をいはゞ【好色旅日記】（三）坊さま達四五人この宿に入ばげんさまてうさまゑんさまなどいひそやして云々有てうゑんなどは定りていふことにはあらすけんさまといふより其例にならひてつらねたるなり【誰袖海】（三）出家は衣の替り長ばをり醫者とみせかけ（たゝはをりごいひしは【一代女】に法師のことをいひて衣を夜ははをりになし【諸艶大かゞみ】法師の紋付のはをり云々なごいご多く見えたり）ごいへる是なり

新五左

○新五左とは武士をいふ大盡舞にしよてはもの〻ふやかたものこれ新五左の始なりと云へり今はこれを武左といふ武左衛門の略なるべし其人たれともなしたゞ似つかはしき名をいふのみ也

遊女の詞

○吉原遊女の詞一種ありて他に異なるやうなり故に徒流が、なんせ、しんす、りんす、なごを初めとして余國に聞ざる言葉多し奇語と云べしと云へりおもふにこれもご嶋原詞の名残なるべし【浮世物語】（一）島原の處に谷の戸出る鶯の初音おぼろの聲を出し又きさんしたかはやういなんし云々その盃これへさ〻んせひとつのまんしなど見え又【一代男】（六）島原詞に有ますといふべきをあんすと云へり吉原詞の末をはぬるは是なり然るに元祿中由之軒がかける【誰袖海】に吉原ことばふつゞかなることをえり出て記し〻處呼でこいといふことをよんできろ、いてくるをいつてこひ、急げをはやくうつはしろ、ありくをあよびやれ、そふせよをこうしろ、おそはる〻をうなさる〻、腹の痛むをむしかたい、しやん

おひやる

ゆきんちやは金車の誤りなり【諸艶大鏡】（三）今のはやりの太夫金車(キンシヤ)引ても五日や七日には逢事まれなるよねさまと同し日おしやるはおろかなることや云々此金車(キンシヤ)にてもとは金多く使ふことゝいひしがはてにはたはけ者の事となりし也物とらるゝをとられんぼうと謙るごとし金十郎は金といふより付たるにて外に意味なし又【可笑記】にほむる体にてひやうり上ゲといへる詞承應明暦のころ菓子に多くみえたり表はほむるやうにて内は異なる表裏あげなり今の俚言(ヒナビゴト)におひやるといふ是なり

素見　ぞめき

○素見ぞめき【嶋葉】に友の騒【砂石集】に世間公私のぞめきなどみえて古言なり【和訓栞】にそゝめく事に今もいふなり云々あり【因果物語】に七歳に成ける子此ぞめきのまぎれに水門にはまりぬ今はそゞるこもひやかすともいへりそゝりは【吾吟集】にそゝりとは子をいだきあげてそゝり／＼といふは此こゝろなり俗にいさましくすゝむことをもそゝると云【今昔物語】に幼き兒共のそゝりといふことよす

冷かし

るやうにして云々ありひやかしは悪る口きゝなどして興をさますなりさますとは□ものを冷すことにいへばやがて冷かしと云たりとみゆ或人云むかし山谷にはすきかへしの紙を製する者多くそれがために紙のたねを水に漬おきそのひやくる迄に廓中のにぎはひを見物して歸るより出たる詞といへりいかゞあらん

油虫　すけん

○すけんを油虫といへり【吉原大枕】にくきものあぶら虫のからさわぎ京師には略きて見ともいへり【娘容儀草子】に八坂八軒飛子の茶屋の戸をたゝきて遊女の見し歸るなき男にまさつて京の女ほど大膳なるはなしといへり

けんさま

○けんさま坊主をいふ【泉本利房品鬪】に寛文ころ吉原その外往來の者迄唄ひし流行小歌けんさまの長ばをりコノエイつべしにはりひぢじやと有むかし醫者は長き羽をりを着たりそれ故引すりばをり長頭巾といひたり僧法師吉原遊所にかよふに醫者めかして長きはをりを着たるをいふ（けんは道術の道の

るさしがみ【寸錦雜綴】に出たり【五元集】戀の年差紙籠をさらへけり【竹丈點】前句付とうもいはれぬ〳〵さし紙を揚屋の妻が一トなぐり

揚屋紙 ○箕山云揚屋紙は半紙なり傾城あげやに居て客に文をつかはすにあげやより出す紙は皆半紙なり是によりてしかいふ江戸も此定なるべし

やり手 くわしや ○やり手とは後の名にてもとくわしやこいへり【人倫訓蒙圖彙】に傾城に付くるをやり手こ有また芝居役者太夫の條に三十より四十におよびてはくわしやかたといふと有り火車とはつかむといふ意つかむは昔のはやり詞女郎を買をつかむといへり心易く我儘にする意なりつかめなごいふはとらへてことゝ云が如しやりても女郎の掟するものにてつかむといふ意あれば名けしなるべし金銀をつかむにはよらじ火車は聞苦しきゆゑ花車として風流の名としたりさるを花車とは花にまはる心なりといふはかの散茶をふらぬといふ謎とせしと同日の談なり偶(タマ〳〵)その意に通ひし也やりては花車の車より出たる名なり

花車 【庭訓抄】に鳥羽白川には車の遣手といふ者あり云々この名をとれり道恕が香車の說は非なり

ぎう ○ぎうは散茶みせより起りし名なりといへり【洞房語園】に【待乳問答】といふ文澤氏何某が遊女の名よせの内に一座に花をちらすべししかうして花車頓(トミ)に廻り牛すみやかに走り女郎よくなひくと有これも車よりいひ出しことゝみゆ然るを【原本洞房語園】に風呂屋の僕の脊むしなるがありてきせるを不斷腰にさしたる形及の字に似たるより始れりといへるは非なるべし(【五元集拾遺】十及圖序云徃昔異邦の

そゝり 佛鑑禪師十牛を圖して人間迷悟の間(ホトノマ)をしめされたり其書を狂言にし取て牛は聲音妓有なり又及ともゝてあつかふは俳なればなり爰に及圖を畫讃し侍て笑を萬世に殘すもの晋其角こいへり是又及の說をとれるは誤なり

きんちや きん十郎 ○今遊里の方言に痴呆(バカ)の異名をきんちやきん十郎といへり誰々も其義をしらずしていひなれたりとみ

能の時花太刀など遣候事勿論なり太刀は如常左に持て舞臺へさし向ひ候時座のもの一人舞臺よりおり候て請取候又花は右手に持候いづれ舞臺の上にて渡し候事はなく候太刀花其外何を遣候共かせ者を以て可遣候也【粟田口猿樂記】第四日六番はてゝ狂言のほどに芝居より楓の枝に短冊を結びて棧敷のこすの内へさし入侍り云々【京童】四條芝居の條舞臺への花の枝は春にあらずしておかし【東海道名所記】に仕舞柱に贈り遣す花の枝は舞臺にさしあげて色をあらそひなど見えたり花の枝に目錄を結つけたるなり【輕口笑】（元祿十四年草子）前巾着より一ツ小粒をとり出し花に出すと申やられければと有は今の体なり但し昔は銀玉をやりし事多し【雜筵醉狂集】打花巾着露的月辨當筏など多くみえたり【一目千軒】紙はなの事遊所にて花を打とて紙を出す是を紙はなといふむかしより有ことなり云々半井卜養「下さるゝ紙もゝとよりよしの紙はなにえにしのありとおもへば古へ引出物祿物などいふみな贈りものなり紙をつかはすは目錄の心なり【沙石集】にかへり引出物とて紙に物かきてとらせたることあり引出物は馬など貴人へも獻つることあり祿は上より下へ賜ふものなり漢土には襃美にはな遣すを纏頭助采といへり【板橋雜記】などにみえたり【金瓶梅】（十一回）書袋内取兩封賞賜每人三錢これらの外に又一義あり【色道大鏡】花にたつる下略して花と計りもいふ我思ふ女分は差合あるか又は遣女この男に賣事を承引せざるを女郎と密談して各別の女郎をはなし置心ざす女郎に逢事なり見せ男の心におなじ是は外へみする女郎なり又傾城屋の女子を抱るにも肝煎の者にまよはされて花たてらるゝといふ名目あり是はいらざる事にて常のものゝしりても益なし（其外閣取に花あり又京難波にて賣色の揚錢にいひ又料物を入花など云ふいづれも花に出すといふことより出）

紙はな

花に色々

○揚屋さしかみは揚屋より娼家へ太夫をかりにつかはす公驗なり【犬枕】に長きもの せつ何正月のおさしかみとあり平日とは文言異なるにや尾張屋清十郎より三浦屋四郎左衛門へ太夫誰をかりに遣した

揚屋さし紙

三枚給

あつきに給單物なご着をりて汗びたしになる冬のさむきにすぐれてうすぎする云々【誰身の上】(三)(明暦二年刻)けいせいぐるひのことをいひてはやとりなりもよくなりてうすき小袖の一ツまへしめぬる帶もりゝしくて【續山井姫松】のかたひら雪やたてうすき(丹波すて)【諸艶大鑑】(八)女郎くるひほど骨の折るゝものはなし其時はやればとて孔雀織綃代升形やうきひ和國などの大袖にて女郎買とはいはれじ三枚給きるほどになくてはおくぶかには見えず按この三枚給と云ふは給を三ツ着るにはあらず表と裏との間に何にても物ずきに一枚入るゝを云ふなり【永代藏】(一)に卯月朔日は衣かへとて色よき給を縫かけしをみるに白き紋羅のひつかへしに緋縮緬を中に入て三枚かさねの給袖襟に引綿むかしはなかりしことなりといへり(今は祭禮の練子供などが衣しやうに此やうなるが有)不角點の句にとりなりつくる薄着だてゆゑさそふ水後家も島田の大井川又だて者ほご寒きに薄ぎけしぐゝり五人男の内がくる雁

花をやる

○はなをやる、これに二義あり一ツは年わかき時の風流なるさまをいひ一ツは人に物とらするを云へり【榮華物語】(初花)なほ〳〵しき人のたとひにいふ時の花をかざす心ばえにや【大鏡】(五)花をおり給ひし君達【續古事談】(一)時の花にてありければ云々時めく人をいふなり【義經記】に花おりて出たゝせ【堀川百首題狂歌】に(よみ人不知)一ツ木に二度花をやるものは秋の櫻のもみぢなりけり【卜養狂歌集】(白蓮を)枝もなくすらり〳〵ともきあげてなりもはすはにはなをやり候【諸艶大鑑】から鮭も朽木に二度花をやる【西鶴織留】しゆちんの帶紫皮の足袋にて花をやりしに【温故集】に尼になりて太秦に住ける頃(かいはらすて)花をやる櫻や夢のうきよもの云々古へ人のもとへ使をやるに梓木に玉をつけたるを持せて其しるしとせしこれ玉梓の使なりそれより後も何にまれ人に物贈るには草木の枝に付て贈れり今たゞ金銀なごを與ふるをはなといふももとは花の枝に付てやりしなり【貞順故實集】勸進

りとみゆ上衣を被とはふりをかふるなり是又うかれ人のふるきふりなり遊所に通ふもの人めを忍び編笠を着頭巾に類鬚などさま〴〵ある中に【東海道名所記】に婦人に行あはじと奥島の道服を打かつぎ目ばかりを見出し云々此ふり古畫にも多くみえたり寛文ころ吉原にてうたひたる盡し歌にうはき者のとんてき羽ふりかついで良うち隱し【松の葉】しぐれといふ唄茶屋のはしさみたれのかうし合たれかはをりかついでよねくどく云々これを異名つけて兎といふ【小歌惣まくり】に黑きはをりをかぶりたるをうさぎのおんのしとありおんのしは御字なり【諸艶大鑑】に御字太夫は彦左衛門に吉野三浦に高尾山本屋に利生九兵衛に夕霧その頃の四天王（【讃嘲記】を按するに此四天王は【補鑑】にいへるなり）

兎の御の字

また【世の人心】（三）今世の御字の客云々今も俗によきものを稱して御字といふ是なり兎とははをりかぶりたる形の兎の蹲りたるに似たればなり其内人品よきを兎の御字といひし是なり【麻柴集】傾城の鏡を捨し神代より（一晶）羽織に角をかくす風流雖（其角）

前わたり

○前わたり【源氏物語】（葵卷）さすがにつらき人の御まへわたりのまたるゝも心よはしや（六條御息所源氏の齋院御禊の供奉して渡り給ふを見給なり）【枕双紙】心ときめきするもの見あそばする所の前わたりたるなどいへり人の前を通る事なるを後世はみえをよろしくかいつくろひて渡ることにのみ云へり【犬草子】あためくものは前わたりしてとをるこれ前わたりを一種の名としたり

やきて

○やきて【讃嘲記】などに遊女にやきてと云ことあり今云ふやき餅は此やくと云ことに餅は添へたるなり今世手のある女などいふも此やきての上略なりやくとはもと戀に焦るゝと云ことより俗言にやけるなど云しなり世話やきと云も肝いりと云も同く細かに心を付るなり昔は鍋尻やくこと云り竈の下までも心を用るなるべし

だてのうすぎ

○だてのうすぎ、寛永中に書に書たる【[illegible]草】といふ物に當世のだてとて遊女ぬめり男のすくれて夏の

○【諸藝太平記】（元祿十四年）女郎の惣数は京大坂を一ツにからげても中々行とゞくことにあらず太夫はやう〳〵四人格子八十六人散茶五百一人うめ茶（或ひはくみ茶と云ふ）二百八十人五寸四百卅人三寸六十三人四寸二寸はまれに出る故數すくなしなみ局五百人余あげや十四軒茶屋五十二軒

昔の太夫

○むかしは大夫三絃小歌淨るりなど語りたる者多し寛文の頃名高かりしは江戸町勘左衛門抱への因幡が淨るりなり【犬枕】にきゝたきものまんよか三線花たかるもがつれぶし因幡が淨るりと出たり【讃嘲記】に二町目次郎左衛門後家內かるも聲の匂ひうるはしく小歌さみせん五町まちに並びなし上るり又いなばにもまさらんかといへり是故に三線を禿にもたせて道中するさまをかける畵多し藝者と云もの出きしことは後にいへり

とられんぼう
べらぼう

○とられんぼうといふ異名は【吾嬬物語】【色音論】等に見えたり大盡舞といふばか歌に「こうれんほうといへるは訛なりとられんぼとは妓女の爲に物をとらるゝ客をいふなり凡坊といふは彼を輕しめ蔑る意また親む心意あり我より目下なる女子にも名の下にぼうといふことを付て呼其外にはべらぼうしはんぼううんねんぼうなどいと多し【續山井】（寛文七年撰）兒ざくら我ぞ心をとられんぼ【東海道名所記】（二）わかれの宮はもし蘆高明神よりさられん房のもどり神かといへること有さられん房は夫に去られたる女をいふとられん房も是と同格の俗語なりこともなき語なるを先輩みな解得さりしはいかにぞや

とられん房
とりんぼ
ぞめき衆

又とりんぼは【原本洞房語園】云京にてぞめき衆といふを吉原にてとりん房といふ其義理も文字もしれず明暦の頃男達に鶺鴒組といひける一組ありしが【卜養狂歌】に當世の吉原たゝき女郎たゝきこのとりんぼも岩たゝきかなといひて其義をさとらすとりんぼはとられん房のうらにて女郎のかたより物をとる者なり殘口なごも誤りて【艶道通鑑】（三）かよふ千鳥の妬悋坊共云々とあらぬ字を充たり【町言歌】（吉原のことを述て長恨歌に擬したる狂詩なり作者を知らず）の句に取坊相連被上衣といへるは心得た

は世上一同なれば此里にもゝとより家々に挑灯はもとなり唯こゝに子細ありてと云へるはまことなるべしそは上に引る【原武雑記】にそのむかし女郎のちやうちんともしたてたる時西川屋名主停止せしといへる是なりされど玉菊がことは露ほどもいはずこれは彼水てうしと云うたひもの又【袖草子】などあるに折しも其頃茶屋のちうちん一やうにせし事などとり合せて彼が追善より事起れりとはいひしなり然らば【青楼雑話】の説のごとく元文元年に青黒の筋をつけたる箱挑灯を出しそれより種々の灯篭作れる事となりしなるべし（玉菊がことは享保十三年彼が追善の【袖草子】を引て【奇跡考】にいへりまたその墳墓の何くれと諸書を引て友人久卿【玉菊考】あり）

櫻を植ること

○春毎に街に櫻を植ることは寛延二年なり然るに徒流云此廓に櫻植る事は寛保三丙年はじめて思ひ付しことなり其始中の町の茶や軒を並てみせの前へ石臺櫻を出し度段願立其通り被仰付翌年より櫻をうゑてからの石臺ばかり出し置其翌年より中の町の眞中へ植る事とはなりぬと淺草寺なる奥山の茶屋の主吾妻や五兵衛といふものゝ物語なりといへりこゝは年號支干誤寫ある歟もとより誤説なるか（寛保三は癸亥もし辛酉ならば元年なれど寛保にはあらず）寛保二年己巳歳なり此時堺町中村座にて助六狂言に此体をうつし殊更に賑はしかりしとかや其淨るりを廓の家櫻といへり

俄狂言

○俄といふことは京師祇園の祭禮また島原住吉の祭の煉物などを擧べるにやその始は享保十九年甲寅八月九郎助稲荷正一位と官階ありてその祭禮より起れりとなりそれ故近ごろ迄も俄ある内は大門口に葉付の竹一本左右に立しめ縄引はへてありしが今はさる事もなしとなんこれら古今の沿革なり

遊女の數

○後世繁華おとろへたりといへども享保五年の【丸鑑】に散茶女郎ばかり二千人に近しとあれば其他準へて知るべし天明六年遊女禿すべて二千二百七十餘人享和の初三千三百十七人文政八年三千六百人（此時男藝者二十人女げいしゃ百六十人ばかりなり）

宅して榮へたり（三浦は寶曆六年に家絶ゆ云々）按るに金多里といふ【細見】（寶曆の初年なるべし）江戸町一丁め玉屋山三郎に太夫花紫これ一人揚やは尾張屋淸十郎のみなり（太夫も揚屋も此已後絶たり）

大夫の絶る事

○或人云遊女も延享寬延の頃までは紗綾ちりめん羽二重を着て中の町へ出るその道中の衣服毎日とり替着て同じ衣類は着ざりし（烟草を少ッヽ包み禿にこれをあまたもたせ茶屋に一服のみ殘りは其儘茶屋に置たり中の町の茶屋とも烟草は求めずして足れり）安永天明ころより羽二重さやなどは絶て用ひず錦繡の如き美服をきる事になりぬれど毎日おなじものを着て着かへは一ッもゝたざるなりたばこ入なども高價の物を用ふれ共人に呑することなし時勢に依て賤くなれり

遊女の道中

○燈籠の始は（享保十一年三月廿九日）角町中萬字屋の遊女玉菊死て翌享保十二年の盂蘭盆にそれが爲に燈せしなるべし徒流云翌秋追善とて茶屋ごとに挑灯とぼして軒にかけたり其挑灯赤と靑との立筋を付たる箱挑灯なりとぞ（友人久卿もこの事考へあり其內に【靑樓雜話】といふものを引て云玉菊が三周忌の追善いとなまんとて仲の町の家ごとに挑灯を軒に出したり其時十寸見蘭洲（つる蔦屋庄二郎）水調子といふ河東ふしの唄ひものを竹婦人（岩本乾什）に作らしめ揚屋町に住める三線ひき河榮といふものゝ家にて追善のわざをなしたりその時茶屋〳〵も玉菊をいとおしみければいひ合すともなく家〳〵に挑灯をともしけるとぞ其後元文元年には箱挑灯にてすそへ靑黑の筋を付たるをかけつらねしとなり翌年よりきりこ灯籠まはり灯籠など作り出し次第に潤色して花美になれるといへり）此說によれば三周忌よりのことにて且ついひ合せ事もなく家々に灯せしは紋所しるしなど區々に異なりしなるへし筋を付たるはあらぬ後の度なり追善の【袖草子】の序に身のうへの秋風をはや玉祭る頃にもなりぬと光陰の挑灯に發句の追善を題すとは挑灯に發句を書たるにあらす子細ありて其翌年の秋より茶屋毎に燭臺に作り花をして佛供となす云々此說年月などの相違もありておぼつかなくはあれどうら盆の燈籠

燈籠の始

なりしは人物によることとなるべし駒下駄は享保より以來なり）

遊女櫛をさすこと

○遊女櫛をさすことと天和已來多く櫛ぐしにさしたり其ころ常の女は櫛をさゝず【松の葉】あだまくらと云長歌しま原の風をいひて身せば大そでゆきみじかひつこきかみやふたつをり又二ッ櫛しどもなくゆきのすあしの花ふんで云々あるは貞享ころのさまなるべし江戸の遊女二ッ櫛さすはその後元祿よりと見ゆかんざしはいまだなし【賢女心化粧】（五）古代は身を拵へ貞を作れるを傾城遊女の風といひしに云々これ迄とちがひ貞白粉色どらず口べにさゝず云々江戸の遊女かんざし多くさすことは明和の頃とみゆ【原武雜記】に昔は紅粉おしろいをむさきこととし云々櫛はあしだの齒のごときを二三枚かんざしとて色々もやうをしたる七八本さし散し祭に會ありくたしやら雛屋の人形やら見わけがたし大氣の能日も下駄がけ云々

すあし

○すあしは天和のころよりと見えたり【色道大鑑】にす足を本とすといへれど其頃は足袋をはきしなるべし【一代男】（六）女郎も衣しやうつきしやれてすみ繪に源氏紋所ちいさく丼べて袖口も黑くすそも山道にとるぞかしそれ迄は目せきあみ笠うねたびにもみのくけひも今のすあしに見合おかしき事も有て過侍る云々いへり

内八文字

○又内八文字といふあゆみやうも京師の風なり【諸艶大鑑】（二）先一番に都の三夕各別世界の道中たり内八文字にかいどりまへ云々【東海道名所記】島原の條に見今あけられてかふろやり手におくられ長きもすそをかいどり八文字に踏でゆくうしろかげ云々あるも内八文字なるべし

○元文頃まで太夫有しは三浦屋三軒と玉屋のみなり徒流云元文五年頃迄揚屋五軒ありむ揚屋町にはなし新町に（京町二丁めなれどいつの頃よりか新町といふ本名にはあらじ）海老屋吉右衛門尾張屋清十郎橋屋五郎右衛門若狹屋庄三郎京町和泉屋清六其後揚屋とも皆破壞して尾張屋清十郎のみ揚屋町へ轉

傾城風俗

ころに昔遊をおもひ出て記したるなり）吉原昔よりは衰へたることをいひて春は茶屋のまへ花を植てにぎやかにしなし夏は燈籠種々手を盡したる有樣そのむかし女郎のちやうちんをともしたてたる時も有しが西田屋名主停止せしは吉原のおごろへの前ひやうと思ひし故なりし其上中の町の茶屋にてはれて上るり三味線如何なることぞや（女郎のざしき揚やにてひきうたふべきことなり）云々女郎の風俗も昔は紅粉おしろいをむさき事とし揚屋女郎の薄げさうだにあげや風とはいひながらいやしきことにいひなし髮はひやうごに引むすびあらぐしにてすき上ゲつまべにつまかくしの草履地女とちがひきれいなるを女郎とせしに今の風は髮は油がため櫛はあしだのはの如くなるを二三枚さしかんざしとて色々もやうをしたる七八本さしちらし天氣のよい日も下駄がけ揚屋入といふ事しらずおどり子かとみれば小袖の數をきる云々其巳前つる蔦屋蘭州店に貳朱と張札出し五町中のわらひものとなりしが其後段々はやり貳朱の目印かうしをほそくしてぶつゝけ見せといひたりしを吉原のめつきやくなりといひしが今は大方貳朱其中に壹歩もあり晝夜のべとやらいひて三歩に賣も有よしまぐろ鯨の切賣と成云々

切賣

女郎の風俗

○女郎の風俗それより先にも猶昔に及ばざることをいへり【吉原徒然草】（其角が撰なりといふは非なるべし正德中の寫本なり）古へ山もとの小主水長さきやの千とせ云々今時のよねにくらぶるにもたらず先内をふみ出すより世界をわがものにしてあひかたをたな心におさめ道中はてにしてしほらしかりし其頃は絽の袷かたびらといふものもなく勿論二人禿といふこともなかりしかど道中なか／＼にきやかなりし今は（三浦の太夫は二人禿なり全盛なるは格子も二人禿をつれたりされどごく大かたはみな一人なり若紫しばらく三人禿なりけり先はなき事なり云々菱屋の若紫なるべし）對の禿にて氣をごるといへども風情りちぎにして隣へ茶をのみに行やうなりむかしは帶のはゞもせはくむなだかなりし云々（頭にかんざしなく面に紅粉を假らず衣も打かけをきずはきものはつまかくしの草履是にてにぎやか

二人禿

お茶を挽く

ちなる傾城をお茶を挽といふも此節よりの辯なりといへるは非なり唯徒然にてさびしきさまをいふなり元隣が發句に花を見て留主して茶ひく座頭かな【續山井】（住吉にて）松風の音や茶をひく神の留主茶をば留主居などにひかするならひと見えたり寂しき体おもふべし女郎のもてなしを茶にたとへたるは散茶以來專らなり

吉原の町々

○又道恕が說に寬文年中散茶出きし同時江戸町貳丁目名主源右衛門御願申上堺町伏見町南町の新屋を作る堺町は角町と二丁目の堺なれば堺町といひ伏見町と名付しことは同町貳丁めの年寄山田屋山三郎山口屋七郎右衛門東屋次兵衛岡田屋吉左衛門此者共の先祖は吉原開基の頃伏見の夷町同處豐後橋抔より引越たる者共なれば先祖の古郷を慕ひて伏見町と名付たるなり云々（按るに此時散茶みせを作りたるにて町家はもとより有しなり堺町も伏見町も庄司が再興已來の名にあらず元吉原慶長中に此町あり

鐵炮

卷首に云へる如し徒流云堺町は明和の類燒後建塞て其跡なし伏見町は今も繁昌す價銀貳朱鎰四ツ過より孔方四百うかれ人これを鐵炮と云）茶屋遊女持もと吉原へ入込しは寬文八申年の頃なり一日の揚錢金百疋つゝなり此節迄局女郎といふは揚代二十目なりしが散茶におされて是も金一步となる（徒流云元祿年中より局といふ事すたり惣て吉原の古實共取失ひたりと歎きて有り其頃より皆散茶造りになりたるが當時遊女の家作とれ〳〵も散茶作りなりむめ茶作りさへ廢して今知れる人稀なり近き頃迄は江戸町一丁め巴屋源右衛門家作がむめ茶作りにて有しが表惣格子にて奧は壁のかた三跡尻の方二方に女郎並居て端の方にギウ同座すまがきと表の格子の間を三尺程明て落間ありギウ是より出入す格子の並に露地ありそれより客を誘引す云々）

けんどん

寬文のころ端女郎をケントンと異名せり此こと飮食の條にいへり

○【原武太夫雜記】（原武太夫といふ者三絃に堪能なる事普く世に知られたり享保中遊樂して老後實辯の

風呂屋者

ギウ

むめ茶

るは散茶の二階ざしきにて樂む云々【原本洞房語園】に寛文八年の頃端々の賣色ども吉原へ移りし時風呂屋者ありて風呂屋の家作りを用ひ局廓を廣く構へ大格子を付け庭も廣く取ギウ臺とて暖簾の側に三尺四方ばかりの腰かけを付ギウといふ者を付置て客を引【當時女郎屋の家作り皆散茶作りなり】有來りし傾城とちがひ意氣もなくてふらぬといふ心にて散茶といひけるがいひやまずして終に惣名と成たり近年散茶みせの摸樣をかへて廣き庭をもとらず大格子の内を局座敷に拵へたるを散茶に對しむめ茶と戯にいひけるが是も又此頃は本名のやうに成たり（【色三線】（三）近き頃のしだしうめ茶で吶のかはきをやめ當座拂の氣さんじそれから五寸三寸新町がしのかきのうれんは定て百宛ころりとねて云々）かくはあれども散茶は何をいふにか按るに【籠耳草子】（十一）その家の下女そばに茶をふりてゐける云々茶をたつるをふるといへりこれは挽茶にはあらず枝などの雜りたる麁茶を濃く煮て茶筅にて振たつるなり散茶とは今いふ煮ばなにて好茶なりちらしともいへり【文獻通考】茗有片有散片者即龍團、舊法團者則不蒸而乾之、如今之茶

ちらし

【五元集拾遺】わびに絶て一爐の散茶氣味ふかしちらしと云しは【一代男草子】（一）風呂や者をいふ處ちらしを飮せ浴衣の取さばき云々【一代草女子】（五（烟草盆かた手にちらしを汲で云々【諸艶大鑑】（四）役者まじりの人ごみざつと揚場に散しなど呑ゆかた疊む間云々風呂あがりに是をもてなせし故風呂屋もの吉原に廓を出したる時その女郎を散茶といひしなりあながちふらぬといふ謎にはあらぬを頓てさは取りたるなり（【骨董集】に自笑が內證鑑にちらしを汲といふことあり風呂のかゝり湯のことをちらしと云しなりと云るはいたく誤れり）又うめ茶は水をうめてぬるくしたる心なり（是も徒流が說などは甚わろし】茶を挽と云ことは道恕が說に慶長の頃迄は歷々の御方も兼日の約束にて明日は誰が家の何といふ大夫が手元にて茶をたべに參る抔とこゝろやすき同士は誘引あるきしとなり今に至る迄隙が

散茶

五寸局
三寸局

うめ茶

寛文年中散茶といふ者出來て揚錢も同く金百疋になる局の構へやうは表に長押を付内に三尺の小庭あり局の廣さは九尺におく行貳間或六尺なり云々元祿中より局といふことすたり惣て吉原の古風古實取失ひたり【江戸鹿子】（貞享四年の刻なり）大夫は三十七匁格子は廿六匁山茶は金壹歩（大夫揚代もとのごとし）局は五匁三匁その下は錢百文云々【諸艶大鑑】は貞享元年の草子なるに大夫揚錢晝夜七十四匁格子は五十貳匁是は上がたにて天神といふなるべし晝計は廿六匁なりと云へりしからば大夫も三十七匁は晝夜の半分なり

○【京本洞房語園】に元吉原より今の地に引るゝ時のことをいふ處只今までは二町四方の場所なれども新地にては二町に三町揚處五割增に被下候只今までは晝ばかり商賣いたし候處自今晝夜商賣御免なり町中に二百軒餘有之風呂や悉く御潰被遊候云々按るに元吉原にてもはじめ晝夜商賣したりし也【色音論】によしはらやよるのかよひのやみければふろやの女はやりものとあれば寛永の末にやみたることとしるるし

○【諸藝太平記】惣して此里のならひ晝一ツ夜一ツと二ツに割て大夫を三十七匁ツヽに極め晝夜の揚錢七十四匁引舟はなしかふろ二人なり又五寸つほねを通し領三寸を半領と云り

○後世元文寛保の頃大夫八拾四匁格子六拾匁散茶晝夜三歩寛延の頃大夫九十匁格子六拾匁散茶金三歩これ文金行はれしよりなり局五寸二寸などいふは切レを賣の心なり（元祿の初五寸局をあつめうめ茶といふ者出來ぬ）爰にも散茶といふはふらぬといふ心なり近年の仕出し貳町目の下屋兵庫屋大郎屋を是からみれば揚女郎にもさのみおとらぬ姿を一軒に五十人ツヽも見せかけ大かたは歌うたふて彈さるはなし（爰にもといへるをみれば散茶といふこと江戸にのみいひしにはあらじ）貞享四年版【江戸土產噺】に近頃より散茶と云て大夫格子より下ツ方なる女中あり大盡なるは揚屋にて參會し夫より及ばざ

移さるそれより今の千束の田地へ移され候引料として金子三千兩とかや下置れ候云々いへるは慥なる傳なるべしさてもとよし原町のさまを現に見て書たる物いとすくなし（【落穂集】に慶長五年以前葭原町のことを云り合せ思ふべし）

大夫

格子の君
はし

○【色音論草子】（寛永廿年板本）たちやすらひてみる時は賤が心もよし原に二八ばかりの上らうのはだには白きうす小袖うへはさま〴〵物ずきの色ははなだのひたち帶宿と揚屋のそのあひをめぐり〳〵てわが君にむすびあはんと引まはしかふろやり手をめしつれて町もせはしととをらるゝ云々是を大夫と申けりこの町なみのならひにて人にいみやうをつくるなりあとに見えけるさふらひのいみやうをいへばとられんぼあれにみえける上らうはかうしの君と申けり是をばはしの上らうとそのくはしきをかたりけり云々又【吾嬬物語】（これも同時の細見なり）形かたの如くにて今様をうたひらうゑいし扇おつとり一ふししほらしく舞たるを大夫と名付すこし品おとれるをかうしと名づけはしといふさて又くつわ貧しくてするわざもかなはねば端となしおくもあり然れどもあだし世のきのふ迄時めきし大夫はしになるあればはし又けふは大夫となるさだめしことのさだめなくはかなさよとぞ申ける云々さて局はいかにこれみなはし女郎のうきすまひなり云々大夫七十五人かうし三十一人はし八百八十一人惣合九百八十七人と記せり女郎の名大夫は殊なることとなしそれより次にはよのつねのおもし名又何之助何太郎等の男名も多くみえたり揚代はしるさず明暦三年今の新吉原にうつりても揚代は同じかるべし

局

大夫名目

○【原本洞房語園】に大夫名目は京都より始る藝のうへの名なり慶長頃迄遊女共小舞亂舞を嗜み一年に二三度ツヽ四條の河岸に芝居を構へ能大夫舞大夫みな傾城が勤めしなり自ら能傾城の惣名と成けるよし大夫一日の揚錢三十七匁なり格子は大夫の次京都の天神に同じ大格子の內を部屋にかまへ局女郎より一ときは勿体を付る局に對して紛れぬやうに格子といふ名を付たり局女郎一日の揚錢銀廿匁なり但

處々にこれを立て人を集むこれに惑ひて身を亡ぼすに至れるもの多かりければとかく彼等を江戸に置べからずとの議にて女の數を改め給ふに和尚と號する遊女【こは遊女の上色をいふ】卅餘人其次に名を得る遊女百餘人みなこと〳〵く箱根相坂をこし西國へながし給ふと有り是慶長年間の事なり是によりて吉原また荒廢してありしを其後甚右衛門といふ者願をたてゝ再興せし也【寫本洞房語園】に元和三年甚右衛門に傾城町中の事御免許ありて（但し慶長十七年の頃遊女町の願書を出すと云へるはうけがたし）夏中より地形普請に取懸り元和四年十一月より一同に商賣致候由といへり【事跡合考】に寶永半ばの頃江戸町名主西田屋又左衛門に傾城町來由を尋ね委細に記し置しか享保十年の頃かの町より來由を書上候とは少し違ひ候やうなれ共總ての事公界と內証とはさはる事ある故公界へは實傳十分に書出されぬものなり又左衛門が先祖は庄司甚右衛門といふ慶長の頃駿河國元吉原宿驛たりし時其旅店の亭主廿五人打より相談いたし候は江戸御城下朝日の輝く如く御繁榮の由なにとおもふぞ各抱へ置く旅人の足洗ひ女共召連罷下り遊女宿となり候はゞ拔群富饒の身となるべしといふさてもよき相談と皆々一同して江戸に下り御城下に入候は御咎恐入候間今の荒井宿の溜邊の出町の地をかりて長に紺の木綿の三尺幅に仕立たる長暖簾の端に鈴を付置客來りて覗けば其鈴なるやうに致したり鈴なるを合圖に女ども出候を見立て思ひ〳〵に客上りし故此所を鈴の森と名けたるよしなれ森とは尤此町の入口に大井社の森あればなぞらへいふなり其後御願申上今の京ばし其足町東葦沼の汐入を拜領し築立南をすみ町北を柳町と名付中の通を中町と名付け此すぢにかまどを出し茶がまをかけ茶やと申茶をうり候云々然るに日を追て遊女やどこゝかしこに出來しかば彼庄司甚右衛門分別し今の堺町の東に於て江戸中に散在したる遊女やど一所に罷在たく由願候吉原町に至りて公儀より御書付御通被下置候處明暦の火災に燒失しさて遠所へ可被遣とて先今の本所麹勒等の所其ころいまだ荒地にてありしが暫くかの地に

元吉原再興

鈴の森

嬉遊笑覧巻之九

喜多村信節撰

娼妓

○娼妓（吉原起源　元吉原再興　大夫　格子　局　散茶　うめ茶　茶を挽　吉原の町々　傾城風俗　すあし　内八文字　大夫の絶ること　燈籠　櫻を植　俄狂言　遊女の數　とられん坊　とりんぼ　蔻の御字　前わたり　たての薄着三枚袷　はなをやる（紙はな、花に色々）　揚屋さし紙　やり手　花車　ぎう　きんちや　おひやる　ぞめき　そゝり　冷かし　げんさま　新五左　遊女の詞　丹前勝山　奴風　編笠やみしこと　馬かご等の事）

吉原起源

江戸吉原町の起りは三浦淨心の【見聞集】（七）【曾々路物語】に云ふ見しは今江戸繁昌ゆゑ日本國の人あつまり家づくりなすによつて三里四方は野も山も寸土のあきまなし然るに東南の海ぎはによし原あり色ごのみする京田舍の者ども此よし原を見立けいせい町をたてんとよしのかりあと爰やかしこに家作りたりしはたゞ蟹の身のそれほどに穴をほり住居たるがごとし古歌にあし原の刈田のおもにはひちりていなつきかにや世をわたるらんと咏しも此けいせい町にこそとわらひたりしが日を追ひ月をかさぬるに隨て此町繁昌する故草のかり屋を破り西より東北より南へ町わりをなす先本町と號し京町江戸町ふしみ町堺町大坂町墨町新町など名付け家居美々敷軒をならべ板ぶきに作りたり扨又本町を中にこめて其めぐりにあげ屋町と號し幾筋となく横町を割り能歌舞妓の舞臺を立置毎日ぶがくをなして是をみせける此外勸進舞蛛まひ獅子舞相撲淨瑠理色々さまぐ\のあそびしてぞ興じけろ（此ころの事【洞房語園】には板本寫本共にすこしも見えず合せ考ふべし）已下文繁ければ要をつみてしるすべし當時おくに歌舞妓のまねびして舞臺を多く建おき奴女ども能歌舞妓をなす其よし高札にしるし町中繁華の

王夢十八巨人而範其像南宋時僧道容増塑至五百尊獲之田字殿殊容異態無一雷同焚香者按己年歯隨意數之遇愁者愁遇喜者喜これはわが休咎をトふなり今此にいふ事はこれを傳へ誤れる歟

仕かけ山伏人を迷はす

○からもやまとも奇異のことをなして人を迷はすに謡りごと多くあり【胸算用】山伏に祈りを頼ければだん上なる御幣うごき御灯次第に消ますが大願成就の印といひけるに云々今時 は仕かけ山伏とてさま〴〵ごまのだんにからくりいたし白紙人形に土佐をどり此まへ松田と云ふ放下師がしたることなれども皆人かしこすぎて結句近きことにははまりぬ

之地、村巫野叟及婦人女子輩、多能十九姑課、其法折草九莖、屈之爲十八、握作一束、祝而呵之、兩々相結、廿留兩端而抖、開以占休咎、若續成一條者、名曰黃龍儻仙、又穿一圈者、名曰仙人上馬、圈不穿者、名曰寶蹲落地、皆吉兆也、或紛錯無緒不可分理則凶矣またく是なり、又一法、曰九天玄女課、其法折草一把、不計莖數多寡、苟用算籌亦可、兩手隨意分之、左手在上竪放、右手在下橫放、以三除之、不及者爲卦、一竪一橫曰大陽、二竪一橫曰靈通、二竪二橫曰老君、二竪三橫曰大吳、三竪一橫曰洪石、三竪二橫曰祥雲、皆吉兆也、一竪二橫曰大陰、一竪三橫曰懸崖、三竪三橫曰陰中、皆凶兆也懸意俗謂九姑、豈卽九天玄女歟、【離騷經】云索瓊茅以筳篿兮命靈氛爲余卜、注曰━━茅靈草也、筳小破竹也、楚人名結草折竹以卜曰篿據此則亦有所本矣

無盡籤の呪

○無盡の起りは寶會の條にいへり明和の初この事殊に行はれたりとみえて【麻惚文集】に無盡會稿序あり廻二闔座敷一餘物有レ禍張欲心中呪符不レ効云々未闔否而欲心盛先鉾盡而呪符起或懷持佛門飯粒又御嶽頭之信心、また銅脉が【太平樂府】入レ講行レ懷二一自掛山子、誰會出錢頻、花闔亦不中、空掛常絞身、山子とは江戸にてふ山師なりまた【同集】咏時行物、講寶指輪善哉餅孰知私等斷茶分潤場若ば闔山講若是爲何十九文闔山講は無盡をいふたり無盡の闔に中らむとて呪ことと今はさま〳〵ありとぞ飯杓子を懷中する山師の飯より轉れる欲石塔の寶珠の尖を打かきて持行ことはやるにや此頃はいづくの寺にも石塔の寶珠みな缺て変形の物有こととなし

五百羅漢の顏にて占ふ事

○五百羅漢俗に五百羅漢にまうでゝ我見たきと思ふ人あれば端よりよくみて錢にても闔にても一體ことに驗に置つゝ見もて行ば必その人に似たるが有といへり此事むかしよりいひけると見え【一代女】（六）五百羅漢の堂のありしに云々是ほど多き中なれば必おもひあたる人の顏あるものぞと語りつたへしさもあるべしと氣をつけて見しに云々、按るに隣次雲が【湖壖雜記】云、淨慈寺羅漢共始北十八眘覺超

を伺ひくじをとれりと云り【望一後千句】の端書に守武のことを云ひて或時御祓くじにて神慮を伺ひ給ふ云々【醒睡笑】に寺僧二十人ばかりある寺を一堂請川の時住持鬮をまはし方丈へよせ衆僧みな上戸なり明朝の座敷はれがましきにめい〳〵大器にてひかへば事みぐるしかるらんびんぼう鬮をとらせせめて一人は下戸ぶんにせむは如何云々了意が【浮世物語】に或主君の秘藏する狗の俄に死けるに若黨どもの所爲ならんとさま〴〵穿鑿有けれ共誰がわざといふ事をしらずこのうへはとかく貧乏鬮をとらせ一人を切腹さすべしと仰出されたり云々【籠耳草子】（貞享四年板按るに此草子舊名は何といひしか今名は後にかへたるなり）世に大病の切なるに臨で太神宮へ幣鬮をあげて醫者をもとむる事あり云々これ神慮にまかするにあらず神慮にまかすといふはたとへば兩人の醫者を幣鬮に入るゝに札三枚いれて一枚は白札にして死病に極りたらば白札にあがり給へと祈念するときもし白札にあがり給はゞ藥を用ひず死を守りて覺悟すべし云々、或國に山をぬすみし者ありて三人とらへられ共に罪におこなはるべかりしを國主三人に貧乏鬮をとらせて其内一人を罪におこなふべしと仰付られ既に一人極りたる時國主聞し召その鬮はいかゞとらせたぞ三人に鬮三ッ内一ッ死鬮ならば一人はあたらん事疑なし鬮四ッにして一ッ死鬮として三人にとらすべしそれにて死鬮にとりあたらむは力なしとの給ふ云々【守武千句】の自跋に鬮をとるべきに一ならばもとより二ならばはいかいのあらましことにてあはれ二おりよとねんじければ二おりぬ此事を【望一後度千句】の端書に守武御祓くじにて神慮を伺給ふ云々いへり（これにて其法明らかなり又醫者をもとむる事今は名を書たる小き紙を伊勢の御祓箱にて搜るにその先に付たるをとるは俗法とみゆ御祓くじといへばとてかくするものならぬは望一がいへるにても知べし）

觀音くじ

○又觀音くじと名付て江戸王子村わたりの小兒草の葉稻の藁などをもて結びてする事あり吉原町の妓女などは紙捻にて結ぶとなり其法陶宗儀が【輟畊錄】（廿）に出たり是を九姑玄女課といふ其文に吳楚

九姑玄女課

夜かたらずとか女房のつたへにいふ事なりとの給ひておさ〳〵御いらへもなければ云々また世によき夢とて一富士二鷹三茄子といふは何の故とも辨へがたし駿河などの國の諺とは見えたり其國の名物をいふにやむかしは初茄子駿河より出鷹は聞えざれども古への鷹術は雉小鳥を取のみなり鵠雁などの大鳥をとることは東國より始りしにやさらばそれ等の事にても有べし【續五元集】のみ料の烟をきざむ三穂かゝり鷹と茄子を浮橋に待（烟は富士をおもひ三穂かゝりはきざめる烟艸三穂の出崎に見立るか浮橋は夢をいふなり）又思ふに富士山は高大をよろこび鷹は鷙鳥にてうちつかみとると云ふ義茄子はなすなると云を成の意に祝したるか又古き諺に夢と鷹とはあはせがらと云ことあり明暦二年板【世話盡】にも出たり

一富士二鷹三茄子

○【耳袋】に天明の頃世に狂歌以の外流行しが其頃の事にはあらず明和安永の事なりし品川宿提灯御用にて御鷹匠集りはたごやの門に架を置て御鷹を休めしに高縄の邊に何かやら名は忘れたり俳諧狂歌などする貧僧ありしが品川宿に行たるにあやまりてかの架にさはりし故鷹おどろきければ其彼人僧をとらへ憤りけるはたごやよりも出てさま〴〵詫ことしければ何者なりやと尋ける故狂歌など詠ものゝ由答しかばさらば一首よめと責られて「一ふじに鷹匠さんになす飽相あはれ此事夢になれかし、鷹匠賞歎して免しける

貧乏鬮

○貧乏鬮【沙石集】（六）先年の頃何者の云出しけるにや相手を孔子に取て事をし相手引出物をせば時の横災をまぬかるべしといふ事京田舍に普く其さたありてかみつかたにも此事ありける云々或公卿の御所に此事あるべしとて相手を定められけるに思も寄らず私の貯へもなくして貧き侍の宮仕へけるがたの御相手に取あたりぬ是ち不運の至と身にもおもひよそにもさたしけり（孔子は鬮の假字なり古書に往々みゆ是らも貧乏鬮にはあれど後世にしか名くる鬮は其法異なり）御籤くじは【竹千句】の時神遠

御籤くじ

らなへとありければ歌占に「十萬億の國々は海山隔て遠けれど心の道だになほければつとめていたるところぞきけと占ひたりければ啼泣して歸給ふ云々これ占相たる處を歌にていふなり漢土にて箕仙の詩のごとし[illegible]

卷卜

○【聊齋志異】白秋練が條に女一夜早起挑燈忽開卷悽然涙瑩生急起問之女曰阿翁行且至我兩人事妾適以卷卜展之得李益江南曲詞意非祥生慰解之曰首句嫁得瞿塘賈卽已大吉何不祥之與有女乃稍慵とありこれは無心にて卷を開き其文をみて吉凶を占ふわざと見えたり

夢合

○夢合【周禮】に占夢の官ありて六夢の吉凶を占ふ（六夢は一に正夢二に噩夢三に思夢四に寤夢五に喜夢六に懼夢）なり王逵が【筆疇】に夢者非自外致也日之所爲也日之所爲有善惡夜之所夢有吉凶云々然則夢者所以驗吾善惡之進退者乎こゝにも【日本紀】にはゆめあはせを相夢とあり夢解といふもの有て吉凶を占へり【源氏】（螢）夢見給ひていとよくあはする物めして合せ給ひける【枕草子】うれしき物夢をみておそろしとむねつぶるゝにことにもあらずあはせなどしたる【古事談】伴善男の條に汝高相の夢みてけり然れどもよしなき人に語りてけり（わろく合すれば吉夢もよからずといひならへりとみゆ）【江談】に兼家公いまだ納言たりし時夢に逢坂の關路に雪のふりたる處をみて云々夢解を召て合せらるゝ（小注に）此夢解盲人也名は月とあり【取かへばや】吉野の宮をいふ處、世の人のしとすることかたぐ＼のさゐおんみやう天文いめときさう人などいふことまで道きはめたるさゐどもなり

夢解

胸に手を置て寢る

○【源氏物語】（御幸）夢にとみしたる心ちして侍てむねに手を置たるやうに侍ると申給ふ【湖月抄】におびゆる心なりといへり【紅梅千句】樂寢にはおそはれまじや小夜枕付句に胸にある手をのけてのびするとあり今もむねに手をおきて寢ればおそはるといふ

夜は夢物語をせぬもの

○夜は夢物語をせぬものといふは【源氏物語】（横笛）今しづかにかの夢はおもひ合せてなむ聞ゆべき

集】日をするくも妹おもふらじ待こゝろはたゞみにもとふ占やさんか

灰卜

○又灰卜あり【莵玖波集】（九）とふはいうらの占まさしかれはしり火にむねのみいとゞさはぐかな【六條内大臣）また【中山集】にかきならす手つまこと更上手にて人待部やにとふは灰占【懐子集】（八）おもひ人身にしみ〳〵と待こゝおわ枕香爐の灰占をとふ古き冠付「いく度も灰占花の背くもり斯段公路が

虎卜

【北戸録】云、卜之流雜書傳虎卜紫姑卜牛蹄卜灼骨卜鳥卜雖不法於聖經亦有可以稱者按博【物志】曰虎知術皴又能畫地卜今人有畫物上者推其奇偶謂之虎卜たゞみさん灰占なども似たる事なり【同書】又云倭國大事輒灼骨以卜先令如中州令龜視坼占吉凶也こは上古鹿の肩骨を拔て灼て占相たることを傳へ聞しにや【事文類聚】神龍中西京壽安縣有墨石山神祠頗靈前有兩瓦子過客投之以卜休咎仰爲吉覆爲凶とあるは

投ざん

後に珓杯といへるものなり又京房卜易卦以錢擲以甲子起卦これらみな投ざんなり今世俗に晴明が投算といふ物きのふけふいひ出しにもあらず【後撰夷曲集】吉野晴明が瀧にて斷成「秋かぜになげさんかともみつるかな晴明が瀧に落る木葉を

歌占

○歌うら【和訓栞】に歌うらたひ物をもて占をするなり短册の占もありといへりと有り伊勢國三津村度會家次が本草に北村氏ありこゝに歌占の弓といふものを傳へたり木弓の長さ三尺計なるに本末に歌あり短册八枚を弦に付たりとぞ按るに謠曲に歌占あり恐らくは是に依て作りたるものにやあらむ谷川淺齊はその國人にて歌占の事にいさゝかもこれをいはず但し短册の占もありとはこのことにや疑はし一種に綺双六に似たる歌占ありその製は小さき木札六枚各片面ばかりに天地人の文字を一字ヅヽ書たり六枚ある故同じ文字の札二枚ツヽ有りそのしかたは双六のごとし吉凶をみるのみなれば勝負のことはなしかの弓に付たる歌みなこの内にありこは上にいへる貞徳說の歌占といひしものにはあらぬにや古の歌占といふは【古事談】忠心僧都命峯山に正しき巫女有と聞て只一人合向給ひて心中の所願う

うらやさん算おき

○卜者をうらやさんといふはうらへさんか占はすをうらへといふ活用の語なれ共體語とすさんは算なるべし【卅二番職人歌合】に算おき有(【鶴岡職人歌合】にも有)其歌「こしほどのかり屋の内に身をおけるさん所のもの〻恨めしの世や判云算おきの述懐輿ほどのかりやの内さこそとおしはかられ侍りがうなの貝のかたつふりの家もみなおのが身にあはせては不足なきにや五尺の身三尺のかりやにてひねもすといふ人を待居たる一生涯の果報をも自身にかんがへぬらんさん所といひさん所のもの〻とつゞけぬるいとよくいひくさりぬるにやと有その繪にかけるけに輿ばかりのかり屋のうちに文臺居て算お

賣卜者の体

ける人をかきけり今街に出たる賣卜の古きさまなり【人倫訓蒙圖彙】に俗語に手占見通しなど〻て信仰するなり伊勢近江讃岐などに此ながれ有て諸國に出る中にもかゐゆきなるは道のかたはら門のすみにうづくまりゐて下輩の男女を相するなり判の占五音調子の占品々あるとかや其繪のさまは樹の下に席じきて法師の黑衣に輪袈裟をかけ數珠と扇持て居旁にとふ人どもをかきたり筮を用ひざりしと見えて其かたをか〻ず貞享元祿ごろ此さまにて後は有髮も出きしが修驗者の體なり貞享十五年【榮花咄】に山伏姿と成て月待日待御一代の吉事御判はんじけるなど見えたりされど大かた法師の姿なりしは寶曆ごろ迄も其定なり俗形の賣卜者はいと近と見えたり西土にはこれを課命とも起課ともいへり【鴛鴦影】

起課

(十五回)只見一個起課先生手中搖着課筒云々腰間掛着一箇小々招牌上面寫道李半仙課情鬼谷相善麻衣(看板を腰につけて諸方をありきて人に應ずるなり)

ありまさ

○ありまさ【昆陽漫錄】云、曆林問答板本には作者在方の序ありて應永甲午孟春日正儀大夫司曆加茂在方書とあり在方占の名人ゆゑ今も占者をありまさといふとかやと云へり思ふにありは明の義にて世にあり〳〵といふ是なりまさは正しくをいへり故事にも及ぶべからず

疊ざん

○た〻み算【正章獨吟千句】しまぬ座ははやくいなふかいぬまいか疊のうらをみるは物かけ【佐夜中山

櫛女三人向三辻問之又午歳女午日問之今按三度誦此歌作堺散米鳴櫛齒三度後境内來人答爲内人言語聞推吉凶、また【萬葉】十二月夜好門爾出立足占爲而云々、この足占は先歩の數を定め置て歩の奇偶もて合不合を知ること今にするに異ならずといへり

足占

【圓光大師傳】（四十七）西山の善惠房證空加賀權守親季の子なり久我內府の猶子として生年十四歳の時元服せしめんとするに童子更にうけがはず父母あやしみて一條ほり川の橋占をとひける云々橋にてとふ故にはし占と云のみにて辻占と同じ法なり

橋占

○今俗に人のくちうらを問といふは口占なり【俳諧懷子】（五）吹風の口占でしれ今朝の秋泉州堺に市の町湯屋の町といふ處の辻を占の辻といふ俗傳に安倍清明この所に占の書を埋たりといへり今辻占に用る誦歌は【晃道通鑑】につげの櫛を持て道祖神を念じ四辻に出て辻やつぢ四つ辻がうらの市四辻うら正しかれ辻うらの神とあるは是なり貞佐が發句に「辻や辻櫛にかけたるはとゝぎす

口占

【發璞偶談】（明曆元慶）王建鏡聽詞謂懷鏡於通衢間聽往來之言以占休咎近世懷杓以聽亦猶是也又有無所懷直以耳聽之者謂之響卜蓋以有心聽無心耳往々皆驗といひ【正字通】鏡聽俗有禱竈神隨釜中杓所指之方懷鏡出門竊聽人語辭卜吉凶俗曰響卜南楚曰街卜この說詳なり杓を懷にせるは略せるか誤れるか【雜字通考】鬼谷先生響卜といへりこゝの辻占といとよく似たる事なり

鏡聽
響卜
街卜

○石卜【萬葉】（三）夕衢占問石卜以而吾屋戸爾これは石を踏で占ふ事なり【景行紀】柏峽大野にやどり給ふその野の石を柏葉なして舉むとの給ひて蹶給ふ時柏のごとく大虛に上りぬ故その名を踏石といふよしありといへり但し後人石を踏で占ふにはあらず石を舉てするわざなりその事今に傳ふ【遠碧抄】に幸神の祠に丸石を置て石の輕重をもて事の吉凶を卜する事をいへる即是なり【金葉集】寄石戀（前齋院六條）あふことをとふ石神のつれなさにわが心のみうごきぬる哉今も石神といふもの諸方にあり坂東の國には殊に多し

石卜

といふも籤はいづれも同義なるに物を貫きなどするに用るをば清てとなへぬるは古へより然ありしなるべし今用る觀音籤はいつのほどよりありしものにか【谷響集】（九）釋門正統名菩薩籤云々叙其事者謂是菩薩化身所撰理或然云々、また紙閹は【知覺禪師傳】云二紙閹を作りて二願を決することあり漢土には觀音大士と關壯繆を殊に崇め祀り香火埒しく家ごとに祝はざる者なしそを祀れる祠には必籤あり【鴛鴦影】（第十一回）一座古寺門前一尊伽藍就是大漢關帝像柳友梅拜了兩拜云々仍舊禱告了就將籤筒搖上幾搖不一時求上一籤只見依是棲雲庵的籤訣（是はさきに觀音籤を取し事ありて今又同じ籤をとりたるを云ふなりこれ關帝廟に觀音籤をも用ひし事あるなり）

關帝籤

○關帝籤といふがあり其語東坡の作といふは非なりそを見しに錢をもて占ふなり【蓉碎錄】（陣繼儒）に今之卜者以錢蓋唐時已用之賈公彥【儀禮疏】云以三少爲重錢九也三多爲交錢交錢六也兩多一少爲單錢單錢七也兩少一多爲折錢折錢八也といへり（【陔餘叢考】（三十）以錢代蓍條あり開見べし）

盃珓

○また珓と云ものあり校とも筊とも又筶ともいへりおなじ物なり【演繁露】後世問卜於神有器名盃珓者以兩蚌殼投空擲地觀其俯仰以斷休咎自有此制後人不專用蛤殼矣或以竹或以木云々云り觀音籤をこゝに用るに歌有ものあるにや貞德が【獨吟百韻】歌にはよらぬ人の貧福觀音の占や當座の用ならん（自注）に、くわんおんの占とて歌にてするなりとあるは戲事のやうなれば今歌占とてあるもの是にや

辻占

○【萬葉集】（四）月夜爾波門爾出立夕占問足卜乎會爲之行乎欲焉【同集】（十一）玉鉾路往占占相妹逢我謂これ辻占なり占をケと訓るは卦より移れるなるべしとぞ又これを黃楊小櫛ともいふは【續拾遺集】物名に「しもつけのはなさし櫛もつけのはなくて吾妹子がゆふけの占をとひぞわづらふ黃楊を告の義にとるなり（その法衢に出て黃楊櫛を持て道祖神を念じ見えくる人の語をもて吉凶を定むといへり

○【拾芥抄】に問夕食歌「ふけとさやゆふけの神に物とへば道行人ようらまさにせよ兒女子云持黃楊

人歸婦具白其事擧家驚惋未幾其家疾疫死亡略盡また吳震方【嶺南雜記】（上卷）潮州有蛇神其像冠冕南面貸曰遊天大帝龕中皆蛇也欲見廟祝必致辭而後出盤旋鼎俎間或倒懸梁椽上或以竹竿承之蜿蜒糾結不怖人亦不螫人長三尺許蒼翠可愛聞此白梢州而來長年三老尤敬之凡祀神者蛇常游憩其家甚有問神借貸者（今三峰の神に祈りて犬を借ことに似たり

すいかつら

○【居龍上隨筆】にいづこにも限らずすいかつらといふもの有となむその祀りやう人のしらざる密なる所に穴を掘て蛇をあまた入置き神に祟めて遣ふ法大かた犬神にひとしすいかつら付られたる人は煞甚しく身心惱亂するを病家それと知ぬれば寶を送り遣せば病愈ると聞りと有は誤なりいづくにもあるにあらず【大和本草】に中國の小クチナハとて安藝に蛇神あり又タウベウといふ人家によりて蛇神をつかふ者あり其家に小蛇多く集り居て他人につきて災をなす事四國の犬神備前兒島の狐の如しもろこしの猫兒の類なりといへり

鬮籤

鬮　籤　關帝籤　盃珓　辻占　口占　鏡聽　石占　うらやさん　算おき　賣卜者の體　あり
まさ　墨さん　灰占　虎卜　投さん　歌占　夢とき　一富士二鷹　貧乏鬮　お祓くじ　九鬮
玄女課　無盡鬮の呪　五百羅漢の顏にて占事

鬮をくじといふは籤とおなじかるべし字書に鬮手取也とあり故に猜枚を藏鬮といへり【下學集】に鬮不見而拈物也【續日本紀】天平二年正月云々令探短籍書以仁義禮智信五字隨其字而賜物これ鬮取なり【南朝紀傳】正長元年正月畠山滿家石淸水に詣で御鬮を取て將家の家督を定めし事あり【康富記】永享二年八月十五日云々中山相公被參石淸水被取御鬮云々【後奈良院御記】天文四年二月十五日湯殿神物女中各被進鬮例年入夜名孔子取也（孔子は鬮の假字なり【蓍聞集】などにもかく書り）【和名抄】（祭祀具）に玉籤（太萬久之）また射騎具に籤（太介乃久之）と出たり字書に七尖切貫也以卜者又才先切細削竹也

金蠶

○彼五通の祟りといへる中に毒殺などのこともみゆるは金蠶をも混じたるにやいとあやしこゝに【日本紀】に【常世神】とて虫を祭り富を致すといひて衆民を惑はせし事あり是西土金蠶の事を聞傳ていひ出しものと覺し金蠶は後世の名にて漢の時の巫蠱これなるべし

箕仙

○漢土には箕仙といふ物を召降して事の吉凶を問ふこともあり是を扶鸞といふ【五雜俎】に箕仙之卜不知起於何時自唐宋以來即有紫姑之說矣今以召箕仙者里巫俗師即士人亦或能之大率其初皆出於游戲幻惑以欺俗人而行之既久似亦有物憑焉蓋游鬼因而附之云々（紫姑神或は子姑ともあり厠の神なり）【異苑】には紫女といへり其名【捜神記】に狐名曰阿紫とありこれらに本づける歟）【國初新志】洪若皐【乩仙記】に乩或作卟與稽同疑也後人以僊降爲批乩名之曰乩仙亦謂箕仙又謂之扶鸞云々あり乩は器の名なり（箕と乩と音通なるべし）【直道錄】云世人取桃木作乩以降仙云々以乩振几三下作字云々扶鸞は【秋坪新語】（十二）善扶關帝鸞有扣必應云々聞紙沙々起落疾於風雨これ同物異名にこそ關帝は其名を託するなり扶鸞は鸞を迎る意と聞ゆ

犬神　蛇神

○犬神蛇神【醍醐隨筆】云四國あたりに犬神といふ事あり犬神をもちたる人たれにてもにくしとおもへば件の犬神忽つきて身心惱亂して病をうけもしは死するといふいかなる道理と問へば先其國の人犬神といふことを常に聞なれておそろしく思ふ故外感風邪山嵐瘴氣の病の熱甚だしく身心くるしき時は例の犬神よと病人も病家も思ふ故に犬神の事のみ口ばしりのゝしるをさればこそとさはぎ物して山ぶしやうの者數々むかへて祈と聞ふればあらぬことのみいひこしらへてさせることなき病者も死する人多しと彼國にすみけるくすしのかたりけるはむべも有なむとおもふ中國西國のあたりに蛇神をもちて人につけなやますとやらむ又犬神とおなじかるべし【捜神記】（十一）滎陽郡有一家姓廖累世爲蠱以此致富後取新婦不以此語之遇家人咸出唯此婦守舍忽見屋中有大缸婦試發之見有大蛇婦乃作湯灌殺之及家

郎といへるもの芝居をはり牛馬を呑でみせけるとなむ其頃の草子に多く出たり（此類享保ころ迄は公然と人にみせたりとぞ【居行子外篇】に安永初二條の川端に生田中務といふ妖術の先生有て門弟も多かりしが後刑に行はるといへり）

牛馬を呑む

婆々狐

○新井白石の物語りむかし婆々狐と申候て老婆色々の不思議のことを仕候手巾を握り候てとれと聲をかけ候へば其儘手巾なくなり候時その握り候者の脉所を何か通り申やうにひく〳〵と仕候大久保彦左衛門承りて我等は中々婆々にとられ申まじくとて婆々に取て見候へと申處得取申さず候と辭退致候故外の御番衆など彦左衛門一人いかなれば取られ申さゞると尋候へばあのやうなる馬鹿者は取られ不申是は各々なぐさみに成され候アノ男は右手拭取申時分我腕と共に打落す覺悟に候なりといへり又古人もの語云美濃にばゝ狐と云ものあり名譽に人をだます人の目に見えず或は扇に乘り又は手に乘りて切らんとすれば其儘飛去る云々内藤四郎左衛門我手に乘たらば手ともに切るべし左やうの人には乘らぬと云り又【古老雜話】云三河にばゝ狐と云あり云々阿部四郎五郎いふやう己れが手へのれと云聲はかりして云やうそちが手へ乘たらば手共に切んと思ふ也其やうな者の手へは乘ずと云り此狐は姥につきたるによりばゝ狐と云

狐の書畫

○狐狸のばける古跡人の知たるは泉州堺の少林寺釣狐寺上野國館林茂林寺などなりこれは茶釜も筆跡も今にあれど伯藏主は只狂言に傳ふるのみにて其故事おぼつかなし狐狸の書畫をかけること多く聞ゆ其角が【茶摘集】伊勢國にて狐の人につきて云出たる「仁あれば春もわかやぐ木の目哉此狐つき日比の田夫にてぞ有ける狐いにて後は無事なりしとなり其筆跡正しう狐にて侍れば歌にあやしくたへなるためしにもと書付侍る元祿元年七月のことにやと有り（此たぐひ又往々あり予も其書畫どもを見しが狐は書にて狸は畫をかけるが多し）

有しむくひにて天狗の男を女となし女を男のやうになし御心にたえずなげかせつるなり
○【蓴鄕贅筆】康熙二十三年十月江撫湯公斌と云人五通五顯劉猛將五方賢聖等名号荒誕不經の淫祠どもを悉く毀ち妖像土偶は淵に投す木偶は火に焚すつ吳郡數百年の悪俗を一朝に革めぬ湯公が此擧眞に狄公に愧ずといへり【述異記】康熙丙寅江蘇巡撫湯公奏、除五聖淫祠凡祠宇及人家所奉者悉行檄毀妖禍遂絶

○髪きり【搜神記】（十八）老狐髡人髻とあり【宋書】竟陵王誕傳中夜閑座有赤光照室見者莫不怪愕左右侍直云々睡既覺已失髻矣如此者數十人【秋坪新語】に甲午夏忽傳有妖翦人辮髪婦女割其衣底襟一時驚喧官捕無獲久之惝惘而妖亦絶【寶倉】に寛永十四年の頃かとよ髪切虫といへる妖孽ありといひふらし誰こそ一定きられたりといへる人はあらねどかしこ後達こゝの腰もと下女迄もおそれあへり云々其事日をかさね月をわたりていひやまざりつるにいづくともなく咒ひ事に一異國より悪魔の風の吹くるにそこ吹もどせいせの神風といへる和歌をうつし來りて門戸にはり簾にまとへり然れども猶いひ止ざりけるに又いづくともなく髪きり虫は剃刀の牙はさみの手足煎かはらの下にかくれりといひふらせりかくてぞ此もの打破すてよといへるほどこそあれ町々家々門前に抛ち道路にはふらかして行かふ人も蹴る足をそばだつるに及べりと見えたりこの事を西鶴が【諸國咄】に諸國の女の髪を切り家々のほうろくを破せ萬民を煩はせたる大和の源九郎きつねが爲には姉にて年久しく播磨の姫路にすみなれて云々又狐の四天王をいふ處おさかべどのゝ四天王ひとり武者などいへり（姫路におさかべ赤手拭といへる諺もふるきことゝ見えたり）明和八年江戸中髪きりはやる其きられたる跡粘りていと臭きよしいへり修驗者共多く吟味ありて獄に入る其内に髪きりざた止たり
○そのかみ放下師などもかやうのものをつかへるにやいとあやしきわざをしたり元祿の頃總屋の長次

飯綱

○【歌林雜話集】に玖山公の物語を記し〻處或時仰られしは何事なりとも思ひたつほどなれば中にして置ず其極めに至らん事を肝要とせしがわれ飯綱の法を行ひしに成就したりと覺えしはいづくにても寐たる所の上に夜半時分に鳶來りて鳴又ありかせ給ふさきには辻風おこりしなりと有り又其頃果心などは殊に怪しき業をなして世に聞えたり【醍醐隨筆】に松永久秀果心が術を試みて怖しく堪かねし事をいひて此居士が術は奈良邊の老人まのあたり見たる者山人が童稚の時語りぬとあり【貞德獨吟百韵】月かげに長き刀のしらはどり夜やいつなの法のおこなひ（自注にい綱の法兵者行ふよしといへり）【和訓栞】にいつなは飯綱と書く或云稻荷の社には飯縄といふ物をみづ垣にはへるより名くといへり又奧州仙臺飯綱山に祀るをもて飯綱三郎と呼といへりこの三郎この木下三郎によりたる名か【江南木客傳】（宋洪邁）大江以南地多山而俗機鬼其神怪甚詭異多依岩石樹木爲叢祠村々有之二浙江東曰五通江西閩中

五通

曰木下三郎又曰木客一足者曰獨脚五通名雖不同其實則一考之傳記所謂木石之怪夔罔兩及山魈是也今注【東京賦】云、野中游光兄弟八人常在人間作怪害皆是物云變幻妖惑大抵與北方狐魅相似或能使人作富故小人好迎致以祈無妄福若微忤其意則又移奪而之他この下に十餘事を載たり多くは美男子となりて婦人に通ずるよしを記せり又其內に少拂之即擲沙礫などいへるは江戶近きるなか池袋村の狐怪に似たり但し江南無野狐と【北夢瑣言】等にもいひたるは尋常の狐をいふなり木石の怪の祟りをするものなべて五通にもあらさるべし京師鳴瀧妙光寺に十境あり其內に五通廟と云があり鎭守稻荷をいふ是は開山法燈國師宋に行て持來せしにもあるべからず元より其地にありし稻荷をかく名づけしなんめれどよしなき名なるべし上に引る【東京賦】注游光云々【搜神記】に木精爲游光と有是なりこゝにこだまといふ【源氏】（手習）法師が前に、鬼か神かきつねかこだまか、かばかり天の下のけんさのおはしますにはえ

こだま

かくれ來らじ名のり給へ〳〵（こだまは天狗といふもの是なり）【取かへばや】にさるべきたかひめの

ちしろ佛

しらといふ是なり【見聞集】(八)に壽庵といふはやり醫師人の脉をとりて來往のことをいふに多くそのしるし有けるといふ條或人評して云ふ世に色々の術治ありてげほうかしらうしろ佛などゝいふ物を持ぬれば奇特をいふとかや云々いへるによれば犁春が物語の異物はげほうがしらうしろ佛なるべし古への神降とは日を同していひがたし或人云【職人盡】にちしやといへるもの有り是今のいちこの類なるべしといへるはいかゞあらん

○【蚓庵瑣語】余兒時郡痒明倫堂畝、郡主課犖直之、計費不貲、時有金姓者金華人、罪配西水驛、自陳能神犖、不假人力、費止三金、如數給之金、以銀市紙筆硃砂錫鏹米肉、每紦貼硃砂符一道、設祭祀焚錫[illegible]鳴鑼數次、其堂立正、後濠股塔偏、亦用前法犖直之、僑居濠股里與予北隔數家云々、即以是術與人犖旁爲業、老死無嗣、術亦不傳、

狐つかひ

○狐つかひ狐の怪をなすこと匡房卿【狐媚記】康和三年、洛陽大有狐媚之妖、其異非一、初於朱雀門前儲羞饌、禮以鳥通爲飯、以牛骨爲菜、次設於式部省、後及公卿士門前、世謂之狐大饗また【康富記】應永廿七年九月十日丙子、今朝室町殿醫師高天被禁獄、父子弟等三人也、云々、此間仕狐之沙汰風聞然而昨日於御臺御方、仰驗者被加持之處、二疋自御所逃出、則被縛件狐之後、被打殺、依此事高天カ狐ヲ奉詛付之條露顯云々、同十月九日甲辰、後聞囚人高天、昨日被流讃岐國、俊經朝臣同國被流之、云々、是等狐仕之輩也(是其かみ荼吉尼の法なるべし)【文德實錄】に席田郡有妖巫其靈轉行噉心一種滋蔓民被毒害(噉心とは荼吉尼有二種實類と漫荼羅となり)實類荼吉尼、名噉食人心、雖業通自在祭者得福、名爲邪法、漫荼羅中荼吉尼者、如來應迹、故噉盡心垢、住大涅槃、所以名乘如天龍八部、皆此義也

荼吉尼天

(【谷響集】にみゆ荼吉尼は噉盡の義歟)これ荼吉尼天の邪法なるべし(【著聞集】に知足院殿だきにの法を祈らせられ狐の牛尾を感得せられたる事見えたり

縣巫女　いちこ

えたり今口よせする者は縣巫女にて神家をはなれたるものなりとぞこれをいちこと云ふいちこは賤き名にはあらず神前に神樂をするをいちこと稱すいつきの義にやされど【和名抄】などにも覡をど迩類におさめたるはもとより賤きものとしらる【東鑑】（二）一古娘依侶參上とあり又【義殘後覺】に太閤伏見御功の宮にて市は當社の神主なるかさん候と申（下文にみめもよき女房とあり）然らば縣神子などの名には潛上のことならん元隣が【誰身のうへ】（四）御子やらんいふものを呼よせて云々みるよりはやそゞかみもたつ計なるはしたなき女來りてこと〴〵しく弓の絃うちそゝのかしかけまくもかたじけなき神佛のおほん名のみ多くかたことまじにいひちらし其亡者のことづてとてさま〴〵のうそがましきことゞもをまことしくもあはれげにいひ聞ゆれば云々二へ【龍宮船】といふ草子に予が隣家に毎年相州より巫女來りけるが來往の事を語るにあたらずといふ事なし或時服紗包を忘れ置たり開きてみるに二寸の許厨子に一寸五分程の佛像ありて何佛とも見分かたく外に猫の頭とも云べき干かたまりし物一ッ有ほどなくかの巫女大汗になりて走り來り服紗包を尋ける故即出し遣し扨是は何佛なるぞとたづねければ是は我家の法術秘密の事なれども今日の報恩にあら〳〵語り申べし是は今時の如く太平の代にはいたしがたき事なり此尊像も我まで六代持來れり此法を行はんと思ふ人々幾人にてもいひ合せ此法に用ゐる異相の人を常々見立置生涯の時より約束をいたし其人終らんとする前に首を切落し往來しげき土中に埋み置事十二月にて取出し髑髏に付たる土を取いひ合せたる人數ほど此像をこしらへ骨はよく〳〵弔ひ申事なり此像はかの異相の神靈にて是を懷中すればいかやうの事にても知れずといふ事なしといふ今一ッの獸の頭のことゝもたづねけるが是は語りにくき譯あるにや大切の事なりとばかりいひけるよしこれなん世上にいふ外法つかひといふものなるべきかと有り【增鏡】に太政大臣藤原公相

外法頭

頭大にして異なりければ葬りし時外法行ものの其塚を發き首を斬てとれりとみゆ今も頭大なるを外法が

寄絃

く寄絃は今もいちこのするわざ口寄はかの寄人を立てそれが口ばしろまことそらごとを聞なるべしこれ今さゝはたきなどいふ類なり今は寄絃を口よせといふは混じたり非調子の琴音云々こは又神より板などの事をいふにや【萬葉】(九)柿本人麿獻弓削皇子歌、神南備神依板爾爲杉乃念母不過戀之茂爾(すぎずといふまでは其言の序なり) 淡齋云神南備とあれば三輪の神也其よりましに杉の板を立るなりとぞ内裏にて今も琴の板てふ物是なり神を降し奉りて神の敎を承る事なり【儀式帳】にも造宮使の造り奉るものにて昔より板といへり本居氏云琴の板とて杉の板を敲きて請招する事あり今も伊勢の祭禮には此ことあり琴頭に神の御影の降り給ふなりといへり【基俊集】にはふりこが神より板にひくまきのくれゆくからにしげき戀哉ともよめり【神功紀】に琴頭尾に千繒高繒を置て請給ふに神降りませし事など思ふべしと云り此らの事を學びて巫女の琴鼓調子もあらず拍子もなきなるべし

神より板

巫女

○【建保職人歌合】に巫女盲目と番ひてあり戀歌「君と我口をよせてぞねまほしきつゞみもはらも打たゝきつゝ(其畫は老婆の胸に守りかけたるが弓をはじき口寄るさまなり)【甘露寺の職人盡】なるはかんなぎ禰宜とつかひ出せりこは鈴を振て舞さまなり西土にて男曰巫女曰覡と見えたり【謠曲葵上】より人は今ぞよりくる長濱のあしげの駒に手綱ゆりかけ云々これは口寄るわざの詞と見えて【鴉鷺合戰物語】みこを請じてあづさにかくかのかんなぎ梅ぞめの小袖かいとりざしきになをり弓うちたゝいて天しやう／＼地しやう／＼云々只今よせきたる所の亡者のよみぢのかたりまさしくきかせ給へより人は今ぞよりくる長はまやあしげのこまにたづなゆりかけありがたのたゞ今のしやうようやあなありがたの請用やな世の中はとてもかくてもありぬべし云々あり【謠曲拾葉抄】云寄人は寄神共降童ともいふ或は生靈死靈を祈る時彼靈のかはりに童子をそなへ置て祈つけ降參さする事なり或は靈を人形に作りわらにて馬などこしらへかの人形をのせて禱り終りて後川に流す事も有この歌もこれらの事をよめるとみ

とありこゝの法よりもこゝのは手輕し【筐絨輪】吉凶いづれ洩さぬが秘事鳴釜の口に二布はさるぐつわ

壺口禁忌

○壺口禁忌【天香樓偶得】今人凡酒壺茶壺之口禁忌向人云、向之有口舌、此說蓋所有本、禮記小儀云尊壺者面其鼻、解者曰、設尊設壺皆面其鼻以向君見惠自君出也、夫鼻者柄也口與柄前後相對、旣以柄之所向主、受惠者爲卑、故不以口向人敬客之意耳、後世相沿而昧其旨、遂爲俗忌并不以口向己失之矣、今こゝの俗に茶瓶などの口を北に向ざる事ありこれは思ふに北枕を忌の類にてもと藥を煎ずる器よりいひ始るなるべし

口寄

口寄　より人　寄絃　神より板　いちこ（外法頭、うしろ佛、狐つかひ、荼吉尼天、飯綱、五通、こたま、髮きり、狐の書讀、金蠶、箕仙、犬神　蛇神）

ものゝけ

【榮花物語】（後悔大將）かみのまことそらごとなも聞むとてさこんのめのとおくちよせにいでたつ（中略）このかうなきたゝなきになきて云々（かうなきはかんなぎなり）【紫式部日記】中宮御産條、御ものゝけうつりたる人々御びやうぶひとよろひをひきつほねく口には木丁をたてつゞけんざあつかりくのゝしりゐたり宗井氏が標注に御物怪の事或は御産の時或は御重病の時寄物怪問之義也立物如只女房立之號物付是也とは物といふを降童いことゝせりさにはあらず物怪といふこと注をまたずして聞かなりそのより人に物怪つきぬれば是物怪なり【平家物語】（ゆるし文の事）こはき御物の氣とも

より人

あまたとり入奉る神子明王のばくにかけてれいあらはれたり云々【清少納言】にものゝけにいたうなやむ人にやうつすべき人とておほきやかなるわらはの云々うつすべき人は神子なり（【紫式部日記】御ものゝけうつりたると何をきりて見べきにや）【榮花】にいへるおくちよせは今も口を寄るわざに水を手向る者あり是なり【新猿樂記】に四御許者覡女也卜占神遊寄絃口寄之上手也舞袖飄々如仙人遊歌聲和雅如類鳥鳴非調子琴音而人神地祇垂影向無拍子鼓舞而[一]野干必傾耳おもふに神遊は歌舞なるべ

留別志の說を駁したる內に【南留別志】云源氏物語をみれば病に藥用る事は少なくて大形は祈禱をのみしたるやうなり今も田舍のものはかくの如し鬼を尙べる風俗の弊なるべしと有り【延喜式】【政事要略】などをみるに昔とても病には必醫藥をもはらにせし事なり源氏物語をふとうちよみて藥を用る事なしとはいひ難し【葵卷】に御ゆまゐれとさへあつかひ聞え給ふを【柏木】の卷に御ゆなともきこしめさす身の心うき事を云々ある御ゆは藥なりこれ卷々に多かりそのかみは驗者のいのりにて病の癒し事なれば呪を尙べる弊風俗とも云がたし畢竟は醫といふもまじなひなり毉といふ字の巫に從へるはまじなひなる故なり丹波康世の【毉鍼方】をみるに多く【千金方】によりて方ごとに呪文有【令】も典藥寮に呪禁博士呪禁生ありてまじなひて病を療す此の呪禁は【唐書百官志】にも有り皇國のみ鬼を尙ぶ弊風俗なるにはあらずなどいへりこれらは【南留別志】の說難あるにもあらずそは藥を用る事なしとはいはざるをかやうに論ずるはいかゞ又御湯云々あるを藥とのみも定めがたし素湯のことをいひし處もあるべし又風などに湯に入る事あり【榮花】（玉の村菊）御風などにやとて御ゆゝてさせ給ふ又（もとの雫）御風にやとてゆてさせ給てのぼらせ給ふまゝにおくちはなよりちあへてきえいり給ぬなどみえたり又そのかみは祈にて病いゆと極めたるもおかし

釜鳴

○釜の鳴るを【拾芥抄】に釜鳴怪とありて子日より亥日まで其鳴る日によりて兆かはれり吉は少く大かた凶事なり【狂言咄】に鍛冶國貝は小刀を打て名を得しものなり十二月の末に餅つかんとて甑を立蒸けるに俄に釜鳴出て侍りければ國貝かくぞよみける「我釜の聲をはかりになることはゝがねを人にしらせんとなりこれより世に名高く聞えしとかや商人にも釜鳴てより家の榮えなどせしこともあるにや往々釜鳴屋と云家名ありされどもとろしからぬ兆にや鳴時は婦人の褌のいまだ肌にふれさるを上に覆へば鳴止といへりこれは【博聞類纂】雜法門に釜鳴不得驚呼須一男子作婦人拜即止或婦人作男子拜亦可

下曰く云々怕賊星照亦不置洗濯條水爲夜游神飲馬也といへることありこれ不角の點の付合に「月かけも紙帳の内へよせつけず手洗も一味すりがまじなひ

猫の逃たる呪

○【似我蜂物語】猫の餘所へ逃ていぬ時にそのにげたる日を思ひ出し暦の其日を墨にて消ぬればやがてかへる物なり云々いへり今ふる暦を鼬の出る道に敷おけば鼬出ずといふは件の呪を誤たる歟また何の故かよしもなき一時の流言行はれて後迄も傳ふることも有ぬべし【下手談義】ちかき頃も何やらの呪とて頭上に土器をのせ其中へ灸をすゆるか能と云ふらし誑喰そらして人に異見もいひさうなわろが白晝に丑の時參りのやうにつふりから立のぼる煙の跡かたなきそらことを信じてこゝろ空虚となり自己が神をくらますもの尠なからず云々いへり是は頭痛の呪とか今は土器にては事ゆかざるにや擂盆をかふりて灸をする其始め僅に元文の程なるべし世にしれ者有て無根のことをいひ出しその事の流行か否を勝負に定めて興ずるなども有とか又は神佛の奇特をかことにして怪き事をいひふらし愚人を惑はすこと昔より多し其中には度々おなじたばかりにて欺るゝ人の心は懲しめがたき物にや【入子枕】（正徳元年刻）其頃臼の目切といふ事はやり國中をさわがしむ人の申は弘法大師あはれみをたれ其年の惡病を救ひ給ふ印と云々酢香物のおもしに捨置しも今朝みれば白妙の石の粉ふりまさ〳〵と目切たれば町内立より三寸よ鰹ぶしよといはひ限りなし昔もかやうの事ありてみな〳〵古狸のしわざなり云々其後も同じ事有しにや明和二年前句付（不思議なりけり〳〵）能かむといふ石臼を拜みに來

臼の目切

鰹によはざる方

○【安齋隨筆】に享保の頃辻寶の奇妙の秘傳書に鰹によはざる方あたらしき魚をえらみて喰べし喰さるもよし外も大かた此類なりこの方尤よし實に奇妙といふべしと載たり

藥

○いにしへ疾病有など藥を用ることは次にしてむねと祈禱することゝ見ゆそはこゝのみにもあらぬにや佛袾宏が【古道錄】云内經以信巫不信醫列於五不治而杭人倘巫鄉村爲尤其云々いへり石原正明南

祈禱

きのことてつき侍るなり

門戸に蟹殼又蒜を掛くる事

○江戸町屋に門戸の上に蟹の殼を掛け又蒜をつるし置くことありこれ上總の俗の轉れるなり【房總志料】に上總穗田吉濱の漁家門戸に奇狀の蟹殼を掛出俗云ふ惡鬼を避るまじなひなり又夷隅の俗上巳に家々蒜を檐に挿みぬること端午のあやめのやうなり蒜なければ代るに葱を用ゆ由來詳ならず【源氏物語】にこくねちのさうやくと云事を轉ぜるにやといへり【夢溪筆談】に關中には蟹なし秦州の人蟹の殼を持たり土人其形を怖れて恠しき物とし瘧をやむものあれば此を借り用て門戸の上に掛ればやまひ差といへり但人のこれを識らざるのみならず鬼も亦識らざるにやといへり上總の漁家などは常に有るものなれば鬼も自ら怪しみ怖るゝことなかるべし

時ならぬ正月

○田舍にてはいつにても農業を休みてあそぶを正月といふこれ年の初め遊び居る事にたとへて云しにあらず其起りは何ぞの呪にてせし事と見えたり寛文七年未七月六日町觸今度在々所々にて松飾りを仕り正月を祝ひ申由にて江戸近邊の町屋迄其通り此月は祝ひ申由相聞候就夫御代官所へも無用可仕旨被仰渡候間江戸町中にても右之通正月を祝ひ申事堅無用に可仕候云々始めはかやうに松かざり何くれと正月の如くせし事なり（近頃もこれに似たる事あり節料理し福茶などするありき年を經ては又々言出すとみゆ）

こま犬の足を括る

○狛犬の足を括る古き咒ありもと盜人に付たる呪なるべきを後には他事にも移りたり【正章獨吟千句】失物はうする時そと思ひとり括るもほとく狛犬の足【貞德文集】に御秘藏の鷄失候由當社之胡魔狗之脚御括候云々【世話盡】（明暦二年刻）戀部詞よせの内駒犬の足くゝると出たり他の呪にもかゝるたぐひ多かるべし

盜賊の呪に手洗を伏す

○手洗（たらひ）を夜家の中にふせ置ば盜賊來らずと云こと何よりいへるか【帝京景物略】不以小兒女衣置星月

（白）在之御蚊帳は御出生之御所樣御蚊屋也御あつらへの御蚊屋御還御之時分遜參の間私に給はる御蚊屋借りめさるゝと云々頓而私へ被下處也と有（この文の心は御產所の具足はみなその宿所に賜ふなり若君還御の時御あつらへの蚊屋間にあはず其故御產所の蚊屋をかり用ひられやがて返さるゝとなり）二三月の頃いまだ蚊の出ぬ時なれど自然（何虫によらず有 まじきならねば常に小兒には是を設るなりさらば鶴龜を染たるがもとにて略しては（この紋小兒の具に限れるにはあらじ）染さる蚊屋に聊その形を紙に書て付たるが鶴やうのかりそめなるより雁がねとまがひしならむ世人九月になれば必ず厂がねを付ると心得るは非なるべし其形を染たる蚊幮は九月より用るにはあらじ但し紋そめさる蚊やに其月に至りてこれを付ることは九月は齋月にて物忌する時なればさはいひ習へるなめりまた【風俗文選】許六が四季辭に寶引をせぬ人は六月蚊にくはるゝとて云々風來が【志道軒傳】親々も寶引せぬは蚊がくふとやらばか律義におぼえこむにはあらね共人々の好む處より埒もなき理を付て云々按るに寶引は福引なり蝠は福と音通にて西土には多くことぶく事に用ふこは【桂林漫錄】の說の如く蝠は蚊を喰ふものなれば此諺はいひ出けんさはれ埒もなき理屈といひし上途ならむもしらずかし

蚊屋

()蚊屋の名は【太神宮儀式帳延喜式】などには見えたれどむかしは下ざまには用ひざりしなるべし【春日驗記】に白き蚊帳をかけたるかた見えたりもと蚊やは今の如くなる物に非ず竹棹を四角にたれそれにさげるなり故に蚊やの耳は布每に付たるなり吉日をゑらびてつりそめ又吉日に收る晝の間は不用なれば片端の竹を一方によせて帳を一處におつめて裾をとりて片端の竹に打かけ置なり

こきのこ

○【世諺問答】こきのこのこと、これはをさなきものゝ蚊にくはれぬまじなひごとなり秋のはじめに蜻蛉と云ふ虫出きては蚊をとりくふものなりこきのこといふは木蓮子杯をとんぼうがしらにしてはねを付たりこれを板にてつきあぐればおつる時とんぼうがへりのやうなりさて蚊をおそれしめんためにこ

不正の邪氣を追なり今も尾張熱田の民家にみなこの畫像を戸に押す一説にこは素盞嗚尊なりといへるは後のさかしらなるべし鍾馗の圖雪舟が繪に多くみゆれば其頃より專ら用ひし事としらる【笑林】に詩あり結句に歸來屋裏坐、打殺又何妨、自注歸入門時忽見門上貼鍾馗捉小鬼故云打殺又何妨也

照々法師

○照々ほうし不角が點の句に「てる／＼法師月に目が明（願のかなひぬれば墨にて目睛を書なり）」紀逸が點の句に「八せんにてる／＼法師はがきかず漢土には是を掃晴娘といふ【蜻蛉日記】今日かゝる雨にもさはらでをなし所なる人ものへまうでつさはる事もなきにとおもひ出たれば或もの女神にはきぬ縫てたてまつるこそよかンなれさしたまへとよりきてさゝめけばいで心みんとて縑（カトリ）のひゝな衣みつぬひたりしたかひどもにかうぞ書たりける、いかなる心ばへにかありけん神ぞしるてんかし「しろたへの衣は神にゆづりてんへだてぬ中にかへしなすべく云々此作者兼家公の妻道綱卿の母公の寵衰へたるによりてこれらの歌あり此ひゝな衣雨を祈ることとも聞えず雨ふる日なれば似たることのやうなり

○【帝城景物略】に雨久以白紙作婦人首剪紅緑紙衣之以苕帚苗縛小帚令携之竿懸簷際曰掃晴娘これを作れる詩往々あり【陔餘叢考】に元初李俊有掃晴娘云々又有序云所以便民免乾溢之患則不獨祈晴又以之祈雨云々といへば掃晴の名を忘れたるに似たり

蚊幮に雁金
蚊の呪

○【桂林漫錄】に蚊幮に雁金を染或は紙にて切て付る事其由來を知人なし按に【物理小識】夏月綠染蝙蝠血横縫帳額蚊不入と載たるを見れば蝙蝠は蚊を食ふ物故厭勝に斯はするなるべし恐くは崎陽（ナガサキ）に客寓の清人夏の頃此意にて帳額に蝙蝠の形を草畫に書て蚊を避る呪とせし事など有しを好事の人此國の蚊幮へも畫けるか轉傳していつしか雁金とは成けるにや云々いへり按るに【御產所日記】に若君（普廣院義教の若君義勝）御誕生永享六年甲寅二月九日御產所波多野因幡入道元尚宿所廳司西洞院（これは御袋の御方の里第なるべし）云々御產所の御具足色々給はる注文の末に御蚊帳御紋鶴龜同御竿金物

風神送り

〇風の神送り【人倫訓蒙圖彙】に風神拂世間に風氣時行たれば風神を追はらふとて面をかつぎ太皷を打て物をもらふ諸人の煩を己かみにうけて世間無病なればかれがまうけなし又町家のわかきものどもさま〳〵興あることをしてこれを送ることあり【伊呂波三線】におかしげなるわら人形を作り墉印のおみ笠をきせ大勢色紙のざいをもつて傾城かひを送るは〳〵と聲々にわめいて來るこれは戲文ながら風神送りをかたどりしなりもと送れ〳〵とはやすことは農家にて田の虫を拂ふことより起れるなるべし町家にて風神送ること京難波には盛なり銅脈が【太平樂府】觀送風神、往々行送風神者、四條橋上昔初觀、紺襪一體太皷撃、鶏茶双衣三絃彈、太皷三絃鉦鉾雜、酸漿挑灯赤日團、竿頭偶人紛如舞、躍入四條川原灘、川原乞食欲爭取、乞食喧嘩亦可看、可憐竹林醫師輩、泣擲七子惜名殘、【耳袋】に安永元年六七月頃京攝に風はやりし頃大坂にて或町に風神送りに非人を雇ひ風神とし若き者三線太鼓にてはやし是を送りけるが興に乘じて川中へ彼非人をつき落しければ非人恨みて仕方こそあれと夜に入その若者共の町に來り戸ごとに先刻の風神又々立歸りしとふれていやがらせける

送疫鬼

〇送疫鬼【日次紀事】凡疫病春初多流行若然則民間大人小兒毎鳴鉦皷而追疫鬼或以綠樹枝作小船捨郊外而歸或以牛蒭并牛草造偶人捨野外而歸是亦驅疫之一術而唐土造紙船之類乎紙船は【五雜組】云閩俗瘟疫之疾一起即請邪神朝夕拜禮以紙糊船送之水際

鍾馗の畫

〇風ひかぬ覧に鍾馗の畫像を用る事今も田舍に有となむ【守武千句】に藥もいらぬ秋の夕暮、荻原や風のはやるもしづまりてもとあらのこはきしやうき大しん【犬子集】（四）難波の浦に風の用心盧の屋に鍾馗の札や押ぬらん又風のおつる花に鍾馗の札もがな【事文類集】唐逸史を引て玄宗の夢に小鬼出て物を盜ていなたとするを鍾馗出て是を捕ふる處に上問大者爾何人也奏曰臣終南山進士鍾馗也とあれば是を大人といふなるべし大臣と書は非なり漢土には其像を戸に押て邪を避とかやこゝにも是を用ひて

云ふなり野猪は蚰を食ふ最もまむしを好むと云ふ北見猪右衛門の家天保の初に跡絶たり【萩原隨筆】に蚰の怖るゝ歌「あかまだら我たつみちによこたへばやまなしひめにありとつたへん

虎の字

〇又【醒睡笑】鈍なるものゝ條に人くらひ犬も虎といふ字を手の内に書てみすればくらはぬと敎られ後に犬を見て虎といふ字を書すまし手をひろげてみせけるが何の詮もなくほかとくふたり悲しく思ひある僧にかたりければ推したり其犬は一圓文盲にあつたものよといへりこの呪もと漢土の法なり【博物類纂】(十)遇惡犬以左手起自寅吹一口氣輪至戌掐之犬即退伏(掐宜作搯字書に爪搯也とありてつかむことなり)

小兒の退齒

又云小兒退齒上齶者置床下々齶者拋屋上云使齒速生こゝにて今みなかくの如くす但し鬼の齒と替れと呪ひいふはつよからむことを願ふなり又治脚痲法如患左足以草貼左耳上瞼右亦如之立止又

しびれの呪ひ

云以紙貼鼻尖これらも常に小兒などのしびれ京へ上れとてすることなり草のちりを額の正中に貼て左右をいはざるは誤なるべし不角が【獲絨輪】(十一) 痺れも京へ上れいんのこ(祇園の犬の子は額に押すなればとり合せでかく作れり) 又貫目には洩たる戀の重荷なりまつよのしびれ琥珀同性(額に墨を付るをいふなり)

疫神を送る

〇【鹽尻】云甲午(正德四年)四五月の比肥前長崎の港疫疾大に流行し六七月抔は京師に及び染疾の家々苦しみ愁ふ泉南尤甚く京にては組を定め人形を作り夜に入り數十人金づゝみにて疫を送る喧びすしく前代未聞の姿なりし【東海談】に享保十八年七月上旬より東都大に疫病行り上下貴賤みな此氣に中りて病十三日十四日の頃大路の往來もたえ〴〵なり是は醫書にいはゆる天行時疫と云もの歟邑里ともに藁にて疫神の形を作りかね太鼓をならして是を送り南海へ流しぬ官もゆるしてとがめず是戯なりといへども又三代の遺風なりと思はる【萬病回春】邪祟條、鬼脉乃邪出來爲之也不用服藥但宜符呪治之或從俗送鬼神亦可

後には山も奈良も三度食せり夕のをば事と山にはいへり未申の時ばかりに非時して法師原坂下へ下りぬれば夕方寄合て事と名づけて我々世事して食すと云りとあるは世俗に食物を事といふによれり今も食事と云ふ是なりまた節供を節事とも云り【望一千句】見るにたゞ上る腹赤のあたらしや客をや申入ん節事なども云り依てこの御事を節料理する始として聞ゆべし但し初め納はとまれかくまれ二月にあるは後のことなるべし

○出雲國には十二月十三日煤とりなどし芋こんにやく赤小豆等の汁を喰ふ是を事始と云ふさて年神を祭りて二月八日に神の棚を取る是を事納と云ふ十二月と同じ汁を喰ふといへり是にては始終もよくわかれたれど江戸には二月まで神だなはあらねども其ことのみ移れるか此日赤小豆の汁は大師がゆ又臘八がゆ□□□ものか柳亭もこのことに說ありて予に語りけるは目かごのことは【望一后千句】籠の目をあらく作るは詮もなし無藍入れしとつゝしめる門と云ふ句御事にはかゝはらねども籠のめを鬼の恐る事と云ことわざの證なりと云り予が見たる【望一后千句】には此句なしと覺ゆ又事と云は食物にて僧家より起れりといへるは【雜談集】によれるなどそれに世事して食すと見ゆ

○【長崎歲時記】に役義相續又は婚禮の家水掛と云ことあり一町の者共萬歲又は七福神に造り或は踊をし又さまざまの鳥臺等を作り其家に到り祝詞を述ぶ其家より酒肴代等送て謝儀とす

○虫除けとて北見猪右衛門と云ふ名字を書たる札を押ことあるは江戸近きゐなか北澤と云ふ處に彼猪右衛門と云ふ百姓ありてまむし其外毒虫に刺れたるに奇方の藥を出す是によりて其名高く後には其名を書て戶などに押て虫よけの呪とす余が知りたる人にて相州津久井縣に逸見氏はもと醫師をもせしものにてそれが家方を猪右衛門に傳へたりとなん其方稀薟葉又蒼耳葉の汁をしぼりて胡椒の粉をときて傷處に塗るに唱ふる歌あり「このみちに錦まだらの虫あらば山立ひめに告てとらせん山立姫は野猪を

を事始と云ふは彌心得がたし十二月八日を始として今日を納といはゞ可ならんか暦にも十二月に正月事始よしと記せし日多し然ればこの日事納とせんこと勿論なるべきにや【誹袖海】江戸の月次をいふ處二月八日事始師走八日事納といふ此日棹のさきに籠をつけて出す京の卯月八日の如しと云り十二月

すゝ拂ひ

十三日は【懲鹿子】にすゝ拂ひ古き札納る【榮花咄】（貞享五年板）江戸の事をいふ處十二月十三日春の事はじめとて武家在家の煤はきお札古札おさめが聲せはし【日次紀事】も此日を事始とありすゝはらひは事始とも事納ともいはゞいふべし籠を出すことは鬼をさくることなれば除夜節分にあるべきを正月事始の意に渾じ用ひて節分にこれなきもおかし二月にもあるはうつりたるなり【南島雜話】に伊豆の海嶋正月廿四日氣神祭とて夕暮より民家門をさし戸外に目籠を出しおく島々多し神集島にてこの

節分に籠を戸外に出す

籠を疣尻と云となむ又遠州などにては節分に籠を出すといへり然あるべきことなり籠は九字をかたどり川と云ふは非なりこれはたゞ目の多くまもり護る意をとりて深き故あるにあらずさて事とは物と云と同じ何にもいふべしされど御事も正月の經營と云は廣く節ふるまひ事はじめと云はむねと食物をいへり卽節供なり食物をいふは【著聞集】に左京大夫顯輔卿のもとへある人ことをして贈りたりけるに櫻花かざしことしたりけるを僧どもおぼらかにくらひけるを三品連歌になし侍りける「春の花ゆたして見せよかし證尊法印つける「さくらはんにはなにかたうべきと有りことは食物なり連歌脫字あれども其意を考ふるにゑたは嘔吐にて花の枝にいひかけたり付句はさはかり食はむにはえ堪まじければへどつかんとなりこれもさくらをいひまはせり又無住法師が【沙石集】（六）何ものゝ云出しけるにや相手をくじに取て事をし相手引出ものをせば時の横災をまぬかるべしと云ふこと京田舍に普く云々あり食物のことは見えざれどもこれも事と云は飲食なるべし

○【雜談集】（三）昔は寺々只一食にて朝夕一度しけり次第に器量弱くして非時と名けて日中に食し

師走油は火にたゝる

よりておもふに師走あぶらは火にたゝるといふ事ありてその月にあぶらをこぼしたる者は水を浴べきを略しては頭に水をそゝぎ災を避くといへりもとはおのが身に油のかゝれるを忌しなり【甲子随筆】に尾張甚目寺村に去年妻を迎たる家々に正月十一日湯を設て同じ處の人を招ぎ入湯せしめて浴後に一杯をすゝむといへるも水あびせ止で其名殘なり正明あらぬ事に設なしたるわろし【醒睡笑】にうつけめける亭主の腰まはりへ下ゲすあやまちに水をこぼしぬはたせず是を叱る其中やう此水盤の上なればこそくるしからね又この月が霜月なればこそ大事なけれこのこぼれ物水なればこそあれ若たゝみがわが身で此月が師走でこの水が油ならばそもそもよい物かしはす油はかゝらぬ事といふなるにといへりこれは火とまらぬにて水と反せり師走にしも忌ことは年の暮より春の初めは殊に何事をも祝ひごとよる時なれば也又上に引る【滑稽雑談】に心ある世の風に習ひてたゞ水懸の具を贈りて振舞に逢ふといへる

わる樽

は後にわる樽といふことの始めなるべし【下手談義】に惡徒おのが所行をいふ處大屋の聟入に若い者共をすゝめて酒樽に水を入てするめ一枚そへ三十人程同類の名を書て態と御祝儀と仕かけ振舞の上であばれる算用やうやうあつかはれて大屋に手をすらせ云々今ほどかへりみれば我ながら人でなし云々（戸を扣く事は【徒然草】四季の段にいへるにも似たり無賴のものは古今おなじ必ず其事を知りてまねるにはあらずおのづからなり）

事始

○事始と云ふ日定かならず元隣が【誰身の上】四季短歌に「つな引わこは太郎月二郎ちよかなぼうひきはせちぶるまひに事はじめとありて正月の内なり【日次紀事】十二月十三日正月爲事之始營始終之俗是謂事始日正月所用之物亦多買之とありて事納といふはなし【江戸總鹿子】十二月八日事納二月八日

事納

事始江府中にて籠つるなりと云り【總鹿子新增大全】（寛延四年江戸中町々の家毎に籠を竿にかけて高く屋上に建置いかなる故も知難し或書に九字の形を表して魔除也と云ふ附會の說なるべし然迚今日

別火をかまへるを火どまりとはいへるなりと【後宮名目】にみゆ）是より後例になりて建武年中に家ごとにはかなき者等まで此ことぶきをなして嫁娶過てのつとめての正月にはかならず妻の緣家より水祝とておこなひ侍るなり【日次記事】正月條。新婦を娶者あれば朋友集りてこれに水を灑ぐこれ祓除の謂なり【孝德紀】の内に粗その儀あり云々（眞字に書るを要をつみてかなに寫す）【孝德紀】を按るに有亡夫婦若經十年及二十年適人爲婦幷未嫁之女始適人時於是妒斯夫婦使祓除とあるは是なるべし此説わろしとおもふにや【滑稽雜談】に和俗去年新に娶し男に歳首わか水を祝ふとて水を浴することあり是を水いはひ水かけなどいふ往昔はなき事なり永祿の頃管領三好が家臣松永彈正が姪女を我家の寵臣に妻合せし時に此たはぶれなし初めしとかや年わかき輩血氣の盛なるに任せて此戯をなし身をそこなひ或は口論鬪爭に及こと侍る近世は心有世の風に慣て水懸のことぶきとて金銀に濃たる手桶に鶴龜松竹など書て一双にして相送る是を受納して謝禮のため招請するを水懸振舞といふ云々（松永が家臣の事慥ならずうけがたき事なり）いへり金箔を置て手桶を飾り笹ほこなどを用ひし事は西鶴が【武道傳來記】などに金箔置の手桶銀箔の柄杓衣裝づくしの笹鉾落書の大團扇竹馬箍張の立烏帽子等のことをいへりおもふにこの事寛永の末よりはやりしことなるべしそれより前も稀には有もやしけん幸木をもて新婦を打などみなおなじ類なり江戸に盛に行はれしは承應萬治の頃なるべし寛文二年寅正月三日觸冬も相觸候通正月の水あびせ笹鉾作り物已下仕大勢寄合躁敷風情仕間敷候幷に湯屋風呂屋へ召連參申間敷候事銘々屋敷之内にてあびせ可申候云々辰正月八日町中にて水あびせ候事自今已後は親類緣者幷召仕候者迄銘々屋敷之内にて水あびせ可申他人は壹人も出合申間敷候尤笹鉾作り物已下何にても一切仕間敷候（是より今に此法度ふれ有り御制止ありて此事止しかば後は只町中水あびせ無用とのみふれ出づ）子を設る祝ひながら火とまるの義は婦人にかゝれり水を浴する心は火とまれとにやあらん是に

芋畑にて杜鵑を聞

えたり此邊にはきものを脱て拂へなどすれども犬のまねはなきにや云々【本草】には【荊楚歳時記】を引て上厠聽之不祥聽法作狗聲應之とあり【夏山雜談】まことや時鳥の初音を厠にてきけば禍あり芋畑にてきけば福あり是故に時鳥のなく頃は高貴の御厠には芋を鉢に植ていれておくとなり漢土にはもとより此鳥の聲をよろこばねどこゝには古へよりいたくめでたりしは畿内の國にはいと稀なりし故なるべし【かげろう日記】五月五日の條このごろはめづらしげなうほとゝぎすのむらがりてくそふくにおりゐたるなどいひのゝしる（くそふくは【園珠庵雜記】に明恵上人傳記を引てかはやの名とぞおほゆると云り）とあれば何鳥を見てかく云るかほとゝぎすは群て飛ものにあらず又家ゐのあたりにおりゐるものにもあらねばいとおほつかなし時おくれたればとてめづらしげなしなどいはむはまことには賞翫うすきにや後には漢土の說をうけて忌事なども出來ぬ芋畑のことは何故にかと其附合する處を思ふにこゝにて杜鵑の黑燒を痘術の薬に用ることあり痘をばいもといふゆゑ芋をもて又杜鵑を饗ふか小

がんばり入道

兒の諺に除夜に厠にてがつはり入道ほとゝぎすといへるも厠にほとゝぎすを聞を忌ることよりいひ出しとみゆ（【好色徒然草】むさしの國にがんばり入道とかやいふ者のむすこ美男のほまれ有て女あまたいひわたりけれど此男若衆をのみ喰ひ更によねのたぐひをくはざりければかゝることかきたる者俗に有べからずとて親出家させけり此戯文も諺をとれるかかんばり共いふ眼張にてをそろしげなるものを云ひてほとゝぎすを怖す意なるべし

水祝

○水祝【和訓栞】に【後宮名目】に白河院の中宮賢子入内おはしましての後御懐胎の御けしきおはしけるつとめてのむ月のころ關白藤原師實公参内おはしてゆくりなく御まかりのたまり水を主上にうちかけさせおはしける主上あきれさせおはしけるを辨内侍これは中宮の御火どまりの料に殿の祝はせ給ふにて侍らふと奏せられし（經水を火と名けたるは對屋に出て別火かまふることよりぞ起りけるさて

云へり糸は長命縷の類なるべし今小兒の衣の背に守り縫とて付る是にや【拾芥抄】呪時頌休息萬命急々如律令と有りこの誦文は佛家に呪願言長壽より出しなるべし【袖中抄】に四分律の文を引て今俗正月元日若早旦嚔卽稱曰千秋萬歳急々如律令是緣也何只在元日哉尋常禱之【帝京景物略】正月元旦五鼓時不臥而嚔々則急起或不及衣曰臥嚔者病也不臥而語言或戶外呼則不應曰呼者鬼也今はこれを德萬歳といひ又下賤の者はくそをくらへといへり、休息萬命のひゞきに似たるもおかし【寛永發句帳】くつさめや德萬歳のはなの春（忠滿）【鷹筑波集】人々や我身の上をそしるらんひたものはなをひる刀鍛冶

とく萬歳くそをくらへ

○【嬾眞子錄】に俗說以人嚔噴爲人說此蓋古語也終風之詩曰云々【漢藝文志】雜占十八家三百一十卷內嚔耳鳴雜占十六卷然則嚔耳鳴皆有吉凶今則此術亡矣

鼻に紙捻を入る

○鼻に紙捻を入てくさめする詩ありしが今忘れたり【篗絨輪】に忍ぶこよりにくさめよひ出す月にかつけ花にかつける灸きらひ眠くば鼻へ呪のより仲の時音銅のない弓を引【落久保物語】足手あはせていとよく〳〵のび〳〵してからうじておき出手あらひゐたり

あくびのうつる事

○又あくびのうつる事【枕双紙】みならひするものあくびちごどもとあり【京羽二重】うつすべき欠に秋の友もなし（酒酌）

休息の字

○休息の字世人多く本義をしらず憩ふことゝのみおもへり【敬齋古今黈】に以舍旁從逸謂之止息者停憩之義也人有嗣續謂之子息者生滋之義也人而物故謂之休息者了絕之義也息既得而謂之生而又得謂之死則息之爲義不既大矣乎この外諸義を說たりしからば休息とは忌々しき詞ならずや

呪の師

○呪いにしへは其職を設られたり【職員令】典藥寮の下に呪禁師あり【庭訓往來】に術治といへるも呪するものをいふ【素問】に所謂移情變機之術也

厠にて郭公を聞く

○【埃囊抄】（卷八）に郭公かはやにて是を聞く時犬のほゆるまねをして呪ふと云ふこと【本草】に見

文　上包に板木もて摺りて賣も久しきことなり

○方術　嚔の頌　小兒衣の守り　鼻に縫紙捻　欠うつる　呪の師　厠に杜鵑を聞　芋畑かんばり入道事始　水祝　師走油　わろ樽　虎字　小兒の退齒　しびれ　鍾馗畫　照々法師　蚊蝿に雁金　蚊の呪　時ならぬ正月　狛犬の足括る　盗の呪　猫の迯たる　頭痛　円の目切　蓍鳴　藥祈禱

方術

嚔の頌　【萬葉集】（十一）眉根掻鼻火紐解待八方何時毛將見跡戀來吾乎集中はなひる事をよめる歌この外にもあり【詩】邶風に寤言不寐願言則嚔といへるとおなじくて人におもはるればはなひるとなり後には其意うつりてわがうへをかけにて後言する者あればはなひるとてわろき事とす又天竺にはもとよりこれをよからぬ事とするにや【四分律】に世尊嚔諸比丘咒願言長壽といへること見えたり【古今集】（雜）出て行ん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな【袖中抄】にはなひる事いかにもよからぬ事なり年の始に鼻ひりたれば祝ひことをいひて祝ふなりされば人の所へゆかんずる初めに隣の人嚔らむを聞てもくせ〳〵しからん人は立どまるべきなり【枕草子】にくきもののはなひて誦文する人云々宮に初て參りたる頃といふ條物など仰られて我をば思ふやと問せ給ふ御いらへにいかにかはとけいするにあはせて臺盤所のかたにはなをたかくひたればあな心うそらごとするなりけり云々（こは清少が我を思ふといひしは僞ならむ隣にはなひつればとの御戯なり）わが願ふ事おもふ事ある時人のはなひるだにそのことかなはずとする習とみゆ【徒然草】くさめ〳〵の段【文段抄】云乳母がたの習はしに其兒の嚔る時かたはらの人はなを合すとて又くさめといふなりもしはなを合せざれば其嚔たる兒に害ありといひ習はせり其故に今も守刀などに鼻の糸とて青き糸をつけて兒の嚔る時かのはなを合す代りに其糸をむすぶなりとあり伊勢守貞陸が【産所記】御はなのむすび糸長さ一尺三寸計りかすをとるもの也と

小兒衣の守り

ろ石の面に云々の歌は後人是をよめるを神詠なりと訛りつたへしなるべし

福と云ふこと

○福といふこと【古事談】に業房年始の夢を福たのしきといひし事（上にみえたり）【著聞集】に石泉法印祐性くらま寺の別當にてすゝを人のもとへつかはすとてこのすゝはくらまのふくにてさふらふぞさればとて又むかでめすなよ細き符をすゝといふふくは福なり蜈蚣は鞍馬の使者といふこと八幡の鳩の類なり【狂言記】福わたしにふくはなんじやありの實で御ざりますなど見ゆ今世にも外よりくれたる物を分ちて人に贈るを福わけといふ人の許より物贈れる時其器物に移り紙とて紙をいれことそきてはつけ木を入ても返す【沙石集】に君に忠有て榮ふるといふ條に返り引出物とて紙一枚をぞ給はりけろこれ今いふうつり也つけ木古くは硫黄といへり【職人盡】に硫黄箒賣あり二品をうれるなりこれを移りに用ふるは祝ふの意なり（かなはちがへども音のまがふ故なり又今祝をいわひと俗文に書はいはひにては位牌にまがふとなり）貞享頃の衣服の雛形に伊勢土產の品々を摸樣にしたるにつけぎありこれ又今の心なり（次でに云昔のいわうは木も竹もあるべし宗因が句「たばこのむかと火打つけ竹さびしさは同じ借屋の隣殿とあり寛文六年の作なり）うつりとは名殘の意なるべし【壒囊】に或問、贈り物する時其器へ又ものを入て返すをとしのみといふ古へより有しことか如何答云【大神宮年中行事】鍬山伊賀利神事條に折敷に小石を入年の實と號し送る事あり是田種祭の時なればことしの年穀豐饒をあらかじめ祝ひ年の實と云て贈ることなりそれを世俗に贈り物を祝しかへす號と覺え侍る（鍬山祭は二月なり八月の田實も新穀を祝賀するなり）

福わけ　移り紙

としの實

灸の忌日

○寶暦十三年灸治を忌日とて長崎にて試し人有しとて賣步者有しが今も人々是を寫し壁に張置て何の年の人は何月何日を忌とて信用すこれ皆據なき浮說なり其中に巳の年の人は忌日なく年中よしとあるは當時上樣巳の御年にわたらせ給へばかやうに言出しものなりと或人いへりこれより因循して今は切

名は和漢ともに忌まるゝもおかし喜雲が【京童】にさんねん坂を産寧坂とも云り「尼といひびくにといへば此坂の名はかはるともなしやありのみの入間やう（伊安）人の母を御袋といふはもと【御産所日記】に御袋御方樣などありこれも袋の内の物を探りとるが如く平産をいはひて呼しことゝ聞ゆ【鷹筑波集】に大黑とえびすは中やよかるらんゆかうた紙に包むいた銀【佐夜中山集】春は名を紙にてしりぬ若えびす【寶永發句帳】書初やまつ心よきえびす紙、さくら鯛すゆるはえびす折敷かな（こは今俗に云えびす膳のことなるべし）【五元集】惠美須紙かけ取帳の三枚め（旨原が注に此句は陸月十一日内田市右衛門が家にて帳の表にかゝれしとかや三枚めにえびす紙をみつけたるいとおかし橋板は三枚めにて大黑を造る事をもてかやうにいへるは例の其角が口づきなり）【篗纑輪】にこがね虫後藤が桐のさたなくて紙のえびすは七福の外また丁六はしらぬえほし折膳といふ（折付合あり此の折敷は鳴子板などの如く横ひらの六角に飛驒杉などにて作れるもの有り是なるべし（折えほしの形によれり）えびす折敷は夷子紙と同じ常にゆがみてかたわしきを忌てえびすと祝したるなり一説に十月は神みな出雲國へ行給ふ故この月を神無月といひぬれどえびす講は此月に行ふこは出雲へこの神のみゆき給はぬなりされはえびす紙はかみのたちのこりといふ意にてしかいふと云へり

人の母を御袋と云ふ事　夷子紙　夷子膳

○【夏山雜談】に硯の水に我影はうつさぬものなり左遷の時其人の面かげを硯の水に移して定文を書故なりと云へるは何に出たる事かいと覺つかなしこは菅家の御歌とか申傳ふ「見る石の面にものは書ざりき云々の歌よりいひ出しにや【源氏】橋姫に八の宮の姫ぎみをかしづき給ふ條に姫ぎみ御硯をやをら引よせて手ならひのやうにかきまぜ給ふをこれに書給へ硯にはかきつけさんなりとて紙奉り給へばとあればかゝる忌事次第にいひ傳へて右の說ども出きしならむ守覺法親王の右記に【教命指歸抄】に云ふ彼抄者菅三品の撰也其條々有硯不可書文字事云々以箸不用楊枝事云々聖廟御遺誡之中有之とありみ

硯の水に我影をうつさず　硯に物書く事

梨子をありの實と云ふ

流〆禰とあり清輔朝臣の歌に「おしねかろ賤のすか笠白妙にはらひもあへず積る雪かな晩稲を略きておしねといふこの死ねと云にまがふをきらひてよねともいへり【金葉集】（雜上）和泉式部石山に參りけるに大津にとまりて夜ふけてきゝければ人のけはひはあまたしてのゝしりける尋ねければおやしの賤の女がよねしらげ侍るなりと申けるをきゝてよめる「さぎのゐろ松原いかにさはぐらんしらげはうたて里とよみけり【狂言記】に梨子をありの實と云は無を忌たるなり【山家集】例ならぬ人の大事なりけるが四月になしの花の咲たりけるをみてなしのほしきよしをねがひけるにもしやと人に尋ければかれたるかしはに包みたるなしを一ツつかはしてこればかりなど申たる返事に「花の折かしはにつゝむしなのなしはひとつなれどもありのみと見ゆ「新撰狂歌集」ある寺へだんなより大なるありのみ一ツ贈りければこれに付て一句すべしよく付たる人に此なしを參らせんとて云々

〇今俗青魚の子をかずの子といひ正月これを用ゆ女詞にはかず〳〵といふ似たることあり【親元日記】

くる〳〵

寛正六年乙酉正月十日條、齋藤越中入道雁一來々一折云々鱈の膓を不來々々と云て正月用ゆ名詮あしきによりて中頃より來々と書たりとあり【撮壤集】魚名の内に來々と見えたりかづの子はかどの子にてこともなきを【東海談】に或國の守かづのこの正字を扶持しておかれし儒者にたづねられしに或利口のみにて他のことにまぎらし或は經書に眼をさらし靜坐工夫に暇なく瑣細のことは存ぜずと申ぬ國守聞れて實に儒者と云ものは用に立ぬもの哉とて笑はれしは尤なることなり學者は神書も佛書も歌書物語ばけものばなしの類までも多くよみて入用次第取出すこそ好ましきことなれ細川幽齋の學問することは乞食袋のやうにするがよしよきもあしきも一ツに入置て用に從て使ふべしとの給ひし

こじき袋

〇【料理物語】に節分の前はありのみといひ其後はなしといふ抔いへるも年の初めは殊に物いまひする習よりかゝる俗說もありしなり【萩園雜記】に俗諱くさ〳〵擧たる中に諱離散以梨爲圓果このくだ物の

年の實

二月伊勢の鍬山祭に年の實と稱するは有年を祝する言なれば八朔の田實の稱も此年の豊饒を賀することとなるべし【月令廣義】などに八月朔膢をなす是を膢臘といふよしなり云々江戸には今此日を殊に佳節として祝ふべき事なり世に關東御入國と申は台駕こゝに入らせられしは天正十八年の八朔になん

物忌

○中古陰陽家の說行はれて物いみを付る事あり男子は烏帽子女房は頭に付しこと古物語に往々あり（又物いみとて家に籠り居て深くつゝしみてある事など有）【拾芥抄】物忌條に迦毘羅國に桃林あり其下に一丈の鬼王あり物忌と號す其鬼王の邊に他の鬼神よらず鬼王誓願して六趣有情を利益す云々我名を書き持む人には願の如く守護すべしと【儀軌】に出たりと有りこの物忌二字を細紙に書て着るなり【河海抄】に昔は忍草に物忌を書て御簾にも冠にもさしけるなり事なし草といふに就てなり又柳の枝三寸ばかり簡に作りて物忌と書て御冠の纓に着られまた白紙に書て付らるゝこと有り是は禁中の事なりとあり

齋宮の忌詞

○【延喜式】齋宮の忌詞は經を染紙、塔を阿良々岐、寺を瓦葺、僧を髮長、女僧を女髮長、死を奈保留、病を夜須美、哭を鹽垂、血を阿世、打を撫、肉を菌、墓を壤、堂を香燃、優婆塞を角筈、など見えたり後世物に異名をつけて呼こともありこれに本づきて忌ことにあればなり【海人藻芥】に內裏仙洞には一切の食物に異名を付て被召事なりとあるも食物の名を指て云はいやしきを耻る處より出來しなり移りてはさらぬ物にも異名あり古は髮をそぐといひしを後に男子元服などにははやすと云ひよた小兒の臍帶を收むるにはそぐといふ【謠曲外百番】に大木といふあり本堂の樒木に成べき木北谷の大杉ならではなく候ほどに此木を申付なはさばやと存候はやすなはす共に今もいふ詞なり是等もと截斷といふことを忌でなり【嘉多言】に十四日廿四日を十よつか廿よつかといふはわろし云々いへれどあまねく云ひつけたるをいかゞはせんしもしを忌ことは米を古はしねといふ【和名抄】に稻米を宇

米をしね又よねと云ふ

などいひて錢を賭とするをもてなり【東見記】をはじめ是等の說みな【世諺問答】をうけていへるなれどさもあるべしとも聞ゆるもなし今諸說によりて押あての考ながら餅を供ふることも名詮によりてなり餅をばかちといへり飯をかつをかちひといへり即餅なりそもゝとは氷の御膳のかはりに氷餅をめしたるなどより始れる歟十六日に行はるゝ故その數をも十六とすさてかぞふることよりして錢十六の價にて何にても物をとゝのふることゝ移りきしにやあらむ錢は其頃嘉定錢多かりしなるべし（食物に和雜鱠といふあり蓼酢にて調ふれば此日の食物のやうに名も聞ゆれどこはさにあらずかんさうなますと云ふ是にてもとかせちあへと云ひしものとおなじ

八朔の賀

○八朔の賀は【公事根源】に圓明寺太閤の【文永の記】にはこの七八年よりこのかた殊に天下に流布せるよし載られたりまことに建長頃よりの事なるべし云々【桃花蘂葉】八朔條【正應二年御記】けふ家々のいとなみにてたのむ人々物奉ることの事初りてみそぢにとをくあまりけんとおぼゆとあり建長の頃といふに合へり【世諺問答】にはじめはたのみとてよねをあつかひとてわらはべのもちはべるはこの故にやおしきに入て人のもとへつかはしけるとかやと有たのむはもとたのみにて田實也【源氏】あかしの巻にこのよのまうけ秋のたのみをかりおさめなどいへりたのむとて人に物贈らむことけふに限るべきにあらず民間田穀の新たにみのりたるを相賀して贈りしが上さまに及びたのむ方へ物奉りしより專らたのむといひならひしなり【年山紀聞】（辨內侍日記）寶治元年の下に云八月朔日中宮の御方よりまいりたりし御たきものよのつねならずにほひうつくしう侍りしかば「けふはまたそらたきものゝ名にかへてたのめばふかきにほひとぞなる（寶治は二年にて建長となる）【康富記】文安五年八月朔日云々八朔禮事云々鎌倉より事起之由所語傳也また【梅松論】に足利尊氏卿の心ひろく物おしみのなき事をいふ處八月朔日憑などに諸人の進物どもも數もしらずありしかどもみな人に下し賜ひしほどに云々【鹽尻】に

島明神の氏子伊豆の豆と三島の三を象りて豆三粒入るより今通して世上の流例となるといへりとある は非なり【年中行事秘抄】に十節云、高辛氏之女心性甚暴惡正月十五日巷中死其靈爲惡神於道路憂今道 路人相逢即失神人々至盗火此人性好粥故以此祭其靈無咎衛凡作屋産子移徙有祐則以粥灑於四方災禍自 消除矣、また【公事根源】にもいへり

粥杖

○粥杖【堅一㞐千句】「正月をまつこそいはへ花の春うらゝかならずよめたゝくなり」長崎の近村小瀨戸 といふ處に正月十四日尻たゝきとて新婦の尻を打ことあり

嘉定

○としなみの祝ひことする中にかぢやうなどそのもとたしかならず【世諺問答】に嘉祥は仁明天皇二 年六月十六日豐後國より白き龜を獻ず以て吉兆として是をいはふこれよりこのかた嘉祥の儀ありと此 事更に本說なしたゞ彼錢の銘に嘉定通寶と侍ればば勝といふめうせんを賞翫するよし也【東見記】に嘉 定のこと後嵯峨院即位いまだましまさぬ時六月十六日宋の嘉定錢十六文を以て食物を買て御膳に供し たる例を踐祚の後も六月十六日に餅などを奉る何の書に有とも見えず人のいひ傳へなりとあり嘉定は 宋の寧宗の年號にて後嵯峨帝の踐祚よりはゞかに二十年前の事なり物にも見えざるを定めてはいひ がたかるべし【世諺問答】に更に本說なしとあるは【四季物語】に見えたる事どもなるべし殊に異本

嘉定錢

の【四季物語】にはえやみの御祈のよしにいひてそれを八月のたのみの儀と隔年に行はるゝといへる は疫病も隔年にはやる物のやうなりもとより此書はとり用ひがたし思ふに此事は【東見記】にいへる よりも猶後の事にてもとかりそめに行はれしにても有べしされば此事のはじめ記錄などにもなしとみ えたり（【世諺問答】は天文十三年の撰なり）【瑩隨筆】（貞享戊辰無名氏）六月十六日嘉定喰といふ事

嘉定喰

近頃俗にいひ傳ふるは室町家大樹の時納涼の島に楊弓を射て懸ものとしてまけたるものは嘉定錢十六 文を出し種々の食物買て勝たるものをもてなすなりといへるは楊弓に後世のわざにや今あらひは本字

名詮種々

ほし着て若夷賣暦うりとあるは二品を賣しにや此事もいつより有しかさだかならず【醒睡笑】に元日いまた夜深き内に萬の物をうりかふ人えびすをもとめむかふることは聖德太子よりさたまれりさるにより町々をもちてわかえびす〳〵とこれをのそむもの請て喜ぶえびすのはんきを摺ものいろ〳〵人の尊む程のすがたをおこして持たりしが云々（唯そのかみよりのならひなりしをかやうに滑稽に云るなり若夷の物がたり草子の内猶多かり）【胸算用】南都十二月晦日云々夜も明がたの元日にたはらむかへ〳〵と賣けるは板にをしたる大こくどのなり二日の明ぼのに惠比須むかへとうりける三日のあけかたにびしやもんむかへと賣ける毎朝三日が間福の神をうるぞかし【沙石集】云、去年おとゝしも祝しかどもまさりかほなきにこりずして年毎にいはひあへりさる程に死といふことをおそろしく忌はしき故に文字の音のかよへるばかりにて四ある物をいみて酒をのむも三度五度のみ萬の物の數も四をいまはしく思ひなれりそれほとに四文字の音たにもいまはしき心に正月は殊に恐るべき死せる魚鳥を家の内に取入てきりもりいりやく云々こは法師の論ながら理は聞えたり又常にも欵冬を富貴とし茗荷を冥加とするも古く傳へのし鰒を樂しの義にとり昆布の名を弘めの辭によそへ大諸禮に引渡しのくみやうのし栗昆布とおくはうつて勝てよろこぶの義出陣歸陣尤用べしといへり西土には一切の祝儀に萬年青を用ること【祕傳花鏡】に出づ又蜂獮猴蝙蝠鹿を合せて封侯福祿の義にとり桔梗はかしこもこゝも吉慶の意によせたり【和訓栞】に人家に芭蕉を植ざるは梵書に此身如芭蕉ともろき譬にいへるによれり西土には夏水仙を人家に植ゐを惡むとみゆ无義草の名によれるなり食に香物三きれを供さるは强者の者躬斬のとなへ同じきを忌む西土にも桃二ツを人にあたへず二刀三士を殺すの義によれるなりかゝるたぐひの事枚擧に遑あらず

移徙粥

○移徙粥【物類稱呼】に世俗わたましに赤小豆粥を煮て祝ふことあり一説に是はもと伊豆國風にて三

いひて染色をみせぬなりみれば色のあへるなりとあり又ひしほ類は【齊民要術】作醬門に若爲姙娠婦人壞醬者取白蘘蕀子著甕中則還好などいへり【物理小識】鑄劍鑄鐘、合煉丹藥、皆忌緒鍛之服と見ゆ

懸想文

○懸想文賣【續山井】人はこれを戀といふらむけさう文（政武）よふ人や戀の門立懸想文【狂歌咄】（寬文十二年板本）そのかみ正月元日のあしたより十五日まで歲毎に假粧文とて賣けり其出立は赤き布衣に袴のそば高くとり猶それよりさきには烏帽子を着せりとかや中ごろは編笠をかぶり覆面して都の町々を賣けり是を買人あればほそき疊紙の中に洗米二三粒入たるを假粧文と名づけて渡す一錢より百錢まで代は人の心にまかす扨その祝言は買ける人あるひは夫婦のかたらひの事或は商賣の事又は物かく事その外何にてものぞむことをさまぐ\めでたくいひつゞけて打とをろいとおもしろく賣ける詞やさしう聞えし時世の有さまにおしうつされ今はみな絕けるにや此ころのわかき人は知たるものなし是は祇園の犬神人なりや又は桂の里より出る男にやその出る所をしらずといへりこれは犬神人なり【雍州府志】淸水絃指(ツルサシ)のことをいふに其爲體半難髮不僧不俗横大刀常出入武門賣弓矢每年正月上旬着赤布衣頭戴白布巾覆頭面纔露兩眼而賣紙符於市中是謂懸想文思女祈所懸念之事或祈良緣成求富貴六々弦指因其所願而口唱其事則授其符十四日夜與曝竹同焚之然則化而令如願云（また【日次紀事】にも見えたり、貞德が狂歌、いふ事を聞は慢はたむく\と誹の下までけさう文かな是をみればおかしきさるがうこともいひしものと聞ゆ【俗夜中山集】けさう文やめでたく思ひ參らする（吉武）【洛陽集】みせぬふみとんとや／＼夜の聲（自悅）こは題に爆竹とありみせぬ文とは懸想文なるべく道結がさぎちやうに是を燒といへるにかなへり【一代男草子】はこ板の繪も夫婦子あるをうらやみ懸想文よむ女をとこめづらかに思はるゝといへるは紙符とも聞えず但し是は文勢にありて實にはあらぬにや

若夷賣

○若夷賣【同草子】に元日の曉、扇に／＼おゑびす／＼と賣聲に春いとゝおしてたゞ【梶久物語】にこえ

唐の頭
虎の頭

なり虎の面は長きものなり（今畫に圓くかくは誤なり）虎骨は藥用とすわきて頭骨は頭風を治す陶弘景云虎頭骨作枕辟惡夢魘置戸上辟鬼といへりまた左右前足を添るもゆゑ有にや時珍云按【吳球諸證辨疑】云虎之一身筋節氣力皆出前足故以脛骨爲勝といひ又虎は好みて蹲踞するものなればかく作れるならむ【格致鏡原】枕の條下に虎枕を多く擧たり李廣兄弟宜山に獵して虎を射殺し其頭を斷て枕に作る事【西京雜記】にみゆ是虎枕の始なりとぞ又ある寺御寶物の中にからの頭といふもの有これを見しに獸の頭骨を銅あみの筥に入たりからのかしらは拂子に作る毛なり【本草】に牧牛牦牛二條に出せり今唐山より渡るもの何れなるか色は赤白黑黃また新渡には綠なるもあり染て作れるなり【本草啓蒙】に諸色大かた牧牛尾にして黑色なるは牦牛の尾なるべしといへり白纓(ハクマ)紅纓(シャクマ)といひ黑きをこぐまといふ今の獸骨は此二牛の內なるかされども此獸は尾をこそ用れ頭骨はやうなき物なれば彼處より齎し來べきよしもなく秘藏(ヒメオカ)むやうもなし思ふにこれも虎頭なるをからのかしらといひ傳ふるにや（はぐまなどをからのかしらといふはそのかみ兜に付たる故の名にてまことはこの虎頭などこそ唐のかしらとはいふべけれ）皇子降誕の時虎の頭を御傍に置ことあり邪魅を退けむ爲なるべし【紫式部日記】に上東門院皇子を產せ給ひ御湯めしける日のことども書たる條に宮は殿いだき奉りたまひて御はかし小少將の君虎の頭は宮の內侍とりて御さきにまいる云々【榮花】（初花）にも宮は殿いだき奉らせ給ふ御はかし小宰相の君とらのかしらは宮の內侍とりて御さきにまいる（小少將は小宰將の誤なり、また【御產所日記】永享六年二月十一日午刻御湯始虎頭八入杓御湯具等云々（皇子ならでもやごとなきあたりには此事ありしなり）さてこの虎頭は作りものにはあらぬなるべし彼頭骨はかやうな事に用ひし物と思はる是にておもふ後世の犬はりこと云ふもこれらにもよれるならん

犬はりこ

染物を忌む事

○染物などに忌むことを推すに色かはることとあり顯昭が【散木集】の注に懷胎の女をば目きたなしと

長図倦浪裡卅行各皆醒者なにを傳へて琴譜といへるかそのかみ三絃などにて此歌を彈たるにてもあるべし道祐が紀事に近世梓に鏤てうるといへれば其前は書たるを用ひしことゝしらるそは寶ものにおりやなしやよき人のみにて下さまはせざりしならん下にも學ぶに及んで板行出きしかば末々の者どもゝする事となれるは又その後とぞ思はるゝ或人云今内裏より堂上がたに賜る卅の獏字は後陽成院震翰を刻させ給ふとなり又或說に後小松院御夢に寶船を御覽じて畫かせ給ふ獏字即震翰なりとぞ（いづれとも知らされども後說は非なるべし）

獏

夢ちがひ獏の札

○【一代男草子】に夢ちがひ獏の札とあるは是を寶船とゝもに賣しなりもと二物にて有しをやがてひとつにしたるにこそ今は寶船の繪に神前の獅子狛犬の如き物二ツ向ひ合せてかきたるは誤にてたゞ獏一ツをかくべきなり【本草啓蒙】に本邦にては惡夢食ふと云傳へて節分の寶船の畫の帆に獏字の書たるを枕下に襯す此事唐山にはなき事なり然れども安鞋焼に獏枕あり虎頭を用ひて枕とするは和漢ともにありと云へりこの安鞋焼の枕は獏にはあらず辟邪なるべし【三才圖會】に出たる辟邪の形と同じ獏は象鼻犀目牛尾虎足といへれば其形異なり【唐書五行志】（卅四）韋后妹嘗爲豹頭枕以辟邪白澤枕以辟魅伏熊枕以宜男亦服妖也とみゆ白澤は獏なるべし澤獏白同韻なり白は此獸の色黃白あるひは蒼白と本草諸書に見えたり・また【白氏文集】に獏屛賛并序あり惡夢を食ふよしはいはされども是も邪魅をさくるの呪ひなり

獏枕

○因に云或寺に獏枕あり傳へていふ加藤清正朝鮮より將來し物なりといへりその枕を見しにすべて木彫にて漆をぬり彩りたり齒と爪とは獸の眞物を鏤た其形は頭の左右より前足出て蹲踞たるやうに作り下に箱の如き臺あり頭のうへに鉛匠の形したる板ありて是を枕とするなり喉の内に括機ありて頭上徹の横側だてば口を開く眼の玉すこし高く出て摩ればくるくるめぐり耳も前後に動くおもふに是は虎枕

虎枕

ければかくいふなり涙を流すを米こぼすといふに同じ是またいつの頃よりいひそめたる賦齋宮の諱言の遺風と覺ゆさりながら件の巽阿彌が【覺書】にも舟とのみいひしをみれば物を載たるにはあらぬなるべしそはあしき夢を流さむとてするわざなればなりさるを後には何くれと書そへて今のことなれりとみゆ浮生が【滑稽太平記】に試毫評判の條同祿已後龜相なる家居に越年をしてせめての祝儀にや去年たちて家居もあらた丸太哉（卜養）たからの舟も浮ぶ泉水（玄札）この寶舟は種々の寶を舟に積たる處を繪にかきてなかきよのとをのねふりのみなめざめなみのりふねのをとのよきかなといふ廻文の歌を書添て元日か二日の夜敷寢に惡き夢を川へ流す呪事なりとぞ又年越の夜も敷ことあり故に冬の季ともいひたり然るに二ツある物は前するを季に用ゆ新年をとゞむるためなれば此理近かるべしといへるもありされども玄札老功たり既に脇にする時は如何にも春たるべしといへるも有けり（同祿已後は萬治元年なり）これをみれば江戸にはそのかみより元日か二日を用ひしなり兩日定まらざりしにや船の綺內裏より公卿に賜るは二日なりとぞかゝる故なるべし

廻文の歌

○又この廻文の歌のこと【和訓栞】に此歌は聖德太子秦川勝が惡夢をけし給ふ呪歌なるべし【詠歌本紀】にみゆ心得がたし云々歌の心は十の眠にて十界をいふ長夜の眠の中に十界を流轉すみなめざめは皆目醒なりといへりをとは音なるべければおとのかななり廻文なれば拘はらぬにやいつの頃の歌ともいまだ定かならず

○【似我蜂物語】に柳綠花紅柳非綠花非紅この句にある人古き歌をかりてよみけるながきよのとふのねふりのみなめざめなみのりふねのをとのよきかなとあり禪錄の趣意分明ならず此歌古きものとはみゆ、また【日本風土記】（五）琴譜廻文詞とてこの歌を載たり乃革氣搖那多和耶揑不里那谿乃谿索谿乃谿那里不揑那和多那搖氣革乃。此譜倒讀三字、語意理相同故曰廻文（此下釋音あり略之）切意十人共揃夜

過て云々【日次紀事】の説は誤れりいつにても節分の夜のを初歩とするなり今江戸にて元日をおきて二日の夜とするものは其故をしらず（晦日は民間には事繁く大かたは寢るものなしこの故に元日の夜はいたくこうじていぬればさるまじなひ事などは麁略にしたるよりの事にや

寶船

○寶船の繪は【安齋隨筆】に古代の書にこれを正月の枕の下に敷こと所見なし京都將軍の頃既に此事あり【澤民】阿彌、將軍家の同朋大永天文永祿の頃なり）【覺書】に云貞孝御調進節分御舟繪所は一兩年上京小川扇屋にて合書之訖又其後狩野法眼弟子に能右近と申仁御被管人御扶持人候其時にかゝせられ候又其後公□様光源院殿御代に某福山新五郎時御舟の繪の事公□様朽木より御上洛二條妙覺寺に被成御座候其時貞孝樣は御宿妙藥寺と申所に御座候公□様と□臺様は大引合御舟二ッ又御道子御所々々様は小引合上﨟中﨟御末女迄は杉原□入次第およそ調進或時節分御何書候て御入候へば御所々々様の御舟不足にて俄に福山繪付持て歩れとの御使被下二條春日御局さま御ゑんにて御舟を書申候彼節分御舟相阿彌むかし繪圖ありそれにて調申候云々右の文をみるに昔は節分の夜たから舟の繪を用ひしことみゆ、貞孝は伊勢守なり將軍家の政所職なり貞孝より寶舟の繪を獻ぜしなり御道子は御曹司なりとあり節分の夜のことは其ころのみにあらぬ上に見えたるがごとしまた【見聞集】に節分の夜鬼は外へ福は内へとおさめ煎豆をかぞへ舟をゑがきて敷などするを鬼やらひ共歌連歌に詠ぜり是は大内にてのまつりごと萬民これを學べり【佐夜中山集】節分と人には告よたから舟節分の舟やふとんの島がくれ【懐子】書て寢る繪も御座舟と申べし【宗因千句】舟はそのむかし〳〵の夢の夜に幾節分をかさねきにけん此村にくされいわしの頭してなどあまた見えたり船の繪むかしは何やうにかきたるか彼相阿彌がかきたるよしの摸本あれども眞否はしらずそれは唯米俵を積たる船なり其心をおもふにいねつむといふことにや年の初め寢る事をさ云ふなり【消暑漫談】に寢臥と尋常の如く唱ふるは病床などに紛らはし

に侍りし故に世に山田のつと入といふ今は絶ゆといへり【續山井】に花の宿やこれもつと入いせ櫻(如貞)これ亂世の時の習風なるべし【松漠紀聞】に金國治盜甚嚴云々唯正月十六日則縱偸、一日以爲戯、妻女寶貨車馬爲人所竊、皆不加刑、是日人皆嚴備、遇偸至則笑遣之、既無所獲、雖畚钁微物、攜去婦人至顯入人家、伺主者出接客、則縱其婢妾盜飲器、他日知其主名、或偸者自言、大則具茶食以贖(謂羊酒餚饌之類)次則攜壺小亦打餅取之、亦有先與室女私約至期而竊去者、女願留則聽之、自契丹以來皆然、今燕亦如此、このこと【虜廷事實】などにも見えて正月十六日夜謂之放偸と有これまつたくここに云ふつと入なり思ふに十六日藪入といふ事もつと入より出たる名にや

○元の代は異風にて此事などありしなり【帝京景物略】に上元のことをいひて元時三日放偸々至笑遣之雖竊至妻女不加罪夷俗哉といへり又走百病をやどおりのことに充るは同日のことながらたがへり同書に云婦女相率宵行以消疾病曰走百病又曰走橋金ありきて氣ばらしするなり

○初夢【古事談】(二)業房龜王兵衞の時夢に御前を被追却門外へ被追出と見て後朝康頼にかゝる夢ぞみつる年始にふくたのしき事なりとあり初夢とはなけれど初春の夢を祝ふなり【山家集】に立春の朝よみける年くれぬ春來べしとはおもひ寐にまさしく見えてかなふ初夢【守武千句】に山ぶしにもやことしならまし正月の一日の夢にとびをみて【佐夜中山集】元日發句の内「門松は今朝の初夢合せ哉【日次紀事】に凡初夢者自大晦日夜至元日曉之夢也故舊年晦日之夜禁裏貼畫船於白帋而賜宮方及諸臣地下良賤亦以畫船布臥榻之被底寢今晦日夜有吉夢則來歲得福云若見惡夢則翌朝(元旦也)付是於流水是謂流惡夢斯船内畫種々珍寶故稱寶船近世是亦鬻梓而兒童賣市中この説にては除夜の夢をいへり【一代男草子】二日節分のことをいふ處くらま山にさそはれて一原といふ野をゆけばやくはらひのこゑゆめちかひはくのふだ寶船賣などいわしひいらぎをさして鬼うち豆よひより戸ほそをしめてかけがねといへる坂を

開帳又は寺々四十八夜千日萬日の廻向とて人集めなど曾てなきに寛文八申年萬日の回向始り夥數參詣あり毎年三四月有之人集めするなりと有り其頃より打つゞきて開帳も有しといふにや慥に記憶もなきはさまで賑はひし開帳もなかりしとみゆ）京難波などにはありもやしけん【京童】に岩やの不動は厨子戸帳にこめたり開帳度々あり明暦已前のことゝしらる【狂歌咄】に去る辛亥の彌生のころより百日のほとくらまの毘沙門開帳とて京ゐなかよりまうでつとふこれは寛文十一年なり又此ごろ岩屋不動開帳云々同十二年の事なり西鶴が【大かゞみ】に天和三年四月河内國藤井寺の開帳おびたゞしく賑はひしよし見えたり【二水記】永正十四年四月十一日法輪院盧舍那開帳之間爲參詣とあり開帳といふ名も古き事なり【本朝文鑑】に戯佛辭とて光廣卿の作といふ善福寺の御本尊云々有馬山の夕霧わけて是までの來迎こそ有がたけれ云々あるは京師へ開帳の爲にみだの尊像來りしにや然らば此卿有馬に入湯の時の筆すさみとするは非なるべし

開帳の奉納作り物　嵯峨釋迦

○【五元集】に年々の春秋武江の寺社に廻り給ふなる靈佛靈神君を守りのあとしめて興廢の御感現あらたなる中にも當時の開帳はさかの御寺と札をうたれて官獨鄰馬のさかひに舟をなやます霍亂虫氣のさはりもなく蟻のごとくにまうでつとふ行程の遠近を辻番にたづねてまはらばまはれ振舞水の下向道【瞻の緒手卷】に延享頃のことをいひて池の端の辨天の開帳有て繁昌したり造り物に大なる蛇を文錢にて拵へて上たり又根津の方より辨天の島へ八ツ橋をかけたり又近來拜橋の長谷寺の開帳（本尊は忘れり）されにて五緒の車を拵へ本所回向院にて圓光大師開帳に遊女花紫十二挑灯を上たり（寶曆元年）次て三圍稻荷の開帳に黑天鵞絨にて牛を作れり其後（明和の初）護國寺に秩父三十三所觀音の開帳ありし其頃より開帳もさびれて造り物上るさたなし云々（予が幼かりし頃も諸々の開帳に少ツヽの作り物奉納は有しかど年月よくも覺えざれば委しく記すことを得ず深川永代寺に成田不動開帳の時鳶職の龍供并權現に米俵引作

說神呪經第二妙見者北斗七星云々三井日尊星東寺名妙見天文家號文昌星妙見是跡身といへれば又一層の混合なり後世は擧人自己是を祈るのみならず放榜の日鹿鳴宴といひて進士に賜ふ料理の菓子を前日より魁星の像に供へ置なり【照世盃】に阮江蘭といふもの放榜の日を待てあるに閑寂なるによりて街上を行て見物する處撞到應天府門前見一座亭子内供着那踢斗的魁星兩廊排設的盡是風糖膠菓云々此に船來する踢斗また文昌像畫圖はもとより銅像瓷像もあるものなり

三十年開龕　開帳の奉納作り物　嵯峨釋迦　善光寺如來　本田義光　秘佛　今出川藥師　梅若像　下總諏訪明神像　本尊流落　開帳のぼり　散米　くま　はなしね　打まき　さんぐ　十二銅一ツゝお米　緣日

三十年開帳

【櫻陰腐談】に三十年開帳のこと【資治通鑑】（二百四十）唐記曰憲宗元和十三年十一月功德使上言鳳翔法門寺塔有佛指骨（法門寺有護國眞身塔々内有釋迦牟尼佛指骨一節）相傳三十年一開々則歲豐人安來年應開請迎之【通鑑綱目】（四十九）憲宗十四年正月遣中使迎佛骨至京師留禁中に三日歷送諸寺王公士民瞻奉捨施惟恐弗及といへり【唐書】を撿するに元和十三年十二月迎佛骨于鳳翔とあるが始にて其後懿宗咸通十四年三月迎佛骨于鳳翔とありその間五十五年なり二十五年遲きはいかにぞやもとより大數にて定まれる事にもあらじこは開帳のふるきためしなるべし【增鏡】瀧のもとには不動尊この不動は伊豆國より生身の明王のみのかさうち奉りてさしあゆみてをはしたりきその蓑笠寶藏にこめて三十三年に一度いださるとぞうけ給はる云々されど本邦に古へは今のごとく本尊を持出して開帳などすることは聞えずそは慶長よりこのかたのことなるべし【色音論】にむさしの江戸くわんをんは三十三年すぎて後御戸を開かせ給ひけりとあり【享保四年日記】正月晦日淺草觀音開帳當年三十三年罷成候依之開帳之儀淺草寺より相願當三月十八日より同五月十八日迄開帳仕候由代官中屆來（貞享四年開帳の後なり【昔々物語】に神社

ちして其後とんだかはねたか音もなく止ぬ

魁星
文昌星

○書籍の表紙に魁星といふものを朱印にしておすこと明の代よりなるべし【史記】（天官書）文昌六星在北斗魁前天之六府也主集計天道この故に俗文昌を魁星とす魁前六星は三台東壁文昌紫微少微奎壁なりこれをすべて文昌星といふとなむ【五雜組】に俗以魁故祠文昌以祈科第因其近斗也故亦稱文昌司命云傳會甚矣といへり書籍にその圖をおすことも此故なり鬼の斗を踢形は魁字謎なりまた手に筆と銀を握れるは【堯山堂外記】に天順癸未崑山陸文量といふもの會試に上りて京にありしが戯れに魁星の圖を描き左手に筆右手に銀一錠を握らしむこれも謎にて必定入手の意なり其圖のうへに題して云天門之下有鬼踢斗癸未之魁必定入手また蜀地に梓潼祠あり其神はもと張惡子といへるものにて晉に仕へしが戦死したるを土人廟を立てまつる靈ありければ唐宋のころ封じて英顯王とす道家者流云天帝梓潼に命じて文昌府事及人間の祿籍を掌どらしむといひ出て終に梓潼帝君と號し天下の學校にこれを祠祀する者ありといへり（節録々の怪説は諸書に出たり）是によりて文昌帝君彼魁星と混じたりおのれ戯に文昌像を造れることを有り其文を次に錄す造文昌星像記、余家舊藏小竹根一座彫鐫古雅、前面括傦上刻魁星踢斗之像、是必妄文昌星像之圖而佚其像者也、余爲製塑像置之、因考諸書所載、文昌六星在北斗魁前、故誤謬于斗、制以祈科第、又至以蜀地梓潼神爲文昌化身者、不經誕妄不堪笑也、所謂文昌帝像明人所畫者世不鮮焉、此恐梓潼非真像按明史元加號梓潼爲帝君、而天下學校亦有祠祀者、景泰中因京師舊廟而新之、歲以二月三日生辰遣祭云々、是其像所以多傳播也、然未聞文昌別有其像、故余所造亦依其樣、或人非之云、鄙諺所謂人有識心鑑頭須有靈應、雖然以鄙物與尊名、宜闕疑可也、余云此像真爲文昌則本邦無科第制誰祈之者乎、若爲梓潼則與文昌無涉傳會甚矣、是極屬無用閑物、而我只愛文昌之名、爲翫之耳、故姑以此命爲文昌、彼梓潼於我何有焉、今子將以此比草鞋大王耶、抑與我所爲之旨異矣（文政戊子冬日）【桜陰腐談】に云ふ按七佛所

笛鼓の藝能あり當國所々に住居す（是神功皇后の御時磯良の故事のよし藝能神前委山城國離宮八幡の社檀の左右に冠着たる人形の頭手付たる板あり細男といふよし右【寶石類書】

○【山城名勝志】に【八幡離宮遷座記】云日使者貞觀二年四月男山遷宮儀式也云々瓦屋綱戸院等在地之輩勤仕之此祭に細男と云有兩人形是則武內明神高良明神也云々【八幡宮寺年中讃記】に云日使（四月三日）是一鄕萬代之勤役也自山崎辨備云々臨晩陰有日使相列來自山崎之孤村儀式同于京洛之大臣隨身策馬其蹄如龍雜色裝束異彩飾新爰主人冠間掛紫藤而蹁跹舞男巾子挿紫櫻而鮮姸彼等乍騎馬三般先廻神庭令下馬一面相對御殿各刷再拜衣袖この四月三日の祭を日の使といふ其盛りなりし程の舞人の形をいさゝか木りにて造りしは神事衰微の時のことなるべしそを後にあらぬ附會をなしていひ傳ふる事とおもはるゝなり

祭日異體

○【北條五代記】に氏直旗本の武者奉行の中に福島伊賀守といふもの生れつきことのやうにて大男大髭有て風俗いちじるし一とせ小田原久野の入に神祭あり諸侍見物す伊賀守も見物せんと牛の角に銀箔をおしあかねの大ぶさ鞦はづなを付おのれは草刈の躰にて腰に鎌をさして牛に乘り彼向て尺八を吹き女に紅染のかたびらさきの尖りたる桔梗笠を着せて牛をひかせ力者一人に長刀をかつがせあとにつれ祭見物せしを皆人興がるふるまひとて笑ひしかども惡難をいふものなし町人これを見て侍の形儀正しき北條家にも異形を好む人ありけり但伊賀守は武勇の至る故にやとぞさたしけると有こは見物にはあらで見物となれるなりむしろ東大寺の正賓があらかひことによりて賀茂祭の時裸身に干鮭を大刀にはき牝牛に乘て一條大路をわたりしをみな人興がる事にいひ侍べりおもふに太秦の牛祭はこれらにならひしものなるべし其祭文を源信僧都の作といへるはうけがたし後世祇園などの祭りのをり俄といふことたくみ出る人情古今かはる事なし

阿波大杉

○【下手段義】享保年中常陸の阿波大杉の神あそこへもまふこゝへも飛給ふと云ふらし山王祇園をも欺くべき大祭毎日晝夜七日ほどはうかれ立たるをきびしく御停止仰付られ夢のさめたる心

また同草子夏日民家旱損を歎き氏神の社頭に風流をかけ雨乞に太鼓はてれつけ鉦はてんき笛はひよりや〳〵と吹たとあり又【房総志料】に安房國長狭部不動の祭は七月七日なりふりうといひて村落組をたて二十七番と別ち何れも越後獅子を傚り舞ふりうは風流なりと里見氏開國已前よりの俗なりと云ふゐなかには古言殘りたり又かくるとはかけられし方よりも返しするなり（盂蘭盆のかけをとりみなさあることなり）神に祈るにかくるとは似合ぬことなれど其ころ風流をかくるがならひなるべし【藤簑波】に盆になりうてやふりうな鼓鉢（重利）

細男

○山崎離宮八幡の拜殿の內左右に長さ五尺餘の板にて作りたる人形冠着て首ばかりまろ木にて彫たるが胴も手も板にて白くぬり膝の程より下は黒くぬりたり手の長さ四尺ばかりにして二ツあり背に綱をつけてこれを引けば手をあげさげするやうにしたり其體今童の手遊に板にて作れる熊と金太郎の相撲取かたありそれに似たる物なりこれ細男とて祭儀に用るものといへり按るに【榮花物語】（わかはへ）枇杷殿（妍子）の大嘗の日內大臣（敎通）內に參られ女房の中に交りおはす處このなみゐて見給らんめどもはさはれたれどもしられたてまつらねば御靈會のほそをとこのてのこひしてかほかくしたる心ちするにこの內のおとゝのほゝゑみまぎれさせ給ぞいみしうわびしきこととなりける云々細男が覆面したるをいふなり春日若宮御祭禮圖に細男六人神樂舞奏之（立烏帽子白張ツキムシロ敷）二人座して笛を吹二人覆面を垂れ膝に鼓を付片手にて打ながら立出て跡さまに退き座す又二人覆面をたれ右の袖を掩ひて立舞り立出跡さまに退く二三編如此とあり【茅窗漫錄】に字佐八幡緣起を引て云ふ神功皇后將征異國干時白髪老人來而示導曰磯良島有守磯良者宜召之借干珠滿珠於龍王云々又云此童細男舞又名男良舞爲之使來云々（男良舞は奈良舞なるべし春日をもとゝするに似たりもとより此緣起古きものにはあらじ

○【春日若宮御祭禮記】細男六騎白御幣二本案摸二人（大宿所より出る）白張立烏帽子同樣にて馬上

之不屆の仕形に付段々御仕置被仰付候事猶國々所々新規の祭禮無用に候云々

風流
放免附物

○物を飾りて觀ものにするを風流といふ彼放免の附物なども風流なり【古事談】永長元年大田樂のことを記す處三十餘人裝束の式兼て被仰定紅帷有風流云々差貫有風流などみゆ是即附物なり【徒然草】に建治弘安の頃は祭の日の放免の附物に異樣なる紺の布四五たんにて馬を作りて尾髮にはとうしみをして蜘の圍書たる水干を着て歌の心などいひて渡りし（雅俗ことながら今のねりもの俄なども趣似たり）こと常に見及侍りしなれども興ありて云々この頃はつけものとしを送りて過差こと外になりて萬のおもき物をおほく附て左右の袖を人にもたせてみづからはほこをだにも持ずいきつき苦しむ有さまいと見ぐるしと有り布四五たんの馬をつけたらむは人にもたせではかなうまじ又後の過差なるをいはむに其旨たがひぬべしこは書寫の誤ならん【屠龍工隨筆】にもこの事をいひて布五六寸と有しならむといへりそれは又あまりに小くていと興なし四五尺などにや尺と反と字もまがひやすし（放免は字義のごとく犯しあるものをゆるして撿非違使の下にめし使はしむる者なり今世のめあかしの類）

○古圖は文永賀茂祭の鉾持春日飾馬圖の舍人などの衣裳に付たるみな作り物を付たるなりこの賀茂祭の圖に車にも笠にも風流あり車のことは前にもいへり中には種々の樂器を吊りたり【著聞集】に後鳥羽院の御時南都の僧六人に風流棚をめされたりけるにめん／＼にしたてゝ參らすとて棚ごとに歌をよみて付たりまた【桂川地藏記】（弘治二年記なり）在々所々風流囃物品々區々不可勝計者也

ふりうの面

○又ふりうの面といふこと狂言にあり【醒睡笑】にも七月風流を他鄕に掛る太郎左衛門といふ地下のとしよりなればかれがもとにて集りならしけり狂言をするものうつけたる土民にこのえぼし風流に入ものぞそちに渡すといひをしへ即かのでゐにおきぬかくて一兩日も過風流をかくるみち／＼にてえぼしが有かとといふに中々あると答ふ唯今狂言に出る時えぼしをこひければ太郎左衛門殿の出居にあるとの返事

根津權現祭禮 寶永祭

○根津權現祭禮は其頃はやり小歌に寶永祭はみごとなことよ誰も見にゆけゆきたばいさ老後の思ひ出も是なむめりだん〲けいごをひきつれ〲よるなさはるなかたよりゆけ塗笠お手に持てしどけのないのかサンサ見事へこれ根津權現祭禮によりてのことわざとかや【江戸砂子】に古社は太田備中守殿造營ありしとなり其後寶永三丙戌上より御建立あり同年十二月四日に遷宮なり（寶永二年酉五月九日谷中根津權現宮御普請被仰付御手傳淺野土佐守へ神田明神宮近處にて御普請小屋場被渡候）御祭禮有べしとあらましはかりにて寶永中にはなかりしなり正德四年甲午九月二十二日大祭只一度にて止ぬ其頃の番附をみるに江戸中はもとより本鄉駒込邊よりも出三町四町程を一組として凡五十組出たりこれを寶永祭とはいかにぞやこれは寶永中に京師に六孫王の祭りありて寶永祭といひしことなり彼はやり歌も其時の歌にて是を江戸に流布して正德の祭りの頃うたひしなるべし彼是まがひて此祭を寶永祭と誤り傳へしなり享保三年戌六月朔日山王根津明神祭禮向後三年目に相勤可申段先達而被仰付候處此度根津祭禮勝手次第に相勤候樣被仰付如舊例向後は山王明神隔年に相勤候御樣被仰付候に付當九月祭禮執行仕候樣に芝崎宮内へ申渡る（手前日記にあり）正德六年七月一日改元享保となる十一月十四日元四日市根津御旅所御宮并町屋共取拂先規之通團小路に被仰付此社地上納地千三百十一坪

練物

○元祿十六年五月十三日先日山王御祭禮練り物帳面差出候處大傳馬町練物之内御菜島御供持と傘書付有云々南茅場町藥師別當智泉院方にて承り處此邊を御さい島と申候儀承傳候併文字は不存書留の樣成候も無御座古へ此邊より御の用御菜上候樣申傳候御菜島とも書可申哉と存候右日記に有之）

○深川八幡祭禮練物出しは元祿十四年八月始なり

○元祿十六年未五月九日元鳥越明神祭禮ねり物出る

秋葉祭

○貞享二年丑十一月の觸書に今度於遠州秋葉祭と申ならはし在々村次に送渡末々にて人多集り他國迄送

監藤家恒川左京太夫源信短山川民部少輔藤朝祐七名字は堀田尾張守紀正重平野主水正清原業忠服部伊賀守平宗純鈴木右京亮穗積重政富野式部太夫藤道資光賀大膳太夫菅爲長河村相摸守平秀清也今に子孫尾張津島にあり又良王の庶男兵部卿良新の子孫津島の大神主として氷室兵部が祖なり七名字庶流神官となつて相續す天野信景云津島神主往古のこと詳ならず應永年中或は永享七年井伊谷宮の御孫良政始て神主に供せられし然れども子なくして卒す故に小田井大學介定恒大橋一族なり神主となり中島郡氷室村を領す此故に稱號を氷室と呼云々いへり然らば難波にて陸地を車にて牽する作りものを壇尻と呼ぶも原天滿の祭禮に舟をかざりしを彼津島祭の舟に准て臺尻と云しが轉れるなるべし

氏子

○氏子【兼邦百首歌】の抄に云惣して祇園の社司が二條の南側より五條の北側までこれに生るゝものを氏子といひ二條の北がはより大原まで御靈の氏子といひ一條ほり川より西の方を今宮の氏子といふ五條の南がはより九條迄此内に生るゝ者を稻荷の氏子と號すること更に無本說事なり所の神とこそいふべけれ云々【南留弊志（四）】神社に地をさかひてこゝ迄は此神の氏子なりといふは神封の地なるべし後には封戸なき神にも其まねをしていへるは誰が許したるにや亂世には人も神も心まゝに地を領せるなるべしされども神いくさなきはいかにぞやと有り例の先生誤れり元より今いふ氏子の義なきことは勿論なり氏子とは藤原氏の春日社橘氏の梅宮におけるが如く其祖神を氏神としその子孫なれば氏子といふなり土地をもていふものは產土の神なり【神名帳】に宇夫須那神社とあるもその義なり氏子を古は氏人といへり【風雅集】にみかさ山その氏人の數なればさしはなたずや神はみるらん（寛文元年丑六月二十七日御觸頃日町中の子供山王へ參候とて大勢寄合夥しき祭がましき事仕參詣いたし候由被爲聞召候自今以後山王にかぎらず何の堂社へ參候共常の裝束にて參詣可仕り候若重て左樣に祭ヶ間敷仕り人集致候はゞ越度に被仰付候間家持は不申及借家店借等まで申渡堅相守可申者也）

をいへり【雑兵物語】に指物の眞先に出しと云ものがある旦那が出しは酒ばやしだ見失はぬやうに云々【武者物語】下野國佐野天德寺宗綱入道の內に松田金七郎秀宣といふ侍大刀にて鳥毛のほろをかけ一方へ九尺ヅヽこれあり鹿の角の金にてたみたるだしを出し武者押をしたりとなり

○昔は端午のぼりの頭に種々のものを付たりのぼりも今世のやうに一對にして立るはなく幾本立るも一本づゝのものなり故に彼の出しといふものもみなかはれり【五元集拾遺】なよ竹の末葉のこして紙のぼり是又五月のぼりの出しに笹を付たるなり笹を付るは今も神祭ののぼりにはあり西川祐信が【三ツ物繪抄】麵類の汁と隱して色茶屋へ行か同じと是を端午のぼりといふ心はだしがいりますといへる是なり

宰尻

○宰尻【兵家茶話】大橋家傳を引て云ふ後醍醐天皇第八の宮尊澄親王其御子兵部卿尹良親王は信濃國大河原と云處にて御生害あり其子良王永享七年十二月尾張津島の大橋三河守定省が館に移り給ひ十一等の士相議して定省が次男大橋中務少輔信吉が奴野城へ入參り各々從仕し奉る信吉母は尹良御女櫻木上州寺尾より供奉し來る士は宇佐美作右衛門平貞幹宇都宮三郎兵衛藤綱忠開田越後守源政安野々村兵庫頭丹波秀長等なり此四人を十一等に合して世々津島の十五家と云永享八年六月十四日津島牛頭天王社內に尹良を若宮に祭り奉て初て祭禮を執行ふ法式は船十一艘かざりて十一等の者おの〳〵家紋の幕を走らかし名字官名を書記す源是祭り執行ふことは同國さやの宰尻大隅を討べき計策なり大隅が一族大矢部主税助親り忠にて宰尻が乘たる船を十一艘の船にて討沈めて宰尻討たとはやす今に其例有之となり後良王は天王の境內に御座し大橋岡本恒川山川の四家奴野城を相守る大永四年織田備後守信秀同彥五郎信友三千餘の兵を率して津島におし來る十一等の人々津島を燒拂ひ早尾に退て相戰ふ信秀坂井右近をして扱はせ信秀の女藏子を小島日向守信房が養女として大橋淸兵衛重長に嫁して十一等の人々織田家の縁者となりて是より織田家に屬し所々にて功勞あり十一等を世に四家七名字と云ふ四家は大橋修理太夫定基岡本左近

とあり今は其子細をしらざる名主などもあり
○【五元集】に山王の氏子として「我等まで天下祭や土ぐるま「番付をうるも祭のきほひかな【錦繍緞】秋の暮王子へいそぐ五香とり（仙花）神田祭に出す兄弟（キ角）【俳諧染糸】の千句に鬼の出しといふ音もせずいやしきは面白からぬけふの能祭りの酒と寝が樂み（こゝは難波人の作なり又【醒睡笑】にゐなか祭ありて能太夫をやとひに出る語ありと覺ゆ）祭りなどの見物も其時に當りて就中興ある物を出す事は今も昔も變る事なし田樂などの諸所にいさゝかづゝ殘れるもその故なり其後は猿樂なるべし人形作り物等にもこれを用くだりては歌舞妓なれどもさすがにこれは用ひざりしが近世より作りものにもねりも

拍子

のにも專ら此事となれりそれにつれて拍子ものなども古風は間ぬけの心ちせらる大鼓を打てどん〳〵かゝと拍子とること古きことゝ見えたり【きのふはけふの物語】に山王祭を御らんじて候かいやいまだ見申さぬといふさらばひやうしをふみてきかせ申さうとて大宮のはやしはのんのやのさんわうまつりすこ〳〵〳〵やさてもおもしろきひやうしぢやとありまた【屑龍工隨筆】に十二神樂と號して色々の面をか

鎌倉拍子　品川拍子

ぶりて立舞ふ太鼓の拍子鎌倉拍子品川拍子とて二流ありといふ品川拍子は品川の天王社より發りたるとや古き社とみえたりといへり鎌倉はいづれの社より起りしか其外しやうでん馬鹿ばやし等もしれず多く葛西より拍子するものを雇ふはそのかみより然ありけむ又祇園ばやしは京都祇園の林の名なり後に其社にてうつ鼓の拍子をもしかいへり【犬子集】に（春可）山鉾にぎをんはやしのかつこ哉

だし

○我衣に祭禮のだしは本來出しあんどうとて火をともして宵祭をもとゝし當日神輿を送るに用ひたり然るに祭禮書をもとゝするに至て行灯を用ひず依て其形を表し今に至て胡粉にて塗やうにはなりたりといへり此說非なりそは津島また天滿の祭などを心えていひしことゝしらる江戸にはもとよりさることなしこの出しといふものもと笠鉾と山とをかねて作れるものなり出しといふことはもとはた幟の上に付る物

松といふ舞樂堪能の者あり此人下て江戸を住居とし三年に一度の神事能をつとめて今に絶ず【落穂集】よ暮松太夫は秀吉の能太夫江戸に來り大傳馬町益田助左衛門取持佐久間平八が子供をも弟子とし神事能興行す暮松沒し又北條氏直の師寶生四郎左衛門江戸に來り神事能に出ければひいき多し暮松が子孫は太神樂打の頭となるといへり

○【江戸鹿子】年中行事條九月十八日神田明神々事能保生太夫勤諸人見物す【事跡合考】明神々事能は享保の初までは保生太夫凡百年に餘り代々これを勤めしが失脚不足の由とか辭退して喜多十太夫を賴み是を勤めしむ只一年喜多勤めし已後永く止たり今も右能道具入置候土藏一ケ所社地に有之を町中より失脚にて修覆致し來るといへり（寶永五年九月二十五日神田神事能太夫之儀喜多七太夫脇春藤又七狂言大藏彌七郎笛一噌又八郎小鼓幸清次郎大つゞみ高安三太郎太鼓觀世左吉弟子同七年九月二十三日神事能寶生太夫相勤正德二年辰九月二十六日神事能寶生將監相勤同五年九月二十六日寶生太夫享保三年戌九月十八日神事能喜多十太夫同十月二十日神事能入用高金六百二兩ト銀三十九貫七十目一分一厘外に太夫へ祿金五十兩の業小手形二百五十四枚帳面二冊とあり神事能此後絶たり

○寶永六年八月十八日神事能之儀町中名主共より願書差出去年舞臺燒失仕候に付例年と違ひ外に六百兩程入用御座候町中困窮仕候間當年神事能御用捨可被下奉願候

○【柴一本】山王祭に次て淺草三社の祭神田明神と次第に出づ是は神田祭いまだ上覽なき時なればなり

○祭禮番組のこと慶安五年壬辰六月十四日明日御祭禮御供之儀例年不作法に候故今年より町々へ組々の札を出遣候間先へ參る事又跡にさがり候事も不成候間其段能々相心得順能御供可仕候と有り是始めなり

○とり猿の造り物の外も今は次第定りたれど番附の札を年番の町年寄役所にてしたゝめつかはすことはそのかみ役所にて次第を年々に定めたる故なり今も祭禮の時巾渡の中に此方より渡す番付札の題と云こ

祭禮番組

尤去々年之通繰出し與力相止三軒手代不罷出神事能之儀も當年延引可仕旨仰出さる往古は當社神田橋御門の内にあり年々竹橋より神輿乘船にて小舟町神田屋庄右衛門といへる者の宅前より上らせられ陸地通行ありしよし南畝が【武江披沙】に云り御城内へ入らせ給ふは元祿元年辰より始れりとなむ

屋臺

○右兩祭禮ねり物に屋臺とて夥しき高欄臺のうへに人形あまたすゑ立花樹岩石等の形を作り牛二匹三匹を以て引しむるものは極て後來の所爲たり傳馬町麹町等御入國前よりの町々は出しばかりを用ひて屋臺を渡すことなし是を以て知べしなどいへり【五元集】鷄句合(七十左)一番の勝を佐久間が吹流し判に云

傘鉾

々氏の御神の力なければ勝方一番の祭をつとめ奉る云々(大傳馬町名主佐久間平八元祿の後斷絶す【異本洞房語園】山王神田兩所の御祭禮に傘鉾を出しあたご參汐くみなどは禿の中にて器量をすぐり粧ひ出したれば一きは目立てみえし【我衣】に云ふやたいといふもの正德年中まであり其始は寛永ころよりも有けるにや大に興ある事になりしは元祿の頃より初たり享保年中御停止ありやたいといふは一間に九尺ほどに床を作り手すり高らんを付て其内に人形二ツ三ツすゑてすそに幕をはり其内にて鳴ものをはやす後には二間に三間ほどの大やたいをしつらい我勝に大形に成たり明和元年【川柳點】寄合をつけて踊子牛に乘せ(難波にて檀尻といふもの是なりされど牛車にはあらず)元祿の頃までも俠客はやりて此屋臺には必名ある者をやとひて乘らしむ【關東俠客傳】腕の喜左衛門といひしもの神田明神祭禮の家臺の端にのりしが野邊の忠三郎といふ目あかしをきり殺すと云り

神田神事能

○【北條五代記】に坂より東の靈神其數擧て記しがたし然る處に能の祭は江戸神田明神に限りたり明神託宣によりて毎年九月十六日に神事能あり然る處上杉修理太夫藤原朝興武藏の國主として江戸の城にまします大永四甲申の年北條左京太夫氏綱江戸を責落し上杉を亡し武州を治め給ふ是にて申の年神事能なくして次の年にあり是吉例なりと氏綱仰有てより以來中一年隔て三年めごとに神事能あり京の八幡に喜

に前々より有之しが社地せばく火事の時類火あやうしとて赤坂溜池の上松平主殿殿山屋敷を明暦二年火事後に宮地と成）【柴一本】山王祭禮は以前は毎年行はるゝといへども中頃隔年にあり云々（延寶九年辛酉六月山王御祭禮あり其歲神田明神御祭禮幷神事能當年は相延候間左樣相心得番々にて支度無用に可仕候此旨町中可相觸候酉の八月十二日町ぶれ）正保四年【梅岬】にさいつごろよりけしからず暑時の祭りに其身綿入の衣を着て重き物を負腰には米錢ゆひ付て人々かゝへ通る有さまはいき苦しくせうしなり云々身に應ぜぬわざどもねり物の出立にことならじといへりそのかみのねり物かゝる類ありと見ゆこはえたうましきことをして興を催すなり今の人情にはをかしからずされど危うき輕業を見るも同じ心なり

祭りの露拂

○祭りの露拂は山王町なり傳馬町より諫鼓苔深して鳥驚かぬと云ふ詩の心の造物定りて出る南町十一町一の笠鉾なりかさぼこの上に金の烏帽子を着御幣を持たる猿とつくまひをする猿とのつくりもの必す出る其外は年によりかはる弓町よりは大弓鍛冶町よりは大太刀必すわたる或はやたいを作りて車にのせ牛に牽せ或は銀の千貫箱を車に積で鼠の面かぶりたるものに引せ又は鹽くみ云々又花籠をもたする云々

ほろ

大ほろ小ほろ吹ながし大名唐人山ぶしの形を似せて出るもあり大よそ定りて出る作り物次第は【江戸鹿子】にしるしたりほろは師宣が繪などを見るに散髮に鉢卷したる男筒袖のじゆばんめくものを渾身にはふりきて背に大ほろを負つたを付て兩手に持ゆく手がはりの男一人添そのあとにそり下ゲ奴の替わるを立髮の奴二人大小の刀さし高く尻からげて六方をふみ行たり【事跡合考】に山王祭りは元和の後御座たとして上覽あり

神田明神祭禮

○神田明神祭禮上覽し給ふことは元祿中よりの嘉儀にて有之（正德二年九月十四日明神祭禮御上覽場近所へ相詰候樣被仰出とあれば其前年まで上覽なかりしなり）故享保中一度停められし事も有しが又々もとのごとし享保七年壬寅九月十五日神田明神祭禮相濟但先四月御觸之通練物之屋體無之井警固人數減少

すなはち獅子相撲とも申とかやしからば尤興あることにや【續古事談】(五)京極大殿賀茂云詣々右府生敦重ほねなしといふあがり馬に乗てふたゝび落にけり云々あがり馬とは跳りはねなどする馬をいふほねなしとは此馬の名なり其さま彼わさに似たるに依ての名なり【古事談】に久我大相國胡飲酒を忠方に授られて後相國の申さるゝ詞に天性無骨者候之間幽玄の處をえ舞候はぬなりこれも同詞ながらあら〳〵しきかたにのみいひたり今もいふ詞なり)村は群と同じ一むれ二むれなどいふ稲を積たるをいなむらといふもおなじ大嘗會の標のごとく色々飾りものからくり人形など作りたるにてこれ今の山鉾の權輿なるべし其時停止はありしかど例の詫宣も有り火災などありしかばやがて又制せらるゝ事もなかりしなるべし

○【公事根源】に祇園御靈會十四日この祭の日は禁中はことなることなし馬の長など催し遣はさるれども御覽はなし【管見記】永享五年六月七日 祇園御靈會室町殿於京極治部大輔許令見物給毎年儀也また【康富記】嘉吉三年六月七日祇園祭禮也神幸井山鉾已下風流如例渡四條大路者也今は山鉾とひとつにいへども山と鉾とは異なりまたおもふに年ごとに同じきも有べけれど錺物は其時々かはれるなるべし今のこと定まりたることにはあらじ)【尺素往來】祇園御靈會の處に山崎定鉾大舍人笠鷺鉾所々の跳鉾家々の笠車風流の造り山八撥獅舞在地之所役定叶於神慮乎晚頭に白川鉾入洛云々【貞德文集】(六月一日條)祇園會云々幌掛鎧武者踊子放下彫木摺絃召云々(同七日條)應仁之亂已來京都衰微山鉾人形作物不改古用來ル長刀函谷放下船之外は鬮次第定前後相渡候犬神人警固逸興犬神人者清水坂之絃習之事にて候也と見えたり函谷鬪の鉾をあほうぼことといふとぞ【續山井】つのめたつけいとやらせつあほう鉾(重香)【洛陽集】あほう鉾眞長ければ恥多し(順也)のげぞつて見るや余所目にあほうぼこ(一樂)山鉾の名はこと〳〵は【俳諧水鏡】に出づ近世に至りてはねり物又俄などいふ新奇なる事さへ出來ぬ

あほう鉾

○江戸には櫻田山王神田明神の御祭禮壯麗なり(山王御社地麴町御堀近所掃部殿屋敷道をへだて北の方

江戸山王御祭禮

山鉾

たり其後豐臣公の頃再興ありしなるべし此山鉾の始を考るに大嘗會の標にならひて作りたるものとみゆ

大嘗會標

大嘗會の標は【續日本後紀】天長十年十一月戊辰御豐樂院終日宴樂悠紀主基共立標悠紀則山上栽梧桐兩鳳集其上從其樹中起五雲々上懸悠紀近江四字其上有日像日上有半月像其山前有天老及麟像其後有連理與竹主基則云々悠紀樂標則大象之背結構小臺命兩童子擎青障子其書日【周禮】日旄人掌樂也云々其障子後起煙霞々中造杭隨舞人之出進而擧其舞名其象之左有一胡人而馭象これはその時々に種々に作るなるべし【類聚國史】弘仁十四年十一月冬嗣公緒嗣卿の奏によりて此度大嘗會一切玩好金銀鏤刻等の餝を停めらるゝ由ありて唯標者以榊造之用橘井木綿等餝之即書悠紀主基字以着樹末凡清素供神態耳とあるは淳和天皇御即位の年なりさて祇園御靈會の山は天延二年より二十五六年經て【外記日記】長保元年六月十四日云々今日祇園天神會也而自去年京中有雜藝者是則法師形也世謂无骨實名者(頼信世間交仁安)等者件法師等爲令京中之人見物造村擬渡彼社頭云々件村作法宛如引大嘗會之標仍令□左大臣此由觸被下停止之宣旨隨仍仰檢非違使奉此由檢非違使馳向彼無骨所擬追捕之間件無骨法師等在前關云々逃去已了爰檢非違使召以還向且令申彼社頭無骨村停止之由于時天神大忿怒自寶殿盤硯師僧蹤落即付邊下人作託宣云々此間今夜亥剋許從修理職内造木屋發火災内裏悉以燒亡云々この年より五とせさき正暦五年疫癘はやりて六月二十七日疫神の爲に御靈會を修せられ御輿二基を造りて北野船岡上に置れ讀經などあり會集の男女夥しきこと同記に見えたり是は祇園の事ども聞えずされどもそれよりしてかゝる事企つる者もありしとしらる

无骨村

無骨とは字義の如く骨なきやうに輕はさなどするものにや田樂の種類とみゆ(その法師實名は信頼世には仁安とのみ稱せしなり等者の二字衍字なるべし牙骨は藝の名にて人名にあらず【三十二番職人歌合】獅子舞われながらおぼつかなしやほねなしがなにをちからに世をわたるらん判云獅子の舞はなくて骨なしの一能を取出ぬる傍題とも難申べき云々此骨たしといふことはかならず獅子舞の後帶する能にて骨なしを

十五日【山槐記】曰近衛使車袖(分注)前右後左臨時祭舞人袖前左後右透竹褰(已上注)物見(分注)透網代文牡丹唐草(已上)簾(虫損云々)棟結(有總)鞦(總入燊)右記之意者車前後袖亘立舞人透竹褰臨時祭者岩清水賀茂兩社臨時祭也其舞人體共相同着青摺袍其人形をほり物の如くに作りて車の袖に立なり云々物見者殿上人所乘用不切物見(切物見設窗懸小簾)仍物見の所彫透篋篠之上其間牡丹唐艸至簾者有虫損及筆誤不通銅薄は今俗に云ふ眞鍮之薄也箔付葵紋也葵者賀茂祭尤有緣擧卷者結總角垂總稱棟結者未考得鞦總入燊者總之末入玉燊玉燊は氷精シトヽメノ金物也云々あり此風流車の體文永賀茂祭の畫中に見えたり一覽すれば了然たり

飾り車

○【枕双紙】に祭り近くなりて其心かまへに色々の染絹など取よせもてあつかふ事ありてわらはへのかしらばかりあらひつくろひてなりはみなゝへほころひうちみだれかゝりたるもあるかけいしくつなどの緒すけさせうらをさせなどもてさはぎいつしかその日にならむといそぎはしりありくもおかしあやしうをとりてありくものとものさうぞきたてつればいみじくちやうさと云法師などのやうにねりさまよふこそをかしけれほと〳〵につけておやおばの女あねなどのともしてつくろひありくもおかし此處の抄に江次第女車六兩童女在此中といふを引りこゝは裝ひたてゝ車にのらぬ程をいふにやその趣かしつきの女などのことと今世祭事のねり子供とかはることとなし此祭り今はたゞ神馬に蓋をさしかけ神人あまた供奉し樂人行樂を奏す誠にかう〳〵しくはあれど拔面の附物などのねりものも見えず祇園は山鉾わたること絕ずして是また諸祭に勝れたる壯觀とす

祇園祭

○【雍州府志】に【山門慈惠記】を引て曰圓融院天祿三年以祇園爲日吉末社同天延二年五月下旬云々是祭禮之始也また祭禮六月七日を用ることは寬喜三年にして【祭禮次第儀式】の版は後圓融院の宸翰なりこれを祭日錦袋に納て黃衣の禰宜携へて供奉すと記せり祇園會の山と云こと【狂言記拾遺】の中に見え

三面頭戴寶冠云々右手持海甘子左手持鼠嚢とあり鼠嚢などいふは似かよひたれど全體相違せり殊に黄色なるをいかで大黒とはいふべき【禁中行事】にも十月子祭は大黒天神を祭り黒豆飯を供へらるゝとなり

橋板

また橋板にて大黒の像をつくるといふ事むかしより有り【堀河百首題狂歌】（如竹）橋板で作り奉る大黒やふくとく〳〵とわたすなるらん又（讀人不知）大黒のけふねとりもつ子の日かな二葉の松を大根にして（二股の大根を供する事もゝとより有しなり）【蓬紘輪】橋でふまれて後に大黒と云ふ付句あり又古き川柳點に橋大工どれをくれても三枚め

夷子講

○夷子講商家十月二十日正月十日を（江戸にては正月も二十日なり）もて蛭子神を祭る蛭子は廣田の神なり【舊事記】（神武元年記）豐蛭兒大神海守亟得幸市守買得幸田守種得幸云々これなどに據るなるべし二十日十日を用ることは【日次紀事】に古へ市の日取ならむといへり此神をえびす三郎殿と申は何の故にかあらん蝦夷は鬚毛多く鰕に似たればえみしといふこれえびすと普通へどもそれにはよらじおもふにもと伊奘諾伊奘冊二神の喜言を發る陰陽の理りにたがひ給ひし故に蛭子生れて三歳まで御脚立ず棄られ給ふこと夷の正しからぬにたとへ三郎殿とは初生の御子ながら末子に准へて申すにやさらば不敬の稱なれど拾君など申意と聞ゆ【貞德文集】に此三幅對掛講毘沙門辨財天惠比須三郎相見候云々此神魚を釣給ふよしはみえねども海上に放棄られ給へば漁人の如くに作れる物なるべし

　賀茂祭（餝車）　祇園祭（山鉾、大脊會標、无骨村、あほら鉾）江戸山王御祭禮（屋臺）　神田神事能　拍子　出し　氏子　寶永祭　風流　放面附物　細男　祭日異體　御菜島　阿波大杉　甜屋　文屑屋

中古より祭といへば賀茂に限り其他は何祭とぞいふなるこれにても殊にいみじき祭式とはしらる【新野問答】に賀茂祭日近衞使中宮等使餝其車施種々風流者治承三年右少將顯家朝臣五節風流也爾來雖書化龍過差無及之代々聖主惡其醜客禁其過差然不用其制符罪之以解官猶無懲人情不可移如此云々治承四年四月

猿和歌「つく〲と浮よの中を思ふにはまじらざるこそまさるなりけれ、みずきかずいはざる三の猿よりも思はざるこそまさるなりけれかやうの歌七首あり大炊御門御手跡書賛ありとぞ【醒睡笑】（四）姥が詞におさるまちとて人のとりを限りにお待ある云々これは庚申待をいふなり山王の七猿ゝとより庚申に關らぬ事なるべきを世人是を庚申に附會したるにや

○【雅宴醉狂集】先年叡山中堂の邊にて土中より堀出したる猿の像あり其うちに最澄刻之と銘あり此像長七寸云々慈惠大師とて七猿の歌今世にもてはやす其趣をみれば此道にかなはず笑べし傳教より慈覺智證慈惠まで此傳なかりけるにや但し慈覺智證の間に三猿と金剛を率合せる歟また傳授ありながら傳教の附會にやいぶかし七猿の畵像世にあり酒をくみ舞かなでなどして遊興の體これ取にたらず七猿の口傳別に有云々見ゆ何の傳授口訣かいとおぼつかなし未得歌「うき事はみざるいはざるきかざるに顔あかめあふ限せんなし

甲子待

○甲子待（何待といふことはすべて其時になる迄眠らでをるをいふ古歌に十七夜を立待十八夜を居待十九夜を臥待とも寢待ともいふ【魚の歌合】の判に二十日の月をふけまちといへり）【半井卜養千句】に身にしめて大黑まひをみやいのふ酒すぎぬればしらずねまつり

大黑天

○大黑天の事は【南海寄歸內法傳】（唐義淨撰）に西方諸大寺處咸於食厨柱側或在大庫門前彫木表形或二尺三尺爲神王狀坐把金囊卻踞小牀一脚垂地每將油拭黑色爲形號曰莫訶歌羅即大黑神也古代相承云是大天之部屬性愛三寶護持五衆使無損耗求者稱情但至食時厨家每薦香火所有飮食隨列於前云々これにてこゝに祭る大黑神異なるさまなるを知べし大已貴命を大國主神とも申すを大こくと稱し率合したりとかやこの神袋を負給へる事また鼠の仕へまつりしことなど【古事記】に出たり天野氏云大黑天神は頭に帽を冠り

三面大黑

右手槌印左手囊を執仿にあらず荷葉に乘しむともいへり三面大黑は【聖寶藏神經】に寶藏神身黃色二臂

呪歌

夜誦彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中去離我身注に今按毎庚申向寢而呼其名三尸永去萬福自來と有り此誦文もと何に出たる歟三彭の名も異なりこの誦は庚申を守るにあらで寢るが爲なりとみゆ其說もまた相違せり今俗彭申の夜の誦歌にしゝむしはいねやさりねや我とこをねぬそねたるそねぬそねたるそ（此しゝむしを或はしやうけらはとも云り）こは【袋双紙】に庚申せて寢る誦文しや虫はいねや去ねや我床をねぬれとねぬそねゝとねたるぞといへる是なりしや虫は唯むしといふことなりしやは罵詞にて古へしやかほなどいふを今しやツつらと云は是に同じことを誤りてしゝ虫と俗に云は外の歌とまがひたるなり【拾芥抄】に志々虫鳴時歌ありしゝむしはこゝにはなきそしらはゝか賤かやにゆきてなきをれ（下句二もし足らず誤あるべし）【袋双紙】にはしゝ虫鳴時しゝむしはこゝにはなきそしゝらはゝかしこのしづかとにゆきてをれと有（安齋云しゝらはゝとは死さうならば也あひしらふひきしらふの類なり今も夏より秋かけて草むらの中に小き虫のきり／＼すに形似て青く夜になればシイ／＼と鳴あり是を馬追虫といふ其鳴音につきて古はしゝ虫といひしが死々と聞なして忌ゆゑまじなひの歌あるにや）【正章千句】双六は身體がけに打なれて寢たるぞねぬぞふかす申まち【天香樓偶得】に上尸名彭倨次名彭質下名彭矯云々余想此身本空洞々地安得有三尸在內蓋彭字之義字書一訓作近而倨傲之性質見之性矯戾之性人々有之所謂三尸矣帝者不過謂人之性情一近於倨傲一近於質見一近矯戾則罪過日多而上帝覩之如見其肺肝然其所謂守庚申者正欲人斷除此三種性情方可入道也其必限以庚申者蓋矯取更新之義申取申明之義欲乘此時以自申明其功於逆改耳豈眞有三尸哉

七夕

○【尤草子】物いはぬもの都粟田口に三猿堂といへるあり中尊はいはさるとて口をふさぎてあり脇立はみざるきかさるなり傳敎大師の御作なり公事さたにかゝつらふ者此お猿を迎へて我家におき對決の場へ出れば必その公事勝になるよしいひ傳へ侍りぬ（【京童】青蓮院條下にもみゆ）とあり又慈惠大師山王七

日滅、被玄靈伐命、至夜半起坐端策、私誦玄靈名彭倨彭質彭矯、七遍無令耳聞也、依守清淨法、勤用消息之、宜織晝不睡、六甲庚申日守之亦耳（耳字は可字の誤にや）黄庭曰晝夜不寐乃成眞此之謂（【頌陽經】曰童子者心神也衆神之主、玄靈惑人耳目鼻口身意、玄靈者三尸六甲神同遊內外其神咸有色象觸物、皆欲令人重車馬玄黄聲利飮食、多有求欲、不知止足、行妨身辱也云々）【太上三尸中經云】人之生也皆寄形於父母胞胎、飽味五穀精氣是以人之腹中各有三尸九蟲、爲人大害常以庚申之日上上告天帝、以記人之造罪分毫錄奏欲絶人生籍減人祿命令人速死々後魂昇于天魄入于地惟尸遊走名之曰鬼四時八節企其祭祀祭祀既不精即爲禍患云々凡至庚申日兼夜不臥守之云々など見えたり頌陽經の說までは人の欲心は三尸の所爲なる故に三尸を去とは即欲を斷事なり然るに三尸九蟲の說に至りては其蟲人の罪惡を天帝に訴るとすまた頌陽に甲子日夜半起坐云々六甲（六甲は甲戌甲申甲午甲辰甲寅甲子なり）庚申日守之亦可といへるを三尸には常以六庚日晝姓名安元命籙中三尸不敢爲患也といへり其說おなじからず（三尸のかたには六甲をいはす）

○【寂照堂谷響集】に庚申を守ることは佛法になきよしをいひてまた問を設て云ふ庚申の本地を青面金剛とす青面金剛は【陀羅尼集經】第十卷曰大靑面金剛呪法呪曰云々又壇法及畫像の法を說その內片言も庚申彌猴等の因緣なし只利を好むもの强て附會して庚申の本尊とするものなりといへり

○三猿の形はもと天台大師三大部の中止觀の空假中の三諦を不見不聽不言に比したることありそれを猿に表して傳敎大師三ツの猿を刻めりとかや今の粟田口のは新しきものなりと【遠碧軒隨筆】にいへりしかれども【山州名跡志】に金藏寺に俗にお猿堂といふにある三猿の像は傳敎大師の作にてはじめて他所に安置すゆゑ有てこの處に移せりとあり

○こゝにも中世陰陽家の說行はれて庚申を守ることはやりしに藤氏御一門の庚申守るを止られし事【榮花物語】古事談などにみえたりされば民間にもいたく流布して今も路傍に多く祭れり【拾芥抄】に庚申

といふことも佛家の千部萬部といふにならひ又年の暮に卷數を檀家へ贈る事にならへり【異本四季物語】正月の條五日の敍位につとへてかみの そのふの御札あけところの法師また神人など榊の枝の本末きりて文杖など覺ひて御札さしはさみ宮の內のかみして奉れりなどみゆ彼一萬度の祓箱に幣を立四手を付て獅子舞どゝもてありくこれは伊勢の吾鞍(アクラ)川より出るを學びて諸州に大神樂とてあり（大般若の理趣分また眞言陀羅尼を千度も萬度もよむ を功德ありとしてその讀たる數を記したる札を卷數と云て檀家へ贈る）

日待

○日待は【二水記】永正元年十月十五日今夜御日待例年也とみゆ中世已來密家道士に習合してかゝる事あり大かた一條院の御後は佛事のみ盛んなりしまゝ正しき神事もなく應仁よりくだりては朝廷おとろへし御事にて世俗に異なることとなかりしなどいへり下つかたに非禮の祭祀などする理りなり近世西山公は日待月待ともに禁ぜられし日待の事は益軒翁の【歲時記】にも論じたり【安齋漫筆】に月待日待の待は祭なりつりの反ちとなるにてあきらかなり子待は子祭巳待は巳祭なりといへり鷲大明神に十一月酉日に詣るを酉の待と云ふも同例にて酉の祭なり又代待と云も代祭にて代參の意と知べし

庚申

○庚申【雲笈七籤】（八十一）庚申部ありえうなきことながら錄すべし其法もと慾を去ことをむねとす三尸三惡門とは【上淸元始謂錄太眞玉訣】に第一門名色慾門、一名上尸道一名天徒界、第二門名愛慾門、一名中尸道一名人徒界、第三門名貪慾門、一名下尸道一名地徒界、此三惡之門、一名三尸之道、一名三徒之界、常居人身中、塞人三關之口斷人三命之根、遏人學仙之路、抑人飛騰之魂、爲學之本而不落尸於三道之上去慾於三界之門、眞何由降、道何由成、夫學上法、宜遣諸慾滅落尸根道自然成、克得飛騰上昇三淸また三尸の名は上尸靑慾白號彭倨云々中尸彭質號曰中黃愛慾自居云々下尸彭矯貪慾自榮白色（【群談採餘聰鄕代醉】等に載るところ三彭三尸の名と異同あり）又六甲存室子去玄鑒、法又有甲子日辰其人年月命算

侍か是等の句手帳なり長あるべからずいかなる處手帳に侍るや舟の中にて馬の煩ふ事はいふべし西國の馬とはよくこしらへたる物なりと有こはかねて手帳にとめ置て取出し用る意にや

居所の柱に歌を書く

○居所の柱に歌かきしことと往々みゆ又こゝにても古人神社に詣てよめる歌を書付けることゝ見えて【今物語】に住吉へ然るべき人の參らせ給ける折ふし神主經國京へ出たりけるが人をはしらせて住江殿など掃除せさせよと云やりたりけるにあまりのきらめきに年比しかるべき人々の書おかれたる歌ども柱なげし妻戸にありけるを皆けづり捨てけり神主ぐたりて是をみてこはいかにせんと足ずりをして悲しめどもかひなかりけり是を見て古き尼の書付ける「世中のうつりにければ住吉の昔のあともとまらざりけり是は承久の亂の後世中あらたまりける時のことなり

祭會

御師

祭會　御師　日待　庚申　呪歌　三猿七猿　甲子　大黒　（三面大こく橋板）　夷子講

神職を御師といふことは佛家の稱呼をとれりいにしへ祈禱などたのみて常に往來する法師を師の御坊などいへり【菅公須磨記】に白大夫といへるをのこ伊勢より年々問來り我家のかたはらなる宿をかりのやどり所となむせしに（沙門惠岳といふもの注に伊勢の人今の御師やうの人なりとかけり又或人云【神宮古記】に貞觀二年大内人高至度會氏の繁榮を岡崎社に祈りしに男子をふた子を産ことつゞきて三年六人の男子をまうく六家となれり其末に生れたる 春彥といひしは 菅神に親く交り今北野の末社白大夫とあるは是なり）云々この記もとより僞書にて菅神御筆にあらぬ事明かなりしかしながら近世のものにはあらず【伊勢勅使部類】に御祈事殊可御祈禱之旨可ロ本宮御師并祭主宮司また【東鑑】に年來御祈禱師被付權禰宜光親神主云々いせにばかり御師といふにあらず【親元日記】寛正六年正月二十四日春日御師（刑部少輔師淳）と見え又四月八日去月二十二日就武庫御訴訟之時宜爲親元立願春日社御馬一疋（栗毛）引進之御師（積佛院西方へ渡遣之）九日春日御師園豆二籠進上之などみゆ伊勢御師が檀家へ配る御祓一萬度

御祓一萬度

數多く詣ること幾度と定めあるにあらずその人の心に定むるなり【枕草紙】初午の條三十餘りなる女のつぼさうぞくにはあらでたゞ引はこへたるが丸は七度まうでし侍るぞ三度はまうでぬ四度はことにもあらすひつしには下向しぬべしとあるは坂道を下りのぼりし一日に七度詣るにや【今昔物語】に或侍の男清水へ二千度詣たりなどいへるは一日のことにはあらじ【源氏】(手習卷)みたけさうしの處を【花鳥餘情】に金峰山の精進には後夜於庭前禮拜金峯山百度すと云々一段きふき精進なり

百度

千社參

○千社參は(明和七年撰の【江戸名物鑑】にもみえず安永このかたのことなるべし)神社のみにあらず佛寺にも詣するに千社參りといふはいかゞなり麹五吉とかいへるはその始の頃の者にやそれが札は文字をば書たるにて板にて摺たるにはあらずこれらは其徒の中にて廣く知られたる者となむ唯人にしらるゝを手がらとすいゝ益なき戯れなり又落書してありくものあまたみゆこれは神佛ある處のみならず橋にまれ家にまれ何にも木にも墨くろに書ちらすいとうるさし千ケ寺參鶴海提亭が願をろし其日に仕舞ふ京の千ケ寺

物詣の落書

○【醒睡笑】に順禮いろはをだに習はぬ者なりしが西國物詣の落書をせんまでに生國姓名これより外は一字もしらすといへる物語ありそのかみより矢立もちありきて往くさきざきに名を書ちらすを落書といひしたり【宗因千句】に案内しりの旅の道中落書はあの辻堂や愛の宮(此句【懐子】にも書て名を一幽とありこは宗因がもとの名なり)【續山井】落書をせんとや壁に筆つむじ(林利)漢土にも行たる處に名を題する事はあれ共そは文人墨客などのする事にて(慈恩寺の雁塔に名を題する事は進士張莒といふものより始まれるよし【劉公嘉話錄】に見えたり)下劣の匹夫文盲のものどもすべきことにはあらずかくのごときすさみを今俗にてちやらうらくといふは是は唯手落なるべし又似たる詞あり【去來抄】に船に賴ふ

手ちやうらく

西國の馬といふ句に許六長點をかけて先師に問ふ先師(桃青が事なり)云ふ今は手傚らしき句くきらひ

廿四所 廿五ヶ所の靈場

州上總下總常陸上毛下毛北國伊勢一身田まで廿四所えり出して參詣すこれより淨土宗は法然上人ゆかりの所を廿五ヶ所紀州誕生寺より始て順拜すこれを廿五ヶ所靈場と云）その外洛中にも卅三所のうつし何くれの靈場とてめぐる所多くあり江戸もまた同じく巡るべき所多く設けたれ共（卅三所觀音も東西南北におびたゞし其外九品佛參六地藏四十八所藏八十八ヶ所弘法大師巡拜あり【大進夜話】に江戸八十八ヶ

七福參り 六阿彌陀詣

所は寶曆の頃淺間山上人本願に依て移す所なりといへり）早春は七福參り只にぎはへるは春秋二分に六阿彌陀詣なり（【俳諧おろし】中村龜玉が高點「六阿彌陀居つて拜む人はなし）それのみならず千社參りな

千社參り

ど云ことさへ出きぬかゝるたぐひの事も先蹤あり【山槐記】云治承四年三月廿一日癸酉、自今日禮百塔、

百塔

始自法成寺終于清水寺、自卯時及秉燭云々、今日禮四十五基、毎塔奉押摺寫塔、廿三日今日猶百塔殘廿八基、辰刻禮常光院塔、（六波羅入道相國泉亭內）及法住法性觀音寺とみゆ詣る毎に紙にすりたる塔の形を粘

百寺廻り

してはりつくるなるべし又百寺をめぐることあり【詞花集】（第四）東山百寺おがみけるにしぐれしければよめる左京太夫通雅もろともに山めぐりするしぐれ哉ふるにかひなきみとはしらずや【長崎歲時記】に春の長閑なる時大人或は小兒かたらひつれて天神札又は婦女老婆は大師札打廻る村の天神社廿五箇所因て廿五社札と云ふ大師札は四十八箇所なり

新高野

〇新高野【武野俗談】は寶曆七年にかける艸子なり其內に三四年以來何方より風來せしや今弘法といへる賣僧あり云々これにはかられけるにや近ごろ中野の里鳴子村の近邊に眞言宗の余喜院にあらたに小き山を築て新高野山と名付て三千風がこしらへし鳴立澤の眞似して云々あり〇明和八年深川永代寺に築山泉水をしつらひ高野山を寫したり其後いつとなく高野山は止めにして泉水築山は殘れりと云

三塔順禮

〇【徒然草】に人あまたともなひて三塔順禮のこと侍りし（東塔西塔橫川の諸堂を拜み廻るなり）また

も出來めりいと近く寛文延寶ころの繪にも彼宗徒が御堂に參る處を書たる皆よの常なる麻上下の禮服なりはふりたる肩衣あることとなしされば夫れよりも猶後に作りたるものなり彼宗門にて女はかならず黑き帽子を着ることは綿帽子すたれて出來しなればはふり肩衣も大かたおなじ頃よりなるべしおひずりとこそ職人盡にもよみたれおひづるとは先あやまれりこれをもかの肩衣といへるは其ひがことと喪經の遺製よりもなほはなはたし

西國順禮

○西國順禮といひしは東國よりの名と聞ゆ物みめぐる事さま〴〵あり南紀山陽已東の國々を巡るに畿內の人もこれを西國と云ことと古し應永以後の札多くあり札は木にて作れるのみならずしんちうも銅もあり好事家これによりて札をうつことは應永ころより專らなりといへるは非なるべし花山院御札にかゝせ給へりと【新拾遺集】にあるをや

六十六部
遊行上人

○六十六部は【甲陽軍鑑】に長尾謙信十二三歲の時六十六部の聖につれ立奧州出羽關東其外所々めぐりふといへり心ざす事ある故なりことはかはれ共【塩尻】に一遍阿彌陀佛諸國を遊行して念佛を勸む正應二年八月二十二日寂せり其弟子亦他阿と稱す攝州栗河の極樂淨土寺に於て六十萬人の小簡を施し元應二年正月二十七日寂す三世の他阿より代々同號を稱して諸州を巡れり北條氏鎌倉の權を執行ける頃諸國の事を聞べき計に遊行上人の廻國夫馬の證印を出し心の儘に國郡を經歷し其留止の處にて守護地頭にもてなさせけり最明寺時賴入道國々をめぐられしといふもみづから忍びて出られしにはあらず遊行の事なるべしとかや

廻國順禮

○廻國順禮むしろなどにて腰當をなす足利將軍のころには武士毛皮の腰あてをしたる體の畫多し【太平記】（廿五）畠山入道其ころ常に狐の皮の腰當をして人に對面しけるをにくしと見る人や讀たりけん「はたけ山狐の皮の腰當に化の程こそ顯れにけん

四國廻り

○また高野大師を念ずる輩は四國邊路を廻り一向門徒は廿四輩といふことに出つ（親鸞上人出所の地蹟

は異なるよし見えてもし同所異名歟はた又有異説歟とありそは同所異名のやうにおもはるゝもあれどもとより異なるもあるべし（後に廢したる寺などある故なり）【懐子】（十）尊きに終はましらむ歌の道ほとけの御國ねがふ順禮（長好）順禮歌（御詠歌なり）と付たり此歌いつの程よりありともしらず其内しめぢかはらの歌は【新古今】（雜）に觀音の御歌とて出つ嵯峨の歌は（鷲の山再びかげのうつりきてさかのゝ露に有明の月）【續古今】に出て寂蓮の歌なりその餘はいとふつゝかなる口ずさみとみゆ

〇【三十二番職人盡歌合】に順禮と高野聖とつかひたり花の歌「おひずりに花の香しめて中いりの都の人も袖にくらべん判云高野居住之聖、諸國順禮之客、或期五十六億之會座、或約三十三所之靈場、共雖結佛道修行之果、立募人間榮耀之花、歌科更無甲乙、判詞難辨勝劣者乎また述懐歌「同行のめぐる御てらのその數に三十三の茶かはりもかな此繪にかけるおひずりは紺の袖なしはふりの背に白き布ひと幅縫つけたるなり是を【南留邊志】に衰経の遺製とおもへるはひがことなり思ふにこれは笈摺にて笈を負ふにそのあたる所すれて破れやすければ白布をつけたるものなりされば染たる布ならでもあるべきを今は赤き布をも付るは女のし初たりけむを後には男も着る事となりしにや【俳諧三疋猿】はゝきゝの今はつきりと日の移り供の祖父にも赤い笈すり正德元年五月二十一日近き頃町中にて疱瘡の願立の由にて小兒に順禮の着る物を着させ觀音藥師へ參詣致させ候こと仕ましくと有之御觸の由云々中いりの事にいふべし

〇【筵響錄】におひづると申事甚今按に候へども當時本願寺宗門の俗人かりそめに佛前牌前に向ひ候にも肩衣を着し候事彼宗門にのみ殘り平生朝暮の事故別に絹などにて調へ道場參詣の折は懷中して門前にて着る禮甚以殊勝なる事に候歟是むかし打かけ肩衣と申て事を略する時は袴を着せず肩衣ばかりを着せし事あり【宗五が記】にみゆ此餘風彼宗門の徒にのみ殘りたることゝ被存候件のおひづるといふ物もしや此打かけ肩衣の餘風なるにやといへり彼宗徒の肩衣を古くあり來し物とおもへるよりかゝるひがこと

おひずる

いへども在所の者信敬せざれば他人これをしらず然る處に近隣こまごめといふ里に人ありて淺間こまごめへ飛來り給ふといひて塚をつき其上に草庵を結び御幣を立おきつればまうでの袖群集せり本郷の里人これをみて我氏神を隣へとられうらやむ計りなり今みればこまごめの社立直しあけの玉垣前に大鳥居立しやうこん殊勝なり皆人これへ參る神は人のうやまうによりて威をますといふことと思ひしられたり靈驗あらたにおはしますといひならはし近國他國の老若貴賤皆悉く參詣し六月一日大市立て繁昌することと前代未聞なりと有り年月を記さゞれば駒込へ勸請のこと寛永以前とはしらる（その書慶長十九年書終とありこのこと考あり略之）

新富士

○【諸艶大鑑】みな月の夜をこめて江戸の新富士に參詣することあり人みな白衣の袖をつらぬ水道の流に身を清め行に松明たてつれて烟は風になびくとよみし山かとぞ思ふ才覺なる神主去年ふる雪を日陰に埋みおきてけふほり出す參らぬ人のためとて手ことにとりて歸るといへるは天和中のさまなり（新ふじといへるは本郷のもと地に對しての名にや白衣の袖云々今も彼行人共行衣と唱ふるものなるべし）

順禮

○順禮（三十三所、おひずり、西國札）遊行（百塔、百寺、三塔）百度　千社參　落書　手ちやうらく

三十三番觀音順禮

三十三番觀音順禮のこと【壒嚢】に寛平の帝（宇多院）御出家ありて眞言を益信僧正に受て灌頂せさせ給ひ法流を寛空僧正に授けさせ給ふ専ら桑門の御有さまなりしが御行脚のことはなかりし花山院御發心の後國々を御修行ありし是ぞ始めなるべき今の三十三所觀音順禮もこの法皇より權輿すといへり【新拾遺集】に修行させ給ひける時粉河の觀音にて御燈にかゝせ給ひける御歌花山院御製「むかしより風にしられぬともし火の光そはるゝ後世のやみ又【千載集】に三十三所の觀音おがみ參らむとて所々まいり侍ける時みのゝ谷汲にて油の出るをみてよみはべりける（大僧正覺忠）世を照す佛のしるし有ければまた灯火も消ぬなりけり卅三所も異同あり【拾芥抄】に卅三所を擧て或人の本と校合するに合點廿二箇所は附合廿一所

氷

○【物理小識】に置錢于盌、遠立者視之不見、注水溢盌、錢浮于水面矣、此猶日未出、而水光浮、日初出而不熱之理也、また理學者のいはく日輪の大さ地球よりも十倍なり天にも晝夜はなく地にも晝夜はなし人の居る處によりて晝夜はあり此政に少しも高き處にのぼれば早く日輪の出るをみる富士などにて日の出るをみるも是なり日輪地心の卯針に至れば日の頭は地より高く出ること數萬里なり地上の人これを望みて見るべきの理なり然るに水映の差にて見るといふは實理を得ず茶碗の錢近き理を引に似たれども大小のわきまへなきなり或云人の目の及ぶ處限りあり數十萬里を見るべき理なしといふは誤りなりこれは目力の及ぶにあらず日光の遠くさすなりなといへる實にはその理いかゞあらむ知べからず

○氷は食料のみにあらずもてあそびしものと見えたり【源氏物語】(かげろふ)明石中宮御八講の處ひをものゝふたに置てわるとてもてさわぐ云々心つよくわりて手ごとにもたりかしらにうちおきむねにさしあてなどさまあしうする人も有べしこの人は(小宰相なり)紙につゝみてみて御まへ(女一宮)にもかくてまいらせたればいとうつくしき御手をさしやり給ひてのごはせ給ふいなもたらししつくむづかしとのたまふ云々【延喜主水司式】云凡供御氷者起于四月一日盡九月三十日云々古へはいたくめでられしことなり【東鑑】に當炎暑節、取富士山雪備珍物、建長三年六月厭庶民勞止之と見えたり備珍物とのみあるはさして所用もなかりにしや

駒込富士

【江戸總鹿子】に六月朔日駒込富士參氷餅諸色市立なり富士權現(駒込村染井)此社百年ばかり(貞享四年よりかぞふれば天正十五年なり)そのかみ本郷にあり山上に大なる木ありそのもとに六月大雪つもりて有り諸人立よればかならず崇りありければおそれて社を立富士權現を勸請すといふそれより六月朔日貴賤參詣せしなり(【江戸砂子】云其舊地は加州家御屋しきの內なり寛永年中此地にうつさる云々加州家に雪を貯へらるゝはこのゆゑなり寛永は【鹿子】の說にも合はず)これらの說非なり【見聞集】に神田山の近處本郷といふ在所に昔より小塚のうへにほこら一ツあり富士淺間立せ給ふと

山上日出

さふらひ百姓と富士せんしやうに打交りおかまれ給ふ彌陀の三尊（自注に）彼山にては三尊を現におがむといひならはせり云々此山に日の出るをみて是を三尊の御來迎といふ實にことなる詠めなりおのれ此山に登し時は夕がたより霰ふりて神さへなり光りはためきければ劍の峯と云ふ高根より大なる石まろび落て止る處をしらずこれを拔石といふとなむ辛うじて八合めといふ處の石をあつめて屋に作りたり室に入てやすらふに鳴ることいよ〳〵はげしく九合めといふに落ね其響き頭うたるゝやうに覺えたり夜は灯火消えて暗けれども門に戸なければ外のかたをみるに星ちら〳〵と出たるは空晴たるにや風吹すさみて寒さ身にしみぬるに蚤いと多くいもねられず短夜の明るを待わびたるに東の方よりしらめるはとこやみのあけゆく心ちゝかくやといとうれしやがて朝日のかげ見えたるは尊くもめづらしくいはんかたなくて「天の戸をまたきにもれて朝日かげふじの高ねにさしそめにけりそのをりのことわすれねば筆のついでにかいつけつ

○不二山上觀朝暉、天邊獨立無双峯、眼下群山千萬重、東海晨光猶未闡、先觀昕日映芙蓉、凡日の出る樣は【典籍便覽】【邵氏聞見錄】を引て云登岱嶽絕頂伺日出、久之星斗漸稀、東望如平地、天際已明、其下則暗、又久之、明處有山數峯、如臥牛車蓋狀、星斗盡不見、其下亦暗、初意日自明處出、又久之白大暗中、日輪湧出正紅也、騰起數十丈、至明處全無光、其下亦尙暗、たかねより見る明がたのけしきまことにしかなりされどもこれには三尊めくことをいはず【癸辛雜識續集】揚州有趙都統號趙馬兒、嘗提兵船往援李壇於山東、舟至登萊、殊不可進、滯留凡數月、嘗於舟中見日初出海門、時有一人通身皆赤、眼色紺碧、頭頂大日輪而上、日漸高人漸小、凡數月所見皆然、また別條に云、荘元素聞之本師淵、曾見諸洛達可云、戊子十月內早出郭、日初出略無精光、其形如鏡、既而方、乃就圓、殊不可曉也、などといへりこは其域を異にしまた人のなすことさま〳〵なるにやあらん

僞りて其代ははや先にうけとれりなどいひてかたぐとらずかゝるさまに實あるきぬれば常に貧しくて彼山崎屋に金六兩貳分借りたるをかへす事あたはず山崎屋も是をはたらずして有しが身まからんとする頃これ返し奉らぬこそ遺恨に候へさりながら此報はかならず致し候べしといひしが後に其家のあたりより火出てみな燒しかどこの家ばかりあやうきをのがれたりければこはかれがむくひならんといひあへり身祿女ふたりあり姉をおまんといふは柳澤の家中黑木某に嫁しぬ妹おはなといふは一行と號し夫をもたず居たりしが求馬といへる浪人養ひて置り（此浪人後に鳩谷の三枝といへる富士講の先達がもとに行て居れりとぞ）身祿貧しければ二人の娘にとらすべき物もなく只糸と針をあたへおのれは身を容るばかりに少く厨子やうのものを作らせ是を背負て富士山にのぼり水賣十郎左衞門といふものはかねて相知れる故これをかたらひ山の頂にて終らんことをはかるに須山口大宮口等の者どもうけひかされば(ママ)やむことを得ず吉田口七合五夕めといふに彼厨子めくもの居その中に入て食を斷日毎に朝戸を開き水を呑で十郎左衞門と物語して終れりこの斷食三十一日が間水賣に物語したるを記して一卷ありそを見しにおこなること餘りにて笑ふにも興さめたり死後は水賣とり收しとなり（水賣が家は今田邊十郎左衞門とて北口の御師なり）

（【甲陽軍鑑】（十一）奉獻富士淺間願書あり其中に士峯萬山むろに於てひつそうしゆをうけ五部の大乘經讀誦の事とあり萬の山むろとは山中にある處の室どもなり今もむろといふひつそうしゆは苾蒭衆にやこの山に登るは必一夜とまるなれば【鷹筑波集】に一夜とまりに身をぞくるしむ（といふ句に本勝寺日能）足よはき人のいらざる富士參富士參詣群集の事【猿樂狂言】にも見えたれば半腹を横にめぐるを中道といふことなどは猶後のことゝ見えて【日次紀事】に近世以登山猶爲容易、而有巡山腰者、是謂横行道、又稱横出山上、其行程比攀躋、則倍道且險難不及言語、是爲苦行とあり又貞德が【獨吟百韵】に雪間をしのぐ邊土

譯定身祿がこと

俗言之新山、本平地也、延暦二十一年三月雲霧晦冥、十日而成山、蓋神造也とあり寶永の時に山のいできしにおなじ）

○【三代實錄】貞觀六年五月富士山燒【塵尻】に寶永四年丁亥十一月二十二日辰の時より駿州富士足高山のかたすばしり口おびたゞしく燃上り云々十二月九日頃に止富士の近國灰砂降これを除く人夫銀天下秋米百石の地に金貳兩づゝ課役かゝりけるに西國にてよめる「富士の根の私領御料に灰ふりて今に二りやうにかゝる國々」

○仁田四郎が富士の人穴に入て歸りしは一晝夜に及ばず

○富士山に登りて自ら餓死したる身祿といひし者あり伊勢國市志郡下河上の莊の產にて伊藤氏なり名を伊兵衛といふ八歳の時大和國宇田郡なる小林氏の者の養子となりしが十三歳の秋古郷に歸りぬ其頃江戸本町二丁めに富山淸右衛門といふ呉服店あり（淸右衛門後に甚左衛門と改）ゆかり有けるにや江戸に下り其店に僕となりて有しが十七歳にてそこをも退ぞき下谷邊の武家（小泉氏今にあり）などにも中間になりて居れりとかやその後駒込の邊にかすかなる店を借水道町に山崎屋半兵衛といふ油屋ありしに便りて油をうけ擔ひ賣しけりもとより富士淺間を信仰し歳毎に富士に登る事四十年怠慢なく六十三歳にて富士山半腹より上（俗に七合五夕めと云）の方にて斷食して死ぬ享保十八年癸丑六月十三日より初て食を止め三十一日を經て七月十三日午の刻にて終れりとそこのおもひ企てしは其ころ小傳馬町三丁目に葛籠屋あり富士講の先達にて名を光淸といへり此者は講中も廣く物ごと手廻りければ身祿常に彼に及ばざる事を歎き居たりしが光淸衆人を勸め富士山北口なる淺間堂を建立せり（光淸が家今にあり）身祿是をみて我力にては生涯に人の目にたつ程のことなしがたしせめて山のうへに餓死して名をとゞめばやとてのしわざと聞ゆ常に油を賣に貧しき者に借したる油代はいつまでも乞はずやう〳〵かへさんといふ時身祿

には皆髪を洗ひ油元結を用ひずちらしがみにて詣しが多かりし近年右體の童さらに見えずといへり

富士嶺登り初め

○富士の嶺に登り初たるはいつの程より歟知ず俗には役優婆塞に始ると云れど據なきにや又俗に此山を升の數一升に積り五夕一合といへるも何によれるかおもふに【本朝文粹】(十二)都良香【富士山記】に此山高極雲表不知幾丈、頂上有平地廣一許里、其頂中央窪下如炊甑、々底有神池、々中有大石、體勢奇宛如蹲虎、亦其甑中常有氣蒸出其色純青、窺其甑底如湯沸騰、其在遠望者、常見煙火、亦其頂上匝地生竹、青紺柔愞、宿雪春夏不消、山腰以下生小松、腹以上無復生木、白沙成山、其攀登者止腹下、不得達上、以白沙流下也、相傳昔有役居士、得登其頂、後攀登者皆點額云々【萬葉集】(十四)ふじの高ねの奈流佐波とよめる是なり有氣で蒸ゆゑに其形をとりて甑といひたるを今はお鉢料と呼(是は佛寺にて供米を御鉢料といへるに習へるなり)それより飯米のことになずらへ五夕一合といひ出しなるべし右の記山上に池中の大石のこと又竹ありと云るは疑はし其頃嶺に登る者なしとなれば何に因て記したる歟竹は寒地に生べき物にあらずまた俗諺に富士の砂麓に落れば其夜の中に頂にかへると云り似たる事あり【文事類集】に陝西鳴砂山、砂洲南、其砂或隨人足而墜、經宿復還於山上とあり

富士の高さ

○富士の高さは甲州上吉田村表口に高さ四丈三尺の鳥居ありこれより山頂まで三百五十七町十七間ありといへりされど山上にまた高き峯どもめぐり立り俗に八葉のみねなどいへりその高さ知べからず此山むかしより燒ぬけては烟絶たることしば〳〵なり【古今集】の序に烟絶しことをいひ【更科日記】にはけふり立のぼり夕暮は火のもえたつも見ゆといひ(空くらくなれば烟赤くみゆるなり)【十六夜日記】にはふじのけふりのすゑも朝夕たしかに見えしものをいつの年よりかたえしとゝへばさだかに答ふる人なしと有り山の燒出たることは【續日本紀】天應元年七月癸亥駿河國言富士山下雨灰之所及木葉彫萎【日本後紀】(廿卷本)延暦十九年庚戌三月十四日富士山巓自燒(この度のことを【都良香の記】に山東脚下有小山、土

垢離
大山詣
富士詣
千垢離

雜掌とたゞ兩人にて淀舟に乘り給ひて夜もすがら酒くはんか餅くらはんかとのゝしる聲に夢もむすばず御舟着しける頃夜はほの／＼と明たり雜掌さく夜のくらはぬかをうるさくおぼしめしけんと申ければ取あへず「くらはぬかくらはんかにはあかねども喰ふ蚊にあく淀の明ぼの

○【松の葉】長歌部に不二詣といふあり其内にうかれこがるゝ二挺たちに打乘ておもふ君をばはやみつまたのうへの茶屋よりわけよしがまねぐ云々兩國橋までのりつけてはな火／＼をめせさせかはんせ云々またかしこをみてあれば不二まうでのきやう人だちがさんげ／＼六こんさいしやうさんぶりどんぶりすぶどぶひよひよんにひやうたんを腰につけての水あそびもござんす【江戸總鹿子新增大全】に六月二十八日より七月七日に至る相州大山石尊に參る輩兩國橋の東にて河水にひたり垢離を取ておめく聲蚊の鳴がごとし七月十四日より十七日の朝に至るを盆山といふ此輩市人の中にて中人已下の者のみ也放逸無慚の者のみ多き事いふかしき由鶴下庵もいへりと有り（この書寛延四年孟春と序文にあり）【懷子】（四）行水に數かく垢離や富士詣など俳諧にみゆれども大山詣は古き發句などもなきにや年毎に富士參する者は大山にも詣するなり多年登山したるものを先達といふ其むれ／＼いとおほし是を富士講と唱ふ病人などあればその輩集りて祈禱をするに先千垢離とて河にひたり藁の錢さしを水中に投つゝ慚愧懺悔など唱ふるはいつも定まりたる時なし錢さしを用るは百度參よりおもひよれるならん【六玉川】大山にぬかつたものはたなむあみだ【江戸名物鑑】大山に山本宮内とありて書には納太刀と天狗の面をかけり（山本某は御師にや）その發句に夕だちやふとりし男いさぎよきこれらのたぐひの多く詣る事になりしは近きことゝ見えたり富士參りの出立も昔は異なり【風俗文選】（寶永元年許六撰）嵐蘭が富士賦に禪定の人は實冠に頭をつゝみ下向道は小袖の砂をふるふといへり今はかやうの姿するものなし

○或老人語に云ふ寛延寶曆の頃俗間の童子等駒込富士權現の祭（毎年五月晦日より六月朔日迄參詣多し）

水馬

なかりし今の如き見分あしく馬と舟とを便にして渡すことは更になしといへりそれより淺草川にも場所を取て近ごろは甲冑を着て馬に乘て渡る九歲十歲ばかりの者もするなり水馬功者になれりとみゆ寳暦頃には甲冑着て馬わたし又幼年の者馬渡しはなかりしとぞ今はその揚所淺草駒形町元柳橋大川橋の三所にて馬渡し有り【淮南子】に善游者溺善騎者墮とあるは川だち川ではつるといへる諺のごとし又うさぎ兵法こたつ辨慶蓮木刀などの類のことわざに畠すいれんと云へるも古きことなり【太平記】に朝敵蜂起の條此間畠水練しつる者共我先にと降人に出ける云々

浮沓

○今浮沓と云ものあり木にて筒を作り漆をぬり大筒は長二尺許小筒二ツこれは一尺二寸ばかり高さ皆四寸餘布嚢にこれを入大筒を中に入小筒を左右にし其間を嚢に紐つけてしめ左右嚢の口を麻なわにて括り端に紐を長く付赤身にこれを着る一ツの大筒背に當り二ツの小筒左右の乳に當つ紐を胸にて交へうしろにまはし左右の肩より又前へ取て結ぶ下にさからぬやうにするなり水心かつてなき者もこれを着れば立身にて泅こと自由なり高所より水中に飛入るに聊かも沈むことなしされども只川を泅ぎこす計にて衣服調度を持渡ることとなり難し水心ある者これを用ひ熟さば大に益を得べしといへり

うろ〳〵舟

○今うろ〳〵舟といふもの前に引たる【紫一本】に見えたれば天和已前よりありし物と思はる

○寛文七年板【吉原讃嘲記】るゐといへる太夫の譚に此きみれいがん島新川三ツ目の橋のうろ〳〵茶ぶねの與次兵衛と同じ處の人なり云々

くらはんか舟
つきつけ賣

○又淀川のくらはんかとうる舟その始はしらずもとより押うりに賣たる風俗の遺れるなり是をつきつけ賣と云たり【丹前能】(二ご)暮がたいそぐなにはの濱守□しめの佐太のみやひらかたの岸根に舟をつなげば奈良茶賣のとゝかゝ一二をあらそひ爰かしこより來り我さきにとつきつけ賣云々【芙蓉文集】(寳曆十三年刻)淀舟文「牛(ゴ)ン房(バウ)くらへ酒食へと呼すら所からの風流云々烏丸光廣卿一とせ難波へ御下向の時

○【開元天寶遺事】云長安富家子、劉逸李閑、衞曠、家世巨豪云々、毎至暑伏中、各於林亭內植畫柱、以錦綺結爲凉棚、設坐具召長安名妓、間坐遞相延請、爲避暑之會

扇流

○扇流といふ事は【雍州府志】（九）扇流在大井川中、古高貴遊覽時、浮金銀扇於斯川、而遺興云江戸には【洞房語園】便面記武陽に扇橋ちかきあたりの三股にて西吉が扇流しも昔々の唄となりぬ【安齋隨筆】にいづれの時かさが天龍寺の御成の時小童の持し扇風にとられて渡月橋より流れしを面白しとて供奉の人々扇を流せしなり其後五山の寺々御成の時扇流を屛風に畫きてそれより儀式のやうになりて御成には必これを立る事となれり古き屛風に此畫あるものと見ゆ【雍州府志】の說に異なり（いづれも慥かならず）

杯ながし

○【考槃餘事】に葉巵とて五色の紙にて木葉のやうに作りたる詩巵のことをいひて山遊時偶得絕句、書葉投空隨風飛颺、泛舟付之中流、逐水浮沉自多幽趣また杯ながしといふは曲水宴にもとづきしなるべし【俳諧染糸】波も手を出す盃なかしかな永き日足はわたる川端

水練

○水練水をあぶるを古語にかはあみといへり【日本紀】に游泳と訓したり【拾遺集】の歌の端かきに女の川水あみたる處といへる髮を川水に洗ひたるなるべし泳とは異なり古語におよぎをかくといへり【今昔物語】に美濃國因幡河出水流人語に男は舟にも乘り泳をも搔などして行云々

水掛あひ

水掛あひは【俳諧年浪草】に水掛合は【通俗志】に出たり是は水邊にて卑賤の者夏日炎暑にたえず水練の學にて大勢集りて其興に乘じて左右に分れて互に水をあぶせかけて勝負を爭をいふといへり【五元集拾遺】凉み舟泥ぬりあひし遊哉西鶴が【諸國咄】におよぎならひは瓢簞を身にまかせ浮次第に水れんの上手となつて瓜の曲むきすると有り一時の戲なりけんに昔より今にする事なり

○江戸にて士人の水練する始は近き事にて寶曆五六年の頃十人ばかりも出て兩國橋の下元柳橋の邊にて稽古したり又深川越中島橋際には未熟の者出たり其頃は馬に乘て渡るも乘こみ乘あげともに附添ものは

や但し西鶴こゝのことは慥ならぬを大よそに書たる歟）取交てのさはぎ世間も恐れず天下の町人なれば

こそ一日五兩の船賃は出せこれさへ奢と詠め行に河武丸といふ船に八疊釣の紋紗の紋屋乳緣ひどんす四

角の唐房匂ひの玉靡かせ軸簾の内には人も大勢あると見えし云々こは貞享元年に作りたる草子なり

○安永二年巳二月頃新大橋際三俣埋立地できぬ其頃伊豆天城山にて始て炭を燒同國仁科一色村文右衛門

と云もの運上金を差出し此事を營む炭を上中下に別ち賣に下の分は粉碎けたるこな炭にて蛤粉を燒に用

しが此時中洲を埋め築く者とも工夫してこれを買埋めしかばはか行て成就すと云ふ此處を富長町と名付

け觀場を設け茶店をしつらひ夏日納涼の勝地となりしが其中に賣女多く出來しかば（折ふし吉原燒て妓

家こゝに假宅せり）是を禁ぜられて家屋は引料被下置秋元侯御手傳にて寛政元年霜月より川浚始り翌二

年五月ころ迄にもとの如く河と成ぬ

○難波にては屋形舟を御座といふ明曆二年【懷子】（五）河逍遙「河御座の凉しくもあり今日の秋（藤昌）

やかた船といふ名もなきにはあらず【椀久物語】鷲尾に詣るところ淀のえだ川に屋形舟をかざらせ太夫

の禿ばかり十二人つくり若衆にしたて誰しのぶ關はなけれど京橋の町はづれ迄は幔に色をつゝみしが鴨

野といへる里のほとりより四てう三線引かけて一のやの十郎ぺふしにて大踊目なれぬ百姓は鍬かたげて

手はなつもことはりなり（此頃すべて踊はやれり）

○又【一代男】三げんやの處御座舟の内には外山千之介に小島妻之丞云々（みな野郎の名なり）むかひ

の岸には松もとつねさゑもん鶴川そめのぜうさほさしのべてはせ釣ふせいながめ也さゝ葺のかり湯殿鯛

すゝきの生ふね晝は済書して行水に扇流し夜は花火のうつりおのつと天もゑゝり此ふなあそび京の山に

はまさりぬべし又【西鶴道土産】にしのび御座ふねにみねのこざらしを乘せてえびす島の遊興といへる

は常の御座船とは異なる歟

船賃

御座舟

花火船

で合するも有り女をどり男をどり武士踊町人踊引汐に任せて流し舟にて踊も有さす汐にろを立のぼり舟にて踊もあり此屋形の外にをどり見物とて出る舟もあり月をみむとて出るも有り涼みに出る舟もあり餅賣酒うりまんぢう賣でんがく煮うりさかな賣冷水冷麥ひやし瓜蕎麥切めせといふもあり花火船をよびかけて一艘ぎりにたてさするしだれ柳に大櫻天下大平文字うつりゝうせい玉火手ぼたんや蝶やふとうに車火や是は仕出しの大からくりちうてん立傘御覽ぜよ火うつりの味はつかまつゝたり天下一あつ ちやあ〳〵とほむる有り北も南も西東こゝかしこにてたてあぐればたゞ日中のごとくなるに玉火の出る筒の音りうせいのあがる羽音人のわめく聲にて心しづかにこぐ船なしといへり此外に川武丸といふ有り（但し異本のかたには川市川武有り）【田舍句合】（延寶八年）第十四（左勝）月さそふ詩の舟か山市か川武か桃青が判云公任卿御歌の舟にのりて秀歌よみ給ふよしこれは是山一丸川武丸の舟ばたを敲ていかなる秀歌うたふにや（踊り舟古畫に往々見えたりそれらに右の文を合せみれば其頃舟遊びのさかりなる事江戸繁昌しそめてよりたぐひなかるべし近きころまた中洲に茶屋出來しころの賑はひを聞にかゝり船の小緣をつたひ舟から舟にかよへば岸に至らるゝ迄に舟こみたる事などありしとなん

○菱川師宣が【百女の双紙】すゞみ舟の處やことなき女中のやかた船に風をさそひすみだ河のほとりへ涼みにとて舟に棹うち廻し人を忍ぶのむすめ子ら三味せん琴などのつま音けふこそはいきとしいけるうちのおもひ出（元祿八年の刻なり）

○又【諸艶大鑑】にわすれては春の夜や花火のさかりをみんと淺草河の暮をいそぎしに九間市丸の大船金銀のかざり浪にうつりてみるに小座敷九ツ有に付て名のおもしろし云々また一間には晩鐘四郎かゝりのかはりまがきのつれ歌永閑ぶしの道行鐘の間には伊勢守が斗樽高砂屋の白味噌川越瓜の細縮青黛は大汁河豚はさしみ（鶏庭云江戸には此魚たま〳〵あることもあれといと〳〵めづらし昔はさらになかりしに

ひなば雨やのんせんふらんらんくもれば露のなさけなの月「世の人も酒もりをすたれ舟などにて小倉をどりといふことをうたふ其頃の歌にさすやうでさん〳〵さゝぬは忍ぶ夜のつまどおたまこがれてあきこがれつゝといふを聞て「さすやうでさむ〳〵さゝぬ月のかげあきこがれつゝにくのあなよ　や【續山井】江戸みつまたに出て「月をみつまたのみものは花火かな（意朔）【洛陽集】納涼「嵐丸闢吹越て夏もなし（卜全）これは桂川の舟遊にや嵐丸は船の名なるべし

○また【紫の一本】に熊市丸といふ船に紅葉のまんまくをはしらかしかつらの棹に蘭の梶ともいふべくかさりたる船いかりをおろして幕を高く巻上たるをはるかに見入たれば年の齢二八ばかりの女十二人三時花染とも着流して當世風流伊勢音頭さすやうでさゝぬは人待宵のから木戸またもさすものは追手の風にみなれ棹さすや汐時に川市丸に打乘江戸橋の下より漕出したや大川一凉しき風のふく市丸勢ひかゝる虎一丸西國丸や北國丸東國丸も出たりかゝる繁昌の江戸市丸へ浦々の湊丸より押出す穀船千石丸萬行丸二丁立も見えたり淺草川をのぼりつゝ觀音丸を脇に見て山の宿の際に付て漕はまつちの山市丸まさりたりや都丸三谷にての太夫衆その高尾丸吉野丸に吉田丸姿花市丸に櫻丸の粧ひかゝる君達に手枕丸むすびよらはや泉丸高砂丸や住吉丸の相生の末吉丸と祈る伊勢丸百足丸有とな辨才天の船頭も仕合がよからば大福丸にならふけふは日和の波吉丸に打乘て棹の雫に袖打濡てさすやうでさゝぬはなんどゝ諷ふやがて遺佚がよむ「淺草の川のおもての船遊びこひになりつゝ身をもどるなり此舟ばかりにあらばこそ暮時分になれば角田川牛島金龍山駒かた堂こゝかしこの下屋敷町屋〳〵の茶屋やしきかけ置たる船ども水の面も見えぬ迄に漕くだせば兩國橋のうへ御藏前のあたりより下は三股をきり深川口新川口をまん中にてかけならべたる舟ども幾千萬といふ數をしらず殊更延寶巳年より伊勢をどりはやり老たるも若きもよきもあしきも坊主も女もうき立て踊る頃なれば鼓太鼓でをどるもあり琴三線にてはやすもあり尺八小弓

船遊

〇【昔々物語】に慶長の頃夏日暑氣強き故諸人涼のため平田船に屋根を造りかけ是を借て淺草川を乘廻し暑を忘れなぐさむ是船遊の始なり大身は大勢のとも人故船狹く涼しからず其翌年より（初に慶長頃と計り有て其翌年とは分明ならず）船頭共申合せて舟次第に大く造り立四五間もある舟になり承應の頃船の盛りにて明暦三酉正月江戸中大火事翌年に至りても御城の御普請江戸中の大小名普請故船は如何やうの小舟迄も材木竹石の運送舟になりて更に涼みの屋かた船一艘もなし依之三四年の間船遊山すきとやみしが萬治の末右の涼舟造り出し諸人借りて夏の暑さを凌ぎ過し火事の苦みを忘れ夥しき流行大身衆迄あまた出らるゝにより船ちいさく間數少くして足らざる故又次第に大く七八間の屋かたを造り後には船の名川一丸關東丸山一丸熊一丸大關丸十一丸などゝて山一は九間熊一は十間十一丸は十一間あり大身衆是に乘て辨當色々美を盡し人數十人なれば鎗十本兩の脇に添てかけ並べ十二人なれば十二筋なり是を大身の晴にみするなり町人の出る船には鎗一筋もなし大身の乘たる舟は鎗ばかりにあらず家來侍徒者用人らしき者は緞子羽衣着るありしを近年船遊山には舟もちいさく鎗などは一筋も見えず（近年とは正德已後をいふにや）どいへり

〇師宣が畫に屋かた船の長さをかきたるに金の紋など付たりかやうに增長せしかば寬文八年申三月萬事儉約の御法度の中に遊山船金銀の紋座敷の内繪書申間敷候事とあり

大屋形船の名

〇【桑一本】に東國丸は淺草河の船なりこれ大船の初なり山市丸は日本橋の舟なり屋かた八間にしきり東國丸より大きし熊市丸は九間にしきりし故の名なり　異本に江戸橋の船なり）神田市丸神田にて壹番大きなる船なり云々

〇【卜養狂歌集】八月十五夜の月をみつゝまたの波に舟をうかべて酒のみうたひあそぶ頃世にはやる唐人歌とて「のんせんふらんらんらんつゆのなさけなやといふことをうたひけるに折ふし月くらりければ「うた

茶屋

の西よりにきれいにして大なる家ありちや屋なり云々ありこの茶屋は今いふ水茶屋なり天文の頃昔といへるはいつの頃にか茶屋といふものも古くありしなり

糺の凉

○【新撰狂歌集】六月中頃より加茂の糺のすゝみとて洛中貴賤さけさかなもたせ森の木かげになみゐて酒宴らんふさま〴〵のけうをつくし暮すぎておのれ〴〵に歸りける中にもひんあみとて世すて人ともなふ人もなくまうでけるが歸るさいとさびしくてよめる「わび人のさけもさかなももたずしてたゞすもどりはあはれなりけり

四條の凉

○四條の凉は【松の落葉】に四條河原凉八景といふ加賀掾が淨るりあり「さて又すゞみの夕げしきかみのみたらしむすぶ手に夏なきとしもおもひ川水にかはずの聲たてゝとまやのかゞり打けふりかなたこなたにともし火のやゝみえそめつゝほともなくひかし石がき西は又ほんとにつゞく石がき町の軒にあらそふつりあんどかみは三條橋のした下はまつばらこなた迄ながれにつゞく水ちや屋はくもらぬ空の星月夜あまのかはらもかくやらん（此下みせ物音曲種々いへり）

○【歌舞伎事始】に六月凉みの間四條河原水茶屋を矢ぐら年より（株主なり）支配する事は昔凉みの間芝居なしよつて水茶屋迷惑に及ぶこの事を思ひて名代座元矢倉年寄合體のうへにて凉みの間水茶屋を願ひつかはすこれに依て今あまたの茶みせを出す事になれり故に今以芝居の表に凉みの間右の面々出て川原の支配するなりもとより四條河原は萬事矢倉年寄是をとりはからふなり

屋形船

○江戸にて凉み船やかたの事は【落穗集】に葭原町より傳奏屋敷へ遊女船に乘召れ參る節船の上には苫覆を致し幕簾などをかけ傾儀を手初めにいたし外々にも屋形船と申ものは始候由【洞房語園】に吉原開基の節より寛永年中迄はよし原役目として大夫の傾城三人宛御評定所へ御給仕に上りし也とあるは時代かはなず船の條にいへり

約が八詠樓に倣ひ候共申し李太白金華開八景と申す一句により候共申候が本邦にてわけて取はやし候は慶長元和の頃ほひ京の圓光寺の長老故有て近江に蟄居の時に近江の景を瀟湘の八景の題を用ひて撰しなされ候を時の堂上衆歌も候ひし歟是近江八景と申ものに候夫よりこの方國郡は扨おき當時大名旗本衆中の別業山莊等に八景のなきは一所もなきやうに成來りこゝかしことより詩歌心得候者にはその詩歌望まれ候異國にて八景と名つけ候に十も二十も候八ッに限るへからぬ事或は詠と云ひ或は勝といひ境といひ絶と云の如き共名も共數も定まらぬこと勿論に候然るに本邦の世俗景として夜雨秋月ならぬなく歸帆落雁ならぬなく候は餘りに不雅なることにや中國の人は申に及ばず朝鮮の者の見及び候てもいかに日本の景はみな〳〵瀟湘の隷に候などゝ申ほこり候へく候かこれによりて老拙は若きより共詩なく候云々いへり思ふに八ッを用ゆるはもと偶然なれど六ッならば少し八ッはよき程の數ゆえ八景多きなるべし本邦にては唐に倣し故八を用れどもこゝの俗にはたま〳〵八からかね八人藝などの偶數もて稱號もあれどそれはいと少く大かた七本やり七ふしぎの如く奇數を用ることとなり

納涼　糺　四條　屋形船　をどり舟　はな火舟（船賃）　御座船　扇流（盃流）　水練（水馬）　うろ〳〵

船　千垢離　大山詣　富士禪定（身祿がこと）　山上日出　氷　駒込富士

納涼

すゞみといふは納凉の字に充れり【日本紀】には避暑をよめり【日次紀事】云、下鴨社司於川合社前作奇社東河邊、修六月祓、自十九日至晦日、諸人各詣爲納凉之遊、林間假設茶店、而賣酒食云々此地上京避暑第一之地とあり【同書】又云、凡自六月七日夜、至十八日夜四條河原水陸不漏寸地、並床設席而良賤敍樂、東西

糺

茶店張挑灯設行燈恰如白晝、是謂川原凉云々按るに【奇異雜談】に糺の森はむかし大木おほく封境ひろし地下五六町はんじやうし民家おほくつらなる叡山より出京のかいだうなる故に人の往來たゆることとなし

淺草川
目黒
曹司谷
王子
護國寺
深川洲崎
佃島
報恩寺
坊主もち
八景

り曹司谷は欅の木立も昔ながら寺もよし三光などつねみぬ鳥のから聲伏猪の床もめづらしくはあれど鶏鳴ふか艸山に墨染の寺元政など聞ふるひじり住けん跡忍はれたり遙劣れるものなり王子は澀路一片の水に曲水のたはふれもすなる舟にて行かへるよしわれもかうなど茂る菊をあきなへる人の閑居には茶園も所々にて花園もうつろふ頃なるに宇治の柴舟のしばし目を流すべき島山もなし云々護國寺御堂新にして綠樹陰を重さぬ町並きら〳〵しかけ作り吉野に似て一目千本の雪のあけぼの思ひやらるゝにや叟も流なくて口をし云々深川の洲さきの東南にて安房上總の山々を風帆につみあげたり云々住吉をうつし奉る佃島も岸の姫松のすくなきにそりはしのたゆみおかしからず須磨のあまの汐やく烟ほのめかして公家達のたゝずませ給ふ御けしきおさ〳〵似もよらず宰府はあがめ奉る名のみして染川の色に合羽ほしわたし思河のよるべに芥を埋む都府樓觀音寺唐ゑといわんに四ッ目の鐘の裸なる報恩寺の甍の白地なるぞ□□□屛風立しやうなり木立うすく梅紅葉せず三月の末藤にすがりて回廊に筵を設くるばかり野には心もとまらずと一ッ〳〵疵物にしたり無疵の名作は快霽の富士にこそ云々

○手習の師の弟子の子供ある限りいざなひて花見に出るは吉原の了家共の花見に出るをまねびたるなん（歌舞の師の弟子引つれて出るはさらなり）此ことをよめるにはあらねども嵐雪が發句に手ならひの師を車座や花の兒といへるもおかし又【篗絨輪】に狹箱はな野の奥を前がけに繩で鉢卷とくりきかぬ氣またの野かけなどの戯に坊主持といふ事をするなり此頃人の付合「先へ行羽織などこがめりしものうけとりにくい坊主持の荷」

○少しも咏めある處には必八景を稱す此こと白石が洞巖に示せる書に八景の始は宋人か元人か宗復古と申す名畵山水に妙を得たるか一軸を畵して凡一代の出來物に候を人々其興ある處に名を題し終に八ッの名出來候畵樣に隨ひ候故のことゝ申候これより好事の人詩をも題咏し候きそれを又八ッとし候ことは沈

○あすか山は享保年中より櫻ありすみだ川の堤は又其後なり【錦繍緞】（元祿十年其角が獨吟）仕似せぬ戀をたそがれの月花の後萬日參りすみだ川海苔のちからで蕎麥切をくふ【續五元集】（元祿十三年の吟に）此道も梅が明たり花の外五十年來梅若の墓（按るに此付合も花の後萬日參りの心とおなじ花見に來しに非ず）

飛鳥山
日暮里

○明和四年【寐惚文集】江戸四季遊（四首あり春の詩）上野兼飛鳥、花開日暮里、三絃茶辨當、多有錦之裏また明和七年【娯息齋詩文集】東都曲、屋船强飲略諸遊、下撫本田白風流、日暮穴晴人猶游、飛鳥花開心彌浮、日暮飛鳥競繁華、春信文調甚花香、年季野郎長歌矣、道理南瓜是唐茄、（飛鳥山【江戸砂子】に淺香山とあり日暮里はもと新堀村なり日暮里と書によりてひぐらしといへり此ごろ花あり）この外道墨水詩などあれど花の時にはあらず此處の花を賞することは天明ころよりなるべし

向島

○向島の茶店むさしや權三は寬延の頃は麥飯ばかりをたきて賣れりそれ故麥計庵と號す計を斗と訛りては麥斗と唱へたりしが次第に料理などする儘にいつか其名もうせて今はむさしやにて通れり寶曆のなかばより眞崎の稻荷はやり出て田樂茶屋出きたる其後もいたく賑へりしが又すたれたり向島の秋葉ははやり止で參詣もなくなりながら茶屋どもみな賑はへり今はこの堤年々に賑はひまされは狹き道を遠ひりの

葭簀はり

馬さへはせちがへばしはし休らはむとするに花のもとは葭簀はり設けたる出茶屋にてみなふさきぬ立よらむもいふせきさまにて酒に醉たるもの多く見ゆるに女の三線ひきて錢乞ふが二人ツ丶幾むれともなくめぐり來るうるさゝは花のかげもいとはれぬ

名所
上野山
隅田川

○【囲柑子】家々名所と云條上野山をほめて日光には莊嚴おとされたれど池は廣澤よりうつくし增樹高閣風景わき出たらんやう也淺草川すみ田川たへず名にながれたれど加茂桂よりは難しくて屑落したり山並もあらばと願はし目黑は物ふり山坂おもしろけれどはてしなくて水遠し嵯峨に似てさみしからぬ風情た

んと「霞ひけ〳〵押車坂とつけられたりえいとう山の句連歌めきたるとや厚きはゐかい也

○【松の葉】に載たる小野川檢挍が【花見】といへる【長歌】に「八重の霞にいやたかきめぐみになにかうへの山云々さてそれ〳〵の幕の內ちやのゆまつかせそめもやうなにはにかるやよしあしのとさをかたらぬ幕もなし(天和貞享の頃土佐ぶし流行なり)云々おなじおかへの松にはあらでその里人のふうぞくも名はなつかしきやり衆やり梅すがた形はよこふとり(遣手女をいふ)みとりたよりがかみゆひかへてやぼに身をなすかゝえ帶(これ吉原の禿ども花見に出しなりこのこともやゝ久し)

知恩院八坂

○【西鶴諸國咄】に屋かた住居氣づまりも上野の花にわすれて云々衣裳まくの內には小歌まじりの女中姿云々この小袖まくといふこと外にはせざりしが【誰袖海】にむさしの國のよしの山春の盛もけしきだち京にめなれぬ衣裳幕衣かけ山もけをさるべし

○【艷道通鑑】に知恩院の馬場先より下河原安井の內八坂靈山地主の庭聲ならで人を呼花まぬかざれどもおのづから群りて木かげつぎ〳〵しき處水草の淸きにたよりて我一と幕うちまはし毛氈鋪ならべまくよりまく御免たがひの挨拶して所せきは都ぞ春のにしきに木綿こきまぜて拔かけし小袖のちらほら風に飜くは霽ざるの虹足拍子のどろ〳〵は雲あらざるの雷云々これは小袖の肩ぬくなり幕にはあらず(されど寶永三年刻【塵滴問答】に江戸京都の女子花の時野遊に色々の衣を樹上にかけつらね外の隔となし是を衣裳まくと名付云々其答に【林下淸錄】に長安士女春野に遊で人々の着せる紅裾を取て幄となす云々いへるは非なるべし裙幄の事引書もわろし)

○唐にも似たる事あり【開元天寶遺事】に長安士女、遊春野歩遇名花、則設席藉草以紅裙、遞相插掛以爲宴幄、其奢逸如此也といへれど彼の手を盡して新しう仕裁しを雨にぬらしてあそびとするなどをば何とかいはん

せをどり（政則）

花見小袖衣裳幕

○花見小袖衣裳幕なんどいふことは【紫の一本】に東叡山花見の條松山の内清水のうしろ幕はしらかして見る人多し幕多き時は三百餘ありすくなき時は二百餘り此外かつき立たる女房の上着の小袖男の羽織を辨當からげたる細引に通して櫻木にゆひ付てかりの幕にし毛氈花むしろ敷て酒のむなり鳴物は御法度にてならず小歌淨瑠璃踊仕舞は咎むることなし本町通り町をはじめ有徳なるもさもなきも町方にては女房娘正月小袖といふは仕立ず花見小袖とてなる程手をこめ結構にだてなるものずきしたるを着て出るは花よりも猶見事なり花の頃は晝過より雨ふるしかれども傘をもさゝずよき小袖をすきとぬらして歸るを遊山にも又手柄にもするなり花盛にはとんとろめきの石橋からは中々先へは行かれず見物人四方からの集りなればひしとつまりて動きはたらきもならず車坂からもあがり屏風坂からものぼれば上野の人こみあひ夥しきこととなりとあるは天和の頃なり又花見に風呂をたてゝ入し事あり【同條】にあなたこなたみろうちに道佚何かたへか見えず陶々齋方々たづね歩行たるにいつの間に支度しけむ大佛の後の窪に櫻の花さかりなるその下に居風呂をたてゝ花を入て温泉水なめらかに凝脂を洗ふとたはことつきして垢を流し居る一水風呂のあかなくおもふ花なれば上野の山に入てこそみれこは戯作ながらなることとあらんと思はるゝは【寶合】に花見の夕暮をいふ毛氈も筵も打まくりて水風呂の火けしてよ物落すなとかしこげに掟てゝ人々は立歸れば下部ぞあとに殘りけると云ことあり【色音論】（寛永二十年の作）にしのはずの池云々ありて北はとゝへばぜんくわうじあたりにちかきやなか寺佛法はんじよのれい地にて云々又上

上野の禁等

野に人の群集せしことは友が發句に上を下へえいとう山の花見哉（この句のこと米仲が【親隨筆】に西山宗因江戸に旅宿の折からある友人此ごろはいかいし侍りしと添削を乞ふ云々宗因云おもしろけれども連歌めきたりかやうにてよかるべしとて「花見業やえいとう〳〵東えい山即時に引直してさて點をし侍ら

【紫一本】に花は東叡山谷中感應寺淺艸觀音堂四ッ谷自性院芝大佛澁谷柏木圓性寺谷中法恩寺とありこの內東叡山の外は花も少く花見の人多く出たり共聞えずさてむかしの花見のさまは【守武千句】にうしろを見ればさびわたりけりとぎもせぬやりをやとものかつぐらむあふらはなきか山さくらかりこれ天文頃の武士の風俗をいへるなり【雄長老狂歌】花見する供衆のはなす鐵砲にあたらじとてや歸る雁がね慶長の頃お國かぶきを見物の人鎗をもたせたる古畫あり猶後までも此風あり【色音論】（寛永廿年の作）にしのばずの池云々ありて北はとゝへばぜんくわうじあたりにちかきやなか寺佛法はんじよのれい地にて云々【昔々物語】むかしは（爰に昔とかへるは寛文ころなり）花見野遊山には小身とても鎗をもたせ侍を召つれ出る其內若き衆もし家來不自由の時は鎗持も侍もなければ六法上は氣に出立器量よき草履取計召つれ友達四五人にてかぶきたる體にて花見遊山に出る人はあれど大かた御旗本衆は鎗もたせぬはなし近年は何かたへ行くにも皆草履取ばかり也といへり近年とは元祿頃よりこなたをいふ【一代男】慶長頃の事をいへるに小鹽山の名木も落花狼藉今一しほとおしまるゝけんぼうといふ男だて云々北野にまうでゝ梅をちらし大谷にゆきて藤をへし折烏へ山のけふりとは五ふくつきのきせるづゝ小者にへうたん毛巾着ひなびたることにぞ有けるといへり穩ならぬ世のさまぞとおもひやらるさらでだに人多くつとふ處は無頼の徒も打まじれり花はよくともさるあたりは出て見ぬこそ風雅ならめ人ぞめき多きは常にて世にはやるといふも人によるなり其處によるにあらず【後日男】といふ草子に古人稱美して吉野の花といへど盛りのたゞ中にも木樵の外は髮長といふもの山伏の髭より外にしる人もなく花見小袖のもやうも見ず辨當のしたみさへしらぬ山櫻をいかなれば花の名所とはいひつたへけむといへるもおかし花見には蹴鞠奕棋相撲連歌猿樂絃歌など常の事なりことに昔は花見にはかならず男女ともにをどりて遊べり古畫をみるに此さま多し【洛陽集】にぬきかけて櫻かさゝぬ袖もなし（正武）【京羽二重】人ごみぞあたらさくらのい

つきてふ言心得かたしもの疋にて鐵をいふか又は神酒の訛りかさるは大山石尊に詣るもの神酒を負て行あり是を與へしことなどありてより乞ふなめり今はたゞ乞ふものもあたふものも錢のことゝのみおもへり

○【諸艶大鑑】（二）螢か坂くたるに此處の我まゝ雨夕日は照なからふりて參宮人も立さはぎ丸あめうる軒端に三方荒神引かけそりやあたるはのいてと與作丹波が馬子の言葉つきもせはし云々

歌枕

○歌枕能因が【五代集】歌枕など名所の歌なり實方行成と口論の事によりて左遷せらるゝに歌まくら見てまいれとあり【古事談】に實方經廻奥州之間爲見歌枕日出行ともみえて歌よまむ料に名所を尋るなり枕とはまくら詞などいふ枕とおなし故に【徒然艸】に今もよみあへるおなし詞歌枕も昔の人のよめるは更におなし物にあらすなどいへり見るともよむともあるはひたすら名所をさすにこそされは其下段にいつくにもあれしはし旅たちたるこそ目さむる心ちすれ其わたりこゝかしこ見ありきゐなかひたる處山さとなんとはいとめなれぬ事のみぞ多かるといへり【名所和歌物語】の自序に歌人は居なから名所をしるといへどみぬ京物かたりは覺束なし云々

遊山

○凡遊山は名所古跡は更にもいはす景色よき處と聞は尋ね行て見のこすましと友の多きはわろし意趣おなしからぬものなり諺にいふ旅は道づれとはこれらのことにもわたるべし又酒好む人わろしいたつらにいとまを費すこと多しいつくに到るとも筆まめに記して遺忘に備ふべし

花見

○【可咲記】（此雙紙正保元年の記なり）昔彌生の長閑なる花の盛りにいさなはれて善光寺といへる武藏野の邊さまよふ折から深山櫻枝もたはゝに咲みだれてこゝらの人めにきはしく富榮ふ人々わりこ笥のもてなしさま〴〵にうたふつまふつの聲きくも心空なり（靑山善光寺はもと谷中にありしか寛永中此地に移るとなり谷中をむさし野の邊とはいふへからす川口の善光寺にや是又上におなしいつれかしられす）

三寶荒神

しも馬に乘り快き頃となりしとのみにはあらず火燵のごときものを馬の左右に結つけてその中に一人ヅゝ乘る又左右に子供をのぜ大人中にのる是を俗に三寶荒神と云事あり此集延寶中の撰なればその製はやくより有しことゝみゆ

二方荒神

○又［續五元集］付あひの句に松に薄を二方荒神といへるもあれどこの名は三寶荒神より後の名と聞ゆ

しまさん紺さん

又伊勢にて間の山の女こじき又比丘尼にゆきゝの人の衣服をさしてしまさん紺さんなどいとはや口にわめきいふことともとは【丹前能】といふ草子に淺間山福一萬虚空藏坂をのぼれば比丘尼あやをり色ある女が前後につとひまきせんをねがへばひにん同前あのすがたなれといにしへよりつたへ來る所のならひ是非もないうきよぞかし二見へくだる追分の茶屋參り下向をみて大坂のたれさま江戸の權七樣こゝろ得て京のどなた河内はりま長崎のと國々をさしてちがへぬはどこに目しるし有やと大わらひして云々あり彼のしまさんこんさんはこれいり出たるなり

お杉お玉

○又【風流旅日記】にあひの山お杉お玉が庵前にくれなゐの綱をはり三味せん引て小歌云々參宮の者錢を打に顏にあたらず云々童はでん中しやはり肘じやと踊るありみそこし持て錢もらふあり皆是この處の與次郎が御内儀娘たちなりこれらすべて今もかはらず貞享四年にかくいへればおすぎお玉はいつ頃出たるものに歟と思ふに延寶の頃伊勢音頭はやり出て其時古き小歌の小倉といへるなどをも伊勢音頭にうたへりその唱歌におたまこがれてといふこと有り間の山お玉は是よりいひ出しにやお杉といふもかゝるやうのことにて有しなるべし【續五元集】ゆかたは輕し尻を輪違月になるおすぎお玉が板庇か

○安部泰邦卿【東行記】なんこの茶屋に休み云々朝またき日影靜にゆく足もとへころり〳〵とこけ廻るは四ツ五ツより十ばかり迄の子供なり是も世渡る一ツにや物とらせければころひやみぬ云々このあたり今もかくありまた童等びつきをくれせへとて旅人につきまとふありいつのほとよりいふことにかび

びつき

多く付たり長一丈許花以糊粘と記しぬ是をいかやうに用ふるにか其よしをいはず此製の物いづくにも有べし先年上州草津また野州日光にても見たりしがいづれも葬儀に用ふ是を二本先にたてゝふらせて籠の内に入たる紙の花びらを散らすなりこの花籠古のぬさ袋にやおぼつかなし【日本歳時記】端午の處を畫きたるに幟の頭にこれを付く又寶永頃の畫攝津國住吉の御祓の學びする處御祓箱に長き柄をさし其頭にこれを付たり但しこれらは飾り物にて籠の内に花を入て散らすことはなかるべし【拾遺集】にむすび袋といへるはかゝるものともおもはれず

旅籠

○旅籠はもと【和名抄】に節（註）飼馬籠也波太古俗用旅籠二字とありこれも鷹の餌袋のごとくその籠にくひもの入て旅に用ひし故旅籠と書しなるべし【今昔物語】（廿六第十九語）旅の宿のことをいふ處旅籠十物など食て寄臥たるに云々旅籠に入しがれ飯なり（【宇治拾遺】（八）獵師射佛條餌袋に干飯など入てまうでたり）後世これによりて旅店をはたごやといふ【きのふはけふの物語】ある人十二三になる子を寵愛して常にうたひを敎へけるがせつかくならへやがて十月十三日になるぞ宿はたごくひにつれて行ぞよく覺えて其時うたへといふほどなくおめいこうじやとて寺よりあんないある云々（布施を出して寺のときにつくを戯れに宿はたごといひしは旅店の外に物くふべき茶屋もなければなり）

宿はたご

○【新著聞集】に山崎宗鑑が事をいひて朝げ夕げには鳥目十錢ヅヽはたごに持行しと也とあり此は旅店などにて食物を買をいへり

伊勢參

○今人多く鹿島詣はせでまづ京大坂大和廻りをすめり神佛に參るは傍らにて遊樂をむねとす伊勢は順路なればかならず參宮す【望一千句下句】何方も治る御代のいせ參り太々神樂の小かぐら太々神樂と云ことも古くいへりと見ゆ

○【洛陽集】に花は根に火燵は馬にころは旅（元好）これ伊勢海道のことをいふなるべし火によりて居たり

々須米良美久佐爾和例波伎爾之乎など見えたり猶鹿島立の事【菟玖波集】羇旅部に救濟法師これぞこの旅のはじめのかしま立

坂迎

○旅よりかへり來る人をむかひに出てことぶくをさかむかひといふもと都人はあふ坂まで出たりし故しかいへりとぞ【今昔物語】(廿)信濃守に成りし人始て其國に下りけるに坂向への饗をしたりければ云々此國には本として守の下り給ふ坂向へに三年過たる舊酒に胡桃を濃く搨入て在廳の官人瓶子を取て守の御前に參て奉れば守其酒を食す事定れる例也(又【朝野群載】(廿二)國務條々の中にも境迎事あり)と

松と胡桃

ありこれを酒迎とかくは非なりさて胡桃は來る身によせて祝したるなるべしかゝれば此こと古きならひと見えたり【大幣】にほそりといふ小歌あり「しのぶほそ道にまつとくるみさしちゑまいまつとて其身はくるみてもなし是も事はかはれども意はおなじまた關むかひといひしことも有り【源氏物語】(關屋)けふの御關むかへはえ思ひ捨たまはじ

ぬさ袋

○ぬさ【拾遺集】(雜上)物へまかりける人のもとにぬさをむすび袋に入てつかはすとて云々有り【源氏物語】(若菜上)色々こぼれ出たるみすのつま〳〵すきかげなど春のたむけのぬさぶくろにやとおぼゆ【細流抄】に三月の末なれば春のくれて行手向をいふなり道祖神に手向る麻にきぬのつまともをまかへたるなり【花鳥餘情】にぬさは色々の紙を切てすきたる袋に入たるにや云々【落くぼ物語】筑紫の帥に大臣殿馬のはなむけを云處に上には唐ひつの大きさに滿たる幣ふくろに中に扇百入て打覆ひ給へり【好古小錄】に圖あり其說云麻囊は豐前國宇佐の邊には古製傳りて今猶此を用ゆ竹にて編たる籠なり竹籠をふくろといふは餌袋と同意なり其ぬさ今は絲帛は用ひずいろ〳〵に染たる紙を用ゆ囊の口よりこぼれて見ゆる體【源氏物語】に色々こぼれ出たる云々書るげにと思はれ侍る近來好事家錦繡をもて製してぬさふくろとて翫ぶは無稽のもの也といへり其圖ひけ籠の如き籠に竹の柄をさして籠の編餘して垂たるに花

嬉遊笑覽卷之七

喜多村信節撰

行遊　手向　鹿島立　坂迎　松に胡桃　ぬさ袋　旅籠　伊勢參（三寶荒神、お杉お玉）ぴつき
歌枕　花見（鎗てつぽう、花見小袖幕）上野の繁華　飛鳥山、日ぐらし、隅田川、

行遊

手向

【萬葉集】（十五）加思故美等能具受安里思乎美故之治能多武氣爾多知豆伊毛我名能里都ことは日本武のみことのあづまはやとのたまひし始ひなり【夏山雜談】にも山のたうげは手向の轉訓なり手向をたうけと訓するは日向をひうがといへるがことしたうけは上り下りの山のさかひにて國も多くはこゝにさかへば旅行の人道のほとりをいのりて國つ神に手向する故の名なり此說契沖にもとづけりまた【萬葉】（廿）上總國防人歌爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波伊波々牟加倍理久麻泥爾（小柴もて神籬をかりそめに造るなるべし）【古事記】大年神の御子の内に庭津日神次に阿須波神云々あり本居氏當昔民家の庭に竈神などゝ共に此阿須波神をも祭りしこと知べし右二句を味ふに彼あすはの神は己れが家のにはあらで行前の宿々の家に祭れるをいはひつゝ行むとよめるなれば何國にても家ごとに祭ることにしられたりといへり（吾はいはゝむ歸り來迄にと有は己が庭にいへらんに何の聞えぬことかあらん）此神鹿島に前立の社といふ【世事談】に此神に御幣をさゝげていのるに旅に居る者飢につかれずとなり世俗影膳とて居るもこの遺風なり

鹿島立

【和訓栞】に鹿島立といふも是より出たるよし鹿島本緣にみえたれど本社より起れる諺なるべしといへりもと軍に出立時のしはざと聞ゆ故【萬葉】（廿）阿良例布理可志麻能可美乎伊能利都都

中置一琉璃盞、朱光四射與素馨茉莉燈交映、蓋素馨茉莉燈以香勝、柚燈以色勝、この方にて西瓜の肉を
削り取て中に火をともして青くみゆるもおなし類なり

ちやはんの尻を掌に付る事

○茶碗の尻を掌に付ること【雜戲畫卷】（筆者定かならず野々村などが畫にや元祿中の風俗なり）其內に此圖あり古き前句付（表頭缺年號もなし）はなれかねたり〳〵）手のうらへ茶碗の尻をねじり付

瓜さし

瓜戰

○瓜ざし是も同畫卷物に瓜を多く幷べて小刀を持たる男橫さまに瓜をさし貫かむとするを見て居るもの一人あり相手の男なり漢土の瓜戰の類なり【五雜爼】に錢氏子弟、取霅上瓜、各言子之的數、剖之以觀勝負、謂是瓜戰（子の數をいふはたね柿といふことに似たり）【葛藤】（下）許道獨吟「落る雷七八町はあたまなり瓜食勝て掛二とぞなる（是は負わさに歌舞伎をみするなるべし）又同じほどの戲【廣東新語】（九）廣州兒童有賭蔗鬪柑之戲蔗以刀自尾至首、破之不偏、一黍又一破直至蔗首者爲勝、柑以核多爲勝こゝにて小兒など蜜柑の袋をいひて當否を論ずこれをもておもふに瓜の核柑の核など數多く頰はしきをいとはで戲とす異國の人の所作のゆるやかなることゝの人といたく殊なり

ほぞち

○次でにいふ【和名抄】に熟瓜和名保曾知とあるをおもふに越瓜などのよくつえたるをいふにやほぞちは帶のおのづから脫る程に熟くつえたるをいふ美濃の眞桑村の產など出たる後のことなるべし今のまくは瓜などをほぞの落るまで取らでおかば腐りて喰ふべからず【清輔公集】に女御すのこにほぞちを長ひつに入ておかせ給へるを夕立のすればみかうしおろしたるまぎれにうせたれば盜人はほぞちをみてもあめふればほしうりとてやとりかくすらん干瓜などには熟ぬ內にとるもの歟又別種にや

豆奴

○豆奴祭文がたりの山伏一乘と云ものゝ作と云ふ【西行東下り】照降町の段かゝる處へ向ふより深あみかさにて評判の豆奴あたまも豆ならおゐども豆ひやうばんの豆奴とあり高輪の邊にくちらの上りしことをいへるは寬政十年戊午五月朔日のことなり

菓物燈籠

○菓物の燈籠【廣東新語】廣州時序の條八月十五日之夕、兒童燃番塔燈、持柚火、踏歌於道口、灑柴仔、柴兒灑柴兒無咋喋、塔累碎瓦爲之、象花塔者其燈多、象光塔者其燈少、柚火者以紅柚皮彫鏤人物花卉、

ほゝづきといふかつくはかしらつく貌つくなど〻同じきにや

海ほゝづき

○海ほゝづき【物類稱呼】に海ほゝづきはうんきうの卵なり岩あるひは流れ木に卵を生つけ置を取て海ほゝづきと呼小女口に含鳴す其色黄なるを梅酢を以て是を染て赤くなすなり江戸へは安房より出すといへり蠃(ウンキウ)を安房にて磯ほゝづきと呼よしなれどもこは九州の産にて東國にはなきものなるに此名あるは其殼の漂れよることなどのあんなるにや此物か〻る名ある故に海ほゝづきをそれが卵なりと誤れり海ほゝづきは蓼螺(カラニシ)（長ニシ）の卵なり其介は形王(ベイ)螺より大にして長し肉は紅(アカ)螺に似たり腸辛辣なる故辛にしと云ふ又夜なきともいふは小兒夜啼の呪に用るよし【本朝食鑑】にみゆ海ほゝづき江戸近國の産は形小し大なるは加賀能登より來れるなり長刀ほゝづきといへるものは紅螺の卵なり

草の葉を鳴す

○草の葉を鳴すこと【俳諧口寄草】（元文元年）手を打にけり〳〵豆の葉に穴をあけては嬉しがり【六玉川】（初篇寛延三年）鳴して捨る葉に殘る月（鳴したる葉には圓く孔あくなり）

葱を吹

○葱を吹は東坡被酒獨行詩に總角黎家三小童口吹葱葉送迎翁

眞菰の馬

○下總千葉あたりには七月七日に小兒まこもを以て馬を作り緒を付て首にかけ馬を腰に付て遊ぶ【散木集】にをさなきちごのちまき馬をもちたるをみて「ちまき馬は首からきはぞ似たりけるきうりの牛は引ちからなしといへる連歌あり菰の馬も同じほどの物なり古より有し弄びなり信濃常陸にもこれを作りて七夕に手向けるとぞ思ふにたま棚に手向七夕にたむくるは後にてもと小兒の翫の物なるべし

篠船

○篠船さゝ葉にて作る舟は【夫木抄】源仲正「うなゐこが流れにうくる笹舟の泊りは冬の氷なりけり【詞林采葉抄】に神無月をば出雲國には神在月とも神月とも申なり我朝の諸神參集り給ふ故なり其神在の浦に神々來臨の時小童の作れる如くなる篠舟上に浮ふ事不可及算數

松葉の鎖

○松葉の鎖(クサリ)明和二年川柳點の句「迷惑なこと〳〵禮の供松葉でくさりこしらへる

○江戸ほゝづき柳亭子云寛文二年の板【案内者】といふ草子七月七日本願寺立花のことをいふ處に近年江戸酸漿子とて七月に色の赤きをもとめ出してよき彩色の物とす云々今丹波ほゝづきの名をいひて江戸ほゝづきの名をいはず今六月より色づきたる酸漿あるは是即江戸ほゝづきか江戸ほゝづきは絶て丹波の國の種を求めて植けるものかといへり按るに古き俳諧もみぢの句に丹波をいへること多し丹の赤きにとるなり丹波ほゝづきの名もこれと同例なること知べし又江戸ほゝづきといふはむかし江戸の人情尤き事を好めば赤く彩れるをば江戸と稱へしなるべし故に【峯林風葉】（天和三年自悦撰）女奴江戸鬼灯や色このみ（山川）女奴は勝山などをいふことは後ながら【名筆傾城鏡】（寶曆二年三月）といふ淨るり使者の段中にも頭と見えたるは又平が思ひ付大紋の袖龍頭卷大津祭の大長刀横たへ江戸彩色の頬かまへ紅粉はき茶碗のわれたる如く云々ありこゝに江戸彩色と赤き色をいへるも同意なり（俳優の打扮も昔より顔を赤く染るは江戸風なるべし）されば江戸ほゝづきとは其色の勝れて赤きを稱せし名にて恐らくは江戸にていひ出し名にはあるべからす

○【懷子】（九）枝ながら吹ほゝづきや風の口【同集】（十）小姫こせにも踏かゝはりてほゝづきも吹口ひるもべにそめか又これを鱠のけんに用ひしこと【洛陽集】山は鱠鬼灯の日を出させたり（正長）又ほゝづきや穴に音を鳴蟲くひ齒（心計）此句【六玉川】（八）ほゝづきの奥齒になるとうまい音と似たり

○【大倭本草】にほうといふ海酸漿の類を好みて食ふ故ほゝづきと名付といへるは假字違ひにて誤なり【枕草紙】に夕がほの事をいふに惡き實の有さまこそいと口をしけれなどてさはた生出けんぬかつきなどいふもののやうにだにあれかし【新撰字鏡】に酸漿を訓りよりておもふに其實下にうつむく故額突に似たればなりほゝづきはふくらかにて人の頬にたとへしなるべし或は前と同義なり但し額突といふことはあれど頬つくといふこと他になければ外稜ありて生たる處をぬかつきといひこれをむきて吹ならす時

びやぼん

〳〵となる故其をきやこんといふなり鐵にて作りたるさまのむくつけなき蝦夷松前などの風俗のうつりたる物と思はるといへりたちぬる癸未のとし此笛を江戸の子供もてあそびたり鳴す音のびやぼんとも聞ゆるからびやぼんと稱へたり(其頃落首びやぼんを吹は□はどん〳〵とかねがものいふ今のよの中しは し有て禁ぜられて止ぬ)

猩々小僧

○猩々小僧浮人形にあり又飴細工にもするなり【江戸名物鑑】に蜀黍や出水の中のみたれがみ(球逢)この句は其さまを見たてたるなり(【江戸二色】を見るに猩々壺の中より出て下に臺ありて笛をさしたり笛を吹けば人形廻るなるべし)

鯛釣

○元祿五年刻【胸算用】小刀細工に馬の尾にてしかけたる鯛釣もはやりやめは云々偖おもふにこれ今もある弓に糸はりて魚の糸に付てをどりながら下にくだる翫物ありそれなるべし

あやふや人形

○あやふやの人形氣儘頭巾を着たる【江戸二色】に出たり是元祿の俤にて其時代をしるべきものなり狂歌に「半面は美人やら惡女やらこの人形のかほのあやふや(あやふやは危ぶむにて疑ふ意となれり)明和安永頃女畫に股など出したるをあぶなといへり

かはり屛風

○かはり屛風これも【江戸二色】に出てかくれ屛風といへり

芋虫

○芋蟲これも【同草子】に出づ紙にて作りたる內に土を丸めて入れ破たる竹のうへをまろばすものたり是今の手遊の俵のもとなり

ほゝづき

○ほゝづき【榮花】(初花)上東門院の御事を申す處ほゝつきなどをふきくらめてすへたらんやうにぞ見えさせ給ふ【源氏】(野分)玉かつらのさまをいふ處ほゝつきとかいふめるやうにふくらかにて髮のかゝれるひま〳〵うつくしうおぼゆとあり今白くうつくしきを雞卵に譬ふるごとくふくらかにうつくしきを古へは酸漿にたとへたりとみゆ

錢ごま

れはおれがのじやと答へて童部買てもてあそぶ云々これは土にて小く井戸くるまの如く作り糸を結付その糸を卷付て糸の端を持つてつるし下れば廻るなりそれを上にすこししやくれば糸おのづから車にから卷ていつ迄も舞ふ今もあるものなりおもふに錢車とて田舍の兒女錢の穴に箸などをとをし短く切たるにて木綿を糸にとるかの手車は中に心棒なけれ共これより出たるものとみゆ又件の錢車を土にて作り心棒を管にして糸を卷左の手の指にて心棒の上下を押へ地に廻しつまみて掌にとる物あり是を錢こまといふ柳亭子云元祿の末寶永のはじめ頃何人か錢ごまを作り出し一時行はれたり白梅園鷺水が【新玉櫛笥】寶永六年の印本なり其中に香山梅之助と云人あり常に獨樂を翫びしがある時文錢六七文又は十文ばかり管の軸に貫き別に心木を通し糸を卷てこれを舞しゝが是が爲に記を書て曰獨樂よ獨樂よ汝時を得たり一ころ揚弓の柱に催促せられ行成の紙袍を着て射ちきの座に連りしさへ珍らしき事にいひたりしに枝錦金襴の衣服きらびやかに眞紅紫の組糸を帶にし猩々緋羅紗の蒲團に象牙玳瑁の杖をつき一曲の舞に錦の袂を飜せば滿座頤を解て喜び（中略）すがゝき永代橋何くれの曲に長じたるものは賞美せられて時代蒔繪の箱の中に豐に眠り云々ありすがゝき獨樂の舞ふ中にすがゝき幾廻彌永代橋も【松の葉】に載たる端唄の名なりこれも同く共まふ中に彈うたはるゝ間あるなり小兒の翫弄のみには非ず酒席などの興に舞しゝたりといへり然らば手車は土にて作れるに習ひて錢ごまも土にて作れることとなりしが今のは四文錢の形なればいと近き制としらる今も下總千葉の邊には若き者ども日待などの遊びに各錢車を作りてうちよりこれを舞して少しにても永くまふを勝とし賭るゝ長崎などにも錢ごまは錢を五六文かさねたるなり

きやこん

□きやこん【瑞龍工隨筆】奧州岩城にて所の祭に賣箭ありその形今女のさすかんざしのやうに二股に針のごとく角たてる鐵にて三寸ばかりに作りて又針のやうなる薄き鐵を中の處へ二本になる如くきたへ付たるを齒にくはへて二股に分れたる處にきたへ付たる鐵の一寸ばかり餘りたるを指にてうてばきやこん

勢あひの山お杉お玉がことをいふにみな是此處の與次郎が御内儀むすめたちなりといひ又【雍州府志】に乞食酋長惣謂與次郎云々四人或は六人入人家庭踊躍敲手唱祝語この故にたゝきの與次郎といふ件の【隨筆】に非人が笠の上に舞して來たりしとあるは近時のことゝ聞えたればそれ故に與次郎といふにはあらず與次郎がをどるさまに似たる故に名けしなりこの人形遊女が指の先に舞す圖寛永七年板本【伽羅女】といふ草子にあり【和名抄】酒胡子、諸葛相如酒胡子賦云、因木成形象人質、在掌握而可玩、過盃盤而則出とあり

笠の上に人形を置て舞す

○又笠の上に人形（與次郎人形にはあらず）置て舞す圖は西鶴が貞享中の冊子にみえたり與次郎人形酒席に用ることと其條下にいふ併せみべし【簍絨輪】いたゞく鐵わ燈盞の照り行人の與次郎つり合片歯下駄（詠流）鷲足にのりたる行人なりそのかねあひ與次郎のやうなるをいふ今これを與次郎兵衛といふはますます鄙俚なり

人形筆（ひき物）手車（錢ごま）きやこん　猩々小僧　あやふや人形　かはり屛風　芋蟲　ほゝづき（江戸ほゝづき、海ほゝづき）草の葉を鳴す（葱を吹）　松葉のくさり　茶碗を手に付る　瓜戰（核柿）　菓物燈籠

人形筆

人形筆は【佐夜中山集】付句に水莖のをかしきふしをいひ立て筆の軸にもつくる人形【嶺南雜記】に奕扇出東莞、其販于江浙者、特其麁者耳、其精者有彩畫人物極工緻、又有柄中鏤空內刻人物、自能運動云々あるはひりやうのうちはなり其柄の中にからくり人形あることと人形筆のごとしこの筆は有馬の產物なり又

湯本細工
ひきもの

おもふに湯元細工のひきものも有馬は箱根よりも古かるべし【童蒙先習】うすきものゝ內有馬のひきもの慶長十七年にかくいへり合子のみにて翫物は作らずともおもはれず

手車

○手車錢ごま【畸人傳】に享保の初め手車といふもの賣翁あり糸もて廻して是はたがのじやといへばこ

うきをさかりの酒中花の時（長町）西川風の【書双子】居あひ抜の畫に酒中花を合す誠にうけて開くと云ふ謎あり

紙でつぼう　○紙でつぼう【来山點笠付】手を〳〵にてつぼうにする手本紙」手を〳〵には手々と云ことゝなり

豆でつぼう　○豆でつぼうは【江戸二色】に出つ今あるとは作り異なり狂歌「光陰は矢よりも早くてつぼうの玉の如くに除夜の豆うつ

虫目鏡　○虫目鏡【洛陽集】虫めがね老の波こす螢哉（嘉辰）武藏野はむさしの也けり虫めがね（行正）

竹の吊瓶　○竹の吊瓶【其砧】に笊うりのたが愛相に鍬つるべ（其圭）果かないとて眺めくら引（平砂）

ふくら雀　○ふくら雀、謡曲の【放下僧】にしだり柳は風にもまるゝふくら雀は竹にもまるゝ【抄】に雀の子は親よりもふくらかにみゆれはふくら雀といふといへり【五元集】神無月ふくら雀ぞ先寒き鬼貫が【獨言】に雪は云々あはらなる賤か軒ばも風情つきてふくら雀のつく〳〵とたちびゐたる衣かしたき心ちぞするなどいへるは雪にこごへたる躰をいふ子雀のみにもあらじ

雀の笛　○雀の笛、張子のすゞめを方なる箱に竹笛をしかけ手にて押ば鳴るやうに作りたるものはもと屁ひり猿とて猿を挑灯の如き嚢の上に作りたるものより出たりとみゆ【江戸二色】に圖ありこれ中に笛ありて鳴すこと今の雀の如くなるなり

與二郎人形　○與次郎【瑞龍工随筆】に能狂言手遊やおとろんまり小弓といふおとろんは今やうの手遊びに紙にて作りたる人形に笠をきせ細き串を兩方の脇の下にさして末のひらきたる所におもりをつけて人形を指の先に立すればおもりにてつり合て立なりこれお人のをどるやうに見ゆればおとらうといふことにておんどれおんどれといふものにて此前與二部といふ非人の笠の上にてまはして来たるものなるべしといへり猿樂の狂言何といふものに出たるか今覺えず與次郎とは非人頭の通稱なり【風流徒日記】（貞享四年刻）伊

枝は紙ながらかくこそはぜの花となりけれ大坂胡蝶女と見えたり天王寺に名だゝるとは彼十日戎寶のも市にうるを云なるべし小歌にはぜ袋に錢かますとり鉢さい槌たばねのしと云ふ是なり今はこの寶物どのを手遊に小く作りて小寶とゝなへて賣る子寶の名詮をとるなり

はぜ

○はぜは漢名鐵なり後世采花とも孛妻とも云ふ明の李翊が【戒菴漫筆】に孛妻の詩あり東入吳門十萬家家々爆穀卜年華、就鍋抛下黃金粟、轉手翻成白玉花、紅粉佳人占喜事、白頭老叟問生涯、曉來粧飾諸鬼女數片梅花插鬢斜これ吳中の風俗にて上元の夜にあることとなり

えんぎの金
箔おきの金

○えんぎの金【伽羅女】は寶永の冊子なり其中に伊勢の處末社へ不殘一角つゝ禰宜達肝をつぶし土の箔おきしんちうかと思ふ猶古くよりあるべし寶永七年【世說故事苑】に正月の祝ひことを云に俵子及金銀の包みたるを買と云るは今の土にて作れる百兩つゝみなり

一文長刀

○一文長刀【一代男】(四)ある時は一文賣のなきなたをけづりなく子をたらし云々

浮島

○浮島、宋人丁用晦が【芝田錄】に煬帝在江都、代王留守長安郡、盜賊蜂起有獻計者、刻木鷺繫詔于頸、致之渭汭、冀關東救兵至、日放百十順流而下、覓無救至また【東京夢華錄】に以黃蠟鑄爲鳧雁鴛鴦鸂鶒龜魚之類、彩畫金縷、謂之水上浮また【物理小識】(十二)戲科斗、樟腦黃蠟和勻染墨投水中、作科斗自然走動、但欲潔淨、油手止之卽佳(今兒女のびいどろかんざしに水を貯へ蠟に朱を和て金魚に作り入たるあり)木の葉の舟に山椒の實にて人形作り棹とらせたるを鉢の水に浮めたるを讀人不知「木の葉ふね朝くらきより漕出し船頭とのはつかれ山椒(母の物語に聞しか今わすれたり)【六玉川】(四)浮人形の掌をこぐといふ句あり(今はびろうどのはりかねして猿を作り小船をこがせ線香花火をもたせ又は蠟引の紙にて鴛鴦を作り火をともして水に浮す)

浮人形

酒中花

○酒中花【洛陽集】雪國へ酒中花さそへ歸る雁(元好)【虛栗集】名をかへて緣か禿おとなしく(柳興)

名錄】（下）目黒村餘名產に餅花あり又篠よし近年童子の手遊びに栗花かやの穗にて馬猿拵るい此外いろ〱細工を仕出し賣るものその細工尤よしとあればこれらの手あそびは寛政初年より出來しと知らる

栗花かやの穗にて作る馬猿など

作り花

○作り花雜色の綵帛もて造れるをいふ【萬葉集】（十九）雪の嶋に綵花を殖たるをよめる歌あり【伊勢物語】梅の作り花に雉を付てたてまつるとて我たのむ君がためにと折花は時しもわかぬ物にぞ有ける【清少納言】二月朔日のことをいふ處おかしき櫻の一丈ばかりにていみじう咲たるやうにてみはしのもとにあればいとゝうさきたるかた梅こそたゞ今さかりなんめれとみゆるはつくりたるなんめり【金葉集】（十雜下）後三條院かくれおはしまして後五月五日一品の宮の御帳にさうぶかけ侍りけるに櫻の作りはなのさゝれたりけるをみてよめる藤原有教朝臣「あやめ草ねをのみかくるよの中におりたかへたる花櫻かた【新古今集】に後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心をおのことゞもつかうまつりけるに大納言忠家櫻はな折て見しにもかはらぬに散ぬ計そしるしなりけり大納言經信さもあらはあれ暮行春も雲の上に散ことしらぬ花し匂ひて

五色網

○五色網【江戸砂子】駒込富士社の餘當所の產とある內五色網あり【丹前能】（五）娘一人手わざには五色のおみを拵へ伊勢參りの土產物賣と織とにいとまたく樹に李を滿し云々いへり又今金柑など入て小き網も有これとは異にて手遊にはあらねど【松の葉】にあみすきといふ小歌ありこの町は子供でかしましおみの町ですきましよ上の町下の町みせのはなに引かけておいてから子供しゆ子供しゆらちつとそちらへよらんせのわくるは〱すきわくる網を五色にすきわくる又兵衛かすいたかねの緒とかく又兵衛とのはしやくはんこせぬかひ（宿願後世願にや又兵衛といふ者鐘の緒に五色の網をすきたる事ありとみゆ）

はぜの花

○はぜの花、近ごろの物にも非ず【後撰夷曲集】にいはふことありて酒もりせし座にて四天王寺に名たゝるはぜと云ものをことよりにつけて梅ばちに作りたて是をさかなに今ひとつとてよめる「冬の中に咲れる

つぼ〳〵

○つぼ〳〵、此手遊古きものと見えて慶長ごろの古書人物の衣のもやうなどにも付たり【犬筑波集】からいはへの緣にてくるふ藥師堂もてあそびぬる瑠璃のつぼ〳〵もと壺とのみいふべきを小兒の詞のかさねいふ例にて名付るにや【懷子】（十）立別れいなかあたりの朝ひらきつぼ〳〵ほどの涙たる中（重賴）【松の落葉】京童といふ東上るりきさらぎや初午參のみやげとて鈴やつぼ〳〵風くるま【好色盛衰記】（貞享五年）稻荷の前つぼ〳〵かま〳〵作り賣これも土佛の水あそび云々これ壺と釜となり

　削り花　餅はな　栗花かや穗の馬猿み〻づくなどの類　作り花　五色網　はぜの花　箔おきの金一文長刀　浮鳥（人形）酒中花　紙でつぼう　竹の吊瓶　ふくら雀（雀の笛）與次郎人形

削り花

古今集（第十）物名二條の后春宮のみやす所と申ける時にめどにけづりはなさせりけるをよませ給ひける（文屋やすひで）花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな【奧義抄】に蓍といふ草をゆひ集めてそれにけづり花をさす事といへり蓍は【和名抄】に女止（メト）とあり【史記】龜策傳にも見えて其莖は筮とする物なり削り花は木をけづりかけて花に作るなり【延喜式】圖書寮に金銅花瓶二口削花二（左右各進一枚近衞寮受供之）と有り佛名の時に削り花を供養に備ふる事多くみゆその引歌とも【餘材抄】に委しく出たり【夏山雜談】に今も西國邊にては蓍に作りはなを付て神佛にさ〻ぐる所も有といへり【西武獨吟】常盤の松のか〻りあくよや霞酌たいのものには削り花（寬永ごろの書に檜物師が家に削り花立る洲はま有り今も芋の臺何くれの臺といふものみなけづりばな〻り）

餅花

○餅花【宗長紀行】（下）冬の梅の一りん二りんかすかにさきて匂ふこそあはれふか〻らめあまりに正月の童の餅花つけたるやうにさきたるふさはしからず云々（宗長は宗祇が弟子にて文明大永ころの人なり）餅花もと節物なるを江戸目黑の餅花などは常にあり【江戸二色】にこの餅花出たり竹串をさきかけて其末ごとに餅を丸くひらめて付たり吉野の花餅を學びたるものなり（委しくは食類の部にいへり）【四神地

小鍋

○小鍋、貫之が娘の幼き時の歌とて鶯よなとさはなくぞちやほしき小鍋やほしき母やこひしき此歌〔袋双紙〕（四）〔俊頼口傳〕〔女郎花物語〕（下）等に見えたり

箔の團扇　ほゝづき挑灯

○箔の團扇、ほゝづき挑灯〔伊呂二紋〕に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本ほゝづき挑灯二十云々是踊の調度なるべし

麥わらの蛇　唐團扇

○麥わらの蛇并唐團扇〔江戸砂子〕駒込富士權現祭日當所の產唐團扇麥わらの蛇五色網夏の果物と見えたり〔六玉川〕（六篇）江戸は蛇が出てあつい朔日〔江戸二色〕にもその畫あり狂歌にや水無月のついたち布の寶ものは外にたぐひのあらぬうちはぢや〔江戸塵拾〕駒ごみ不二祭麥わらの蛇は寶永のころ此處の百姓喜八と云ものふと案じ付てこれを作りて賣といへり（淺草の不二權現にて此蛇を賣は近きこととみゆ）江戸近在を二月頃あるきてみれば田のくろに竹など立て藁盒子にこの蛇のごとく稻桿にて編たるものを結付たりおもふに初午稻荷祭にわら合子作りて供物を入るなるべしその合子の編かたこの蛇の口の如し次でに蛇を作りゆひ付るは蛇を避る呪ひなどにや蛇は合子のあみかたより出たりとみゆ常のは大森村の外に麥わらの手遊び賣所なし

疫の種

○駒込麥わらの蛇は寶永の頃此の處の百姓喜八と云もの是を作りて祭禮の日市に賣る一とせ疫病はやりし時此蛇ある家は免れたりと云ふ雜司谷麥稈の角兵獅子は高田の四つ家町に住し久米と云へる女製し初たり寛延二年の夏の事なり其ころ參詣多かりしかばよく作たりとぞ

鳥獸

○又段の穗などにて鳥獸を作れるはもとよりにて近ごろは大森村にて男女のかつらを棕櫚にて作ること上手になれり大師河原のみやげに買て幇間の生醉などがかぶれるもみゆこの頃聞たる折句にまげ鮫鞘きげんで坊主しゆるかつら（坊主あたまには着やすけたり〔帝京景物略〕淨綱鐘衣、僕頭戴草帽云々、香客歸途衣有一寸麻、頭有草帽、面有鬼臉云々物まうでのかへさにわら細工のかぶり物して鬼の面をきたるなり

月一日より七夕に至る迄家毎に簷に繩をはり管の人形を吊すは異なれども七夕に人形を弄するは似たり

七夕の短冊 ○江戸こて近ごろ文政二三年の頃より七夕の短冊つくる篠に種々の物を色紙にて張りてつるす其頃はなべてせしにはあらざりし只濱町邊の町屋などにて見しが今は大かたに江戸の内せぬ所もなきやうなり

繪のぼり ○繪のぼり【懐子】(三)五月幟「門や又立榮ゆべき紙のぼり」(正村)其外紙のぼりといふ句多きは寛永頃は端午のぼり皆紙にてありしなり【羅山文集】慶安辛卯五月端午云々家々揷菖造粽、且爲童兒立紙幡、木肖また【一代女】(六)五月の處のぼりは紙をつぎて素人繪をたのみ云々【五元集拾遺】なよ竹の末葉のこして紙のぼり今も田舍にはこれを用ゆ又【五元集】に(卯月十七日或人の愛子にねだり申されて)郭公幟そめよとすゝめけりと云もあれば此頃より下さまにても布のぼり行はれしにや武者繪の板すりて蘇枋黄汁等にて彩れり江戸にても鍾馗のぼりは紙を用るもあれどそれも此ごろは少なきにや板行の繪などは絶たり(奥村文角などが墨繪の鍾馗を板にて摺たる目玉に金箔置たるなどありし)【續山井】繪にかくや目に見ゆる鬼かみのぼり(風鈴軒)又【色三線】に手遊の幟賣あり

頭巾すゞかけ ○頭巾すゞかけ【江戸二色】に出たり狂歌に四天王ほどにいさほし祈るなり山々ぶしのたねのおひさき(此冊子の翫具これらの物見ゆれば元祿頃の書としらる)

つけぎの燕とんぼ ○發燭(ツケギ)の燕【俳諧口寄草】(元文元年)冠り付(ひいち〳〵)附木を二まい尻尾にし寶曆ごろの京師の繪本(畫風寺澤昌次とみゆ)にこの燕うり有り首は椋の子なり又明和八年坂本の【江戸名物鑑】に海老藏蜻蛉賣あり竹の先に蜻蛉つなぎたり今もある蝶々とまれといふものゝ製にや(蝶々も明和の頃よりあるか宗

蝶々 因が句に世中は蝶々とまれかくもあれと云はこの翫具より昔の句なり)柳亭云京師八坂の茶屋のことをかける草子にてう〳〵とまれの小歌出たり件の句はこれをとれり然らば菜の葉にとまれと云ふは昔の小歌なり下總佐原あたりにて蝶々とまらんかのめ飛すからんかのめとうたひて踊るこれも同じたぐひか

摩睺羅

子といふを子供にいひかけしなるべし）
○摩睺羅を【名物六帖】に土のちご人形としたるはわろし【東京夢華錄】（七夕條）街內皆賣磨喝樂乃小塑土偶耳、悉以彫木彩裝欄座、或用紅紗碧籠、或飾以金珠牙翠、有一對直數千者、禁中及貴家、與士庶爲時物追陪云々、又小兒須買新荷葉執之、蓋効磨喝樂、兒童輩特地新粧、競誇鮮麗、至初六日、七日晚貴家多結綵樓於庭謂之乞巧、樓鋪、陳磨喝樂花瓜酒炙筆硯針線、或兒童裁詩、女郎呈巧云々
○【格致鏡原歲時記】七夕、俗以蠟作嬰兒形、浮水中以爲戲、爲婦人宜子之祥、謂之化生、本出西域、謂之摩睺羅、今富家猶有此（按るに化生の事後には常の翫具にて飾物とせざりしにや【五雜組】に歲時記を引て云々ありて王建詩、水拍銀盤弄化生是也、今人以泥塑嬰兒、或銀盤者知爲化生而不知七夕之戲といへり）
○【濟二朝實錄】天聰八年十二月丁酉、墨爾根喇兒載護法嘛哈噶喇金身、至初元世祖、時有帕斯八喇嘛用千金鑄護法嘛哈噶喇像、奉祀于五台山、後請移于沙漠、又有沙爾巴庫圖克圖喇嘛復移于元裔察哈爾國祀之、墨爾根喇嘛見天運、已歸我國、皇上云々、于是載佛來歸また十年正月云々、先是孟庫地方、送嘛哈噶喇佛至、命造銀一座、重五百兩塗以金、藏其骸骨于塔中、置殿左側禮部之（右【三朝實錄】の文分明ならず元世に鑄たる像瀋に來るといひ又其骸骨を塔中に安置すといふは鑄像の外に其骨をも送り來れるか但し元の時のも其骨を像の內にこめたるにや）只一處に嘛哈喇とあるは噶字脫たるなるべしされどもこのマコキヤラ即摩睺羅なるべし【法華經如來神力品】に天龍夜叉など擧たる內緊那羅摩睺羅伽人非人等とある摩睺羅伽もおなじ物にやこは人類にはあらず異なるべし【元曲選】に張孔目智勘魔合羅雜劇あり高山といふ者手あそび品々賣ありく其內に魔合羅もあるなり常にある玩物にて七夕に限らず【帝京景物略】忿怒變像烏斯藏所貢之日馬哈剌佛本邦にて達摩を翫ぶもおなじ七夕に蠟をもて嬰兒を作り其外種々の形も作るによりて摩合羅をも作りしが飾物となりて聖像も賣り寶座など風流を盡す事となれるならん（越後信濃などの國にて七

蹤】十五）飴賣のことをいふ處挑了糖租一頭辨、有搖鼓兒、泥人兒引線兒、紙糊小笏兒、燈草發板兒、丁々當々とあり草發板兒は飛人形の類にや

形經業人

○輕わざの人形【西鶴道土產】（五）渡世かなしく毎夜蛛まひの人形拵へて云々

てんぼ

土の西行

○てんぼ、西行法師、鈴【誹袖海】といふ草子に東福寺裏の門前此邊の名物地黃煎土にて作りし狐鈴鳩てんぼさては風呂敷わいがけたる富士見西行かねをためるものはあの西行の心やうならではならぬ其故はたとひ首は落されてもふろ敷包ははなさぬと大わらひ云々これら今も有るものなり土人形を造るみな合せ摸にてぬくなり彼風呂敷包みやうの物は後に土を捻りて付たるなり故にこれは中に空虛なし首は缺やすきも風呂敷は背に燒付あれば落がたしこゝにやくなき事ながら西行の圖古畫をみるに笈を負て包み物負つるはなしさるを「寶藏】（二）にも西行法師のひらづゝみは世をはなれたる袖にはいかけられ難波かたにさまよひては蘆の枯葉に驚き云々いへり是今いふ風呂敷包みなり風呂敷は風呂に入る時敷ものなれは常に物包むをばひらつゝみといへり似たる物故後には（大小の違ひはあるべし）風呂敷にも物を包み用ひてひら包の名はうせたるにやひら包は【下學集】に平包と有り【雅亮裝束抄】にひらつゝみのうはさし【俳諧染糸】の内千句に「泥足も其儘涼む一橋岩根におろしおく平包さて包み負へる西行は俗圖なるべけれど是もやゝ古く其さま有とおぼゆ熊野山妙見院八坂寺大師修行影像かのひら包みを背負たりでんぼ今もあり小き炮烙の俗名なり享保中に書たる【調味抄】といふ物に蒲挺をほうろく燒にすることを云て深き大でんぼに入又てんぼにてふたをして火つよくたけばむしやきになる云々てんぼは手くぼにや

土燒の鈴

とおもへどさる古雅の名にはあるべからずさらば土炮烙の略稱なるべし土燒の鈴は【洛陽集】に初午や典主は鈴を彩りけり（春澄）兆典主は東福寺の繪具谷の土を繪畫の着色に用ひたりとぞ其邊の產物故とり合てかくいへり土燒の鈴を彩色するなり【續山井】に風になるやすゝの子とものもてあそび（拾女鈴

人形あり二つともに人形の體同くほゝかぶりを赤く彩りたるいと麁相の作りとみゆ狂歌「かちもすまひまけもすまひの木偶坊勝負は人の手のうちにありすまふとりの畫をきりぬきて後につけぎをほそくさきたるを貼つけて立つやうにして二人向はせ息をふきて倒し勝負をみるものあり板にて作れるといづれ先なるかこれも古きものとみゆ【相撲大全】の叙に一戯具取見之摺疊、予少時有繭紙嚇、剪爲肖形、折如人字乃細視之、則塗猫其首而爲髻、綵飾其腰以爲褌、各紀其字號、宛然兩人將相撲之貌也、其嬉法裝之席上、戯者亦對曲折偃僂、失其口嘴、氣息微々一齊吹起來、則盤旋欹斜、暫時爭競而仆、得其上者爲勝而呼號（宮崎癸未）

金平人形

○金平人形西鶴が【大鑑】に肩車に乘て懐より具足着たる金平を賜り道すがら切合ことしてまた手遊とて飛人形又は染分の手拭云々土佐ぶし淨るりに金平の事を作れり（作者は岡清兵衛といふものなり）和泉太夫これをかたりて大に行はる是より世に強き事を金平といふ手遊一枚繪々双紙などに出たり今も男めける女子を金平といふ（又漆にひとしく固き糊を製て金平と名付また牛蒡の賣やうに金平あり）【六玉川】（十編）金平は女にありておもしろき（金時ともいへるはもとよりなり【溫故集】に遊女歳旦「盃や金時らしき初笑ひ（秋）とあり又土佐節【草摺引】にも鬼を茶の子のきんぴらだんべい

飛人形

○飛人形は竹の串を膏藥に捻り付てはね返らす張子人形なるべし【描金畫譜】に笠着て匍匐る人形みえたり今淺草寺雷門にて賣る龜山の化物などいふは張子二つにて一つは上に着せはねかへれば脫て形かはるやうにしたりいと近き物なり又綿に作れる兎もありこれらはもとより有しなるべし龜山の化物は四國を廻て猿となると云ふ諺を人形に作りたるが始にて其外さまざま作りしなるべし龜山の化物と云ことは觀せものあやしきものと龜山にて生捕しと云しこと度々ありしゆゑしか云なれたることゝみゆ此外に紙を方にたゝみ獅子舞の形に作り足にしゝみ貝を付てうちはにてあふぎをとらするものあり祐信が畫に笠きたる人形を紙に作りたるにうす板の車を付て扇にてあふぎて走らするものあり似たる戯なり【寳合寄

が天狗の像は胡徳樂の面などによりしもの歟今神祭にみる猿太彥の面なり是王のはなとて古くより有しものならば元信が工夫奇とするに及ばず王のはなは元信の畫より後なるべし今鼻の長きを大天狗嘴尖りたるを小天狗といへるは何ことぞ【帝京景物略】云、紙泥面具曰鬼臉鬼鼻目、染髭曰鬼鬚これは鬼の面のあるは鼻の大なるあるは目の大なる毛の色のさま〴〵なるもの種々有なり【胸算用】(元祿五年)五文の面張貫槌ひとつにてといへるは大黑の面はりぬきなり

しほ吹

○しほ吹【屠龍工隨筆】に今童の弄びに口の尖りたる面は鎌倉鶴が岡の拜殿に海よりあがりたるとてしほ吹と名付たる面あり是を學びたるものとおもはるといへりしほふきは小ばかといふ介潮の干潟にありて口を閉る時水はじきの如く潮をふく假面のしほふきは其義をしらずこれうそふきを誤りとなへしものか嘯く面のおかしげなるなり【鷹筑波集】(二人名はいかい)見たもなきうそふく貌はさん三郎月の夜ふろに垢をかく助

芥子人形

○芥子人形【一代男】(一)小筥をさがし芥子人形おきあがり雲雀笛をとり揃へ云々【五元集】菓子盆にけし人形や桃の花これ三月ひなの旬の中にあり【雍州府志】云、木偶人施衣裳小者謂芥子人形、芥子比至小者云々

今土燒の小人形

○今戶の土の小人形【西鶴置土產】(三)淺草寺町の横筋を行に内のみえすくよし簾作あれたる宿の棚に小紫姿屋と看板出して土人形の細工する云々御亭主此人形小紫ならば先遊女にしては帶がせまし殊にうしろのとりなりまんざら人のおかためきたをといへば壹文に一ッ、賣ものを無理な御吟味それは七十四匁に賣ときのせむぎと笑ひけると有り今もあるふり袖きてすはりたる人形なるべし同じ小人形にあみ笠きたる遊客などもあり

相撲人形

○すまふ人形今熊と金太郎のすまふ人形うす板をきりぬきて作れるものあり【江戶二色】に其製のすまふ

を三光といはざるはいかゞ其角が【錦繍段】に鬼女の面は般若あだち女とて古来より角ある面なり黒塚の能の位におもひ合せ侍れば全く一念の鬼女といふにはあらずたゞ罔両のたぐひなるべしとて源助に申てあたらしく角なき面をうたせけるは時にとりての工みならんやと申されしにいふは誠かといへる儀盛の謡も思ひやりたるやと雑談して両吟の物ずきにはなしぬ「黒塚のまことこもれり雪女（其角）獄あげ日にたつ内革の足袋（沾蓬）云々あり源助は【江戸鹿子】に面打日比谷一町目出目源助と出たり（此事いつの頃なるか元禄中の俳諧なり）【諸藝太平記】（四）張貫の般若の面雨にうたれしをみるやうに天晴芝居のみせ物したらば直打のある男云々【耳袋】に金剛太夫家に金剛といへる面あり是は古き仁王の顔を面に拵へたるなり其太夫はこれが祟りにや鼻を損じけるとかや右の面は京都の一古寺に納めおき代替に一度これを拝することゝなむ

乙御前の面

○乙御前の面今おたふくといふは多福の義にとる歟略きておふくなどもいふめりこれを世に【山谷集】四休の語の内、麁茶談飯飽即休、三平二満過即休とあるを三平は両の頬と鼻をいひ二満は額と頤とにて乙御前の事なり此説古く聞えたれども非なり平は心安らかにして満はたらはぬことなきなり三と二は大數をいふなるべし

天狗の面

○天狗の面、畫にかけるも古くは鳥の嘴の如くなりし鼻の長きは狩野元信僧正坊を畫きしより起れり其圖今に鞍馬山にあり假面に鼻の長きは胡德樂の面なり又王の鼻といふは猿太彦なりといへり【俳諧馬鹿聡勉】と云書あり其返答に【破晋魔】といふ書あり又その拾遺を【非免路】といふその内に一木高くて赤きや王のはな栢榴此言云いづれの君のことにか尤憚ある事なり陳云この王の鼻は御霊殿の祭やらんにかつける面なりされば此頃の小歌にまであかひ物ぞろへの内へいれば人おきねくしれり只末社の神ぞ云々（赤い物揃への小歌は聚楽城普請の時の歌なりその内に王のはな有り【尤の草子】に出つ）按るに元信

也こは手づまの類なり近時ははさみにて紙のはしよりきり初め人物は眉も目もはさみを止めず紙を廻はしながらきり畢てはなれたる紙を合すれば全紙の如し又錦畫を白紙にかさね毛筋の如く細やかにほりぬくもありはさみにて截るたくみに及ばず

假面

假面（めんがた、般若、乙御前、天狗、しほ吹）芥子人形　今戸燒の女　相撲人形　金平人形　飛人形　輕わざ人形　てんぼ　西行　鈴　壓喉雞　綸幟　發燭の燕（とんぼ蝶々）　小鍋　箔團扇（ほゝつき挑灯）麥わらの蛇　つぼ／＼

めんかた

○めんかたとは湯桶よみなり【著聞集】（十二）小盜の條に面がた一つありけるは其面をして顏をかくして夜な／＼强盜をしけるなりけりと有おもてかたと讀べし【鎌倉職人盡歌合】猿樂の歌いとつるゝわれとはさらに見えしとておもてかたをもきまほしきかな今小兒玩物のめんがたは面摸なり瓦の摸に土を入てぬくなりまた芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが今はかはりて錢のやうにて紋形いろ／＼付たる面打となれり元祿の頃【若葉合】と云ふ歌仙の內に常陽花をどり指人形の輕はづみ彼けし面は指人形の爲に作れるなり

般若面

○般若面は【尤草子】ひろき物あはうのはなはんにやのめんの口といへり怖ろしき女の面を般若といふ【般若心經頌鈔】云翻般若云智慧、其躰也淸淨、不受諸妄染云々見えて智慧といふことの梵語なり鬼女の面をはんにやといへるは言の轉りたるなるべしそのもと謠曲より出づ葵上に怨靈行者が加持する誦文を聞て「あらおそろしの般若聲や」と有り【大般若波羅密多】（第五百七十八）般若理趣分　曰、菩薩摩訶薩、摧伏一切魔怨とみゆ般若の聲に怕れたる怨靈が着る面をやがて般若といひたるにや又猿樂金春が家に傳來の鬼女の古面あり般若坊といひし者の製造となむ般若坊は南都の僧とか是によりて鬼女の面をはんにや

尉の面

といふとぞ又同じ家に三光といふ尉の面ありこれも三光坊とて三井寺の僧の作といへり然らば老翁の面

出たる作りものとみゆ烏賊甲の鶯今も作りて弄ぶものなり酸漿の瓢また同じ桃仁の松蟲これをみれば今西瓜子にて鈴蟲を作るのもとなり

茗荷の鶴

○茗荷の鶴不角が【矢の根鍛冶後集】よき作意とて譽られにけり「水物に鴨はなしたは茗荷の子（素仙）【六玉川】（二篇）名月やめうがの鶴も生のこり又（四篇）めうがの鶴のくさる舟底といへるは臺の肴物の飾にてありしなり【俳諧白花鳥】（寶暦五年）けしきどり水さかなの躰に留る故なり身はめうがの如く頭は赤くとうがらしの如しいかの甲に生るは稗の中に留る子どもの慰になる鳥なり

折形の蛙

○折形の蛙【清輔朝臣集】女をうらみて云々青き筋ある紙にてかへるのかたを作りて書つけてやりける云々

折居の鳥

○折居の鳥【一代男】（一）或時はおり居をゆかし比翼の鳥の形は是ぞ云々これ紙の折方にて鳥を作るなり【五元集拾遺】に聖代を仰ける句とて鶴折て日こそ多きに大晦日といへり春の設けの提子などをかざる料なるべし【俳諧三疋猿】折形の舟なかさはやかきつばた（麥林）今をり鶴といふものにや【伊呂芝居】に女子の遊びごとをいふ處に折すゑの鶴鉄形の兜とあり今も作るものなり疊紙のみ折居と心得るは非なり（此ごろ淺草に紙折たゝみて種々の物を作り人物鳥獣何にても人の望に任せて造る者あり）

紙捻の犬

○紙捻の犬【江戸枝折】にもの思ひこよりの犬も痩かたち望一は紙より細工をよくしたりとか【あら野集】はる雨はいせの望一がこより哉（湍水）

鋏切形

○はさみ切形【俳諧名物鑑】（寶暦中より江戸の名物を集む明和七年梓行）芝鋏切形「きり形に咲せて見ばや菊の花と出たり其人芝に住したるべしこれ今もある紙をたゝみて夾剪にて種々の紋を截る者なり寶暦十三年の板【諸藝遊戯双六】には紋彫とあり宋の曾三【異同話錄】に將大坊母夫人曰少日、隨親謁泰山東嶽、天下之精藝畢集、人有紙一百番疊爲錢、運擧如飛、既畢擧之、其下一番、未嘗有擧痕、其上九十九番紙錢

米搗ざる

○米搗ざる【續五元集】凍たる手から錢洩鞍のうへ風にはころぶ猿の米つき【江戸二色】夏冬を赤いふんどしひとつにて人にましらの米をつくなり【篗絨輪】に輕薄わらひ乳貰ひの常手みやげに米つき猿を小鎌賣（干翁）

桃核の猿

○桃核の猴【守武千句】うつりかはれば猿とこそなれ花の春もみぢの秋の桃のさね【以呂三絃】にもゝの核にて猿を作り竹の切にて耳かきこしらへ當座の御用に立る云々【後日】男桃のたねにて猿を作り又はひやうたんの口を細工にして居云々などいへるみな手細工にて賣ものにはなきものとみえたり今も作る括り猿の形したるなりそれとは異なれ共後藤氏に傳へていふ四郎兵衛祐乘亨德の頃將軍家へ仕へしが故ありて召籠られし時心願を起し桃の核に日吉二十一社獮猴六十餘を彫たる是より祐乘に刀劍を飾る具ともを造らしむとなん（又彫刻師吉岡因幡が先祖も桃核に山王神輿二十一各舟に乘せあまたの猴棹さしてこぎまはる處を彫たるがあり家に傳へて寶とす余も一覽したり桃核僅に半分ほどなり神輿には寶珠又鳳凰など付たるいと細やかに彫たるやうに覺ゆ）これもとより桃核にて猴作る事あるより出たる事としらる

蜜柑の猿

○蜜柑の猿【洛陽集】に向歯や蜜柑の猿の腸をたつ（榮也）【一代男】にみかん一つ黒髮をぬかせられ猿なとして遊びし夜云々是今も柑瓤（ミカンノフクロ）を髮毛にて括りて猴に作るなり寛文十二年【俳諧三つ物】うら白や海老上﨟のしたかきね（正長）【前句付廣海原】煎り海老はげに上﨟の箸休め

松笠の鳥

○松笠の鳥【日次紀事】八朔條に云今日兒童戯、以松笠造雉鳥、或以烏賊魚甲作鷺鷥、或以絲絮括金灯籠、草實作瓢形、又以桃仁製松蟲、是等類自玩之、或互相贈、謂之額合云々、綵雀亦與雉鳥鷺鷥之類同、又蒿苡子連枝（マツカサ）、折之與行器贈之とあり【世間胸算用】八朔の雀は珠數玉につなぎ捨られといへる是なり

松毬にて翫物を作る

○松毬にて翫物を作るは雉のみならず【江戸二色】に二刀を帶たる奴と鍬かたげたる農夫ありいづれも體ばかり松かさなり其狂歌に百姓と奴が着たをよくみれば松つふくりてござりまうするこれ雉の鳥より

橙上、料絲害亦同、全在父兄切戒ひゝとろの喇叭はポンピンとは異なり料絲はひゝとろの管又は連珠なり

彈き猿　○彈き猿古き前句付（書名缺）行あたりけり〳〵彈かるゝ度にあたまを叩く猿（これ今もあるものなり）

幟さる　○又幟さるはもと五月幟の下に付たる括り猿なりもてあそびのは其躰異なり【江戸二色】（明和の末に刻したる草子なれどもその圖は古によれり）のぼり猿の畫あり其うへに「きをかへて猿もさつきの竹のぼり風のくるまはおりてこそゐれ短冊ほどの小幡の風に吹るれば猿竿の上にのぼるなり又文字の扁にのぼり猿といふは非なり【嘉多言】にも文字の篇に小さと大さとゝいふべきを小猿大猿などいふは誤なりとかやといへり

釣する猿　○釣する猿【正章千句】霞む瀧津の鯉つらんとや劫を經し春の山猿智恵ありて貞徳が判に云ふ猿の釣すること慥なる古事は未知いへども世にいひ馴たる諺なればよき寄合にて候と云りこれ戯物に作りたるにはあらねど戯物も此諺によりて作れる物としらる林鴻が【あらむつかし】といふ冊子に似絡が句「來しかたや猿は魚つるかきつばた

つながり猿　○手を引連りたる猿は【僧祇律第八】云、佛在王舍城、諸比丘爲調達、作樂鶏磨、乃至佛告比丘過去世、時空閒處有五百獼猴、遊行人間、有一尼拘類樹、々下有井、々有月影、猴王見已語諸伴言、月死落井、當共出之、令世間破於暗冥、諸猴言云、何能出、王云我知出法、我捉樹枝、汝捉我尾、展轉相連、乃可出之、諸猴皆從、漸欲至水、猴重枝弱、枝折墮井とある是なり【鹽尻】に五色綫を引て曰謝靈運遊名山、觀掛猿下飲百臂相連云々世に猿の手をとりて連りて水中の月影をとらんとするさまを畫くは此ことにや但し月かげをとらんとすることは【經律異相】にてや見侍りし相連り下る故事とは別なりしかるをひとつに心得て圖し侍るにこそ

水挽さる　○水挽さる今水からくりにうすをひくさるあり水にてひくと見えて【天祿識餘】に唐人の作たる孩兒の詩に折竹裝泥燕添絲放紙鳶互齊輪水碓相効放風旋と見えたり皆戯具なり風旋かざくるまなるべし

猿松笛　○さるまつ笛【名物六帖】に【夢溪談】の顙叫子をさるまつ笛といへり【永代藏】に童部すかしの猿松の風車とあれば笛のみにはあらず猿松は廣く子供の名にいふにや

ひばり笛　○雲雀笛はもとひばりを捕ふる爲に吹笛なり【一代男】（一）小兒弄びの内にひばり笛をとりそろへ云々あり

笙の笛　○伊勢みやげの笛【諸艶大鑑】に伊勢みやげの笛を吹て門に遊びし云々貞享四年の衣服ひな形をみるにいせ土產の模樣あり笛は小き笙の笛なり【永代藏】に伊勢のみやげをいふ處笙の笛貝杓子して世を渡る海の若和布の眞砂の數しらずなどいへり

むぎ笛　○麥笛【藻鹽草】うなひ子がすさひにならす麥笛の聲におどろく夏のひるふし【洛陽集】麥笛や折から蟬に一聲あり（榮也）麥笛や夜毎に人の在所より（同上）【和漢三才圖會】云、大小麥共中空白色云々、小麥稈（ワラ）厚硬、小兒用以作笛吹之、謂之麥藁笛とあり麥笛といふは即是にて今竹の管笛に麥わらもて飾りたるにはあらず麥の稈（ワラ）を鳴すなり杜（マサキ）中の葉を卷てならす類也麥わら細工今色々あり【吳社編】に虎丘之麥柴、則彫簷回楯、疊架連楣、皆以麥爲之如黃屋、瑠璃光射、淸旭眞奇玩也と巧みに造れるとは見ゆれど染て用る事をしらざるにや

ぽんぴん
ぽこんぽこん　○ぽんぴん江戸にてはぽこん〳〵と云ふ【藝苑日涉】に響葫蘆ポンピンと出たり一名倒披氣と云ふ【帝京景物略】云、瑠璃云々、有啣而噓吸者、大聲咏々小聲唪々、曰倒披氣【日下舊聞】に倚晴閣雜鈔を引て曰、瑠璃廠原爲燒殿瓦之用、瓦有黃碧二種、殿瓦之外、所製曰魚瓶、曰瑠璃片、曰胡蘆、曰響胡蘆、小兒口銜噓吸成聲、俗名倒披氣傳家寶（二集）料物不可與兒といふ條に年節內外滿街都有賣料汁、不動幷料汁瑠璃喇叭、但此等要物、最薄最脆、遍地小兒每喜吹、願若一吹破吸入喉嚨無藥能救、其破片極是鋒利入目即瞎、入腹腸斷、料絲

豆太鼓

風車

○風車は漢名もおなじ【帝京景物略】に出たり【尤草子】めくるものゝ内或連歌の前句にあぢきなやまたゝまはしても見ん（付句）みどり子のなきがかたみの風ぐるま【雍州府志】に云所々是を作る然れ共祇園町を本とす春の初多く造る藥の臺に建置て賣るこれ兒女の玩具にして和風の體を含みおのづから春初發生の氣あり【永代蔵】(六)に童子すかしの猿松の風車をするなどやう／＼一日に丸どりにしてから三十七八文より五十までのしことするかせぬかなり【松の落葉】（丹前部八幡詣出端）さて／＼みごとやいたいけしたる物ありはりこのかほやぬりちかふ千くさ結びに篠むすび山しなむすびに風車ひやうたんにやどる山がらくるみにふける友千鳥とらまだらの犬の下とるや蓬のやはた山云々（みな玩具なり）【江戸名物鑑】に雑司谷風車新蕎麥や給仕もめぐる風車（これ明和七年の作なり其頃雑司谷専らはやりたり）【草根集】寄車戀手にとればそなたより吹風車めぐりあふべきしるしとぞ見む後奈良院御撰【何曾】に風車の謎嵐山を去て軒のへんにあり【帝京景物略】剖秫稭二寸、錯互貼方紙、其兩端紙各紅綠、中孔以細竹、横安秫竿、上迎風張、而疾趨則轉如輪、紅綠渾如暈曰風車、路德延孩兒詩の相教放風旋と云もこれなり

はりこ

○はりこ【雍州府志】云木をもて人形鳥獸の形幷に諸品の模範を作り紙にて張ぬく云々もろこしには脫砂といふ泥砂にてそのかたを作る故に名く云々文匣小筥みな張脫とすといへり西鶴が【大鑑】(七)人形屋をいふ處獅子笛張ぬきの虎又はふんどしなしの赤鬼太鼓もたぬやす神鳴是みな童部たらしの樣々といへり（今はりこゝもてあそび時代のみゆるものは男女の大あたまむかしの摸を用ひて作れり首將已上の風俗なり其外田樂をやく女袴きたる庫頭などの首の動くは虎の首より出たりとみゆこれも又今は古きものなり

獅子笛

○笛【西鶴大鑑】獅子笛（上に引り）これは獵夫の用る鹿笛にはあらず頭に獅子を付たる笛なるべし

鶯笛

○鶯笛は【犬子集】けふにはや鶯笛もねの日かな【進身の上】春のしらべの琴の音に鶯笛のその聲は云

なしはふりめく物を着て額に三角なる紙をあつこれは親族の者どものする事なりこの着る物をいろと名く大かたは菩提所より借て用となん猶所々にあるべし）此事はむかしは田舍のみにもあらず古き草子のさし繪などに往々見ゆ【櫻陰比事】町人のぺ送りの處に白衣はぬげ烏帽子は落てそうれい男をつかみさがし云々

○乙州が【それ〳〵草】に歌舞伎子の幽靈を眞似るに先細き竹杖額に紙をあてよろぼひ出てかすかに聲を出すそのまねるものも幽靈はかく有と覺え見物の人も幽靈はかくと覺ゆ云々いへるなどを思ふに民間に此風俗うせたるは元祿の中ごろよりなるべし地獄變相の圖など皆そのさまを畫けり但し男女ともに同はいかゞ【再來田舍一休】と云ふ草子に女のことを云ふに靑竹の杖にてひたひに萬字をあてかちはだしにて死出の山をこゆ云々あれば紙にマン字をかきたるなるべし書には只かりそめにシかやうに墨を點じたるがやがて片假字のシの字と心得て後には皆しか書り

合點首

○合點首合點はもと官舍にて我得心し同役のものも同心したる事にはとも〳〵點をかくる是合點なりまた歌のえらびなどするにも判者二人なれば歌の首に左右に點かくるありこれによりて何事も得心するを合點といふ故うなづく事をしかいふなり合點首は今もある首ばかりの人形なるべし【一代女】（貞享三年刻卷六）衣類と首は各別に違ひ合點頭の如し（子供の弄ぶに衣類は何にても有に任せて用ふればなり）【六玉川】（八）五月雨が人形もみながてんくび（五月人形をいふなれどもがてんくびと云ものあるゆゑにかくいへりまた小き雛にもがてん首あれ共それにはあらず又一文首の竹の串に付たる首は武者又鬼など色々ありしが今は見えず

錢太皷
唐人笛

○錢太鼓、唐人笛【諸艷大鑑】（貞享元年）此處は洛中のお乳の人の集りあそぶ所なり錢太鼓唐人笛のひゞき竹馬の鈴の音云々小きを錢に譬へていふは錢龜錢蓮などのごとし今豆太鼓といふも同義なり

にちれは咲花はおきあかりこふしかな（小法師を辛夷の花に取なしたり）【堀川百首題狂歌】（猜影）かいこけて丸寝の丸きつふりより起あかり小法師春立にけり唐山にて不倒翁といふもの是なり【詠物詩選】雑玩部に呉偉業戯詠不倒翁詩あり是もとより達摩の像にはあらぬをいつの程より達摩に作りたるか達摩を翫物とするも近き事にはあらず小兒の戯ごとに一に二にふんたる（るはむの訛也）だるまが赤い頭巾かぶりふんまいた（ふんはすんの訛也）といへり【安斎良加須】に頭巾をだにも今はかつがず（付句多き内に）夜も晝も不斷達摩を禮拜しとあるは右の戯言をとれるに似たり【嘉多言】に不斷といふべきをふんだんなどいふこと如何といへり此音便は小兒のみにあらず今も物の多くあるをふんだんと云へり

ふんだん
紙えぼし

○紙えぼし【清少納言】見くるしきものゝ條に法師陰陽師のかみかぶりしてはらへしたると有り其【抄】に法師ながら陰陽師にて祓などする者あり又（紫式部家集）やよひの朔日かはらに出たるにかたはらなる車に法師のかみかうぶりしてはかせたちたるをにくみて「はらへとのかみのかざりのみてぐらにうたてもまかふ耳はさみかな紙かぶりは白紙にて作れるなるべし幣にまがふと有にてしらる又耳はさみとは紙かぶりに緒をつけ耳にかけて結たるにや女の髪にも耳はさみといへる事有り面にかゝれる髪を耳にはさむをいふ（容儀部にいへり）紙かぶりのかけ緒の其體にはさむなり【宇治拾遺】（六）内記上人寂心播磨國にて法師陰陽師の紙冠を着て祓するを何しに紙冠を着しぞと問ければ祓戸の神達は法師を忌給へば祓のほど暫着て侍ると云ふ物語あり又【夫木集】西行の歌しのためてすゝめ弓はるをの童ひたひえぼしのほしけなるかなこの類えぼしは古き繪卷物に多く出たり三角なる黒きものを額にあつるなり紙を染たる物なるべし

○【卜養圖】葬送の處に見えたる男の額にあつるは門形して白紙とみゆこはえぼしの代にかりに用る物なり今も田舎には葬禮に白き紙の三角なるを額にあつるは紙冠の遺風なり（越後などにては白木綿の袖

名と聞ゆころといふはその用ふる所の　の名なれども一ツふし三あふむけるをばころといひけることゝ聞ゆそのころてふ物は數多なるべし是樗蒲（カクウチ）より出たるもの歟かりところとはその稱へも近し【和訓栞】

げへ

に貞德が書につくよといふは小兒の竹にてつきといふことをするに手の甲のうへにて竹のうらおもてになることあるに譬ふるなり此をげへといふ竹は六本なりと見えたりされば【萬葉】に一伏三向をころとよめるも此等の義あるにやげへといふは今もあり又小兒戯に穴一といふ事をするにまつけをつくとて次

竹かへし

第を定むることあり又いちあとの者をへといへり又采もてするげんべといふ名もげへの轉じたる語なるべし（穴一にはけしといふことも有）といへりげへといふことは今の竹かへしなるべしおもふにつきと

つき

いふは竹かへしするに手の甲に載せたる竹を裏がへさむとする時突やうにするをいふ歟げへとはいかなる名義にかあらん未考これら件のころにはあらず

ふりつゞみ

○鞞鼓（フリツヽミ）は【和名抄】に鼗和名不利豆々美【周禮】注云鼗如鼓而小、持其柄搖之、則旁耳還自擊之となり此字を用ふべし【榮花】今のうへわらはにおはしませばつごもりのついなにてん上人ふりつゞみなどして參らせたればうへふりげふぜさせ給ふもおかしこは樂器なるをその形を小くうつして翫物とするなり

はりつゞみ

○はりつゞみは【俳諧懷子】（八）京わらんべの心のとけき（貞德が付句に）けふといへば鶯笛やはりつゞみ猿樂狂言にはり太鼓あり是なるべししらべの緒なく革のつよく張たるをいふ歟

おきあかりこほし（ふんだん）紙えぼし（ひたひ紙）合點首　錢太鼓（唐人笛）風車　張子（ヘリコ）笛、（獅子笛、鶯笛、猿松笛、ひばり笛、笙笛、麥笛、ポンピン）猿（はしき猿、蠟猿、釣する猿、つなかり猿、水挽さる、米つき猿、桃の猿、みかんの猿）松笠の鳥　いかの甲の鷺
ほゝつきの瓢　桃仁松蟲　茗荷鶴　折かたの蛙　折居鳥　紙よりの犬　はさみ切形

おきあかりこぼし

猿樂狂言【まんちう食】といふに子供のもてあそび物、ひなはりこ、おきあがりこほしと見え【鷹筑波集】

无木簎

○【萬葉集】（十三）菅根之根毛一伏三向凝呂爾また【同集】（十）春霞田菜引今日之暮三伏一向不穢照良武高松之野爾この一伏三向と三伏一向とはおなじ物なるべし【十訓抄】に嵯峨の御門の一伏三仰不來人待晴降雨戀筒寢とかゝせ給ひて小野篁に是をよめと給はせけり「つきよにはこぬひとまたるかきくらしあめもふらなんわびつゝもねんとよめりければ御氣色なほりにけりとなんわらはべのうつむきさいといふ物に一つふして三あふけるを月夜といふなりと見えたりこは正しく右の【埃嚢抄】に无木簎といつる物とみゆ一つふし三あふくといへるは【萬葉】のころと訓るとおなじ然らばころと无木簎とは同物にやそをなとて二つに分て【埃嚢】には書載つらむおもふに球杖と玉ととりはなしたるとおなじかるべし

○【萬葉略解】にも【十訓抄】を引て云々あるはこゝによしなくてことにいと後世につくれるものなればあけいふべきにはあらねどうつむきさいといふものは昔よりや有けんさて【巻二】人麿の長歌に許呂臥者【同卷】自伏君之などよめるころ伏は字のごとく自ら伏事にて今も自ら倒るゝをころぶといへりさればそのうつむきさいといふものゝ一伏三仰もおのづからころびおくるさまの物なれば古しへ其物をころとや名付て有けんさて上に出たる三伏一向は神佛をぬかつくより出てつくの言に借りたるにやあらん【十訓抄】には此一伏三向とゝりちがへてつくよといふに一伏と三仰と書るかこは試にいふのみといへるごとく【萬葉】につくの假字に用ひたるは三伏一向なるを【十訓抄】には一伏三仰を月夜のかなとす誤なるべし三伏一向は神佛をぬかつくより出たりといふは抑あての寫にて其實は知がたし

○【十訓抄】の文意のうつむきさいとあるを世に大かたうつむきさいとよめども【埃嚢抄】に无木簎といひまた【遊學往來】に無木と出たりこれに據て意の打むき簎と讀べく覺ゆ簎は投るともふるともいへどうつとはいはぬ物なれどこは常の骨子にもあらず其法も異なるべければ双六をうつといふがごとく打といふものとみゆさて【萬葉集】につく。のかなに用ひたるは音を轉じたるにて實は月なるべく簎の目の

寒垢離

○寒垢離【洛陽集】に寒垢離があびける水に月もなし（有知）寒垢離や綿子て足らぬ人もあり（自悦）これはねき事などありて堪がたき事をするなり今世乞食坊の寒ごりといふは代垢離の意なりもろこしの潑寒胡戯といへるは只寒中に水嬉することゝみゆ【唐書】中宗神龍元年十一月己丑洛城南門観潑寒胡戯また睿宗景雲二年十二月丁未作潑寒胡戯この事止みたるは玄宗開元元年十二月己亥禁潑寒胡戯とみえたり其後この事なし

寒氷

今小児裸體なるをかんこほりと云ふは氷をまがひたり昔の小児はおかん氷といひしなり【佐夜中山集】（付句）おさなき人のみる朝かゞみつめたきをおかん氷ともてはやしと云へり

氷をたゝく戯

○又氷をたゝく戯は【鬼貫が獨言】に柄杓は桶の内にゐつきて柄をにぎれどもうごかずあるはわらんべの瓶より出しもてあそびてはたゝく音かねのごとくむかへはかゝみのごとし漢土にも揚萬里が稚子弄氷といへる詩に稚子金盆脱曉氷、彩絲穿取當銀證、敲成玉磬穿林響、忽作玻瓈碎地聲

小児翫物字の事

○小児玩具【埃嚢鈔】(三)小児翫物字事さいらとは編竹と書き或は編木と書く筑子はこきりこ也肚はころ獨樂はこま礫砦はつんばひ石拃子いしなご无木毬むきさい草雞くさきり鼓鞞ふりつゝみ輪子りうこ同類也といへり此内他の條に出たるをばいはず肚は古來いかなる物ともいはざれば今さだかには知がたし按るにころとはころ〳〵とまろぶもの故に名づくるなるべし肚は字書に腹肚なりとあれば其義ことにかなはず恐らくは肬の字を誤りたるならむ肬五一切滑なる貌とあれば其義をとりて此字を用ひしにやさて其形はしられず但し両面にて四面にはあらじ今は卑き者の詞に錢をチヤンコロといひ又小児は小石を石ころといふ皆同義なり錢にいふは【犬子集】になかされて居るは衾やさつまがた鐺の湯つぼへは入るころ錢また【似勢物語】おかし男錢えりける女にいへりけりうしろめたくやおもひけん我ならでこと錢えるなかれたしや ころかけとらぬはつゝとなり ともと有をみれば 文字なきなり 悪錢をころといひけるにや

ところ〳〵

○雪こんこ【徒然草】（百八十一）ふれ〳〵こ雪たんばのこゆきといふ事よねつきふるひたるに似たれば粉雪といふたまれこゆきといふべきをあやまりてたんばのとはいふなりかきや木のまたにとうたふべしとある物しり申き昔よりいひけるにや鳥羽院おさなくおはしまして雪のふるにかく仰られけるよし【讃岐のすけが日記】に雪たりと有（後世この歌石臼など挽にうたふにや【壺のいしぶみ】に此ごろのならひ二上りたんせんしのびこまみなねじけたる音云々、ふれ〳〵粉雪たまれこ雪垣や木のまたにとよねふるひ歌にいふには遙におとりてあさましといへり）今小兒が雪こん〳〵といふことのもとなり（雪をいふより雨こん〳〵といふはます〳〵うつりてその義をなさず）

○【堀河百首題狂歌】よみ人不知「冬のこさへ御寺の垣にふりたまる踏しかりける雪やかう〳〵【一休咄】（四）雪やこんこあられやこんこお寺の柿木にふりゃつちれこんこ俳諧には【寛永發句帳】雪こんこたまれこんこやしろ狐また【犬子集】に於丹州（休甫）つれ〳〵をすさむたんばの粉雪哉【嘉多言】（慶安三年刻）わらはべにて侍しをり親たちのせいし給ふも聞いれずして雪こう〳〵と庭に出つゝそほれあそべりし云々【佐夜中山集】たまれ粉雪丹波いかきの目いつぱい【續山井】あすはさぞ雪こんこん今夜さよしぐれ又古き【前句付】に（雨よりはまし〳〵）人ぎれは阿部の童子の母も來ずこは雪こん〳〵を隠していへるなり

○雪打【禁秘御抄】子に龍口相具衛士及所衆、上殿上舍、於棟掬雪、所衆作雪山、この雪掬は屋のうへの雪おろして山作る料とするなり【犬子集】雪打やさながら春の花いくさ【安布良加須】子供やおもふまゝに狂はゞ欄橋を廣くかけたる雪打に【佐夜中山集】雪礫うつ子や五ッ六ッの花【五元集】雪うちやゝり手をかへす小忌衣【聯珠詩格】方南山の詩自緣當得重裘煖戯捨庭前雪打人【源氏】（浮舟）わらはべの雪あそびしたるけはひのやうにぞふるひあがりける

人）いにしへの鶴の林のみゆきかとおもひとくにぞあはれなりけり俳諧には【犬子集】すへりては人も雪ころはかし哉寛永七霜月晦日西御門跡遠行の明御門跡西からはとちへゆき佛（已上二句共に貞德の句也）

雪ころばし

【季吟獨吟】所またら雪ころばかしおり立て作る達摩もそれとみわかず（今は雪ころがし雪ころばし猶はぶきては雪こかしとも云ど古き俳諧は皆ころはかしと云り）又雪丸けは（今雪丸めと云なり）【續山井】に餅の皮むくとやいはむ雪丸け（伊賀上野蟬吟）【曾我物語】おくのゝ狩かしはか峠にてたきくちの太郎大石を谷へおし落しければすまふの條にみしまの入道しやうげん有ころはかしのおきぐちどのとあひざはのや五郎との出てとり給へり云々

雪灯籠

○【東京夢華錄】十二月の條に此月雖無節序、而豪貴之家、遇雪即開筵、塑雪獅裝雪燈、以會親舊（この灯籠はいかやうに作るにかあらむ今わらんへの作るは雪を丸くつくねて石灯籠の火ぶくろの如く横に穴をほり灯心のふときを一筋油に漬し中に入て火を點せばよくともるもし灯心多く火のつよければ雪解て火ともらぬなり）

雪やけ

○【安布良加須】にあらおそろしとやくるなりけり雪道と何と分こしすねならんとあるは雪やけと付たるなり霜やけ雪やけともに瘃（シモヤケ）といふべし瘃（シモヤケ）は【和名抄】漢書音義云、瘃（陟玉反、和名比美、辨色立成云、之毛久知）手足中寒作瘡也とあり【蜻蛉日記】霜くちまじなはんとてさはぐもいとあはれなり契沖云しもくちは俗に霜ばれといふ霜くちの出來るものは初霜を手足にぬればはれずといへばしかするをまじなふといへり

雪女

○雪女【俳諧懷子】（九）先ふるは雪女もや北のかた（作者不知）見られぬや山のおく様ゆき女（重供）【續山井】に目に見ぬや是もはせをの雪女（黒米）雲となり雨となる身か雪女（圓宅）有といへどみぬは貞女か雪女（丘貞）【續五元集】川むかひゝとりさめたる麴賣雪女には帶か黒くて

君宅之雪巌爾左家里都流可母、遊行女婦蒲生娘子歌一首、雪島巌爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之挿頭爾（雪の岩に花を彩り作るとあるは作り花を立る也）

雪の山

○雪の山は【清少納言】物のあはれしらせかほなる物の條、しはすの十よ日のほどに雪のいとたかうふりたるを女房どもなどしてもの〻ふたにいれつ〻いとおほくおくをおなじくは庭にまことの山を作らせ侍らんとてさふらひめしておほせことにていへばあつまりて作るに殿守司の人にて御きよめに参りたるなどもみなよりていとたかく作りなす宮つかさなど参り集りてことくはへことにつくれば所のしう三四人まいりたる殿守司の人も二十人ばかりになりにけり里なるさふらひめしにつかはしなどすけふ此山つくる人にはろく給はすべし云々いかにと〻はせ給へばむ月の十五日までさふらひなんと申す云々（その山大なるを思ふべし又其積きに）その山作りたる日式部ぞうた〻たか御使にてまいりたればしとねさし出し物などいふにけふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき御前のつぼにも作らせ給へり春宮弘徽殿にもつくらせ給へり京極殿にもつくらせ給へりなどいへば「こ〻にのみめづらしとみる雪の山ところ〳〵にふりにけるかな【源氏】（朝貌）女の童の雪まろばす處いとおほうまろはさむとふくつけがれどもえもおしうごかさでわぶめりかたへは東のつまなどに出ゐて心もとなけにわらふ一とせ中宮のおまへに雪の山作られたりしよにふりたる雪なれど猶めづらしくもはかなき事をしなし給へりしが【禁秘御抄】雪山條（上略）凡此事古不見、自中古事也、事始文略、一條院御時以後也、清少納言記在其仔細、初雪見參近代絶畢、初雪日仰六位藏人、令取見參、藏人束帶或宿衣、召御倚仰之、內侍傳仰藏人、進見參給祿、內藏寮絹、大藏雀布也、また雪山のこと【榮花】（峰待星）などにもみゆ【河海抄】に雪山伏見院永仁の頃まであり吉家記錄に出つ藏人頭不行として沙汰する也云々

ゆき佛

○雪佛雪ころばし【新拾遺集】（十七釋教）雪にて丈六のほとけを作り奉りて供養すとてよめり（讀西上

むやおさない

小家を作る

○又小家を作ること長明【方丈記】に幼子のついぢのかげに小き家作りて居たるとあり【一代男】に里の童があまがへるの家などしてといへるはいとさゝやかなるをいへり（此こと蟇の條にいふ）

箍廻し

○箍廻し近ごろ江戸及近在の小兒樽のたがを竹の枝なぞ丁字形したるにて地上を押まろばし歩行戯あり

「たが廻したがたがまはし初めけむ

雪山（雪佛、雪ころばし、雪やけ。雪女、雪こんこ、雪打、寒ごり、寒氷）ころ〳〵（无木、竹かへし、つき）ふりつゝみ（はりつゞみ）

雪の詠めは月花をもかねて須臾の程に白たへならぬ隈もなくおもしろきながめにはあんなれど北風はげしく吹て手足こゞゆるはたへがたく往来も自由ならず晴て後消かゝりて穢げなるはさらにもいはず路次のぬかりは日數經れ共かはきがたきなどを思へば月花にたぐふべきにあらず雪のふる日は寒くこそあれとはすなほなることぞかしこは下ざまのことにてやむことなきあたりにはことなる詠めと興じ給ふにこそ又さらぬも酒のむ人と兒童とは寒さをも恐れずいたく降つむをよろこぶも多かるべし歐陽子が乃知一雪萬人喜といへるは雪爲五穀之精といへるに據て豐年をおもふことなれば共意異なり【公事根源】曰昔初雪のふる日羣臣參内し侍るを初雪の見參と申也桓武天皇延曆十一年十一月より始る初雪にかぎらず深雪の時は必諸陣見參をとる也此事絶て久しと云々いにしへは初雪の日を曆にしるしたるにや【紫式部家集】こよみには初雪ふるとかきたる日目にちかき日野のたけといふ山雪いとふかく見やらるれば「こゝにかくひのゝ杉村うつむ雪をしほの山に色やまかへるとあり

○雪にて岩を作ること【萬葉集】（十九）天平勝寶三年正月三日内藏忌寸繩麿の舘に宴樂の時の歌に積雪彫成重巖之起（節信云起恐勢誤）奇巧綵發草樹之花、屬此掾久米朝臣廣繩作歌一首、奈泥之故波秋咲物乎

不角が撰める【續淸鉋】に誰惚なまし椿ほゝべにと云ふ句あり又同人撰【水馴棹】と云ふ集に似合かと袖とめ前の茄子鐵漿と云付合の句もあり茄子の皮を口に含ではぐろめの學びすること今もあり似たる戯なり

○又小兒の京橋中橋おまんがべにと云は今も女兒のてまり唄におん京々橋なん〳〵中橋おつや十六大ふり袖とうたふこれと同く江戸の中にも殊に繁華の處なれば女子の風俗もとりわきて勝れたるを云なるべしされはおまんがべにもうるはしきを處がらに付て云なりおまんとは天が紅の時なるを女子の名にとりていへり或說に中ばしにおまんいなりとてべにを供へて願がけする社あり享保の頃はやれりといへり思ふに此いなりの名は童謠によりて人の云出しにや

木のぼり

○木のぼり【枕双紙】（一二）桃の木に童のゝぼり枝をきる處黑きはかま着たるをのこ走りきてこふにまてなどいへば木のもとによりてひきゆるがすにあやうがりて猿のやうにかいつきておるもおかし梅などのなりたる折もさやうにぞありし【類柑子】柿の木にあそぶ子供や猿と猿（白雪）【書紀】（神代卷）一書曰、門前有一好井、々上有百枝杜樹、故彥火々出見尊跳昇其樹而立之

ひたたぼこり

○ひなたぼこり【嘉多言】（慶安三年刻）ひなたぼかうとは日南北向と書侍ると云へり然るをひなたほくりなどゝいふはよろしからじといへり此說非なり舊本【今昔物語】に西京仕鷹者出家語の中に日なた誇もせん若菜も摘なむ云々また【著聞集】（二十）ある田舍人京上して侍けるが宿にて天道ほこりして居たりけるに云々あり日なたの暖なるにあぶる意にや燒ことをほこらすといひ其暖をほこりといふ是なり

土なぶり　砂あそび

○土なぶり砂あそび唐太宗の土城竹馬は童之樂といへる是なり又【法華經方便品】に乃至童子戲聚砂成佛塔、如是諸人等皆已成佛道とあり【季吟獨吟百韵】にまろをどり腹を撫婦をとり〳〵にあやしゝ泥をふ

の句にて童謡をとれるなり又似たる諺あり【物類稱呼】に東國の童謡に旅籠はいくら十三はたごと云ことゝ有いにしへ鳥羽街道にて十三錢のはたごありしことなりとぞといへり（旅籠は古き草子などにはたご食に行などありて今茶やにて飯を食におなじ旅店に宿するにあらず）

○小兒星のとぶを見てよばひぼしと云ふ【帝京景物略】に兒見流火、則啐之曰賊星夜不以小兒女衣置星月下、曰女怕花星照、兒怕賊星照、亦不置洗濯餘水、爲夜游神飲馬也、曰不當價如兒語云罪過

尼が紅　おまんが紅

○尼が紅(べに)暮霞なり小兒はおまんがべにといふ黄昏をおまんが時といふも是なり然るを何やらの筆すさびにおうまんが時は王莽が時といふ事なり王莽は漢家四百年のその半(ナカゴロ)に出たるものなり黄昏は晝夜のあはひなればそれに似たりといへるは附會の說なりおまんといふはべにに依て女の名にいひゝがめそを又おうまんと訛りたるにこそ尼が紅といふも天の紅なり惠空（紀州淨福寺住）が【節用集】に和俗呼赤色之雲曰尼紅粉貞德が【油加須】に雲のうへにも湯やわかすらんべにやではかはぬあまらが紅粉の色【寬永發句】べにやかすむ入日の尼が崎これらも天を尼にとりなしたり按るに舞樂の安摩の面は繪やうは鼻の左右に丸き巴の如き紋あり（これあまがほなるべし阿摩は女母の梵語なり）【守武千句】いつか法師のうかび出ましまうくるも又まうくるもあま小舟（これは男子の出生はなくて女子のみまうくるなりこれ女をあまと云へること古くありしなり）又熊野比丘尼が色を賣ものとなりて紅粉にて粧ひ臉べにつけたるを尼がほといひけるにや是【鷹筑波集】におやにしかられ迷惑やする尼がほにつけたる紅粉をかひぬぐひなどあるをおもふべしこは小兒のされごとしたるを親の叱りたるなり【安宅松】といふ歌舞伎歌に尼かべに付てとゝやかゝにいはうよといへるは此句などを意としたりとみゆ

あま

○又あまは前のあまがつの處にもいへる如く今も女のことをあまといへることありて女の頰紅とみても通ずべし昔の女はほゝべにさしたり此故に少女椿の葩を頰また額にも粘(ヘル)戲れあり當時の粧を擧べるなり

てうらかす　命の御子晝夜泣たまふといふ處の文を引て乘船而率巡八十島宇良加志給猶不止哭之世に、いときなき子をてうらかすといふは此宇良加志とあるに手をくはえていふにや【日本紀】に推の字うつらかすとよめりうらかすといふもこれにおなしきにやといへり今はてうらかすと云こと小兒のみにいふにあらず此詞もと小兒にいへりとなれば宇良加志と云ふ古語も似たることとなるべけれど小兒にはあまやかすなどいふこともあるをおもへば寵らかすにや唯愛することとなるべし

しりもちつく　○しりもちつく【四季物語】七夕の條そのくだものつくゑ物などのうへに蛛の小きありてやすらへばかならずその願かなへりとて折ふし風に吹れて落くるも幸とるべきはうれしくしりもちひをつく【一休咄し】（一）一休きこしめし善哉々々とて尻餅ついて喜び給云々あり嬉しがり喜べるに尻もちつくといふ事今はいはぬこととなりまたその尻餅は今いふとはすこしかはりて小をどりするやうにや今江戸のならはしに小兒生れて一歲に滿ざるに立て歩むことあれば其祝ひに餅を擣て親族に贈るこれを尻もちと云もと意ふことよりかゝる名目もあるにや善哉餅もこの意なりその條あり見合すべし

のゝさま　○のゝさま【堀川百首題狂歌】みどり子ののゝとゆびさし見る月や敎への僊の佛なるらんのゝといふ詞古くは【七十一番職人盡】禰宜の歌我戀をいのると人の聞やせんさゝやき聲にのゝと申さん按るにのゝはのむの轉なるべしのみのむとも活きて祈る詞なり【靈異記】などにも祈をのみとよめり【萬葉】には乞字をもよめり又叩頭の字などを訓るも同意なり佛神に乞願ふ故に其詞を體語にしてやがて佛神をのゝとはいへりと聞ゆさらばいと／＼古言なり

お月さまいくつ十三七ツ　○お月さまいくつ十三七ツといへることをとれるにや【類柑子】乳のみ子に意味を付てや十三夜（渭州）【松の落葉】丹前の部難波津背高こゝのとの子はないくつ十三七ツあらまだわかやぐ云々詰涼が【あやにしき】野に寄よぶ場所を思たし山からによつと十三七ツ運其盛垢離の背頭の鼻へ來ること十三七ツは月

ハイロン　人ツヽ出で走りくらぶ是をハイロンと云ふ負方のゝぼりを奪取といへりまことのはいろんに二ツせり三ツせりと云ことありせらうと云は此せりにてせり合はんと云なりわたいとはこれへ來よと云ふ方言と聞ゆ

かみかたかれ　○小兒のかみかたかれといふことと【守武千句】にあふなきこともしらぬみちなりおさないやかみかたかれとたむけまし【東海道名所記】に四月十六日三井寺にせんだん講といふ事ありそれを俗に千團子といひならはし團子一千をつくりて持て參れば子どもの首(カミ)かたしとかや申つたへし又猿樂の狂言に小兒をかなぼうしといへるも堅固を祝へる名なるべし

○【散木集】連歌部におほ空はなみだ法師となりにけり云々あるは今いふ法師の意小兒のことをいふなるべしかな法師は鐵のやうにて潤なく肉もなく疲發意と云ことなるべし先達の說に倅は子をいふ義なしやせると云字なればやせかれの上略ならんとされぱかな法師も同意なりと柳亭いへりされど入道したる新發意とはいへども唯ほちとのみはいはず然らばほちと云は猶法師の急呼なり

かたこ　○又かたことといふは【醒睡笑】に女房の子を抱きたるをみて此子息はいくつと問へばこれはことし生れかたこでおはりありと答けりこれは一歲にいまだ足らぬをいふにて前の義にはあらず

いたいけ　○いたいけは痛氣(イタイケ)なるべしいと愛む意の深きをいふなり【沙石集】(三)繼母あまりにうれしく思ていたいけしたる翫物取具して文をやりける【守武千句】玉くしげまたかたふたは明やらでこずゑ詠むるなりはいたいけ花ぶさをちぶさなりとや思ふらむ猿樂狂言に七ツになる子がいたいけな云々【尤双紙】ひろき物みな人每のこと草にいふおほぢの頭巾孫のきておやのくつはくいたいけさよ【佐夜中山集】にけふ摘や七ツになる子がいたいけ茶池田正式が【狂歌合の判】に云さわらべのてうちかふり又いたいけにこそ侍れ正三の【因果物語】いたいけなる犬かなとて寺に飼置給ふ【契沖雜々記】に出雲風土記に大穴持

とゝ喰てこれでせいがひくいといひつゝ一同にめぐる中なる者はめぐらせ一匝してかゞみ居る時中に立しものめぐりの者の首を何れより共心まかせに指先にて數ふるに線香抹香花まつから樒の花でおさまつたといふ其言の畢りにあたる者又前の如く中に立ツ人となれば中なるものめぐりの内にへたり）或云此戯輪藏に安ずる傅大士兩童子を學べるなりといへり

ほうすほうす

○又【一休はなし】（寛文三年刻）或人日蓮畫像の讃を望む處にこの畫はさても小くおきてうす黄なる衣をきせけるよと笑ひ法然の讃を所々なをしてたされつゝ奥にほうず〳〵小ぼうず豆の粉にぬりほうずとぞあそばしけるとかやと有これも小兒の戯ことを書るなり【阿宅松】といふ芝居うた童戯を種々いへる内にぼうず〳〵大坊主とある是なり（この文句今は葉ごしの〳〵月のかげと唄ひかへたるはとりあはぬことなり）今もぼうず〳〵山芋などはやすなり

千艘萬艘

○小兒船をゆすり千艘や萬艘やと云ひ舟にゆらるゝ學をなす正月十四日朝まだきに本所龜戸の里の童共小き船のひな形作りたるに幣を立て舁あまた打むれて市中を廻るに千艘萬艘お舟が參ると云家々にて錢を與ふれば幣一ツ代りとすこれ道祖神の祭りなり道祖の祭處々田舍にありて各異なれども船を用るはなしこれ古へ道公法師が柴をもて小舟を作り道祖を送りし古事など思ひ出らる必これによれるにもあらじ河邊の兒童は自ら舟などを玩ぶなるべし【南島雜話】三宅島の條正月十四日渡船は其乘組水主の子供漁舟は組合の子供とおれを分其舟々のひな形を造り頭を立て村中家別に持步行これを嘉例とすとありこれ似たることなり又是とは異なれど【長崎歲時記】に四月下旬より市中の男兒端午競渡舟の學して町々を廻る二間程の竹を船に表し兒童面に丹をぬり髮にたゝみ紙をはさみ又はゐ笠を著右の竹の左右に取付てセロや〳〵ワイ〳〵と同音によびあかね木綿のゝぼり或は五色の紙のぼり細ばたに何町子供中と書たるを押立太こともをならし廻る他町の子供に行逢ばたにのぼりを出し合せ年齡ひとしき同士双方より一

一の膳いや〱

まはりまはりの小佛

可持戒齋行道慈覺大師廻り給ふ時正月一日二月八日十二月七日とありまた【舞の双紙】景淸に折ふし頼朝は六はら御所にてえんぎやうだうしてまし〱けるなどみゆもと是より出たる童戲かまたおのづからこれに似たるものかそは知べからねどもだうだうめぐりといふ名は行道めぐりにぞ有べき【正章獨吟千句】小人どもの袖のあつまり手車の果ての後のとゞめぐり廣々とした辻堂の內【雜兵もの語】【居龍工隨筆】に一の膳いや〱二のぜんいや〱といふより段々かぞへて十の膳までいひ立る童部のごとくさのたはひなきよりいふにて膳府は本膳二ノ膳三ノ膳までなると思ひしに【甲陽軍鑑】の料理のことを書たる圖に誠に十の膳ありしなりといへり此こと今一種には粟の餠もいや〱米の餠もいや〱そば切素麪食たいなと云つゝとゞめぐりするなり

○【雜兵物語】（作者をしらず或云朝倉景衡）挾箱持の條によその挾箱持めが人込にだいたうめぐりをして挾箱をぶち破た云々有これはとゞめぐりをよこなまりしか

○【南海寄歸傳】五天之地、道俗多作徑行、直去直來唯遵一路、隨時適性、勿居閙處一則痊病、二能銷食、禺中日昳卽行時也、或出寺長引、或於廊下徐行云々、故鷲山覺樹之下、鹿苑王城之內、及餘聖跡、皆有世尊徑行之基耳云々、若其右繞佛殿、旋遊制底、別爲生福本、欲虔恭徑行、乃是銷散之儀、意在養身療病、舊云行道、或云徑行、則二事總包、無分涇渭（制底は窣睹波なり）

○又一種まはり〱の小佛といふことあり【土御門安部泰邦卿寶曆十年庚辰正月東行話說】に水口の宿はづれの橋をわたり云々小里今在家ゑもしれぬ處に惡七兵衞景淸武藏坊辨慶が脊比石といふもの有その出來を聞に昔辨慶この處にて晝飯を喰居たるに小兒打より遊びて中の〱小坊達はなぜ脊が卑いぞといふ時辨慶がたけ此石と等しかりしとなり云々あり此また今いふ言と異なり（たとへば三人已上にて一人は立てゐその外は手を引あひ立たるものをかこみて旋りまはり〱の小佛はなぜせいがひくい親の日に

加へて十となるをいふ

どう／＼めぐり（まはりの小佛、一の膳、いや／＼、ほうず／＼）首かたかれ（かたこ）　いたいけし

りもちの丶　十三七ツ　尼かべに　木登り　土なぶり　小家を作る　雛廻し

どう／＼めぐり

童のどう／＼めぐりは行道めぐりなり行道は佛家にする事なり古はたゞめぐりとのみいひしとみゆ【榮華】（もとの雫）十二三までの小法師にねぶつのさまうつし云々頭は鼻をぬりかほはべにしろきものをつけたらんやうなり云々小き地藏井はかくやおはすらんと見え又あまがつなどのものいひうごくとも見ゆ又ちごどものめぐりするとも見えたりとあり【源氏】（榊）又【山家集】にまんたらしの行道どころへのぼるはよの大事にて手をたてたるやうなり大師の御經かきてうつませおはしましけると申傳へたりめぐり行道すべきやうにだん／＼二重につきまはされたり登るほどのあやうさことに大事なりかまへてはひまはりつきてめぐりあはむことの契ぞたのもしきゝびしき山のちかひみるにも【源氏】（榊）にしはす十よ日ばかり中宮（藤つぼ）の御八講なり云々又の日は院の御れう五卷の日なれば云々みこたちもさま／＼のほうもちさゝげてめぐり給ふ【細流】に五卷の日は第三日なり薪の行道ある日なり又【明石卷】にあかしの入道源氏にわかれたる處に月夜にて行道する物はやり水にたふれ入にけり【細流】に物字に心なし行すればなり又【鈴虫卷】講師まうのぼりきやうだうの人々參りつどひ給（抄に提婆品を講ずるなり採薪及菜汲水隨時恭敬と提婆品にあり八講は五日十座なり五卷の日といふは中日にて薪の行道あり行基井の法花經を我えしことは薪こり菜つみ水くみつかへてそえしといふ歌を聲明にして行道あるなり手桶に花を入六位殿人などになひて主上の御行道のさきへ行なり僧衆右の歌をはかせにて唱ふるを讚嘆の聲といふ【御法卷】薪こるさんたんの聲云々【藥師琉璃光如來本願功德經】晝夜六時禮拜行道供養彼世尊琉璃光如來また【阿彌陀經】に飯食經行とある經行も行道なり【拾芥抄】齋月條正五九月云々或此月々上十五日

作れるをおもひよせて貝の名に負せたるにこそこのきさごの大なるを今は手玉にもとれども古へは小石を用ひしなり此介をいしなごとも云ふはこの戯事よりうつれるなり

したゞみ

○又童戯に舌尖(シタノサキ)にきさごを吸付ること有り【暑籠工隨筆】にシタヾミはキサゴのことなり此貝を舌のさきに吸つくれば舌のだみて物いはれぬ故に名けたりといへる説わろし神武天皇御歌に大石に八重匍纏へる小螺子と讀せ給へりしは石なり夕ヽミは重なるをいふ今又一種石だゝみと云ふ介あり是は紋理の石たゝみに似たるなり【八子枕】は正徳元年の梓行なりマヽこと石なごなどにむすめらしくと云へることあり此ごろまでも手玉とるとはいはざりしにや手玉とるにてつといふこと相撲の條にあり

はじき

○はじきといふは小きゝさごを玩ぶもといしはじきは軍器の名なり【和名抄】に擔（音繪和名以之波之岐か建大木置石其上、發機以投敵也とあり（抛石をもはじきと訓り前のつぶての條に出）小兒のはじきも石もてしたるにや【正章獨吟千句】「あてなるがせよと仰ある放會(イシハジキ)（擔字誤て二字になれり）といへり西鶴が【二代男】に藻屑の下のさゝれ貝の浦めづらかに手づから玉拾ふ業してまゝことのむかしを今にはじきといふなどして遊びぬ（こは貞享元年の板なり）貝をも其處により有に任せて用ひしなるべし今江戸にてはきさごはじきといふも昔よりの名にてあるべし海近き處は貝類多くあればなり

○【怡顏齋介品】にきさご肥前にて猫貝と云【長崎歳時記】に猫貝を小兒玩ぶことを云て其法のせはじきと云は貝を握り手の甲にうけ又手心にうけ握り取疊の上にちりたる餘り貝は一々はじき取て勝負を決す十五握と云は各々貝十二十を出し合せ順々目を塞ぎ面をそむけて數十五をつかみ取るを勝とすとんのみと云は各々目印ある貝一ツ、出し合せそれを掌にてふり出し餘り貝は俯せ一貝仰ぐものを勝とす

きさごはしきのツマとヤツ

○きさごはじきにツマと云はツマヅクの略ヤツといふはやつあたりなりきさごをかぞふるにちうし〳〵たこのくはへが十てうと云ふちうじは重二なりそれを重ぬれば八ツとなる章魚の足の數なり是に又二ツ

の石台といふ事せさせ給ひけるにちいさき草子のいしなとりの石の大さなるをつくりて十の石にひとつつゝかき侍りけるとありて歌十首あり其歌金葉集に一首入「くもりなくとよさかのぼる朝日には君ぞつかへん萬代までも【和訓栞】に法隆寺の寶物にいしなとりの玉あり小兒の語に小石をいしなといふ伊勢に石名原あり奧州に石名坂ありといへりいしなとりは今いふ手玉なるべし【埃嚢鈔】に石作子をいしなごと訓り作は字書に摸也とありて義はかなへるやうなれ共其字而何に出たるか疑ふらく抓字の誤にや【帝京景物略】に正月元旦是月也、女婦閒手五丸、且擲且拾且承、曰抓子兒丸、用象木鍮礫、爲之競以捷とありこれ手玉なるべし【物類稱呼】石投江戸にて手玉といひ東國にて石なんご又なつことも云ふ信州輕井澤邊にてはんねいはなと云ひ出羽にてだま越前にてなゝつご伊勢にてをのせ中國及薩摩にて石なごといふといへり

きさご大小

○【房總志料】上總附錄の内に長柄山邊二郡の海錦砂子を産す女兒輩イシナゴといへるものなり又ナンゴといふ其最小なるを市原望陀の海に産す名をキサゴといふ土人採て稻田の糞とすなどみゆ（大なるをいしなご小きをきさごといふにや）

（きさごは【鶴岡職人歌合】蒔繪師「月かげにみぎはのきさごかきよせてこゝにまき繪のはこ崎の松と有きさごに大小二種あり【大和本草】にチシヤコ小螺なり殼薄し赤白の紋あり云々小兒其からをつらぬきむつめて玩とす殼薄しといへるは非なり堅厚にして小は斑文あり大は灰色にて斑なし小野蘭山云【本草綱目】山草部白芨【集解】に根形似扁螺といへり白芨根ほどきさごに似たるものなければ扁螺きさごなること明らかなり京師にぜゝ介と云ふ小兒是を貫き翫ぶといへり（近江にゼゝ介と云は膳所貝にて蜆をいふ是とは異なり）ゼゝ貝とは錢貝の意なり江戸にてはだんぺいきさごと云たんぺいはもと石つむ舟をいふ【風俗文選】（李由が湖水賦）段平に大石を積平は耕作のたすけなりとあり段平といふ舟の平たく堅厚に

切ぬき凧 が幼かりし頃までは大なる凧に切ぬき凧とて種々に作り其間を切ぬき透したる細工凧またからくり凧と**がらくり凧** て傀儡師など作りたるは箱の人形かはり舟辨慶のさまあらはる又何の凧にてもよくあげまた小く凧のやうにこしらへたるものありてのぼせたる凧の糸にとをし糸をしやくり上れば凧の糸めの處まで上り行な**猿をやる** り是を猿をやるといふたとへば頼光など作りたる凧に土蜘をさるとし上に行盡たる時急に糸を引て凧をとんと響かすれば頼光の太刀拔て蛛を切るが如く蛛より血の如く赤き紙垂れ又細に截たる赤紙飛出るなどする類なり竹また鯨を用ひて機撥を作れり

鞦韆 ○鞦韆〔和名抄〕鞦韆和名由佐波利もと北狄輕趫の態を習ふ伎なるを後中國に傳り專ら女子これを戯とするよし〔事物紀原〕等にいへり和名ゆさはりはゆれる義にてゆすふるといふ是なり但こゝには田舍などにはする事もありそれも女子の戯にはあらず漢土には是を風流の事とす〔中山傳信錄〕に女子於歲初、皆擊毬爲戯、又有板舞戯、横巨板於木樁、上兩頭下空三尺許、二女對立板上、一起一落、就勢躍起五六尺許、不傾**臼杵** 跌欹側也といへり江戸などには小兒ことさらのあそびにはあらねどもかやうのことすることあり是を臼杵と云ふなり〔房總志料〕に夷隅郡萬木城の麓に妙見の社あり秋社に鞦韆の戯あり太平記の頃の古俗を傳**ツクマイ** へしとみゆ其名をツクマヒと云名義未詳といへりツクマイは突舞なるべし江戸などにも兒童二人にて一木を踏あふりて臼杵といひて遊ぶ事あり〔六玉川〕(一篇)ゆさはりに小倚をのせてあやまらせなどいへり

いしなどり ○いしなどり〔榮花物語〕(月宴)へんをつかせいしなどりをさせ〔拾遺集〕(十八賀)春宮の石などりの石めしければ三十一をつゝみて一ッに一ともしを書てまいらせけるよみ人しらず「若むさばひろひもそへんさゞれ石の數をみなとるよはひ幾よぞ〔赤染右衛門家集〕に女院の姫きみときこえさせし頃いしなとりの石をめすを参らすとて「すへらぎのしりへの庭のいしそこはひろふこゝろありあゆかせてとれ〔山家集〕石なごの玉の落くる程なきに過る月日はかはりやはする〔散木奇歌集〕いせの齋宮に侍るころいしなどり

つるはかし　硝子よま

り又つるはかしと云事あり硝子を細末にして糊に和し是を苧よまに引つけ日に乾し風巾にかけて放つ硝子よまと云ふ手元は常の苧よまなり互にこれを以て町をへだて谷をさかひて相かくる術の工拙ありよまとよまとすれあひ遂にきれ行を負とす又十日金比羅祭禮參詣群集す麓の曠野に毛せんをしきべんとう携へ大人小兒凧をかけて勝負を爭ふ此日市中のはた屋共野中に假店をしつらひ硝子よまはたを商ふ人々これが爲に數百錢を費すといへり其凧の圖を見るにばらもんと稱するものはもと蠻製と見ゆまたさも思はれぬかはほりはたなども同じものと見えて出島内の黑坊ども是を造りて海をへだて市中の者とつるはかすことありといへりはかしと云は絲ひ合ことなり其唐製のさまたる凧も見えたり崎陽の俗多く家業に怠り浮靡の業のみ專らとす因て此業より爭論をなし互に疵を蒙り又は田畑を蹈あらしまゝ公に訴出る事などあり他邦になき處古來よりの土風となむ無益いはんかたなしといへり

○【廣東新語】（九）南海之佛山、歲九月十日爲放鷂會、先期主者懸式于鷂場、鷂皆以白楚紙爲之、凡兩貫一竿一弓、貫竇一尺以平爲上、竿長三斤弓二尺、鞁以竹根片或銅片、以薄爲上、主者察之嵌以印、放日主者立一竿於地、長二丈、人十人爲耦、離竿二丈、約之曰、毋過竿、毋不及竿、出大竿復出小竿、如是者賞約、已依次而度鷂、出於竿末、則以線之直上者爲上、線已直上、則竿中更吐一竿、高至三丈、又以線之直出於三丈之末者爲上、線已直出於三丈之末、又以鷂之聲清和中節而其態迴翔合度者爲上、こは小兒の翫ぶにあらず弓はうなりなりその鞁竹また銅にて作れるはこゝにてもまゝこれを用ふれ共大かたは鯨鬚を用ゆ昔のはいかゞありけんおもふにもと漢土の製に倣へるものにや【續柑子】に元ゆひこく青をいふに唐人凧巾の雲に吼て春色をもよほす響もありとあればうなり付たるを唐人だこと云ふにこそ

○【隨齋手卷】に江戸寛延の頃凧を上るにさまざまの物すきをして尤大凧をあげたり八ツ花形丸蝶の形蜈蚣などの形の凧をよくこしらへて家々にあげたり畢竟は大人の慰にて子供の所作にてになしといへり子

をつくしたるおもひ付三井富山をさはがしきれ〳〵をあつめ石たゝみは上町の屋敷かたひぢりめんの達摩は中島の苦なし仲間もみの盃は天滿の蛇組白綸子のたか袖は新地の色茶屋鬼のかいなは渡邊筋烏いかは阿波座ぼり封じ文は新町の情盛りか紙鳶百羽雀は竹田さゝいがらは嵐三郎四郎おやまいかは上村吉彌大黑はいづくの寺のいかなるべき龜やが方にも客かたよりあづかり置し孔雀いか御馳走にと上手をえらみ町代の半兵衞にのぼせさせけると見えたり虛文ながら此物の流行したること是より先西鶴が【二代男】にも難波風の暮々烏賊幟のはやりてさま〳〵の作りもの雲にかけ橋のたよりといへるにても知べし俳諧には【鷹筑波集】寛永十五年貞德撰)かみなりのなるに天氣のあがる空とあるにいかのぼりこそ風にふかるれ(良次)今のうなりといふもの付たるにや漢士に風箏といふものうなりなり【續山井】いかのぼり木にかゝりければ「魚や木にのぼりのいかの糸ざくら(道宏)【江戸三吟】「物の名のたこや古郷のいかのぼり(信德)【篗絨輪】水を汲袖凧ぬれん御茶の水殿のかたくま守りの一角(利角)今小兒めんくふといふは水汲ことながら語は舞狂(マヒクルフ)の轉訛なるべし

○【咏物詩選】風箏唐司空曙が詩に松泉鹿門夜笙鶴洛濱朝また唐高駢が詩夜靜絃聲響碧空、宮商信任往來風、後世これを紙鳶とするは非なりといへり【楊升庵集】(五十七)古人殿閣簷稜間有風琴風箏、皆因風動成音、自諧宮商、又云王半山有風琴詩云、風鐵相敲同可鳴、此乃簷下鐵馬也 、今名紙鳶、曰風箏非也といへりこれ風鈴の類なり唐人の咏ずる物是なるべし響碧空なといへるを思ふに風幡に鳴器を付たるにやこゝに風みと云ふ今この製は其物の向ふ方を見て風を知るのみ音を聞ことをせず

○【長崎歲時記】二月條此月より四月八日まで市中にて凧を放ち樂む快晴の日は金比羅山などへ行厨を携へ行てこれを放つ風巾の製一ならずばらもん劍舞箏冑ばらもん入道はた奴はた百足ばた蝶ばた障子ばた日本ばたあこばたかはぼりばたとんぼうばた桐に鳳皇海老尻天下太平天一天上大吉等の文字を作るもあ

て凹に下はほそく尖りたり

木ばちまはし　○木ばちまはし相州津久井縣にては正月兒童女木ばちの中にて小錢をまはしてまひ止たる時又次の者錢を出してまはしてこま止たる時先の錢に少しにても重りたるは勝にてその錢を取もし重ならざれば先者に負を取らるゝなり（錢こまは後の手車の條にいふ）

いかのぼり　○いかのぼり【和名抄】に辨色立成云、紙老鴟（世間云師勞之）以紙爲鴟形、乘風能飛、一云紙鳶とあれば古は昔にて紙老鴟と呼びしにてもとこゝの物にはあらぬにやいかのぼりは畿内にての名なり明暦二年丙申正月六日跡々より御法度被仰付候通町中にて子供たこのぼり堅あげさせ申間敷候尤商賣にも拵申間敷候

たこ　○關東にてたこと云ふ【物類稱呼】云西國にてたつ又ふうりう唐津にてたこと云長崎にてはたと云ふ上野及信州にてたかといふ奥州にててんぐばたといふ何れも雅名にはあらず長崎の西川求林齋が【町人嚢】（四）今日本のいかのぼりは廣く大く作り弓をつけて空に鳴つよくをよしとす云々昔のいかのぼりは烏賊の形に小く作りて麻の糸をつけ長閑なる春の日風ふくことなけれども陽氣につれて二三丈ばかりに揚て小兒にひかしめて悅ばしむ云々げにも古畫にみえたる紙鳶小くて烏賊の形したり

からすだこ　○今も一種すがだことて鳥を作る故からすだこともいふ其外諸鳥の彩色したるもあり背糸にてたこの數多くつなぎて一すぢのすが糸にてあぐるものあり此物江戸などには春の戲とすれ共諸國他時に弄ぶところ多し【志保之理】に三州吉田より遠州見付のあたりまで五月五日家々大なる紙鳶を作りあげ端午の遊とす大さ一丈餘方費銀百四十匁まづ四月の末より試にあげて端午各家廣き處或は河原へ出て美を爭ふ所の男女集り見て酒肴を餔し終日遊ぶことといと賑なり

うなり　○【夏山雜談】に大阪などにては五六月西國邊は七八月兒童のもてあそぶなりといへり【入子枕】といふ冊子に（梅川忠兵衛が情死の條）折から紙鳶世上にはやり（前文に衣きかへる卯月卯花垣根に咲）さま〴〵紙

合】に池田正式冬の內はふせう氣にしも見えつるがうたねとおどりまはる春駒その判に云ふせうこまを春駒に引まはされたり云々是今のばいごまなりばいの介殼に鉛をとかし少し許つぎこみぬれば介の尖りたる所に入りて重くなる故まふに勢ひすぐれてしばらくまふ小兒これをまはして勝負をいどむ先鷹をしき二人ともにばいをそのうへにまはすに當りあひて勢ひ強きはよはきをはじき出す（【本草啓蒙】にこれをばいげたといふといへり）【一代男】（五）よい年をしてばいまはし云々又西鶴が【大鑑】に是も秋の末より螺つくはやらし云々あり（つくといふことツクリの名に似たり古名の遺れるにや）冬の戲と見ゆ【帝京景物略】に楊柳兒活抽陀螺とあると時候異なり

ばいごま

○陀螺と漢土に云も螺をまはしたるにこそ今のばいごまは木にて作れり寬延寶曆の頃まで介殼にてありしと見えてその頃の繪に見ゆまはすは紐ははかたごまの緒のごとしこれにてはこまゝひ終らむとする時打たゝくに不便なるべし今は作り革を細く截て短き竹のさきにつなぎたり越谷より日光山のわたりにて

ぢたんぼう

ぢたむぼうといふ其形尖りたる處いさゝかくびれて木口に穴をほらす紐を竹に付たることは同じぢだんぼうとは地蹈々房なるべし地蹈々は俗にぢだんだふむといへる是なり房は例の人に准へていへること常に多し又漢土に空鐘といふものはたうごまなり【續山井】（寬文七年）たうごまの花のうなるやあぶの聲（利重）その聲ごんと鳴る故江戶の小兒はごん〳〵ごまといふ安齋云蒙日の音は小兒の弄ぶたうごまとて竹にて作り候これと同じ音にて候漢土に惜千々といふ物はこれ今のはかたのこまなるべし

たうごま

○【長崎歲時記】たうごま象こまといへり其ひゞき象のうなるにたとふといへども象の聲しるものすくなし又同書にふせうこまを鞭こまといへりこれも打物の形唐畫にかける馬のむちに似たるにや又同じ類に

はんとうごま
坊主ごま

はんこうこま坊主こまと云へるあり是は博多ごまの如く緒を卷てまはすとぞ其圖をみるにはんとうこまは水かめの形に似たる故の名歟其故は同書方言の中に水甕をはんとうかめとあり又坊主こまは上圓くし

太平記】にくるか〳〵とめぐること九州の曲獨樂とても是ほどにはあらじ云々其頃が【色三味線】に頃日九州より獨樂廻しの少人のぼりて四條河原の小芝居にてさま〳〵の曲こまをまはし數萬の人を取て歷々の大芝居をすからせけるが猶さかりになりて町々にこのこまをもとめて家々に翫びし後は狛五ツ六ツ或は十二十買もとめてあるを押ならし一町に二百ツ、とつもりて狛一ツ十二文ツ、にして此代二貫五百文凡京中三千町狛の錢高七千五百貫銀になをして百五貫目餘なり云々

○按るに江戸に來りしは初太郎を學べるかげきなるべし【元祿十四年日記】十一月九日堺町狛廻し金之助方々へ參候儀無用之由被仰付其節狛廻し候樣と有之見物申候元祿十四年巳十一月十一日町觸頃日はやり候こま堺町木挽町見物所にては格別其外こま廻し候者の分座敷方へ遣し候儀令停止候尤商賣にも一切仕間敷候若於相背者可爲曲事候巳上又町中連印手形之文（上略）こま廻し候者之分遣し置町中にてこま廻し候か又はこま商賣仕候もの御座候はゞ何樣之曲事にも可被仰付候爲後日町中連判之手形差上申候仍如件巳十一月十一日とあり

○宮川町の子供屋の主不器用で隙日の多い若衆におなじ總ならばこまゝはしこそおもしろけれと親方ゆるして黑塗の狛をかふてあてがひける下地螺まはしの手きゝなれば其格をもつて早速上手になりて初太郎も耻るほどなりしかば諸方より招きてはきゝの太夫子より格別はやりて其名高しとあり

○古末といふはもと高麗より渡りしものなるにや都玖利は都宇求里の略と聞ゆツムリはツフリにて見ツ略語なり粒栗の義か今物の矮短なる貌をヅングリと云も同義なるべし

はかた狛　○今のはかた狛といふは九州よりはやり出たればなりこまに種々あり獨樂と陀螺とは音同し陀螺といふ

ぶせっこ　はぶせうこまなり【七双紙】（慶長年中の草子）めぐる物の中たゝけばめぐるぶせうこまと有り又【寄筏波

重　集】おもひまはせばみなおなし事（といふ前句に）打たゝけばいくつ有てもぶせうこま【堀河百首題狂歌

爲球、周身百孔、凡九層、亦有七層五層者、以金簪自孔中撥之、圓轉活動層々相似、又皆刮磨光澤、中藏骰子一枚、金碧粲然、其外潔白無縫、非有湊合粘連之迹、名鬼工球、其一酒抔二十有四、由大及小、如萃堵波、高二寸許、鏇木爲之、質黄色有木理、薄如紙桑軟而輕、噓氣輒可飛動、然可注酒、三者精巧絕倫、雖有離婁公輸、亦不能施其心目、不知當時何以鏤劖而成、守者曰、此自外國航海來貢云、皆鬼工所作とあり精麁は異なれども相州筥根の湯もと細工に似たる物なり至巧たぐひなしといへども貢に無用の長物なるべし

獨樂

獨樂(ふせうこま、はかたこま、はいこま、ちたんほう、たうこま、木ばち廻し)　紙鳶(うなり)

鞦韆いしなとり　きさご大小はじき

【和名抄】に獨樂和名古末都玖利(コマツクリ)有孔者也とみゆ【今昔物語】大江定基出家語の內寂照が前なる鉢俄に狛鶻の如くくる〳〵と轉て前の鉢ともよりも疾く飛行て僧供を請て返りぬ又東山佛眼寺仁照阿闍梨房詫天狗女來語の內に其時に女二間計投げ被伏ぬ二の肱を捧て天縛に懸て轉べること獨樂を廻すが如し暫計有て音を雲井の如して叫ぶ云々【和名抄】古本に都光求里此間云古方豆久利とある十二字を獨樂の下に分注せる【今昔物語】に狛鶻とあるはこまつふりと訓べし【和名抄】に鶻の注に【漢語抄】云都布利とあればなり(鶻は【戰國策】に鶻蚌相持とあるものにして今しぎといふ俗に鴫字を用る是なり其種類いと多し又鶻鵃を今はカイツブリ、ムクツチヤウなど呼り【和名抄】にこれをニホといへり)然らば獨樂をツムクリともコマツクリとも又コマツフリともさま〳〵に稱へしなりそをはぶきてコマといふ【字類抄】又諸の往來等の書に獨樂の名みえたり

○【太平記】(三十八)長講堂の大庭に獨樂を廻て遊びける童云々【寛永發句帳】慶友が句に目にまふや狛のわたりの瓜茄子(茄子などの枯るを舞といへば狛の舞にかけたり)など俳諧にもまた多かるべし【諸藝

土燒の雛

〇奈良の在所帶解といふ處に土燒の雛あり（此所土燒七福神人馬等さま〴〵あり其家在六軒ばかりなりとぞ其國の人に尋ねしに今土人形作る處は南都より八木街道なりといへり）この土雛古きも有べけれど予が見しは男雛太刀を帶女雛天冠をきて共に臺あり高さ六寸五分許ありき古風にはあらず

奈良人形

又奈良人形木ぼりに彩色したるは古きもの有り好事の者提もの〻根付に用ひし故大かた緒をとをす穴あきたり男女の闘雛屋立圖などが繪のさまに似たり菱川師宣出て人形の體その繪を摸せり【雛袖海】（元祿）と云ふ冊子に菱氏か筆の品面顏うつす姿繪のどうもいはれぬいはじたゞ口なし色にそめなせるきむくひむくの衣裝人形といへり

衣裝人形

【以呂芝居】（正德草子）といふ物に菱川かことをいひて人形を作るにも又上手にて去かたより御望に役者共の姿を手づから刻み舞臺衣裝其儘に彩色さしたるといへるは非なるべし上に引る冊子の趣をもて誤りて手づから彫たりとする歟衣裳は絹布にて作れる故に衣裳人形といふ彩色にしたりとは奈良人形のやうなるにや望のもの有て作りし事あり其そは必下繪をかき上彩色したるにて彫刻は他人にさせたるにこそ

押繪

又衣裝人形と云に今の押繪なるあり【人倫訓蒙圖彙】に衣裝人形は諸の織物もて繪を切拔これをつくる云々又同草子に紙ひゝな裝束ひゝなあり紙ひゝなは紙をもて頭を造るとあればたかしの紙雛今よりも質素なりきた押繪ならぬをも衣裝人形といへり【雍州府志】衣裝人形、木偶人作男女老少形施衣裳、其小者謂芥子人形云々あるは木彫人形に絹布を着せたるなり

子なき女の人形を愛すること

〇世に子なき女の人形を愛する者あり子をほしく思ふ餘りなり漢土にもこれあり【板橋雜記】に顧眉生、既屬龔芝麓、百計求嗣、而卒無子、甚至彫異香木爲男、四肢俱動、錦綳繃褓、顧乳母開懷哺之、保母養襟作便溺狀、内外通稱小相、龔亦不之禁也、時龔以奉常、寓湖上、杭人目爲人妖、

さゝやかなるもの

〇さゝやかなるもの【述異記】に【高江雜村記】直大内、見三異物焉、一小金盒大寸有六分、内貯彫刻牙器百種、如几榻卅車盤匜筆硏投壺棊局絃管升斗算子之屬、具體而微、不受手指、用金鑷鉗而觀之、其一[illegible]

飯鮨

○【風俗文選】吾仲が飯鮨銘に云ふ飯鮓はいづれの時よりもてはやしけん此六條の名物にはいへりける今おほやけの奉りものにかぞふれば下さまの人は日を限りてもまつべしまして卯の花さくころは此ものゝけしきも清からんに藤の花のさく時にそれが節をあはせたらんいかなる人のふかき心が侍りけん是にて二季草の名も世の人はいふべし器物は杉の香もてつけたる折にいれて此花をかざしにも又は文など付てやるべしかくこと〳〵しきやうなれどすべて上さまのもてあそびものなり醒齋云ふ斯の如くあれば彼ちぎびつはもと鮨をいるゝ器にて藤の花を畫くはかざしの意なること明らけし生姜を賣も鮨にそへて食ふものなればなるべし【雍州府志】(七)飯鮓六條人家製之、云々熟後盛磁器、灑涼酒加生姜紫而食之、夏日珍味也、云々毎年西本願寺門主、待藤花開而與飯鮓被獻禁中院中、

後の雛

○後の雛は【滑稽雜談】(正德三年撰)今また九月九日に賞する兒女多し俳諧是を名付て後の雛とすといへり前に引る【俳諧五節句】九月九日菊の繪櫃御臺匙おつぼある事三月節句にほしき由のみ有し雛のことはいはずこれは貞享戊辰重九日とあれば元祿元年なり此ごろ雛を賞すること餘りに今めかしく記すべき程にもあらずとみゆさりながら飯匙五器もあるは雛の具にあらで何ぞや漸く多くなりしは其後の事なるべし【續五元集】(中)穴いちに塵打はらひ草枕ひゝなかざりていせの八朔又【入子枕】(正德元年草子)二季のひゝなまつり今も京難波には後の雛あるよしなれば三月の如くなべてもてあつかふにはあらずとなむ播州室などには八朔に雛を立るとぞ是又彼繪行器を用る事の似たるより移れるか

紙雛　裝束雛　江戸雛

○今の紙ひなといふもの寛永頃の繪にみゆこれ小兒平日の手遊なり又古き裝束ひなは今の次郎左衛門雛の體に似て男雛は大刀なく女ひな天冠なし衣服の體はかはれ共貞享元祿ころのも共如くなりおもふに江戸ひなと稱するものは享保巳後の製なるべし【新野問答】鳥頸劍の條に云ふ今世にも小兒の所翫俗に裝束ひなと申候人形の劍皆柄首鳥頸に候云々

に孫思邈云八九月多食薑至春多患眼と云々孕婦食之令兒盈指あり目くされた生姜はこの儀にはよるべからずその辛味つよく目にしむの意なりこれを相贈ることとは其時肥たる飾物なればなり其うへ古諺あり【貞徳百韻】に生姜手が三へきと筆にかすませて其自注に手がはしかみならば生姜三へきと云ふ俗諺と記せり諺の意を押て考るに盈指（生姜手）にておもふやうに物かゝれぬ手のわろきなり三へきは音信なるべし生姜は指の事よりいひ三片は少しばかりをいふ心さしは松の葉といへるごとく生姜三片といひたる事より音信とりかはしもしたるもの歟こゝに用なき事なれ其次に云ふさて絵びつまた絵行器ともいへり延宝八年【洛陽集】に八朔「絵行器や今こそ秋よ藤の森（眠松）絵ほかゐや東からげの後紐（可玖）絵ほかゐや後は灯心入となる花を（白悦）おもふに藤森の例は其邊にて賣たるにや今こそとは川ひらるゝ時をいふ
○【日次記事】に八朔には乳母のもとより養ひ君へ行器に挿し藤花とて白糸餅に赤小豆付てその花の形したるを入て贈るとあり故に藤の森をいへり東からげの後紐とは藤花を畫きたるさまをなぞらへたるなり形状を面白く見たてたり此ことにはよらねども【碧紬輪】に山形おりく端折　と云る句あり灯心入となる花をとは後は外に用るやうなく燈草など入るなるべし藤の花房を畫き又白糸餅を藤の花とて入る事おのづから灯心に似つかはしきをいふなり彼ちぎびつに藤花をかけるは全くこれにて藤を假字もじにあし手がきにしたるもよしあるべし藤の花がきは後京極殿より始れりとど【京羽二重】（林鴻撰）櫃の銘むしろは稚ごゝろ哉（三竹）これ九日節何なり【若菜合】第三歌仙尺蝉「上方の寺と竹には負にけり堆ばかり底に焼る絵行器これらは雑の何なり數葉はかい敷のものなるべし
○新井白石安積氏に答ふる書簡のことと捧心ともえ又鉄手ともいへば此方の俗に手のはしかみ候と申如き手のわろきことゝ存候きハシカミのことは【續博物志】に妊娠者不可喫生薑生兒多指と候へばこれ枝指のことゝ見候論り俗諺にはあなたにても注脚に及ばぬことに候

ちぎびつ　○【以呂芝居】(享保三年刻)といふ草子にひなさまに出します一升櫃の底ほどな小判と云り其頃までは皆横長の櫃のみなり此繪ひつ江戸には九月芝の神明祭禮にちぎびつとて飴を入て賣繪に藤の花をかけるは三月にもあらずおもふに柳と桃との繪の轉じたるやうなれどさにあらず此繪八朔の餅による下にみゆ又此祭禮に生姜をうり氏子の家には醴と酢を作る生姜を此月用ること【昔々物語】に端午は粽九月は生姜を薹に載て取替す是等の祝儀の取かはし近き頃は見えずと享保十七年にかく云り又【同物語】に三月は草餅

あまざけ　をひなの行器に入れ醴を錫に入て親類へ遣す事ありと云りそのかみ今の白酒ありしかど又あまざけも用ひし故に飯倉神明祭にこれを作るも後の雛に用ひしものなればなり(【雍州府志】甘ざけみえず土産門上

白酒　白醴酒今處々にて是を製すもと筑前博多の練酒に倣てかもす酒店の製とあれば今の中汲か又并びて山川酒六條油小路酒店にて釀す山間水多くは白して濁る此酒その色に似て甘美なり因て名く夏日造之とあるは白酒なるべし今も山川酒といへり)【社記】云人皇二十九代宣化天皇御宇諸國郡縣に屯倉を設て洪旱を救給ふその穀倉ありし故に民俗飯倉領と號す是に依て土民此所にして飯を扱ふ器を專ら製す曰杵木鉢餅器等なりチ器は古へ藤葛にてあみ餅を盛によりて餅器の上略なりと云々この說非なりちぎと呼は社に用ひしちぎの餘木と云へる意なり【宣胤卿記】文龜二年正月二十五日内裏御月次和歌御會云々賜入麵天酒等(甘ざけなるべし)【御傘】にひとよ酒夏なり夜分にはあらず夜字に句嫌なり醴字を書故なり六月朔日より七月二十日まで日毎に奉ると【公事根元】に見ゆ

生姜市　○昔の俳諧にひなのかんなべ見えたれば早く白酒を用ひしなるべし生姜市は【貞享江戸鹿子】に九月十六日芝神明祭鮨しやうがうす其外諸色市立なりとあれば久しきことゝ見ゆ俗に目くされ生姜とて此市には目のたゞれなどしたる者の售るを求む【觀隨筆】拾芥抄食禁物部に三月五辛を食はず九月生姜を食はずとありあさつき膾は雛の膳供にさだまり芝神明の生姜祭り食品にあらずして何ぞといへりげに【本草】

といへれば寛保延享のころなどおもふべけれどさにはあらじ寛文七年町觸商賣の雛の道具結構に不仕かろく可致事これ作り置て售ふをいふなり然らば早くよろしき家などにはこれを買ふて用ひし事とみゆ

○又繪樋といふもの有り【俳諧五節句】（貞享戊辰）桃の繪樋（同柳）木地樋に桃柳を繪く樋の內に草の餅に赤飯も入る御嚢匙といふもの添是には繪なしおつぼ五器是なり木地の挽物に繪あり【土佐日記】に二月二十六日ようさつかた都へのぼるついでにみれば山崎の小樋の繪もまかりのおほちのかたもかはらざりけり賣人の心をぞ知らぬといふなる土佐日記の文は貫之ぬし任國にて幼女をうしなひし歎きの意前文に往々ものはかはらねども幼きものはうせたりと思ひ出らるゝ我心は商人は知らじと云なるべしこれ小兒のもてあそぶ物なればなり又九月九日條菊繪樋ひつの形三月節句に同じ繪に菊を畫なり內に栗も赤飯も入て御嚢匙おつぼ有り又自序の中に袴きぬ浦の蜑は桃柳の繪樋をみずとあれば田舍には行わたらずとみゆ其圖をみるに樋の形圓長くいはゆる飯びつ形して蓋は横長のすみきり角なり丸き曲物のかぶせ蓋なるは繪も櫻と菊をかきたるは後の製にて春秋二節を兼たる繪なり浦人は見ずといひしも都にはなくなりて田舍にのこれる處も有にや【諸國奇遊談】に繪樋のことをいひて今も洛北の村里には三月節句には必用ふ予が幼き頃までは都にても用ひし故二月の末には賣ありきしに今は絕て見あたらず今圖する遠國また洛北の今の姿をもしるすとてかぶせ蓋の丸き樋に菊櫻の花のかきたる圖を出せり此冊子寛政の末の撰にて幼き頃といひしは寶暦ころにもやあらむ大かた其頃はうるはしき膳出來てひつはなくなりしなり繪樋大小寸法不定おつぼ大小あり

○【滑稽太平記】ひなや立圃が傳に寛永十六年より祇園會兩度の山鉾鎮ものまでをひな人形に作り金銀を鏤め綾錦を飾り大造の體を首尾し明る十七年に武江に持參しけるに心當ちがひてすべきやうなく引散しつゝ捨けり又宗門の大乘寺へも納め殘る處明る十八年正月二十九日の火災に滅す云々

とによるなるべし妹脊山淨るりにひなの道具を水に流すことあるは作り設しことゝのみ思ひしにかく似たることもあり

○寛文八年刻梅盛が撰べる【細少石】に草餅を「けういはふ餅もやいはゞひゝな艸（重徇）餅となりし艸に花みる繪びつ哉（雛雲）延寶八年【洛陽集】三月三日ひしきものや袖かき合せ夫婦雛（數寄）黑糸のむすぶ契やめをとひな（女綾戸）桃の蕾る此子ひなかざる間鍋によろし（漏巵）妹御やひなのかんなへひそかにまつ（有知）こしかたや子持見なをす雛の節句（自悅）とあり此頃は專ら節物となれり【同集】（春部）飯だこや雛のあたまに七句ざりひなはもとより小きものにて後世までもしかありし七八寸或は一尺にもこゆるなどはいと近き風俗なり【五元集】雛やそも碁ばんにたてしまろかだけ、折菓子や井筒になりてひなのたけ【溫故集】超波が句に落雁にのまれてみゆる雛かな（その小きをいへり）いま古今ひなは寛政年中江戸にて原舟月と云ふ者製し出て世に行はる

○享保六年壬七月十九日先頃御觸人形裝束之儀上方へ仕入申遣候處不得止之儀有之由申越に付越前守様へ伺候へば右裝束之儀向後御觸之通り八寸より上拵へ不申并金入純子之裝束きせ候義無用可仕候人形問屋共書付持參候事

○又むかしは雛遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひず飯も汁も蛤の貝に盛て備へつけるとぞ不角が【篗絨輪】に雛に世話局もおもき尻あげて欠伸て棄る蛤の殼（寶角）といふ句あり配膳の老女をいふなるべし又【柳樽】（五編）蛤であげるが娘氣にいらずとは（明和七年の刻なり）【都老子】（寶曆二年）に近年は雛配膳の調度など殊の外美をつくす金銀を鏤めなどする事とはなりぬ然れども貧賤の家には蛤の貝殼に飲食を盛て供するも又多しといへり今その殼をば用ひざれども必蛤を備ふることはこれによりてなり但し高貴のあたりは格別のことさらでも都下には木地の五器などはありしなり【都老子】に近年美を盡す

まゝごと

まゝことゝとは小兒の言葉に飯をまゝといふ此戯は飯作り種々食物を料理する學びなればなり女子のみにあらず【甲陽軍鑑】(二一)織田信長公幼少の時尾州治默寺へ手習にあがり手跡をば不習江餠をつり数多の童にて賄を作る云々【堀河百首題狂歌集】若菜如竹が歌「七草にまゝごとをするわらはべの髪さきみるもつめる（髪はたて髪とよむにや）

雛祭

○今の雛祭は上巳の祓を思へるにや【俳諧水鏡】にひゝなあそびこそ慥なる故もあらねば打まかせては雜なるべし【源氏物語】には元日にも野分の朝にもひゝなことありし由侍れば今日に限らぬとしられたり但いさゝかあひしらひあらば此頃の俗に任せて今日のことにもなりぬべしやとて【新續犬筑波集】にも少々まじへて入侍りし（此書享保十五年浪花人紹逛といふものゝ撰なりそれを後に【増山井】と書名をかへ作者の名を削りて季吟の名を入たるは書肆が利を得むとての所爲なり）さて新犬筑波は季吟の撰なり件の文は季吟が説を錄したるなれば此頃の俗とは寛治前後をいふ歟それより前にもさるべきあたりにはもてはやしゝ事ながら民間には專ら行はれしはおほやう其頃よりなるべし【犬子集】は貞徳の撰にて寛永八年より同十年正月にしるし終る【守武千句】は宗鑑が【犬筑波】に次での撰なり花の何よせたる中に政直が句「ひなといへと花の都の細工かなこれ雛に雛をよせたり其頃はいまだ遍くもてあつかふことにはあらずとみゆ明暦二年刻したる【世話焼草】三月の條三日節句云々ひな遊巳日祓とつゝけて出たり寛文元年一雪が【獨吟百韻】ちとなるにさても直段のやす屏風ひゝなあそびはたゞ祝言のみ（見父雛に川ゆ）

雛流し

○相摸愛甲郡荻本の里にて年毎に古びなの損したるを兒女共持出てさがみ河に流し捨ることあり白酒を銚子携へて河邊に至れば他の兒女もこゝに來りかたにひなを流しやることを惜みて彼白酒をもて雛杯を汲かはしてひなを依の小口などに載て流しやり一同に哀み泣くさまをなすこととなり此あたりのひな内裏ひなに異なることなし其外に藤の花をかつける女人形多しおもふにひなを河水に流すはもと祓除のこ

見則廻遊とありよりて竊に疑ふ犬字もし八十の二字を合せたるにやいづれにも道家の事を學べるなり又この犬の面猫とも人とも見ゆるやうなるも古風なるべし狂言止動方角の馬の面などの類なり【人倫訓蒙圖彙】に張拔人形所々に造る張子師犬はりこをはじめ一切のかたちをあらはし香合等をつくる縮師とれにゑがくなり所々に住す又はふこのかしら雛師これを作りひゝなやにうるなり雛屋これをもて品々仕立あきなふなりといへり

ひゝな

○ひゝな又ひなともいふ鳥の雛に准らへて小きものをいふ【枕双紙】みあれのせんじ五寸ばかりなる殿上わらはのいとおかしげなるを作りてみづからゆひそうぞくなどうるはしくて名かきて奉らせたりけるにともあきらのおほきみとかきたりけるをこそいみじうせさせ給ひける(【今昔物がたり】に御形の宣旨は御堂の中姫三條院の御時皇后宮の女房なり)人の形小さく作りまたそれに似合たる家ゐ調度などをも作り戯れ遊ぶ是をひゝなあそびといへり贈物のひゝなとは事ことなり【源氏】【榮花】等をはじめ諸の物語また歌人の家集などにもおほく見えたりもとより小兒の戯れなればいつといふ定りたる時もなし今兒女子のするまゝことと姉さまことゝいふ事とおなじ【源氏物語】(紅葉賀正月の處)紫のうへに少納言がいふ詞ことしだにすこしおとなひさせ給へとをにあまりぬる人ひゝなあそびはいみはへるものを云々またひゝなの中の源氏の君つくろひ立て内にまいらせなどし給ふ人形に名を付て人の所作を學ぶ童あそび今も同じ

ひゝなの家ゐ

○ひゝなの家ゐは【源氏物語】(螢)ひゝなの殿のみやつかへいとよくし給ひて云々又(野分)ひゝなの殿はいかゞおはすらん【紫式部日記】(下)このころほんごもみなやりうしなひひゝなの屋つくりにこの春し侍りにし云々反古にてひなの家造りたるなり又ひなをも反古にて作れるとみゆ【源氏】(夕霧)けにけさうなき御文なりけりと心にもいれねば君達のあはてあそびひゝなつくりすべて遊び給ふとあり童戯は古今かはる事なし

といへることはほうこの略なりされどもとはは〻こなり）

犬張子

○犬張子は【産所記】に御ときの犬箱と有り【婦人養草】に犬張子は犬の形したる筥なり産屋に用る器なり産衣をまつ此筥にきせ初て其後子にきする筥の內へは守り札またはうふやにて用る白粉疊紙または眉掃などを入るなり此はりこは奈良の法華寺といふ尼寺より天下へ出すなりといへり（延寶三年の【南都名所集】に此寺のつくり犬は小く愛らしきものなりとあり犬張子は多く賣れぬ物故其頃も專らはにゝて作れる犬を賣しことゝみゆ

○【俳諧埋木】（明曆二年）御づしにはひなやはりこの並びゐてとありもとよりひなと共に置るなり又同年梓行の【世話盡】大犬も小犬も同じ君のものそもじのかずのはりぬきの箱此物の始を考ふるに隼人宮墻を守ることにもよるべけれどさまでもあらず宮殿に獅子の形を作りて置事は唐にありそれをこゝにも學ばれて獅子狛犬とて禁中に飾らるゝは威儀のためのみにあらずもと邪を避る義をとり又几帳などの鎭にもされたるなり（此事【學山覆簣】中に委しくいへればこゝには略し）犬はりこもこれらの事によりたるものなり【年山紀聞】に爲房公の【大府記】を引て云ふ康和五年八月二十七日東宮遷御高松第戌四刻御出宗通卿御額に奉書犬字また爲房公の子息【顯隆卿日記】には戌刻行啓依可奉書阿也都古犬事以予爲御使被申院爲章按るに犬字をかく事を阿也都古をかくともいひけんかし【菟玖波集】に犬こそ人のまもりなりけれみどり子の額にかける文字をみよ（良阿法師）貞德【油糟】に額のしはすよりあふをみよ百とせをくらせと祝ふいんの子に祇園の印の子といふも犬の子なり小兒の寢ておひゆるを犬の子ととなへて咒ふも邪を避るなり又小兒に賤名付ることと有り長育し易きによる犬の兒はこの義をも兼たり（小兒賤名の事歐陽永叔が或問に答へたること【撫掌錄】に出たり）

犬の子

額に犬字書くこと

○額に犬字書くこと漢土にも似たることとあり【博聞類纂】（十一）小兒額上寫八十字此乃旃檀王押字鬼祟

人かたなりあから子とは赤裸の體をいふにや
○【雍州府志】に天兒一尺余竹筒上以白絹造偶人首、建之於尺余竹筒、頭又別以尺許竹筒横首下、是爲肩以置小兒之枕頭云々これ城殿の製造なり【和訓栞】城殿にて造るは老女の面を造る肩と胴とに竹筒をこめて内に護身符を入るなり禁裡の御膳にあまがつをすうる事【日中行事】に見えたりといへり(【雍州府志】城殿其家之稱號駒井氏也、相傳元三韓之投化人、而始住近江東坂本邊駒井、自玆総爲氏云々安齋云今も城殿和泉とて京にあり婦人假粧の具扇の類花美なる物を作る【職人盡歌合】畳紙賣「わすれめやきどのにそむる畳紙云々」

はふこ

○はふこ伽婢子(トギボウコ)ともいふ母子の義にてあまがつと同じ類の物なり【伊勢守産所記】(貞陸)あまかつ一ツはゝこの事なり大さ二ツ三ツの子ほどにあるべし御ときの犬箱あるべしとみゆこれ天兒はゝこを一物とす造りやう少しつゝかはりて又はゝこといふ名も出來けめおなじく偶人なれど殊に小きを比々奈といふ今三月に雛祭といふ事するは上巳祓除の義をとれり【文徳實錄】に嵯峨天皇大后山陵之事、先是民間訛言、今玆三日不可造糕以無母子也、識者聞而惡之、至于三月宮車晏駕、是月亦有大后山陵之事、無其母子遂如訛言(【三代實錄】曰田野有草俗名母子草二月始生莖葉白脆三月三日婦女採之蒸擣爲糕傳爲歲事これは漢名鼠麴といふ草なり今は專ら蓬を用ふれどもこの日草餅作ることといと古(フリ)たりとあり母子のこと此日によしあり伽婢子といふは彼をいやしめたる名なり其もとの母子の義にかなはず伽狗などより移りて後人の呼訛れるにこそ(天兒は尊くはふこはいやしとするも後人の説なり)【寛永發句帳】野にあそぶ人のお伽かはふこ草(家次)また了意か作に【伽婢子狗張子】といふ冊子あり(此作者了意は洛陽本性寺の僧なり【東海道名所記】などの作者の筆と異なり淺井了意松雲とも云るは本性寺の了意如儡子又瓢水子とも云しものとは同名異人なるべし)【諸艶大鑑】よめ入の處に奉公雛と書り(醒齋云おほこ

生姜市）後のひな（紙びな、装束びな、土びな、衣裳人形、押絵）

あまがつ　【源氏物語】（澪標）明石の上の姫君を都へ移し入る所にめのと少将とてあてやかなる人はかり御はかしあまがつやうのものとりてのる【河海抄】に尼兒ははふこのやうなる物なり【仙源抄】に諸事凶事を是におほするなり三歳まで用また【源氏】（若菜上）明石の姫君皇子をうみ祭のちへあまかつ作ること有りちごうつくしみ給ふ御心にてあまかつなど御手づからつくりそゝくりおはするもいとわか〳〵し【榮華物語】（本の雫）小法師のさまをいふ處小さき地藏井はかくやおはすらんとみえ又あまかつなどのものいひうごくともみゆと有さてあまがつに説ども多くあれどひがことのみなり按るにあまかつはあまがたなり天兒と書はその形によりて兒字を用ひしなるべしあまは尼なり故に尼兒とも書り【翻譯名義集】に阿摩此云女母とありてもて梵語なりと【釋日本紀】にいへり【日本紀】には阿尼の字を用ふ（今も鄙語に女をあまといふびくにのみいふにあらず）よりてあまがつは女母形と心得られぬ是に凶事をおほすることはもと神事祓除の義なり【儀式】に御贖儀（六月十二月）神祇官預前受儀具料物鐵偶人二十六枚云々木偶人二十四枚などみゆこれ人かたなり

あからこ　○【公事根源】六月祓の條に是は朔日より八日まであからこ持てまいる朝餉にて主上にまいらす四のかはらけを指して上にはりたる紙に穴をあけて御息を入るなりと有り（清祓の時流す物は土器を覆ひて其内へひなを入上を紙もて張るといへり）十二月贖物是に同じと見ゆ此あからことといふ物是あまかつのよりて起る所なり

人かた流すなり　○又三月上巳の祓に人かた流す事は【源氏物語】（須磨の巻）浦邊に陰陽師をめし舟に人かたをのせて流すことあり加茂保憲女の歌におほぬさにかきなでなかすあまかつはいくその人のふちをみるらん【江家次第】立太子の條に阿末加津また比々奈の名出たりひゝなは雛の義にて小き物をいふ是また小き

京羽子板

數つくや鳴の羽音百羽かき（山田女）又二人より四五人聚りて羽子つくを追ばねと云ふこれには男も雑る享保中の前句付に羽子板に男の髪はうなつかす【胸算用】江戸のことを云處十二月十五日より通り町のはんじやう云々正月のけしき京羽子板玉ふり〳〵細工に金銀をちりばめ云々京羽子板とは内裏はご板なるべし【安齋隨筆】に日光山より出るこきのことといふ葉はこきのこの形なるを後水尾院の戯れ詠によませ給ひしにもつくはねのそれにはあらぬこきのことよませ給ひし今も都にはこきのこといふにこそといへり此木の實比叡山などにもありそこにてはたからまんと呼とぞ江戸にて今はつくはねとのみ稱す漢土にも羽子に似たるものあり【廣東新語】（九）廣州時序正月條に晝則踢毽五仙、觀毽有大小、其踢大毽者市井人、踢小毽者豪貴子云々又同書（十一）土言の中に以鷄鴿貫皮錢、踢之曰踢毽、々亦曰燕また【清朝探事】に毽子とて鷄の毛を結び束ねて錢に貫き蹴あくる遊びあり【又清俗紀聞】正月の條兒女共に見踘とて鷄毛三本又五本錢に挿み絹にて包み是を蹴て戯とすと見ゆ（毽と毽とは音近く同物なり見踢の見も毽の音なるへければ恐らくは語倒（コトハサカシマ）にて踢見とあるべきにや）こゝの羽子何鳥の羽にて作るべけれど昔は雉を用ひしにや重賴が【獨吟百韵】はなれかたのは雉子のめん鳥折を得て胡鬼の子供がつくばかり

つくはね

踢毽

○【咏物詩選】蹴鞠の詩の次に踢毽、明馬如玉、腰支嫋々力微々、滾々紅塵拂羽衣掩月斷邊星獨墜、石榴裾底鳳双飛、とあるはしらきくとことなるべし

○【帝京景物略】云童謠云、楊柳兒活抽陀螺楊柳兒靑放空鐘楊柳兒死踢毽子楊柳發芽兒打板兒この毽子即けんてきなり板兒は小兒以木二寸製如棗核置地而捧之一擊令起隨一擊令還以近爲負曰打板々古所稱擊壤者耶其謠云楊柳兒云々

あまがつ（はふこ）　犬張子（犬の子）　ひゝな（まゝごと、雛の調度、締行器、ちぎびつ、あまさけ、

射鏃をつかへることとありおもふに此者法體なる故をもてかく裝へるなるべしそのかみ甲越の兩將みな法師にて衣服の上にけさ掛たり當時のならひと見ゆ

羽子板（こきのこ）毽

羽子板こきのこ

○羽子板（こきのこ）【下學集】（文安元年）羽子板（正月用之）と出たり【年中定例記】室町殿の頃の年中行事書し物なり）正月十一日の條比丘尼御所の御參云々御所〳〵御みやげはこきいたこきのこ幻貝巳下云々また【壒嚢鈔】（六）爆竹の條に羽子板の名出たり初春に用ひしものを爆竹に燒ことなれば羽子板もそのうちに入ることならむ【誹諧水鏡】にさぎちやうばねとあるは【埃嚢】によりたるにや爆竹の畫を板のうらにかきたるもそのことによれるに似たり【世諺問答】にこきのこつく事は蚊を遊る呪なるよし見ゆ早春より夏日の蟲を呪はむことといかゞ附會の說なるべし拙田舍のはご板處々にて小異ありといへども殿さまかみさまを畫けるは奧州三春にて作れるも同し（信濃はご板は夫婦の體はかりにて子供などはなし）

內裏羽子板

內裏羽子板といふは此繪あるによる【寶藏】（一二）ひさうなき家どうじをぐし見さまよろしからぬ子どもなどあまたつれてはご板の繪のやうにむかひゐたるもみづからはたのしと思ふらめ【一代男】（三）はご板の畫も夫婦子あるをうらやみ云々【諸國咄】（貞享二年板）この女袖より內裏羽子板をとり出して獨はねをつきしにそれは卯突かと申せば男もゝたぬ身をよめとは人の名を立給ふと切戶押あけて走りいる（殿さまかみさまの畫ははご板のみにもあらず【洞房語園】便面肥に寺院より壇主へ贈る扇の事を云て年玉に殿さまかみさま畫きたる黑骨の女扇はやぼ扇とて古めかしと有り）云々このよめつきと云は數をかぞふるをよむといへばよみつきの轉じたる歟又は今も一とご二たごみわたし四めごとかぞへいふ是によりて發づきか【俳諧懷子】（十）かぞふる春の日なみもよしや作ひてはねつく胡鬼の子供のとも（重賴）是つく數をかぞふるなり同集（一）つくはねの數よむこのもかのも哉（龍賢妻）

さまをもて昔の端午のやうもおもはれぬ傘につるといひしも其とをりにて言を設ていひしにはあらぬにや

ちまき馬

○【散木集】の連歌にをさなきちごのちまき馬をもちたるをみて承源法師ちまき馬はくびからきはぞ似たりける（附る人もなしと聞えしかば）きうりの牛は引ちからなしとあり又【著聞集】（草木部）泰覺法印五月五日人の許へ菖蒲をつかはすとて讀侍りけるわりなくぞあやめのふちを心ざすちまき馬をやひきいだすとて此歌粽を誚へるにやあやめのふちは穗の形鞭に似たるをいふ又元祿比の畫に見えたる端午に門に立し人形の體甲冑きたるも廣袖にて手なく又其ころのあやつり土佐の芝居などの人形に似て下はみなはかまのみにて足なし茅巻馬など古は兒童のもてあそびにて常にも造れるなるべし

小兒山伏の學び

○この日小兒山伏の學びせし事【日次紀事】（延寶中の撰）以柳木作大小刀是謂菖蒲刀、男兒横之於腰、着頭巾倣山伏體【むかし〳〵物語】（享保十八年）六七十年以前までは五月の初ときんすゞかけほら菖蒲刀を賣てありくそれを子供もとめて五月四日に子供しやうぶにて鉢卷しときんをかぶりたすきをかけ菖蒲刀をさしほらを吹ありくといへり【俳諧懷子】（明暦二年撰卷十）すゞかけも頭巾も脱てゆかたびら端午の暮をおしむわらんべ（玖也）これ男兒が山伏の裝ひいかめしきを好めるのみにはあらず賴光大江山入義經辨慶大塔の宮などの似せ山伏の體をよろこび學びしなるべしそは彼胄人形にも多く作るればなり又小兒のみにもあらずたま〳〵武人のこの裝ひせしこともあり【北條五代記】に北條家の武士主家沒落して後大家の招きに逢へるが其君の命によりて馬上のはたらきをなす時兜巾をかぶりけさをかけたりこれ何の爲なることをしらず小兒の戲におなじ【北條五代記】結城秀康卿北條の舊臣等を扶持せらるゝ内朝倉能登守入道犬也に命じてむかし軍陣のはたらきを學びて見せよとある條犬也つきげの駒に黑糸おどしの鎧を着ほし甲の上に頭巾あて白袈裟をかけいぶせき山臥のすがたに出立弓を

冑人形

然檜物師の軒もあやめの節句にて是も削りかけとはなけれ共檜物師といへるにてしるべし
○正保慶安の町ぶれにも前々より小旗之義絹布一圓仕間敷候と仰付らるゝ萬治二年四月十六日毎年如申觸候五月節句の甲結構に仕間敷勿論作りもの作り花糸類金物金銀の箔濃につけ商賣堅仕まじく候いかにも麁相なる人形一つ二つより外付申まじく候寛文七年十一月朔日町觸の内五月のもておそびの甲古へのごとくかぶり候やうに拵へ人形ほり物可爲無用但甲に立物は不苦候すべて結構に不可仕事此頃かざり物をむねとしてかぶられぬ冑を作れるとみゆ今の上り冑といふ物麻を垂たる木の削りかけにかへたるなるべしもとうへに付し人形を後には別に作ることゝなりても猶冑人形とはいふなり　上り甲とはやことなきあたりへ奉るの義なりひなにも此名ありしとみゆ【類柑子】鹿蓋を車大路やあかりひな（適山）ひなは小きものなればなり
○【世說故事苑】（寶永七年板）冑及人形を造り門戸にかけ紙に書きて門に出すといひ【五元集】に五月雨や傘につる小人形とは雨日には傘を其うへにさしかけたるを傘につると作れるにや又菰の葉にて馬を作り戸外に立と【歳時記】にいへり【好色つれ／＼草】七夕のことをいふに百姓は麥わらにて馬人形を作りて高き木のうへにかけならべまつりとす今も信州松本にて七夕には町々繩をもて家と家との軒にかけ路を横ぎり木にて人形をいとおろそかに造り紙衣をきせいづくとなくかの繩を吊おくとなり
○越後鹽澤わたりにても七月朔日より七日の夕まで家々の軒に繩をひきはへ人形はすげにて作り五色の紙衣きせ大小刀鎗長刀などを竹にて削り鍔また鎗の鞘等はかるたなどの厚紙をきりて作りすへて大名行列のさまなどうつし吊おき七日の晩方にとりて川水に流し捨となむおもふに牛は七夕に因あれば盆棚に牛馬手向る事の七夕に移りさて人形などさま／＼吊ることは端午とまがひたりさりながらこの

○【洛陽集】に割ばさみいづれあやめぞ逢ぞと(行正)【中古風俗志】に享保のころまでは所々の廣小路へ童集り菖蒲にて大きなるふとき三ツ打の縄をこしらへ或は長竿等を持出往来の子供へしやがめ〳〵といひて下座をさせもし下座をせざれば打かゝりなどして使につかはしたるは小袖布など重箱をこはされはう〳〵逃かへりし事などありしが今は絶てなしといへりされど予が幼き頃までも童共人家の簷なるあやめを竹のわりばさみにて取あつめ三ツ打に組で持あるき他所の子供を見れば此縄にて地を打草履を脱で下座せよと云ふされども下座する童もなく又絶てさするに及ばず唯かくして遊ぶことなりき今も此戯する處もあるべし

削りかけの冑

○削りかけの冑は【俳諧懐子】(明暦二年)甲をみれば削りかけなり殊更にもる鹿茸や馳走ぶり(重頼)内田順也が【俳諧五節句】(貞享戊辰)大かた檜物師細工なり人形に武者あり舟あり平家物語の體有り麁相なる張貫もありしころに木をつきかんなにて削り短冊の長きやうなるを色々に染いくつともなくぶらさげるによりて削りかけの甲といひ實にや又けづりかけにあらぬも有り此頃は宮殿寺社兒法師女さま〳〵の古事どもあり江戸にては張良辨慶なと名ある武者を只一騎作て張良々々辨慶々々と賣り冑とは賣ありかぬ也【日本歳時記】(正徳五年板)菖蒲冑太刀等の事をいふ處に此ことむかしは厚き紙に

菖蒲刀

人形をほり付薄き板を冑の形にこしらへ或は菰の葉にて馬を作り或は木を長刀の如くにけづりなどして戸外に立侍りしが近年は風俗美巧をこのみて木をもつて人馬の形をきざみ又はりこにして彩色をほどこし或は甲冑をきせ劍戟をもたせ戰闘の勢をなさしめ戸外に立侍る是を冑といふ

○【鷹筑波集】(三)安井正親けづりかけの冑のだしは鰹節これ彼厚紙にて作りて冑の上に付たる物をだしといへり江戸にて今神祭のだしといへるもののもうへに付たる人物草木何くれの作り物をいふ名なり此句は右の作り物と鰹節のだしとをかねていへり又【世話盡】(三)明暦二年刻夏の冑をかさはむる

菖蒲縵

めかつらかけはけしきほどに云々辨内侍「黒かみのあやめはなきをひたひなるかぶとは（脱文）と人やみるらん（此時後深草院御年十四にやつきそひ奉る女房にせさせ給ふなり）これを【増鏡】に所々より御かぶとの花くす玉など色々多くまいれり胡簶にて人々これかれひきまさぐりなどするに三條大納言公親の奉れる櫻に露おきたる蓬の中に深といふ文字をむすびたる糸のさまもなよひかにいとえむありて見ゆるを云々あるかぶとの花を後世の冑人形の如く紙にて冑を造り其上にさまざまの花をかたどり作れる物とおもへるは非なるべしかぶとゝは云どもそれ程に頭にかうふるべき物にもあらずたゞかんざしのやうにやあらん女房式正の時は垂髪して頂のうへに髪を掵の如く束ねて是をかぶと名く其かぶとに釵子をさすかくするを髪上げといふとぞこの如くかぶとの花は彼かぶとに挿む花なるべし【辨内侍の日記】なるあやめ冑も同じかるべし此所菖蒲を用る事古き例とみゆ

○【續日本紀】天平十九年五月庚辰太上天皇、詔曰昔者五日之節、常用菖蒲爲縵、比來停此事、從今而後非菖蒲縵者、勿入宮中と有る是なり又端午に諸衛府甲冑を着ること【延喜彈正式】に見えたり後に兒童のもてあそぶあやめ冑はその始【園太暦】文和四年五月五日條に今日加茂社競馬神事如例、彼是云今年天魔流行云々、童等結携菖蒲甲、即學合戰、所々催其興、童部親類已下、成人武士等相交、及傷殺害所々狼藉云々、誠不可說事歟とみえたり是印地の戲なり幟を立木刀をもてあそぶ事もこの遺意なり【諸社根元記】藤森緣起、每年五月五日祭禮、神幸之時、在地之神人等、鎧甲冑帶弓箭列騎馬、自爾以降、洛中洛外至邊土遠國、小男童兒帶作大刀刀等、以菖蒲飾之、稱菖蒲甲、是則當社祭禮供奉行裝也といへれどもさばかりにはあらず【寛永發句帳】にけふさすは印地のしやうぶ刀かな【雖見老百首】さしきさに幹のをそひの名にあてゝ菖蒲刀のははをれにけり【紅梅千句】に待ちきるも幟き宿やりばん具足五月五日もやゝくれにけり

みなくすだまの體なりと云々今女わらわ端午にもてあそぶかざり花なりといへり【雍州府志】藥玉の條下に端午のことを云て以彩絲作花枝貼白紙上掛之於女兒背後是謂藥玉古以丸藥交共間避穢氣長命縷之類也とあり是即かざり花なりおもふにその形は今の兒女子のえりかけとて花など縫たる物のあるそれに似たらん後には其用もなく只もてあそび物とするよりかざり花などゝ呼るなるべし

さつきの玉

○さつきの玉【夫木抄】(七)民部卿爲家花の色をさ月の玉にぬきとめてわかつをとめの姿をぞみる

○清俗も此日よもぎ菖蒲を用ること同じ【松亭行記】(重午の日還覲の處に)都城人家戸懸赤靈符菖蒲艾葉

藥玉

○藥玉は【河海抄】に御記曰延喜十三年五月五日丙午絲所供奉藥玉如常撤去年九日茱萸以藥玉懸柃着御柱前例也【枕双紙】にくすだまは菊のをりまであるべきにやあらんされどそれはみないとを引とりて物ゆひなどしてしばしもなしとみえたり然らば重陽に藥玉を撤し茱萸を懸ること知べし懸ものに茱萸袋

茱萸

二様あり古製なるやしらず茱萸は藥種の呉茱萸にて食用の胡頽子(ナワシログミ)にはあらず【雲州消息】(一名【明衡往來】)云今朝自或所給藥玉一流作以百草之花貫以五色之縷摸草虫形栖其花房云々みゆれば古くより虚飾

十二月かけ物

多かり近世堂上に十二月掛物とて毎月に懸るものあり皆藥玉の如く五色の糸を垂て頭の方に其月々の草木の花また鳥虫などを作りものにして付たり古代なき物どもなり藥玉をもとにして作り出しなるべし(或云これらの玩物大抵後水尾院東福門院の御意巧なりとぞ)【年中故事要言】民間にも五月五日女童の翫物に色々の作り花を糸につけ紙に張などして用るは藥玉を下に習てする事なりといふ

○衣服には袂につけし事前にも見えたり又【爲兼卿家集】菖蒲露「引のこすあやめの草の袂にもさ月の玉のかくるしら露と有り

菖蒲冑

○菖蒲冑は【辨內侍日記】に建長四年五月五日の條女房たちにしやうぶかぶとせさせ花とも(脫文)あや

玉をきる

のならはしなり乳母なきは祖父祖母遣すと有今も京師には小兒生れて初めての正月母の親里より毬打を贈る（女子にも贈るは今は全く所用もなきかざり物故なり）次の年正月は男子にはぶりぶり女子には飾り花をおくるとなん此事古風をまもる者まれまれする事なりといへりされど飾花はもと五月の節物なり下總の千葉などにて玉をきると云て今も弄ぶ玉はけやきなどのかた木を丸さ宜しき程なるを小口より挽きりて用ゆ杖は木も竹も末の邊を少し撞木の形に作るをよしとす凡二十間ばかりも隔て玉を轉しやりて打するなり玉は初め地に打つくれば廻りて走りゆく廿間もゆく間には三四五度も地に付ては飛上り〳〵してゆくものなりこなたに居る者幾人にても並び皆彼杖をかまへて玉の來るを待てもと來し方へ打返す力まかせにすることなれば此時向ひ居る者の面などに中りてあやまち有り又江戸近き逆さ非などにもこれを弄ぶを見たりこれをはんまを廻すと云習へりこは濱弓のはまと名のまがへるなり

飾り花

○【枕の双紙】（五月五日の條）わかき人々はさうぶのさしぐしさしものいみつけなどしてさま〳〵からきぬかさみなかきねおかしき折枝どもむらごのくみしてむすびつけなどしたるめづらしういふべきことならねどいとおかし云々つちありくわらはべのほど〳〵につけてはいみしきわざしたるとつねにたもとをまもり人にみくらべえもいはずけうありと思ひたるをそばへたるこどねりわらはなどにひきとられてなくもおかしむらさきの紙にあふちの花あをきかみにさうぶの葉ほそうまきてひきゆひ又白き紙をねにしてゆひたるもおかしと有わかき女房ちごなど衣服に糸はた紙花にてあふちあやめなどを付るなり按るに【拾芥抄】に【證類本草】を引て是日俗人取楝葉佩之避惡氣とあるによりてあふちを帶るなるべし古くより楝をあふちとすれども誤にてあふちは棟字にあたり楝はちやんちんといふ木なり【同双紙春曙抄】卷二の頭書にくすだま【下圖抄】には藥圭とかけり【河海抄】に續命縷長命縷などいへり

きつちやう

左右の玉を取はなし別にして是を擲つ玉とし八角の木の木瓜形の穴へ竹杖木杖の如き棒を貫き柄として是を玉を打毬杖とす略しては皆己が得物を用(已上)と云へり玉の形なども古今異なれども此說の如く毬打ぶり〳〵はもと一物なり柄をさし緒を付るも用るもの丶好によるべし(正德の頃には古製うつりて今の體となれ丶ばかく云り)或は箒など用る處かける畫ありぶり〳〵と云ことは今ぶら〳〵と云ふ言と同じ射藝に弓勢の强弱を爭ふ爲にぶり〳〵と云的ありうら板を丸くし白革にて縫く丶み中に毛を入てふくらかにす安齋の【夏艸】步射の部にぶり〳〵本式はなきことなり是は圓物より出たることなりぶり〳〵は上にはかり綱を付てつり置故矢あたれば的はね上り上の横串に卷つくなり其卷數多きをよしとすつよく卷つめたるをも數に入るなりといへり又太刀の柄の下緒のおもりの金ものをぶり〳〵と云いづれも此翫具によりての名なるべし室町家のことをかける【年中定例記】と云書に正月の條に今日御毬打二玉二金まいるなりとあり【沙石集】(八)天狗の物語の處空より足ある釜ぶり〳〵として落つ貞德が【油渣】にあぶなくもありめでたくもあり正月はありて町々玉うちて又掠梨一雪が【獨吟百韵】塵吹はらふ風は箒よぶり〳〵も丶たで琥珀の玉打に春に北野へおじやれ松ばら(寛文元年の作なり)箒などにて玉うつをいへり

○【大砲】木やり歌(打もの丶內)ぶり〳〵にかい玉とありかい玉とはかひ遣るかい取などの詞と同くかい打玉といへるなるべし玉振々といへるは常なりまた玉毬打ともいへり元隣が【誰身のうへ】(明曆二年卷二上略)かざりわらべの玉毬打ぶり〳〵ふりし【佐保姬】に云々又ぶり〳〵ぎつちよともいへり【松の葉】京童といふ半太夫節に先正月は云々ぶり〳〵ぎつちよを手にふれて玉をうち出のはま弓やなどありぶり〳〵もとより毬打(ギツチヤウ)なれど紐を付て振る故にぶり〳〵といふのみ今製の毬打は只祝儀の手遊なり順也が【俳諧五節句】に破魔弓玉毬打養君に乳母祝儀に遣す又ははねはご板女の子へ遣す是みやこ

之さるを或人漢土の磔璩といへる投器より出たりといへるはうけかたし形の似たりとてこゝにはいまだ用ひざる物を漢籍より見出て兒童の戯翫に作るべきやうなし【野守鏡】にりうごのことをいふにいまだよくもまはらぬさきになけあくればふり〳〵として落ることとありこはたゞ投る時の形容の詞なり

打毬

○打毬は騎馬にてまり擊わさにて唐の代の戯なるを其頃こゝにも盛に行はれ【萬葉集】（六）四年丁卯春正月云々、右神龜四年正月、數王子及諸臣子等集於春日野、而作打毬之樂、其日忽天陰雨雷電、此時宮中無侍從及侍衛、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路云々といへることあり散禁とは禁足せらるゝなり【續日本後紀】仁明天皇承和元年五月戊午、亦御武德殿、令四衛府馳騁種々馬藝及打毬之態など見えたり又舞樂に打毬樂あり節會の馬藝おこなはるゝ時この樣を奏すとなむ【平家物語】（十二）に後鳥羽院稚き御時打毬の玉を愛させ給ふ故文覺が毬打の冠者とのゝしり申せし事あり是を正月のもてあそびなりしよしは【袖中抄】に【十節錄】といふ物を引て黃帝取蚩尤頭毬之今毬杖是也以彼例謂十年始用件事國中無因事仍日本國學其例年始行毬杖云々と出たりされどこはたしかならぬ俗說なり【源平盛衰記】【義經記】等に毬杖の杖を人の首になぞらへたることのみゆるはこの俗說によりて作りし事とおもはる【事物紀原】【をみるに【宋朝會要】に毬杖非吉兆唐世尚之以資玩樂とあるに明らかなり【嬉遊雜談】に俗に振々と稱して毬を拂ふもの有毬杖と云者にて杖のさきに付るものなり當代は古來の摸樣に變り二三歲の幼兒に小き毬打を紙上又は薄板に帖し鶴龜松竹など作て是を毬打に限るやうに稱し其餘は玉振々と各別に呼ぶ大なる非也いづれも木丁と稱すべしと云々今玉振々と云は卽昔よりの毬杖にて腰物の目貫緣頭の繪樣又は諸具の蒔繪にもあり其形狀玉は大戶に付る戶車の如く寶器の內にも七寶と云物の如く彩る振々は木を八角に削り兩端を細く中ふくらにして細き方上の方左右に木瓜形の穴を穿ち此處に前件に云處の玉を付て惣體金箔にてだみ其上に鶴龜松竹樹蝶等の繪を彩色にするなり用る時は

毬杖ぶり〳〵

玉振々

またぶり

○【和名抄】に杈椏をまたぶりと訓り樹枝をいふなり【花鳥餘情】に木の枝に山たちばなを造り花にして卯槌を枝につらぬきたるなりといへり

卯杖

【江次第】(二) 絲所進卯槌藏人取之、結付晝御帳、懸角柱、副立細木爲柱、槌末出五尺計、可用桃木、又四角可削、近代丸也失歟、とおもふに卯槌と卯杖は長短によりて名のかはれるにやおなじ程の物なり【延喜兵衛府式】云々其御杖棖櫨三束(一株爲束)木瓜三束比々良木二束(中畧)梅木三束椿木六束などみゆ【夫木集】に色かへぬときは峯の玉椿君か八千代の卯杖にそきる【西宮記】卯杖春宮坊立案(蘇芳木)云々作物所供御杖四枚作御生氣方物形置洲濱上云々持統天皇三年正月乙卯大學寮獻八十枚【漢宮儀】云正月卯日以桃枝作剛卯杖厭鬼これもと漢家の剛卯にならひ給へるものなり御生氣の方の物形を作り風流の飾物さへ付るは後のことなり【源氏】の孟津抄に洲はまを作り物にて其上にいはほの中に御生氣の方の獸を作りて卯杖にあはしむたとへは生氣東にあらば兎南にあらは馬なるべし臺盤所に置る【新古今集】後冷泉院おさなくおはしましける時卯杖の松を人の子に給はせけるによみ侍りける(大貳三位)相生のをしほの山の小松原今より千代のかげをまたなん

剛卯

○剛卯はたゞ漢家のまじなひ物なり【天祿識餘】說文、𣪠(カイ)、大剛卯以逐鬼也【廣韻】剛卯又謂之大堅、以邪也【漢書】王莽傳云、劉之爲字卯金刀也、其去剛卯莫以爲佩、注剛卯以正月卯日作、長三寸廣一寸四分式或用玉或用金、當中穿作孔、以綵絲茸其底、如冠纓頭蕤刻其上面作兩行書【北堂書抄】云漢家以五月五日、用朱索連五色剛卯止惡氣また【沈約宋書】(十四禮志)舊時歲旦常設葦茭桃梗磔雞於宮及寺門、以禳惡氣云々、桃卯本漢所以輔卯金、又宜魏所除也云々、宋皆省而諸郡縣此禮往々猶存とありかゝれば此にはさらに用のなき物から熱田の神事に卯杖舞をなすいつの程より有ことにか知らず【鹽尻】に正月十一日熱田の宮前にて宮人卯杖舞を奏し倍從竹川をうたふ尾張氏踏舞の頌を唱へて高巾子の神人鞨鼓を振り侍るさまいと〳〵昔おぼえたる云々いへりその歌曲に杖の舞翁子舞など委しくしるしたれども略

るなりやにちや今はやんちやんと云是なり

だゞ

○今江戸にてだゝといふ地踏々(ヂタヾ)なりこれもと小兒にのみいひしことに非ず【雨夜三杯機嫌】惡左衛會に大盡催亂舞障者朶々(タヾ)言押者邪々(ジヤヽ)袴又【物類稱呼】にしくむといふことを江戸にてはにかむといふまたひどるといふを東國にてしごむ又はかむと云ふ房總にてかなづうと云かなづうとは寄居虫のことなりおのれが家より外へ出ることあたはず内にばかり居にたとへたり遠江にてまにると云ひ關西にてわにる越後にてけすむと云ふ【萬葉】につのゝふくれにしくひあひけんとよめりしくひはしくむといふにおなじと有とみゆ按るにしくむは即しこむにて尻込なりこれを【萬葉】のしくひといふ詞と同じとするは非なり右の内やにるはやにいふにてしこむとは別なり

卯槌（卯杖明卯）　打毬　毬杖（ふりふり）　飾り花　藥玉（十二月かけ物）　菖蒲冑（八浦縵、削りかけの冑、しやうぶ刀、冑人形）　小兒田伏のまねひ

毬杖ぶり〳〵

毬杖ぶり〳〵の遊は打毬より起る但しその杖は曲杖とて毬杖ぶり〳〵に異なりよりておもふに毬杖ぶり〳〵の形は卯槌より出たるものとおもはる

卯槌

卯槌は【枕双紙】に正月ついたち齋院より后宮へお文來る處お文あけさせ給へれば五寸ばかりなる卯槌二ツをうづゑのさまにかしら包みなどして山たちばなひかげなどうつくしげにかざりて云々卯槌のかしら包みたる小き紙に山とよむをのゝひゞきをたづねればいはひのつゑのおとにぞ有ける又【同双紙】正月十日そらいとくらう云々の條桃の木にわらはの登りすはえを切るに女の童のそれを請ふ處うつち木のよからんきりておこせこゝにめすぞなと云て云々【源氏物語】浮舟）正月初に宇治より匂宮の若君のおまへにとてとある處卯づちおかしうつれ〳〵なりける人のしわざと見えたりまたぶりに山たちばな作りてつらぬきそへたる枝にまたふりぬ物にはあれど君がためふかき心にまつとしらなむ

きか打つれ立てぬく茅花とあり是を採學ひの戲狐のことある其よしありチの花出て絮となりぬるを狐といへり【俳諧懷子】(一)迷はされぬく野は狐つばなかな又(十)狐の多き芝原の中たくるまてぬかぬつばなのほいなしや是茅の花のたけて狐となる迄ぬかざりしを惜むなるべしかゝることあるによりて此戲は起りしとしらる又綿に狐のまじりたるといふこともありそれは色の黄なるが雜りたるなりこれも久しくいひきたることゝ見えて古きおとしの咄にあり又【産業袋】(五)わたほうしの條出來合にはうちへ唐綿を包みにして上綿ばかりをきせ作る日に透してみれば包みか眞わたばかり歟よくしれみゆるものなりきつね綿とは右の包のことなるよし【俳諧江戸枝折】狐が付て越後屋の損

手にて豆を作る事

○手にて豆を作ること【きのふはけふの物語】(下)長老さまへよ六太夫どのゝおかた御み舞にさぜん豆をもちておこしある新發知長老さまへ申すやうよ六太夫殿の御内儀のこれを持てお參り候といふて指にてものを作りお目にかくる長老御らんじてさて〳〵にくいやつじや人のみる所にてさやうなることをするもの歟とあれば此こと近時よりするにあらず

爪をくふ

○爪をくふことはいと古し【源氏物語】(竹川)玉かづら侍從の君して薫に和琴をすゝめて彈しむる所にあまえてつめくふべきことにもあらぬをと思て云々注にはづかしくせんことにあらずと薫の心なりとあり童のはにかみ爪くふといふも是なり又小兒のわやくといふは【正章が千句】「我にも七社の神輿ふりたてゝ待賢門の前にわやたく(たくは痛くの略の義くらうがはしきをこちたくといふたくと同じ)

わやく

いたくわやめくなりこのわやたくのわやくとなりしにや又【鷹筑波集】にわらはへのすかすもきかすやにいふてみるもあふなき松の木のぼりといへるは脂のねはりてもてあつかひかたきにたとへていふ

ヤニチヤヤ

か此をヤニチヤともいへり延寶七年【俳諧富士石】いら高數珠西瓜のたねやゝにちや坊ヤニチヤ坊とは小兒のヤニいふなり西瓜のたねの粘るにたとふそのたねを數珠によそへたるは坊を法師の如くいへ

手を引たる者滑りに來る者のかたに向たる者くゞる者の尻をうつくゞる者はうたれじとするなり又各着る物のつまを兩手にもちて洗ふまねびして鬼どの留守に洗濯しよといひつゝ居れば鬼になりたる者糊を賣むといふ時着ものゝつまをかゝけたるにうくる鬼ひら手して力を入そのつま持たるを打拂ふ拂ひ落されたるは鬼にかはりてなるなり鬼の留守の洗濯といふことわざより出たる戲なり

鬼の留守に洗濯

目じろおし

○目しろおし【鷹筑波集】椿原に油おしする目白かな【懐子】(五)おしあひてめならふ籠の目白哉【大倭本草】に繡眼兒常熟縣志曰最小而巧今按るにめしろの目ぶち縫るか如し故に繡眼と名く其羽色青褐色青ばとの色に似たり枝上にて同類と押合といへり脊の色雌雄ともに同じ但腹の毛の褐色なるは雄にて黃色なるは雌なり雄は鳴雌は鳴ず並び居て押合ふものなり是を學びて小童おしあふに中なる者押出さるれば端にゆきて又中なる者を押めじろが押合ふその如くなり（諺に人こといはゞめじろといふは右のことにあらず人のうへいはゞ目代ありとなり淸盛が千人禿などの類壁に耳ありといふも同じ心なるを目代を付置て人ことといふとおもへる說もあれどさにはあるべからず）

つばな拔

○つばなぬこ／＼鬼ごとの一種に鬼になりたるを山のおこんと名付さそひつれて下にかゞみとも／＼つばなぬこ／＼といひつゝつばなぬく學びをしてはてに鬼にむかひ人さし指と大指にて輪を作り其內より覗きみて是なにと問へば答てほうしの玉といふとみな逃走るを鬼追かけて捕ふるなり此戲に即きつねの窓なり（別條に有り併せみべし）白茅和名にチといふ春新苗出る時葉の中に花を包みてありそれを茅針とも茅筍ともいふ即つばなゝり小兒これを採て嫩穗を出して食ふ【綱目】の集解にも俗小兒といへり夏に至れば穗長く出白き絮あり（【信實朝臣百首】いとおしやまたかふろなるうないどもやけ野にあまたつばなぬくなり）この絮ほくちとなす古き俳諧に芝居せはしとあらそへる袖といふ句におさな

手車

上にも引る狂歌に手車あり又【伽羅女】といふ草子に或ものゝ奢りをいふ處すぐれし艶女二十五人此女の役めには二六時中の差別なく御隱居の仰に隨ひ皆々立よりお手車云々又【畸人傳】に享保のはじめ手車といふ物賣翁あり糸もて廻してこれはたがのじやといへばこれはおれがのじやとこたへて童部買て遊ぶとありかゝれば彼手車のはやしごとこれらより出しにや【正章獨吟】千句に少人どもの袖に集り手車の果ての後のどゞめぐり手車の手遊は今もあり戸車の中のくびれたるやうの物を土にて作り中に糸を結つけ卷て下れば廻りて上り下りするものなり

道中駕籠

○又幼き者を背に負て道中駕籠やからかごやいきよりもどりは安いなとはやすことありもどり駕籠は乘る價のやすきは理りなれどさにはあらず安いなを早いなともいへりこれ空かごといふにかなへり

うなぎの瀨登り

○うなぎの瀨登り【東海道名所記】にうなぎは川瀨にのぼるものなれば登魚梁といふ物にてとるなりみやこがたにてはいとけなき子どものあまた集りて帶にとりつきてながくならびたるせなかの上を一人のぼりてはひありくをうなぎの瀨のぼりと名づけてたはふれとす（此戯今も他國にはありもやせん江

芋虫ころ〳〵ひやうたんぼつくりこ

戸には似ることあれどもこの名殘にやしらず古のさまに帶にとり付〳〵してかゞみ居てありく其はやしごとに芋むしころころひやうたんぼつくりこと云つゝしばらくありきて先に立たるものあとの〳〵のせん次郎と呼ふは最後に居たるものはなれ出て前に來て何用でござるといふ呼たる者手前今迄何して居た答棚から落たぼた餅を食て居たそれならば雨がふるか鎗がふるか見てこよといへば見に行まねして雨がふる鎗がふると問まゝにそむかず答ふ其時前がよいか後がよいかといへば前がよいといふそれならば前に居よとてそれを先の第一番に居らしむさて初めの如くはやし歩むなりはやしことは手遊の芋虫より出しなるべし此外にもおなしやうなることあり二人前と後とになりて立並ひ手をひき合その手を高く擧いわしこい〳〵まゝくはしよといふあまたの子供その引合たる手の袖下をくゞり拔る時

て結び兩手に杖をつき馬の足かたどる一人其つなを牽て行なり

馬のり

○馬のり【榮花物語】(木綿四手)おとゞも消入ぬ計にてふし給へるにや一のみやおはしましておとゞおきよ〳〵馬にせむとおこし奉らせ給へばわれにもあらずおきあがり給てたかばひしてむまにのせたてまつり給てありかせ給へば一のみやまいよりうごかぬむまかなとて御あふきしてとく〳〵と打奉らせ給(おとゞは堀川左大臣顯光公なり其御女小一條院の女御にて其御子一の宮中務卿敦貞と申すおとゞは一のみやのおしうとなり此時小一條院御堂殿の女にかよひ給へばなり)おさな遊びの今も昔も貴も賤もかはらぬさまみるが如し又【猿樂狂言】(外五十番)【手車】と云に乘物とも馬とも思し召身ともおもはれて下されいとあるは下に道て負ふにはあらずよの常のごとく背に負ふなりそれをも馬といふ今もしかり

はい馬

今はい馬〳〵といふこと【東海道名所記】にみかどより五畿七道におつかひをくださるゝ時出しける傳馬を驛馬と申す驛馬とだにいへば人おそれてたちのきけり今の世までもはいま〳〵といへば道行人もかたはらへ立のくは此事よりいひ傳へたる言葉とかやといへり【日本紀】に驛を訓り早馬の急語なりイとヤと通す傳をハイテとよめるもこの義なり後世は傳馬とのみいへりとぞ【好古小錄】に驛傳古函の圖を載【俳諧錦繡緞】に宴りにさかなのなきは比興なる(嵐山)迷惑ながら馬になる袖(彫棠)【錦繡緞】に若子の抱守り袴きた馬といふ句もあり

肩くるま

○肩くるまは古くはかたくびといひたり【義經記】に奥州平泉寺見物の條ねんいち見たわとてめいよの兒ありはなおりて出たゝせわか大しゆのかたくびにのりてぞ來りける近くは萬治二年印本【私可多咄】に江戸霞原の事をいふ處あとよりかふろは肩くまにてきたる云々くらべこしふりわけがみの肩ぐまは君ならずしてたれかあぐべき

○又今童の戯に二人して左右の手を組合せ其うへにまた一人を乘しめとりやたがてんぐるまとはやす

らぬ事となりしもの歟

耳引かけしつぺい

○耳引かけしつぺいは箕山が【色道大鏡】に常のかるたならたんに賭を定めすしては不興なり但し定むる共耳引かけ歟竹篦がけをよろしとすべしとあり耳引かけは頬たすきの類なるべし竹篦は指しつぺいもありそれは指の力を類はすわざにて拳蝶のふたなとを打破るなり

かけくら

○江戸にてかけくらといふは【枕双紙】藏人巡僧の事をいふ處昔の藏人はことしの春よりこそなきたちけれ今の世にははしりくらべをなむする【望一后千句】尻をつほるは余所め恥かしおそらくといひしもまくる走くら後世俗に是を走りこくらと云ふ【古今夷曲集】に（行風）帆をかけてひいふうみつの浦風は走りこくらや足はやき舟其角が【花摘集】柴雫が句「野路の月はしりこくらに息きれて」など見ゆ

すみたふれ

○すみたふれ【安布良加須】に拭ふべき紙を手に持泣ばかりすみたふれにや負て腹たつ今戯れことに負たるものに墨をぬるこれにやあらん

紙つけ合

○又額に細き紙を唾にてつけぬれざる處目のあたり迄下りたるを息をもて吹落すことあり元祿頃の繪にかやうの童戯多く集め書たる物あり其内にも此わざ見えず猶近き頃の戯事か（或人云ふ英一蝶が畫にあり）【續山井】（寛文七年湖春撰）短冊は紙つけ合か花のさき（たんばすて）と云句ありこれ鼻の先に紙をつけ合ふ戯によりて作れるなるべし

アリヤリヤンリウ

○次でに云このごろ小兒走り行つゝアリヤリヤンリウとゝいへりヤリヤと云ことをかさねてリヤンと云より拳をうつ詞になしてリウトウはいひ出しやうなれどもさにはあらずリウとは物を振物を打つなどの勢ひを云【物類稱呼】に尾張にては走る時など猶豫なくけはしきことをりう／＼と云とあるこれなり又此ごろ富有なる人をいふにリウとしてと云ことはやれりこれ亦同じ詞ながら意はうつりたり

○江戸近在平井村あたりの小兒の遊びに馬を追ふ學びあり一人馬となるもの繩をもて首より背にかけ

もいひだしゝものと見ゆその實否は論ずるに足らず）【北戸錄】に陳藏器引五行書、除手爪、埋之戸内、恐爲此鳥所得、其鵂鶹、即姑獲鬼車鵋鵂類也、【嶺表錄異】にもこの說あり七草爪をとることはこの故なり【世說故事苑】に七種を提事【事文類聚】に歳時記を引て云正月七日多鬼車鳥度家々捶門打戸滅燈燭禳之和俗七種菜ヲ打ツ唱に唐土鳥日本の鳥渡らぬ先にと云るは此鬼車鳥を忌意なり板を打鳴すは鬼車鳥不止やうに鑲也星の名て天鳥を逐ふ事は【周禮秋官】に見えたり【桐火桶】と云ものに正月七日七草は七星なりなといへるも【周禮】に本つけるなるべし

もゝが

○もゝがは【和名抄】に鼺鼠を毛美と訓す是なり又ムサゝビ又モゝガとも有り是も【本艸啓蒙】にモゝ（土州）モマ（同州薩州）ソバヲシキ（西國）ノブスマ（畿内）バンドリ。ヌレデ（飛州）城州山中には産せず他國深山には多し古歌には春日山高圓山攝州の三國山等に詠せり今も春日山に多し形は猫に似て背黄褐色大尾身より長し腹下黄色喙頷雜白色四脚肉翅尾に連る翅を開けば傘を張るが如し常に木梢に穴居す夜出て能飛然れ共只高きより飛下るのみ高に上ること能はずとあり（筠庭云もゝんぢいといふは物に見えず今尾の生たるものをすべてしかいふ百歳の老父といふことにや又はもゝがのかをとゝかゝのかゝとなずらへそれにむかへてもゝちゝとは一きは勝りておそろしきをいふにや）

目くらべ

目くらべ　耳引かけ　かけくら　すみたふれ　紙つけ合　馬のり（はいま）肩くるま　手車　道中籠　うなきの瀬のぼり（いも虫、鬼の留主のせんたく）目白押　つばな拔（きつね）

【長門本平家物語】（九）清盛夢に髑髏を見る處たとへは人の目くらべをするやうにたかひにまたゝきもせずはたとにらまへてぞ候ける【太平記】（十）箱根竹の下合戰の條かやうに目くらべして鎌倉に集り居てはかなふまじ云々【異制庭訓】に遊戲を築たる處目比頭引膝挾み指引腕推指抓この目比はにらめくら也指引は今見及ばぬやうなれど前條にいへる指ツきりなるべし但しもとは勝負するわざなるを後にあ

より出たるか【諸國里人談】に世に知ところの皿屋敷のことをいひて其古井の跡麹町の内にあり又雲州にも播州にもあり何れ一所眞なる所あらんと云り今も番町さらやしきと云には播州とまがひ易し必誤りあることとしるし本よりさらやしきは家居もなきさら地の屋敷と云しをこれに附會して皿を破りし女の怪談を設しなるべし因に云これとはうらうへの物がたりにて然も實録なるべし加藤左馬介嘉明南京燒の皿十枚秘藏なりしを近く召仕ふもの取落して破りければ恐れてこもり居る由を聞て呼出しあやまちは誰もあるもの也苦しからず破れ殘りたる皿を持來れとて自ら悉く打破此皿殘りたらんには何の年何某が破りしと共者の名もいはんことよからず我毛頭怒りてかくするに非ずとて其後は器物を愛せられずとかや）【後撰夷曲集】節分の豆なやうにと名付子はそれこそ鬼をかなぼうしなれ（ばん州池田氏是誰）手々甲は名のみにして其實を失へり手々甲の如く聞ゆれどもさにあらず是はてんかうをかくいへるなりてんかうは手業なるべしてゝんかうといへり【松の葉】永閑ぶしくわんくわつ一休にけゞらけいあんてがゝんうとあり又物など乞ふを否とてうけがはぬにもぺかかうすることとあり

てんがう

○次に云【篭耳草子】の姑獲鳥のこと【和名抄】に孕婦をウブメと訓す產婦の義なり【今昔物語】に生兒を抱きて人を誑かすものをうぶめといふ其義同し【本草綱目】云姑獲鳥產婦所化陰慝爲妖とあり【本草啓蒙】に一名釣星鬼【外臺秘要】夜遊鳥【潜確類書】中國にてはうぶめといふもの夜中飛行して小兒を害すと云て夜中は小兒を外に出さす此鳥の鳴聲兒の啼が如しといふ然れどもその形狀は詳ならず今小兒の衣服を夜中外に於て乾すことを禁ずといふも此鳥を畏ると京師にても傳へいふといへり（【篭耳】に形梟に似たり七八月の間よなよな出て鳴といへり【玄中記】に是產婦死後化作、故胸前有兩乳、喜取人子、養爲己子、凡有小兒家、不可夜露衣物、此鳥夜飛、以血點之爲誌、兒輒病驚癇及疳疾、謂之無辜疳也、荊州多有之、亦謂之鬼鳥【周禮】庭氏以救日之弓救月之矢、射鬼鳥、卽是也これらの小說を出所にてこゝに

うぶめ

ぺイともいふされどこれも近時よりのことにもあらず【半井卜養落髪千句】くれもせぬ花一枝を所望してのぞいてみればぺいか紅梅是くれもせずぺかゝうしたるなり正三道人の【因果物語】(二)町の旦那ぺか犬をつれて来れりとありぺか狗は其面めかゝうしたらんやうに目の赤き犬なるべし

○【續山井】(寛文七年撰)折る人にぺかかうといへいぬさくら(友静)此句上にいへるぺか犬をいへり又【後撰夷曲集】所望する一えをくれぬのみならずこの目むきつゝあぺか紅梅(正友)

がごし

むくりこくり

○【見聞集】の跋に或時は顔をしかめてがごうしとおとせども問やまず又【篭耳】といふ草子に小兒の啼を止る時むくりこくり鬼が来るといふこと後宇多院弘安四年北條時宗が執權のとき元の世祖せめ來る元は蒙古なれば鬼がくるとは夷賊を云なり蒙古國襲といふことのいひ誤りなり(筠庭云此説わろし蒙古高句麗の二賊をいふなり【吾吟我集】に鬼ぐるみわがそこなひて手の皮をむくりこくりと身は成にけり)顔をしかめてがごじといふは大和國元興寺の鬼の事【本朝文粋】に見えたり又手をくみ顔にあて手々甲といひて小兒をおどす事もあり予が幼き時乳母どもが姑獲鳥が来るといへば身にしみて恐ろしき夜多かりし云々あり行風が【古今夷曲集】の序土佐の手々甲大和の元興寺といへりさてこれらの手々甲は即【大鏡】のめかゝうなること【篭耳草子】に手をくみ顔にあてとあるにてしるし又土佐といふは彼處に元興寺の如き古事あるにもあらず唯邊鄙の國なれば鬼あるやうにいひ傳へしならん(おもふに目に錢をあてゝさる戯れする事もあれば錢元興といひしにやもと手をあてゝすることとなれば手々甲と書たりと見ゆ)今も土佐國の小兒手々甲といふことをするはいたく違へり人をおどすわざにはあらで

せゝがかう

小兒集り互に手をくみ合せ手の甲を互に打ながら向ひ河原でかわらけ燒は五皿六皿七皿八皿八皿めにおくれてづでんどつさりそれこそ鬼よ簑着て笠きて来るものが鬼よとこれをいひつゝ手の甲を打なりその終にあたる者を鬼と定むこれいづくにてもする鬼定めなり(思ふに皿かぞへの化ものゝ謡は是ら

皿屋敷

而上長倍身矣、亦能弄刀劍等

馬貝の戯

○又馬貝の戯は是を戯場にて所作ことにしたりし始は九代め市村羽左衛門明和二年乙酉の顔見せにしたるが始なりさりながらその戯は古くよりありしなるべけれど詳ならず【簑絨輪】繻珍どんすを狆の首玉黒駒でなし貝の駒御召領(鈔同)又【義山後覺】(此書文祿五年の跋あり五の卷)明智光秀が信長を弑せし頃織田源五郎安土へ逃奔れる事を謠に作り童共貝がらに綱付て遊び〱是を謠ひしなりといへり(童謠は一時の事なれ共この遊びは常にしたる事とみゆ)こは馬介の事とたしかには聞えず(今錫杖のごとく介を貫き集めて打鳴すものあれど綱付るとあるにかなはず又今も京師には大なるきさごを緒に貫き弄ぶ故これを錢介と云ふ

○【あら野集】次第〳〵に暖になる(冬文)春の朝赤貝はきてありく兒(舟泉)

鳩車

○鳩車は【潜確類書】云、鳩車高二寸二分、長三寸、輪各二寸二分、狀隝鳩形置兩輪間、輪行百(百は而の誤歟)鳩從之、其禽背負一子、有紐置之前、以貫繩、蓋欒維之所也、按隝鳩之詩、以况母道均一、故象其子以附之、因以爲兒童戯、若杜氏幽求子、所謂兒年五歲、有鳩車之樂、七歲有竹馬之歡者是也、こはふるき手遊とみえて【官遊紀聞】に古器之名、則有鐘鼎云々、鳩車提梁云々之屬などいへりこゝにもふるき書には直幹申文の卷ものに童の鳩車をひくところをかけりまた【博古圖】に漢と六朝との鳩車の圖をのせて因按隝鳩之詩以况母道均一云々前と同文を載たり

べかゝう

○べかかうは【大鏡】の五卷花山院御繪のことを申す處あて御ゑあそばしたりしさまけうあり云々たかんなの皮を男のをよびことにいれてめかかうしてちごをおとせばかほあかめてゆゝしうおちたるかたとありめかかうば目眩うにや今いふべかかうなり其義は指にて目皮の下をひきて赤き處をいだすわざなれば目赤うの訛りともいふべけれど非なり後世は物を請ふを否と云に目の皮を指にて引てべカとも

ちん〳〵もんがら

○又ちん〳〵もんがらは【松の落葉】（三）づんがらもんがら踊といふ小歌あり是なり（【隈取阿宅松】といふ芝居歌にちんがらこと云り【後撰夷曲集】いせ参りあこぎがうらにひく足もたびかさなればちが〳〵ぞする）（廣追）

竹馬

○古の竹馬は葉の付たる生竹を弄べり古書にみえたり又【福富草子】に童子の持たるは二本にして今の製に近く但し木にて作りたる物とみゆ【江吏部集】に七歳初讀書、騎竹磐蒙泉、九歳始言詩、畢花戯賦古歌に竹馬を今は杖ともたのむかなわらはあそびをおもひ出つゝ（此心にや【溫故集】に兼谷が句竹馬や杖になり行けさの春）竹馬は友人醒齋が書るもの有おのれも【雜考】の中に載たるありそれらのことこゝには略きていはず中山三郷が【醍醐隨筆】に端午戯作あり剡木作刀紙作旗、揚々竹馬着柳騎、兒童安習陣勝陣、斯亦安中不妄危、また古き俳諧發句に竹馬に乘か小篠の紳むし【續山井】にはねちらす篠はこ露の竹馬哉（如貞）松江重頼懐子の集を撰萬治三年卒業して若竹の馬つれやみな懐子猶あまたあるべし田樂の鷺足は一本なり又行人の鳥足といふは高足駄なり（古くは鐵にて鳥の足の如く作りし故此名あり）

○【保元物語】爲義の罪名定むる處長徳の比花山法皇紅の袴をつぎのべさせて奉り高あしにめされ築垣に御腰を懸させ給ひよな〳〵御遊事ぞありしをとあり按ずるに此ばけ物のまね遊ばされしと云ことはこの御門御書をよくあそばされてさやうのさまうつさせ給ひしよし【大かゞみ】に見えたるをしか誤りつたへたるなるべし

高足

○高足は【洛陽田樂記】に高足一足などいひ又【吉事略】永長大田樂に一足とありて其下に又高足とあるにても高あしは二本なること知べし前の田樂の條にあれば合せみるべし

○【列子】に以双枝長倍其身屬其脛、並趨並馳弄七劍、迭而躍之、五劍常在空中云々【口義】云、双枝屬於脛、今人所爲接脚之戲是也【因樹屋書影】云双枝屬足、即今踏高蹺之戲也、高蹺之戲、習于齊服、寸々

部のとてう〳〵ひろくめといふたはふれをしたるがごとしとあれば鬼は多きことゝしらる今するとは異なりさて鬼わたしといふ事もこれより變じたるにや【月令廣義】の打鬼戯また【帝京景物略】の替鬼などもこの類なり前句付【廣津海】目をふさぎけり〳〵かくれんぼ聲はかさなるみほづくし或人の狂歌にやう〳〵につまめる髪の角たてゝまんまくはふが鬼わたしする

○【帝京景物略】云、小兒共以繩繫一兒腰牽焉、相距尋丈、迭于不意中拳之以去曰打鬼、爲擊者兒所執、々者閾然共捉代繫曰替鬼、更繫更擊、更執更代、終日擊不爲代、則佻巧矣これは擊んとする鬼を執ふるなり又云、繩以爲城、二兒怕蒙以摸一兒、執蔵城中、輙蔵一聲、而輙易其地、以誤之爲摸者、得則蒙□、蔵兒曰摸蝦兒これ又捉迷蔵の類なり

小路がくれ

鼠まひ

○【浮世物語】(前に引り)鼠まひ小路がくれ云々あり(新井白石佐久間洞巖に贈る書に人の亡命したるを小路がくれの様のことにて云々いへり面なくてかくるゝ意にや)鼠まひは出んとして出ざるなり元隣が【誰身のうへ】(三)庄や殿の一人の子もちたれ共此子うちねずみにて我うちより外をしらずといへる是なり

耳ひき

又出すは耳ひことは鬼になりたる者のいふ言なり【鷹筑波集】(塚口重和)出ずは耳ひくべき月の兎かな【篗絨輪】(十一集)火傷ならず果報に引耳の唾とあり此らこと異ながら耳ひくこと種々なり

指きり

○又小兒いさかひなどして中なほり互に小指を曲て引かくるを心とけたる驗とすこれを指きりといふもをかし戀路に指を截るをいかに心得てしそめしか指きりは【西武獨吟】月の出てと又はやくそく指きりをするゆびくひが露涙自注に約束にゆびきりを付るなりゆびくひの女は【源氏】(はゝきゞの卷)にあり【後撰夷曲集】ゆび切や地獄の釜へほつたりとおちようと云は二世のけいやく(安勝)この歌行風が旁注に童口遊詞とあり又小兒約束をして違へじといふ印に油證文とて髪の油を指に付て柱などに押ことあり證文の印肉よりおもひよれるにや

ふちやこふちやかつらのはぞうりかくしかたぐま足のつめたいちよこ〳〵走りと云るはつちと云こと分らぬ故さかしらにあふちと改めしなり【物類稱呼】かくれんぼ出雲にてかくれんご相模にてかくれかんしやう鎌倉にてはかくれんぼ仙臺にてかくれかしかと云ふ

いちくたちく
捉迷藏
斧かくし
草履隱し

○此戯も一極めて鬼となる者を定むる事なり其時いふ言ば江戸にては「かくれんぼうにどよふよなみのかさつくれんぼうとわりやそつちへつんのきやれ（又づん〳〵つのめの云々中切て〳〵ちやむちやが鬼よともいへり）出羽庄内にては先幾人にても互に拳を握り出して是を順に數へる如くにいふ「かくれぼちだてやなあなめちくりちんとはじきしまたのおけたのけ又「にぎりたぎりしよたぎりおけたのけとも云へり又江戸にては「いちくたちくといふことをもするなり【蓑絨編】に淵變の餘り猜口迄おいとしぼいちくたちくに毛だらけな腕（千雪）彼ち〳〵や子持もこの一極めといふ事をするにいへり一謠なるべし漢土にはこの戯を捉迷藏といふ【瑯環記】に玄宗楊妃とこの戯をしたるよしみゆ此遊びとは異ながら斧かくし又草履かくしありいづれもおなじしかたにて一人尋る者に中りたるに隱せし物を求め出さしむ尋る者を鬼といふ明和二年【川柳點付句】朝のうちさうりかくしを廊下でし（妓女の態をいへり）甲乙次第を定むるに草履をかたかた脱でこれをあつめ空に向ひて一度に投げ馬か牛かと云其伏仰をいふなりたとへば象棋の金か歩かといひ碁の調か半かとてすることのごとし

鬼ごと
子をとろ子とろ

○鬼ごと【物類稱呼】江戸にて鬼わたし京にてつかまへぼ大坂にてむかへぼ東國及出羽濃又肥の長崎にて鬼ごと〳〵いふ奥の仙臺にて鬼々津輕にておくりご常陸にて鬼のさらといふと有り子をとろ子とろといふ鬼ごとは和州天の川辨財天の祭式にありとなむその原は【三國傳記】に惠心僧都閻羅天子故志王經をみて其心をとり童を集め地藏と獄卒と取わとられじとする學びをし始て比々丘女といふといへり後京極攝政良經公の【作庭記】に凡石を立る事はにぐる石一兩あれば追ふ石は七ツ八ツあるべしたとへば

隠れ遊　かくれんぼ

目かくし　めなしどち

○隠れあそびは【うつぼ】また【榮花物語】などにかくれあそびのわらはげたることをいへるは今のかくれんぼなり今は目かくしとかくれんぼと二種なれどもゝと同戯なりめかくしをめんないちどり共いふ【福富草子】にめなしどち軒のすゞめといへり一休の【水鏡】にめなしどち〳〵聲についてましませとある注にどち〳〵とは尋ることばなりといへるはわろしどちは友どちなどのどちにて同志の意なるべし今めんないちどりと訛れるは雀といふがちどりになりしにはあらずどちといふが倒にちどゝなりさてりもじ添たるもの歟又は前に一つの名にて目なきものゝ足もとをちどりにたとへたるにてもあるべし佐野紹益が【賑草】に今頃はやよひの半なり軒の雀とて外の鳥よりは人近きものに侍れども人をおそるゝ事すこしもゆだんせず此ごろは常の如く早くは迯さらず家の內迄も入て餌をもとむ子をやしなひ侍る故なりとあり是軒の雀の義なり【俳諧發句帳】親重が句雲に月かくれんぼうかかつらのは(此句【犬子集】にも見えたれどもそれには名をしるさず)【古今夷曲集】に題しらず(行安)小姫子のかくれごにさへまじらぬはもはや桂のはもじなるべし【風流徒然草】其譯知れぬこと侍りかくれんぼうにまじらぬ者はちつちや子持やかつらの葉とは子供のいふことなりと有り行安が狂歌も是をとれるなり【吾吟我集】山居せば奥よりおくにかくれんぼう跡をも人のたづねこぬほど【續山井】花見には人にかくれんぼうし哉(一笛)かくれことするか葉かげの兒ざくら(次長)小櫻もせよや風にはかくれんぼ(守昌)【季吟二十會集】寛文十二年の巻あつまりて遊ぶ桂の里子供(宗英)かくれんぼうにまじらぬはなし(季吟)【崑山集】(慶安四年良德撰)つちやこぶしかつらの里にうつ礎(吉景)【後砂金袋】(西武撰)月うつるつちよこぶしよ桂の葉など見えたり(天竺桂と云もの桂に似たるものなりやぶにつけい是なり諸州方言多し其內つゞと呼ぶさつま肥前因幡等にてしか名く思ふにつけと云はこれにやもとつけと云しがつゝになりたるかいづれ此の訛言なるべし)さるを信田小太郎と云上るりにかくれんぼうにまじらぬものはあ

りコテンといふは制の詞にはあらで用捨あるべきことばなりなか／＼に我戀はなど古點なり○處々にとてんと云こともみゆこれ主あることばなど云類なりさていとゞは蛇とあるひはしかとなど云ふ詞に近しテイと【耳底記】日ぐらしの瀧の條、このたきは名所にてはなくて名おり此類多し此やうなをばていと日ぐらしの瀧と云ふやうには詠ぬものなりたとへばなにとやらして日ぐらしのたきのなにと云やうによむものなり

人見しり　○小兒の人みしりするをおもきらひといふ古歌に世の中はいとけなき子のおもぎらひみしがなきにぞねはなかれける又【新撰六帖】わきもこがまだあさがほやつゝむらんかみふりあげておもがくしする

がてん／＼かぶり　○【俳諧懐子】（萬治元年）釋氏任口が跋にあそこゝらの事を拾ひ書集めほゝに入云々あなおさなや數島の直なる道にはあいやをもせず筑波の正しき事にはがてん／＼をもせでかぶり／＼をふらば誰かて

あわゝ　うち／＼の手を打てあはゝと笑はさらんや又【古今夷曲集】（寛文五年序文）おさあいをあひやてうち川水の阿呵和いな船の棹頭々々土佐の手々甲大和の元興寺暦期などやうのことをもてつらねかいちらす

あんよ　○小兒の詞に足をあんよといふはあゆむ事を敎ゆるにあんよは上手といふ是なりこのことを漢字には朶といふとみえたり【鶴肋編】【易正義】釋朶頤云、是動義如手之提物、謂之朶也、今世俗以手引小兒、學行謂之朶、莫知其義、以此觀之、乃用手提、則當爲朶也【類柑子】千里の道八百日行通しるべせんとてあんよ／＼とはやしもていさなはれ行云々

とゝ　○斗々【通步色葉集】に倭國小兒呼魚曰斗々【類說】云南朝呼食爲頭、呼魚爲斗故（南朝は宋齊梁陳など江南に都ありしなり）これ【北戸錄】に前朝短書雜說即有呼食爲頭（注略）以魚爲斗注に梁科律生魚若干斗とあるこれなり【墨莊漫錄】云與中魚市以斗計（一斗爲二斤半）などあるにて知べし魚のことを斗といひしには非ず計ふるの法なり

ねんねん

との有べきべろとは舌の形容をいふなり

○【懐子俳諧集】(二)胡蝶もねんねこ眠る花の影(弘永)【風流つれ〴〵草】おねんねやおころ〳〵と御子さまがたをすかすも上つがた乳母達のむつごとぞかしそれを下つかたにてはねろ〳〵この子よといふなりねんねんぼうしや小ぼうしとすかし給へとあるもの申きむかしよりいひけることにや厩戸の皇子いとけなくまし〳〵し時后達のかく仰せられけるとぞ【太子傳記】にも見えたり又【四天王伶人櫻】(中邑阿契作)といふ淨るりに槇の井が涙と共に添乳うた「ねん〳〵法師小ぼうしや禰宜羅らが候ぞとすかす聖德太子御幼稚の時月増日增が子もり歌傳へて今に云はやすなどあるはまことに狂言綺語にて子もり歌の証にだにたちがたくや又子もり歌に七里が濱の砂の數とうたふは【半井卜養落髮千句】わかき時さへ秋のよすがら身もしむは子もちがはゝのぶしほさよはまのまさごの數ほどもいや【松の葉】裏組錦木に七里おばまの砂のかずほどおもへとゝもと有り

てい〳〵
たい〳〵

○てい〳〵又たい〳〵共いふ【續山井】餅つゝじたい〳〵するやわらべの手(攝州正次)蕨と童ととりなすなり古くは小兒ならでも物を乞ふなどには用ひし詞なり【狂言記】(山だち)にていとおこさぬか(【同續集】の内にもこの詞あり) 又【犬子集】に(貞德)秋の夕の蚊のしんきさよていとこふとおさらぬ文は露涙また【醒睡笑】(七)恩の色を外にいふといふ條、當家の者あやまちて高き處より落さまに念佛をいひけるをいたはる人の云やう題目をば念ぜずしていかなればあさましく念佛をば申つるやと問さればよ先の落さまにはていど死ぬると思ふた是をおもふに今てうどといふ言に似たるやうなれどさにあらず今ちやくと云ふ言は速なるを云ちやく〳〵略してちやつとといひ又てやき〳〵とも云是なり

コテンの詞
制の詞

○【耳底記聞】(光廣卿)云コテンの詞と制の詞との差別如何答(幽齋)制の詞といふはテイと禁制するな

嬉遊笑覧巻之六下

喜多村信節撰

兒戯

兒戯（瓶好　しほの眼れろ〳〵の類　おくめん　隠れ遊　鬼ごと　耳ひき　指きり　ちん〳〵もんがら　竹馬　鳩車　べかかう　がごし　手々甲　てんがう　うふめ　もゝが　ちゝんぢい）

あは〳〵

【佐夜中山集】（付句橋本富長）さぞなともゑと夕なみの紋撫子は風にふかれてかぶり〳〵（郡山下久）河原によする水のあは〳〵また【鷹筑波集】（鶏冠井良次）わらび手はあはゝをするか山の口漢土の俗小兒を唯々といふ【說文】咳、小兒笑聲【孟子】孩提之童、注知孩笑とあり【廣韻】唯、小兒聲とみゆかぶは頭なり【日本紀】に何鷲都々伊また頭槌劒ともありまた【隣女晤言】に嬰兒の頭をふるをかぶ〳〵といふ

かぶ〳〵

こと古き詞なり【神代紀】に頗傾也を加夫志と訓し【天智紀】に垂頷而熟をかふしてあからめりと訓す此

ほうしご

こゝろなり【散木集】稲のかたぶくを見ておぼつかなたが袖のこにひきかさねほうしこのいねかぶしそめけん信節云ほうしごは小兒をいふほうしごの稲とは實いりよくて頭のおもきを小兒にたとへかふすると作りしなるべし

鹽のめ

○【正章獨吟千句】ににらむ目もとにまじる鹽のめ雨の膝に欟子ほんの子すへ双べれろ〳〵は【和訓栞】

れろ〳〵

に遼來の轉語なり【蒙求】の注に江東小兒啼、怖之曰遼來々々、無不止者とみゆ遼は張遼なり此說ひがこ

ぺろ〳〵

とたりれろ〳〵轉じてぺろ〳〵ともいふぺろ〳〵の神は正直がみよなどいふ何の故事何の義といふこと

金屋平兵衛板行して世に廣むと【元祿曾我物語】に見えたり（辰之助が七變化を始といへる說あれども非なるべし）

ふ人なかけりこれは菅がさをかぶらせり人は男の肌ぬぎたる酔狂の體なり

笠人形

○笠人形は西鶴【榮花咄】に菅がさのうへに人形をしかけて顔つきにてつかふ事をいひて其圖もみえたりこれらは何ものかおどけたることを思ひ付たる一時のことにはあれど後また非人ものもらひ此を學びて遂に與次郎の名あり【居龍工隨筆】與次郎人形のことをいひておんどれ〳〵とて此前與次郎といふ非人の足のうへにて舞して來たることありといへり

與次郎人形

碁盤人形

○碁盤人形前に引る其角が集に「碁盤もていざ函谷へ彌三五郎といふ何あるを思へばそのかみ飛彈掾が手づま人形ごばんの上に載てみせし事ありしなり碁を別に作らず碁盤を借用せしは古の意にひとし【源氏】若卷の繪に碁のうへ碁ばんの上に立檜扇をかざせる所あり昔は質朴の事にてありしを今は臺式のやうに成てさるべき姫君御髮そぎには碁盤を參らせらるゝとかやこのごばん人形の思ひよりしも是等にやならひたりけむ）正徳四年八月二十九日【日記】或人の振舞に參りおやま次郎三郎ごばん人形見物致候

○【佐渡島日記】は佐渡島長五郎といへる俳優剃髮して蓮智坊といへりしか筆記なり予五歳の時より親傳八門作事を教へ東武へつれ下り碁盤人形と名づけごばんの上にて我に藝をさせしにあなたこなたよりめされ春より九月までつとめたり其御方の御機嫌に入毎度めされける云々九歳に成たる時最早ごばんのうへに乘かぬる時節より傳八工夫しだして七ばけの曲といふことを案じ出し教へこみし云々是又からくり人形より案じ出しことゝ見ゆ（蓮智法師は寶暦七年丁丑七月十三日沒す【歌舞伎事始】に幼少より此道に心をよせ凡修行三十年來たりといへり年齢いくつと云ことをしらされども剃髮したるは六十ばかりなるべし然らば彼が碁盤人形は貞享元祿の間と知らる）

七變化

○七變化所作をば元祿十二年水木辰之助市村座にて七變化秘曲を盡して七變化狂言といふ一番出來

がみせもの〻事を云たる內硝子細工とあるは是にや）今も淺草に長島屋半兵衛といふ硝子師あり年七十餘なり此老父が祖父を源之丞といふ江戸にて硝子をふき初めたるはこの者なりといへり彼是考へみれは其始正德の頃にやあらんのぞぎからくり西洋の硝子をも用ふべければこれにあづかりたる事にはあらねど高價なる物はかゝるものに用ふまじく思はる貞德が發句かざりや興行に（と端書ありて）氷とくる水はびいどろながし哉とあるは西洋の硝子を粉にして七寶ながしなどせしをいふ歟

獨狂言

○獨狂言は貞德が【油渣】にゆるりと爲ては又かしこまる主從者まねするひとり狂言に【昔々物語】に右近源左衛門は業平餅を買たまふ所を狂言に舞ふとありこれらの獨狂言は一人して狂言するなり【世事談】に神田多町わらや次郎兵衛といふもの上手也寛文延寶の頃なりといへるも上にいふひとり狂言にや又【伽羅女】（一）獨狂言人形屋あり是はひとりつかひの人形なり貞享四年【江戸鹿子】座敷獨狂言日本橋南二丁目松村休閑南八丁堀一丁目道具屋九右衛門塗師屋惣兵衛なとあるは人形の獨つかひなるべし昔は遊人なぐさみに人形を舞す事はやれり【一代男】（五）人形舞ししてあそべと狭み箱より疊やたい取くみ上は幕つらかくし首おとし五尺に足らぬ內に金銀を彫め自由をしかけ六段なからのでくるぼう勘き出ける【諸艶大鑑】あの幕の內には一節ぎりのつれ吹人形まはし猩々呑をするもあり

樽人形

○又樽人形といふは西武が【沙金袋】（明暦三年印本）かげうつせ人形樽のかゞみ餅（康重）【寶倉】に花見の事をいふ處こゝら行かふわび人の人形樽につめ懷辨當におさめて花はいづれの情に見つるかしらねどもとりとりほこりかなる顏つきも實に春は春なれやといへり人形樽といふは今の柄樽の如きものにてそれを風呂敷にて包めば其頃の遺ひ人形のかたちに似たれば酒興にはこれを舞したり古き一枚繪樽人形の圖を見しに小き柄樽に衣裳着せ編笠かぶらせたるをつかふさまなり是飮席卽事の興にせしものと見ゆ右の一枚畫は貞享又は元祿のはじめごろのもの歟又寶曆の繪本【咲分櫻】と云にも同じく樽つか

橡堺町勘三郎芝居の向にてからくり幷子供狂言みせしむ貴賤群集して初日より三日の間あまり人多き故木戸を閉たりと云（江戸に来りしは此時はじめなるべし）江戸にもそのかみ細工人はありとみえて【貞享江戸鹿子】にからくり人形師幷ぜんまい大坂町なんきん清左衛門人形町松屋庄兵衛くわいらい人形師日本橋南四町同丹後守さかい町横町竹田豊前とあり（正徳二年辰八月葺屋町せつきやう座四郎兵衛大坂より山本五郎三郎手づま人形あやつり芝居を呼下し興行すこれ彼彌三五郎が弟子なるべし享保七年壬寅四月廿四日葺屋町にて播磨と申からくり芝居来月朔日より芝居仕候に付名主庄右衛門届来る延享二年五月六日堺町肥前芝居へ大坂より操師出羽呼下し操仕候處桊縮緬水引張候義幷出羽呼下し候處御訴も不申上候段御咎にて先月晦日肥前義町内へ御預被成候處出羽呼下御訴不申上候段は先例もこれあり御用捨成下され桊縮緬水引張候段不届につき座元肥前義鳥目十貫文名主次郎兵衛五貫文過料の事）

覗きからくり

○次でに云覗からくりはいつの頃より始りけむ【職人訓蒙圖彙】などにもみえねばいと近き物なるべし西川祐信が畫ける圖あり今のやうとは少し異なり【本朝文鑑】涼賦に覗からくりの地獄極楽も都は一錢にて善悪を見すれば一錢千金の遊びの中に巾着指はいかに見るらんと云り享保四年板【艶道通鑑】花見の人群集する處をいひて覗からくりをびいどろなしに大津繪を生でみるけしき云々【前句付】黄海に目をふさぎけり〳〵びいどろの内の極楽すぎて飴（からくりをみせて飴を賣なり）また【本朝文鑑】地獄顛の文に此頃人の覺えたがひて覗からくりのあしらひと思ひ云々あれば其頃よりも飴を用ひしことゝ見ゆ

硝子を作る事

硝子をかけて物をみることはもと西洋の法なりこゝにて硝子をふき作ることはいつの頃なるか【產業袋】に硝子はふき物なりとは知れ共其術は思ひもよらざりしにふと長崎人唐人に傳受し秘して是を製作せしがいつとなく他にもれて此頃は一向法會祭祀の場市中に於てその術をあらはに見せ商人に奇興たらしむといへるは享保十七年のことなり見せものにしたるは珍らしければなり（鳳來

彌三五郎

竹田

とも定め難くなん其名とけい出來てよりの後なるべしとけいは【采覽異言】に慶長十五年秋新伊西把儞亞の舟漂着す資糧を給ひ舟を繕ひて歸らしむ十七年其禮として來聘す献上の物の内に自鳴鐘一口あり此製是より有といへり)【鷹筑波集】あやつりをからくる智惠や天下一昔の操芝居みな天下一を稱す【笠絨輪】に火の入あぶら妖ものゝ出端痰吐ぬぜんまい木偶の鳩尾先とあり

○からくり人形は山本彌三五郎世に名高し【佐渡島日記】に石非飛彈つかひ人形の手を付たる根元なり今は濱芝居の名にのみ殘れり【歌舞伎事始】からくり淨るり名代山本飛彈是山本彌三五郎事なり元祿十三年御免有て今大坂へ引移り出羽といふ【操年代記】に其頃は歌舞妓芝居あたり多く殊に出羽にはさまのからくりなどして見物諸方にわかる云々【五元集】鷄の句合(六十四)鉼盤もていざ函谷へ彌三五郎判詞云右は孟嘗君が手のもの未だ出ざりしに其手古しとて新しき手を盡したる鷄術三千の客を越たりさてこそ叡覽人形の名をあげ飛彈掾と受領をも賜りけり昔のはかりことは聲をはかり今の工みは形をたくみ出たり和漢の通例を以て寶永の史記にも載ぬべしそれば鶴飛彈これは鷄飛彈なり云々(鶴飛彈は大工なり【享保二年日記】七月廿九日鍛冶橋御多門御普請御手傳小屋場中橋廣小路にて御渡御作事方御披官松坂源五郎殿棟梁鶴飛彈立會【江戸鹿子】に平内甲良と等しく大工棟梁の内に大鋸町鶴飛彈と出たりまた享保五年庚子十二月廿八日鶴飛彈に川船方一件御用仰付られ候事あり)ある事を見れば彌三五郎は叡覽に備へし事もあるにやされどもからくりの名代は竹田を古しとす延寶八年【洛陽集】に玉兎の歩み竹田近江もなかりけり(竹子)とも見ゆ【歌舞伎事始】からくり物まね子供狂言名代竹田近江万治元年竹田出雲掾といふ寛文二年大坂にて始たり又享保十一年五月名を竹田近江と改む寶永の草子【伽羅女】に竹田が座敷からくり等も御慰みとて末社まかせ是より出雲の大社へ大盡入來云々(此時いまだ出雲にて近江と改めざれば戯文かく云廻せり【我衣】に寛保元酉三月より九月迄大坂竹田近江大

せんまいと云事

に巧みにおはしけり京極寺を建給へりしに其寺の前の河原にある田は此寺の領なり然るに天下旱魃しける年此親王長四尺ばかりなる童の左右の手に器をさゝげて立る形を造り此田の中に立て置人来て其童の持たる器ものに水を入れば盛受る時は人形の顔引かゝるやうに操り造りたれば是をみる人ごとに水を持来り器に盛興じけるまゝ京中の人群り市をなしければ其田焼ることなくして満秩したりと云ことを載す又いと後の事ながら【甲陽軍鑑】に景勝より御曹司信勝公へ御音信に謙信赤物城攻のあやつりからくり物敵身方二千計の人数一間四方の城形進上云々また【老人雑話】に秀頼五歳の時京内参有伏見より行列をなす云々錢を箱へ入るれは廻る人形を輿の先に持せ諸大名供奉す椋梨一雪が【獨吟百韻】に「四條に御成門の立春長閑めける大あやつりの作りもの水をあけ樋やかくる苗代と云るは古事どもを用ひしにや【似我蜂物語】に唐船の作り物に七八百の人形有を泉水に浮ぶれば人形獣皆総を盡したるはてに帆柱を立帆を揚れば一ツの人形火ぶうち鐵炮を放てばみなうちはらひて失ぬるからくりの事を云りこは作りもの語ためれどかゝる細工もあるへき也からくりの義はくりは操の意くり出しくり込などのくり也からとは巻ことをからまくからみからめる皆おなじ今刀劔の飾其外白かね細工など根がねを地板に貫き裏にて根がねを打擴げてとめ置をからくるといふ古き詞と見えて【十二番職人盡】銅細工の歌「離れゆく人の心にはかねのからくりかねてねをのみぞなく（ぜんまいからくりと云は糸また鐵の細きを巻て有其形薇の芽に似たれば云ふにや此ぜむまいと云名いと後の俗稱ながら何の義にか解し難し古くは【和名抄】にも蕨とともにわらびと訓す後世薇にぜんまいの名あるは蕨と分たんお爲也いんか鍔の中心の先を穿して目釘穴としたる處を俗にぜんまいと云などは薇より名づけたりけれど此からくりのぜんまいは薇よりさきの名にあらん押思てふにぜんまいは細きものゝ巻たるなれば纖巻にや纖維筋など思ふべし又かのからくりは穏やかに巻たる物少しつゝ解しむれば漸々緩いづれ

へるの家とて作ることあり小みせもの〻小屋の小きに准らへて云なり)【伊呂芝居】といふ草子に人をつかふことと南京人形の糸さばくるよりちやすくと云るも是なり【竹豊故事】に南京糸操は寛文延寶の頃よりつかひ初めし由京都山本角太夫芝居に專らつかひしなり江戸には兩國橋廣小路に天明九年の頃始てあり風來が【放屁論】(兩國橋みせ物のことをいふ處) 大魚出れば大蛇背出硝石細工率絲傀儡古きを以て新らしく田舍道者の目を悅ばしむなどいへり此操りいつも國性爺の淨るりなどをして有しが文化十三年に絶たり小きもの南京といふこと近世の俗語なるべけれど何のよしにかあらむ常にかはりて小く愛らしきをいふ殊なる物を唐といひ南蠻といふも同じきにや其内南蠻はことに異變なるをいふさて此南京あやつりは綾つりの義にはかなへるもの也三番叟の人形などに糸を付たる手遊は今にあり

南京と云ふこと

○南京といふはもと異様なるを云なり【花見車】に俳諧の風體をいふ處談林風の後或は南京流とてさぬきを敷と云て圓座になし三輪をひやすとのべてそうめんに成たる一體半年ばかりいひしらけ云々あり

おでゞこと云事

○おでゞこはでこと云ことにおもじを添ていひたる也でこはでくのぼうなり【此事別に委き考ありこ〻には略す)其内一種おでゞこといふ人形あり古き繪双六にみゆ(此双六は前の双六の條にも云るごとくおでゞこの圖は後の繪なから享保の末のものとはみゆ) 享保元文頃ありしみせものなるべし放下師の人形笊籬を伏て明る度に其中の手遊さまざまにかはる傀儡なり(この人形は今もあり) 兩國橋廣小路なるおでゞこ芝居はもと是なり月成が【後は昔物語】に父が今日はでんづくでんの前を通りて抔といひしは芝居のことなり堺町を通りしといふことなりと云り(でんづくでんは即おでゞこでんなり芝居に鳴す太鼓の音をいひしやうなれ共こはざれことなり)

からくり人形

○からくり人形は傀儡なり漢土には周穆王の時に偃師といふ者木人を作りて歌舞せしむ是を始とすと【事物紀原】にいへりこ〻には其始詳ならず【今昔物語】に高陽院の親王はきはめたる物の上手にて細工

て一日二萬三千句獨吟してより二萬堂と號せり【五元集】に住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時後見たのみければ「驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり（執筆數人なれば此時其角もたのまれしならん）戯編そこばく著して世人に悦ばる元祿六年癸酉八月十五日五十二歳にて終れり辭世發句「浮世の月見過しにけり末二年大坂八町目寺町誓願寺に墓あり仙皓西鶴といふ（下山鶴平北條團水）が建る處なり西鶴は寛永十九年に生れ近松は慶安承應頃に生れたるべし西鶴よりは十歳ばかりもおくれしならむ）門左衛門が近松を名乘ること三井の近松院にはあらざる歟其故は【本朝文鑑】鳥追辭の注に昔說經者といひて蟬丸の流を汲て三井の近松院を本寺とす今の佐々羅といふものならむとあり似つかはしくなん）先輩に中川喜雲淺井了意が類ありといへどもよく世情に通じて滑稽をのべ盡すやうのことは西鶴が右に出るものなし八島其碩八文舍自笑等が草子一部の趣向はあれども西鶴が餘唾を拾ふに似たり淨瑠璃に於ては近松が如き者古今獨步と稱すべし近松に亞でみゆるは紀海音なり筆才他人の庶幾すべきにあらず其外竹田出雲西澤一風錦文流村上嘉助松田和吉長谷川千四並木宗輔安田蛙文爲永太郎兵衛などあり後の淨るりは合作のもの多く一筆なるはすくなし

南京あやつり　雨かへる　おでゞこ　からくり人形　ぜんまい　彌三五郎　竹田機からくり　し　硝子）　獨狂言　樽人形　笠人形　ごばん人形　七變化

南京あやつり雨がいる

南京あやつりとて人形に糸を多く付て上よりつりてつかふもの有り【西鶴置土產】四條のことをいふ處あまがへるの芝居なる小みせもの云々【歌舞伎事始】に芝居四條中島にありし時類焼し雨がいるといへる南京あやつりの小芝居一軒殘れり又別條にしるして云ふ四條中島東門前北側に雨がいるといひし南京あやつり有り淨るりは角太夫節なり此雨がいると云事はすべて小芝居にはやねなかりしが此芝居には板やねにて雨のふる時もいとはざりし故かく云りとあり（雨がいるの說は非なり小兒の戲にあまが

有て座て居ながら人形を手すりの上に出し遣ふ手すりに幕などはなし)【竹豐故事】に辰松八郎兵衛京大坂にて譽れを取後に江戸に來りて益名高く操櫓をあげ芝居を興行せり是を辰松座といふ京には正徳享保の頃三升平四郎宇治久五郎三十郎與八郎等いづれも名を得し上手なり大坂には辰松氏藤井小三郎桐竹三右衛門等おやまの名人あり當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人なり相次で若竹東工郎擧高しおやまは今藤井氏男人形には桐竹吉田豐松若竹氏の中に上手多し

○享保四年亥十一月二十五日葺屋町操師辰松八郎兵衛幸助二の御丸御舞臺にて操仕候事

淨瑠璃作者

○淨瑠璃作者江戸には【世事談】に北條宮内岡清兵衛(金平などは此人の作といへり)塚原市左衛門(半太夫節の作者)等あり頃日は聞えずと云り(【關東俠客傳】云凡金平といふ淨るり江戸太夫にさつま淨雲丹波(後か)太夫近江語齋太夫伊之助肥前太夫土佐太夫外記半太夫式部皆名人なれ共此太夫かたり得ぬ節に付しも丹波父子に不及虎屋永閑牧野備後守殿好にて金平入道武者修行に節付せし計なり丹波太夫本行節のよしといへりこはいつ頃のことか延寶頃の一枚繪に金平入道武者修行あり)そのかみ好事

近松門左衛門

のもの戲作すといへども其人しられず是を產業としたる者は近松門左衛門に始る百餘部の院本奇と稱すべし近松姓は杉森名信盛平安堂巣林子と號す越前人少き時肥前唐津近松寺に遊學し後京師に住す學醫岡本一抱子の兄なりといへり享保九年甲辰十一月二十七日七十餘歲にて身まかりぬ(存在の時自の肖像に辭世をしるし置り「殘れとは思ふもおろかうづみ火のけぬまあたなる朽木かきして大坂谷町法妙寺に墓あり法名阿耨院穆矣日一具足居士

井原西鶴

○【操年代記】に貞享三丙寅年京宇治加賀掾難波に下り京四條芝居にて西鶴作の淨るり暦といふを語る義太夫方には賢女の手習并新暦として兩家はり合遂に義太夫淨るりよく嘉太夫止ぬ其次のかはりは凱陣八島これも西鶴作にて評判よき最中出火して加賀掾は京に登れり西鶴は井原氏俳諧は宗因が門人に

ろに西鶴が【諸艶大鑑】に越後町揚屋のことをいふ處外記が平安城の道行かたればおやま甚左衛門が仕出し人形そろま七郎兵衛が二王のまねたどみゆさて野呂松は氏にはあらずのろまは鈍きをいふそのかみの俗語にて愚なる人形の名に呼しことしるし其他の人形の名を見て思ふべし【たろべし】にとうろくけんさいといふ倡人は唐勒景差なるべしといへるはうけがたし【葛藤】(下)一むかしつもる咄は無量劫まねる腹からのろま米平又【六玉川】(五)人形の中でのろまは珍らしき父(七)のろまつかひも蠟燭で喰平澤常當が【後は昔物語】老人の咄しをしるし、處土佐ぶし淨るりの間々にあひの狂言といふあり是近來とり出たるのろま也のろま米平など人形の名にてのろまは治兵衛といふ男の人形米平は甚右衛門といふ男の人形なり又云土佐ぶしの人形は裾より手を入てつかひ足はなく手摺の下より人形ばかりみせてつかふ人の容はあらはに見せざりしもとよりさしがねにて左を別人のつかふこともなかりしなり後に至り本事とて碁盤人形の如く出つかひも有て其時は足をつかひしこと也あまり働かぬ人形をば胴串とて今の手遊のごとく如此にて遣ひし也働く人形ばかりつまみとて是も短くしてつかひしと云ふ

出つかひ
辰松

○又云出つかひは辰松(八郎兵衛)に始る人形の動くに随ひおのれが身をものそさまにうつすもの故見ぐるしきを恥て黒きとばりのかげに黒き頭巾を被るなり(【雍州府志】に人形を上下の幕の間に出しつかふ上段の幕を額隠といふ人形遣ひの額をかくすなり幕の内を幕屋といふ近世舞樂の幕屋に准じてがくやと云ふ)辰松は人形に手煉し上下を着し手摺をはなれて無量の手づまを遣ふに全身少しも亂るゝ事なし古今の妙手といへり辰松幸介これに亞ぐ各現在大坂藤井小三郎近松九八中村彦三郎みな出遣ひをなすといへり(辰松八郎兵衛出遣ひの初は元祿十七年曾根崎にておはつ徳兵衛心中の淨るりなり殊の外はやりて其稽古今に傳はれるあり其圖に辰松が上下をきて出遣ひの處あり衣裄の如き手すり

【竹豊故事】におやま治郎三郎此道の達人なり京都には貞享元祿の頃おやま五郎兵衛同五郎右衛門大藏善右衛門などありといへり治郎三郎が弟子なるべし）但し歌舞伎にて女がたにいふは後の事と見えてそのかみは女がた太夫くわしやがたはみゆれどおやまの名なし（をやまは何の義にか小野頼風が妻の女郎花になりたる古事は男山に名高ければ艶色の義をとりていふ歟又さまでもあらず唯女人形の名なるべし京師賣色に山猫と稱するよりの名にはあらじ）おやまは人形の名なり一説に思へらく眉墨を付ること遠山の如くすこれを以て名く今妓婦の通稱となるといへり延寶八年次郎三郎人形上覽ありおやま二郎三郎なるべし

○元祿十四年五月三日和泉太夫おやま次郎三郎兩人參昨日紀州樣へ御臺樣被爲入候に付被召寄難有奉存候由申候江戸半太夫も届け參候

淨るり座看板の圖

○天和貞享頃の淨るり座看板の圖土佐少掾にたんぜん新ぞう與太郎ふく太郎若女彌藏端歌三味線、【薩摩外記】におやま與九郎太郎滿助手惣つま方けんさい小歌さみせん、丹波少掾にけんさいとろ平やつこ彌藏おやま小歌さみせん、金平せつきやう石見守座に能人形どんつうどん七ちや平おやま小うたはうたさみせん、とあり小歌さみせんは其役を勤むるにて人形の名にはあらず思ふに同じ人形にても其座にて名のもあるべしけんさいは賢才にや女形をおやまといふと同く人形の名なり

のろま人形

そろまむきま

○のろまは江戸和泉太夫芝居に野良松勘兵衛といふ者頭ひらく色青黒きいやしげなる人形をつかふこれをのろま人形といふ野良松の略語なり又鎌齋左兵衛はかしこき人形をつかひ相共に賢愚の體を狂言せしなりそれより鈍きものをのろまといへり其後そろまむきまなどいふもの出來たりと【世事談】にいへり【竹豊故事】に野呂松氏を祖として京大坂の操芝居に鹿呂間そろ七麥間など名を付道外たる詞色をなし淨るり段物の間の狂言をなしたり近來はかやうなることは捨り知れる人も稀になりたり又按

小袖もやう至極のだてを盡し人形面體浮氣に拵へ相伴ふ郎等もみな廣袖の小袖大白衣はさげがみ女の人形は御臺所といふも皆妓形なげ島田のかみにて小袖も伊達を盡し淨るりは始より終まであるにもあられぬ好色を作り不屆千萬なる仕組其上木に竹をつぎたるやふに時代ちがひ云々

○【新著聞集】に泉州堺の眞言宗の僧辭世の歌「世中はしやのしやの衣つゝてん／＼てくる坊主に殘る松風」傀儡師をいへり

でこのぼう
だうこのぼう

○でこのぼうはもとだうこのぼうといへり【埋草卜養千句】石臼に何やら入てまはすらんだうこのぼうはこまかなるべしといへる是なりだうこのぼうのことは別に考ありこと長ければこゝにいはず

○【操外題年代記】に正德六年【國性爺後日合戰】のとき大幕の上に小幕を引初む享保六年八月信州川中島合戰に山すだれをはりぬきの本山に作る同十三年五月【篠原合戰】に初て正面の床を横へ直す同十六年五月國性爺三度め天滿のひとき組より芝居の表に幟を立る同十八年四月【車返合戰櫻】大森彥七人形指先の働を仕始む同十九年十月【蘆屋道滿大內鑑】與勘平人形腹のふくるゝやうに作る延享二年七月【夏祭浪花鑑】人形帷子衣裳を着す右いづれも竹本筑後芝居にてなり又豐竹越前芝居にては享保十五年八月【楠軍法富鐙】和田七人形眼のはたらきを仕始む同十九年正月【北條時賴記】正面の床を横へ直す元文五年九月【武烈天皇艤】佐手彥の人形眉毛動くを初む元文五年【花和讚新羅源氏】の切に操大躍いせ音頭茶屋掛あん灯雀をどりの仕出し珍し右かしくの趣向は三月十八日十九日の事なり廿日に外題を出し五六日の間に出來作者並木文助及惣役者中の働前代未聞といへり

おやま人形

○【江戸圖鑑】(元祿二年)操狂言太夫通油町おやま二郎三郎高砂町とんつう與惣兵衛と出たり【世事談】に小山次郎三郎といふもの女の人形をよくつかふ遊女傾城の類をおやまといふにより是をおやま人形といふといへり紛らはしき書やうなり思ふに上かたにて遊女をおやまといふによりてとなへしならむ

操道具

○操道具も其かみは麁末なることにて【雍州府志】に其始纔張幕於兩楹之間舞人形於其上といへり【竹豐故事】に大方は黑幕と山簾とにて人形の衣裳錦泥のすり込摸樣女人形は紅の表に淺黃裏抔にて事足りぬ元來足付人形は曾てなかりし（竹本豐竹兩座となりて互に競ひて作者さま〳〵の趣向を工み出し道具立人形美麗を盡し詰人形の外は皆足付となり出つかひの外は介錯足つかひ立かゝり歌舞伎役者の所作に增りてみゆといへり）

石井飛彈

○【人倫訓蒙圖彙】（元祿三年上木なり）土佐掾が芝居の處あり人形いづれも足なく裾より手をさし込てつかふ三絃ひき座頭にてゆかは今のすゞみ臺床机のごときを土間に居て其上にてかたる（【俳諧溫故集】人形の手にもなしたり角頭巾（介我）古きかふり付「氣を付りや人形の手は人の手ぢや」【佐渡嶋日記】に人形芝居にては大坂石井飛彈といへるもの尋ませればならぬことなり元來操人形は首ばかりにて着物を打きせ手も足もつかひ人の手にて仕たるもの近來迄子供の翫びにデコノボウといへるもの是なり石井氏其見苦きを工夫して手をこしらへ足を付たりそれより手の指を動し眼をつかひ眉を動かすなど近來はさま〳〵自由に作る是石井氏工夫の根元なり今は飛彈の名は濱芝居の名代はかりに殘りたり（【四條河原芝居名代改帳】から らくり淨るり山本飛彈云々口宣案元祿十三年十一月源淸賢宜任飛彈掾云々）

○【昔々物語】昔は堺町のあやつりさつま太夫筑後丹後近江肥前永閑あやつりの淨るりは酒呑童子或賛花車等云々人形の拵やうも先大將は立ゑぼし直衣をきせ郎等にはゑぼし素袍をきせ女の主人には髮をすべらかしかつら帶かけて召仕まで髮をすべらかしかつら帶ひたひにかけ御臺所には十二一重の小袖をきせ男女共に規式正しくこしらへ淨るり初る前に先式三番を能の如く濟し其次に人寄とて和田酒もり一流前淨るりにしてすまし其跡にて其日の本上るりを始る云々近年のあやつりは大將も大廣袖だて

す又出雲が芝居にて筑後と同く語りしに聞人筑後とまがふ程なりとかやゝがて上野少掾となり藤原重勝と云ふ又越前少掾となる（寶暦六年の頃隠居して齢八十に近し）

豊竹肥前

○江戸豊竹肥前掾は難波の人越前掾が弟子にて新太夫といへり享保十九年江戸に来り四五年の間は若松丹後掾といふ名代にて芝居興行し其後辰松か芝居に出しが元文三年自分芝居を求め豊竹肥前掾藤原清正とやぐら幕にしるしたり浄るり芝居其頃薩摩辰松などは休の時もあれど豊竹座は絶ず興行せしとぞ古来名人ども有といへども芝居主座元太夫と三ツを兼備せしは京都に宇治加賀掾大坂に豊竹越前掾江戸にこの肥前掾三人のみなりといへり世に古浄るり絶果て竹本豊竹二流繁昌す其他半太夫國太夫等の流ありといへども是等は唯座敷の一興また歌舞伎の所作道行の合方囃子の地にかたりて段物操芝居には用べからず

あやつり

○あやつりは【續日本紀】に挑文師みえたり綾の紋を取ものなり【新猿楽記】に撒菅をあやつりとよめり又【撮壌集】に操物真似と出たり木偶の機關もその義なりこれを浄るりに合することは傀儡師に始れりといふ（傀儡師のことは委しく考へて【覆簣鈔】の内に載たり【羅山先生文集】に傀儡を見るといふ文あり江戸第一傀儡師小平太といへり（【東海道名所記】に後に淡路之丞と受領せし爽かきといひしとは異なるか）然るを【事跡合考】に紀州浪人小平太後浄雲と云ふ此小平太西宮の傀儡師源之丞といふものに人形を舞さしむと云へるは誤なり小平太は人形舞しにて浄るり語り浄雲とは異なり（又薩摩と称せしことのよしをいふに島津家にまねかれ彼處にて江戸中に唯一家紋屋といふ人形屋有しに木偶を作らせ又家紋付たる幕を用ひしが事終りて後に是を小平太に與へられしより世に薩摩太夫と称といへるもひがことゝ見ゆ薩摩は後ち受領の名なるべし）【四條河原芝居改帳】浄るり薩摩延寶六年十一月二十八日口宣頂戴仕（口宣案橋常信宣薩摩掾とあり）源之丞所持仕云々是淡路が後とおもはる

竹本義太夫

○竹本義太夫は攝州天王寺村の農家なりしが若年より播磨淨るりを好みて修行し延寶の頃難波にて虎屋喜太夫芝居をつとめ（【操年代記】に播磨の弟子淸水理兵衞か脇をかたる播磨初め此芝居にありけるか）天和年中京都へ登り（京に上りし時四條河原芝居にて淸水理太夫と名のる）加賀掾が脇をかたれり貞享二年に大坂へ歸り（【外題年鑑】にはかくのみあれど【操年代記】を考ふるに宇治嘉太夫京に上り竹屋庄兵衞をかたらひ芝居を興行せしに後庄兵衞と藝の筋にて中あしく立分れて庄兵衞は一座を立て五郎兵衞を太夫にして西國に下り宮島の市を仕舞大坂に登り今の竹田外記芝居をかり天王寺五郎兵衞といふ名を改め竹本義太夫となる幕の紋まりはさみの內に笹の丸を用と云りこれ竹田か紋にやおもふに義太夫と云ふ名は虎や喜太夫が名に似つかはしく付たるなり竹本と云しも竹田が芝居をかりし故にもよるべけれど是又虎に緣をとりたるなり角太夫が弟子に松本治太夫と云しものは竹本義太夫に對ひたる名かからくり師に竹田名高なるを美み松田といへる放下師ありし類なり）道頓堀にて自分に櫓をあげ常芝居を興行し其後筑後掾と受領す貞享三年二月【出世景淸】といふ新淨るりは近松門左衞門竹本義太夫が淨るりを作るの始なりとぞ（是迄は嘉太夫が古淨るりをかたりたるなり宇治嘉太夫加賀掾上るり本に出づ）蟬丸は筑後掾藤原博敎と受領したる弘の淨るりなり（時年五十一）【曾根崎心中】は元祿十七年五月七日これ世話淨るりの始めといへり（【外題年鑑】これを十六年とするは非なり雷風庵蓮谷といふ俳人曾根崎にて（數珠かけて二羽とふ鳩の寒さかなと此情死を吊へり）正德四年九月十日行年六十四歲にして身まかれり（法名釋道喜天王寺念佛堂に對ひ石塔あり豐竹上野か建る處なり貞享二年乙丑より正德四年甲午まで三十年淨るり九十四番に至れりと云ふ）

豐竹若太夫

○豐竹若太夫は大坂南船場の產若年より竹本流を學び初め十八歲にて竹本釆女といへり道具屋吉左衞門永島重太夫など其頃この門弟なり元祿十七年長門九郎兵衞舞の芝居に相座元にて豐竹若太夫と改名

長明寺に墓ありとぞ招碑に天下一播磨藤原要栄と記す幕の紋井げたに立花桐の紋丸に九枚笹なり延寶三年印本【難波名所芦分舟】巻(三)に出づ（其弟子石屋三右衛門井上市郎太夫とて芝居を積しがはやらずして止また大坂には清水理兵衛と云ふ弟子あり諸人今播磨と稱す後に剃髪して作西と號す）

○【操年代記】に近松が新作上るりを義太夫かたりさかりし頃を云て其ころ歌舞伎芝居あたり多く殊に出羽にはさま〳〵のからくりなどし見物諸方にわかると云へり【竹豊故事】には元禄年中京都山本角太夫土佐掾の門人岡本文彌伊藤出羽掾（天下一出羽掾藤原信勝）芝居にて一流をかたり弘め大坂中文彌節とてもてはやしぬ殊更山本飛彈掾手妻人形の所作事操など取まじへ見するに見物喜び大坂中は云に及ばず遠國まで名譽あらはる云々西國順禮も京にては内裏さま大坂にきては出羽掾の芝居を見て歸らねば西國したる甲斐なきやうにもてはやしける今にては其名代さへなく成ぬ勿論冷泉綱戸平家說經歌念佛歌祭文抔云ふ物は聞しりたる人もまれ〳〵にて只兩竹氏の流義のみ諸國一圓に流布す云々

宇治嘉太夫

○宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治といふ所の人なり播磨風に心を入しが延寶の末京に登り伊勢島宮内が名代を以て宇治嘉太夫と名乘り芝居を立年經て受領し加賀掾宇治好澄と改む（けいこ本八行を四條小橋つぼ屋にて板行させ淨るり本に謡本の如くフシハカセを付初めしは此太夫なり

○【世事談】には伊勢島宮内に并ひ宇治嘉太夫と云とも見え米仲が【類随筆】(一)いせ島宮内は江戸虎屋源太夫にて宇治嘉太夫の師なりともいへり又【竹豊故事】に虎や源太夫門弟伊せ嶋宮内其弟子佐太夫云々宮内の弟子嘉太夫とありこの說然るべし正德三年十二月四日【四條河原芝居改帳】に宇治嘉太夫延寶五年後十二月十一日口宣頂戴仕寶永八卯年八月二十一日加賀掾相果孫久五郎名代相續仕度旨云々みえたり行年七十七歳とぞ（寶永八卯年は是正德元年なり）貞享三年難波に下り西鶴作の淨るりをかたる理なく故有て京に歸りぬ花洛に在ること三十餘年にして終れり法名を自證院本淨道融といふ

りとぞ專ら近時の心中事を作れり其正本綱五郎花さき二重衣戀占猪之介若草仇比戀浮橋伊太八尾上歸咲名殘命毛時次郎浦里明烏夢泡雪などの類あまたあり淺草中田甫幸龍寺に墓あり辭世は碑石にしるしたり「生てゐる內は何かと神佛ひじりもいかい世話てござつた（天明六丙午年三月二十二日）鶴賀の二字も是より許し出すとぞ若狹が弟子若狹太夫あり又鶴賀加賀八太夫は（初新內と云ふ）其生年七十歲娘を鶴吉といふ近ころ新內が名は其家に預り弟子加賀吉新內となれり其次新內も加賀八弟子にて初加賀歲といへり

鶴賀

〇又岡本都太夫より岡本を名のるもの多し其外東洛左文富士松ぎんてうさいこれに初めおさな坊きみ八と云按摩取なり又豐永歲太夫など各々さま〴〵名いることは鶴吉といふ老婆家もとにて鶴賀名字をゆるさゞる故なり後に新內と云へるは岡田新內なり岡田は元祖新內が實苗字にや

岡本

〇宮園は宮古路園八にて國太夫が弟子なり其次園八中頃豐前といへり鸞鳳軒と號す【宮園新曲集】の序になまなかき淨るり興さむる事あり故に【新曲短篇】を作りてかたるよしいへり

宮園

〇義太夫淨るりの始は萬治寛文の頃にや難波人井上市兵衞といふもの誰が弟子なる事をしらずおもふに虎屋喜太夫なとより出たるにや遂に一流をかたり出し操芝居を取立受領して井上大和掾藤原要榮と名乘しが後に播磨掾と改む世に播磨風と稱す諸人これをまねんとするに其頭床本はかたく秘して弟子にも示さずやう〳〵聞書して一行二行づゝ覺えて口まねをせりいまだ大坂に淨るり本屋なく便りに求の替り淨るり出れば前の淨るりを乞て京にて是を板行にするといへども細字に五段を書一段ごとに繪を入れ小兒の翫としてひろむ其後心齋橋筋寫本を商ふ井上彌兵衞と云もの播磨かゆかりのものにてかたり本の內道行四季神おろしなどを乞請て寫本にして稽古人の助となしぬ播磨みだりに弟子をとらずと【操年代記】にいへり竹本豐竹等みな是より出貞享二年丑五月十九日京師にて死す法名夏月了管日弘

義太夫淨るりの始

豐後節

常盤津文字太夫
富本

とふれられて菰をかぶるか宮こぢきめら老人云傳へり夫故豐後ぶしも久々打絶しが後に京都寺町位牌屋文右衛門といふもの義太夫節もよく覺え語りしが更に下り名を專むとおもへど名人ども多く下り中々渡世なりがたく困り居けるが工風して往々木市歳を相手として豐後ぶしを中興す古今の名人とて又はやり出し臨志津摩太夫酒造太夫其頭は常盤橋邊に住居ける故常盤津文字太夫と名乘しなり此ふし芝居にて道行ごと其外ないかいなの節の作によく合し故今に繁昌す今の豐後ぶしかたりは勝手次第の苗字をつけ富本豐名賀吾妻元木はみな宮古路なりし是を名乘がたきは御禰を恐れ且はみやこぢきめらを恥しならむとみえたり【教訓下手談義】に宮古路は享保の始犬の病と連立て來て世人の骨髓に通り終に治し難き沉痾となりぬ此淨るりを禁めざる家には不義放埒のさたなきはなし云々こゝに享保の初め江戸に來るとするものは誤なり【作臺獨語】によるに其時下りしは竹本が淨るりなり【龍の小手卷】に豐後ぶしの流弊次第に遊風にうつり遊士俗人の風俗あらぬものになり文金風行はる（時世粧の條見合すべし）又云豐後ぶしも次第に高上になり文句は昔よりは風流にかざりて芝居の所作出がたりはいつも常盤津文字太夫とて男もよく聲もよく上手にて其狂言當りたり其頃素人藝者にて名を貫ひて女は文字江文字松などゝて女客などの馳走に雇れてありきたりといへり【江戸名物鑑】豐後節は絶ぬ日とては淺の芝居の淨瑠璃（舊馬）文字太夫が弟子富本豐前太夫寛政九年の頃横死せし實太夫吾妻國太夫といへりまた清元清水などは富本より出たり【諸藝太平記】は元祿十四年の作なり四の卷に今常盤津にて老松といふ淨るりふし付したり是などふしたるにや

新内

○新内は江戸深川高ばしの邊に住る御家人にて苗字は何とかいひけん名を新内といふ宮古路豐後掾が弟子となり加賀八太夫といふ當時の頃一流をかたり出し本名敦賀を鶴賀と改め新内と名乘たり後受領して若狹掾となる狂歌を好みて濱邊黑人が門人にて大木戸の黑牛といふかたる處の淨るりみな自作な

を和らげ一流かたり出せり劔髪にて十德を着白き長袴をはきて出がたりしたりとなむ其子都和泉掾一中と號す

岡本文彌

○岡本文彌（常盤津師範の系圖には伊藤出羽掾とあり（これは座元の名なり二代め又岡本文彌といふ）是また角太夫が弟子なり【外題年鑑】に岡本文彌同阿波太夫松本治太夫一中等はいづれも先師土佐掾又は井上氏の淨るりを多くかたられし故新作多からず（これをみれば一中ぶし上るりなどもそのかみよりの古上るりなり）云々また阿波太夫は難波にあり後岡本鳴戸太夫是なり（是文彌が弟子なるべし）

阿波太夫

○阿波太夫は愁ぶしの上手なり享保二年の草子【娘容儀】に出羽しばゐのあは太夫がうれいぶしに打こみ四十八願記の三段目を覺てひとりなぐさみて語て泪をこぼす云々

宮古路

○宮古路國太夫【竹豐故事】に後豐後太夫に一中の弟子にて初め半中と云たり後に國太夫又豐後と號せり他流とちがひ五段物時代事などは語らず世話ごとを專らかたる門人可內辨中等名をあらはす【江戸節根元集】に云京都に宮古路國太夫節芝居にて所作によくあひし節にて今に廢らず其弟子に文吾といへるものあり元文年中東都へ下り宮古路豐後太夫と名乘三線相方は鳥羽屋三右衛門が弟子佐々木市藏三線手附は三右衛門なり國太夫ぶし三絃の手は甚せはしく東都にむかず故に子供にも能彈るゝやうに手を付る其後加賀太夫數馬太夫抔とて門弟有てわき語りに至る迄はやりしなり【常盤津師範系圖】に

竹本

都半中事宮古路豐後掾とみゆ初め一中が門弟なりし歟【春臺獨語】に云ふ享保の初に又難波より竹本といふ淨るり師來りて廣む江戸の人是を好みあへりしに其後又宮古路といふ淨るり師難波より來りてかなしき聲に淺ましく賤きことを語り出す江戸の人亦これに移りてめではやすことかぎりなし【江戸節根元集】に宮古路淨るりはやる故所々にて色こと心中缺落もの等多く有ゆゑ豐後節御停止御觸被出相止けり其年中國米は兩に八斗貳升にて殊外世中も詰り困窮の者多かりしと其時落首に豐後米八斗貳升

天神女坂下相模屋與兵衛とあり河東は享保十年七月二十日四十二にして死す築地本願寺々中成勝寺に葬る法名濟西といふ【續五元集】（中）井の蓋を蔽は氷る空の月納屋は寝覺にかたる上るり（晉子）是元祿六年の作なり河東いまだ十歳なればそれをいふには非ず

角太夫

○京都山本角太夫は虎屋源太夫が弟子なり正德三年【四條河原芝居名代改帳】上るり山本土佐延寶五年後の十二月十一日口宣頂戴仕始は山本相模掾と申候處差合之儀御座候而御斷申上山本土佐と改申候土佐義去辰年相果悴源助只今所持仕候（その正本傳ふるもの稀なり瀧口横笛紅葉之遊覽といふ正本奥書延寶四丙辰年霜月角太夫正本寫云々）と見えたり松本治太夫都太夫一仲岡本文彌（後出羽掾となる）宮古路國太夫等みな是より出たり

都一仲

○都一仲は山本土佐角太夫が弟子にて須賀千卜といふもの都一仲となる【江戸節根元集】に都一仲元祿の頃追々はやれりといへるは京師にてのことなり【春臺獨語】に寶永のころ京より一中と申者來りて上るりをひろむ云々（是又ふるき正本傳ふるもの少し助六心中蝉の脱がらといへる六段ものゝ奥に右此本は都太夫一仲直之正本を寫し令板行者也享保丙午十一歳正月吉日淺草見附前同朋町いづみや權四郎板元と有り又一仲ぶしに京都本あり一仲ぶしの文句を長唄豊後ぶしなどにとれるもの多し長うたの二人椀久は一中ぶしの椀久道行の文を其儘とり常盤津富本などにてかたる淺間の上るりは一中の夕霄淺間嶽の文なり初一葉ほどは一二字の異同あるまでなり又きゝすといふめりやすは一中の根引の門松といへる文を略したるたり其外にもいと多かるべし文政四年辛巳六月近來世に行はるゝ故新に一中ぶし文句を刻し題して【都羽二重拍子扇】といへり但し段ものにはあらず景事のみ十種を集めて一卷とす）一中は上るりの外に楊弓の名手にて一表二百のこらず的中したりとかやされば一中といふ名はもと楊弓のかたに付たる名なるべし【竹豊故事】に一中は元來本願寺派の僧なり山本土佐掾松本治太夫等の流

【六玉川】(三篇)蚊ばしらの額へ崩れる半太夫とはうなる聲をいふ成べし【娘容儀】終日酒きげん半太夫ぶしに頭をふつて語寐入にする云々

○半太夫の紋丸の内に三ツ引なりこれ三浦屋が紋にて由ありてこれを用ひたるが【原武が筆記】に云ふ三浦三軒は三げん家と名付鎌倉三浦介義澄が子孫故のうれんにも丸の内に三ツ引を付ざるに由て此家によしずみと云ふ名絶ることなく孔雀しぼり着るは三浦に限りてのこと高尾薄雲小紫三國半太夫此名絶ることなしといへり但し半太夫といへる名は古き細見に見あたらず

河東ぶし

○河東ぶし【我衣】に享保年中河東といへるもの出たり半太夫が弟子なり品川町出生にて親は天滿屋市十郎といふ備前松平大炊頭殿出入の魚屋なり本の名は東十郎といふ河邊氏なれば河東と云ふ紋は丸の内三引なるを中をくづしたるなり【江戸節根元集】に河東は小田原町御納屋天滿屋藤左衛門悴藤十郎半太夫門弟なりしが一流かたり出し藤十郎代となり御納屋を外へ讓り母の里淺草御藏前に在しが此名字河部氏と申彼家に同居せし故河の字をとりて河藤と呼しなり後堺町に住風と云ふものあり藤を改て東と書て河東とす又十寸見堂と號することは此上るりよく移せばよくうつり惡くうつせば惡くうつる十寸鏡の如しといふ意なり河東ぶしの文は多くは竹婦人作とあり是は其頃の俳諧師岩本乾什なり乾什初め竹婦人呉丈といへり浮む瀨は奈良茂が爲に作りいの字扇は享保十九年俳優調子がために作る水調子は玉菊追善花かたみは河東追善其外繪蓬萊江の島禿萬歳有馬筆猶あまたあるべし皆竹婦人作なり又河東ぶしの正本に【鳰鳥集】(五)【鳰鳥萬葉集】(二)【鳰鳥紅葉集】(一)【鳰鳥後選集】(一)【鳰鳥太々神樂】(二)猶【鳰鳥新撰】などの類多かり鳰鳥の字を冠らせざるは【夜半樂】【十寸見要集】の二部に過ず鳰鳥は息長くして水に入るものなればこの曲節の音の長やかなるにたとふるなるべし【鳰鳥後選集】は誤脫なしその奧書御座敷上瑠理江戸太夫河東 ワキ 河常金次郎三味線岡島小三郎筆梗近藤助五郎清春板元湯島

の上手あり京町二丁めに勘兵衛といふもの有り其頃流行の丹後が浄るりを聞とり語りしが甚之丞すゝめていふ丹後がしりまひせんは口惜きことなり一流をかたりかへ然るべし此前四郎興吉が語りし浄るりの風面白かりしとて語りきかせ指南しければ勘兵衛ゟ丹後と四郎興吉が風を合せて一流かたり出し後に近江太夫語斎と名をあげたりといへり此勘兵衛を印本【洞房語園】には岡島吉左衛門三線甚之頭を師とし浄るり一流かたり出し明暦中に受領して近江大椽といひ後剃髪して語斎といふとあり長門太夫が弟子に肥前太夫あり丹波太夫は和泉太夫が事なり強勇の男にて【關東俠客傳】に見えたり櫻井丹波和泉半正信それが子を長太夫といへり丹波は二尺許の鐵棒にて拍子をとる元祖市川團十郎が荒ごとは此太夫が節付いき方を學べるなり【俳諧世々かひこ】「親丹波毎日岩を打砕くといふ付合ありしからば長太夫も後に親の名をつぎて丹波といひしなるべし肥前太夫は伊之助といへり

語斎

○延寶八年庚申四月十日酒井雅樂頭於二御丸御茶被上爲御馳走堺町みせ物上覽上るり酒呑童子操太夫土佐少椽初段すまふ貳段春の茶湯三段しのだ女四段有馬やつこ次郎三郎五段めてん／＼包丁次郎三郎白銀五十枚與服一重一種一荷土佐太夫白銀三十枚一種一荷次郎三郎

○【昔々物語】に昔は堺町の操さつま太夫其後丹後近江肥前永閑操の上るりは酒呑童子或貴花車等云々

半太夫節

○半太夫ぶし【世事談】に江戸半太夫幼名半之丞といふ修驗者何院とかやの子なり始は肥前太夫が門に入後一流をかたり出せり（【江戸鑑】などに式部太夫とあるは半太夫が始の名にや【關東血氣物語】に半太夫式部といへり【江戸節根元集】に半之丞始めは說經祭文の名人なりしといへり）塚原市左衛門といふ者半太夫座の浄るりを作る半太夫剃髪して坂本梁雲といふ東武近世の名人なり【我衣】に元祿年中宇左衛門芝居の向ふへ操芝居出したり是は肥前弟にて永閑につゞきたる弟子なり（半太夫が門弟の内に萬太夫といふあり【俳諧わくかせわ】に川舎もの故いな事に念半太夫弟子に相違な萬太夫（雅伯）また

ことかな／＼一段につまるこよみの十二段に六段　浮るり一段を上下として十二だんなり後さつま座葺屋町にありて又堺町へうつれること見ゆ正德五年五月二十一日上るり座外記太夫祇今迄葺屋町にて相勤申候處此度堺町庄次郎地面へ所替仕度旨奉願候處願之通今日被仰付普請出來次第御見分可被下旨被

仰渡候依之外記名代藤八申來る

こすいでん

○こすいでんと云は熊野の本地ごすいでんと云ものなり何くれの本地と云ふ草子多くありおもふにこれそのかみの說經に用ひたるものなるを淨るりにもかたりしなり二河白道なども同類なり

小さつま
大さつま

○【色音論】(寬永中板)にさつまとらや(喜太夫なり)があやつり土佐が能と見えたり此さつまは次郎右衛門なり又さつま外記は京師の人次郎兵衛にて其子孫江戸に下りさつま三郎兵衛といふ是を小さつまとも下りさつまともいひしにや故に次郎右衛門が方を大さつまと呼り三郎兵衛が座は後までもありしに次郎右衛門が方は早く休座したりと見えて延寶ごろ其芝居なし(【江戸鹿子】(貞享四年)堺町に座元さつま三郎兵衛太夫土佐少椽脇小太夫庄太夫吹屋町に和泉太夫脇長太夫虎屋源太夫また無座の太夫は吳服町虎屋永閑人形町近江語齋本大坂町肥前太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乘物町對馬五郎右衛門とあり【江戸圖鑑】(元祿二年)堺町土佐少椽橘正勝(南側にあり)脇小太夫庄太夫堺町北側丹波椽和泉太夫脇長太夫源太夫座元さつま三郎兵衛太夫虎屋永閑脇小源太夫また無座の太夫人形町近江語齋本大坂町肥前太夫橘町さつま小太夫富澤町式部太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乘物町對馬五郎右衛門とあり)延寶九年堺町の古圖に北側中村芝居の西隣土佐椽虎之助あり同南側に和泉太夫とさつま小太夫並びてあり(土佐は虎之助といへども幕の紋は龍を付たりと見えて蝶々子が點の【前句付】「押つおされつ／＼土佐が幕いはゞ虎屋を猜む龍とあり虎屋はさつま三郎兵衛座をいふか永閑は虎屋源太夫が弟子なりとぞ【世事談】に淨雲が弟子丹後太夫長門太夫丹波太夫源太夫の四人あり是を其頃淨雲が四天王といふといへり丹後太夫は名を何といひしか【洞房語園】に慶安の頃江戸町二丁めに傾城屋甚之丞といふ三絃

中の文字金粉にてじやうるり内記と記す内記といふ浄るり女太夫の名ものに見えずたゞむゑもん左内よしたか抔が内なるべし外記に對へたる名と聞ゆ蒂の紋は丸内に三枚笹と又一つ花おもだかなり

○其角が【焦尾琴】に予童謡歌舞のいにしへを思ふに明暦年中の双紙に登り八島下り八島といふはやりかなること𪜈も十二段に分たるあり六字南無右衛門正本と奥書し侍るぐそ數奇ものゝ名にふれたる雅なふべけれといへるをみれば浄るり板本は旨明暦已後出來しにやに思ひしに柳亭子に近ごろ京師に行たる人のもて皈りて贈りたる由にて小大の浄るり本あり山城國住人六字南無右衛門正本寛永十六年正月吉日八島道行一段目と端にしるして一冊に四段あり三冊にて十二段なりわくの内竪五寸貳分横三十七分文字十四行にて間々に半丁づゝ繪あり末に二條通御幸町西へ入町上るりや喜右衛門開之とありこれつるや喜右衛門なり此家あるによりて此處をつるや町と云となむ【焦尾琴】にいへる上り八島下り八島即これなり寛永より板行あるを明暦を古しと思へるは寛文頃にはもはや古板稀なりしにや其角は寛文中生れたり

とさ浄るり

○土佐浄るり六段物板行は大江山酒呑童子、風流和田酒宴、名古屋山三郎鹽屋文正、現在松風、大職冠二度玉取、新撰紅葉狩、楠湊川、色小町、光源氏袖鑑、津の國難波物語、源氏十二段、當世遊覽、融大臣、頼朝遊覽揃、新道成寺、定家、土佐日記、一の谷八島、和國女眉間尺、中將姫、三世二河白道、大塔宮熊野落、小野道風、遊女源氏全盛鏡、蝉丸、周防内侍美人櫻、源氏花鳥大全、京四條於國歌舞妓殿飾、なにはの鑑、萬歳頼政、博多講左衛門、官爾洛陽壽、蓬萊藏氏、源氏六條通、同續、源氏柏木右衛門、古今集、秦平當三世往來以上三十七番なりこれらの正本往々あり寛永五戊子初秋土佐少掾橘正勝印小傳馬町三丁目木下甚右衛門刊とあるもあり

土佐外記

右土佐名乘延寶天和のころも同外記は薩摩外記藤原直勝又薩摩掾外記藤原直政としるしたるもあり

薩摩外記

東山三幅對と云ふ六段にもあり古浄るりみな十六段なり正德頃の【諸伺付】に「早い

京都に昔上るりはやらん寛文年中に江戸より虎や源太夫上京有てより淨るり繁昌し定芝居も出來たりといへり宮内がこと嘉太夫の條にいふを併見べし【外題年鑑】に伊勢島宮内淨るりも江戸の大薩摩などゝ同前に五段續の外題を聞ずといへるはいかゞ大薩摩六段物正本を見しに和泉酒盛天下一さつま太夫二條通正本屋九兵衛板寛文四年正月と有○慶安二年丑三月晦日踊子役者の類何方より呼るゝともあんだにのせ中間敷手形の内堺町上るりさつま同七郎左衛門同外記同源太夫同五郎右衛門同茂兵衛とあり)

喜太夫

中に喜太夫といふもの上總椽になり太平記をかたる(同書に又云六挽町のかたへ行たれば喜太夫が淨るり其外色々とも記せればこれ江戸のことをいふとしらる【古郷歸江戸土産】にてはそのかみ芝居町にて座をはりかたる其後中橋へ移りぬ其頃は大さつま小さつま四郎與吉七郎左衛門とてかたる中ごろ

虎や

虎や源太夫油屋茂兵衛島屋次郎吉南北喜太夫抔といふ太夫有といへり喜太夫はこの南北喜太夫なる歟【四條河原芝居改帳】に淨るり虎や喜太夫明暦四年七月十三日口宣頂戴仕虎や上總椽と申候上總病死仕悴五郎兵衛名代相續之儀奉願寶永六丑年七月二十九日虎や喜太夫と名代御赦免被成候また口宣案に明暦四年七月十三日宣旨藤原正信宜任上總目と見え寛文五年板【京雀】(六)天下一上總藤原正信とありてやぐらの幕に虎の紋付たり【雍州府志】に治郎兵衛後に上總介と稱すといへるは恐らくはこれをまがへるにや又おもふに伊勢島また此喜太夫は竹本などの淨るりの出たる根元なるべし下にみえたり)その曲節平家とも舞とも謠ともしれぬ島物なりといへり(已上【東海道名所記】なりそのかみの俗語に出所の詳ならぬを島ものといへり唐繪の風のかはりたるを島繪と稱する類なり)

女太夫

○慶長年間の古屛風四條河原の繪に女太夫の上るり芝居有り三絃彈も女にて太夫扇を持て出がたりなり人形つかふ處より一段高し人形は上るり語の目の下にあり人形は戰場の體にて城廓矢倉等の作り物あり人形の足又人形つかひの首手などは見えず芝居の表やぐら下の札黒ぬり椽朱ぬりにて金かなもの

淡路

と改名したるか又は二代めの名にまかひしものか）いふ者後に淡路之丞と受領せし西宮の夷子かきをかたらひ（貞徳が狂歌に住吉や豬にまじはる淡路とてたてる小舞のおもしろき哉とあるは淡路之丞か事にや【四條河原歌舞妓名代改帳】に淨るり薩摩延寶六年十一月二十八日口宣頂戴仕源之丞所持仕候右さつまと申名代甚太夫と申者へ讓り申度旨正徳二辰年七月十一日攝津守様へ本願候處同二十八日駿河守様御〃所にて願之通御赦免被成候口宣案に橘常信宣任薩摩椽延寶六年十一月云々とあり今も淡路に源之丞と云ふ人形座元あるはさつま源之丞とは殊なるかいづれも淡路之丞が後なるべし）四條河原にして鎌田政清が事をかたりて人形をあやつり（舞におまだ有り彼十二段も人間ふりたれば舞の文に節を付て淨るりにかたれり故に貞徳が狂歌に淡路が小舞といへり）その後からの婚あみだのむねわりなといふことをかたりける次に河内左内といふ者たり女にもなむゑもん左門よしたかなどゝて淨るにを

左内

かたりけるを歌舞妓と一同に女はとゞめられぬ（【吉鄉歸江戸土産】に六字南無右衛門といへる女太夫かたりける時十二段はふりてめづらしからずとて舞にまふやしま高だち曾我などを節ふしにかたりける故淨るりに八島高だちをかたるといひておのづから其名になりたり夫より左内宮内などいふ太夫打續いて四條かはらにて語りける故にかはらぶしとて座頭よりはいやしめけるとかや【人倫訓蒙圖彙】に人形の首を左右にはたらかすは宮内左内よりはしまるといへり）ちかき頃江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合いろ〳〵めづらしき操をいたしけるほどなく宮内は死けり左内もなくなり今はその子とも打つゞきて操をいたしめん〳〵受領してかたり續き（宮内は伊勢島といふ正徳三年【四條河原芝居名代改帳】に上るり伊勢島佐太夫古來より伊勢島宮内と申淨るり名代御免所持仕罷申候今江宗壽と申す者より佐太夫讓受申度旨奉願元祿八亥年十一月十一日御赦免被成只今伊勢島佐太夫と申候◯近き頃といへるは承應明曆のころをいふなるべし【竹豐故事】には宮内は虎や源太夫が弟子なり又云

鳥とはたつもたゝれずゐるもゐられぬとの仰かやとあるは宗鑑が【犬筑波集】にゐるもゐられずたつもたゝれず羽ぬけ鳥弦なき弓におどろきてと云るにおなじきは何れよりとりたるかと疑はしき)【守武千句】にいとゝだに座頭まがひの杖つき乃淨るりかたれともし火のもと今宵はや時はうし若ふけはてゝ天文九年にかくつらねたり又【宗長日記】享祿四年九月十三夜月見の條旅宿にて小座頭あるに上るりをうたはせて酒もりする事あり又猿樂狂言【昆布賣】に上るりふしに賣れといふこともみえたりされば其始普通の說はいたく誤れりまたその物語の內枕もんだうの處云々羽ぬけ鳥の謎は連歌のかたもとなるべし其故は【犬筑波】はすべて古きも新しきもかき集めたる物なればいと古きも有と知べし此物語藥師の十二神によりて十二段とするにはあらず平家物語十二卷に倣へるものなり淨るりを語ること專ら行はれしは了意が說を正しとせむか【東海道名所記】に淨璃瑠はその頃京の次郎兵衛とかや【その頃とは文祿より寬永の間なるべし【江戶惣鹿子】には今の薩摩三郎兵衛四代さきの外記といひしもの琵琶法師瀧野檢校より是をならひて西のみやのくわいらいしをかたらひて人形に能をさせて一日に五番づゝしけるに淨雲といひしもの外記が座に入一段ヅヽあひの狂言の如くにかたりければ聞人かへつて能より面白くおもへり自ら能は人よせになりて淨るりをほんとせり外記がなかれば今の土佐なり淨雲が末は伊勢大椽なりとかやとありて其末當時座のなき太夫の內りうかん町江戶次郎右衛門と有はいせの大椽か(淨雲外記か座に入といひし此說誤なるべし)【雍州府志】に及慶長監物某井次郎兵衛某招攝州西宮之傀儡師相共經營之云々河內介是淨璃瑠太夫受領之始也次郎兵衛後稱上總介自玆左內宮內相續盛行とあり河內介といへるは誰なる歟不分明なる書さまなりもし河內左內か事なるか按るに【口宣案】に慶長十八年正月十五日藤原吉次宣任河內目とある是にや【世事談】には正保の頃さつま太夫次郎右衛門といふ江戶上るりの祖なり法躰して淨雲といふ其子を又薩摩太夫次郎右衛門と(次郎兵衛後に次郎右衛門)

あり歌祭文には女中をなかしな云々寶永五年板本【伽羅女】に涼うた祭文あり其圖一人三絃ひき一人錫杖ふりて唄ふさまをかきたり世の風説はやりごとなどを作りて唄ふことゝ見えて【入子枕】おそめ久松情死の條其頃狄野八重桐が初狂言に仕くみ世にあはれを追善の歌祭文に年は二八のほそ眉ときくち思ひの種油云々また【娘容儀】に瓦橋とや油やのひとり娘のおそめとて云々開帳ばの歌さいもん【松落葉】加賀椽上るり【四條川原涼八景】神はうけずや色祭文揃ひきよめ奉る色のさかりはあづまなる八百屋のむすめお七こそ戀ぢのやみのくらがりによしなき事をし出して云々これらを合してみれば説經また〳〵三くさに分れたり八百屋お七戀の白玉といふ歌祭文正本結城重太夫直傳ワキ結城伊賀太夫三絃稲木八百市柏木儀泉末に元祖結城石見椽藤原一角結城重太夫直傳（印章保高）天明四年甲辰初春校合作者松山堂計右正本所江戸本芝三丁目清水治兵衛とあり桐の紋をつけたり

色祭文

淨瑠璃（薩摩　淡路　女太夫　左内宮内　喜太夫（虎屋）　土佐外記　半太夫　河東　角太夫
一中文彌　宮古路（常磐津）　新内　宮園　嘉太夫　義太夫　豊竹　肥前
あやつり　小平太　飛彈　おやま　のろま　出づかひ　辰松　淨るり作者

淨瑠璃

淨瑠璃は平家をとり説經を學びて作れるものとみゆ世に傳ていふ信長公の侍女小野お通といへるものゝ作りたる十二段の物語に始れり（【筆のすさひ】に小野おつう母は室町松本町に住せし人なりおつうが女は眞田河内守といへる人の妾となりて信州松代へゆく後におつうを手元にて孝養したしとて迎ひの人を登しおつうを松代へ引とるおつう松代へ下る路にて姥捨山の近きあたりを通り姥捨の山にはいらじ名を聞て車を返す人もこそあれとよめり此事の始末詳に記せしもの松代の長國寺にあり河内守といへるは眞田伊豆守の實弟にて七千石を分ちて部屋ずみのよしなりと有り此おつうなるべし）さて彼十二段の作者このお通ならんには時代かなはず（この物語の内【枕もんだう】の處つるなきゆみにはぬけ

○說經世にすたれて久しくなりしも山伏の祭文かたりこれを傳てありしが寛政中小松大けうみのわ大けうとて二人の山伏同名にてよくこれをかたれり故にその出處住所を冠らせ呼で分てりそれらに次で俗人にて語るもの江戸の端々にひとりふたりすべて五六輩にすぎずもとよりなぐさみにして職業にあらずそれ故師弟と云こともなく只兄弟ぶんなど云がごとしなりものは錫杖とさゝやかなるほら介にて合するなりこれを弄ぶもの無賴の風俗にて大廣袖ほそ帶新しき手拭をみえとなす只江戸のはしばしに行はれし故近在田舍に庚申十夜などにはまねがるれば江戸中五六人のものども伴ひ合せて行てかたることにてありし其頃本所四ツ目に米屋にて何と云ひしか米千と呼ぶものこれをこのみかたりしが隣家盲人のあんまとりこれが語るをきゝて三絃に合ふべしと工夫してこれを合てかたるそのころいまだ人集する家後(ノチ)によせと呼處なかりし故水茶屋の二階などかりてかたりける初めは他の者ども此ごろ米千が三線に合せてかたると云をろがましきことなり逢ばなぶりてくれんなどそしり合へりしがそれらも中にはめづらしく思ひて其ふし學ぶ者もやうやう出來たり錫杖にて語りしはゆくり數多く定まらざりしを三線にては定まりきまりよくなれり盲人は京屋五鶴と名のり米千は若太夫となりぬ又久米といへる座頭京屋が弟子となりよくひきたり若太夫門人あまた出來ぬ島太夫千賀太夫音羽太夫榮喜太夫染太夫等なり島太夫は松島町に住で堺町芝居へ立入者なりしかば若大夫をすゝめ薩摩座の名題を以て說經芝居を興行せしは享和のころのことなりき若太夫は文化八年沒す今の若太夫は千賀太夫なり是に依て今にさつま某太夫といふもをかし

門だんぎ

○又門だんぎあり【訓蒙圖彙】に法師の柄長き傘をひらきてかたげたるなり注に片言まじりの法文一から十不淨の說法也うけゞたき法師の身となり法によつて地獄に落るはさてもあさましき境界かな(右にいへる門說經そのかみとはいたくかはれるものなり)【本朝文鑑】(渡吾仲)凉賦に辻談義あり放下師

江戸祭文

十末社百二十末社なとゝいふ事更になきこととそれさへあるを江戸祭文といふは白ころにして力身を第一として歌浄るりのせすといふ事なしかゝる事を錫杖にのするはさてもかなしゝ又この草子に図した

門説経

る門説経はさゝら胡琴三絃を三人にて弾ありく體なり其注に小弓引伊勢會山(アイノ)より出この所ふし一風あり物もらいに種なしといへども小弓引さゝら摺はわきて下品の一風なりなどいへそは何の分別(ワイダメ)にか

仙台浄るり

ゝ仙臺浄るり奥浄るりと云ふ江戸馬喰町絵草子屋西村屋與八郎が許にあみだの胸割きりかね竹生熊谷の類の古浄るり六十種元祿寶永のころ再刻したるすり板傳はりをり今に至るまで行作本にしたてゝ奥州へ下す故仙臺浄るりと稱へ又は正本と云ふ彼地には今もこれらの浄るりを語る者あり三線はなく扇にて拍子をとるのみなりとぞ寛文年間【八佛枕】と云ふ集に（調和）奥浄るり絹絶の橋や古扇また元祿三年刻鳳雲が【其袋】に（鋤立）みちのくの三絃きけば扇かなかりければ昔より三味線はなかりしなり【あみだの胸割】に天滿八太夫の名ある本あり是説經浄るりの太夫にて【江戸名所記】（寛文二年の刻）堺町の諸に大さつまが芝居に並びたり奥州には此の天滿節の傳はりしなるべしといへるは非なり或説経かたり奥州に行てしばらくこれを興行して有しもの語を聞しに彼所には常盤津ぶし長唄なとは皆あれとも説経かたりなし其所にて音曲などして人を集むるにはまづ座頭の首領黒澤けんげうとやらん云ものゝ許に至り門人の分になりて興行することとなり此者もしかせしに其時座頭も多く居たるが其中の一人浄るりを何やら少し許かたり聞せしが聞にもたへぬものにて其處にはこれをお國上るりと云ふ是御仙臺上るりなり三線に合せかたる又云ふ奥より南部の方には祭文を多くかたると其正本を仙臺にて翻刻して下すと云へり昔上るりすべて扇拍子をとることと説經にかぎらず西村屋が六十種の正本と云は説經のみに非ず土佐上るりなり説經は番數多からぬものなり祭文にはさまざまあり重太夫と云ふものあまた正本を刻せり板元清水屋と云ふ故これをしみつ本と呼ぶ

られ青松葉にてふすべられし額などいへり正徳二年辰二月十八日葺屋町說經座四郎兵衛今度類燒に逢ひ不勝手に付大坂より上るり座手づま人形五郎三郎を差加芝居取立申度旨去十四日御願申上候處今日右願之通被仰付八月四日せつきやう座四郎兵衛山本五郎三郎手づま人形あやつり芝居彌近日取立候段屆來る沾涼が【江戶砂子】又【世事談】等には說經座の事みえず享保の末になりては全く絕へたるにこそされども寶曆十年冠付【風俗陀羅尼】いたはしや浮世のすみに天滿ぶし寬延三年刻【六玉川】(初編)に說經の上手が島に生て居るとあり彼靈巖島なるあづま新四郎脇庄太夫二人の內をいふなるべし生て居るのみにて其伎世に廢れ語ることなどもなかりしとしらる又かの淨るりにかたる小栗の事は【鎌倉大双紙】に見えて誰もしれり蓮谷が由良湊にて「上るりに泣ところなり濱千鳥この三莊太夫の事は【志保之理】に奥州岩城山權現は津輕弘前の南にあり社領四百石供僧百澤寺祭神安壽女(ヒメ)なり厨子王が姉安壽は白河院の永保二年正月十六日丹後由良庄にて殞命厨子王後に姉の靈を祭る元祿年中重修とみえたり(恐らくは此山の祭神を安壽女とするは俗傳なるべしおもふに安壽女が事は古き作り物語にや其名三庄は山莊にて下屋しきなり安壽は延壽(アン)にて禪家に行堂といふか【撮壤集】に禪院部延壽堂行堂とありて是をあんじゆと訓り厨子はもとより戶棚にて又居所にもいへり

○其積が【咲分五人媳】(享保二十年序文)往昔日暮小大夫が水調子の三味線に乘せ歌念佛の林磐が鉦に合せて語りたる五說經の中の其一ツ聽人淚に咽ひたる山椒大夫が安壽對王の兄弟に邪見にあたりし物語を近き比浪花にて當風に改め節をこめて竹本が淨るりに語し趣向を元にして云々

かるかや

○かるかやは謠曲外百番の內に刈萱ありまたおなじ中に千手寺といふは安壽がことを作れるなるべし

祭文　歌祭文

今これらの事を門戶に立てかたるもの來る是を祭文と呼ぶ按るに【松の葉】にさいもんあり是歌祭文なり【訓蒙圖彙】に祭文は山伏の所作祭文とていふを聞は神道か佛道か其本據さだかならず伊勢兩宮に四

りしなるべし【櫻陰比事】むかし都の町に時花念佛さがの安樂房とて聲細長う節を付てつねとは格別世界の人心後世の實となりぬ折ふし十夜なれば佛俗共に扣がねあけがた迄ひゞき渡り云々【人倫訓蒙圖彙】夫念佛は萬德圓滿の佛號なり然るをそれに節をつけてうたふべきやうはなけれども末世愚鈍の者をみち引せめて耳になりともふれさすべきとの權者の方便ならんそれを猥褻ていろ〳〵の唱歌を作り是をかねに合てはやし淨るり說敎のせずと云ことゝなし末世法滅の表しなり哀べしなげくべし

歌說經

○又歌せつきやうともいへるは【一代男】（二）江尻宿の遊にたれとはしらず顔かくしてつれ節に歌說經あはれに聞ゆとあり柳亭子云攝州大坂說經與七郎正本山莊大夫のもぢりだに年號なけれども寛永八年とある說經かるかやと同じさまの本なり與七郎は代々名をつぎて近く【難波丸】にも見えたり云に八太夫が座は【江戸惣鹿子】に說經座堺町天滿太夫 脇 權太夫市大夫（【江戸圖鑑】には權太夫なし）禰宜島あつま新四郎 脇 庄大夫 堺町 江戸孫四郎 脇 長大夫（元祿二年【江戸圖鑑】には座敷說經江戸孫三郎武藏權太夫とあり此時座はなきにや）とありて次に座のなき大夫をしるして いなば町 村山金大夫 南鍋町 大坂七郎大夫と有り是貞享四年の刊行なりかくさかひ町に二座有しはやはりし事知べし（沾涼が【江戸砂子】には此芝居見えず其頃すたれて座はなくなりしとみゆ）【元祿曾我物語】に十文字薩摩が日暮門盛天滿八大夫がかるかや道心をこゝろならず聞てやる云々其淨るりみな六段にして正本まれ〳〵世に傳はるものあり天滿八大夫が正本の阿彌陀の胸割といふものゝ奧書右者天滿八太夫直之正本を以うつし令開板者也（大傳馬町三丁目）鱗形屋孫兵衛とあり佐渡七太夫は正本種々傳はれり小栗判官熊谷三作太夫正田小太郎法藏比丘伏見常盤とすいでん【みな六段ものなり】右のとすいでんといへるものゝ初めに享保三戊戌初春（丸の内につたの紋）佐渡七太夫豊孝と記せり【風俗文選】許六が鎌倉賦に小栗の說經は横山が馬盗を語る【丹前能】にわしくまたかにさも似たりとふるい小栗が說經てるの前が長からばにりんきし

云々この淸らなること言葉にも述かたし彼京の鉦たゝき盂蘭盆の頃勸進にまはりしが朝日かげ御門にうつろひしに是に氣をとられて詠めけるに實に秋の日のならひにてはや暮て驚き願以此功德容袋かたげて都にかへるをみて人申ならはして日暮坊と其末々今に名高しとあるはいかゞあらん（恐らくは彼日暮の門と日ぐらしの歌念佛とは事ことなるをかくいへるは西鶴が滑稽なるべし今も童謡に鴉は熊野のかねたゝき一日扣いて米一升といえる是鉦たゝきが日暮の義にやあらむ）【竹豐故事】京都に二十日は淨るりはやらず說經與八郎歌念佛日暮林淸同弟子林故林達等を泒べり

○歌念佛【釋氏要覽】（上）昔陳思王曹子、建遊魚山、忽聞空中梵天音、淸響哀婉、其音動心、獨聞良久、乃摸其節、爲梵唄、撰文製音、傳爲後式、梵音兹爲始也、此全文は【法苑珠林】（四十九）に出づ【笈埃隨筆】（九）洛北大原の來迎院を魚山と號すること唐土天台山の支山に大原魚山と稱する地あり陳思王此山に在て瀧水自ら律呂を調し水音に曲譜を含るを沈思し始めて梵唄聲明を創造す慈覺大師入唐傳來し山門に傳へ給ふ良惠上人これを中興し當寺を開基の後今に嗣て大原は聲明の本山たり故に地名も大原と云といへり但し慈覺大師の傳へしは引聲あみだ經なり引聲阿彌陀經跋に云、引聲阿彌陀經者、在昔慈覺大師、於五臺山傳此曲節、云々ありこれを傳てより今の聲明は始れり其流種々分るそのこと【魚山蠆芥集】に見ゆ此こと諸書を引て友人山崎しるせる物あり【徒然草】六時禮讃は法然上人の弟子安樂といひける僧經文を集めて作てつとめにしけり其後大秦善觀房と云僧ふしはかせを定て聲明になせり一念の念佛の最初なり後嵯峨院の御代より始まれり【圓光大師傳】四十八人の弟子に法性寺の空あみだ佛はいづれの處の人と云ことをしらず常に四十八人の能聲をとゝのへて一日七日の念佛を勤行す所々の道場至らさる處なし念佛の時の終ごとには上略娑婆に念佛つとむれば淨土に蓮ぞ生ずなる云々願はゞ必生しなむゆめ〳〵怠ることなかれ光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とぞとなへられける念佛の間に文讃をいろへ調することみなもと此人より始れりこれらの流れ後世歌念佛となれりさて和讃をうたひ說經とな

てうすとて云々せみ聲にしぼり出しよみゐたれど云々此文よりこの句は作れるなり）

○【作楽獨語】に説經といふものはもと法師の内に説經といふ者有て法師の説法に因縁物語する類なりその物語は僞説にまかせたしかならぬも多けれども詞はむかしのことばにていやしき俗語を交へたる中にやさしき事もすくなからず其上幸若の舞の詞の如くむかしより定れる數ありていつも古き事のみをかたりて今世の新らしき事を作り出さず其聲も唯かなしき聲のみなれば婦女是を聞てはそゞろに泪を流し泣ばかりにて淨るりの如き聲にはあらずさみせん有てよりこのかたはさみせんを合する故に鉦鼓を打たるよりも少しうきたつやうなれ共甚しき淫聲にはあらずいはゞあはれに傷るといふ聲なり淨るりにくらべてはすこし勝れるかたならん【日宜受領】（是は官府のひかへ書とぞ）の寫しをみしに説經者山緒關清水大明神蟬丸宮（別當近松寺）山城國愛宕郡日暮小大夫（名跡唯重）右以唯重依願總日向浦大夫號仍如件正徳二壬辰九月廿八日　説教者　日暮小大夫唯重、正瑞講師、淨術講師、淨榮講師また同ころ【四條河原淨瑠璃名代改帳】に　説教　日暮小大夫有小大夫と申名代古來より蒙御免所持仕候處三拾六年已前親より讓り受用繼罷在候とあり（これ後のものながら小大夫は古き名代としらる）【京雀】（六）日暮小大夫がやぐらに抱き柄の紋を付たり又日暮八大夫といふ名代ありこれもかの【名代改帳】に同じ文書にしるせり【日宜受領】にも日暮八大夫名跡本久とみえたり【歌舞妓事始】に説經讃語名代とありて日暮八大夫有八大夫名代前々より免許云々日暮小大夫今はなし又云慶長のころより説經讃語與七郎七太夫といふものありて後名代御免にて興行すといへり（大坂七郎大夫といふがあるは與七郎か七大夫が末か後に見えたり）

歌念佛

○もと歌念佛を日暮と稱す西鶴が【一代男】（三）西の宮のえびすまはし日ぐらしの歌念佛といへり又日暮といふよし註【大代減】にむかし代見の御上代の時諸大名の御成門軒をたちらべて輝き金銀珠玉を鏤め

法事

○鉢扣さゝら摺は別に條あり見合すべし説經者も又さゝらをすりたり【和訓栞】に説經は【藝苑供奉志】にみゆ（筠庭按るに【古杭夢遊錄】に説話に四家あり其内に説經は佛書を演説するをいふとあり演義を唱するなり）もと法師の中に妻を帶たる説經師と云ものありて佛法の貴き事どもを詞につゞり世の無常なる昔物語をのべてふしをつけうたひし元祿頃の事なりとぞ安居院の澄憲三井の定圓などを祖とすといへるはいたく誤れり（始め説經師とて定りしものなかりしに一業を立るもの出來たる後和讃の如きうたひものとなりさゝらに合せたりそのはて浄るりと變れり以上三變なり）【醒睡笑】に途中にてひとりの姥やすらひものあはれさうに泣ゐたり行逢ふたるもの何事のかなしみありてそちは涙にむせぶぞやといひければされば とよあれへ行男をみればかちんのかみしもをつけ傘をうちかたげてふところにこゝらのやうなるものゝ見えたるは疑ひもなき説教さきなりあの人のむねの内にいかほどあはれにしゆせうなる事のあらふずよと思ひやられて袂をしぼると（かちんの十徳に大なる紋つけたるを着て上帶したるなど古畫にみえたれどもかちんの上下着たるはめづらし又説經ときともいへりみな長柄の傘をさし人の聚る路傍に立て居るなり）

○俳諧には【守武千句】さゝらをや若紫のすりころも袖うちしほれとくはしやうき　う【犬子集】聞せつ經のさゝら上手や（貞德）自然居士出舟を早く追かけて【半井卜養千句】からかさをもたで立よる木の下に説經ときも花やみるらん【鷹筑波集】傘を物ずきにしも拵へて赤ゑぼしきつゝとくはせつ經【正章千句】秋風のさゝらは何と摺ぬらん門説經の聲ぞかれたる（門立して物乞ふもあり）【秀吟獨吟】せつきやうを聞ばかならず泪落棧敷の上であくびをぞする【五元集】竹のせみさゝらにしぼる時もあり（さゝらするにしぼるといふ手あるか但し聲をしぼるといふにや【枕双紙】すさまじき物の條けん者の物のけ

經などして世わたるたつきともせよといひければをしへのまゝに説經師にならんために先馬に乘ならひけり輿車もたぬ身の導師に請せられむ時馬などむかへにおこせたらんにもゝじりにて落なんは心うかるべしといへる事を載たりこれらは專ら説經を業とするものなり諸抄共に註釋なきはいかにぞや是もとうたひものにあらずうたひものとなりぬるは和讃より起れり【志保之理】に諸の講式より和讃は起りて後世極樂院の鉢扣が和讃變じて説經といふうたひものに落丹波金やき地藏善光寺かるやき堂の故事本緣など俗傳を作り淨るりとなりし（此間にお通が事をいひて）矢作寺藥師の本緣を作りし以來戰場のさま佛神の靈をさま〴〵年を追て作りし近世の如きはひたすらたはれてよしなし事を作りて昔のすがたなく中ごろの體に異なり況や佛法は跡なくなりしといへりされども此説淨るり牛若の事の作者をば普通の説の如く心得たるは誤なり（此事後にいふべし）其余はさもあるべし今も何くれの本地といふかな書本のあるはみな説經師のかたりし物なるべしよりて思ふに淨るりはもと藥師佛の本地とかたり後に牛若の事は作り出たる物ならむ説經より淨るり起りたる事は疑なし【橘窓自語】にも上るりと云ものは説經より出しものなるべしと云り余思ふにさはかりにも非ず平家をも取しものなり後の説經はまた上るりをとれるか

説經淨るり

鉢扣の歌

○鉢扣の歌は空也の教へたる法語となむ諸法實相と聞ときは峯のあらしも法の聲萬法一如とくわんすればはまの蝶蛾も佛なり佛は三世にましませどかゝるひぐわんはたのみなしひくわんきやうしゆの釋迦だにもねはんの雲にかくれますましてや凡夫の身にていかで無常をのがるべき無常眼の前にきて火宅を出よとすゝむれど名利の心つよければ聞て驚く人もなし人は男女にかはれとも赤白二ツに分られて生ずるときもたゞひとり死するやみちに友もなし東岱前後の夕煙北邙朝暮の草の露おくれ先立世のならひ只何事も夢ぞかしとなふれは佛も我もなかりけり南むあみだ佛なむあみだぶつくらや上人の鉢

○【耳袋】といふ物に寶暦頃迄（存命のかぶき役者海老藏長十郎羽左衛門等或屋敷方へ呼れ其藝を望みけるに羽左衛門家に四ツ竹八ツ拍子といへることあり三絃三挺にて羽左衛門麻上下にて扇を二本持て藝をなしける面白きことの由勿論けやけきことにてはなし仕舞をまひ候やうなる趣にて其拍子はえもいはれずとなり彼八ツ鉦の拍子といへる是にや

寒聲

○寒聲（カンゴヱ）正保三年神谷季貞が【江戸町名俳諧】徳元判「寒の中は手足にきるゝひゞや町出で聲つかふ橋本の町【俳諧懷子】寒ける月に聲つかふ人夜軍を引る勢の下知をして【諸艶大鑑】（五）厚ひんの若き男松はやしのためにとて寒聲をつかふ【好色つれ〳〵草】年のくれ果て家毎に寒びきするころぞまたなくあはれにひもじさうな聲にてきく人もなきすかゞきに手もこゝへ云々古き【前句集】立にけるかな〳〵寒聲や橋のつまがき二十九夜【六玉川】（初篇）金にする聲はあはれな寒の內又入もせぬ聲もよくなる寒念佛

說經　淨るり　祭文　門說經　門談議

說經は說法におなしもと佛事を供養するに法師を招て聽聞するものなり【宇治拾遺物語】に山の大衆日吉の二宮にて法華經を供養しける導師に仲胤僧都をしやうしたりけり說法えもいはずしてはてかたに地主權現の申せとさふらふはとて此經難持若暫時者我卽歡喜諸佛亦然といふ文をうちあげて誦（ジユ）して諸佛といふ處を地主權現の申せとは我卽歡喜諸神亦然といひたりければそこら集りたる大衆異口同音にあめきてあふきひらきつかひたりけり（此間にある僧そのまねをして講席に其句を誦しゝこと有）云々仲胤說法をとりて此ごろの說經師はすれは犬の糞說經といふなりといひけるとあり猶此書にもまた他書にも說經師のことは往々見えたり【枕草子】（二）心ゆく物說經師はかほよきいとまもらへたることそ其說ことの貴さも覺ゆれ【今昔物語】（二十八）敎圓座主物可笑く云て人咲はする說經敎化をなし云々說經師とて一業たつる者の初は詳ならず【徒然草】に或者子を法師になして學問して因果の理をもしり說

羯鼓

彌ッの義にて必しも定りたる數にあらずすべて物のかさなることをいふ八撥は羯鼓をうつに兩頭を擊ゆゑに名つくるなり【杜氏通典】に羯鼓正如漆桶、兩頭俱擊、以出羯中、故號羯鼓、亦謂之兩杖鼓、とあり兩杖は即八撥なり【唐書禮樂志】に帝又好羯鼓云々常稱、羯鼓八音之領袖、諸樂不可方也、とみゆ帝は玄宗なり開元二十四年に胡部を堂上に升せてこの伎羯の音をいみじくもてはやせり故に大食の樂曲に凉州甘州伊州の名あるはみな邊地になすらへたるものにてそれらの胡舞ともに羯鼓を用ひしなり八撥を打たびの數と心得るものは非なり【安齋隨筆】に小笠原刑部大輔信綱の【乘馬方事】といふ書に手綱を長く取候て肘の後へまはるをば八ばちたつなと云てわろき事に申す云々八鉢を八からかねともいふものもらひの童のすることとなりと有り八鉢と文字にて書たるより安齋の說なるべし八からかねを八鉢といふことと見及ばず羯鼓を頸にかけ胸につけて擊ときは肘後へ廻るべきなりされば是も八ツ手綱と心得べし八撥は右の如く羯鼓の兩杖なるを後は大鼓うつにもいへるは曲打することなり（本意にあらず）【難波集】八ばちをうちて踊れや十六夜また十六になる袖のやさしさ八撥を二度までうてる子供達【俳諧懷子】（十）時しもはりすほろゝうつ聲つれ〳〵の春日なくさむ八ばちに（玖也）【古今夷曲集】に八撥をうつをみて（二笑）　橋ならぬ蛛手の曲の八ばちや大鼓うつゝに世をわたるかな

八からかね

○八からかねは【訓蒙圖彙】に八打鐘これも歌念佛のたぐひなりもとは念佛中て一心不亂に踊けるをいつの頃にか只一筋に廻りはじめしより口に唱る念佛をも略し無二無三に巡るを手がらにするなりみるにくるしき世わたりなり其圖は若衆の兜鉦に緒つけたるを多く首にかけ打鳴しつゝ巡るさまなり余が幼き頃の古板の道中雙六には此圖ありき前句付に（早いことかな〳〵）ひろがれば車なりやからかね（【芝居役者技藝古實】に市村羽左衛門（九代め）所作事の妙をいひて此外八ツ鉦の拍子事ありといへり芝居にても學びつるに其頃行はれしを知るべし）

内に入て鳴物八人の役をひとりして間を合せける云々（五雜俎（十二）京師有瞽者、善琵琶、能作百般聲音、匿屏幃後作之、初作老嫗喚伎者聲、繼作伎者稱病不出、往復數四詐話勃谿、逐至擲器破鉢、大小紛紜或詈或哭或勸或助、坐客驚駭欲散、徐撤屏風、則一瞽者、把一琵琶而已、佗無一物也、又有以一人而歌曲擊皷鈸拍板鏡鐃、合五六器者、不但手能擊、足亦能擊、此亦絕世之伎、惜乎但爲玩弄之具、非知音者也、また【虞初新志】にも八人藝のことあり其文長ければ記さず又蘭書の小冊繪草子の如きものを（書名しらず）見し事あり其内に放下師などにや腹に皷をかけ胸に笛あり頭上にも鳴器あり足のくびすの上に小き鉦を付片足には撥を付たり歩行ながら打ならすさまを畫けりいづこにも似たる事有り寛文年中はやり物を種々いひたる短歌に八人座頭のみせ物に仁王之介が大力と云ことあり此洒樂が事なるべし

○【述異記】（三）揚州郭猫兒善口技とありて於席石設圍屏不置燈燭郭坐屏後主客靜聽この下八人藝の如き事を語る其中犬のさま〳〵嗥るときの鳴聲鷄の聲猪の聲さま〳〵の物の聲などをなす前句付廣原海（一倍になる〳〵）身すぎ變や八人藝も手足四ツ【江戸名物鑑】に（八人藝）月こよひ將門にげよ藝座頭このわざ其後は聞えたる者なかりしが天明の末に川島歌命と云ものあり（其弟子歌遊なり）寛政の頃より赤坂に川島歌遊といふもの巧手にて此伎をするものみな是を學ぶ文化の初にや此輩このわざの祖長崎聖理と云ものゝ百年忌を吊ひしことあり聖理が事いまだ外に所見なし

○八人藝は座頭はみな川島流で歌柳歌曉などいふ徒あまたあり文化の末のころ牛島の者にて桶を作りて業とせしものとか八人藝をよくして牛島登山と名のりてこれを興行せしかば彼盲人の方よりこれを尤めてさせまじき由をいへりしが登山はそのかみ花房夫山といへるものより傳ふることを云て其儘に興行することとなりぬ夫山瞽者にはあらず登山は一眼なり

○八撥は【撮壤集】に八撥毬打玉樂とみえまた【尺素往來】八撥曲舞(クセマヒ)などみゆ八(ヤツ)は數の八あるにはあらず

之、與今美人曲無異者、律法同管也、其知者珠妙如此、景舒進士及第、終於州縣官、今之美人操盛行於江吳間、人亦莫知其如何者爲吳音、同書（六）予友人家有琵琶、置之虚室、以管色奏雙調、琵琶弦輒有聲、應之、奏他調則不應、寶之以爲異物、殊不知此乃常理、二十八調但有聲同者即應、若偏二十八調而不應、則是逸調聲也、云々【北窻瑣談】に我友源子和が家に常に用る茶碗あり管を吹て双調に至れば茶碗おのづから鳴る予和が父長昌此茶碗を双調双調と呼し

○【湖壖雜記】棋盤山麓下に一池石壁高廣、云是龍湫、游其間者、小語小應疾語疾應、譁然叫笑、答響滿野、人或曳履而過、中亦若有曳履者、躡其後也、孤坐其間者、毎生疑惧、斯境亦佳、然以湖上可遊之地甚繁、賤往々不及、

○【笈埃隨筆】（十二）勢州あふむ石の條嘉栗云智恩院古門前細川侯のやしきの邊りより西に向ひて呼べばしばらくありて答ふ是ははじめのひゞきは喰ちがひの壁にあたりてこなたの聲はなたぬ内に答へそのひゞき鐘手西側の家にあたりて答ゆるなり夫故しばらくの間あるゆゑにはつきりと聞ゆあふむが辻ともいはんか又南都東大寺のこだま塚も門一重越て本堂にひゞく故かくの如く同じ又江州八幡の人ありていひけるは長命寺に八幡より行途中に山陰を通れば人の聲よくひびく處あり作事に通ふ路なれば農夫の通ふを惜み畑に垣ゆひて人を入しめず

八人藝
三絃曲ひき

八人藝　三絃曲ひき　八挺　鶏皷　八からかね

三線の曲ひきは江戸に鳥羽屋三右衛門といひし者三線にて種々の曲を盡す左の手に撥を持そへ太鼓をならし右の手に撞木をもちそへふせがねをならし三絃の曲を彈二人してはやすが如く是を分ちて曲を盡せりと【歌舞伎事始】にいへりこれ今八人藝といふ者のするわざなり八人藝の始りは【一代女】貞享三年）寛活年中駿河國阿部川のほとりより滑稽といへる座頭江戸にくだり座敷がたの御慰に蒔綾の

の源なる鸚鵡石を觀たるよしを記して云ふ其岩の上に居て言へばかの石も亦人の言ふごとく對ふ話をうたひ鼓を打三絃など彈ずれば石も亦それ〴〵の聲をなすさゝやけばさゝやく聲をなすわめけばわめく音をなす屛風障子のあなたにて人の言ふがごとし一行の内に笛を携て來る人あり試にふきけれどもかつて對へず不審なる事なり云々又奥田氏より言來る志州の海邊安樂島と云所ありその處に又一ツの

響石

響石ありて鸚鵡石のごとし其地海畔にて風景尤宜しき所にて同言石と云となんあり（【本朝俗諺志】新鸚鵡石志州答志郡磯部にあり長三十間ばかりにして大巖なり音曲管絃ひゞき答ふること一の瀨のあふむ石にかはらず近年きゝ出せしことなりといへり）予も先年磯部村伊雜宮に詣し道に鸚鵡石を一覽したり小き出茶屋一軒あり旅人爰に休らへば其婦三絃を彈て響を聞しむ石よりも十四五間もはなれて三線を彈を聞人は石に近き所に居て聞なりいとめづらしき聞ごとなりき試に石に近くよりて手を拍ものをいふにもよく應ずれども少し隔りたる方應對のあやよく分れてよし土人いふ物の音何にても移らぬはなし唯金の聲のみ對へずとかたれり此石山を和合山といふとなんこの石より後人の付たる名にやし

山びこ

らず（此ひびき移ること井戸をのぞきて物をいふも同じかるべし山彦といふ是なり【萬葉集】には山響と書たり予ある時濱町山伏井戸といふ處左右屋敷にて路のかぎの手に曲りたる處にて門立のものもらひ二人して三絃彈來るに逢へり其聲屋敷の曲り角に對ふること彼あふむ石のごとし後に人の話を聞に

鸚鵡か辻

京師東山の邊に物の響應する處有り俗にあふむが辻といふとぞ【五雜俎】に靈谷寺有琵琶谷拍手輙鳴作琵琶聲其處の形によりて對る聲も異なるにや

○【夢溪筆談】（五）高郵人桑景舒、性知音、聽百物之聲、悉能占其災福、尤善音律、舊傳有虞美人草、聞人作虞美人草曲、則枝葉皆動、他曲不然、景舒試之、誠如所傳、乃詳其曲聲、曰皆吳音也、他日取琴、試用吳音、製一曲、對草鼓之、枝葉亦動、乃謂之虞美人操、其聲調與虞美人曲全不相近、始末無一聲相似者、而草輙應

の詩に冥々梅雨暗江天、汗浹衣裳失夜眠、商略明朝當少霽、南檐風佩已鏘然、その會注に都下新作築玉貝響如古佩玉行聲琉璃爲備とありかの【圓光大師傳】の古畫の風鈴も是なるべし

音律の妙

○音律に委しきもの種々奇特あり【閑際筆記】に瞽者城松といふものよく尺八を吹瀧に向ひて吹に笛の聲ばかり聞えて瀑の音せず慶長の初ふと人にいふやうけふ風水に異聲あり此里に禍あらんとて愛宕山にのぼりて是を避けるが果して其夜地震つよくして畿内に死る人多かりしとぞ又【塵滴問答】(五)十二

調子を聞て占ふ

徒の調子を聞て占ふ事あり近代も伊勢の望都と云る座頭など此術を得たり又【歌舞伎事始】に元祿中岸野次郎三といふ歌舞伎の三線ひきありまたそれに劣らぬ山本喜市といふものあるとしの秋虫の鳴聲を聞三絃の調子細めてそれに合せて彈ければ忽むしの聲止たり暫くありて虫また鳴出す時調子を高くして引けれどもそれにては虫鳴止ず是より工夫して種々曲節を作れり次郎三は其身芝居に行ずして三絃をならし其日の見物人數多少をしれり鳴神と名付る三絃を秘藏して常に是を以て音律を論じたりといへり（按に鳴神は古近江が作のいかづちなるべし）又寶永頃に岡安の門人にて原武といへるもの（原武太夫を世人原武と稱す）品川に行て三絃を彈けるに常に異なるを怪み高潮の來へき事を知れりとなん【耳袋】に近きころ名人業しらべ賜はりし新九郎いまだ權九郎といひし頃日々鼓を出精しける侘住の老婆毎朝茶を持來るが或時主人のつゞみ上達せりと申を權九郎おかしく思ひ其知れる譯を尋ねければ老婆答るには我鼓をしるべきやうなし先の新九郎の鼓を數年聞けるに朝々煎じける茶釜へ音ひゞき聞えける是まで權九郎打るゝ鼓はその事なかりしが此四五日その音茶釜へひゞきける故さてこそ上達を知侍るといへり年久しく聞なれて自然と微妙に善あしら分るにやと權九郎も感じける

○按るに尺八の瀑布の聲に應じ三絃の鳴虫の聲に應ずる各その調子よく合へる故に水の音虫の聲止むが如くなりしにやこは異なれども[illegible]などには笛の聲金の聲は應ぜずといへり【[illegible]小錄】に伊勢宮川

首爲二孔雀、笙鳴機動、則應而舞、凡燕會之日、此笙一鳴、衆樂皆作、笙止樂亦止、この笙も似たる物なり

しやぎり

○しやぎり今歌舞伎にて打だしの太鼓をしやぎりといふ【吾吟我集】祇園會の歌に精舍には諸行無常となるかねのしやぎりしやぎりにかはる祇園會是歌かねのしやぎりとつゞけたるはかねにもしやきりと云と見えたり又【松の葉】長歌富士詣に兩國川の氣色をいふ所遊さん船がさはぎ集りてしやぎりのをとの(合手)おひやりこひやり〳〵こ云々あるは笛の譜なり同草子端歌部つしま祭「津島まつりにうかれ出て云々しんがらにちやんきりしつきりふなあそび云々このちやんきりと有はしやんきりの誤なるべし皆しもじをいふ文句なればなりしやんぎりは即しや･ぎりなりこれに因ておもふに突拍子を今ちやんぎりといふもしやんぎりの訛言にや猿樂狂言に金鼓の音を學びてしやまう〳〵といへり【松の落葉】あつま上るり(露の前舟路)ふりあをのけば入舟のめあてにたつるみあかしの上のお寺のさいかい寺しやぎり〳〵づでんとゝうつやたいこの音のよさよ云々【歌舞妓事始】(二)小舞唱歌(上の寺)いつもよりけさうつ太鼓の音のよさよ上のお寺か安國寺か云々せきり〳〵ずでんどうとうつたる太このねのよさ(このせきりもしやきりの誤なるべし)【續五元集】しやきりを打てのり出す舟吉原にあたな娘はなかりけり

護花鈴

鳥おとし

○護花鈴などは引板なる子の類にて鳥おどしの具なり其他風鈴は風を知る爲のものにて音を弄ぶ具にはあらず然るに【圓光大師傳】(四十八)上人の弟子法性寺の空あみだ佛は極樂の七重寶樹の風の響をこひ八功德池の波の音を思ひて風鈴を愛してとこしなへにつゝみ持て至る處ごとに必これをかけられけりこれ多念念佛の根本なり云々あり其圖をみるに「薄き板金を」花がたに小く刻みたる物を糸のさきにつなげるを幾筋も集めてさげたり

風鈴

○陸放翁枕上聞風鈴詩に流汗沾衣熱不勝、饑蚊乘勢更縱横、夢回忽覺南風起、時聞錚然一兩聲、また枕上

比丘尼か四ツ竹をうちしことと【一代男】（貞享三年板）耳かしましき四ツ竹小比丘尼が定りての一仆びしやく勸進といふ聲も引きらずはやりふしをうたひ云々ありこれはあや竹を四ツ竹にかへたるなり（古き畫に比丘尼二人むかひて各右の手に竹を持左は空手にて膝を打ところあり【丹前能】（五）伊勢の踊びくにあやをりといへる是なりあや竹は放下の條にいふべし

木琴

○音樂にしやうちやくきんくごとつらねていへるは【玉造小町子壯衰書】に簫笛琴箜篌其音純宜々その內に箜篌はこゝにて用ひさるものなれど唐土の賦の體にかくつらねたるのみ今は出處も定かならぬ鳴器種々あり須磨ごと（一絃なり）蝦夷琴木琴（木の數十四枚板の裏さま／＼に彫てあり板狭きほど其音甲なり【長崎歲時記】に出島の內酒宴には蘭人黑奴笳を吹木琴をうち國風を唄ふことをいへり）オルゴル等なり按るに【樂府雜錄】唐大中初、有調音律官、大興縣丞郭道源、善擊甌、用越甌邢甌十有二以筯擊之、其音調妙於方響、また【事物紺珠】八缶如水琖、凡八盌之桌上擊之、後唐司馬滔作、とあり朱琰【陶說】按擊甌之風盛於唐、其法、甌中用水加減以調宮商也、習於音而聽者能之、甌取質堅而聲清、此非如點茶

擊甌

佐酒、其案法佳否上手立驗【溫尉集】中有郭處士、擊甌歌、即道源也、又有馬處士者、善此技、從擊甌擅、張喉有賦、武公業妾步非烟、亦以此名、見【非烟傳】此本因于擊缶、以十二甌共音律、則擊甌變法、後唐司馬滔、以八缶置桌上擊之、又以擊甌、新意參擊缶古風也、楊升庵云今人水琖本此、おもふに木琴は擊甌と方響歌板とをまじへて作れるものゝ如し今飲席に木琴を學びて瓷器の鉢皿を筯にて打ならすは却て擊甌の古風に近し【長崎歲時記】に出島の內酒宴には蘭人黑奴笳を吹木琴をうち國風を唱ふことをいへり

オルゴル

風樂

○オルゴルは【廣東新語】澳門寺下に、寺曰三巴、高十餘丈、若石樓、彫鏤奇瑰、云々、有風樂、藏革櫃中、不可見、內排牙管百餘、外按以囊、嘘吸微風入之、有聲嗚々自櫃出、音繁節促、若八音竝宣、以合經唄、甚可聽と是なり又【粤囈錄】に興隆笙、在大明殿下、其制植衆管子柔身、以象大匏土鼓二、其管、按其管則簧鳴、簧

り)

四ッ竹

○四ッ竹此器は今もいと賤きものにて誰もその始など尋ぬるものもあらじ其起りは承應元年その頃長崎より一平次といへる男來て四ッ竹といふ事を始て手拍子に打世に此を持はやしたりと西鶴が【大鑑】にみゆ犬うつ童までも玩しかども貴人の御手に觸らるゝ物にはあらずといへり【人倫訓蒙圖彙】に長崎の一平次といふものしはしめ有德なる者にてありしが藝は身をたすけぬ籠のうづらとやらんにて四ッ竹故に大坂にのぼり芝ゐはられたりと有り【中山聘使略】に相思竹(ヨツダケ)とありて圖を載せ傳へ聞琉球にて是をならしながら踊ることありといへり是又清俗に倣ひしものなるべし彼國の南京繪に女の手にこれを握り鳴して踊るさま書きたるもの有り漢土にては歌板といへる物是ならむ【秋坪新語】

歌板

(八)蘇州に一乞人詩を賦して死す官拾屍得其所書、乃七律一章曰、心性從來似野牛、偶携竹杖過江頭、鉢籃帶露宿殘月、歌板迎風唱晚秋、兩脚踢開塵世事、一身歷盡古今愁、從今不倚人門戶、猘犬何勞吠不休、官憐之爲其棺斂葬之、義塚立石表其事、かく乞丐などの業にて賤きものなれども樂家に用る筋ひやうしも雅俗はことなれど其用は同じ【輟畊錄】(十二)南方或謂折花、曰拗花、唐元微之詩、試問酒旗歌板地、今朝誰是拗花人、また【古杭夢遊錄】(宋耐得翁)に舊教坊用るところ色部のことをいふ內に策部大鼓部云々方響色歌板色などありこの敎坊は紹興十一年省よりこれを廢すと云り故に舊といへるなり【金瓶梅】(二十四回)一般兒四個、家樂在傍、櫟箏歌板、彈唱燈詞、(西門慶が家僮女四人歌曲を唱ふる所)また【因樹屋書影】先大人常作觀宅四十吉祥相、有益於世道人心、云々、不在席上接優人曲不以筋拌足代爲擊板、その小註に擊板接曲去優人幾希これらは板を筋などにて擊拍子をとると見えたりおもふに歌板にも種々の製あるかこゝにてもさゝらあや竹などのごとく用ひて拍子をとる【二代男】(貞享元年)秋篩四ッ竹の拍子に合せて其頃の時花うた唐人の戀するはきつくりきつちやなんどゝわけもなき事のみ云々又

しにや【竹齋物語】に又あるかたを見てあれば遊女ゆふくん集りて若き人々打まじりしやみせんこきうにあや竹やしらべそへたる其中に石村けんげう參られて歌ひてうしを上にけり云々此器かの蟲の鳴聲に似たる故ラヘイカとも呼りと見えて神田貞宣が【淺草舟行の記】に琉球にて三線は蛇皮小弓はラヘイカといへりとしるせりラヘイカは何にかあらん蛇を食ふ蟲はむかでなりむかでは鳴よしをきかず【宋書】玉素傳山中有蛟蟲聲淸長聽之使人不厭而其形甚醜素乃爲蛟賦以自況といへり蛟は馬蛟にてやすでと云ふ虫なり【本草】にも夏月木に上りて鳴と云り又鷄犬に毒なる事はいへれども蛇を避る事はみえず〇【中山傳信錄】また【琉球國志畧】に蝎虎尤多作聲如雀冬夏皆然とあるは蟲の類か薩摩大島にへヒりといふ物是なりといへり蛇を食ふやいかゞ【季吟獨吟百韻】に神代よりこそ伊勢をどり歌あまてらす月はこきうの弓張て【春臺獨語】に胡弓といふものは三線のたぐひなれども其わざことにいやしげなる故にや好むものも少く唯めくら法師非人の所作にてやみぬれは風俗を破るほどの事なし〇【和漢三才圖會】に鼓弓始於南蠻といへり南蠻とはいづくをさすとも辨へがたし唐がらしを南蠻胡椒といふ類にや然らば凡く異國をいふなるべし此器も三味線に種々の形あるが如くその形さだまりたることもなきにや今清渡にあるはすべて竹にて造り端にさしわたし二寸計の竹を長さ二寸五六分計に截たる端に蛇皮を張たるものなり棹は細きごま竹を用ひたり弓は棹の長さほどありこれを清の人は提琴と呼ぶ古畫に見えたるとはいたく異なれども馬尾にて糸をする其音おなじかりたることとなし又一種棹を木にて作り端は端は方にして裏は圓くこれに蛇皮を両面にはなり張りたり其さま圖畫如牛頭柱とも云つべしこれは馬尾をも用ひ又は細き竹にても摩る（【文苑日涉】[illegible]之拍【樂書記】日余嘗東門[illegible]聽夫女、其父子三代之間、[illegible]心[illegible]、[illegible]野[illegible]因[illegible]特、父小[illegible]因打琴[illegible]、今[illegible]一[illegible]、とあり提琴これなり）【[illegible]新語】（十一）[illegible]琴[illegible]へこは[illegible]弓に[illegible]古より[illegible]をのみ[illegible]といへども[illegible]をもていはゞ是又胡琴た

提琴

胡琴

八は宗勳を法とし學ぶといへり（本書漢文今かな書とす）貞享の初宗三といふ者一節切を吹に高名なり宗勳が流なるべし【雍州府志】尺八所々造之其內宜竹之作を妙とす近世指田某が作亦よし笛を吹もの數流あり牛尾流一艸流守田流等なり近世兩流あり宗左流西賞流といふ宗左が弟子理庵宗勳といふ者世に稱美せらる其次を宗揺といふ今西賞流は絕たり云々【萬寶全書】（八）横笛付一節切宜竹は一代に三十管を作る寒竹なり但し裏のせみに法橋と印あり指田二代今も家あり大森宗勳京の作人二代あり但し名判ある物なり同原紹參三代目なりもろすの竹よし原是齋延寶の頃なり尺八に角(カク)の內に定の一字あり京逸竹これ又延寶の頃云々（享保十八年板本【江戸名勝志附錄】慶長十七年壬子大鳥逸兵衛幷其同類數多江戸にて誅せらるこれけんくわを好み辻切をなす惡黨なり）

こも僧の體古今異なり

○こも僧の體も移り變りて今はむかしといたく異なり承應明暦のころ野郎あたまにはあれど散髮にて常の編笠をかぶり白布のひとへを上に着たるはそのかみの紙衣の遺意なるべし此體元祿の初め迄もしかり其頃より袈裟を着たり笠は其後迄も淺く開きたるなり其頃が【賢女心粧】（四）俄に尺八をけいこして袖を鼠色に染させ綿厚に仕立て摺鉢を見るやうなあみ笠をとゝのへ云々いへるがことし寛延の頃に至りて大かた衣服も今のやうに丸ぐけ帶などになりしが笠は下の方廣き窓ある編笠なり（今卒人乞食杯の着る笠なり）錦の笛袋を腰にさげ笠も窄める形を用ひて（今の笠にくらぶれば少し淺きかたなり）だて風俗になりしは明和以來なり

鼓弓 らへいか

○鼓弓は三線と同時に琉球より傳ふ琉球には毒蛇多しラヘイカといふもの有て蛇を食ふラヘイカの鳴聲小弓の音に似たる故に蛇これを怕る其小弓の製糸三筋なり石村檢校之を傳へて三線を作り出せりと【糸竹初心集】に見えたり三線を鼓弓によりて作れりといふは非なるべけれど鼓弓もと糸三筋を用ひし事はさもあるべし寛永ころの繪にかける鼓弓三絃にて槽圓く弓いと小さし鼓弓も此檢校能手にてあり

は尺八より作り出すものなりさま〳〵の手あり委は【洞簫記】に見えたり當時吹手は相國寺の内原田是齋寺町通三條上ル町今西一普とあり

○【守武千句】にまへは四ツうしろはひとつやくをみよなだのしほやの尺八の穴また【貞徳自注自讃】に鎌倉の海道遠きさめがゐにおとす尺八何としてまし（注）尺八の手に海道下りと云ことありといへり【新竹齋】に五月五日三十三間堂の處此ほとりほろ〳〵の住所なりと云につけて古き發句を思ひ出「口によるや尺八ほどなこもちちまき又鉢扣をも暮露といへり【榻鴫曉筆】に夕がほは暮露人といふ者にかとはれて人の家ごとに頭をたゝかれし有さま云々あるは空也流の鉢扣をいひしにや仙臺の人の語りけるは奥州のかたにては今もこも僧茶筅を賣ありくといへり然らばこも僧空也流をも學べる賊と

俠客尺八を吹

も放逸無慚にしていさみある者故に後世遊俠を好む徒尺八を習ひて吹たり【見聞集】に大島一兵衛といふもの士農工商の家にもたづさはらず當世異樣を好む若黨を伴ひ男のけなげだてたのもし事のみ語り常に危き事を好て町人にもつかず侍にもあらずその者武州八王寺酒屋にて古無僧と爭ひして尺八を沉より吹たる物がたり有これ男達といふものゝ尺八を吹始なるべし【江戸枝折】に尺八あはさからすの鳴ならむ彼五人男などいひしたぐひのわるものを云なるべし大坂新町廓の内に新京橋町新堀町二丁目は古へ阿波座にありしを慶長年中此處に移さる因て此をあはさといふ）又この類のみにもあらず

名ある人々

寛永頃尺八はやりしとみえて【目覺草】（寛永二十年の板）獨すみなどの徒然遂るはさらなり調子を習ふに用もありといへどもたゞすきのものゝ集り日毎に吹たるおこがまし（其ころより延寳頃の畫などに尺八ひとよ切を弄ぶ圖多し）などいへり此彼に名ある人多くあれ其宗勳はことに高名なり【日本人物志】大森彦翁宗勳は其先彦七より出幼より音樂を好み尺八に妙を得たり一日宗勳樓に登り曲を吹しに鳳來鳴て是に應ず後陽成院詔して五調子の尺八を作らしめ給ふ是より其名ます〳〵高し今に至る迄尺

隨筆】に【逸史】云開元末、一狂僧住洛南回向寺、一老僧令於空房內取尺八來、乃笛也、謂曰、汝主在寺以愛吹尺八、謫在人間、此常吹者也、汝當回可謂此付汝主、僧進於玄宗時以吹之、宛是先所御者、云々【呂才傳】云貞觀時、祖孝孫、增損樂律、太宗詔侍臣學善音者王珪、魏徵盛稱才、製尺八凡十二枚長短不同與律諧契、太宗召才參論樂事、尺八之所出見於此、無由見其形製也【爾雅釋名】亦不載と見え【通雅】に馬融所賦長笛空洞無底剡其上孔五孔一出其背似今之尺八云々こゝにても此器絕て久しく用ひざりし事にや但し【源氏】(末摘花)公達集りて云々大ひちりき尺八のふえなどの大聲を吹あげつゝたいこをさへかうらんのもとにまろばしょせて手づから打ならしあそびおはさうず

(上文に例のおあそびならずとありこの賀儀格別にて常に用ひざる物をも取出しにや)

○【續世繼】保元三年內宴に此笛を再興の事あり是も今ある尺八には有べからず【吉野拾遺】つくしのみや(此宮は後醍醐の皇子中務卿懷良親王なり)おとしもゆかせ給はざる御時尺八をめしてんせい妙を得させ給ふよしの川の御幸にふかせ給ふにぞみなれぬうろくづ數しれず水よりをどりあがりうへにもめづらかに興ぜさせ給へばたぐひなき御事とぞと有りおもふに今の尺八は後世の尺八を禪僧の將來したるより弘まれる物なるべし(曲尺の一尺八寸なり)【古事談】に慈覺大師音聲不足の間尺八を以て引聲の阿彌陀經を吹傳しことをいへり

一節截

○一節截はまた其後に出來しなり東大寺【三倉寶物圖】の內に古代の尺八あり(一尺四寸五分と有り)尺度の考となるべきものなり又法隆寺に洞簫あり同物なるべしともいへり一節切傳來は宗佐高瀨備前守三井寺日音院近江の安田の城長大森宗薫といへり宗薫が傳は【日本人物志】に出たり尺八を吹しものはみな吹事なるべし一節切の抄【洞簫曲】に書目あり(三二)いかのぼり其外【糸竹初心集】などにも一節切の譜あり貞享元祿ころまでもはやりて琴三絃の合せものに多く用ひしなり【人倫訓蒙圖彙】に一よ切

て、尺八、夫尺八者法器之一也謂尺八者大數也取三節之中定上下之長短各所表三節者三才也表裏之五竅者五行也此是萬物之深源也吹之則萬物與我融其而心鏡一如也、尺蓋、夫天蓋者莊嚴佛身之具也故吾門準擬之也雖山一月影雖萬派普化孤風德殺三州、下總葛飾郡風早庄小金金龍山梅林院一月寺印院代某印と有り）また虚空といふ曲は右の虚空來に本づくかの靈をほろんじといふは尺八に五穴ありこれを五智の如來に表す其內笛の背にある一ツの穴をボロンに充その梵字亦かくの如し佛の種字なりといへり此說うけがたしぼろんじが後に至りて尺八を吹たるなれば尺八よりぼろんじといふ名起るべきにあらず（又俗說に普化の時空中の鐸音を學びて虚空の曲を作れりともいへり）

○【鷹筑】にこも僧の尺八を業とするは良菴といふ禪僧より起るといふと有り良菴はいつごろの人にか【狂言記拾遺】の內にろうあんしの尺八の書といふことみゆもしこの良庵か【雍州府志】吹江菴中世有異僧、號闇菴不知何處人也、慕普化振鈴之作略、常好尺八、自號普化道者、尺八一枝之外不攜一物、有人問佛法、則吹一吹而去、與大德寺一休和尚善友、有一壇越、建國背寺於宇治川邊、請之寺中波江菴其所常住也、居無幾不知其所終、此寺始在嵐島長岡、云々後遂破壞、近年再興黃檗邊、今黃檗派僧住持、一說虚無僧之爲祖也、非普化而風穴延沼也、風穴好吹尺八、因爲祖者也、

○【都名所圖會】普化巢黃檗門前の南二町にあり傳云中頃虚無僧の祖普化良菴と云ものゝ墳なり古へ此地は竹林にして都鄙の虚無僧等此竹を伐り採て尺八に作る故に今荒廢す原普化禪師は異國の人也此良菴と云もの其宗風を慕ふてもつぱら尺八を愛し四方に遊ぶ世人これを呼で和朝の普化と稱す【博物筌】に云明暗寺京三條より十三町こも僧の本寺關西三十三ヶ國の支配稱闇菴一休と常に尺八を吹みづから風呂道者と稱す到る處こもむしろに座す依てこも僧と云ふ

○尺八は【和名抄】に長笛の次に擧て【律書樂圖】云尺八爲短笛漢尚政者也とありて和訓なし【容齋

〇【三十二番の職人歌合】に算おきと薦と番ひたり題は花と述懐なりこもの歌「花さかり吹とも誰かいとふべきかせにはあらぬこもか尺八「さし入もみるや酒やのかすほうし聲をかへてもこふは茶がはり判詞に薦僧は三昧紙きぬ肩にかけ面桶腰につけ貴賤の門戸によりて尺八ふく外には別の業なきものにや云々こも僧の歌糟法師に乞食の愁吟をゆづりてわづかなる竹のふしに世をわふろ聲を切いたしけむもわりなき方便とこそおぼえ侍れみそにも酒にもはなれぬ詞にて此かす法師いひしりて聞ゆとあり其こもの畫大概前に引る【職人盡】のさまと似たれども鉢卷せず紙きぬは袖なくて放ちて着たり腰に面桶と薦の卷たるを付たり薦は野外露宿の用意なり今宿なしの乞食をこもといふとおなじぼろ〳〵とは【徒然草】に梵論と云名のぼろ見えたれどそれよりの名にもあるべからず今もいふ詞にて物の朽やるゝやふのことにいへるこれなり【今物語】に門の下に法師のまことにあやしげなるがかしらはおつかみにおひてかみきぬのぼろ〳〵とあるうちきたる幕露と書はかななり

こも僧尺八を吹事

〇こも僧尺八を吹ことは傳ていふ法灯國師漢土より居士四人をつれ來り播州鷲巖峯に居る或人海上を船に乘り通りければ異音の聞ゆるを怪み尋ね求めて山に入ば一人の居士尺八を吹居たりよりて其術をこひ弟子となれり霧海篪は其時の曲名なり禪語に霧海南針と云事あるによる是より其者名を虛竹と改め諸國に遊行せむとす居士語を書て贈るこれ臨濟が錄の內に普化鐸を振て市中を唱へ步行く其詞に明頭來也明頭打暗頭來也暗頭打四方八面來也旋風打虛空來也連架打云々師曰我嘗疑着此僧といふ語なり(師は臨濟なり)是今かの徒の本則と稱するものなり此語書たるを本寺より許され得て遊行し物を乞ふ事なり(江戶には鈴法寺と一月寺の二派本則を出す鈴法寺本則は鈴鐸話普化禪師也常入市振鈴云々ありて疑着這漢といふ處迄書その次に凌霄峯頂看雲人普化堂中第一祖、武州多摩郡青梅廓嶺山虛空院鈴法寺印現住某印月日與ふる人の名とありまた一月寺本則は普化常於街市搖鈴曰云々疑者這漢とあり

(side heading: **普化禪師**)

の頃めづらしきことゝもいふにや）江戸は其後天明七年【狂詩諺解】に按摩の笛を吹は近ごろの事なりといへり【甌北集】に兒童敲背詩あり兒童娯我度良宵、如蹴拳輕把背敲、一个西瓜分八片、阿翁大費爲攔勞次に云【雲谷臥餘】に朱少章名辨と云もの建炎年中金の國に使に行て灸二百餘壯をすへたる中に排律二十韻を作れりその内の句に嫖微初灸手、氣烈漸鑽皮、こゝにて世俗初めの三壯を皮きりと云是なり

足力

○足力【福富双紙】に嫗か夫の腰を蹈む處あり

虚僧（尺八暮露、俠客尺八を吹、こもの躰古今異なり）鼓弓（らへいか、提琴、胡琴）四ツ竹（歌板）　木琴（髀甌）風樂（オルゴル）しやぎり（風鈴）音律の妙（鶺鴒石、山びこ）

虚僧　暮露　馬ひじり

虚僧は【甘露寺職人盡歌合】に暮露とあり、其歌に馬ひしりともいへり【徒然草】にしら梵字といふ暮露師の仇なるいろおし坊と云暮露とかたみにつらぬきあひて死たる物がたり有てぼろ〲といふもの昔はなかりけるにや近き世に梵論字梵字漢字などいひける者其始めなりけるとかや世をすてたるに似て我執ふかく佛道をねがふに似て闘諍を事とす放逸無慚の有さまなれども死をかろくして少しもなつまざるかたのいさぎよく覺えて人のかたりしまゝに書付侍るなりといへり暮露といふもののその所行行のごとく其形狀は【ぼろ〲の草子】（同惠上人の作なり）に兄弟の出家あり兄を蓮華房弟を虚空房とぞいふ兄は念佛修行に諸國を廻り弟は活僧の風を學び頭髮を半にきりて編おきたる紙衣をきて一尺八寸の太刀をはき八尺の檜木の杖をつき諸國を行くといへり（尺八はこの腰刀の寸法なれば後にこれにかへたるにや）此さま【職人盡】の畫にかなへり髮は散亂るゝ故に鉢卷をなし刀をさし黑き袴に白き衣着たるは紙衣なるべし兼好が物語の暮露此さまにこそ【沙石集】（八）ある入道法師云々所領得替の後はひたすら暮露々々の如くにて惟に紙衣をきてねるその頃いまだ尺八をふかず其後虚といふはむしろこも負てありければなり

りごぜとはいひ習へるにや又は瞽女の音などにや【落穂集】に我等若年の頃迄は躍子杯と申者は縦令いか程高給を以て召抱申度と有之候ても御當地町中には一人もなく三味線と申物をば盲目の女より外にはひき不申事の様子に有之云々去に依て其節は大名衆奥方には瞽女と名付たる瞽女を二人三人も抱置お慰などゝ有之節は三味線を鳴し小歌やうのものも諷ひ座興を催申事に有之候當時は件のごぜ抔と申者沙汰もなく躍子三味線ひき計りの様に罷成候は元祿之始已來の義にても可有之哉とあり【人倫訓蒙圖彙】に女盲が男に三線敎る所をかけり其條にお前は光孝天皇の御子雨夜の前にはしまるといふ說あり是もれき〳〵のおくがたへも出入又はいとけなき娘子に琴三線を敎へ侍れば身持きやしやにありたきものなりといへり此草子には座頭の條には雨夜の御子の事れ子なく却てこの處に雨夜の前と女御子としたるもおかし

○漢土には【暘谷漫錄】（宋人）京都中下之戶、不重生男、每生女則愛護加捧璧擎珠甫、長成則隨其資質、敎以藝業、用備士大夫採拾娛侍、名目不一、有所謂身邊人本事人供過人針線人堂前人劇雜人折洗人琴童棋童厨子、等級截乎不紊、就中厨娘最爲下、云々

陶眞

○【堯山堂外記】曰杭州男女瞽者、多學琵琶、唱古小說平話、以覓衣食、謂之陶眞、云々

按摩

腹とり

○次にいふ按摩は【令】の典藥寮條下に師二人博士一人生十人と見えたり接骨もこのわざなり【榮華物語】（布引の瀧）み奉らせ給てなかせ給ひければおとゝ（宇治殿）はなになくいたきところやある（東宮の給ふなり白川天皇なり）はらとりの女にとらせよかしわれもさこそはすれと有はらとりは按摩なり【續五元集】あんまとり貴人頭上もはりまはす座禪の影を正うつしなり【松の葉】あくしよ八景一かふろやり手にたいこ持ごぜやさとうにあんまとり

按摩とり笛を吹く事

○按摩とり笛をふく事【太平樂府】に河東夜行、按摩痃癖吹笳去、溫飩蕎麪焚火行（是明和六の撰なりこ

城を一と訓しこと

ち方は下につくなり何れも城字なりといへり此ことと正否はしらず城字を一とよみしことと都の字用るが如くなりしことあり【醒睡笑】（推は違ふたといふ咄しの內）和泉の堺市の町に金城といふ平家の下手ありといふ金城にキンイチとかなを付たるは前說に合へり市の繁昌は都城にあれば義を假りたるか心得がたし【五元集拾遺】凡蟬丸より官をつぐ座頭の都とはいかにといはれて「三味線に引てのこりし四ツ緒の一はめくらの名になりにけり然らば城とはいかにといふ時「幸に成あかりたる士めくら城といふ字のかきのぞきせよ【古記錄】には檢校を建業とも書たり【二水記】永正元年五月七日云々蹈一建業語平家云々（これ記錄がきの假字なり）

盲女

○盲女は【甘露寺職人歌合】に琵琶法師と女盲と番ひたり其繪髮をさげ眉作りたる盲女赤き衣きて上に白き衣打かけたるが鼓打て歌うたふさまなり繪の旁に宇多天皇に十一代の後胤いとうが嫡子にかはづの三郎とて詞書あり【曾我物語】などうたへるにや其歌及び判詞に太鼓かしら打といふ事あれば舞まひの類なるべし（舞まひは此【職人盡】の內曲舞まひ白拍子と番ひてありことに盲女は舞ふべくもあらず但大かしらは鼓を打故なり【謠曲外百番】小林と云曲ありごぜども八はたに詣て內野合戰山名が臣下小林の上野介がことをうたふ趣物じてごぜ達の謠には女御更衣帝王の御事をも謠に作てうたふは習ひ云々これ【職人盡】の女盲と同じものとみゆ）

ごぜ

○今女盲をごぜといふもと御前は貴人の邊なり故に人をうやまひていふ詞なり物語草子などに多く見えたりおまへたちといふは御前に侍る人をいふなり今も宮にて呼ながらごぜんといへば重き詞なり物語などに殿は男を申し（【源氏】玉かづらの內侍をかんのとのといひたるもあれとそはまれなり）お前といふは女を申すならひなり（名物の琵琶に殿お前と云があり【胡琴教錄】に殿お前の裏書の繪のことをいひて其人の形男をかけるを殿と女をかけるをばお前と號す）盲女もやむことなきおまへに侍るよ

に酒を盛て出すことなり

○天野氏の【鹽尻】に昔朝家盲人を憐み玉ひ上加茂封境の内に田疇を置て歸する處なき盲人を扶持し玉ひ又日向國に官稻有て衆盲の食に充給ひしと云々是又療病院の類なるべし（中世大地の寺に敬田施藥療病非田の四つの院を建貧窮及び重病のものは此内に養ひ其勇壯になりし者には業を授け生を遂しむ凡此四院の内敬田院のみ僧侶の舍にして殘る三院は多くは惡疾穢火の者聚り或は一旦食せしものもあればそれより準じて彼三院より出たるものゝ末は乞食の部類と呼なり云々）

雨夜の城了

○昔天王寺の四院は攝河兩州の内に官稻三千束を費用に賜りし古記に見え侍る然れ共生佛已來如一覺一等が如きは又別にや殊に覺一は明石檢校と稱し尊氏將軍の族なりし是より盲人世に威ありといふ又城了が聞雨の歌「夜の雨の窓をうつにも暗ければ心はもろき物にぞ有ける」天聽に達し夜雨と勅號を下されしとかや（後小松院勅賜なり）盲人の事かける物に光孝天皇の皇子明を失ひ給ふて雨夜の御子と稱せしと云々帝紀を考ふるに光孝三十三子にして雨夜といふ皇子なしおもふに雨夜の城了が事を傳へ誤れるにや光孝帝を小松の帝と稱し城了に號を下されしは後小松帝なり故に事を誤り記を作りかくいふにや例せば或書（【黑谷上人九卷傳】）光孝帝の姫宮玉判加陵風芳（タマワケカスミカサハヘ）といふありし是江口神崎室兵庫等遊君の濫觴なり或云八人の皇女を七道に遣して君の名をとめなんと傳ふ按ずるに光孝帝にかゝる御名の皇子ましまさずさすれば當時天皇孤獨の窮民を愍み所々に田を置て惠み給ひしを後世誤りて皇子ぞ姫君ぞといひ傳へ侍るなるべし蟬丸を延喜帝の皇子といひ又乞食の祖といふもこのたぐひかといへり

城宇都宇のこと

○城宇都宇のこと【庭訓往來抄】びは法師中頃は盲たる者入道して鼠色なる衣を着てびはを袋に入て廻なり云々近代公家に或公達の盲目ありしを直垂をきせて京中ばかりを經廻られしなり餘りに平家面白かりしに依て禁裏へ被召琵琶を彈じ物語をせしなり其恩賞に城といふ字を賜るやさ方は上につくい

名字の最初　筑紫方　八坂方　坂東方　惣檢校　紫衣勅許　一方　八坂方　綱引　清入　涼の塔

韓の憐愍有て盲人是を配分す其後停止其代として［　］たまふ）
○當座名字の最初は後宇多院御宇城一檢校在名筑紫方是は菊地某庶流にて其頃筑紫に住居たるが故に號す城一の弟子在名八坂なり伏見院御宇久我殿の御舍弟にて八坂塔の邊に住居たるにより八坂と號す一方の初は如一檢校是は城一弟子在名坂東其頃坂東に住居たる故坂東と號す一方中興は覺一惣檢校是は如一が弟子在名明石其頃足利家の庶流にて播磨明石に住居たる故なり是職役惣檢校の始なり云々
○檢校へ紫衣を勅許の宣旨蒙りしは百三代後花園院御宇竹永惣檢校なり平家琵琶の最初は性佛檢校なり是は四條院御宇攝政家道公御孫なりといへり）【當道要集】云四條院御時性佛とて佛あり比叡山檢校なりしが俄に盲人となり山王の示現に依て平家物語をかたる云々城一檢校在名筑紫城一弟子二人有一人は如一檢校とて一方の最初在名坂東一人は城玄檢校とて在名八坂八坂方の最初この時一方八坂方兩派に分る今の綱引（正月九日）清入の儀式是より始る又は石塔とて每年二月十六日當道出仕の輩の祭儀をなす又一萬卷の心經を讀國土安穩を祈り從數體物相添久我殿へ納む云々二月十六日石塔とて都部の檢校勾當末々の座頭迄出仕綱引とて雛祝儀の平家を語り始其後頭人延喜聖代を語る六派より五句の平家を勤同十七日未明東河原に出仕當道石塔を積是は天夜尊の御吊と號す三月二十四日に御經流しとて法華經を書寫し兩職事檢使にて加茂川へ流す事是は安德天皇の御吊と號す趣意は平家を語るを以て當座の家業とすればなり六月十九日涼之塔出仕石塔におなじ今は石塔に河原には出す佛光寺高倉に清聚庵といふを設てそこに天夜尊其外あまた檢校の位牌あり爰に詣づるなり久我殿より警固の人來る又石塔の會集に一老は出す二老より出席あり座次は三件の紋のやうに居る衆分は中座なり是世諺にいはゆる座頭の中ざしき也とぞ石塔のこと【雍州府志】陵墓門に見えたり清聚庵を清聚院とあり【守一居千句】涼みによりてひくびはの音大瓶をくみはじめぬる瞽の輩とれ六月の集會をいふたり今も大瓶

雲日件錄】に爲長平家を作り播州に留むと有によりて書寫寺の聲明を摸せりといふ説もあるなるべし白聲とは今かなきり聲と云是にや歌舞妓女方玉川千之丞聲よくて高安通ひの小歌をうたふ狂言大にはやりしを【花洛六百句】に近江荻武藏調布千之丞聲かなぎつて伊せの濱荻と云句あり前句は玉川の名物をほめたり脇にいせと云へるは此もの後に伊勢に退きたればなり扨このかなぎつてといへるを【西鶴大鑑】に千之丞が風吹はおきつ白聲にて諷ひ出して家體の御簾をあげての面かげ云々いへるにても知べし）【俳諧懐子】（十）ことばの色もやさかたにして平家きく人引とむる琵琶法師（松安）やさかたを在名八坂を取なしたり

地神經よみ

○一種盲人琵琶を皷し地神經を誦して竈神を祭る佛說地神經一卷あり鄙俗の文字にして藏中になきものといへり（

くわうじん

くわうじんは障碍神にて如來荒神鹿亂荒神忿怒荒神の三身を三寶荒神とよべり光障礙經に出たり竈神を荒神と稱し祭る佛說になき事とぞ）この竈祓をなすものを今はひばほうしと呼で當道の瞽者は賤しめて部類を異にするものなり古へびは法師といふはすべてびは彈て平家かたる者をいふなり賤きびはほうしも古くありしなるべし直幹申文の畫卷物に地上に莚を敷て居りびはを彈て錢乞ふさまの盲人をかきたり（享保十三年戊申九月十九日地神經讀盲目官位院號袈裟衣御停止之儀先年被仰出候處遠國にては猥に成候と相聞候間向後在々所々に至迄猥に無之樣急度可被申付候云々）

天夜尊

○【當道大記錄】（盲人傳書）祖神天夜の尊と申奉るは仁康親王の御事なり抑此尊は仁明天皇第四の皇子光孝天皇御同腹の御弟なり（【當道式目】には光孝の御子なりとあり）御兩眼しゐさせ給ひ貞觀十四年壬辰二月十七日御歳四十二歳にして薨じ給ふ御法名法性禪師と申す云々（【當道式目】には洛中の盲人を集め御伽となし御母公の御いたはりに依て奏聞有てかの盲人等に勾當の女官を賜また尊へ大隅日向薩摩三ヶ國の一□一檢校の官位の內を以て御領に賜り年々貢物を船に積山城國鳥羽の湊に漕入綱引す

り多し阿彌陀寺は安德天皇の寺なり）當の平家物語とはいたく異にして【源平盛衰記】の異本といふべきものなり每卷長門國安德天皇供奉納信濃前司行長以自筆本書寫畢と記せり又【八坂本】十二卷奥書云寬永三年春の頃藤川撿挍城慶加賀國にて筑後方撿挍城一用ゆ雲井の本と奥書傳る平家物語を求め侍りき此本則雲井と奥書侍る故に藤川撿挍城慶此本を用て八坂方の平家と號す（【平家物語抄】廿四卷は作者詳ならず十二卷を上下に分て廿四卷とす本文を記し其頃に註釋を記すその中抄僞記圖經等の說を載す【平家物語考證】十二卷松堂閑人門脇生編、洛陽後學源道格集、羽林中郎將藤原定俊補、とあり此書物語の本文は要をつみて全文をのせず諸書を引用して註す事甚詳なり）

○【醍醐雜抄】云平家作者事或【平家雙紙奥書】云、當時命世之盲法師了義坊賞名如一之說云、平家物語中山中納言顯時子息左衞門佐盛隆、其子民部權少輔時長、作之、又【將門保元平治】已上四部同人作云々、此時長先作平家廿四卷之本、瀧伊勢太神宮記、是佐渡院之御時也、順德帝是也、後嵯峨院御在位之時、吉大貳入道輔常作之、平家物語、民部少輔時長書之、合戰之事依無才學、源光行讀之、十二卷平家資經卿書之、同書又云、又【鵜談集】第七云平家のものがたりは民部少輔時長がきたりける合戰の中をばさいかくなしとて源光行にあつらへたりけるとなむ十二卷平家と云もの資經卿書之

○びは法師參院事【薩戒記】應永卅二年六月廿七日、云々、藏人中務丞源正仲來語談、曰近日主上上皇御中不快、其故召琵琶法師、可聞召平家物語之由、自内被申院、無先例不可然六由有御返事、同閏六月廿一日己丑、天晴、依召參院琵琶法師參入、語平家物語

○【貞德文集】（卯月四日條）今朝都方城方撿校衆幻當列座平家語聞申候云々調子甲乙間に相交自聲又に二重三重被遊上候面白事無申計候また（九月十六日の條）彼前平家殊勝之由撿校衆被感候云々指聲自聲口說中音三重自由自在誠に昔覺都も可被及難候物語師は昔猿樂等名之聲何被押由候必定候哉云々【阮

琵琶法師　平家物語　地神經よみ　天夜尊　都方城方　雨夜の城了　城を一と訓しこと

○盲女　御前腹とり（按摩　足力）

琵琶法師

樂はすべて瞽者の業なるべきを唯琵琶は蟬丸よりこのかたむねと盲人の業とす故にびは法師と稱する事古より聞ゆ【源氏物語】明石の卷入道びはの法師になりて　いとおかしうめつらしうてひとつふたつ引出たり【抄】云小右記寛和元年七月十八日の條を引て云召琵琶法師令盡才藝給少錄云々あり後世【平家】出きてより專ら是をうたふ【平家物語】作者のこと數說あり普通には【徒然草】に後鳥羽院の御時信濃前司行長遁世して慈鎭和尙の扶持をうけ平家物語を作り生佛と云ける盲人に敎て語らせけり武士の業は

平家物語

生佛東國の者にて武士に問聞てかゝせけり彼生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學びたるなり【參考】云行長入道慈鎭和尙に扶持せられし故にや平家のふしもおほくは台家の聲明のこゑに似たる所あり【六道講式】のはかせ及び叡山大會の時などよみあぐる聲明のふし今の座頭のかたるによくうつりのまがふ所多し又頓寫の時是をかたるも台家より始れりといへり【和事始】に云【臥雲日件錄】むかし爲長といふ者平家物語十二卷を作る留めて播州にあり後性佛といふものこれを音曲にのほせて歌詠すといふ是瞽者平家物語をうたふ始なり性佛の後を如一撿挍と云ふ如一が弟子二人あり一を覺一と云ひ二を城一といふと有り【一枝軒隨筆】には如性城一其弟子城賢昶一其弟子明石角一高師直に媚諂り聞せ塩冶が事起る云々といへるは當道記錄の說にかなへり角一は【太平記】に覺一とあり

○法師の平家を傳ふるもの一部十二卷に通ずるを一部平家といふ其外に鏡劍の卷と云ことあり（今この劍卷を【太平記】に附るは誤なり平家物語に屬べきなり）是を大秘事として謾りにうたはず故にその文段をしらず世に傳ふる古寫本多く異同あるは瞽者の口授其儘しるしし故なり瞽者の用るはかたり平家とて印本とは異なりとも云り【長門本】十二卷（【東見記】云長門國赤間關に平家物語あり常の平家よ

の鳥かや恨めしやと【好色大鑑】の作者が作りかへたる唱歌の根元なりといへり投ぶしをなぎぶしとするは非なりその歌【大鑑】の作者箕山が作も有べけれど悉くさにはあらず

よしの山

○よしのゝ山は岡崎よりも古き歌にや【東行話說】(安部泰邦卿寶暦十年記)岡さきにかゝる云々我娘ともの箕琴を習ひし時花のふゞきの歌上げて後岡崎女郎衆と謡ひしを思へばさそなむと左右を顧れどもさやうのものなし云々花のふゞきはよしのゝ山の歌なり昔は初めに是を教へしなり【春臺獨語】に小倉よしのなどいふは詞やさしく云々いへるこれなり小倉をどりは「をぐらの野への一もとすゝきいつかほに出てみたれあをおたまこがれて秋こがれつゝといへる歌なり【卜養集】に八月十五夜の月をみつまたの波に船を浮べて云々世の人も酒もりをすたれふねなどにて小倉踊といふ事をうたふその頃の歌に「さすやうでさん／＼さゝぬはしのぶ夜のつまとおたまこがれて秋こがれつゝ云々【案一本】に宵関川納涼の所に當世風流伊勢音頭さすやうでさゝぬは人まつ宵のから木戸(延寶已年より伊勢をどりはやるといへり小倉踊のかへ唱歌を伊勢音頭にうたひしか)

小倉踊

川崎音頭

間の山

○川崎音頭の始は間の山節なり【一代女】(六)神風や伊せの古市中の地藏と云所のゆさん宿に身をなして所からとて間の山節あさましや往來の人に名をなおすといつれがうたふも同音にしておかし云々伊勢両宮の間なれば間の山と云ふ今も淨るりに加はりて間の山と云ふ音節殘れり【伊勢名所圖會】に古市は昔の市場たり古市も間の山の内にて間の山ぶしをうたひしものなるに物あわれなる節なる故いつの頃よりかうつりて川さき音頭流行して是を伊勢音頭と稱し總踊ともに華巷のうたひものとなれり古き文義は甚雅なり今も年々新作出といへり川崎といふも其わたりの里なり舊名川崎の里と云ふ又按に小倉の歌におたまこがれてとある此歌を間の山にてうたひし故お杉お玉といひはやしたるにやお杉といふもさる類にうたありしなるべし、

伊勢音頭

大盡舞

○大盡舞は俳優二朱判吉兵衛が作の小歌なりといへり吉兵衛小唄の上手なるよし【吉原徒然草】に見えたり吉原にふるき小歌の殘りたるは是のみなりとぞ吉兵衛は俳名を一共と云ふ小男なれども藝の位上ゝ吉に至る其頃乾金の二朱判は小くて位よき金なれば准へて異名によべり明和二年八月十六日享年八十餘にて死すと云り（醒齋が【大盡舞考証】の說もかくのごとし）其文句は一人の作にはあらじ平澤氏が【後は昔物語】に我父の友に小久保萍也といふ老人ありこれも乙卯の生れにて我に六十としも上にて此老人の咄に几帳といひし傾城は紀伊國屋文左衛門に請出されたる女郎にて有けん此几帳になじみたる士は此隱居の覺えたる男と聞えしが名も忘れたり几帳紀文に請られて力を落せしを餘の人半太夫ぶしに

半太夫ぶし

作りて語りたりとて隱居も語りき「舟の着たるサア起されふつゝりはつたり寐入らぬ儘につく〳〵と宿の首尾のみ案ずれば我黑かみもしらがとなり樂しみ盡て悲しみのなんだ袂をうるほせり几帳にはだまされて二枚五番の小脇差純子三本もみ五疋綿の代迄とり揃霜月半に送りしに終にそれとてみせもせず今は文左が寶もの」と云ふ文句なり云ゝいへり【松の葉】あづま淨るりの部半太夫節にきてうといふ歌即是なり少し異同あり此老人の覺えたるは本の儘にて文左など名も出たりそれを二人が中とかへて廣くうたひしなるべし大盡舞にはこの贈りものを紀文がことにしたりさにはあらず

かぢるといふ事

○今俗何藝にてもすこしばかり學びたるをかぢるといふはもと三絃にのみいひし事なり【伊呂芝居】といふ草子に當世女の子をそだつるやうをいふ所何市くらゐの座頭藝は上手なれど隙などいふを聞出し此わろにかけて時行歌よしのゝ山は鼠がかぶらふとも二上り三下りにあたまから仕込てもろふ云々【色競馬】けいせい吉野人の琴ひく所爰を通る熊野同者手に持たる椰の葉笠にさいたも椰の葉といふ歌を今の目から見れば鼠のかぶるやうに琴かきならせば扨もこの幾筋もある糸を一時に指は唯三本にて

なげぶし

引ならし給ふは名譽なりと聲そろへて譽たてけるこれ近代なげぶしといふはなぎぶしのかはりにて侃

めりやすと云ふ【甲陽軍鑑】にも出たるめりやすきと云ことを下略して是を名付る同書（四）或人云める

めりはり　はるはるはめると云ことあり藝をなすものせりふをはり突こみてする時は見る人めるなり仕打骨髄になす時は見る人はるなり因てめりはりの大事なりこれらによりて見れば楽屋にてひける三絃をいへるかもとにてそれに合せうたふ歌をもめりやすといへるなるべし

○山崎久卿云【女里弥寿豊年蔵】といふもの寶暦年間の刻本にしてめりやすを集たるものなるにその中に長歌これかれを載すされはその頃は長唄をも殺してめりやすの内に入る是をもてみれば長唄はめりやすの長くなりしものかといへりいかさま原夫がいつとても無間と獅子との形たゝき付てひくなどいへるは今いふめりやすのみめりやすといふにあらずされど【松の葉】長唄あり其歌とも今も上方歌の中にあり然らば狂言に合せ作りたる芝居歌は大かためりやすたるべし寛保のころ佐野川千蔵といふ女形聲よくて初めは豊後ぶし淨るりなどを出語りにしたりしが頓て富士田吉次楓江と名をかへ歌うたひと成て大に行はれぬこれより歌舞伎唄を世に歌こと盛なり後安永頃荻江露友よくめりやすをうたひたれども楓江には及ばず

土手ぶし　○土手ぶし【洞房語園】に尾高如酔齋といふ隠士あり寛文の頃鶺鴒組吉屋組等の男達のうたひはやりし土手節といふ小歌は此翁の作なりといへり同巻に酔翁作とありて土手ぶし「かゝる三谷の草深けれど君が栖とおもへばよしや玉のうてなも（うてなか）おろかでござるよ所のみるめもいとはぬ我にかにおわらひやるな名のたつに」其頃吉原へかよふものゝ往来にうたひしたり（或人云【吉原雀】は富士田吉次がうたひし唄なり市村羽左衛門并に藤蔵所作をしたり其頃にこれあみ笠もそこにおけ二階さしきは右か左かおくさしきでござりやす云々といへるは土手節を其儘とりたるなり（長歌三絃の手は自身作なりとぞ【京鹿子】も同人の手付なりと云り）

のかゞぶし上るりにはあるべからず宮古路豐後が弟子にて腕をかたりし加賀太夫がことにはあるべからず元祿十四年板【諸藝太平記】に此文句にふし付したるが出たり

めりやす

○今歌舞伎芝居にめりやすといふはおもふに江戸らうさいの移りたるもの歟(【澪標】に明暦中都島原にてなげぶし江戸よし原にてつぎぶしといへるもの大にはやり萬治年中大坂新町のまがきぶしといふ元祿寶永の頃迄これを相傳してありし正德年中より中絶して古ほど行はれず今も當津廓の内にこの唱歌に妙を得たるものありそれに聞侍りしに都嶋原のなげぶしと江戸半太夫ぶしとの間のものにて幽玄にて面白き歌なり云々

めりかり

○手覆のめりやすは手の大小ともに合ふなれば其義をとりて此歌狂言の合方によくかなふとの心に名付たりといふは非なりめりかりは音聲の甲乙をいへり上下輕重の差別なりかりを俗にかんといふあがる音なりめるはさがる聲なればめるは易きといふ義なるべし(手覆のめりやすのことは服飾部に出たり見合すべし)俗にめかりのきくといふことはこのめりかりの省きたるなり豐前の國なる和布刈の神事のことゝするは非なり

○原武太夫が【斷絃餘論】は元文年中三絃を彈ことをやめて年經て此論を著せり昔の上手はさのみ達者を好まず種々彈かたに趣段ありてひきしめゆるめのびちゞみおこづきとび込さま〲の間拍子手くだか有て歌も聲よろしきばかりをば賞翫せずかたり味に工夫せし故面白き手くだか感應なることあり今に其歌のこりやんことなき席高位の間にもふつゞかならず歌の文句もやさしかりしが今はめりやすといふことはやり野鄙なる文句歌のさまもいやしく成ていつともむけんとしゝとのかたちめつたむしやうに打つけたゝきつけてひくを達者とやらいふよしなり【めりやす豐年藏】に長き歌あるを件の説に合せ見れば歌の長端にはよらず【歌舞伎事始】(二)に扨又一部の内毎事樂屋にて三絃をならす是を

に夢にもしらずと申云々しばがきは承應明暦ごろはやれりこれ田舎の流行におくれたることをいへり
〇【大帯】に【貞享二年】新曲とて載たるは皆長き歌なり【松の葉】（元祿十年）には是を長歌といへり（天和頃の歌舞伎番付をみるに小歌とありて長歌とはなし又あやつり座にも小歌端うたなとしるしたり）
〇【大ぬさ】の頃までは長歌といふ名いまだあらざりしにやその長歌どもは江戸淺利検校佐山検校京朝妻勾當々風引出すとあれば歌舞伎より起るにあらず

ほそり

ほそりは【大ぬさ】破手の内に唯ひと歌あり【松の葉】には下總ほそりとあり七歌ばかり載す【大ぬさ】に出たるも入たり（【小歌惣まくり】にほそりづくしとありて其歌の内にほそりのヤレ出ところはやまとのつぼさかそのふしたなすなみのゝたにくみとあるは西國順禮の歌より出たるに似たり）

口說

口說は長歌にあらず【松の葉】端歌の内にくどきありもと平家曲節の名なり舞などにも口說あり

加賀節

〇【昔々物語】享保よりなれば寛文四年に當るしかれ共寛文元年に法度ありて今の如く芝居三ヶ所に定れり六十年已前禰宜町の狂言勘三郎座に多門庄左衛門野郎に出來島小さらし花井才三郎上村吉彌ま川下之丞山川内記玉川主膳これらは禰宜町にて無隱美男の拍子利なり聲もよくこれら寄合加賀節といふ歌を唄ひ出す諸人感ぜり最前のろうさい節に負ぬ歌なりといへり【錦繡段】に一とふしを加賀商人の聲おかしやりての下戸や宵の間の月（其角）是元祿中の付合なり天和三年の文三千風が【行脚文集】加州金澤の文に魚樂の加賀節も此時にはやり出哀哀の柴垣早歌は遠く廢れて吟人さらになし加賀節唱歌は【松の葉】に出たり短歌なり【松の葉】三端歌の内かゞぶし「つとめものうきひとすぢなへばとくもきえなん露の身のひかげ忍ぶのよる〱人にあふをつとめのいのちかな」是ほどの歌六うたはかり出たり山東京傳が【大雅舞考證】に樂の始皐のみかりの時云々此一段加賀ぶし上るりの文句をとりて作りたるものなりと云りこれ今ときはづ節にかたるを松の文句たりかゞぶし上るりとは件の端歌

とかく妙音出申さず候ひし然る處近年何がしと申座頭一下りの手を引出しことの外おもしろき曲頃はうけたまはり候といへり元圭は律に委しく日本の律學取立んとして故ありて打捨たりとぞ

なげぶし

○【柴一本】金輪寺の條抑なげぶしと云こと往古にもなきに非ず郢曲にも是あり逍遥院殿御歌におもふことなげぶし聲にうたふなりめでたや松の下にむれゐて紀逸が【雜話抄】に光廣卿御作自筆のなげぶし「おなじ空なる影かとおもてみればあやしや月さへさまと共にみぬめはかはるけた【松の葉】(五)なげぶし唄百首ありその内にあめのふる夜は一しほゆかし云々又のべにかはづのなく聲きけば云々などあり是今もうたふめりやすの唱歌なり延寶八年【洛陽集】なげぶしや親父初音のほとゝぎす(行正)【五元集】淺妻舟につゝみを入て月をみる女の水干に扇かざしたる畫に「思ふことなげぶしは誰月見舟爰は山中もりのかげ月夜からすはいつも鳴と云ふ隆達が歌を立入て秋もゝのゝ月よがらすはいつもなくと伊丹の鬼貫が句あり

○【春臺獨語】に盲法師妓女などのうたふ歌も寛文延寶の頃迄は長歌らうさいなどいふ曲ありて俗ながら詞やさしく節もゆるやかにおぼらしき事ども多かりかりそめのそゝろ歌も小倉よし野などいふは詞やさしくよき人の前にて諷ひても聞にくからず

さゞんざ

○慶長ごろさゞんざと云歌はやれり【竹齋物語】に石村けんげう參られて歌のてうしを上にけり情は今の思ひのたねよつらきは後のふかき情よ雨のふるよにたがぬれてこぞのたそとおしやるはよそ心さかなさかづきとり出したび〳〵申てはづかしけれど又さゞんざなどうたふ云々【一代男】越後寺泊の條に六七人聲して三國一しや拍子があふのあはぬのと同じことのみうたひけるほどに亭主にやうすをきけば此ごろ上がたよりさゞんざと申小歌がはやり來りこゝもとの若い衆いろ〳〵けいこいたせども聲がそろはぬと申はべるさても世はひろいことを今おもひ合すしばがきをどりはしつてかとたづねける

しばかき踊

一上り一下り調子

みえたり
○【恨のすけ草子】、慶長十九年の草子）あやめ殿かれうひんかの御聲にて當世はやりけるりうたつぶしとおぼしくて吟じ給ひけるは君が代は千代に八千代をかさねつゝ岩ほとなりて苔のむすまでなげぶしといふもの即これなり近江すげ笠などの歌のふしにんゝやあこれのといふ事有なげぶしはたをやんとはねるらうさいは猶古きものにや【松の葉】になげぶしの事元來江戸らうさいのふしをなほしてうたひきたるとかや音聲しめやか（寛永十九年の【吾妻物語】にらうさいの一ふしに三絃の音ひゝしく聞ゆなど見えたり）に調子ひくきかたよし云々古へ大坂屋河内風といひてうたひしはかみしもの句さふりと三味線あひしらひも短く歌のとまりやんとうたひしなり今やうはふしのたけゆるやかにならしもの相の手撥數もすくなく歌のとまりはふしにていひすてゆう〳〵と聞え侍る云々中頃より二上りの調子を用ひて此ふしをうたへることとありこれには本調子とつれひきよし（此河内風といへるはなげぶしなり大坂屋とあるは誤なるべし【一目千軒】なげぶし明暦の頃かしはや又十郎抱へのたいこ女郎河内といへりしもの諷ひ始めしなり云々其後正德ころ、文字屋又左衞門抱へのたいこ女郎よし松といひしものこの歌に名人なりしよし諸方へ弘まり行はる其後山本やつやのかゝへ小倉といふたいこ女郎上手なりし寛保の頃隠居たりしなり今にこの一ふし相續して名物とぞなれりける島原のなげぶしよし原のつぎぶし新町のまがきぶしとて古來より三名物なり（三味の頃行はれし節なりといへれど天和二年に刻したる【武藏曲】遁世の餘所に妻子をのぞき見て（芭蕉）つき歌耳に殘るよしはふ（減水）
○一下り調子水府史曲綱誤にてありしハ恵瀬太左衞門中根元圭に逢て音律のことを聞ける時二上り三下りなと三絃に申候一上り一下りと申こともこれ有べきにいきをだうけたきは如何と申候へば再び候て申候は一下りの調子の音曲を引て見候へとて銀流のとほりに三絃にての者へ先在申候て引せ申候に

工部屋へ召連度候何も分限成奴原に候弟子一族多持候故何成大儀をも無造作相濟申候瘀瘵藥に候世界の重寶候恐々頓首これは苦勞なく作事出來るを勞瘵藥と云たり【けだ物歌合】七番右いたちゐのこしぬけぼう「らうさいにかみはうつ〳〵いたちゐをみるにこしぼねなへにけるかな判云戀しきこと數まさりてらうさいとなりかみもうち腰ぼねもみるたびになゆるごとくなるべしこれは世の人の小歌にきみはうつ〳〵かるたをうつかわれはらうさいにてかみかうつといへるをふまへたると見ゆれども云々（是又戀やみを云り）

長唄

○また【昔々物語】長唄の始は右近源左衞門が海道下りに始り小歌は隆達より起れり弄齋の歌はほそりまたはた〻き杯とて皆短歌といひしとかや其後長歌口說歌などいひし云々いへるすべて誤なり歌はもとよりうたふべき物なり【金葉集】（永緣）きくたびにめづらしければ時鳥いつもはつねのこ〻ちこそすれ俊賴朝臣の歌をかゞみのくゞつどもうたひけると聞て永緣僧正うらやみびは法師をかたらひてさま〴〵ものとらせなどして此歌をうたはせける（又【無名抄】にみゆ）これ今樣なり【新撰類聚往來】（中）歌ニ長歌短歌之今樣ニとあり【榮花物語】玉の村きくの卷川そひ柳風ふけばうごくとみれど根はつよしといふ今樣あり後世なげぶしの唱歌に似たりその今樣うつりかはりて小歌となる室町將軍の頃專ら行はる猿樂の狂言小歌ぶしの事多くみゆ（又早歌あり思ふに今の小うたひのやうなるものか今の淨るりぶしなど皆曲節急なり）

隆達なげぶし

○隆達は聲よくて一風をうたひしなり（【堺鑑】に高三隆達元は日蓮宗當津顯本寺の寺內に住す故有て還俗し高三氏の家に往て藥種を商ふ年を經て小歌の節を一流うたひ出すより世俗りうたつ流とてうたひもてなすとみゆ古寫本にふしづけしたるもの往々あり或は自筆に寫したるには文祿某年自庵隆達としるしたるもあり自庵は隆達が別號なり【焦尾琴】に見えたり元祿刻本の書目錄には隆達小歌二卷と

ふりすてゝ一こゑばかり何くへゆくぞやまほとゝぎす」是によりて雲ゐとはいふなるべし（琴歌もはなれ〳〵のうき雲みればとあり）雲井はこゑをはりあぐるにとれる名と聞ゆ【今昔物語】天狗のつきたる女の物語に聲を雲井の如くして叫ぶといふことあり【あら野集】唱歌にしらず聲ほそりやる（嵐雪）なみだみるはなれ〳〵のうき雲に（同）是をみれば今の琴歌も三線にての唱歌なり琴の調子三線の三下りに合するは彼らうさいの調子にてこれを雲井の調子といふをもてその曲三線よりとれるを知べしらうさいは弄齋など書る故人の名のやうに思はるゝから【昔々物語】に百三十年ばかり已前弄齋といふ遊び坊主りうたつがことを學び是も歌を作り歌名をろうさいと付て唄ふといへるは妄説なりらうさいといへる歌うたひの事いまだ聞ずらうさいは癆瘵にて病の名なりらうさい流行しことは（流行病にはあらねど斯いひ出しものなり）【見聞集】に見しは今らうさいはやり皆人煩らへり去程にくすし逐この時花病をなほし手からにせんと術を盡し良藥をあたふといへども治することかたし爰にくすしにもあらざる老人申されける此煩の起りを伺ふに風邪寒冷よりも出ず心よりおこる病なり然る間此病を心氣と名付て藥にては治し難し唯おのれが心を轉じ變ずべきなりと有り【似我蜂物語】にはなげのばして月なみそかつらをのこのまねぎやるに或連歌きらひの者いひけるは扨も〳〵此小歌よくぞや作りたり何のこともなきに月をあほうげに仰のきにながめわけもなきにぶら〳〵とのどろにうなりらうさいやみの食をくらふとおなじ事じやとあるは連歌師をそしりていふなり物思ひつゝ月を見客を詠めなどするによりてらうさいの歌は出來るなり【寶倉】（三）三線の條くすしもしらぬわつらひにはらうさいの一ふしを藥ときゝなし手なれしかども云々故に俳諧には【はなひ草】に癆瘵は戀病なりとす（後藤佐一が【病因考】癆瘵は人これを病は必死で祭らるゝの義かといへり）是らうさいを戀やみとするにや【貞德文集】に昔語來行被成候哉云々村木屋飯沼屋多鈴屋森屋近來召連衣裝化粧元に居申候御大

へしなど申すされば又是を駿河舞とも申き【江家次第公事根源】等に見えたり

郢歌

○郢曲四條大納言公任卿【朗詠集】二卷を撰み四季雜を分ち時にあたりし句を見むに便ならしむるは此曲をうたはむ料なり安齋人の問に答云郢曲はすべて歌をうたふ事の總名なり催馬樂今樣其外何にてもうたふ事なり郢曲とて定りたる歌はなきなり【徒然草】に【梁塵秘抄】の郢曲の詞こそまたあはれなる

宴曲

【野槌】云郢曲は楚國の都なり【文選】に客有歌於郢中者云々これより歌曲を郢曲といふなり後に宴曲といふもの出來たり其譜【宴曲集】等種々あり水宴曲などいふも是なり

今樣

○今樣【紫式部日記】わかやかなる公達いまやう歌うたふもふねにのりおほせたるをわかうおかしく聞ゆる云々【枕草紙】藏人すけたゞはいみしうあら〱しければ殿上人女房はあらはにとぞつけたるを歌に作りてさうなしのぬしをはりうどのたねにぞ有けるとうたふは尾張の兼時がむすめのはらなりけり是を笛にふかせ給ふ(主上の御笛なり)其外【續世繼】等諸書に見えたり思ふに今樣とはその當時の歌にして新たに作り出るなり文字の數など定りしことはなしとみゆされば【平家物語】に佛御前が君をはじめてみる時は千代も經ぬべし姫小松云々また【東鑑】文治二年四月八日鶴岡の廻廊にて靜が舞曲の處吉野山峯のしら雪ふみ分て入にし人の跡ぞ戀しきしづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな(是らは尋常の歌の文字數なれど曲調ことなるべし)【平家物語考證】白拍子の謠歌

小歌

は今狂言の花子の小歌に曲節相似たり故に狂言の徒花子の小歌を秘曲とせりと云り然らば今四ツ拍子にうたふを今樣とするものは非なるべし

ららさい

○今の琴うたの内に雲ゐららさいといふものあり寛文の初ごろ八橋雲井の調を引出しゝとなり是また三線のかたより取たる物とみゆ【松の葉】ながうたの中に雲ゐららさいあり其歌「やまのはいかな夜も人こそしらね閨はなみだのふちとなるよしやなげかしかなはぬとてもさだめなきこそうきよなれわれ

に是をさとらざらむには至愚といふべしいかでか一家の學を唱へて一代の儒宗といはるべきもし人を敬けるならば惡むべしとにかくにかゝる事を稱美するは彼雷神を雷になり給へるといへるにひとし

催馬樂　風俗　郢曲（宴曲）　今様（小歌）らうさい　隆達なげぶし　長唄　ほそり　口說　めりやす　土手節　大津繪改かじる（よしノ山、小倉）

催馬樂

催馬樂は【體源抄】云狛朝葛新作と云ふ【續敎訓抄】云催馬樂と云は催馬樂といふ樂あり其より事起れり此樂の唱歌に駒を催すと云ことありけるをやがて歌となして國々よりうたひ出したり我駒といふ催馬樂是なり故に馬を催とかきたるなり古注にむかし貢調の歌といへるは誤なるべし此說も心得かたし先づ催馬といふ樂ありとは異國の樂名とするに似たりその章に駒を催すとあるを歌となして我駒たゞ一曲ならば國々よりうたひ出したりとはいかゞその本の催馬樂は早く亡びたりなといふ心にやいとおぼつかなしもと此歌【萬葉】（十二）に乞吾駒早去欲（イデアガコマハヤクユキコソ）云々ある歌なり初め二句馬を催す詞なるもて催馬樂とは名けたりこの樂のこと先輩種々論じたれども定かならず【和名抄】に催馬樂（律我駒曲是也）狹錆河（律浮田河曲是也）と並び出たり【拾芥抄】催馬樂部ありて目錄多く載たる內に狹錆河も入たり【和名抄】には並び出たれども催馬樂は我駒曲のみにて狹錆河は別なり然らばもと我駒の曲のみなりしをその曲調に種々の歌をうたひ出しなりもとより駒催す歌なれば貢物を納る時の口すさみにも謠したるべし（今も船歌こむろぶし木やり石引それ〳〵の歌あるがごとし）この曲調亡びたるはいつの頃にか【年山紀聞】に賀儀（定基朝臣）今日歌遊催久富家西閣七十賀儀件時催馬樂也其曲調斷絕仍以朗詠代之といへり久安にはいまだ傳はりしなり

風俗

○風俗は諸國の國ぶり歌なり【拾芥抄】に目錄あり東遊もこの內なり新井白石の【擧對】に東遊は駿河國有度濱に神女降て舞遊ぶ事有しに起れる由を申傳ふ安閑天皇の御時の事なり道守氏の人此曲を傳

ても無利あり按へ所の坪厘毛も違ふ時は一向に鳴らず彈きやうに無理なければ神妙の音を出す故にあやまち明白に聞えて耳に立我ながら藝の不熟なるを覺えられて器に對し耻かしくおもふといへり新九郎も三絃にとりては妙手にて人みな知ところなり然るに彼三絃などはいまだ不相應なりとみえたり

三絃六筋かけ

○三絃六筋がけは【原本洞房語園】に慶安の頃江戸町二丁目の揚屋喜齋といひし者六筋がけとて其頃隱れなき三絃の上手なりし【一代男】(四)こくたんつぎざほの六筋がけを取出し云々らうさいその聲の美しさ【西鶴置土產】(五)番町にさる御かたの隱し藝に八筋がけをしのびごま引せられしが又もなき音

八筋かけ

曲是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびし(是は本手小歌のことをいふ處)などみえたりかく八筋がけなといふもあるをおもへば糸のさるふとさして三線の棹も大きなるをいふにやあらむ又古書にみえたる三絃に今の根緒かくる處に金物の環ありこれは【大幣】に此器に緒をつけて頸にかけて引を用とすとあればその爲に設たる物としらる又撥のもとに緒を付たるがあり是も三絃に添道に便利なる故と見

古製

えたり又三絃にかせかくることも古くみゆ【世話燒草】(明曆二年刻)三味線も月にひかんの企にかせや手車ならべ置秋(かせは鹿をかせぎといひ二股の杖をかせ杖といふ是より出し名と聞ゆ)【榊巷談苑】

續ざほ

に續さみせむは琵琶に續びはあり長明【方丈記】にみえたり是によりし物にやと思はるれどさにあらず前にもいへる會津農家の四絃の古器續柄なれば三絃もとよりつぎたるも有しなるべしそは調子の爲にあしければにや近江が家には造らずと歟(次(ツイデ)にいふこの頃新刻に先哲のことを書たる物あり其內に東涯先生が續三絃の匣をしらざりしことを擧ぐ此說非なり余が傳へ聞しは先生醫師(クスシ)の用る百味たんすやうの古き匣を買て諸書より見出たることを少さき紙に書て其類を分て入る器とせられたりとぞ此事を誤れるにや續三絃をだにしらずして【制度通名物六帖】をつくりたるは怪しむべし此もの語は仁齋妓家に入てその妓家なることをさとらざりしといへるにおなじ宮崎筠圃にもこれに似たる物語あり實

衛が如き者は殊に名手の聞えありて祖先に恥さるものなれば新古をもて工拙を論ずべきにあらず（附欽老人が「假名世說補」に古近江と稱するは二代目善兵衛が事なり初代源左衛門二代め善兵衛隠居して惣髮となり貞心と號す世俗がつそう近江といふ三絃に自銘を付るといへり初代源左衛門にあらず源三なり善兵衛は五代めにて二代めにあらず貞心といふ者十代の内になし五代め善兵衛は性眞なり何に據て書たる歟いと妄なり又桁屋近江とあるは初の號にはあらじ

○【雍州府志】近世筑紫琴三味線之流行也非古樂之所及也依是巧人亦多云々【人倫訓蒙圖彙】に琵琶琴三味線同職なり室町一條上ル長門釜座二條上ル近江此外寺町處々に有といへり【琴曲抄】をみれば長門は今井氏にて二家あり其一は一條通室町西へ入ル町今井播磨なり近江は神田氏にて是も二家あり室町通四條上ル町神田七左衛門なり此外に東洞院佛光寺下ル町永田内記といふあり【江戸總鹿子】（貞享四年刻）琴三味線師京橋北一町目石村近江この外に石村河内石村山城とあり近江が家京師にもあれど名匠は江戸に出るにや【風流徒然草】何事も東は物いやしくふつゝかなれども近江が三味線は恥ずといへば江戸しやみせん屋の中侍し近江にかぎらず何れの細工人も外より勝れたり其故は江戸の繁榮に付れき〳〵の簾中おく方より高直にかまはすあまた打出す故しぜんとその妙を得たり殊に近江は古作の名人の械の筒うちのかんなめなどよく考へしやみせんの筒のうちに一ツのかんなめを工夫したり是秘藏の事なり此かんなめにていづれのよりをも調べ侍ると申き凡しやみせんはわづか三ツ緒をもつて何れの調子にも叶ふなり云々近江がしやみせんはくるはずよき調子なりといへりかくあるは初善兵衛などの時をいふなるべし

○樂器は其藝未熟なる者名物の器を用ればふさはしからねば常の器よりも鳴りがたしとぞ【北窓瑣談】に新九郎物語に六條本願寺に近江の作の三絃あり類なき名器なり折々借し給はりて是を彈くに少しに

の家石村氏なれば石村檢校の子孫か又はその名字をうけたるもの歟（柳川八橋は三線の名人たるに依て工人其流の器を作り八橋柳川などゝ呼たるが如きにや）近江が子孫江戸に來り世々其器を作る今その家譜と墓碣とによりてその時代をしるす墓は三田の大信寺にあり其古き墓は上の右の方少し缺たり左の九名を刻す行譽淨本信士（寛永十三年三月二日）法譽性眞信士（寶永五十一月九日）正譽道薫信士（明曆三丁酉八月廿五日）廣譽源智信士（元祿九十月二日）實譽淨眞信士（元祿九丙子正月廿七日）敎用院淨玄信士（寶永七九月晦日）還譽本立信士（正德六丙申正月九日）心譽昂還信士（正德二年七月五日）西譽永欣信士（元祿八六月十八日）また石村近江累代と記したる墓あり、石村近江（住京師墓地未詳）淨本信士道薫信士淨心信士性眞信士本立信士相流信士倫超信士又別に太兵衞が墓あり累代とある墓は後に建たる物なり古近江九代孫春峯孤雲信士（天明七年正月二十二日俗名太兵衞忠豐 石村氏 わきの方に孤雲翁世をかく南無 鳳尾「苔守と成て朽るか捨ころも（十代目近江月峰秋善信士文化元八月十九日）ありと。

元祖近江は俗名源三京師に住す二代淨本俗名源左衞門始て江戸に來る依て江戸元祖淨本近江と云ふ三代道薫（淨本より以下源左衞門といふを通り名とす）實名忠義四代淨心（墓碣に淨眞と有る心は誤なるべし）實名忠政（四代迄は作る處の三絃に燒印を用ひず）五代性眞實名忠次俗名善兵衞といふ此時より始て燒印を用ゆ此者總髮にてありければ世に惣髮善兵衞と云ふ六代本立實名忠貞七代相流實名宗忠（六代迄は實子にて相續す七代めに至り男子幼少故弟子の內より宗忠七代めを續り）八代倫超實名忠睦俗名善五郎六代忠貞が實子なり九代春峯實名忠豐俗名太兵衞世に太兵衞近江と稱する是なり十代秋元但馬侯妙工の家絕む事を惜み此時扶持せらるとなり右の燒印相傳へて六代めごろにはいたく損へるに依て七代めに今の燒印に改めたりとぞ此家の風にて三絃の槽の裏皷の胴の鐫かたに似て綾杉といふものに造れり燒印は根緒かくる處の下に押こと常なり燒印あるものは古近江にはあらずされども太兵

ふべし文祿中に石村よく彈出し者ゆゑ是を始といへる說も有と聞ゆ（中小路は虎澤が初めの名と聞ゆれば是石村が弟子なり）抑此器緖の數定まらざりしこと【事物紀源】に見えたるが如し然るを靈夢によりて一彈を添たりといへるは其物を貴くしてその術を賣むが爲なり二絃三絃四絃もみなもとより有し物なりこゝの古畫に四絃も往々見えたりさて三絃もやゝ古く渡りたることは明らかなり【室町殿日記】（十九）遊女二人を中に置て何心なく三味線を彈て遊び居ける（天文永祿頃の日記なり）【狂言記】外五十番の內昆布賣口しやみせんにて上るりぶしに昆布賣ことあり（狂言は古きものなれどもこれはいと後に出來しにや）【義殘後覺】に三味線大鼓にて踊をすることあり（此書文祿五年の跋あり）【醒睡笑】（永祿よりこなたの落しのはなしなり）都の人東の箱なる中ゐに相馴たるか別るゝ時一しゆのさみせんをつかはしたる物語あり又慶長頃の物には多く見えたり【仁勢物語】（光廣卿の作といふ）むづかしと平家もしらずしやみせんもひはも小歌もいかで過てき【恨のすけ草子】雪の前が三線ひく處に華美を盡した三線のさまをいへり猶多くあれどもこゝには略すさばかり世にもてはやしゝ器なるに久仁が歌舞伎には未だ是を用ひず（そは猿樂等をまねびたる故なり）淨瑠璃などに是を用ることは異國より然り【廣東新語】（十二）粵俗好歌、凡有吉慶必唱歌、以爲歡樂、云々、其歌之長調者、如唐人連昌宮詞琵琶行等、至數百言千言、以三絃合之、每空中絃、以起止、蓋太簇調也、名曰摸魚歌、或婦女歲時聚會、則使瞽師唱之、如元人彈詞、曰某記某記皆小說也、其事或有或無、大抵孝義貞烈之事爲多、竟日始畢一記、可勸可戒令人感泣沾襟、と云り

古近江家
譜其碼

○三絃の器はもと蛇皮などはりて製作ふつゝかなりしをこゝにてよく作りなほしゝは石村よりこなたとみえたり古近江といへる匠の造りたるを世にことなき寶とすめり元祖近江は稱を源三といひて京都の人なれど今は墓處も定かならず實名さへしれずといへり按るに近江といへるは卽實名なるべし又こ

イカと云り何の頃にかこの國に渡り日本にあまねくわきて武江に翫びて戀慕の道のよせ太鼓とや云々貞宜は江戸の人元和中に生る此舟行は明暦以前とおぼしき事あれどたしかには云難し）また【大幣】（貞享二年刻）永祿年中琉球國より是をわたす其時は蛇皮にて張て二絃なるものなり泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲目に人のとらせたりけるを云々長谷の觀音に七日參籠し彈やうを祈りしにあらたなる靈夢によりて一絃をまして三絃とせしをしばらくして虎澤といひし是を彈かため本手破手といふことを定めて是を傳ふ其後澤住といふ盲人ありて是を彈おぼえ歌にのせてひき出したりそれより公家武家のうちに賞翫させ給ふ方多く有てみづからもひかせ給ふ其後は此器に緒をつけて頭にかけて引を用とす云々淨瑠璃といふ事をのせて三味線を引初たるは澤住がなす所なり然して後寛永の初め攝州加賀都城秀といふ座頭兩人堪能なる事古今に獨歩せり東武に至り加賀都は柳川檢校城秀は八橋檢校となれり柳川流八橋流といふは是なり此兩人三味線の鼻祖たり是によりて今世三味線の工人に八橋の柳川のといふも此名字をゆるされたる者なりとみえたり（【松の葉】（元祿十六年板）には中小路より石村虚澤澤住と相うけてと載たり【大ぬさ】には石村なし【竹齋物語】に石村檢校みえたり慶長の頃なり）これらの說どもを合せ考ふるに【糸竹初心集】には三線を小弓よりといひ【大幣】には二絃なりしを一絃を添たりといひて其說おなじからざれども造り改めて新たに引出したるやうにいへるはいづれも私說なるべしこはもとより三絃子にて琉球國の彈やうを習ひて其後さま〴〵彈出し術も器も彼よりは勝れし事となれるなるべし又小弓も二絃もそのかみより渡りて有しことゝみゆ琉球より渡れるよしは琉球組三線歌の始にて【吾吟我集】の自序（慶安二年）さみせんの糸のより〳〵に絶ずぞ有ける是より先の歌を集めてなむりうきうと名づけたりける云々其器早渡りしも有べけれど世のさわがしきほどにて翫ぶものもすくなくよく彈おぼえたるものなどはなかりしにやされば永祿頃より有といへる【大幣】の說隨

四絃　**五絃**

集】に今之三絃始于元時、小山詞云、三絃玉指、雙鉤艸字、顯贈玉娥兒といへり然れ共元史の樂志には火不思、制如琵琶、直頸無品、有小槽、圓腹如半瓶榼、以皮爲面、四絃皮絣、同一孤柱、とありて三絃にあらず但【庶物異名疏】に湖撥四長二尺計三絃【事物異名】に三絃子胡不見（掌中云）と云るは渾不似を三絃とするなり絃の數は阮咸も定まらず【事物紀源】に四絃十二柱或五絃十三柱といへるが如し今も異國より來る蛇皮はれる三絃其槽方圓ひとしからず半瓶榼の如きものもあり【五雜組】に有所謂三絃者、常合箭而鼓之、然多淫哇之詞、倡優之所習耳、とみゆ趙子昂が婦人管道昇がかきたる繪に三絃をもてる女あり予【三絃考】に載て委しくいへりよりてこゝには略す

三絃の渡り始　**小弓**　**琉球組**

○三絃のこゝに渡りし始は【糸竹初心集】（寛文四年板）文祿のころほひ石村檢校といふびは法師琉球の島にわたりけるに彼島に小弓といひて糸三筋にてならすものあり小き弓に馬の尾を絃にかけて引なれば小弓とはいふとぞ石村これを探りみるに琵琶をやつしたる物なり糸のしらべやうも一二はびはの如く三の糸はびはの三よりも一調ほど高くあはせたるものなりと思へり所の者いひけるは此島には眞蛇の多き所なるがラヘイカといふもの有て此まむしを食物とすされぱラヘイカの鳴聲小弓の音に少もちがはさる故眞蛇を退けむが爲に專ら引なりびは法師も爰に逗留の間はひき給へといふ其後石村京都にかへりておなじく琵琶をやつし此三味線を作り出せり琉球の島より得て來るといふ心にて琉球組といふことを作り置り弟子虎澤檢校に殘らず傳へしかば虎澤又組破手といふことを作り出す虎澤より山井檢校に傳授して世に廣まる糸の合せやうは是も一二は琵琶のごとく三の糸はびはの四の糸の調子なり（岬田定賞が【淺草紛遊の記】三味線の起りは元琉球より薩摩へ渡れり琉球國は蛇多く有て民屋路次に横り女童を惱す五月雨洪水の頃は分て多く出てうるさかりしかとも三味線と小弓の音は恐れて寄不來それ故男女ともに此二種を樂み彼難をのがれ或は一興をなせりとかや三味線は蛇皮小弓はラヘ

(紅梅)宮の姫君へ紅梅のせめきこえ給へばくるしとおぼしたる氣色なからつまびきにいとよくあはせてたゞすこしかきならし給ふ(是びはを引ところなり)と有り爪彈は假そめの事ながら其道を嗜まむものは用意に爪を生したりとみゆ

三線
阮咸
月琴
二絃

○三線【藝苑日渉】云據【事物紀原】及【絃子記】則秦謂之絃鼗、魏晉以來謂之秦漢子、宋人謂之楉琴者、即今之三絃也、未知果然否、大氏絲竹之制古今或不同、況如三絃本出胡部、而熾於輓近、假令爲絃兆鼗遺象、後世率意增損、恐非復古絃鼗矣と云り西土にもその起源さだかならず按るに【三才圖會】の阮咸其形いとよく似たる物なりされども此圖は阮咸のもとの形にはあらじ故に【三才圖會】も其說には、武后時、蜀人蒯朗、於古墓中得銅器似琵琶員、時人莫識之、元行冲曰、此阮咸所造、命匠人以木爲、之以其形似月、聲似琴、名曰月琴、杜祐以晉竹林七賢圖阮咸所彈與此同、謂之阮咸、云々、四絃十三柱、倚膝擬之、謂之擘、以代撫琴之艱、今人但呼曰阮、と見えたり然らば形員く琵琶にひとしき物なるべきをその圖さもあらぬは此器當時(王思義が其書を作りし時)あるものを載たるにて古物傳はらさる事としらる此圖說の適はさるによりてや【和漢三才圖會】には琵琶に似たる物を圖せり是しかしながら杜撰に作れる圖にもあるべからず今月琴とて淸商の持來る物ありそれと形似たれども異なり是もそのかみ月琴とて渡り來し物なるべければさま〴〵に作りたる事とみゆ王思義が時より後に出たるものなり王思義が出しゝ圖は二絃なり是その形は異なれども月琴にひとしきは月琴は四絃あれ共其實は二絃なるも同じく二絃ツゝ同調なり南都東大寺正倉院の寶物の中に四絃の鳴器ありこれ古への月琴なるべし西土には却て古物亡びてその製りさまをしらさるものと思はる但し陸奧國會津農家に四絃の器あり【集古十種】に載たり槽は今の三絃の槽のごとく柄は三段に續たり長さ惣て三尺二寸二分木にて作る大よそ今の三絃の形に似て四絃なり何ころの物なるか彼王思義が圖せる物の類とみゆ【楊升菴外

ばす命あらむかぎりはなれし君の面かげ何としてか忘れんと思へばいとゞゆかしきおもひを人にしらせじと心にふかく包めども戀しさいやましてわれとこぼるゝ涙かな袖にふれし移りがも落るなみだにそゝがれて形見にのこる色だにもうせておもひのます花なきは世の中のうきみにつむ柴ぶねのたかぬ先よりこがれ行この身は何となるべき波にゆらるゝ濱ちどり逢夜かたし我袖にあとふみ付よあはれにもせめてとり見てもしのばむ右二曲は古章歌なり【當流四季源氏】乙の曲（文略す）古作にあらず云々又云いにしへの奥秘事譽の曲といふ曲あり（章歌略す）右曲生田の作なるよし云古流にキンのしらべギンのしらべありとこの事むかしより申つたへたりいまだ不考古八橋流に四季源氏の曲乙の曲なるよしをいふ

こと爪

○【春湊浪話】に箏のことをひくに今作り爪をさしてひく是はいつよりのことにや齋宮女御（村上女御徽子）の箏を引給ふに右の御手の爪をいとしみ給ひ常には左がちにひかせおはしませし故に後には御僻になりしと【夜鶴庭訓】に見えしされども【大鏡】には此箏をひく人はへちに爪を作りて指にさし入て引ことにて侍りしと芹川御幸の物語に見え然ば昔も必一やうにもなく作り爪をも又用ひしなりと云りまた相國宗輔公ことの爪にて枇杷の實をむきて蜂にあたへて散らさゞりし事【古事談】また【十訓抄】等

假甲

にみゆおもふに假甲は後に出來し物ながら此器有て後はこれを用るが本にて手の爪して彈は假なるべし（今爪びきと云と異なる事はあらじ）假甲もと漢土の製なり【資暇錄】に今彈琴或削竹爲甲以助食指之聲者亦因謝公也晉謝代指而傷甲方悟新甲未完風景瀟灑援琴思泛假甲於竹爾爲權用名德再崇人爭倣效好事者且曰司徒甲云々【山堂肆考】一伎女以鹿角爲爪以彈箏曰鹿爪（浪語又云つれ〴〵草にある

爪ひき

鶚の爪をおふしたるあり琵琶などひくにやと書たれば兼好法師の頃も作り爪なくてひきける歟されどもびはを引に爪をおふしたるといふはいかゞいぶかしといへり爪びきは箏のみにあらず【源氏物語】

是今の梅枝の唱歌に八十の翁の戀に腰をそらいたとうたひかへたり此ら八橋より前にふきの歌ばかりにあらざる事しるべし又三絃の歌をとりたるも多かるべし三絃秘曲の七傳に堺といふ曲あり其唱歌に幾春もこゝに猶みはしの櫻色まさる雲ゐの花は久かたの空ふく風も及ばし云々（今の【花宴】の唱歌なり）又【小歌惣まくり】（寛文二年板）秘曲天下大平長久に云々桐壺の更衣の云々たそやこの夜中にまぎれ板戸を敲くは云々恨めしき我ゑん云々などある皆今の組歌の中に入たりこれらも彼筑紫樂の唱歌を三絃のかたに取たるものもあらむ（【箏曲大意抄】に橋姫古作不知手付絶たるを倉橋の時代三橋補明石末松空蟬北島檢校作九段七段調子作者不知五段調子北島生田兩家の內作者不分明新雲井弄齋倉橋檢校作三曲に可附古新曲羽衣若葉北島牧野兩家の內作者不分明思川北島生田兩家の內作者不分明中古新曲飛燕 清平調 安村檢校作宮鶯三橋檢校作○裏可附中古新曲二長雪月花六玉川浮舟三橋檢校作中可附中古新曲四季富士玉葛四季戀雲井九段與前同作裏可附近來新曲四季友友千鳥久村檢校作花宴石塚檢校作三曲可附近來新曲春宮曲 三ツノ調 石塚檢校作凡組三十三曲段調子七弄齋二首也○別に當流唯授一人々々秘曲あり四季源氏乙の曲と云と近來三橋申されし八橋北島生田倉橋より三橋傳來りて此曲を同門安村へ傳置よし聞ゆ此秘曲今多くひく人あり中にも三橋より傳授したる人彼此あるなりさすれば唯授一人の曲とも申難し古八橋流に四季源氏の曲乙の曲と二曲ありこゝに章歌をしるす【八橋四季源氏】の曲春のおまへの池水にからめく舟のよそほひはうらゝにさしてゆく袖の棹の雫に花かほる月のかつらの追風に調べ合せむつま曲の聞すてがたき君かゝや催し顏のほとゝぎす（合手）朝夕霧の光もよのつねならぬいろ〳〵たもとかゞやくせんざいのちゞに亂るゝ秋風あれたるやとのかき庇につもる雪の橋をはらへどもとの末の松あをたつなみのおもかげ千代萬代のよもさき君がめぐみははやましけやまかげたかく賑ふ民の家々○乙の曲いさゝらば時鳥涙くらべん諸ともに我も昔の忍ばれて夜もすがら夢も結

樂といふは今の組歌の一歌づゝのものとみゆ【春臺獨語】に箏はもと樂器にて管絃にのみ入りしに三百年のむかし公家の人筑紫に流されて配所のつれ〴〵に箏の手を彈かへて越天樂の歌をのべてふしを長うし箏に合せて彈れしを筑後國善導寺の僧その曲をならひ傳へて弘めしより筑紫箏と號て世の翫となれりとかや其後八橋檢校その曲を習ひ越天樂のふきといふも草の名といふ歌を本として色々の歌を誰人にか作らしめ組と名付てさま〴〵の曲節をなしけるより彌世に行はれて貴賤の翫となれりと云へり（享保の末より二百年の昔は文安前後なるべし）此說も又覺束なし先づ筑紫に配流せられし人は誰にか越天樂を長く延たるが本にてそれを善導寺の僧習ひ傳へて世の翫となるほどに弘たらば越天樂ひと歌のみには有べからず然るを八橋より色々の歌出來たるやうにいへるはいかにぞやもと箏の器に仁明天皇御時に遣唐使の傳ふる所とも又內教坊妓女筑紫の彥山にて唐人に是をつたはるともいへり此二說【體源抄】に出いづれか是なるはしらされども筑紫に傳へぬることは古しとしらるこれに依ておもふに雅樂は俗耳に遠ければおのづから筑紫樂は其處に出來る物にて其歌は皆今の組歌の內に入したるべし三絃の組に倣ひて組歌に造りたるは八橋に始れり

○慶長六年霜月二日江戶より下總行德へ大風に物の飛たる事の處に七尺の屏風も火事にはなどか飛さらんと【見聞集】に見え又【鷹筑波集】（寬永十五年）琴を聞てぞ命延ける七尺の屏風をすむとをどり越（是今のふき組の唱歌なり）【同集】琴よりもまつ引は振そで花の頃愛宕へ參るつくしもの（筑紫琴と付たるなり）また貞德が【新犬筑波集】只まいれ戀ひや汁のからだせん琴のしやうがでおそぶ夏の日（自註）琴のしやうがにからだせんの地藏が戀に腰をそらいたと云ことありと云り（【[illegible]曲集】寄若僧戀（入安）うつくしき地藏のことき若僧に死ぬるからだはせんばかりなりからだせんは佉羅陀なり【地藏經】十輪經曰在佉羅帝耶山諸牟尼仙所依住處【延命地藏經】曰在佉羅陀與大比丘衆萬二千人俱など有り）

黑撰）山住勾當といふ人（生國岩城）昇進して上永檢校となる又其後八橋と改（【大幣】貞享二年刻）に寛永の初攝州に加賀都城秀といふ座頭兩人三絃に堪能なり東武に至り加賀都は柳川城秀は八橋とて共に檢校となると有り）新たに組箏を製し古組の足らざるを補ひ表裏中奥の曲譜の次第を定め今の十三曲となれり後都にのぼり箏術を廣む此傳をうけ續人々終には新八橋生田隅山繼山藤池など諸流に分る云々然るに箏の書たるもの【八橋琴曲抄】近來安村が【雅譜集】の外いづれの流にも見えず（古八橋流にいふ古流前流當流とあり古流とは蟬丸の頃より文祿年中迄をいひ文祿より正保迄を前流といひ正保よりこのかたを當流といふ云々是は和琴琵琶などの事にて組箏の古流當流は筑紫八橋よりこのかたをこそ申へけれ云々

○偖(サテ)組といふことは三絃の曲より出（その家にはさる事をいはず）おなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり【琴曲抄】の説も私あるに似たり筑紫樂も京都には寛永のころ專ら行はれて下賤のものも翫びしなりおもふに其時はひと歌ふた歌のみにて長き曲はなかりしなるべし【色音論】（寛永二十年草子）はやりもの丶ことをいへる處にうたふしやうかに琴の音はみな家々にをとづれて【犢草】（寛永二十一年草子）琴などゝいふものはやむことなきかた〴〵の取あつかひ給ひて賤きものらは中々見たることもなく繪にかきたるをのみながめぬる然るを此ころは町かたに殊の外もてはやし座頭ごぜこめくらの類まで我おとらじと面々にけいこたしなむ故竈の前座あくたの邊ともいはずむさとかきならしぬる惣して本樂ばかりにてあらはかく下臈などの手にかゝらん物にはあらねどもいつその時より筑紫樂といふこと有て彈けるそれに隨てあひさの興に小歌などをのせ侍るにより賤の耳に入やすく町かたに取あつかふとみえたり此頃猶しもつくしやうにても樂ばかりもてはやさばすこしはおかしからむに小歌のをかざきをどりなどのみにてひきまはれば琴の道ははやすたれたるやうになむ有けるといへり筑紫

邪癸之詞也とあり于思は老人の顋多き貌をいふ【春秋左氏傳】宣公二年宋の國城を築く者謳曰〔上略〕于思于思棄甲復來といふ註に于思は多鬚之貌と見えたり【卜養狂歌】にうさいをうよろこびやりや悦あれあとの大夫に鈴采まいらしよ

箏

○箏はもと筑紫より起れること統秋が【體源抄】にみえたり今の筑紫琴は箏より出（【望一后千句】琴のけいこもいまだ初春やふ殿に去年の冬よりつかへ（人）その始は【琴曲抄】（元祿八年刻）肥前の人賢順（後奈良院御時永祿已前なりと傍注に記す）筑後善導寺の僧に（誰ともなし）箏術をうけて我同國慶岩寺の僧玄恕に傳ふ賢順都に上り古郷に歸らんとする時大納言殿その藝を惜まれ居士が門弟の内然るべきを必越よといはれしによりて肥後僧法水といふものを（【和事始】に善導寺の僧法水とあり恐は非）のぼせしが其藝いたく劣りければ人々心づきなきを法水みづから耻て逃去り武藏國に至り還俗して梢學と號し琴紋を商へり（寛文四年刻【糸竹初心集】に中頃九州に玄淨法水とて二人の僧あり或時

筑紫琴

長崎に至りて琴の彈やうを唐人より傳はり其後都に上り公家殿上の交りをなし寛永二年のころ琴の御ゆるしを下し給はりて法水は關東に下り琴をひろむる玄淨は筑紫へ歸りてこれも琴を專らに修行するさるによりて今在家にひける樂をつくし樂といふなり云々玄淨玄恕は一人なるべし其名いづれか是なるをしらざれども【琴曲抄】の說委しきに似たり）八橋檢校はじめはこれに逢て筑紫琴を學び後肥前國に行て玄恕に隨身し其奧義を究む八橋おもへらく筑紫樂は雅なれども俗耳に遠しとて新に十三曲を制

八橋一流

す後また新曲二組を補ひ八橋一流となれり（已上【琴曲抄】の說なり【糸竹初心集】又云雲井の調へといふことを此頃八橋檢校ひき出したり此八橋もと三線の上手なりしが中年より琴を學び不思議に琴の妙を得て今日本の名人となる云々是萬治寛文の初めを云なり）八橋は貞享二年に身まかれりとぞされば新曲二組は（橋姫とありしなり）八橋が手をつけたるにはあらず【箏曲大意抄】（安永八年山田松

山路が笛

○さん路が笛【謡曲拾葉】云世にとねりやうなる姿のよき装束を着し牛に乘て笛を吹是を牧笛の圖とす又この童をさんろ殿といふこれ又いぶかしといへり按るに【日本紀】に弘計天皇御兄弟難を避け給ひ牛を牧給へる事を取て【烏帽子折の草子】に豐後國まの〻長者が娘を用明天皇召て后に立むと勅ありしかどもまいらせざりし故天皇御身をやつし其國に下り給ひ長者が家の牛飼になり草苅童となりて御名を山路と呼その處に神祭ありてやぶさめを射る事なりしにこの事を知るものなかりしを山路知りて射し故長者これを婿となす又八幡の御告によりて天皇にましますこと顯れ娘を召具して還幸ありしといふことを作れりこれ山路が草苅笛の起る處なりさて牧童をさんろと名付しは紀の齋名が暮春遊覽の賦の序に山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲などあるによりてなり故に【えぼし折】にやまと竹にめをあけたる草刈笛にて候を云々是をもちてこそ夜更て心すめるをばさんろの草刈夜の笛云々ともあり十二段の【淨瑠璃】にこの文をとりてやまと竹にめをあけてさんろが吹しくさかり笛と有り

○猿樂の翁のうたひもの〻詞昔より注釋なし【南留別志】にとう〱たらりやらりろうといふことは樂の譜なるべし陀羅尼なりといへるはひがことならんといへり【職人盡歌合】猿樂の詞書にあげまきやとんとうひろはかりやとんとうとありこれは【催馬樂】の詞なり眞淵云あげまきはをのわらはを云ふ一ひろはかり女とさかりてねたれどもつひにまろびあひたりとう〱はとく〱といふなりとんとうは拍子なるべし【郢曲】五節のびんたゞらにやれことうとうとあるとうとうといへるも同じかるべしちりやたらりは【體源抄】青海波の條に聲歌太良利知良利々良太利良利（打夕取）とあり【源氏】にたけぶちちり〱たりをなどかきかへしはやりかにひきたることばなどもわりなくふるめきたりと有を【細流抄】に笛の音をしやうかにするなりたけぶちちり〱たり唱歌なりと云り【體源抄】に聲歌と有はしやうがなるべしおうさい〱は于思に發聲をそへて云るなり【運歩色葉集】に于思翁申樂三

つきてはるかに聞ゆとあり虹のやうなる聲ならばいかでかはるかに聞ゆることあらん【春湊浪話】すでに此ことを論じたり【取かへばや】(二)に吉野宮は唐にわたりて琴をおぼへたることを中納言聞たる處へ參りかよひて世にたへたるきんならい奉りまた見及はぬふみの所々聞あらはさん同(四)に吉野の大姬君きんひく處すべて今は世にたへたる物にておさ〳〵ひきならす人もなかめるをめづらしくひきこめ玉へけるも有がたく

青葉笛

○【春湊浪話】に青葉といふ笛は無雙の名物にて始は葉二ツといひける云々按るに【拾芥抄】名物の笛を舉て葉二(【江談】云朱雀門鬼笛又號青葉歟)とあり【江談】に葉二者、高名横笛也、號朱雀門之鬼笛是也、淨藏聖人吹笛、深更渡朱雀門、鬼大聲感之、自爾此笛乎給件聖人、云々と見えたり【世繼物語】を按るに博雅三位朱雀門の前にて鬼の笛と我笛と取替て吹たる笛なるを三位失て後帝此笛を召て時の笛吹共に吹せらるゝに其音を顯す人なかりけり其後淨藏を召て吹せ給ふに三位に劣らざりければ帝御感ありてもと此笛を得たる朱雀門の頭にて吹せられけるにその門の樓上に高聲に猶逸物哉とぞ譽にけるとなむ攝州須磨寺なる青葉の笛はあらぬ物なることとしるし敦盛の笛を青葉といふ事物に見えず【江談】には博雅三位の事をいはず又【元亨釋書】(十)淨藏が傳をみるに此笛を吹たる事を洩したりこれ又何れを正しとせむ

○和歌を琴に合せ彈こと【大鏡】(八)天曆村上帝の御時のことなり承和殿の女御と申は齋宮女御に帝久しく渡らせ玉はざりける秋の夕暮に琴をいとめでたく引玉ひければ急ぎ渡らせ玉ひ御かたはらにをはしましけれど人やあるともおぼしたらでせめて引玉ふを聞しめせばさらぬだにあやしき程の夕暮に荻ふく風の音ぞきこゆると引たりし程こそせちなりしかと御集に侍るこそいみじく候へど云もあまりかたじけなしやな

嬉遊笑覧巻之六上

喜多村信節撰

管絃

音曲（琴　青葉笛　山路が笛　箏　筑紫琴　組歌　八橋　こと爪　爪びき　○三線　阮咸　月琴　古近江家譜墓碣三絃六筋かけ八筋がけ　古製　續ざほ

絲竹は即管絃なりしかるを絲竹管絃とつらねいふ事【陸賈新語】また王羲之が【蘭亭序】などにみゆ管絃これをあそびといふ眞淵云神樂の事を云て神あそびと唱へし樂のことを後の物語にあそびといふ古より傳はれることにて【古事記】（仲哀天皇條）建內宿禰大臣曰恐我天皇猶阿曾婆勢其大御琴と見えたりそをかぐらといふは後世の言なれば古書になき事なりといへり一條禪閤の【神樂註秘抄】などに【古語拾遺】を引て神樂の始をいへり【本朝書籍目錄】管部に【神樂譜】二卷とあり今傳はらず【神樂目錄】は【拾芥抄】に出たり【源氏物語】（桐壺）月のおもしろきに夜ふくる迄あそびをぞし給ふなどいへるは管絃をあそびといへり

琴

○琴は雄略天皇の御時吳人貴信琴を彈ずそれより國史に往々載たり其外【雙紙物語】等にも出て世には翫はれし物にて雅樂の內すぐれし器なるに早く引絶しは惜むべし【源氏物語宇治十帖】に琴をひくこと今は好ずなり行とあるは廢れたるにこそ【眠源抄】に寛治八年圓憲といふ者筑紫にて唐人に琴を習たりしが微音にて紙障子の內に虻をこめしやうに聞ゆと禪定殿下笑はせ給ひしと記せりもとの琴とは遠ひたるにや【源氏】に五節の君が筑紫よりのぼるとて須磨の浦を舟にてつなで引するに琴の音風に

或問附錄

草木

卷十二下　漁獵

卷十二上　禽蟲

乞士　化子

卷十一　商賈

卷十下　火燭

巻十上　飲食

言語

巻九下　娼妓

巻九上　娼妓

方術

卷八　慶賀忌諱

祭祀佛會

巻七　行遊

巻六下　翫弄

嬉遊笑覽索引

〇下巻

巻六上　音曲

宮内省御用掛 文學博士 關根正直先生

東京帝國大學史料編纂官 文學博士 和田英松先生

宮内省圖書寮編修官 田邊勝哉先生

監修

日本随筆大成 別巻下